鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　6

平成元年度発堀調査報告

平成２年３月

鎌倉市教育委員会

口　絵　1

1．北条時房・顕時邸跡若宮大路側溝

2．笹目遺跡、埋納遺構出土遺物

1．若宮大路周辺遺跡群雪ノ下一丁目210番地地点
区画Ⅰ-1（東から

2．若宮大路周辺遺跡群（同上）
版木（図32-1a）

序　　文

鎌倉市教育委員会
教育長　尾崎　實

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相いついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす様な大規模な工事も多く数も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査を実施するようにして来ました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で調査が順調に進んできたとは言えません。

郷土の文化財を守るということは市民の責務でありますが、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。工事計画作成に当ってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財の保護の方策を煮つめて行って頂きたいと思います。

本書は平成元年度に国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設等に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼申し上げます。

例　言

1．本書は昭和63年度及び平成元年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかわる発掘調査報告書である。

2．本書所収の調査地点は別表のとおりである。

3．発掘調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が出土した。

4．出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。

5．各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

目　次

口絵１…… i

口絵２…… ii

序　文…… iii

例　言…… iv

平成元年度調査の概観…… 1

１．横小路周辺遺跡群…… 11

第一章　調査地点の位置と歴史的環境…… 15

第二章　調査の経過と概要…… 17

第１節　先行調査…… 17

第２節　本調査…… 17

第３節　トレンチ調査…… 18

第４節　土層堆積と生活面…… 18

第三章　検出された遺構…… 20

第四章　出土遺物…… 33

第五章　まとめ…… 59

２．北条時房・顕時邸跡…… 91

第一章　調査地点の位置と歴史的環境…… 97

第二章　検出した遺構…… 97

第三章　出土した遺物…… 103

第四章　まとめ…… 113

３．長谷小路周辺遺跡…… 129

第一章　遺跡の位置と歴史的環境…… 133

第二章　調査の経過と堆積土層…… 136

第三章　検出された遺構と遺物…… 138

第四章　まとめと考察…… 185

4．米町遺跡…… 205

第一章　調査地点の位置と歴史的環境…… 210

第二章　調査の経過…… 211

第三章　検出した遺構…… 212

第四章　出土した遺物…… 216

第五章　まとめ…… 220

5．材木座町屋遺跡…… 227

第一章　調査地点の位置と歴史的環境…… 230

第二章　検出した遺構…… 232

第三章　出土した遺物…… 235

第四章　まとめ…… 239

6．若宮大路周辺遺跡群…… 245

第一章　調査地点の位置…… 250

第二章　調査の概要…… 250

第三章　検出遺構…… 251

第四章　出土遺物…… 254

第五章　まとめ…… 256

7．若宮大路周辺遺跡群…… 261

第一章　調査地点の位置と歴史的環境…… 264

第二章　検出した遺構…… 264

第三章　出土した遺物…… 267

第四章　まとめ…… 275

8．笹目遺跡…… 283

第一章　地理的・歴史的環境…… 286

第二章　調査の概要…… 287
第三章　検出遺構…… 288
第四章　出土遺物…… 292
第五章　まとめ…… 295
9．若宮大路周辺遺跡群…… 301
第一章　調査の概要と経過…… 304
第二章　遺構と遺物…… 304
第三章　まとめ…… 314
10．若宮大路周辺遺跡群…… 317
第一章　調査地点の位置と環境…… 319
第二章　調査の概要と経過…… 321
第三章　調査結果…… 323
第１節　上層の遺構と遺物…… 323
第２節　下層の遺構と遺物…… 343
第３節　他区画からの出土遺物…… 360
第四章　まとめ――総括に向けて…… 368

元年度調査の概観

平成元年度の緊急発掘調査実施件数は10件で、対象面積は790㎡であった。前年度の12件、1643㎡と比較すると件数・面積共に減少するが、自己用専用住宅に関わる調査例はむしろ増加しておりまた設計内容も耐震地下構造を取り入れるなどの土地の多目的有効利用を志向する傾向は不変である。この動向は事業者負担の調査でも同様であり、国庫補助事業調査を含めた調査の総件数は増加している。この傾向は今後暫くは続くものと思われるが、昨年度の報告書でも提起した有効な対応方法の策定がますます急がれよう。

1　若宮大路周辺遺跡群

若宮大路の西側を並走する通称小町通りのほぼ中央部、小町二丁目５番23外に所在する。

昭和63年３月、自己用店舗に係わる事前相談があり、埋蔵文化財包蔵地内であり試掘調査を実施の上協議を進めることとした。同調査は４月18日に実施され、数面にわたる中世遺構面が良好な状態で遺存しているのが確認され、全面的な掘削行為を伴う現設計内容が変更されない限り本調査の実施は不可避であると判断された。４月26日、設計変更の可否等についての検討するが、不可能であると判断された。このため県教育委員会と協議し、土木工事面での協力を得たうえで国庫補助事業調査として実施しべきとの指導を得た。これを受け直ちに本調査の実施を前提とした協議を開始することとした。

その後、事業計画を巡って近隣住民との話し合いに時間を要したため協議は暫く中断せざるを得なかったが、問題の解決に一定の目途が立ったので11月５日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出されたのである。

そして、平成元年１月18日付けで県教育委員会から調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後数次に及ぶ調査実施方法に関する打合せを重ねた結果、土留・杭打ち等を先行した上で４月に入ってから調査を実施することで合意した。以上の経過を経て３月29日事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、４月21日から６月２日にかけて発掘調査が取り行われたのである。

調査により13世紀後半から14世紀中半に至る時期の建物・道路や井戸等の諸遺構が、種々の遺物と共に検出され、また薬研掘状の古代溝も発見されるなどの成果を得たのであった。

2　長谷小路周辺遺跡

長谷寺から六地蔵に至る区域を占める長谷小路周辺遺跡の内、甘縄神明社正面に位置する長谷二

丁目252番１号に所在する。

昭和63年12月、自己用店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、周辺の調査例に鑑みて試掘調査を経た上で協議を進めるべきである旨を説明した。その上で平成元年１月24日試掘調査を実施し、地表下120㎝で中世遺構が良好に残存している状態を確認した。このため、事業者と協議し遺構に影響を及ぼさないような基礎工法の検討を依頼するが、地盤が軟弱であるため杭工法を採用せざるを得ないとの回答であった。このため県教育委員会と対処方法について協議したところ国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得た。２月１日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出されるが、事業計画の調整等の事由により６月まで協議を中断せざるを得なかった。この間、３月29日付けで、県教育長名による発掘調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。６月13日既存建物の解体作業の終了に伴い、具体的な調査方法の協議を開始した。その結果、杭打ち箇所以外は掘削深度が遺構面まで達しないことが判明したため、杭部分を中心にトレンチを設定し調査することと定めた。そして、６月30日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、７月６日から７月20日にかけて現地調査が行われたのである。

調査により14世紀代の建物跡等の遺構と、吹子の羽口などの生産遺物を中心とする多数の出土品を得て、比較的調査例が希薄であったこの地域の考古学的様相を解明する上で多くの成果が得られたと評される。

3　若宮大路周辺遺跡群

遺跡内のJR鎌倉駅北方を流れる扇ガ谷川に面した、小町二丁目69番６外に戸在する。

平成元年５月、事務所併用住宅建築に係わる確認申請があり、杭打ち工法である点から試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。６月５日、試掘調査を実施したところ地表下１mほどで河川護岸遺構等が検出された。このため杭抗ち箇所を中心として区域を対象にした事前調査が必要であることを判明し、併せて対処方法を県教育委員会と協議したところ国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得た。６月28日に文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、直ちに調査方法についての協議をすすめ、実施対象区域を杭打ち箇所及びエレベーターピット設置場所と定めた。またこれに伴う土木工事と作業員派遣を事業者側が協力することで合意した。７月24日付けで調査実施を旨とする県数育長名の通知書が事業者宛に送付され、また調査実施依頼書も事業者から提出されたため、諸準備を整えた後７月24日から同月31日にかけて調査が実施されたのである。調査の結果、14世紀代の扇ガ谷川の様相、更には都市区割ラインに関する新たな資料が得られたのであった。

4　浄妙寺旧境内遺跡

国指定史跡浄妙寺境内の前面に広がる遺跡内の浄明寺向小路90番１に所在する。

平成元年７月、自己専用住宅建設に係わる事前相談があり、RES工法（細杭による基礎構築方法）による設計内容である試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。８月３日、試掘調査を行ったところ中世遺構が良好に残存していたため、設計変更の可否についての検討を事業者に依頼した。然しながら設計内容の変更が不可能であると確認されたため、県教育委員会と取り扱い方について協議したところ、国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得たので、文化財保護法第57条の２の届出書の提出を求め調査方法等に関する打合せを継続した。８月25日届出書が提出され、その後の協議の結果基礎構築部を中心としてトレンチ調査で対応することと定めた。続いて９月13日に県教育長名で調査実施を本旨とする通知書が中業者宛に送付され、同日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出された。以上の経過を経て、９月19日から９月30日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により、14世紀代の建物跡や境内軸線に直行する大溝が検出されるなど、浄妙寺史研究に有効な諸成果が得られたと評される。

5　大倉幕府周辺遺跡

大倉幕府跡と目される清泉小学校を中心とする遺跡の周辺区域内の、雪ノ下字大倉耕地565番４外の荏柄天神参道南端部に所在する。

昭和63年８月、自己専用住宅建設計画に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。９月３日、試掘調査を行ったところ中世遺構が良好に残存していることが確認されたため、具体的な協議をすすめようとしたが、事業計画の策定のため暫く中断せざるを得なかった。そして、平式元年４月10日協議を再開したが、RES工法による基礎設計内容であることが明らかになった。このため設計変更の可否を検討依頼するが、不可能であるとされたため県教育委員会と協議し、国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。これを受けて直ちに調査方法等の協議を開始し、６月15日文化財保護法第57条の２による届出書が提出され、続いて７月17日付で県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付された。この間、調査実施方法について協議を重ね、基礎部を中心にトレンチ方式による調査を行うことと定めた。以上の経過を経て、９月26日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、10月５日から10月31日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により12世紀末期から14世紀中半期に亙る建物・溝等が検出され、とりわけ荏柄天神社参道に平行する土塁状遺構は、鶴岡八幡宮の段葛にほうふつたる有姿であり、鎌倉のいわぬる宮道に関する貴重な発見であったと評されよう。

6　中世集団墓地遺跡

滑川河口に広がる遺跡内の若宮大路西側、由比ヶ浜二丁目1015番29外に所在する。

平成元年６月、自己用住宅の建設計画に係わる開発行為の事前相談があり、周辺の試掘調査結果に鑑みて、掘削規模の大きいガレージ部分を対象に発掘調査が必要であることを説明した。そして直ちに設計変更の検討も含む協議を開始するが、変更が不可能であると判明したので県教育委員会と協議し、掘削深度が遺構面に達するガレージ域を対象にして国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。これを受けて調査方法等を協議決定のうえ、８月３日文化財保護法第57条の２の届出書が提出された。そして９月13日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。そして、10月６日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、既存建物の解体を待って10月11日から11月15日にかけて調査が行なわれたのである。

調査により道路状の地形面などが検出され、同遺跡に関する新たな資料が得られたのであった。

7　長谷小路周辺遺跡

遺跡内ほぼ中央部辺りに位置する由比ヶ浜三丁目194番24外に所在する。

平成元年７月19日、店舗併用住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、隣地での調査結果から事前調査の実施の可能性が高いため、引き続き協議をすすめることにした。９月12日、地階部分を含めた事業計画の設計変更の可否を含めた協議を行うが変更が不可能であると確認されたため、専用住宅相当域を対象に国庫補助調査をすべしとの県教育委員会の指導に基づき、実施方法等を事業者と協議する。同協議をほぼ整えた後、10月17日に文化財保護法第57条の２の届出書が提出され10月21日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。これを受けて更に調査方法についての細部を調整した後、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され11月20日から平成２年２月23日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により、14世紀代の方形竪穴状建物跡や墓壙及び古代人骨等が発見され、同遺跡に関する新たな資料が得られた。

8　材木座町屋遺跡

史跡和賀江嶋を中心とした商業区域と目される材木座町屋遺跡内の、元八幡宮南面に位置する材木座一丁目144番３に所在する。

平成元年11月、自己用住宅建設に係わる確認申請の相談があり、試掘調査を経たうえで協議をするるめることとした。11月29日、同調査を実施したところ地表下70cmに中世紀遺構面が検出された

ので杭打ちを伴う当該設計内容では事前調査の実施が不可避であることが判明した。このため設計変更の可否についての検討を依頼したところ、困難である旨の回答を得た。これを受けて、県教育委員会と協議し国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得たので、直ちに調査方法等の打合せを開始したのである。12月16日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いてこれに対する県教育長名の調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。以上の経過を経て12月25日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、平成２年１月16日から２月６日にかけて発掘調査が実施されたのである。

調査によって13世紀末期から14世紀中半期の、大型の柱穴と礎板を伴う堀立柱建物や井戸等の諸遺構が検出され、同遺跡内でも元八幡宮前という異質区域の考古学的性格を示唆する興味ある成果が得られたのである。

9　理智光寺跡

五峰山理智光寺は明治初年に廃寺となり伽藍建物は皆無であるが、調査地点は寺域内の西側、伝護良新王墓下、二階堂字稲葉越802番７に所在する。

平成元年９月、自己用住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施し協議をすすめることとした。10月11日から17日にかけて行われた試掘調査によって地表下30から80㎝に良好な状態で残存する中世遺構が確認され、現設計内容では調査実施が不可避であると判明した。しかし計画変更が困難であるとの回答を得たため、県教育委員会の指導により国庫補助事業調査をすることとし、その具体的実施方法の協議を開始した。11月６日、文化財保護法第57条の２による届出書が提出され、続いて12月１日付で県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者に送付された。そして全体の工程を調整した後、平成２年２月９日に調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出され、３月１日から12日にかけて調査が実施されたのである。

調査により14世紀代を中心とする建物遺構等が発見され、理智光寺史の解明研究上極めて貴重な成果が得られた。

10　北条泰時・時頼邸跡

鶴岡八幡宮正面の若宮大路東側から小町大路にかけての区域を占める北条泰時・時頼邸跡は、若宮大路幕府跡とも目されるが、その内の若宮大路に面した雪ノ下一丁目369番に所在する。

平成元年９月、自己用事務所併用住宅建替えに係わる事前相談があり，周辺の調査状況から推して発掘調査実施の可能性が高いことを説明し、今後協議を継続することとした。10月28日、工事実施方法について説明を受けたところ、杭基礎であることが判明し更に11月９日の協議の中で設計変更は不可能であると明らかになったため、県教育委員会の指導により国庫補助事業調査を実施する

こととした。平成２年２月26日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて調査実施を本旨とする県教育長名の通知書が事業者宛に送付された。その後調査実施方法を巡って数次に亙る協議を重ねた結果、まず杭打ち箇所を先行調査し次に杭工事が終了した後に布基礎域を対象に正式調査を実施することで合意に達した。３月８日、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、３月13日から３月31日にかけて先行調査が実施されたのである。

調査により若宮大路に平行して走る大溝の東西壁などが検出され、都市域における官館遺構及び大路に係わる新らたな資料が得られたと評される。

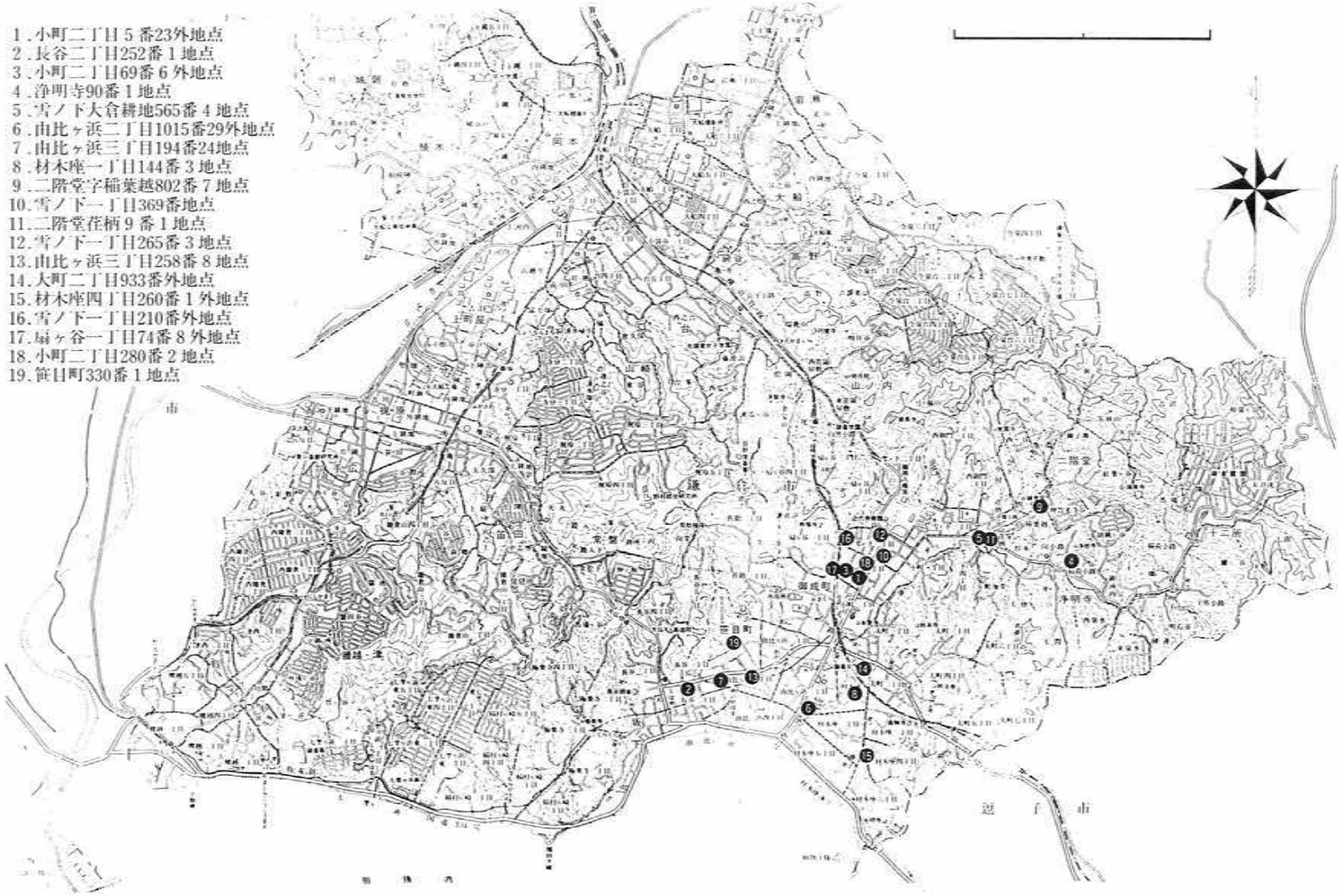
平成元年度調査地点一覧

（※印は本書所収遺跡）

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
※1	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目5番23外	豊島弥寿子	自己用店舗	都市	80m²	元.4.21～元.6.2
2	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	長谷二丁目252番1	大石雅樹	自己店舗併用住宅	都市	60m²	元.7.6～元.7.20
3	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目69番番6外	阿部卓也	事務所併用住宅	都市	20m²	元.7.24～元.7.31
4	浄妙寺旧境内 (No.408)	浄明寺90番1	宮本耕一	専用住宅	寺院	50m²	元.9.19～元.9.30
5	大倉幕府周辺遺跡 (No.49)	雪ノ下大倉耕地565番4	大塚武雄	専用住宅	都市	100m²	元.10.5～元.10.31
6	中世集団墓地遺跡 (No.372)	由比ヶ法二丁目1015番29外	水谷源太郎	専用住宅	墓地	130m²	元.10.11～元.11.15
7	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ヶ浜三丁目194番24	矢島豊	店舗併用住宅	都市	80m²	元.11.20～2.2.23
8	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目144番3	森本千代	専用住宅	都市	100m²	2.1.16～2.2.6
9	理智光寺跡 (No.265)	二階堂字稲葉越802番7	西山太吉	専用住宅	寺院	70m²	2.3.1～2.3.12
10	北条泰時・時頼邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目369番	西山弘	事務所併用住宅	館跡	100m²	2.3.13～2.3.31

本書所収の昭和63年度調査地点

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
1	横小路周辺遺跡 (No.259)	二階堂荏柄9番1	矢田徹	応舗併用住宅	都市	380m²	63.4.19～63.6.27
2	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目265番3	鬼頭住江	店舗併用住宅	館	85m²	63.4.19～63 7.16
3	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ヶ浜三丁目258番8	河合冨美子	専用住宅	都市	380m²	63.6.2～63.8.31
4	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目933番外	紫正明 紫幸江	共同住宅 併用住宅	都市	70m²	63.8.1～63.9.19
5	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座四丁目260番外	山本元洋	倉庫併用住宅	都市	60m²	63.9.19～63.9.30
6	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目210番外	瀬古美年	共同住宅 併用住宅	都市	443m²	63.10.1～元.1.16
7	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	扇ガ谷一丁目74番8外	小黒俊治	店舗併用住宅	都市	20m²	63.11.4～63.12.10
8	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目280番2	渡辺昌子	店舗併用住宅	都市	40m²	元.1.19～元.1.27
9	笹目遺跡 (No.207)	笹目町330番1	島津忠承	共同住宅 併用住宅	都市	80m²	元.1.28～元.2.21



平成元年度の緊急発掘調査地点（1～10）と本書掲載の昭和63年度調査地点（11～19）

Ⅰ．横小路周辺遺跡（No.259）

二階堂字荏柄９番１地点

例　言

1．本報は鎌倉市二階堂字荏柄9番1における店舗併用住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2．調査は500㎡の対象地の内、380㎡を国庫補助事業調査として鎌倉市教育委員会が実施した。

3．本報の執筆は菊川英政が、図版作製には関口真理、南保由利、折茂芳則、長田夏子があたった。

4．本報に使用した写真は、遺構、遺物とも菊川が撮影し、遺跡遠景・全景写真はシン航空写真株式会社に依頼した。

5．調査体制は以下の通り。

担　当　者　菊川英政、新国哲也

調査補助員　小柳津シゲ子、折茂芳則、上原恵美、田辺竜司、関口真理、秋元薫、平尾真史、菊地正明、南保由利、（順不同・敬称略）

調査協力者　吉田文一、吉田茂夫、吉田茂、成田初枝、河盛ミサエ、新井その、青木綾子、安田ヒデ、市瀬ツル子、鎌倉市高齢者事業団、シン航空写真株式会社、（順不同、敬称略）

6．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例言……(12)
目次……(13)

本 文 目 次

第一章　調査地点の位置と歴史的環境……(15)
第二章　調査の経過と概要……(17)
　第1節　先行調査……(17)
　第2節　本調査……(17)
　第3節　トレンチ調査……(18)
　第4節　土層堆積と生活面……(18)
第三章　検出された遺構……(20)
　A　道路状遺構（20）　B　溝（20）　C　石組竈（23）
　D　方形竪穴（24）　E　井戸（26）　F　土壙（30）　G　柱穴群（32）
第四章　出土遺物……(33)
第五章　まとめ……(59)

挿 図 目 次

第1図　調査地点の位置……(16)
第2図　グリッド配置図……(17)
第3図　土層堆積図……(19)
第4図　道路状遺構……(20)
第5図　遺構全図（第1・2面）……(21)
第6図　溝……(23)
第7図　石組竈……(24)
第8図　方形竪穴……(25)
第9図　井戸（1）……(27)
第10図　井戸（2）……(29)
第11図　土壙……(31)
第12図　溝1・3・4出土遺物……(35)
第13図　石組竈出土遺物（1）……(36)
第14図　石組竈出土遺物（2）……(37)
第15図　方形竪穴1・2出土遺物……(39)
第16図　方形竪穴3・4・5出土遺物……(40)
第17図　方形竪穴6出土遺物……(42)
第18図　井戸1出土遺物……(44)
第19図　井戸2・3（1）出土遺物……(45)
第20図　井戸3出土遺物（2）……(47)
第21図　井戸4出土遺物（1）……(48)
第22図　井戸4（2）・5・7出土遺物……(49)
第23図　井戸8・9・10出土遺物……(52)
第24図　井戸11・12（1）出土遺物……(54)

第25図　井戸12出土遺物（２）……（55）
第26図　土壙３・４・５出土遺物……（56）
第27図　土壙６・７・８・９出土遺物　（58）
第28図　Ⅰ・Ⅱ期遺構図……（59）
第29図　Ⅲ・Ⅳ期遺構図……（60）

図　版　目　次

図版１　調査地点遠景・全景
図版２　道路状遺構
図版３　溝１・２・３・４
図版４　石組竈
図版５　方形竪穴１・３
図版６　方形竪穴４・６
図版７　方形竪穴５
図版８　井戸１・２
図版９　井戸３・４
図版10　井戸５・７
図版11　井戸８・10
図版12　井戸９
図版13　井戸11・12
図版14　井戸12井戸枠・土壙
図版15　土壙２・３
図版16　土壙５・６
図版17　土壙７・８・９
図版18　溝１・３出土遺物
図版19　方形竪穴１・２・３出土遺物
図版20　方形竪穴５・６出土遺物
図版21　土壙３出土遺物
図版22　土壙５・７・９出土遺物
　　石組竈出土遺物
図版23　石組竈奥壁・床面
図版24　井戸１・２出土遺物
図版25　井戸３・４出土遺物
図版26　井戸５・８・９・10出土遺物
図版27　井戸12出土遺物

第一章　調査地点の位置と歴史的環境

鶴岡八幡宮社頭から、県道金沢・鎌倉線を東に進むと、間もなく鎌倉宮（大塔宮）への分岐点と行き会う。この先県道は蛇行する滑川と併行しながら、朝比奈峠へと続いていくが、遺跡地はこの分岐点から約130m程東へ寄った所にあり、西を東御門川、南を滑川、東を二階堂川によって画された標高13m程の微高地上に位置する。周辺地域は、水利の良さも手伝って、古来より生活が営まれていたようで、荏柄天神社下[注1]で縄文前期の土器片が採取されているほか、遺跡地の約400m西に所在する小林邸内遺跡・南御門遺跡[注2]では弥生中期から後期にかかる住居址数軒が発見されている。また先頃調査された大倉幕府跡（雪ノ下大倉耕地569番１地点）[注3]では古墳時代後期の土器片、向荏柄遺跡[注4]では奈良・平安期の遺物と住居址が検出されている。

中世に至っては、遺跡地付近もかなり拓けていたと考えられる。寺社も多く、杉本寺は天平六年に（736年）創建、荏柄天神社は長治元年（1104年）勧請と伝えられ、滑川を挟んだ対岸の谷戸には勝長寿院があった。勝長寿院は頼朝が父義朝報恩のために建立した大刹で、文治元年（1185年）創建、天文九年（1540年）頃までは堂宇も残っていたようである。また遺跡地北側を北東へ伸びる路は二階堂大路と呼ばれ、同じく頼朝発願による大刹、永福寺へと通じる古道である。永福寺は、奥州平泉の中尊寺・毛越寺を模して造られ、文治五年（1189年）事始めを行ない、その後、15世紀中頃には廃寺となったことが文献史料や発掘調査によって確認されている。

二階堂大路と六浦路との交差する辺りは、大倉辻と呼ばれ、建長三年（1251年）商業地域として指定され、賑わいをみせていたことが想像できる。同地は治承四年（1180年）に頼朝が開いた大倉幕府の東南角にあたり、交通の要衝部でもあった。

遺跡地周辺に居住する御家人、被官は数多い。荏柄天神前には、和田平太胤長の屋地があり、建保元年（1213年）北条義時が拝領し、被官である金窪行親、安藤忠家に与えられている。宇佐美判官、宮内権大輔時秀の邸も近辺にあったとされる。また、北条義時の大倉亭は、貫達人氏によれば、杉本観音の西方で、二階堂大路の辺りであろうとしている。[注5]まさに、家屋は甍を並べ、門扉は軒を展べた景観であったのだろう。当然、水災も多く、『吾妻鏡』『九代記』で知らるだけでも、建久二年（1192年）から延慶三年（1310年）に至るまで、７件の大火が載せられている。各件の内容は『鎌倉市史・総説編』に詳しく、また『向荏柄遺跡発掘調査報告書』に抜粋して載せられているため、ここでは省略しておく。

元弘三年（1333年）新田義貞の鎌倉攻め以後、延元二（建武四）年（1337年）には北畠顕家と斯波家長が杉本で戦い、杉本城は落城したと伝えられている。[注6]この杉本城は山城で、遺跡の東方、杉本寺の裏山一帯がそれにあたるものと思われる。

註１．『鎌倉市史・考古編』吉川弘文館　昭和47年

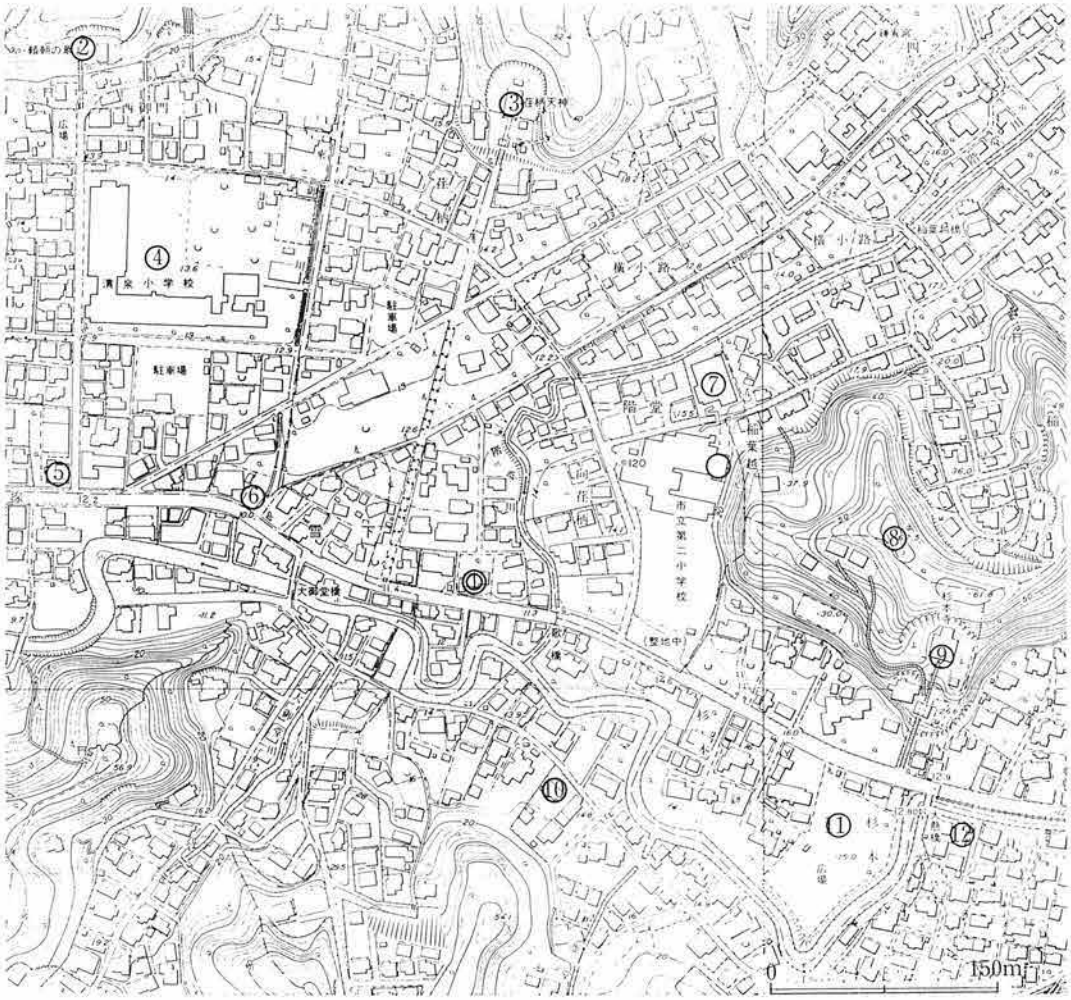
２．調査担当者・河野真知郎氏の御教示による。

３．調査担当者・馬渕和雄氏の御教示による。

４．『向荏柄遺跡発掘調査報告書』同遺跡発掘調査団編、1985年

５．貫達人「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第８号、昭和46年

６．『鶴岡社務記録』他、『鎌倉市史・総説編』384頁に詳しい。



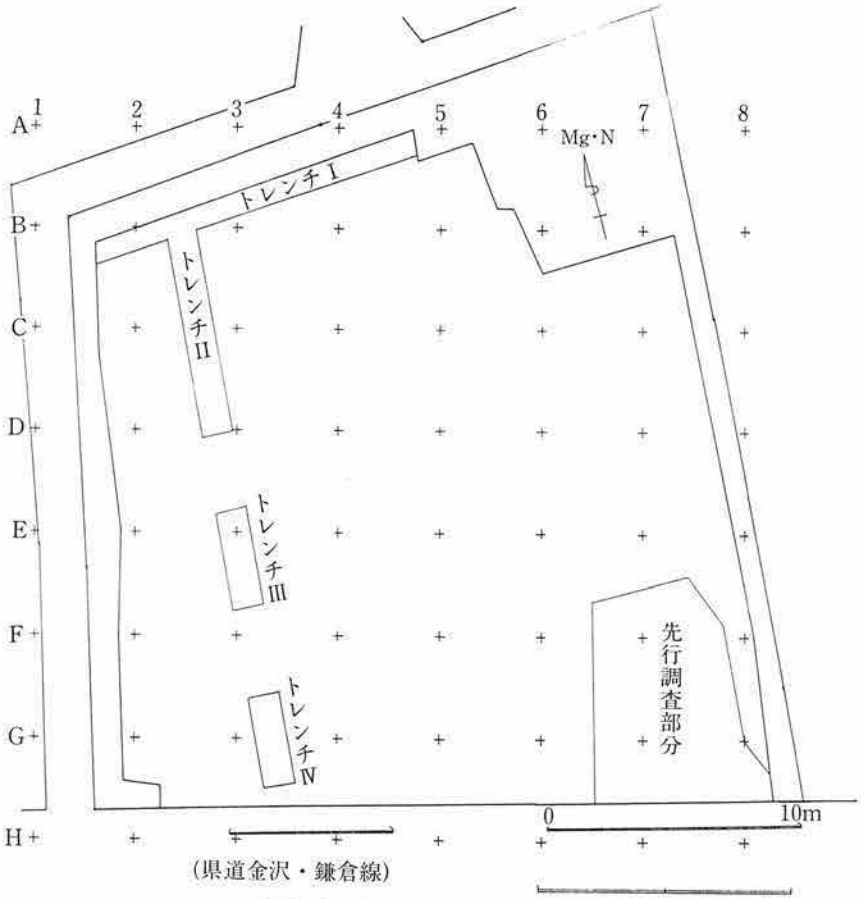
第１図　調査地点の位置

１調査地点　２法華堂跡　３荏柄天神社　４大倉幕府跡　５大倉幕府跡　６大倉幕府跡（ＹＯ５６９－１地点）７向荏柄遺跡（１次地点・２次地点）８杉本城跡　９杉本寺　10浄明寺田楽辻子遺跡　11横小路周辺遺跡　12格小路周辺遺跡

第二章　調査経過と概要

第１節　先行調査

調査地周辺は、既に宅地化が進んでおり、排土の搬出は南側の県道より行う以外になかった。そのため、県道に接する部分を先行して調査し、大型車の駐車スペースを設けることとなった。第２図右下の先行調査部分と記した箇所がそれである。



第２図　グリッド配置図

先行調査は新国哲也が担当し、昭和63年２月15日から約10日程の日程で実施された。時間的な制約もあり、後述する第２面（第４節参照）まで下げて遺構検出に努めた。したがって第１面での状態は不明である。検出された遺構は、方形竪穴、溝、柱穴群がある。なお、遺構全図（第５）の先行調査部分には、平板測量による平面図を合成して載せておいた。

第２節　本調査

先行調査終了後、重機による表土除去作業を経て、本調査が開始された。表示掘削中は新国が、本調査は菊川英政が担当した。昭程63年４月19日～６月27日まで、期間を１週間延長して実施された。調査にあたり、まず調査区全域に4m方眼を組み、南北軸にＡ～Ｈまでのアルファベット、東西軸に１～８までの算用数字を付した。グリッド内はその北東隅の杭番号をもって呼称することとした。

なお、南北軸は磁北に対してN－14°12′20″-Eの傾きをもっている。

第１面、第２面での遺構検出作業に努めたが、第１面は後世の削平や表土除去作業に伴う掘り過ぎ等で失われた部分が多く、検出作業は困難であった。確認された遺構は、殆んどが第２面精査時にみつかったものである。道路状遺構、溝、井戸、土壙、方形竪穴、石組竈、柱穴群がある。

第３節　トレンチ調査

トレンチ調査は、本調査終了間際の昭和63年６月18日～６月21日にかけて実施された。主として第２面下の遺構確認と土層堆積状態を把握するために実施したもので、調査区西寄りに南北方向の３箇所、調査区北辺に沿って１箇所のトレンチをあけた。(第２図)

北辺のトレンチⅠでは、溝、土壙、井戸、柱穴が検出された。トレンチⅡ、Ⅲ、Ⅳでは、トレンチⅡの東側壁面に柱穴らしき落ち込みが確認されたのみで、他に遺構は在存しなかった。

第２面下の遺構については、時間と予算の都合上、全面を掘り広げることが不可能であったため、トレンチ内だけの調査にとどまった。

本報告書では、先行調査、本調査、トレンチ調査とも一括して取り扱い、遺構番号を連続させた。番号の順は任意で、遺構間の新旧開係を示すものではない。

第4節　土層堆積と生活面

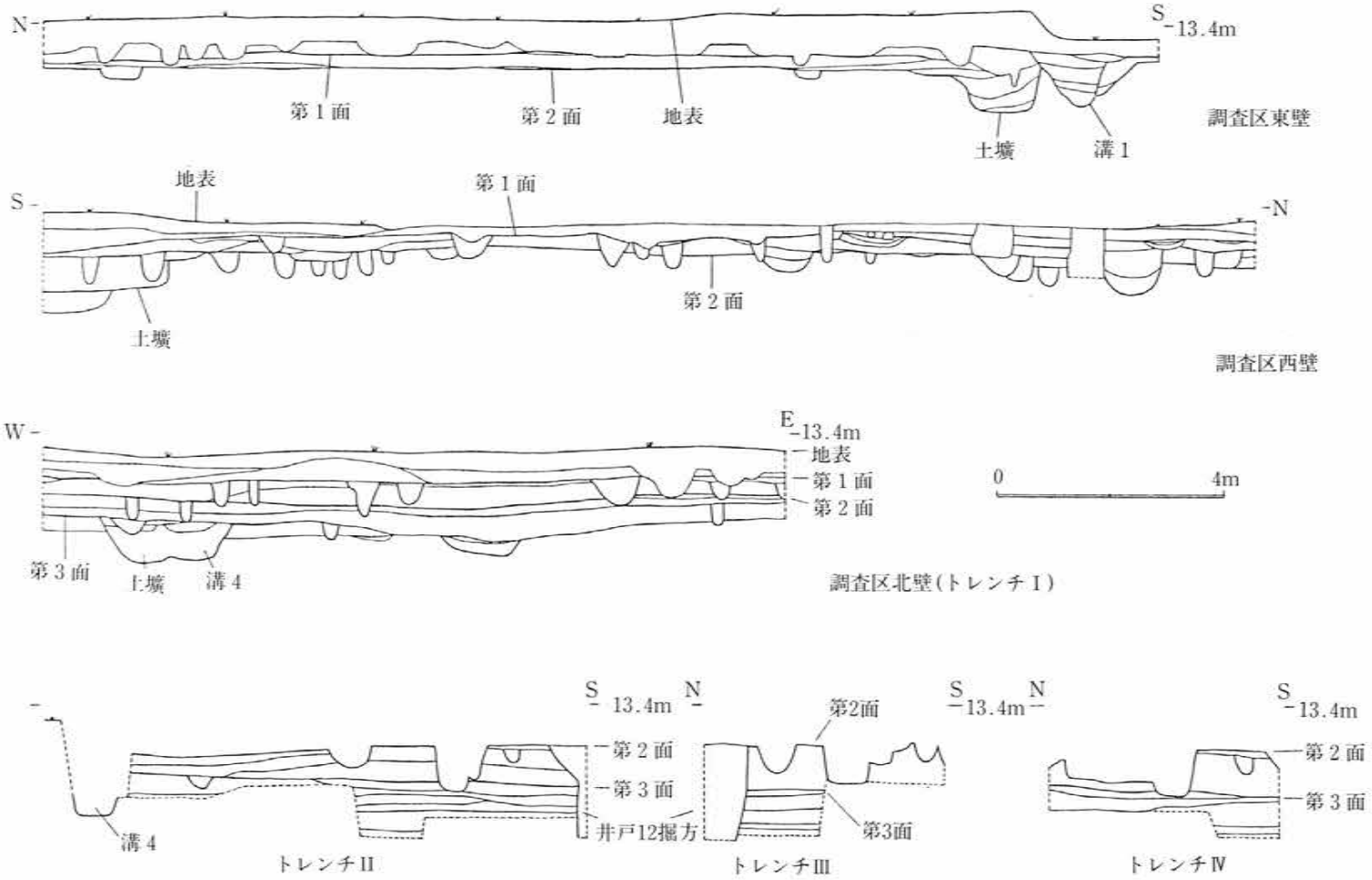
土層の堆積状態は、調査区東壁、西壁と攪乱壙内壁、更にトレンチ内壁で行なった。その結果、地表下80cm位までは、大小土丹塊、炭化物、かわらけ片、瓦片等を多量に含む中世地業層が堆積し、大略２枚の生活面が認められた。上部を第１面、下部を第２面とした。

第１面は細かく破砕した土丹を主体とし、短期間に幾度も再地業されたものらしく、薄い層状を呈す部分がみられた。調査区南部に最も明瞭に遺存し、東部、北部、西部では不明瞭、中央部ではより新しい面が狭小ながらも残っていた。調査区壁面の観察からは、D～Fライン近りが若干高く、北側が最も低くなっている。幾層かの薄い地業面のうち、上面に炭層、焼土層をのせる部分も認められたが、全体的な広がりは不明である。

第２面は暗黄灰色砂質土上面である。同層は調査区東寄り部分で厚く、北部では薄く殆んどみられない部分もあった。精査中にとばしてしまうことが多く、実際には同層下に広がる暗褐色粘土層上面で遺構検出を行った。第１面同様、上面に赤く焼けた箇所もあり、火災を受けた可能性がある。

第３面は中世地山上面とした。同面上に厚く堆積する暗褐色粘土層は、灰白色粘土ブロックを混入し、締りが強く、無遺物である。第３面は、調査区北側で標高12,2m、南側で11,8mを測り、北から南へ緩く傾斜していることがわかる。

地山は暗灰色粘土層と暗茶褐色粘土層の互層で、ともに白色微粒子を多く含み、締りが強い。下部は青灰色に変色している。


N
S
13.4m
第1面
第2面
地表
土壙
溝1
調査区東壁
S
N
地表
第1面
第2面
土壙
調査区西壁
W
E
13.4m
地表
第1面
第2面
0
4m
第3面
土壙
溝4
調査区北壁(トレンチI)
S
13.4m
N
第2面
第3面
井戸12掘方
溝4
トレンチII
第2面
第3面
トレンチIII
トレンチIV

第3図　土層堆積図

第三章　検出された遺構

今回、調査によって検出された遺構は、道路状遺構、溝、方形竪穴、井戸、土壙、石組竈、柱穴群がある。第１面の遺存範囲が狭かったことから、殆んどが第２面で調査され、遺構の密度は非常に高いものとなった。特に柱穴は切り合い関係も激しく、おびただしい数が検出された。（第５面）

ここでは主要遺構について説明を加えていくことにする。

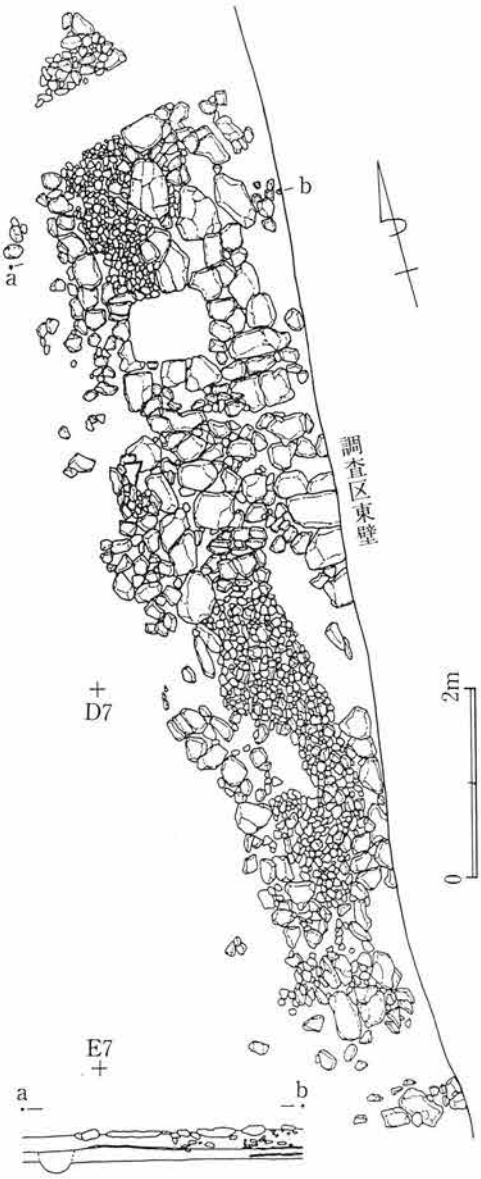
A　道路状遺構（第４図）

調査区東壁際で検出された。表土層掘削時に既に確認されており、第１面に伴なうものと思われる。

道路幅員は約２m。主軸方位は磁北に対し、約4°程西へ傾くが、ほぼ南北方向とみてよい。

道路中央部分は細かく破砕した土丹を密につき固め、両側縁部にやや大形の土丹を配している。断面の観察からは、薄い間層を狭んで、下部にも道路面らしき土丹がみられたが、一枚の道路面として検出はできなかった。部分的な貼り替え、補修を繰りかえし、継続的に使用されたものと思われる。

側溝は第２面で検出できた。幅30cm程の小規模な溝である。第１面使用時には道路面から崩れ落ちた土丹塊が側溝上面に広がっており、埋没していた可能性が強い。



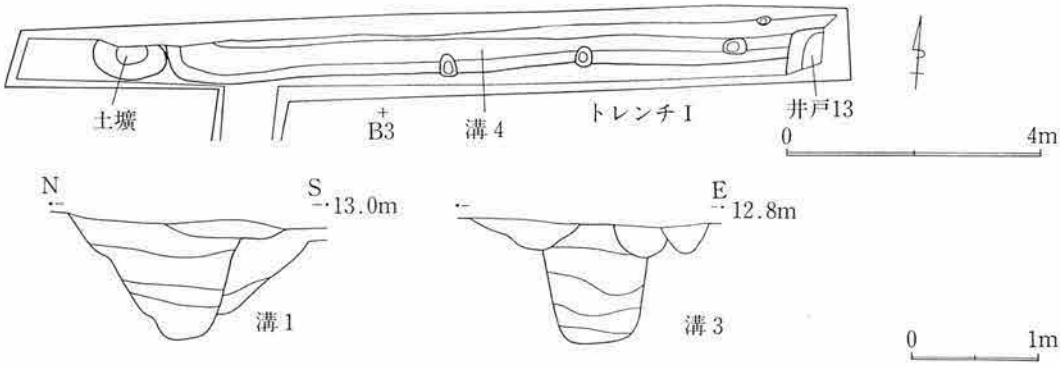
第４図　道路状遺構

B　溝（第５・６図）

溝１　調査区南辺で検出された。六浦路に並行する溝と思われる。主軸は約4.5°程傾くが、ほぼ東西とみてよい。溝の南側半分及びＧ５グリット以西は、宅地塀構築の際に壊されて遺存しない。

調査区東壁での土層観察により、新旧２時期が確認された。（第６図）新しい溝は第１面に伴ない、

第５図　遺構全図（第１・２面）



第6図　溝

断面は逆台形、上部幅140cm、底部幅30cm、深さ100cmを測る。古い溝は、これより若干南寄りに掘られていたもので、第2面に伴なう。なお、溝底で検出された井戸5はこのいずれの溝よりも古い。

（ロ）溝2　調査区東壁寄りで検出された。確認面は第2面。道路状遺構に伴なう側溝と思われるが、第1面精査時では検出できなかった。断面は浅いU字形を呈す。この溝と並行して、東側に1条の浅い溝がみつかっているが、本址との関係は不明である。

（ハ）溝3　調査区西寄りで検出された。確認面は第2面である。上部幅は80cm、底部幅50cm、深さ90cmの断面U字形を呈する溝である。（第6図）主軸は磁北に対し、約4.5°東へ傾く。

南端は攪乱のために消滅し、北端は井戸12によって切られる。井戸12以北に検出できないことから、溝の始まりもこの辺りと推定される。溝の覆土は、締りの良い暗茶褐色粘土層と暗赤褐色粘土層を主体とし、最下層には少量の炭化物を混入する。遺物の出土はない。

（ニ）溝4　トレンチI内で検出された。確認面は第3面である。上部幅70cm、底部幅20cm、深さ40cmのU字形断面の溝である。（第6図）東端は井戸13に切られ、西端部は直角に折れて北へ伸びるようである。溝内の柱穴は本址に伴なうものではない。

C　石組竈（第7図）

調査区西壁際のD2グリッド杭部で検出された。第1面を掘り窪めて構築されたものと思われるが、掘り込みラインは竈南側の土層断面（第7図上段土層図）で確認されただけである。竈の奥壁を支える暗茶褐色土（同図6層）は、本址以北に堆積する地業土と区別し難く、掘り方プランを明確にし得なかった。

竈は南北に2基併設されるが、南側部分は原形を保っていない。南側部分を壊して必要部材を抜き、北側部分を構築した可能性がある。

竈の構造は、約20×25×40cm程の鎌倉石切石を両側に3ないし4個立て並べて側壁とし、床面と奥壁は瓦で構築する。床面の瓦はその曲面を活かして敷かれ、支柱の代わりとして、細長く整形加工した土丹塊を両脇に配置している。床面は奥に向ってわずかに上っており、最奥部床面が本址周

辺の第１面レベルとほぼ合致する。

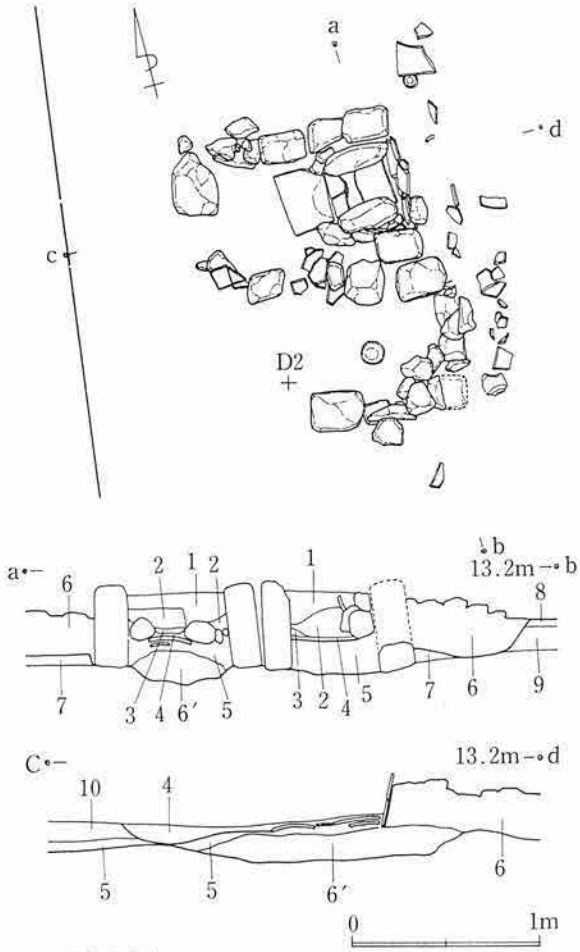
焚き口部は西側に設けられる。同部には炭層の充塡する浅い窪みがみられたが、掘りすぎのため遺存しない。

奥壁は瓦片を２段に立て並べ、若干外方へ傾かせて作られる。煙道としての特別な構造はみられないが、奥壁に沿った天井部に排煙孔があけられたものと思われる。

竈内部には、天井部材と考えられる黄褐色粘土（第７図２層）がまとまって検出された。この粘土は土丹を潰したような粒子の細かいもので、炭化物を少量含む以外に混入物は全くなかった。

出土遺物としては、南側竈内部の炭層上で、かわらけ皿が１点みつかっただけである。煮炊具の出土はない。

本址検出の際、周辺を精査したが、柱穴等は確認できず、上屋（竈屋）の有無は不明である。



1　暗褐色土・炭多い
2　黄褐色粘土
3　暗褐色土・炭多い
4　炭層
5　暗褐色粘土・炭・土丹
6　暗茶褐色土・小丹多い
6′　暗茶褐色土・小土丹多い
7　暗灰褐色砂質土
8　暗褐色土丹層
9　暗褐色粘質土・炭少量
10　暗赤褐色土・焼土・炭多い

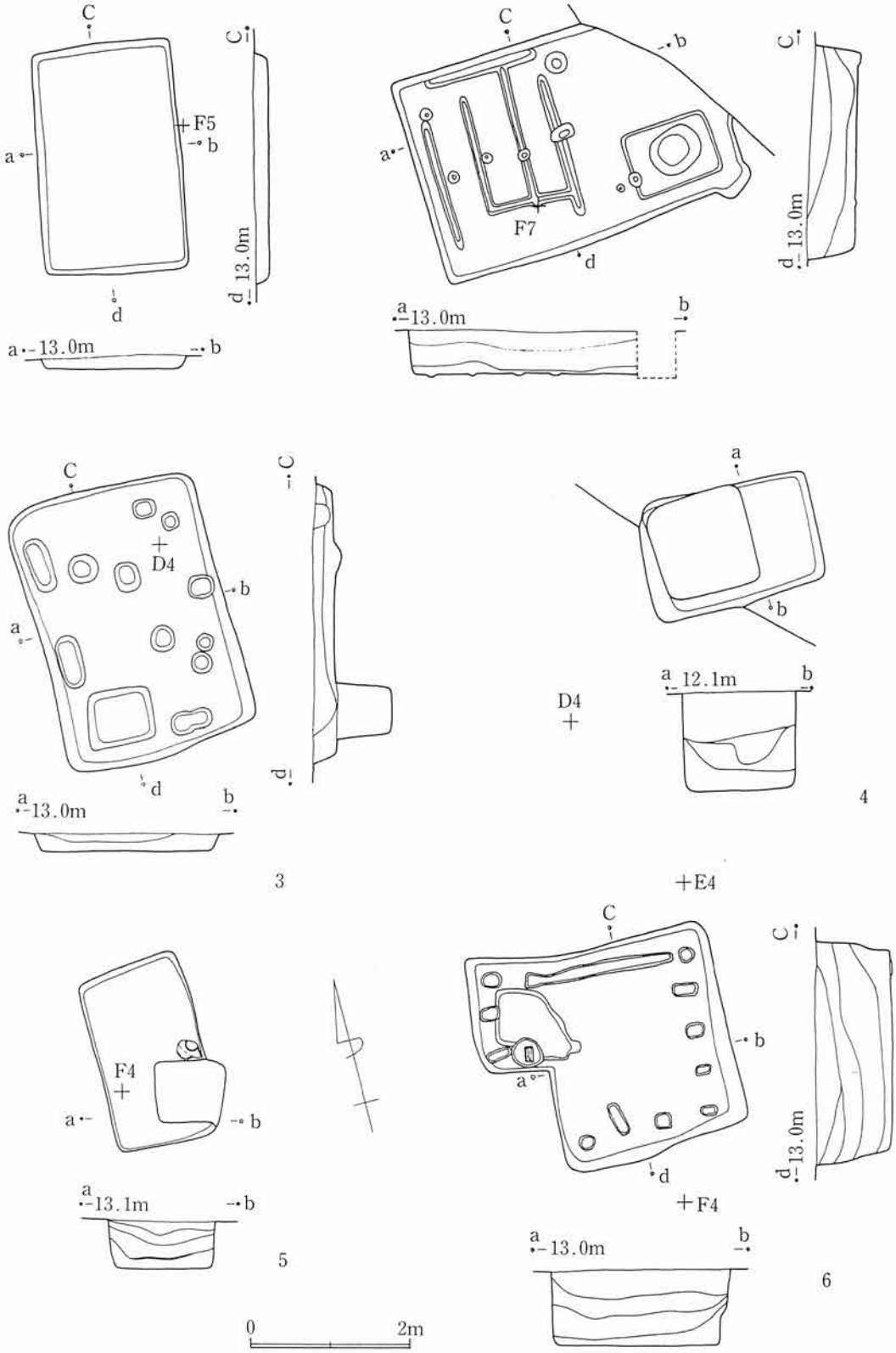
第７図　石組竈

D　方形竪穴（第８図）

方形竪穴とは、上屋構造をもつ半地下式の建築址であり、作業小屋、倉庫、簡易な住居等と考えられているもので、単に方形を呈する土壙とは別に扱った。しかし、現実には、上屋を支える下部構造の不明なものが多く、確実な区分にはなっていない。

（イ）方形竪穴１（第８図１）　Ｆ５グリッド杭の西側で検出された。確認面は第１面である。短辺1.8m、長辺2.9m、壁は15cm程が残る。床面は平坦で柱穴等は存在しない。覆土中に炭化物、焼土を多く含むが、床・壁面ともに焼けた痕跡はなかった。主軸は磁北に対し、約9°程東へ傾く。

（ロ）方形竪穴２（同図２）　先行調査時に検出された。確認面は第２面である。短辺2.6m、長辺3.9m、壁高は約60cmを測る。北東角隅を柱穴によって切られる。床面の溝は短軸方向に４本、長軸方向に２本みられる。いずれも深さが２～４cm程度の浅い溝で、根太木を渡した痕跡であろう。



第8図　方形竪穴

また床面にみられる小穴は、深さ10cm程度のものである。

南東隅の土壙ら床面から掘り込まれており、85×115cm、深さ約10cmを測る。この中央部には更に直径約60cm、深さ40cmの円壙が存在するが、本址に伴なうものか若干疑問が残る。一時期古い柱穴を同時に掘ってしまった可能性がある。本址の長軸は約2°の傾きをもつが、ほぼ東西方向とみてよい。

（ハ）方形竪穴3（同図3）　D4グリッド杭部で検出された。確認面は第2面であるが、第1面精査の際、本址上面に人頭大の土丹塊が多くみられ、掘り込み面は第1面と考えられる。短辺2.4m、長辺3.4m、壁は約30cm程が残る。南西隅に70×80cm、深さ70cmの方形土壙を伴なう。この土壙中からは、遺物片と混って、鎌倉石切石の砕片が出土している。床面の柱穴は大きさ、深さともまちまちで、本址に伴なうものか否かは明確にし得なかった。本址の主軸は、ほぼ磁北と一致する。

（ニ）方形竪穴4（同図4）　井戸2および攪乱壙によって上部を失なう。掘り込み面は不明であるが、遺物からみて第2面の可能性が強い。短辺1.4m、長辺2.2m、壁高1.2mを測る。床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は小形の土丹を少量含む暗褐色粘質土を主体とし、最下層は炭化物を微量含む暗灰褐色粘土が堆積してあた。本址の長軸方位はほぼ東西である。

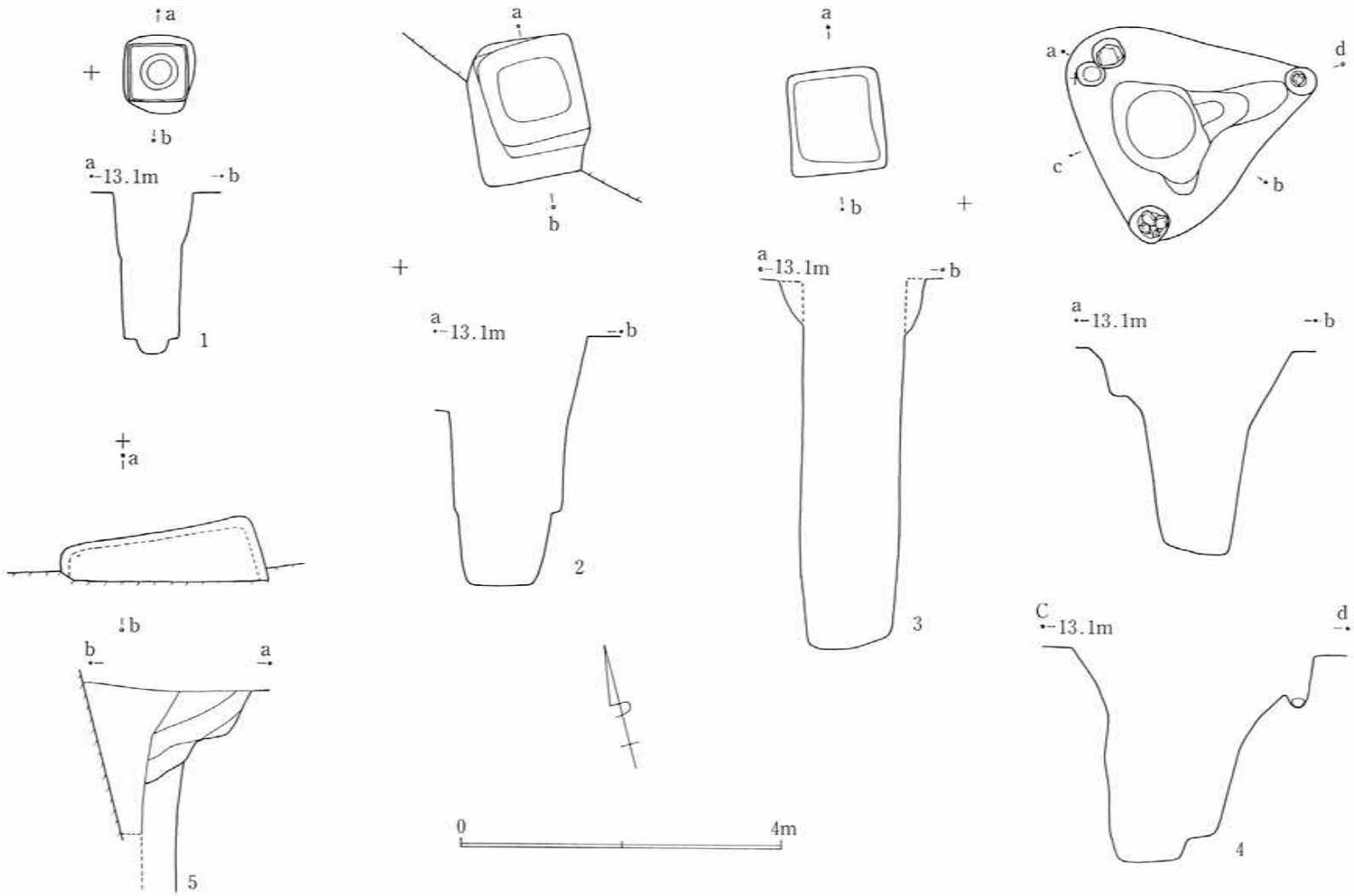
短辺と長辺の比率は、他と同様に1対1.5前後であるが、建築址とするには若干疑問が残る。

（ホ）方形竪穴5（同図5）　F4グリッド杭部で検出された。確認面は第1面である。東南角隅を井戸1に切られている。覆土は暗茶褐色土が主体で、焼土、炭化物も多く検出された。短辺1.4m、長辺2.3m、壁高60cm、床面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁際に山茶碗窯系捏ね鉢が1点、逆位で出土している。床面から15cm程浮いた状態であり、投棄されたものと思われる。短辺と長辺の比率は1対1.6。主軸方位は、ほぼ磁北と一致する。本址も小形であり、建築址とは断定し難い点がある。

（ヘ）方形竪穴6（同図6）　確認面は第2面。南壁を方形竪穴5と土壙5に切られ、東壁は井戸4に切られている。覆土は締りの良い暗褐色粘質土を主体とし、出土遺物は少なかった。短辺2.3m、長辺2.68、壁高約1mを測り、西壁に張り出し部をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁際に50cm間隔で浅い窪みが並んでいる。板材の遺存する箇所もあり、礎板ないしは根太状の長い板を置いたものであろう。張り出し部床面の不定形の窪みは、深さ約40cm。炭化物を微量含む軟質の灰褐色粘土を掘ったものであるが、壁、底面とも不明瞭で、掘りすぎている可能性が強い。本址の主軸は磁北とほぼ一致する。

E　井戸（第9・10図）

井戸枠の遺存しないものに関しては、その平面プラン、深さ等を目安に井戸と判断したが、特に円形プランを呈するものの中には、他に比して浅く、井戸の機能を有したか疑わしい例もある。また大形で深い井戸は、遺跡地中央部より西側に多く検出された。


a
b
a
-13.1m
b
1
a
b
a
-13.1m
b
2
a
b
a
-13.1m
b
3
a
d
c
b
a
-13.1m
b
4
C
-13.1m
d
a
b
b
a
5
0
4m

第9図　井戸(1)

（イ）井戸１（第９図１）　Ｆ４グリッド杭の東側で検出された。確認面は第１面である。方形竪穴５を切る。平面形は、１辺70cm程の方形プランを呈し、壁は中位から垂直に落ちる。井戸枠は検出されなかったが、壁面はあたかも板材が密着していたかのように平担である。底面は標高11.1m、確認面からの深さは1.8m. 測る。底面中央部の窪みは深さ20cm、曲物等を埋置したものであろうか。覆土中位には拳大から人頭大の土丹塊がまとまって出土した。

（ロ）井戸２（同図２）　Ｃ５グリッド内で検出された。確認面は第１面。北側半分は攪乱によって上部を失っている。方形プランをもつが、１辺の長さは底面に近づく和短かくなる。中位では一辺約1.2m、底面では１辺約0.8mである。壁面下部にみられる段は、方形竪穴４の床面が壊されずに残ったものである。井戸枠は検出されなかった。覆土中には、確認面近くで炭層の厚い堆積がみられた他、確認面から1.2m程下で破砕された鎌倉石切石が投棄された状態でみつかっており、更に確認面から2.2m程下の所で長さ約0.7×1.0m、厚さ約30cm程の大形鎌倉石切石がほぼ水平の状態で検出された。井戸廃絶時の埋納儀礼の一種であろうか。。底面の標高9.9m、確認面からの深さは3.1mを測る。

（ハ）井戸３（同図３）　Ｆ４グリッドで検出された。上部を攪乱壙に切られるため、掘り込み面は不明である。平面プランは１辺1.2mの方形、壁はほぼ垂直に落ちる。確認面から２m程下で炭層、３m程下で木質腐蝕層が検出された。井戸枠はない。底面の標高は8.4m、確認面からは約4.8mの深さである。

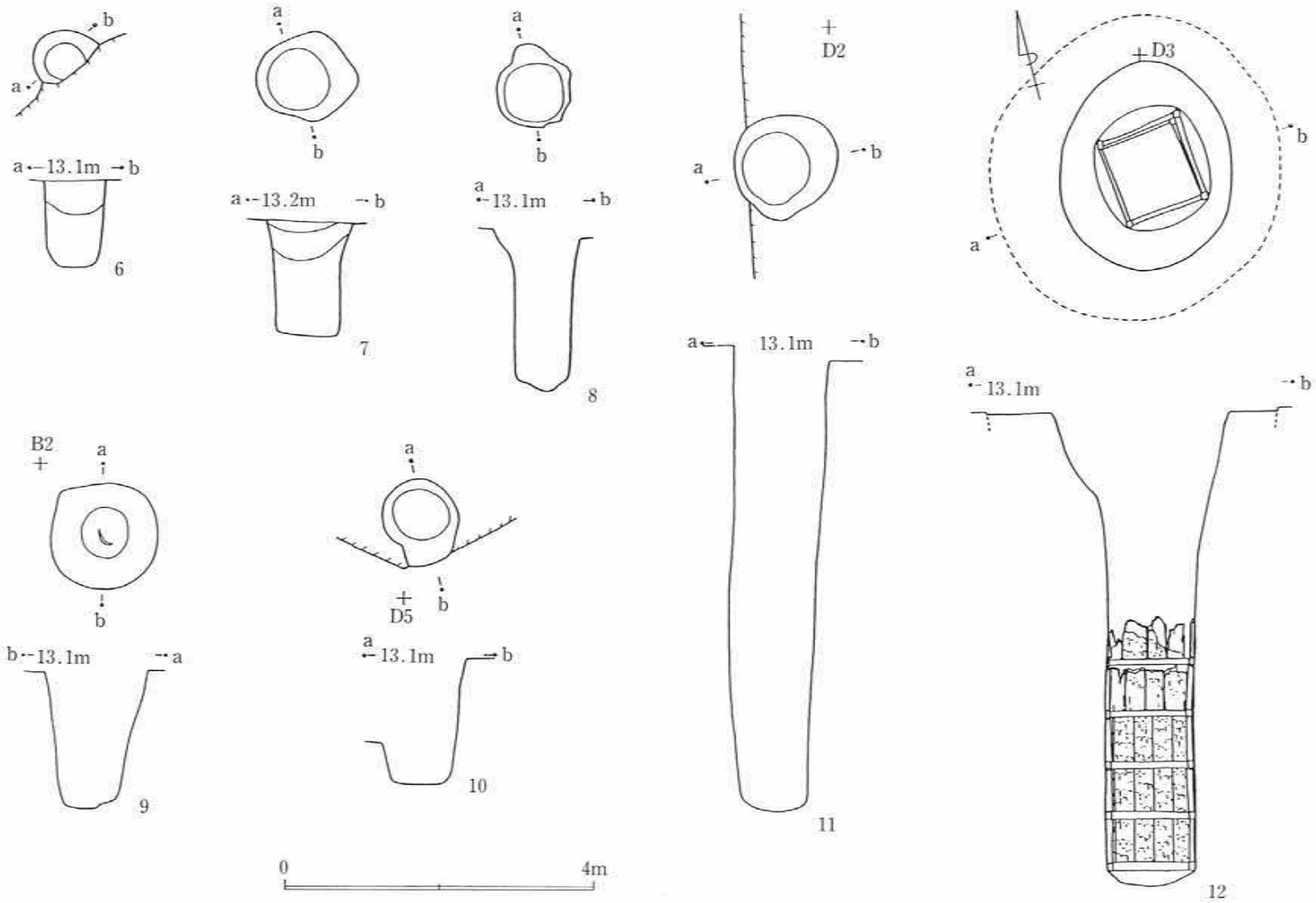
（ニ）井戸４（同図４）　Ｅ４グリッド杭の東側で検出された。確認面は第２面である。上面を１辺約2.8mの隅丸三角形に掘り、中位以下を円筒形に掘り下げた特異な形の井戸である。底面は直径0.8m程の円形を呈する。隅丸三角形の各頂点からは、縦方向に溝状の窪みが底面まで掘られているが、集水のための施設か、あるいは井戸掘削の際にとられた作業上の工夫なのか明確ではない。また、各頂点部にみられる柱穴も、本址に伴なうものであるか不明である。底面の標高は8.4m、確認面からは2.7mの深さを測る。井戸枠は検出されなかった。

（ホ）井戸５（同図５）　調査区の南辺を限る溝１底面で検出された。上面を溝１に切られ、南側半分を攪乱で失っている。１辺が約2.4mの方形プランを呈し、他と比べて大形の井戸である。全掘はできなかった。本址は該期の遺跡範囲と六浦路の関係を知る上で興味深い資料といえよう。

（ヘ）井戸６（同図６）　調査区西壁寄りのＤ３グリッド内で検出された。確認面は第１面である。東側半分を攪乱壙によって切られる。平面プランは直径0.8～1.0mの円形で、底面は若干丸みを有する。調査中に水が浸み出すこともなく、井戸として扱うには問題があるかもしれない。底面の標高は11.8m、確認面からは1.1mの深さである。

（ト）井戸７（同図７）　調査区のほぼ中央部、Ｄ６グリッド内で検出された。確認面は第２面である。上面は不整円形、底面は直径0.8m程の円形を呈する。底面は平坦で標高11.4m、確認面からは1.5m程の深さである。壁は上位から垂直に落ち、壁面下部からは水が少々浸み出していた。

（チ）井戸８（同図８）　井戸７の北東、約３m程離れた場所で検出された。確認面は第２面であ


a
b
a ← 13.1m → b
6
a ← 13.2m → b
7
a ← 13.1m → b
8
D2
a
b
13.1m
11
D3
a
b
a ← 13.1m → b
12
B2
a
b
b ← 13.1m → a
9
a
D5
b
a ← 13.1m → b
10
0
4m

第10図　井戸(2)

る。上面は柱穴等が切り合うため不整形を呈するが、１辺0.8m程の隅丸方形に近い形状といえる。底面中央部は浅く窪むようであるが、不明瞭である。底面の標高は10.8m。調査中でも下部に水がたまっている深さである。形態・規模とも井戸１と類似している。

（リ）井戸９（同図９）　調査区北西部、Ｂ２グリッド杭近くで検出された。確認面は第１面。上面プランは直径1.3m程の円形であるが、底面に近づくに従い径は狭ばまる。底面の標高は11.2mを測る。北西部壁面には、浅い溝状の抉れが下部まで掘られる。この抉れ部は、井戸掘削の際の技術的工夫の一つであろうか。覆土中からは礎石に使用されたと思われる扁平伊豆石が数多く出土した。確認面付近で20数個、確認面下１m程の所で13個が数えられた。

（ヌ）井戸10（同図10）　井戸２の東側、攪乱壙の底面で検出された。かろうじて残る南側壁面の状態から、第１面を切っていることは明らかである。底面は直径0.7m程の円形プランを呈し、標高は11.4mを測る。調査中に水がわずかに浸み出す程度の深さである。

（ル）井戸11（同図11）　調査区西壁際のＤ２グリッドで検出された。確認面は第１面である。平面プランは直径約1.3mの円形。底面では直径約0.9mに減じる。底面は若干西側に片寄っており、標高7.2m、確認面からは６mの深さである。南側壁面には井戸９と同様の抉れが底面まで続いている。覆土下層からは火熱を受けた扁平伊豆石、石臼等が出土している。なお、本址最下部でも岩盤はみえていない。

（オ）井戸12（同図12）　Ｄ３グリッド杭の南側で検出された。確認面は第２面である。上面プランは直径2.2～2.6mの惰円形を呈す。井戸底の標高は6.7m、確認面から６mの深さを側る。覆土上層には扁平な伊豆石６個と破片20点、鎌倉石切石の破片４点が投棄され、その下部には炭層の堆積がみられた。井戸枠は枘で組んだ横木の上に支柱を乗せる、方形横桟支柱形式と呼ばれるもので、井戸底から５段分が遺存していた。側板は３段分の長さをもち、４枚を横に並べて１面を構成する。掘り方は完掘できなかったが、上面プランでは直径3.8m程の円形を呈するものである。

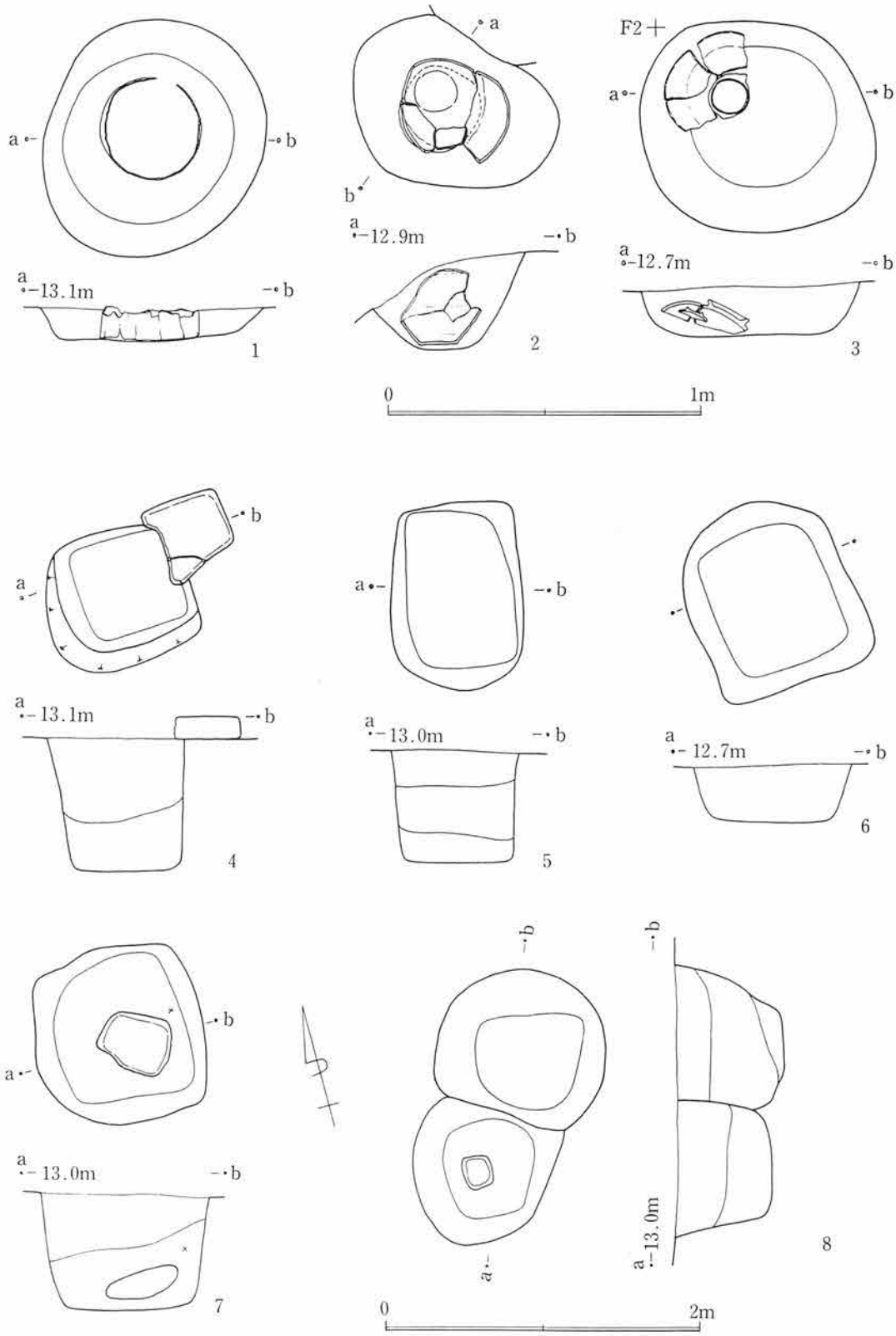
（ワ）井戸13（第６図）　トレンチＩ内で検出された。確認面は第２面である。方形プランの井戸であるが、全掘はできなかった。溝４より新しい。

Ｆ　土壙（第11図）

特徴的なもののみ記すことにする。

（イ）土壙１　（第11図１）　Ｄ６杭の南側で検出された。確認面は第１面である。直径約70cm、深さ10cm程のやや惰円に近い形状を呈し、中央部に曲物を埋置する。曲物は周囲に塗った漆皮膜だけが遺存する。厚さは１mmもなく、完全な形でとり上げることができなかった。底板もあったようで、同じく漆皮膜が底部に遺存していた。曲物の内外とも出土遺物はない。

（ロ）土壙２（同図２）　Ｆ５グリッド杭の約２m東側で検出された。確認面は第２面。摺鉢状を呈し、常滑窯産の甕が据えられた状態で出土した。甕は上半部を欠失し、底部のみが遺存する。他に出土遺物はない。


a
b
a
b
a
-13.1m
b
1
a
b
a
-12.9m
b
2
F2
a
b
a
-12.7m
b
3
0
1m
b
a
b
a
-13.1m
b
4
a
b
a
-13.0m
b
5
a
-12.7m
b
6
b
a
-13.0m
b
7
b
b
a
a
-13.0m
8
0
2m

第11図　土壙

（ハ）土壙３（同図３）　Ｆ２グリッド杭近くで検出された。確認面は第２面。直径70～75cm、深さ15cm程の不整円形を呈する。内部に渥美窯（？）産の捏ね鉢が投棄された状態で検出され、更にその内側から山茶碗２点がみつかった。いずれも破損品である。

（ニ）土壙４（同図４）　Ｆ７グリッドで検出された。確認面は第２面。短辺70cm、長辺80cmの方形プランを呈し、深さは85cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。東北角隅に接して、大形の鎌倉石切石がみられるが、本址には直接関係ないものと思われる。

（ホ）土壙５（同図５）　方形竪穴５の西側、Ｅグリッド内で検出された。確認面は第１面である。短辺80cm、長辺120cmの長方形プランを呈し、深さは70cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

（ヘ）土壙（同図６）　Ｃ７グリッド内で検出された。確認面は第２面。短辺100cm、長辺120cmの方形プランを呈し、深さは40cmを測る。底面は平坦で、壁は緩い曲面をもって立ち上がる。

（ト）土壙（同図７）　Ｅ７グリッド杭の東側で検出された。確認面は第２面である。短辺100cm、長辺115cmの方形プランを呈し、深さは75cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。中央部から若干東壁寄りに、大形の伊豆石が検出された。伊豆石は底面から約10cm程浮いた状態である。また近くから瀬戸窯産の仏華瓶１点が出土し、北宋銭も覆土中から４枚出土している。墓壙の可能性が強い。

（チ）土壙８・９（同図８）　Ｅ４グリッド杭の西側で検出された。確認面は第１面である。覆土は両土壙ともに近似しており、識別は困難であった。南側を土壙８、北側を土壙９とした。平面プランはともに直径１m程の円形で、深さは土壙８が60cm、土壙９が70cmを測る。土壙８の底面には15×20cm程の浅い窪みがみられた。

Ｇ　柱穴群（第５図）

柱穴は遺跡地全面にみられ、やや西側に集中する傾向が窺える。遺物の出土した柱穴だけでも約600穴を数え、総数は1000穴近くになると思われる。切り合い関係も複雑で、一棟の建物を抽出することは不可能であった。短期間に幾度も建て替えが行なわれた結果であろう。柱穴は隅丸方形プランを呈するものが多く、深さはまちまちである。柱の高さ調整や沈み込み防止のために、土丹塊を内部に入れた例もみられた。

柱穴の中には住居以外の木柵や板塀に使用されたものも含まれる。溝１の北側1.6m程に土丹塊を入れた柱穴列が認められ、こうした施設の存在を考えさせられる。

柱穴群に関しては、もう少し検討したいため、ここでは簡単な説明だけに留めておく。

第四章　出土遺物

調査中に出土した遺物は、かわらけ皿、常滑焼甕、瓦などを主体とし、骨、貝などの自然遺物を含めたその総量は、天箱（長さ54cm、短辺34cm、深さ15cm）約125箱分であった。ほとんどの遺物は地業層中から出土しており、遺構内から出土したものは数少ない。ここでは、前章で述べた遺構内より出土した遺物に限り掲載し、説明を加えていくことにする。

溝１出土遺物（第12図１～２１）

溝１は南半分が攪乱によって失なわれているため、遺物の大部分が、第１面に伴なう新期の溝中より出土している。

１～12はかわらけ皿。７と12が手捏ね成形のものである。糸切り底のかわらけ皿は、底径が大きく、器高が低く、体部は内彎する特徴をもつ。２は内底面のノデツケが行なわれず、螺施状の調整痕を残し、中央部分は窪む。

13は山皿。暗灰色を呈す。胎土は精製され、白色微粒子を多く含む。焼成は堅緻。内底面には重ね焼の際の融着痕がみられる。

14・15は青磁碗の小片である。14は口縁部内面に一条の沈線を有するほかは、残存部に文様はみられない。釉調は酸化気味で黄色味が強く、細かい貫入が多く入る。15は体部外面に鎬蓮弁文を配している。釉は高台畳付部を除いて掛けられる。淡青色を呈し、貫入は大きく粗い。

16は渥美窯産の捏ね鉢小片である。内面に降灰がかかる。

17～20は常滑窯産のもの。17と20は捏ね鉢。17は口縁部を丁寧にナデ、口唇部を平坦に仕上げる。体部外面はヘラナデ調整である。20は図上復原したもの。口唇部に若干丸味をもつ。体部外面は轆轤調整痕を明瞭に残し、下位のヘラケズリ痕もほとんどナデによって消されている。高台は肉厚で頑丈なものを貼る。内面中位以下は磨耗が著しく、内底面には重ね焼の際の融着痕がみられる。

18・19は甕口縁部の小片である。18はN字状に折り曲げ、19はT字状に整形した縁帯をもつ。

21は粘板岩製硯の海部である。陸側は鋸で切断され、更に切断するための浅い溝が裏面に掘られている。切断面からは約1.5cmの間隔である。こうした例は、滑石製鍋の小片にもままみられ、廃材利用の一例といえる。

溝３出土遺物（第12図22～28）

22・23はかわらけ皿。22の底部は静止糸切りで、内底面のナデツケは行っていない。器形に若干歪がみられる。体部は中位で強く屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる。胎土中に微砂粒を多量に含むため、器表はザラついた感触で、暗赤褐色に焼き上っている。また、白色針状物質も多く含

有する。23の底部は回転糸切りである。内底面のナデツケは行っていない。暗橙褐色を呈するものの、胎土は22と同じで、やはりザラついた感触をもつ。器高はやや高く、体部は丸味を有する。口縁部を強くナデるため、外反気味の口縁となる。

24・25は青磁。24は内底面に櫛描画花文を配す皿である。釉は淡青色で透明感がある。25は碗。残存部に文様はない。全体に肉厚で、高台畳付部の釉も完全には削りとられていない。釉調は黄色味が強く、細かい貫入が多くみられる。

26・27は山皿。26は黒味がかった暗灰色。口唇部はわずかに外反する。27は明灰色。器高が高く、口唇部は内彎する。

28は、山茶碗。胎土中に粗い砂粒を多く含む。

溝4出土遺物（第12図29～32）

常滑・渥美窯産の甕片も少量出土しているが、実測できるものは少ない。図示したかわらけ皿はいずれも小片である。

29～30は底部に回転糸切り痕を残す。31は手捏ね成形のものである。

石組竈出土遺物（第13・14図33～59）

33は竈床面の奥壁側、34は焚き口側に敷かれていた瓦である。土圧のために割れているが、当初は完形品であったと思われる。ともに格子目叮き痕を凸面に残す平瓦である。

35～38は平瓦。35・36は竈奥壁に使用されていた瓦で、37は南側の鎌倉石側壁と支脚代わりの土丹塊の間に落ち込んでいたものである。38は同竈の覆土中から出土した。

39は竈奥壁に使用された瓦である。破損後、奥壁として用いられたもので、復原するとほぼ一枚の平瓦となった。凸面には粗い縄目が残る。

40～44も同竈の覆土中から出土した瓦である。42が丸瓦、他は平瓦。41は竈床面に敷かれた33番の瓦の下部で検出された。42は37番の瓦と同地点で検出されたものである。

44～45はかわらけ皿。45は北側竈の外部で出土したもの。53は南側竈内の炭層直上で出土したものである。ともに平面図上に記録した。48・49は北側の竈内覆土中、54・55は南側の竈内覆土中から出土しており、他は竈周辺部の出土である。50は底部穿孔かわらけ。52は手捏ね成形である。

56は青白磁蓋。天井部に文様を配す。竈周辺部出土。

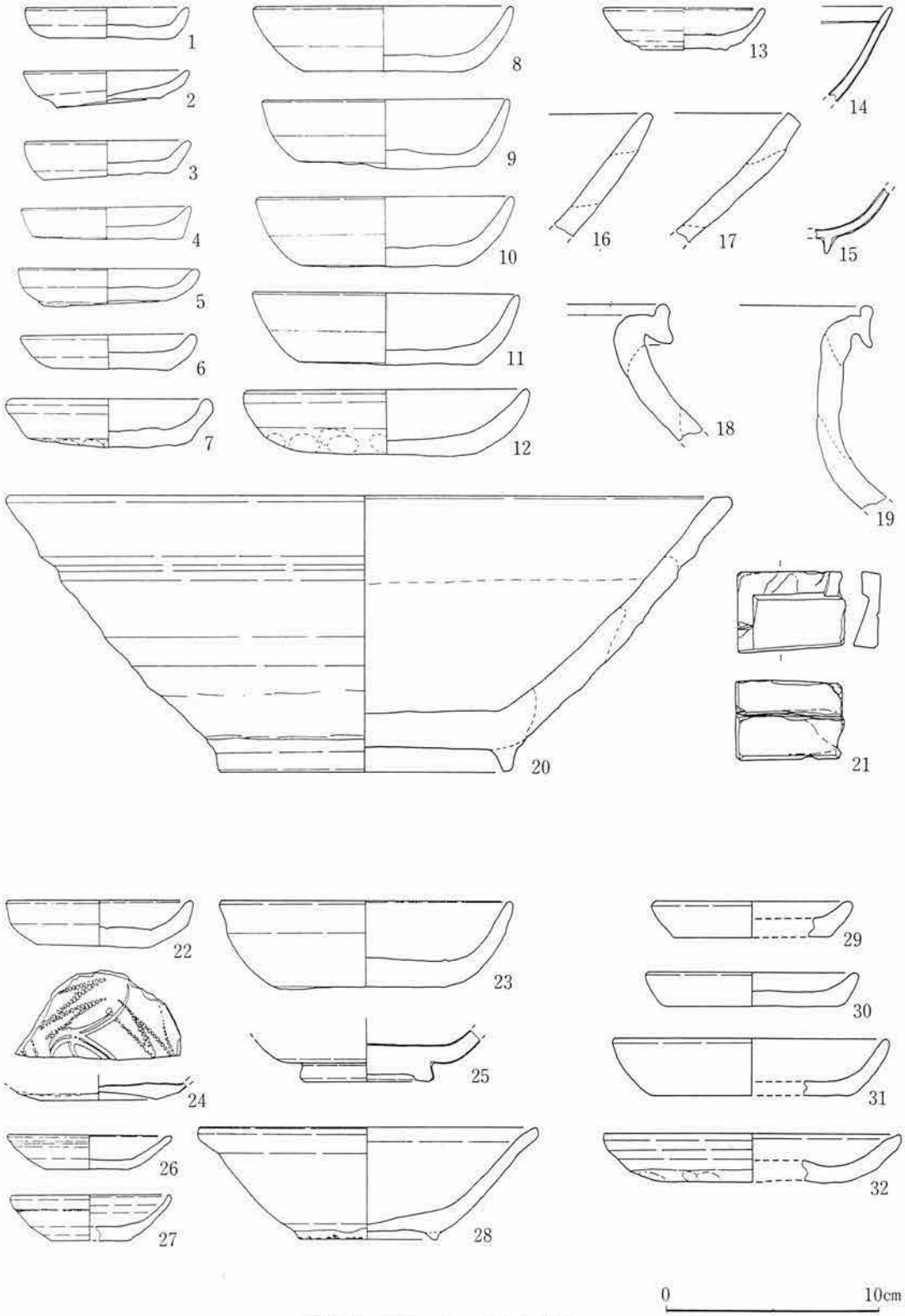
57は常滑窯産の壺口縁部。南側竈内より出土。

58は山茶碗窯系捏ね鉢。竈周辺部出土。

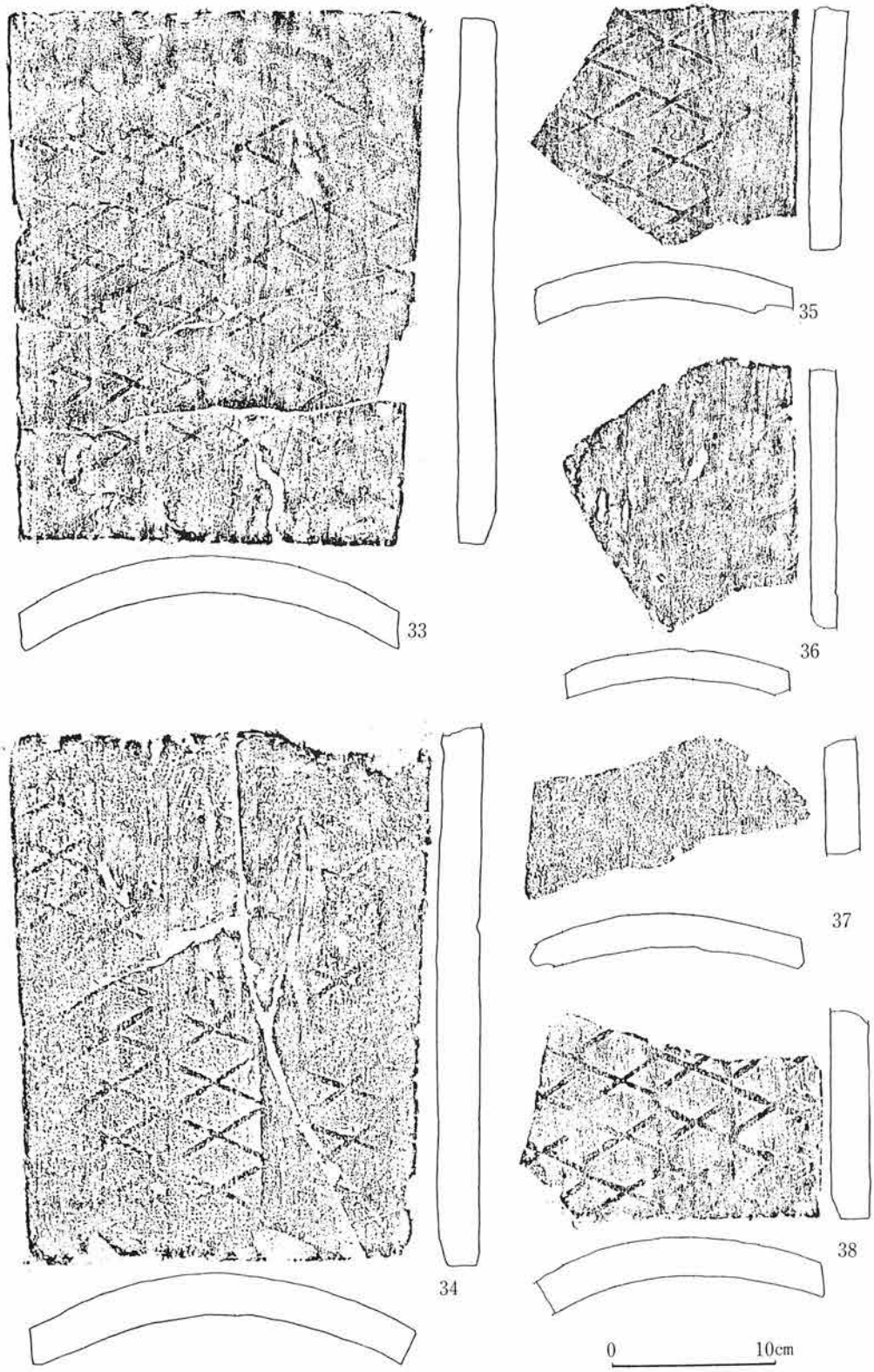
59は鉄釘。南側竈内出土。

方形竪穴1出土遺物（第15図60～74）

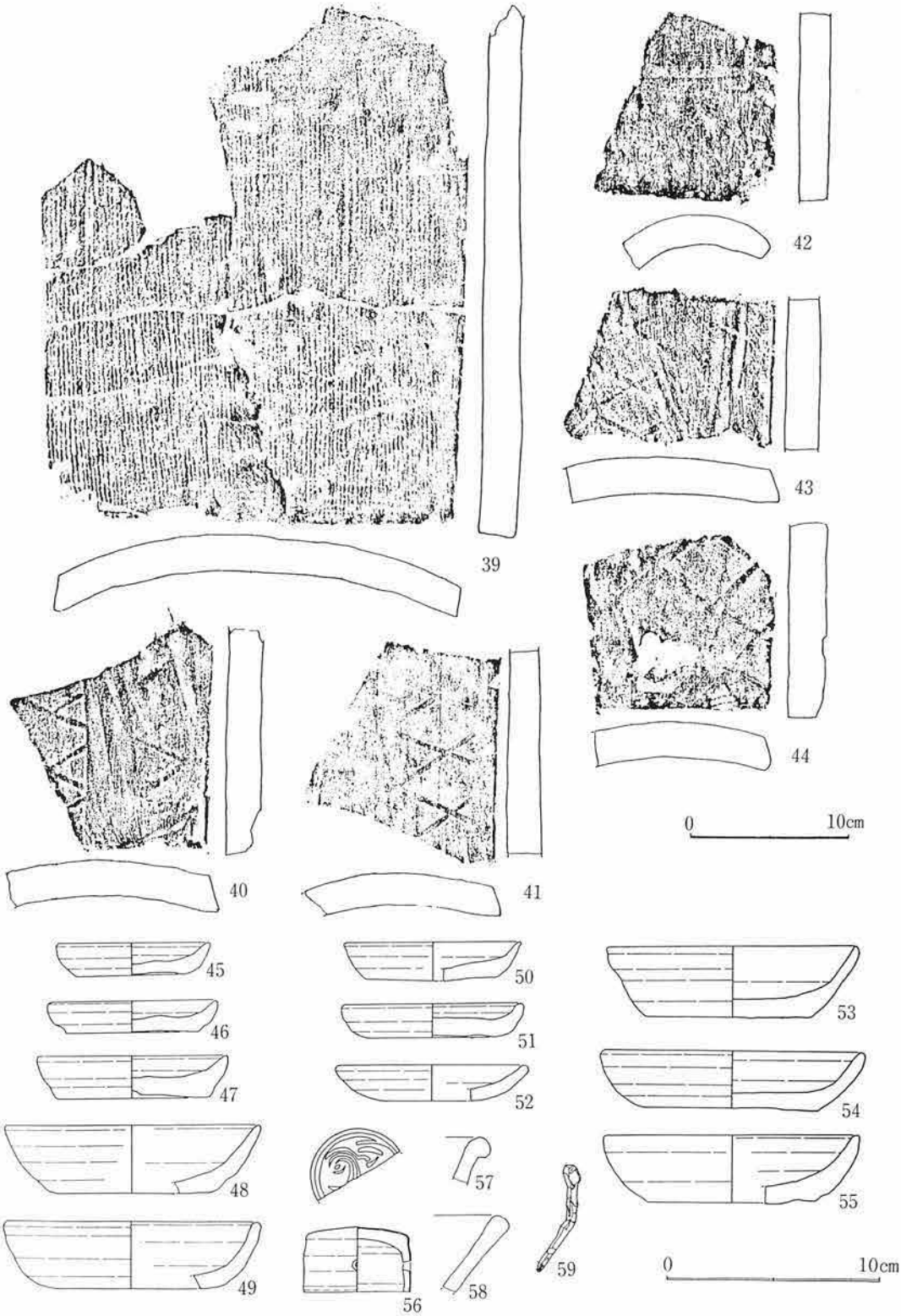
60～63はかわらけ皿。61は灯明皿として使用されたものである。



第12図　溝１・３・４出土遺物



第13図　石組竈出土遺物(1)



第14図　石組竈出土遺物(2)

64・65は青磁碗。64は外面に鎬蓮弁を配す。釉は細かな気泡を多く含むが、透明感、光沢とも強い。65は内底面に草花文を配す。釉は失透し、高台内部分にまでかかる。高台内底面の釉は、中央部分を残し、きれいに拭いとられている。

66は瀬戸窯産の平碗。内面から外面体部中位にまで灰釉がかかる。ドブ漬けである。外面の高台部近くに回転ヘラケズリ痕が残る。内面に重ね焼の際の目痕がみられる。

67は天目茶碗。舶載品であろうか。胎土は灰色を呈し、粘性が強い。体部外面および高台部は右回りの回転ヘラケズリを行うが、皺状の亀裂が多く入り、丁寧な仕上げとはいえない。漆黒色の釉が内面に厚くかかり、外面高台部分にも一部流れ落ちている。

68は産地不明の陶器蓋。混入品であろう。天井部にのみ薄く灰釉をかけ、鉄絵を配す。

69は山茶碗窯系の捏ね鉢。

70は常滑窯産の甕。T字状の縁帯をもつ。

71は手焙り。

72はいわゆる磨り常滑と呼ばれているもの。常滑甕の破片を利用し、焼け焦げや錆等を落したものであろう。周縁部が磨耗している。

73・74は凝灰岩製砥石。同一の石材を使用したものと思われる。中砥である。

この他に鉄釘数本と銭が出土している。銭は2枚みつかったが、錆のため判読は不可能である。

方形竪穴2出土遺物（第15図75～91）

75～85はかわらけ皿。灯明皿として使用されたものが何点かみられる。77・79・84・85は、薄手タイプの皿である。

86は常滑窯産の捏ね鉢。

87は常滑窯産の甕。

87は転用硯と思われる。滑石製鍋の鍔を削り落し、内面中央部に磨耗痕が観察できる。

89はかわらけ質土製品。胎土・色調・焼成ともかわらけ皿と同じであるが。体部下位から底面にかけて手持ちのヘラケズリを行っている。千葉地遺跡では、土器質手焙りとして扱っているものの中に本品と近似した例があるが、本品の内面に二次的な被熱の痕跡はみられない。

90は手焙り。

91は常滑窯産の捏ね鉢。小片からの復原である。高台はない。口唇端部は若干窪み気味で、外方へ引き出される傾向にある。内面下位に磨耗痕がみられる。

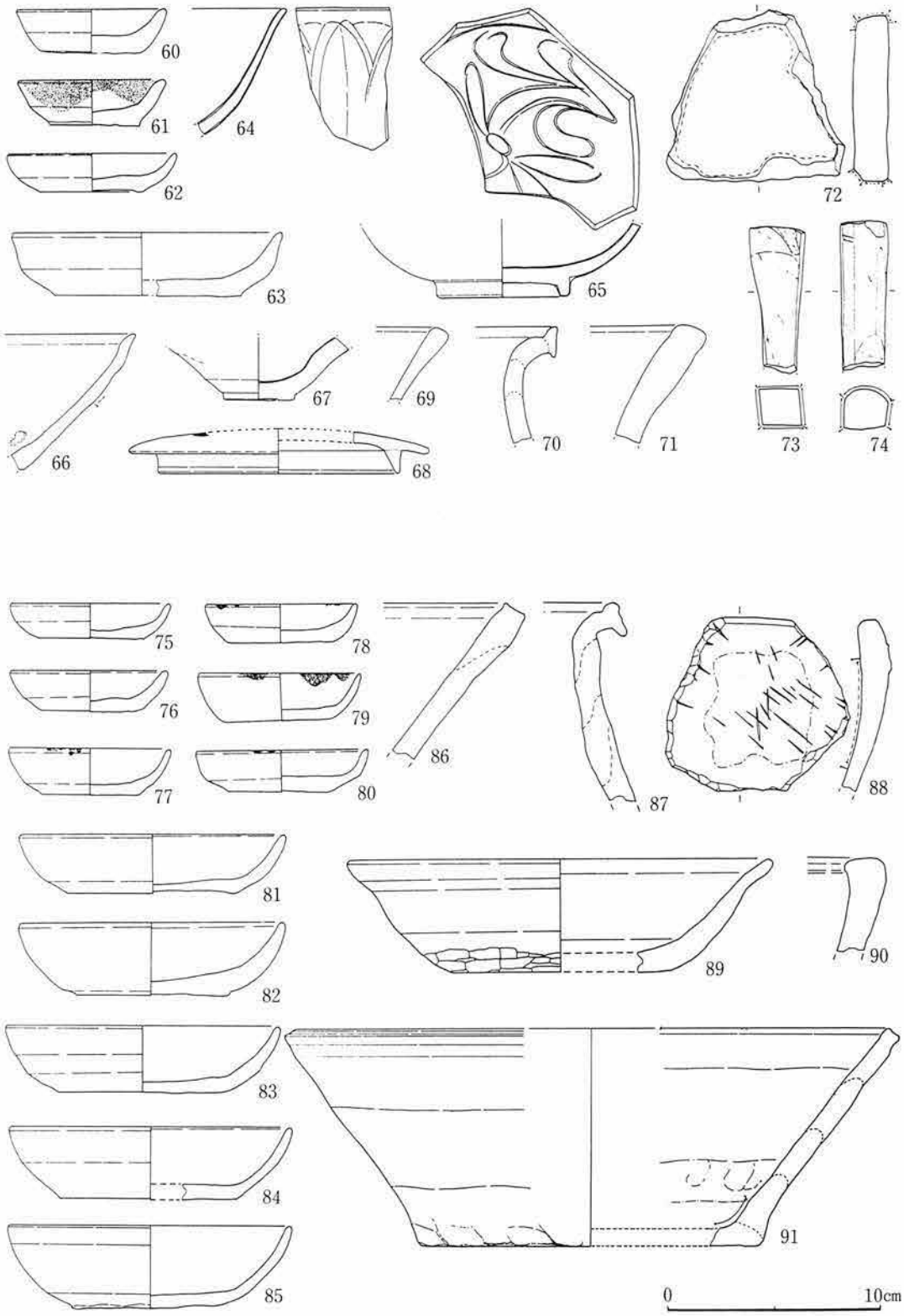
方形竪穴3出土遺物（第16図92～99）

すべて床面南西隅の土壙中より出土した遺物である。

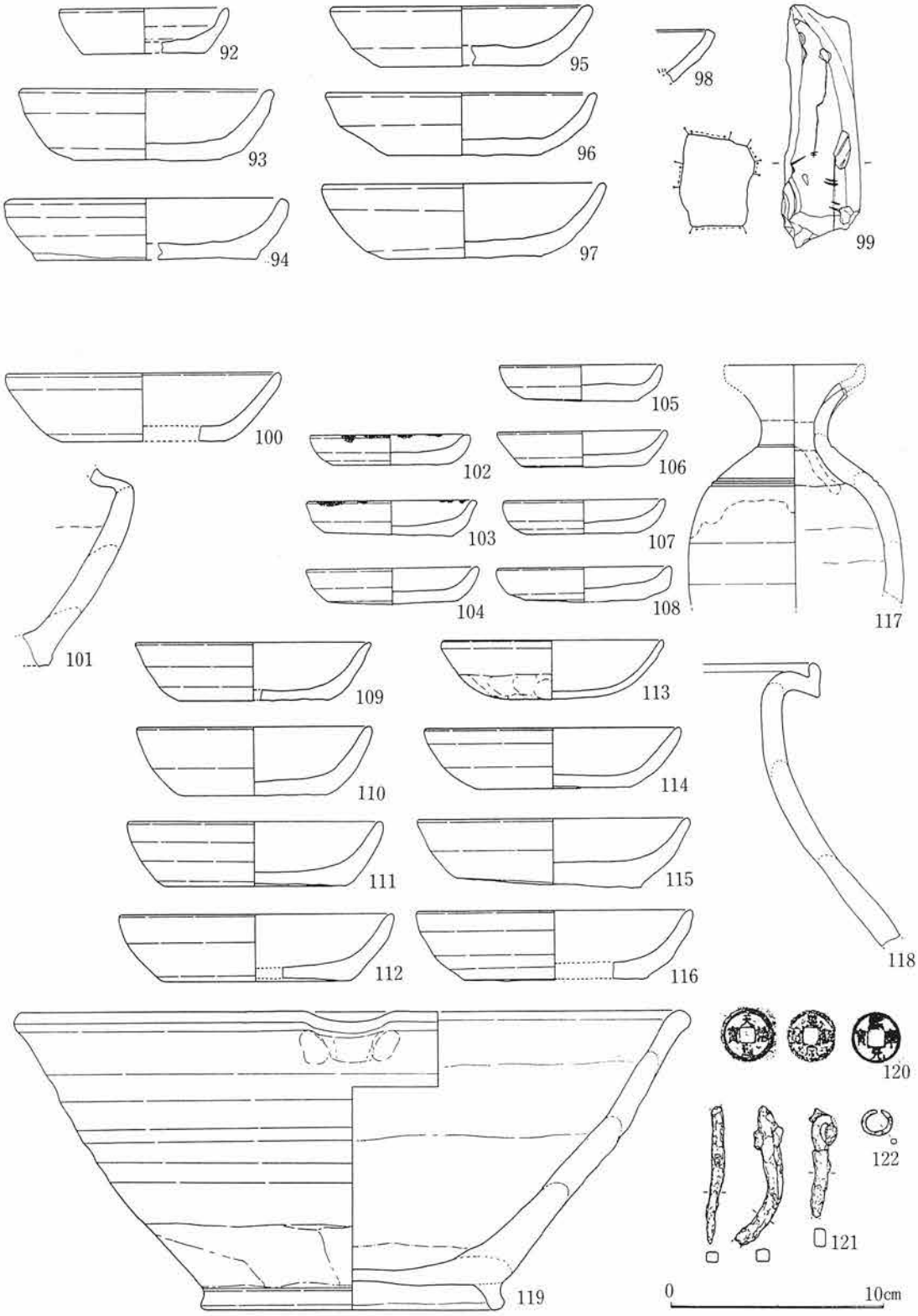
92～97はかわらけ皿。96は略完形。97は薄手タイプのものである。

98は瀬戸窯産の卸し皿。

99は砥石。頁岩製であろうか。平坦に使用している砥石は一面だけで、他面には幾筋もの条線



第15図　方形竪穴１・２出土遺物



第16図　方形竪穴３・４・５出土遺物

がつく。鋭利な先端部を砥いだのであろうか。

方形竪穴４出土遺物（第16図100～101）

遺物は非常に少なかった。測図可能なものをとりあげた。

100はかわらけ皿。

101は常滑窯産の壺である。

方形竪穴５出土遺物（第16図102～122）

102～116はかわらけ皿。113は白かわらけと呼ばれる畿内地方からの搬入品である。102・103は灯明皿。106は薄手の小皿である。

117は瀬戸窯産の水注であろうか。口縁部及び体部下半を欠失する。

118は常滑窯産の甕。口縁部をN字状に折り曲げている。

119は出茶碗窯系の捏ね鉢。口縁部の大部分を欠くが略完形である。壁より床面近くで出土した。内底面に磨耗痕がみられる。

120は銭。天禧通宝（1017年）・皇宋通宝（1039年）・熙寧元宝（1068年）である。

121は鉄釘。右端の１本は頭部を環状に丸めている。

122は銅製品。

方形竪穴６出土遺物（第17図123～140）

123～129はかわらけ皿。125・129は手捏ね成形である。

130は産地不詳の捏ね鉢片、暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。

131は山茶碗窯系の捏ね鉢。口唇端部に沈線がみられる。

132は常滑窯産の壺あるいは小形の甕。

133・134は瀬戸窯産のもの。133は合子身部。蓋受け部と外底面を除いて、薄く灰釉がかけられる。

134は四耳壺底部。

135は舶載品。黄釉鉄絵盤の底部片である。内底面に草花文らしき文様がみられる。

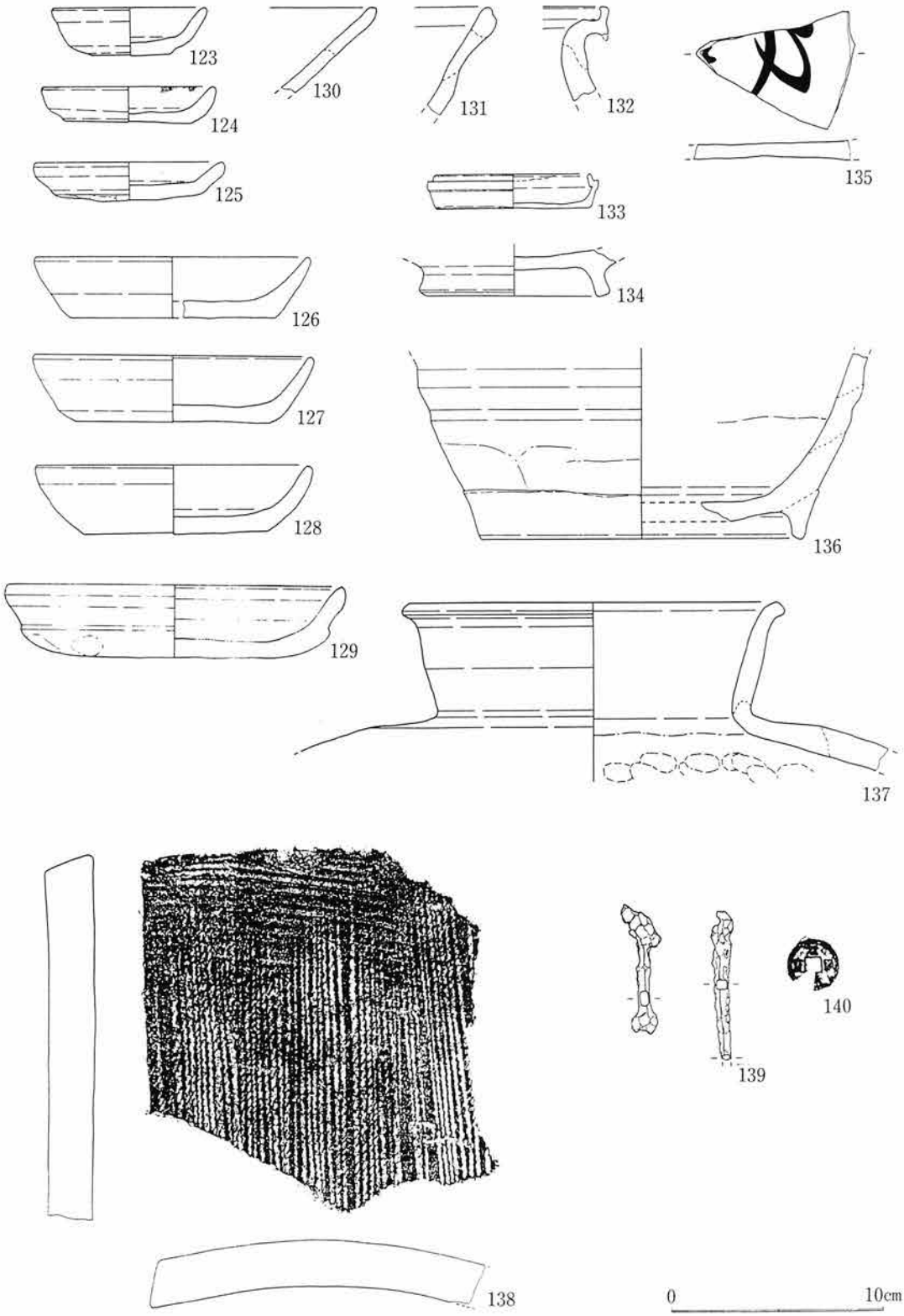
136は山茶碗窯系の捏ね鉢。131と同一個体か否かは判然としない。残存部から復原した傾きは若干急で、器体に歪みがあった可能性もある。内面下位に磨耗痕がみられる。

137は渥美窯産の甕。口唇部内面と肩部外面に厚く降灰がかかっている。口縁部の立ち上がりは直立に近く、口唇部は若干外側に引き出されるが、端面は平坦である。

138は平瓦。凸面に粗い縄目が残る。

139は鉄釘。

140は北宋銭。元祐通宝（1086）であろうか。



第17図　方形竪穴 6 出土遺物

井戸１出土遺物（第18図141～172）

141～161まではかわらけ皿。このうち、154までが上層出土。155以下が下層出土のものである。形態的には全く差異がない。小皿は器高高く、体部中位で屈曲し、口縁部はわずかに外反する。大皿は直線的であるが、体部下位に丸味をもち、口縁部が外反する特徴をもつ。

162～164は瀬戸窯産のもの。162は小皿と思われる。口唇部に茶褐色の鉄釉がかかる。162はやや深めの皿。体部外面は回転ヘラケズリ、底部は削り出し高台である。162と同様に、ドブ漬け手法によって口唇部に釉をかける。淡緑色の灰釉である。164は灰釉平碗。削り出し高台をもち、体部外面は回転ヘラケズリ。釉は内面および体部外面下位までかけられる。内底面近くには重ね焼の際の目痕が２ヶ所残る。162・163が上層出土。164が下層出土。

165は青磁鎬蓮文碗。小片である。上層出土。

166は常滑窯産の甕口縁部。下層出土。

167は産地不明の甕底部。胎土中に粗い長石粒を多く含み、焼成不良。土器に近い。内面は磨滅しており調整不明。外面はユビオサエのちナデと思われる。外底面には静止糸切り痕とスノコ圧痕が観察できる。下層出土。

168は北宋銭。至道元宝（995年）・至大通宝（初鋳年不明）ともに上層の出土。

169は土風炉の肩部破片である。透し窓の一部が半円形に残る。内面はナデ、外面はヘラミガキが施されていたようである。下層出土。

170・171は瓦器質香炉。170は171より若干大き目のものと思われる。体部外面に菊花文を配す。上層出土。171は外面に雷文を連続して押捺し、底部に脚を貼り付ける。下層出土。

172は瓦質手焙り。体部内外面にヘラミガキを行うが、内面は粗雑である。外面の口縁部近くには、沈線と菊花文、連珠文を配す。脚を有すが、残存部僅少のため形状等は不明。下層出土。

井戸２出土遺物（第19図173～195）

173～184まではかわらけ皿。176・179・182が下層出土。他は上層から出土した。176は薄手タイプの小皿で、体部に丸味をもち、器高が高い。小皿は全体に数少なく、完形品は少なかった。大皿は丁寧な作りのものが多く、完形品も多く出土した。特に、181～184の大皿は他にも比して大振りで、特徴的な一群である。

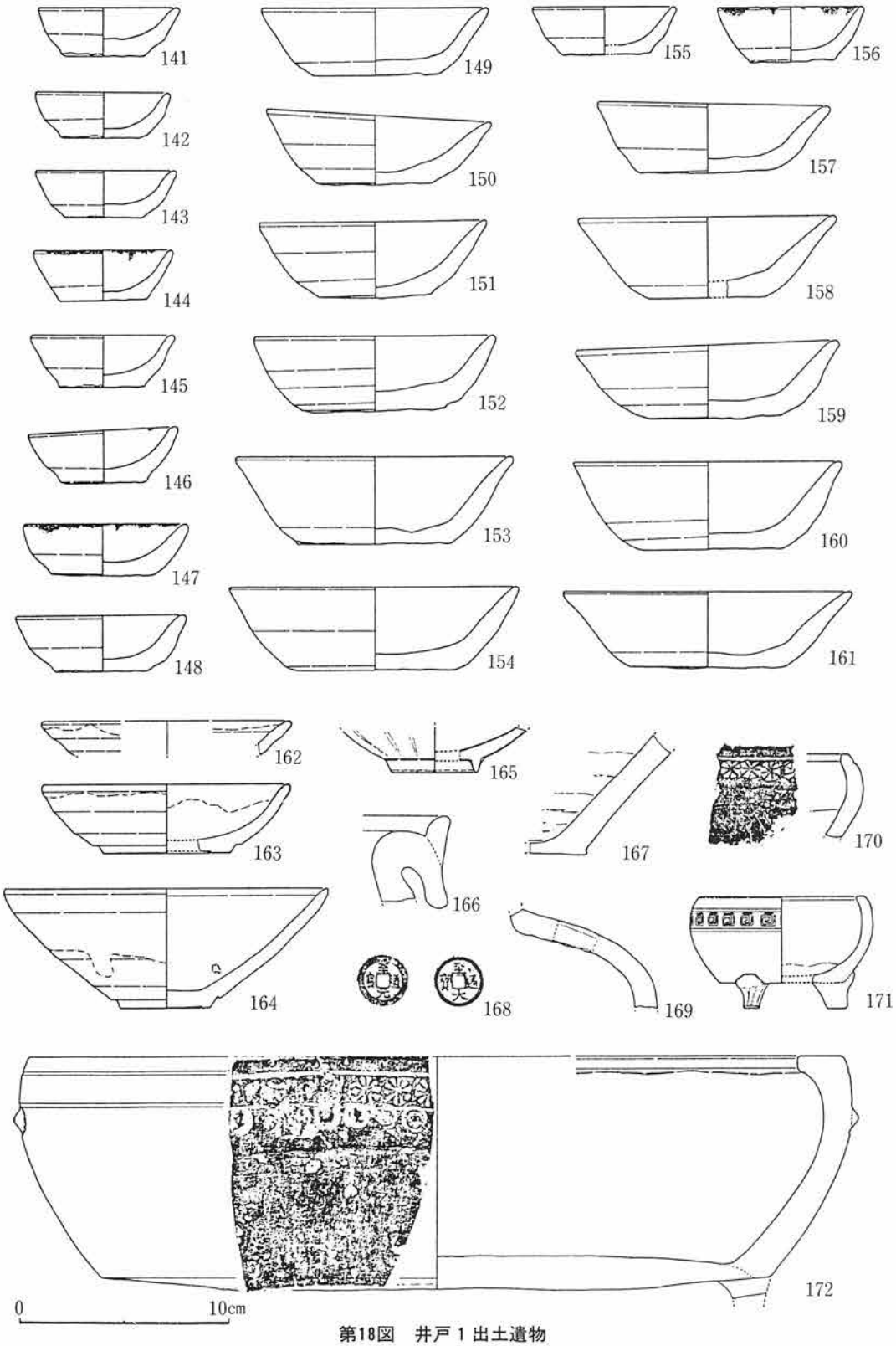
185・186は青磁碗。高台畳付部以外の全面に釉がかかる。186は単葉の鎬蓮弁文碗であろう。ともに上層出土。

187は瀬戸灰釉小皿。内底面中央部に菊花文スタンプを押捺する。最下層出土。

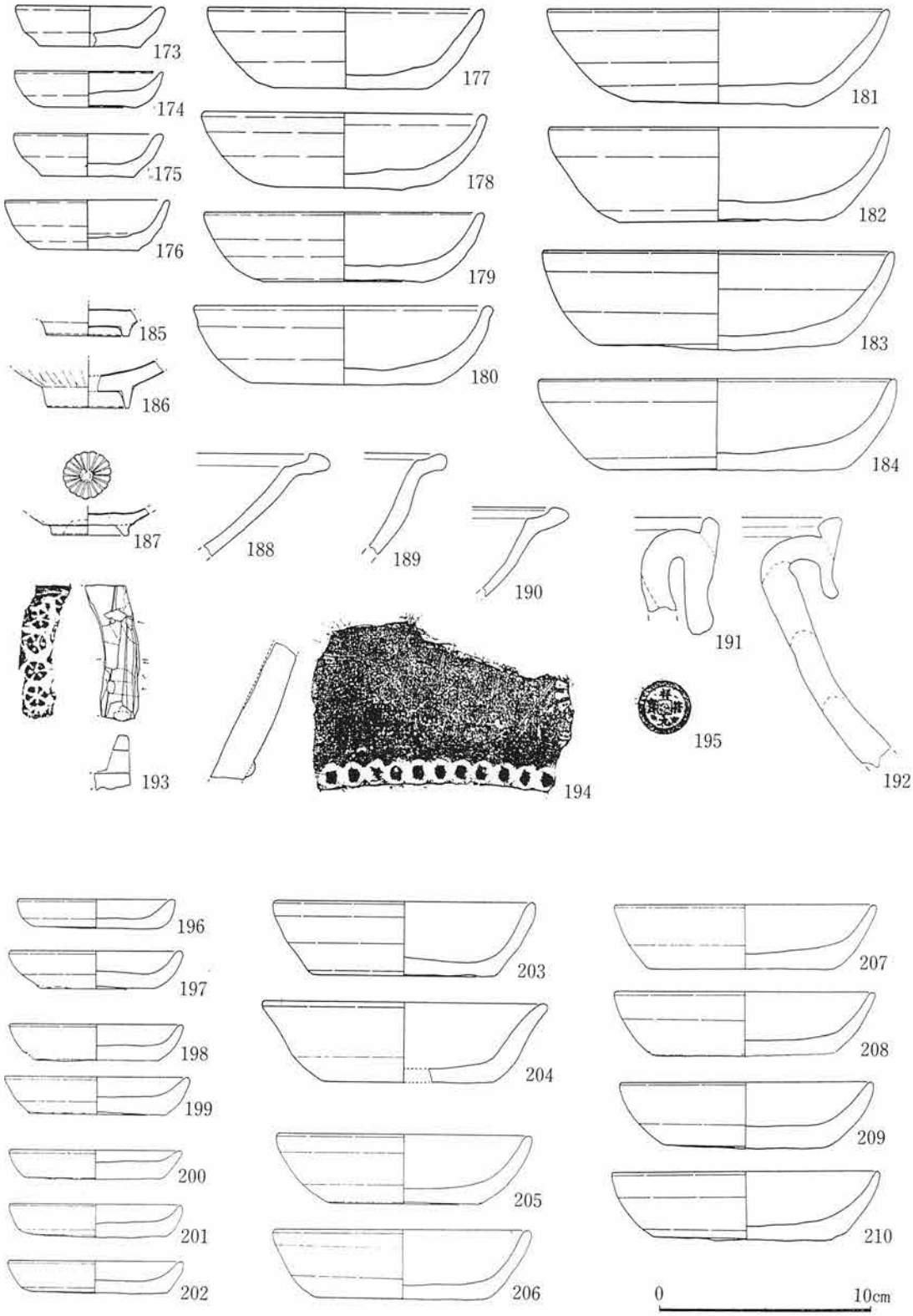
188～190は瀬戸折縁皿。内外面に灰釉を刷毛塗りする。口唇端部の作りに差異がみられる。いずれも下層の出土である。

191～192は常滑甕。191は下層、192は上層出土。

193は滑石製スタンプ。取手部に３箇所の孔をあける。下層出土。



第18図　井戸１出土遺物



第19図　井戸２・３(1)出土遺物

194は土風炉の破片。腰のくびれ部分と思われる。外面に連珠文を配す。内面はユビオサエ後、下部をヘラナデ。外面はヘラミガキを施す。内外面とも黒く燻されている。上層出土。

195は北宋銭。祥符元宝（1008年）。上層出土。

井戸３出土遺物（第19・20図196～227）

196～210はかわらけ皿。196・197・203・204が上層出土。198・199・205・206が下層出土。200～212・207～210が最下層の出土である。小皿は器高が低く、底径の大きいものが目立つ。大皿も204を除いて小皿と同様の特徴をもち、体部の内彎するものが多い。手捏ね成形の皿や薄手タイプの皿はみあたらない。204は混入品であろう。

211は青磁碗。残存部に文様はみられない。高台内底部は無釉である。最下層出土。

212は青白磁梅瓶。釉は淡青白色を呈す。下層出土。

213・214は常滑窯産のもの。213は甕口縁部。214は捏ね鉢である。ともに下層出土。

216は手焙り。口縁部外面に一条の沈線がめぐる。最下層出土。

217は山茶碗窯系の捏ね鉢。高台は断面三角形状を呈し。丁寧な作りである。内面体部下半に磨耗痕がみられる。最下層出土。

218は北宋銭。元祐通宝（1086年）。上層出土。

219は鉄製品。つるはしの先端に似た形状である。用途不明。下層出土。

220～226は木製品。220・221は木槌。221が柄の部分である。火を受けて、約半分が炭化している。下層出土。222は錐等の柄であろうか。一端を欠く。下層出土。223は管状の木製品。裏面は平坦である。下層出土。224は黒漆を塗った椀。無文である。下層出土。225は皿。黒漆を塗った後、朱漆で花文を内外面に押す。下層出土。226は家具、調度品の一部であろうか。角材の一部を掘り窪めて敷居状にし、約3.5cm間隔で薄板を立て並べたものらしい。3箇所に釘穴がみられる。下層出土。

227は不明石製品。灰白色の凝灰岩を三角柱状に加工する。鑿で削った痕跡が各所にみられる。重量は約5.5kgを測る。はね釣瓶の重し石であろうか。最下層出土。

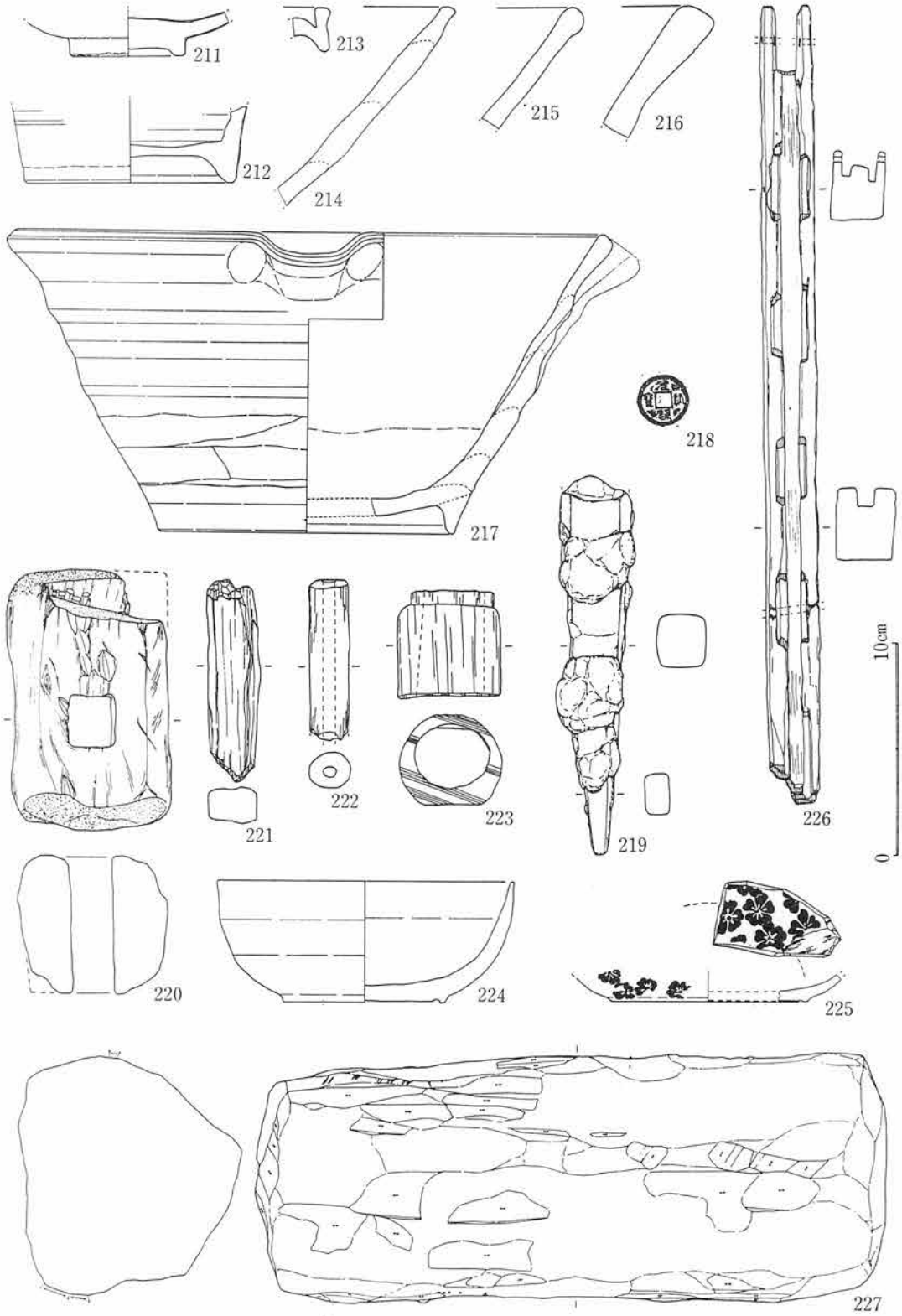
井戸４出土遺物（第21・22図228～286）

228～255まではかわらけ皿。229・230・232・241～243・245～248が上層出土。他は下層出土である。228は口折れかわらけ。器形的に数タイプが混じり合うが、概して小皿、中皿、大皿ともに器肉が厚く。体部は直線的で外反する傾向がある。

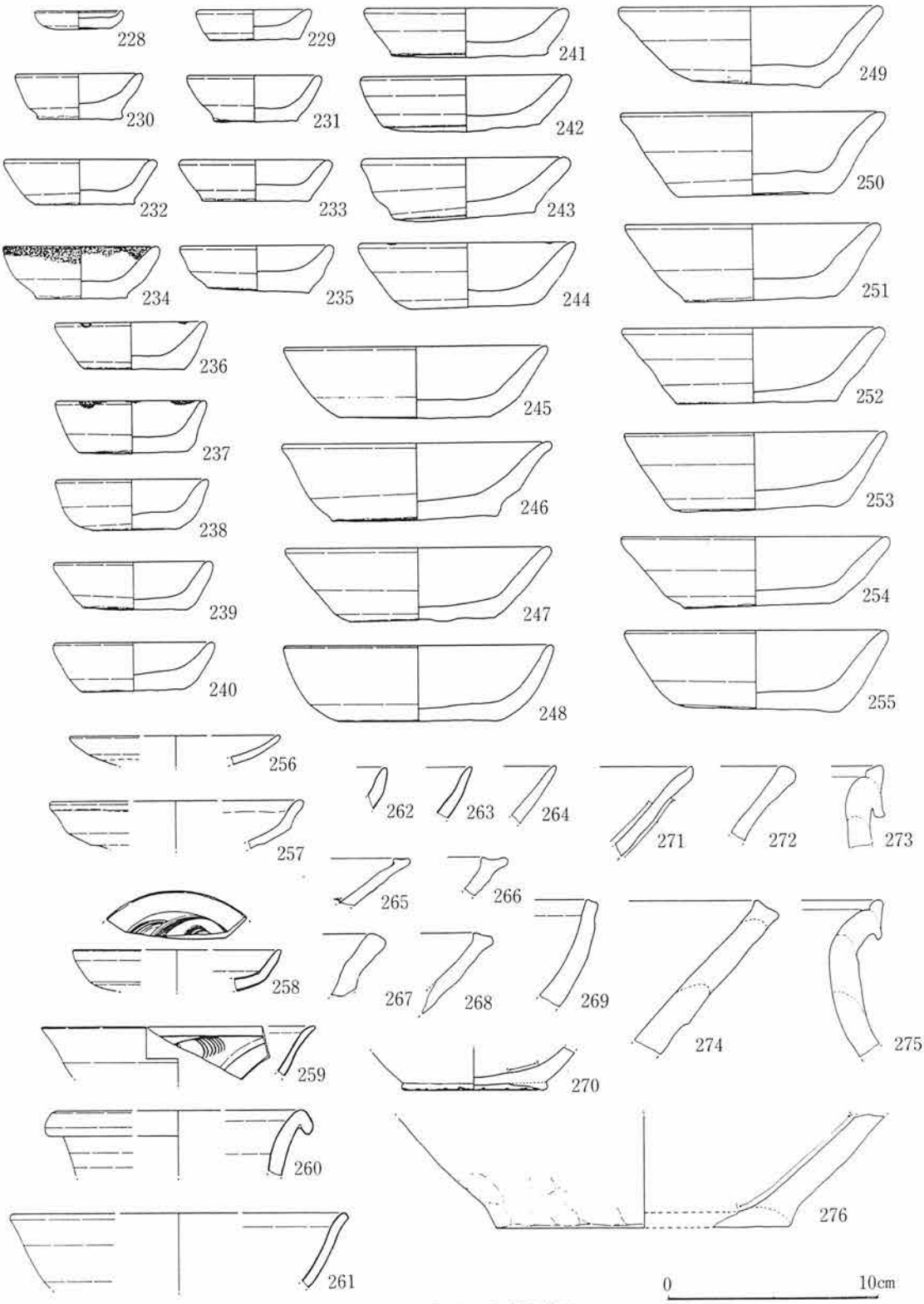
256は明代の白磁小皿。小片である。上層出土。

257は瀬戸灰釉小皿。釉は口唇部にのみかかる。破損後に火を受けている。上層出土。

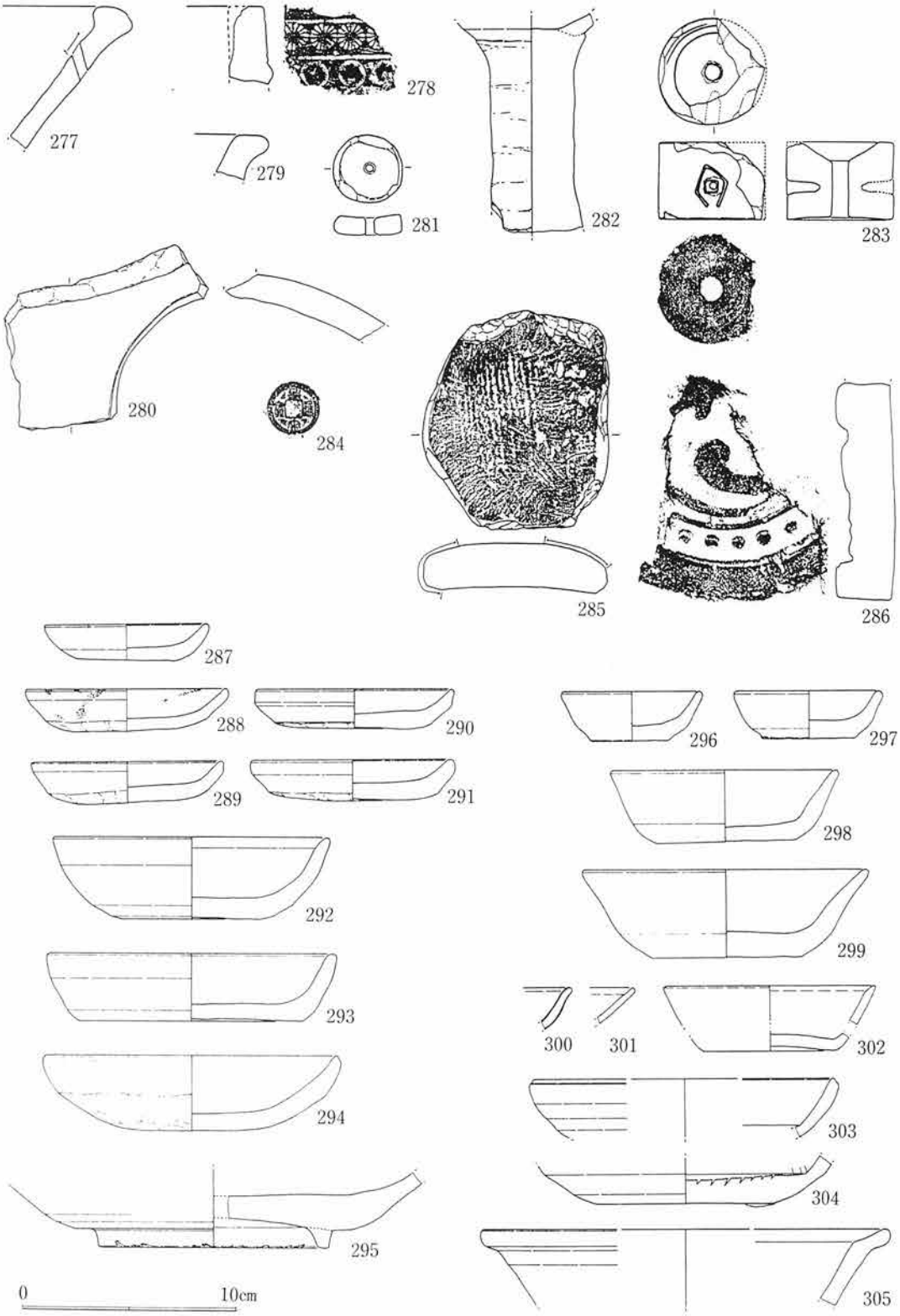
258・259・261は青磁。258は内底面に櫛描画花文を配す小皿。259・261は碗である。261は無文。いすれも上層から出土した。



第20図　井戸 3 出土遺物(2)



第21図　井戸 4 出土遺物(1)



第22図　井戸４(2)・５・７出土遺物

260は白磁四耳壺小片。上層出土。

262・263は天目茶碗。262は口唇部が茶褐色、それ以下が黒褐色を呈す。瀬戸窯産。263は漆黒色を呈し、素地は灰色緻密、舶載品と思われる。ともに上層出土である。

264は瀬戸灰釉平碗。釉は黄色味を帯びる。上層出土。

265は瀬戸窯産の卸し皿。口縁部内外面に灰釉を塗る。上層出土。

266は常滑窯産の捏ね鉢。小片である。上層出土。

267～269は瀬戸窯産のもの。267は行平であろうか。内外面に灰釉をかける。上層出土。268は折縁皿か。内外面に灰釉をかける。上層出土。269は洗であろう。外面の灰釉は剝落している。上層出土。

270・271は山茶碗。同一個体か否かは不明。270の内底面には磨耗痕がみられる。捏ね鉢として使用したものか。下層出土。271は口縁部を除き、内外面とも黒く煤けている。上層出土。

272は山茶碗窯系捏ね鉢。下層出土。

273～276は常滑窯産のもの。273・276は捏ね鉢。274・275は甕である。275のみ下層出土。

277～279は手焙り。277は口縁下に円孔を有す。口縁部内面から体部外面にかけて、二次的な火熱を受ける。最下層出土。278は口縁部外面に沈線をめぐらし、菊花文・連珠文をスタンプする。上層出土。279は土器質で明橙褐色を呈す。口縁部を外方に引き出す特徴的な器形である。最下層出土。

280は土風炉。肩部の破片で、透し窓の一部が弧状に残る。内面はヘラミガキを施し、銀灰色を呈す。上層出土。

281はかわらけ皿の底部を加工した土製品。下層出土。

282は灯明台と思われる。脚部は片手で握って整形した簡単なものである。下層出土。

283は茶臼模造品。長石等を多く含む土で焼き上げ、側面および上面を黒く燻してある。側面には2箇所に把手孔をあける。実際に使用されたと思われ、臼の目は磨耗し消えている。下層出土。

284は北宋銭。皇宋通宝（1039年）

285は瓦片を利用した製品。瓦の凸面周縁が磨耗し、擦痕が多くみられる。錆落し等に使用したのであろうか。上層出土。

286は軒丸瓦。瓦当面に巴と連珠を配す。下層出土。

井戸5出土遺物（第22図287～295）

287～294はかわらけ皿。287・292・293が糸切り底である。

295は渥美窯産の捏ね鉢。高台部に藁の圧痕がつく。内底面に磨耗痕はない。

井戸7出土遺物（第22図296～305）

296～299がかわらけ皿。

300は青磁。小形の碗であろうか。釉は酸化気味で、粗い貫入が入る。

301・302は白磁口禿小皿。

303～305は瀬戸窯産のもの。303・304は卸し皿。305は折縁皿である。

井戸８出土遺物（第23図306～311）

306～308はかわらけ皿。

309は白磁口禿げ小皿。口唇部に黒漆様の付着物がみられる。

301は瓦器質香炉。外面にヘラミガキを施すが、燻されてはいない。沈線区画内に桜の花弁形のスタンプが連続して押される。

311は瀬戸折縁皿。折り返された口唇部は平坦で、体部外面に轆轤調整痕が残る。内外面に灰釉を施釉。

この他に、舶載品の黒釉天目茶碗小片が出土したが、図示し得なかった。

井戸９出土遺物（第23図312～323）

312～317まではかわらけ皿。317は口折れかわらけと称する小皿である。

318は瀬戸天目茶碗。体部片も出土したが接合しなかった。内底部面に黒釉を施釉。高台内の削りは甘く、斜めに一回転削っただけ。ベタ高台に近い。

319は産地不詳の碗。外底面に回転糸切り痕を残し、高台は付け高台。体部との境いは丁寧にナデられ、畳付部には山茶碗同様の籾殻状圧痕がつく。白色微粒子を多く含む胎土で、焼成は堅緻。胎芯部が暗赤褐色、器表が黒灰色を呈す。

320も産地不詳。小片であるが復原径は21cm程となる。体部が直線的で口唇部は平坦に近い。須恵器高台坏に似た器形である。胎土は白色微粒子を少量含み、緻密。胎芯・器表とも灰色を呈す。

321・322は捏ね鉢。321が山茶碗窯系、322が常滑窯産のものである。

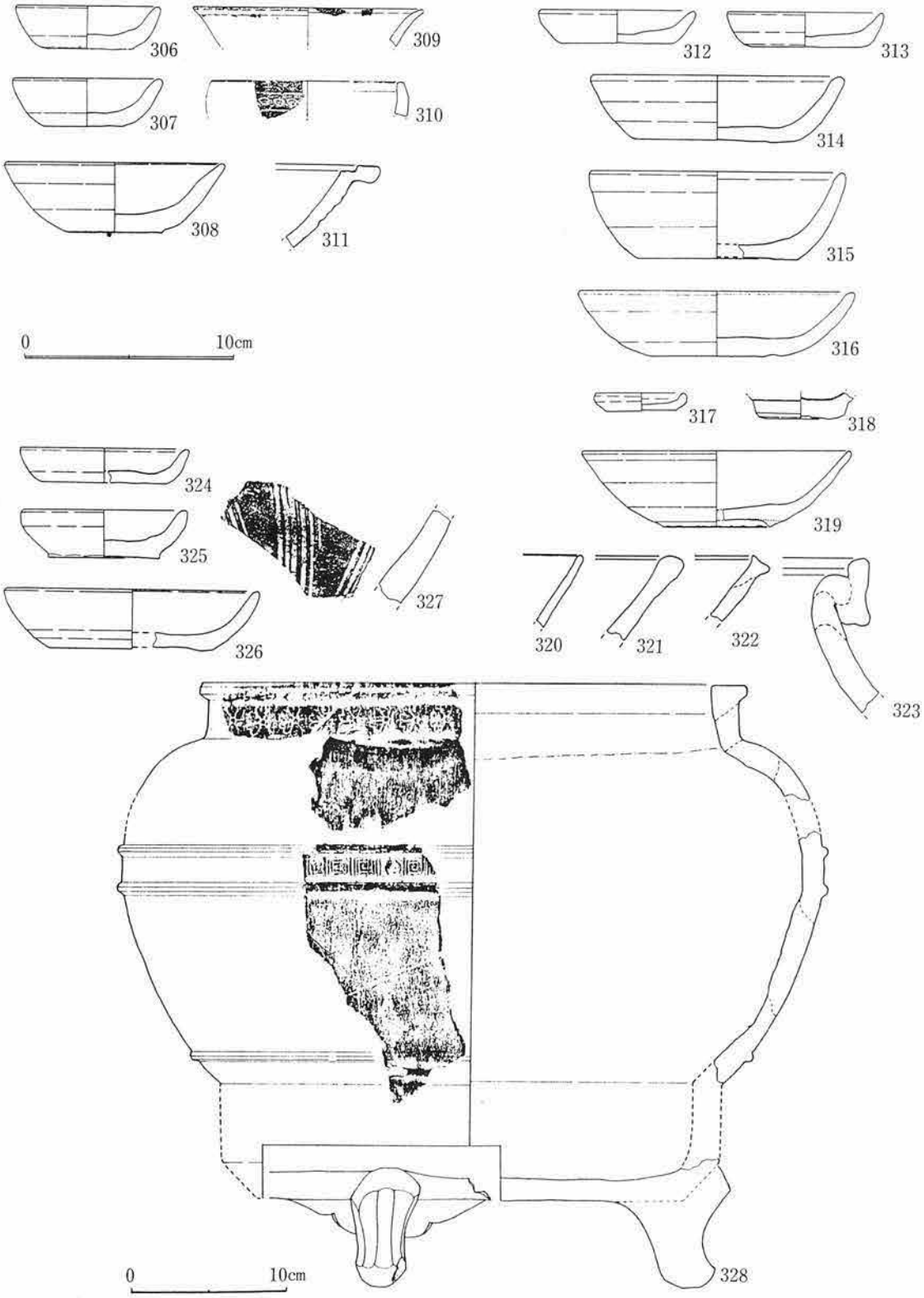
323は常滑甕。器肉は厚く、折り曲げた口縁部が頸部に密着している。

井戸10出土遺物（第23図324～328）

324～326はかわらけ皿。

327は備前窯産の擂鉢。内面に６条単位の櫛目をつける。

328は土風炉。口縁部、胴部、底部の破片が出土し、図上復原したものである。底部と胴部のつながりや器高に誤りがあるかもしれない。頸部に桜花文スタンプ、胴部の隆帯区画内に雷文スタンプを押す。更に、雷文スタプ上には珠文を貼り付けた痕跡がみられる。底部には獣脚に雲形を組みあわせた脚が取りつけられる。口縁部内面から体部外面までヘラミガキを行う。脚部はヘラケズリ後ヘラミガキを施す。内外面とも黒灰色を呈す。なお、本品のみ４分の１縮尺で掲載した。



第23図　井戸８・９・10出土遺物

井11出土遺物（第24図329～338）

329～332はかわらけ皿。完形品はない。

333は瓦器埦。暗灰色を呈し、口縁部のみ灰白色を呈す。

334は瀬戸窯産のもの。皿であろうか。小片である。

335は青磁折縁鉢。体部外面に鎬蓮弁文を配す。

336は瀬戸行平であろうか。小片である。

337は山茶碗窯系捏ね鉢。

338は安山岩製粉びき臼。下臼である。破損後に火を受けた痕跡がある。最下層から出土した。

井戸12出土遺物（第24・25図339～390）

339～378がかわらけ皿。364までが上層出土。365以下が下層出土である。上層と下層ではかわらけ皿のタイプに大きな差がみられる。掘り直しが行われた結果かもしれない。上層出土のかわらけ皿には体部の外反するタイプを含むが、下層出土のものは内彎するタイプばかりである。

379は瀬戸窯産のもの。平碗であろうか。口縁部は屈曲して外反する。灰釉を施釉するが、外面体部は無釉である。小片であるが大振りの碗と思われる。上層出土。

380～382は常滑窯の製品。380が捏ね鉢。上層出土。381・382が甕口縁部である。381が下層出土。382が上層出土である。

383・384は青磁碗。ともに下層から出土した。383は外面に鎬蓮弁をもち、高台畳付部以外に施釉する。384は内底面に草花文を配し、同様に高台畳付部以外に施釉する。

385は転用硯であろうか。常滑甕の体部片内面に磨耗痕がみられる。下層出土。

386は木製品。扇骨である。骨は5枚残存し、いずれも先端を欠く。骨を束ねる丸棒は直径約4㎜で両端には約3㎜づつとび出している。漆を塗付した形跡はみられない。下層出土。

387は手焙りであろうか口縁部および外面をヘラミガキ、内面は粗雑なヘラナデで仕上げる。外面を燻した形跡は特にみられないが、内面は火熱を受けて細かいひび割れが多く入る。残存部が小さく全形状は不明、輪花形であるかもしれない。下層出土。　388は常滑窯産の捏ね鉢。小片からの復原である。外面体部下半に縦方向の木口状工具調整痕がみられる。内面中位の指頭圧痕より下では使用による磨耗が顕著である。下層出土。

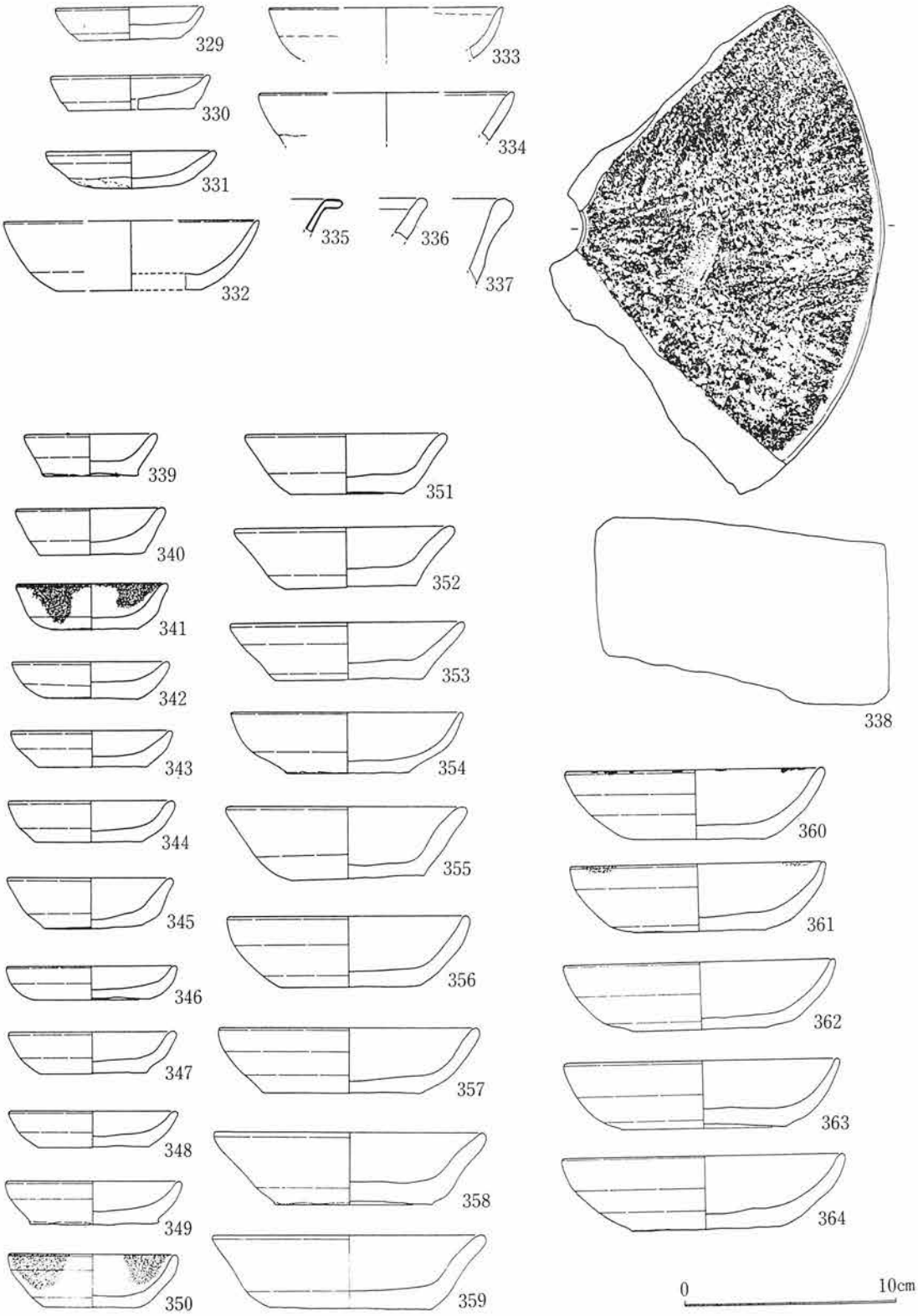
389は安山岩製粉びき臼。下臼と思われる。目は磨耗し消滅している。上層出土。

390は滑石製鍋。鍔部先端は欠損。残存部から推察すると大形のものと思われる。上層出土。

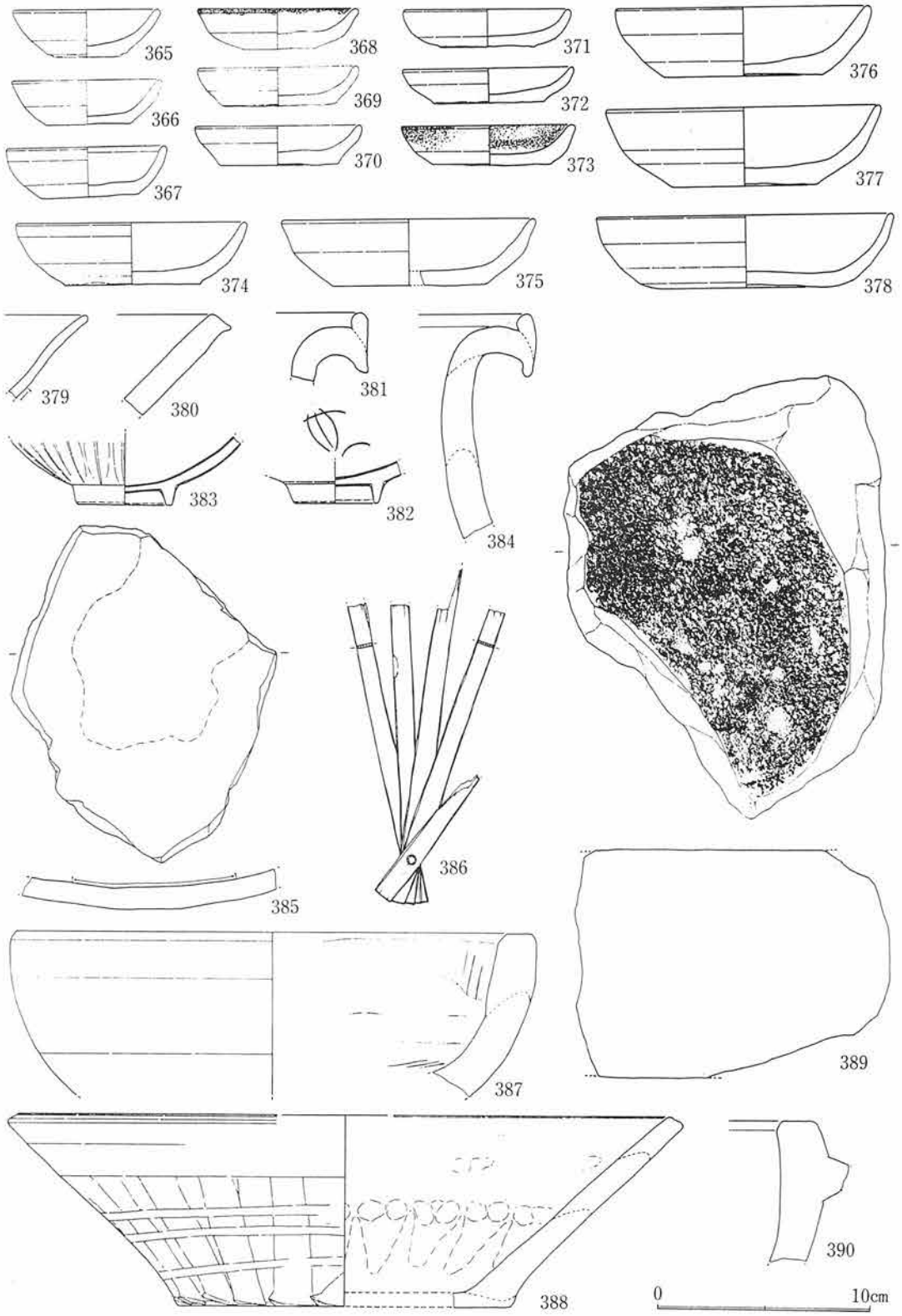
土壙3出土遺物（第26図391～397）

391・392は青磁碗、皿。

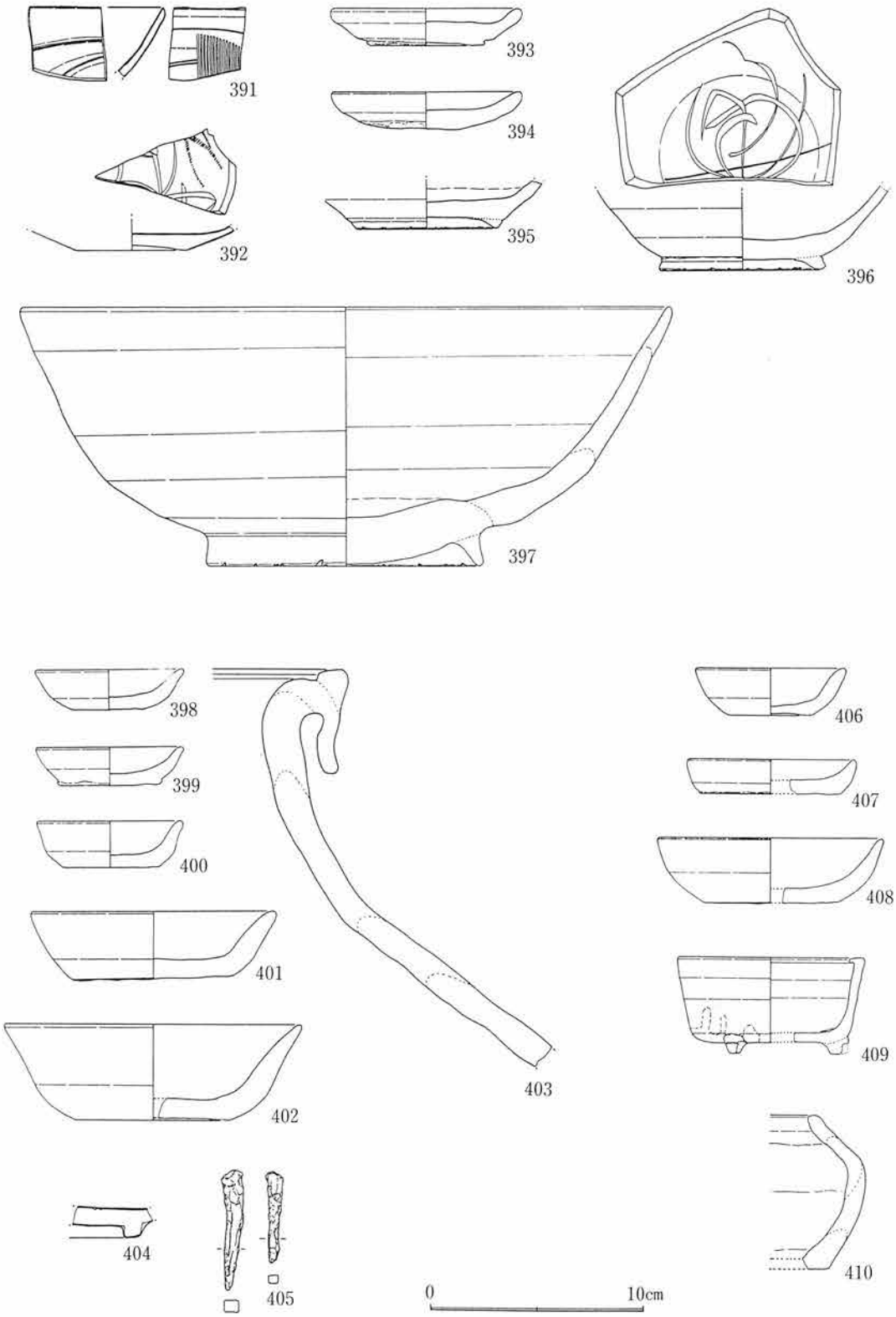
393・394はかわらけ皿。393は底部回転糸切り。内底面は軽くナデツケを行っている。口唇部が肥厚し、器形に歪みがみられる。394は手捏ね成形である。



第24図　井戸11・12(1)出土遺物



第25図　井戸12出土遺物(2)



第26図　土壙３・４・５出土遺物

395・396は山茶碗。395は内面に磨耗痕がみられる。高台の貼りつけは粗雑。396は器肉が厚く、高台もしっかりしている。内底面にヘラによる落書き様の文様をつける。

397は産地不詳の捏ね鉢。胎土中に白色微粒子を含み、堅緻。胎芯は暗赤褐色ないし器表と同じ黒灰色を呈す。高台部にはヘラによる刻み目が入る。内底面は磨耗している。

土壙4出土遺物（第26図398～405）

398～402はかわらけ皿。

403は常滑甕。縁帯は下方に大きく垂れ下がる。

404は青磁。鉢であろうか。全面に釉がかかる。

405は鉄釘。

土壙5出土遺物（第26図406～410）

406～408はかわらけ皿。いずれも小片である。

409は瀬戸香炉。体部内外面に薄く灰釉がかかる。脚は台形状に粘土を貼った簡単なものである。

410は常滑無頸壺。片口が付くようである。

土壙6出土遺物（第27図411）　測図可能なものは、かわらけ皿1点だけである。

土壙7出土遺物（第27図412～420）

412～416はかわらけ皿。412は灯明皿。414・415は薄手タイプの皿である。

417は瀬戸仏華瓶。完形品である。底部を回転糸切りし、体部外面に薄く灰釉をかける。

418は常滑甕口縁部片。

419は平瓦。凸面に格子目の叩き痕を残し、側面には竹管による円文を押している。

420は北宋銭。元祐通宝（1086年）以外は判読不可能である。

土壙8出土（第27図421～426）

412～423はかわらけ皿。

424.青磁無文碗。高台部は露胎。内底面に一条の沈線をめぐらす。土壙5出土の破片と接合。

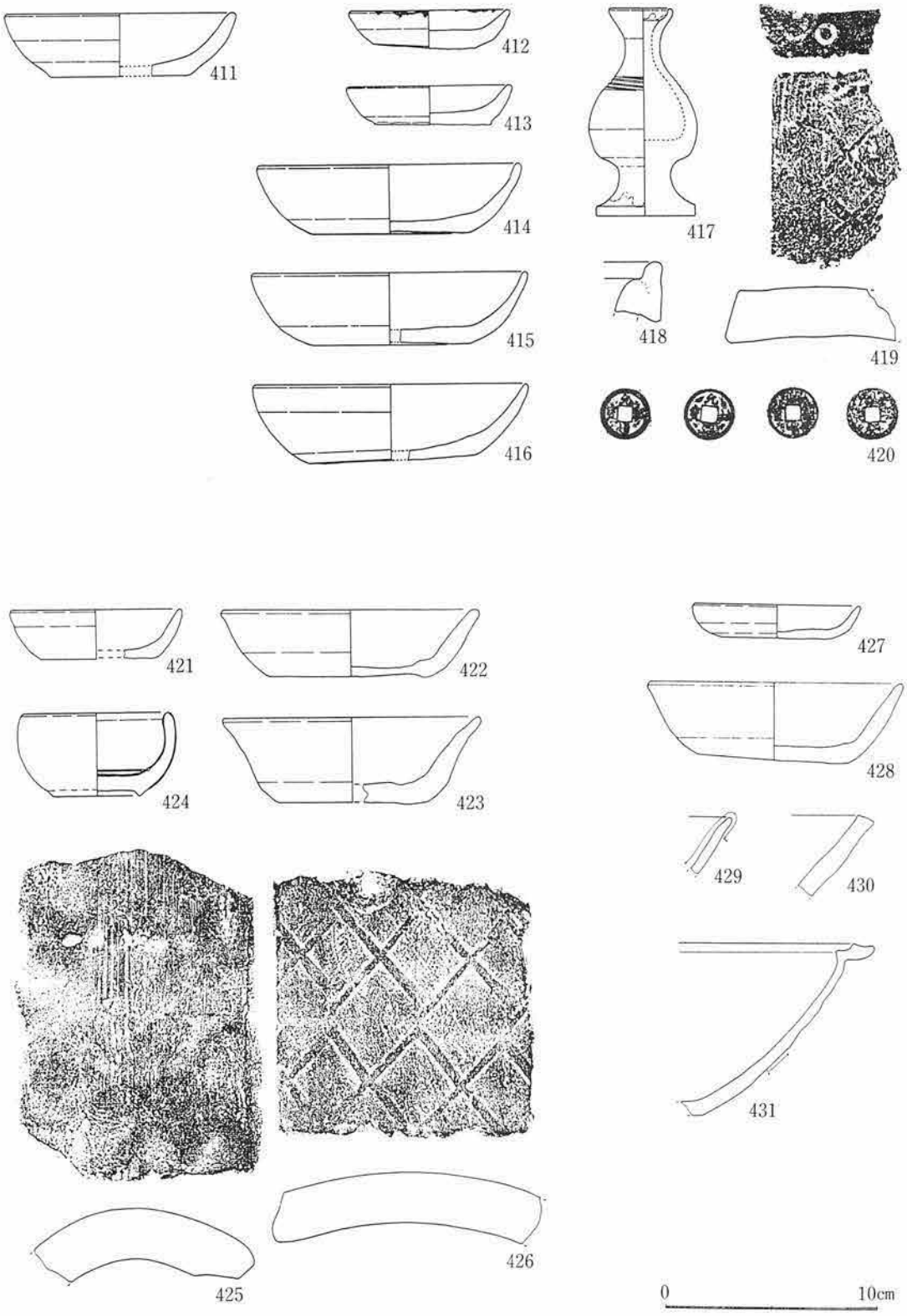
425・426は瓦。425が丸瓦。426は平瓦である。

土壙9出土（第27図427～431）

427・428はかわらけ皿。

429は瀬戸窯産のもの。碗であろうか。口縁部外面と内面に灰釉がかかる。

430は瀬戸折縁皿。内面および体部下位まで灰釉が刷毛塗りされる。土壙5出土の破片と接合。



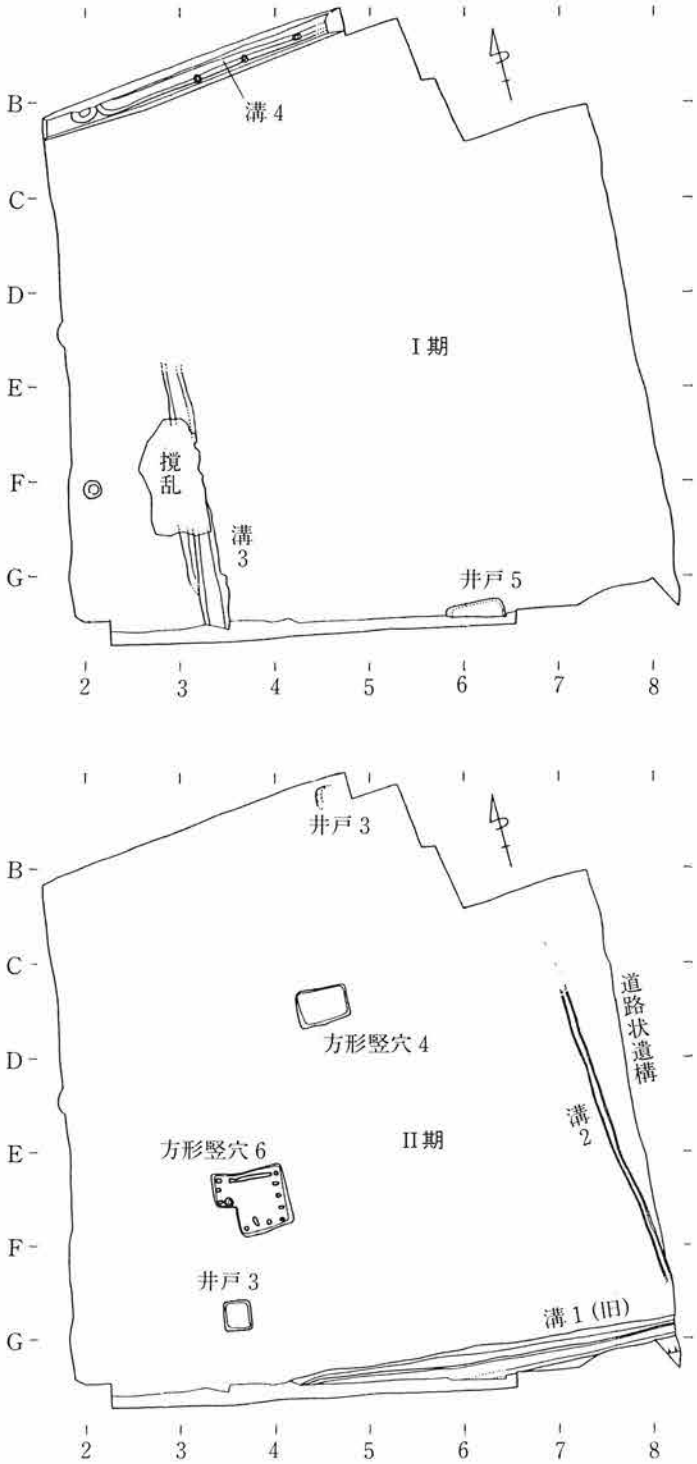
第27図　土壙6・7・8・9出土遺物

第五章　まとめ

遺跡地の地理的条件をみると、金沢から鎌倉府内へ通じる六浦路に面し、幕府、永福寺、勝長寿院といった頼朝ゆかりの遺跡と至近距離にある。『吾妻鏡』に記されるように、当該地域は開府以来、御家人や北条氏被官らの居宅が営まれ、調査地点もそうした一画であったことは想像に難くない。重複する多数の柱穴群が当時の状況を示唆してくれるが、残念ながら建物の規模、配置、時間的に変遷といった問題に関しては不明といわざるを得ない。ここでは、掘立柱建物以外の遺構を整理・検討し、調査地点の生活空間の変化を追ってまとめとしたい。

まず、遺構相互の切り合い関係と検出面、出土遺物を参考に、全体を4期に分けた。(第28・29図)遺物の年代観については、河野真知郎氏の論考(「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』第21号、1986)に依った。

Ⅰ期　第2面下を生活面とする。土壙3、井戸5、溝3が該当する。井戸5の存在から、遺跡範囲はより南側に広がっていたと判断される。なお、第3面で検出された溝4は、出土遺物からみて、

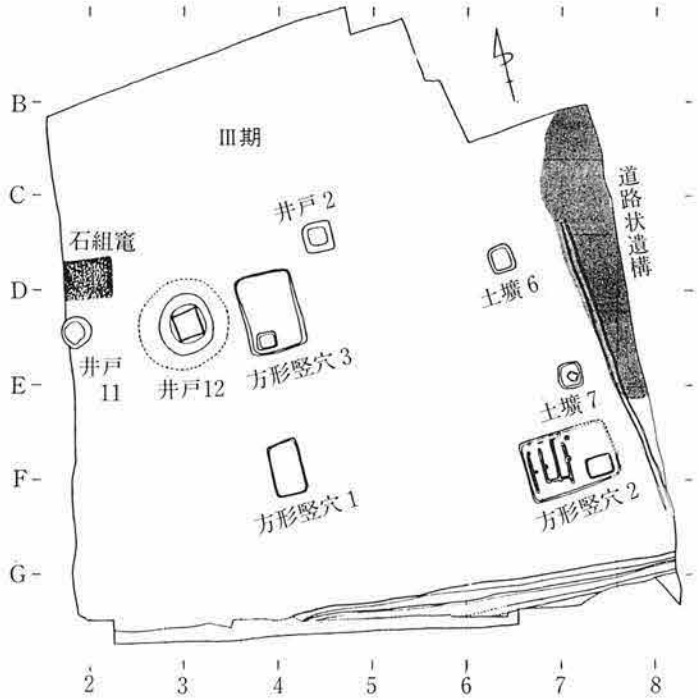


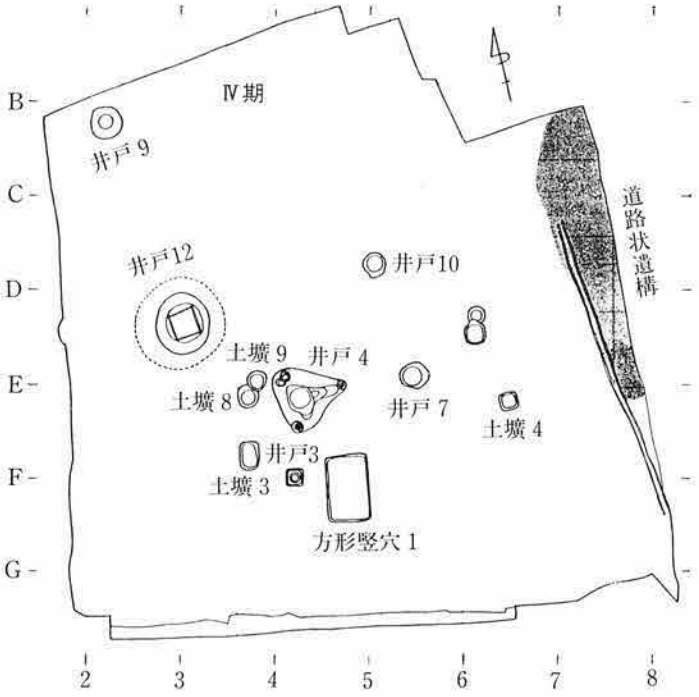
第28図　Ⅰ・Ⅱ期遺構図

当期と大きな時間的隔たりはないと思われる。短期間のうちに大規模な地業が行われたのであろう。出土遺物の特徴から、13世紀中頃～後半代に比定される。

II期　第２面を生活面とする。側溝（溝２）を伴なう道路状遺構と溝１（旧）によって遺跡地の東辺と南辺が限られる時期である。方形竪穴４・６、井戸３・13が当期に属す。当期以降の地業層や遺構覆土中からは、瓦の出土が目立つようになる。瓦は永福寺の寛元宝治年間（1244～48）の大修造、弘安十年（1287）の改修の際に使用されたものと同じであり、遺跡地へは二次的に運びこまれたものである。当期の年代は、およそ13世紀末～14世紀前半代と考えられる。

III期　第１面を生活面とした時期。道路状遺構は補修されて残るが、側溝（溝２）は機能を無くして埋没する。溝１（新）はII期より北側に寄せて掘り直されている。方形竪穴２・３・５がL字形に配置され、井戸は大形で深い３基が掘られる。同時に３基が使用されたか否かは速断しかねるが、出土遺物からは井戸11が最も早く埋められたようである。土壙は道路状遺構近くにみられる。土壙７が墓とすれば、屋敷地内に存在したことになり、当時の墓制上貴重な





第29図　III・IV期遺構図

例といえよう。更に当期で特筆すべき事は、石組竈の検出である。市街地の調査で炉址の検出例は増えているが、中世期の竈は関東地方においては類例をみない。井戸11・12と近接して設置されている点に注目される。当期の年代は、大体14世紀中頃～15世紀前半に比定されよう。

Ⅳ期　生活面の大部分は、後世の削平を受けて消失する。この時期にも道路状遺構は残ったと思われる。遺跡地南辺を限る溝１は、既に埋没してしまったのだろうか。当期まで下る遺物の出土はない。方形竪穴は１軒南辺寄りに作られる。土壙は１・４・５・８・９がこの期に属すが、土壙１は井戸８廃棄後のものである。井戸は小形で浅いものが目立つ。大形の井戸では、前期の井戸12が掘り直されて使用されている他、三角形状の掘り方をもつ井戸４がみられる。小形の井戸や土壙の分布のあり方は、どこか無秩序な観を呈す。また、井戸９・12内部より多量に出土した扁平の伊豆石は、礎石建物の廃絶を示しており、前期とは遺跡の内容が大きく変ったようにみうけられる。当期の年代観は、およそ15世紀中頃～16世紀初頭と考えられる。

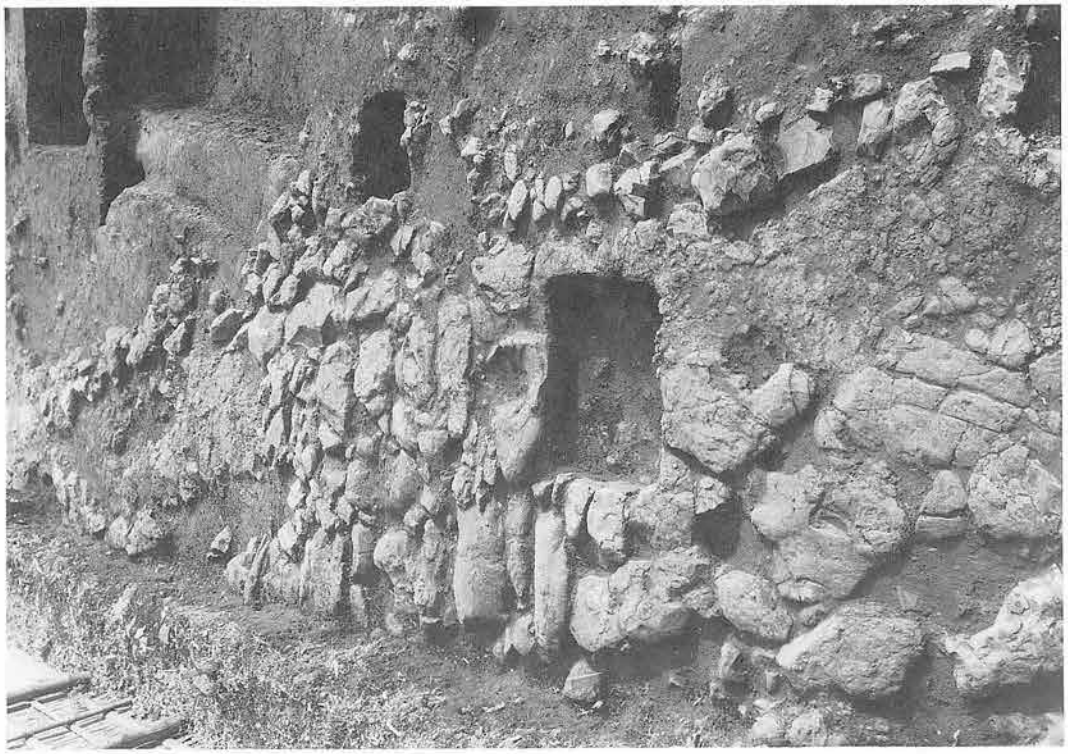
以上、非常に大雑把ではあるが、遺跡地の推移の一端を知ることができた。掘立柱建物を含めた遺構配置、丈尺の制による街割りなどの問題は、今後の課題としたい。

図版 1

▲調査地点遠景

調査地点全景▼

図版 2



▲道路状遺構（北から）

▼同（南から）

▲溝 1（東から）

▲溝 2（北から）

▼溝 3（南から）

▼溝 4（東から）

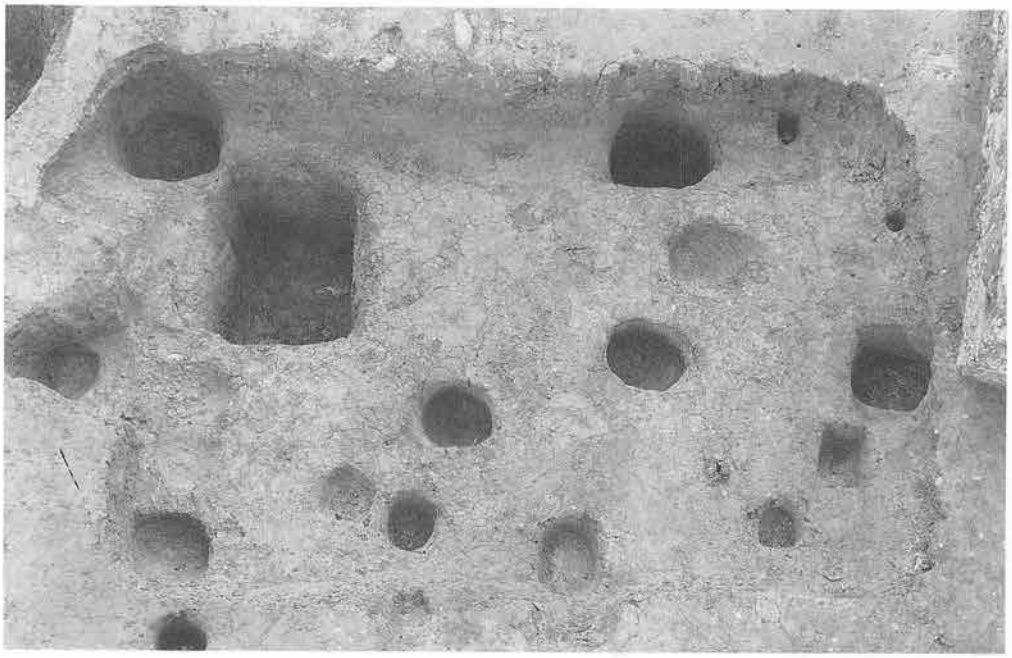
図版 4

▲石組竈

▼同・部分

◀方形竪穴 1

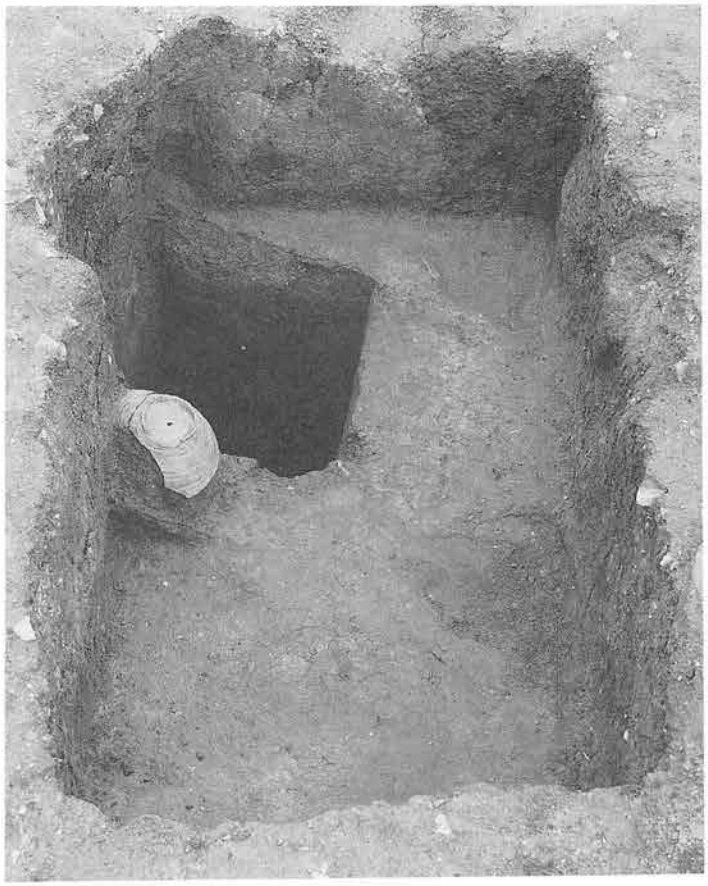
▼方形竪穴 3



図版 6

▲方形竪穴 4

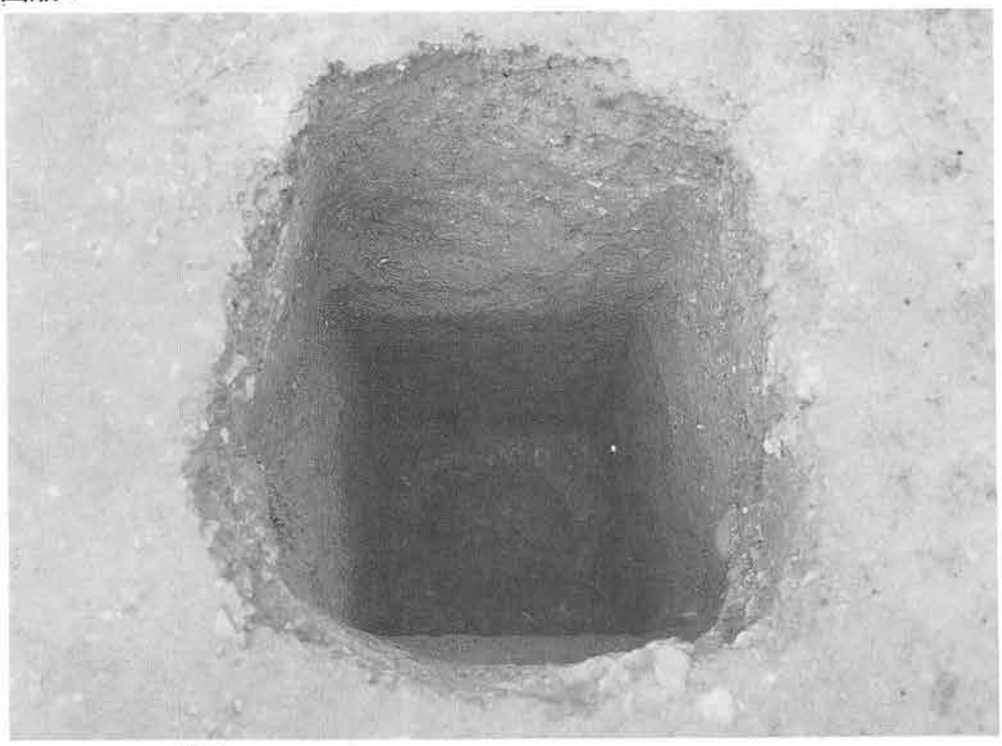
▼方形竪穴 6



◀方形竪穴5

◀同・部分

図版 8



▲井戸 1

▼井戸 2

図版 9

◀井戸3

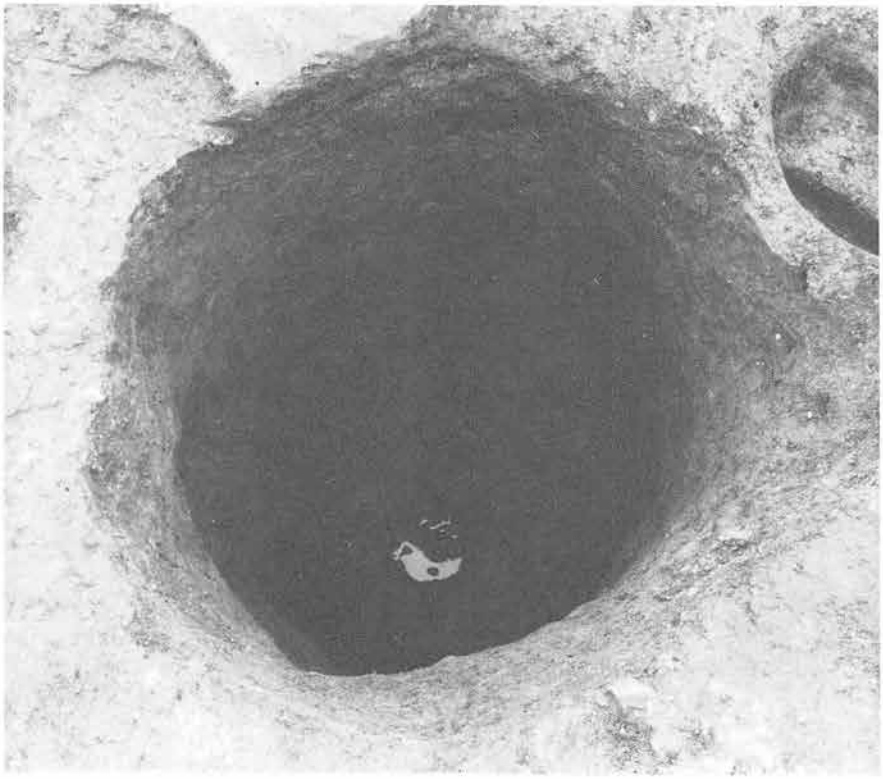
◀井戸4

図版10

▼井戸 5

▼井戸 7

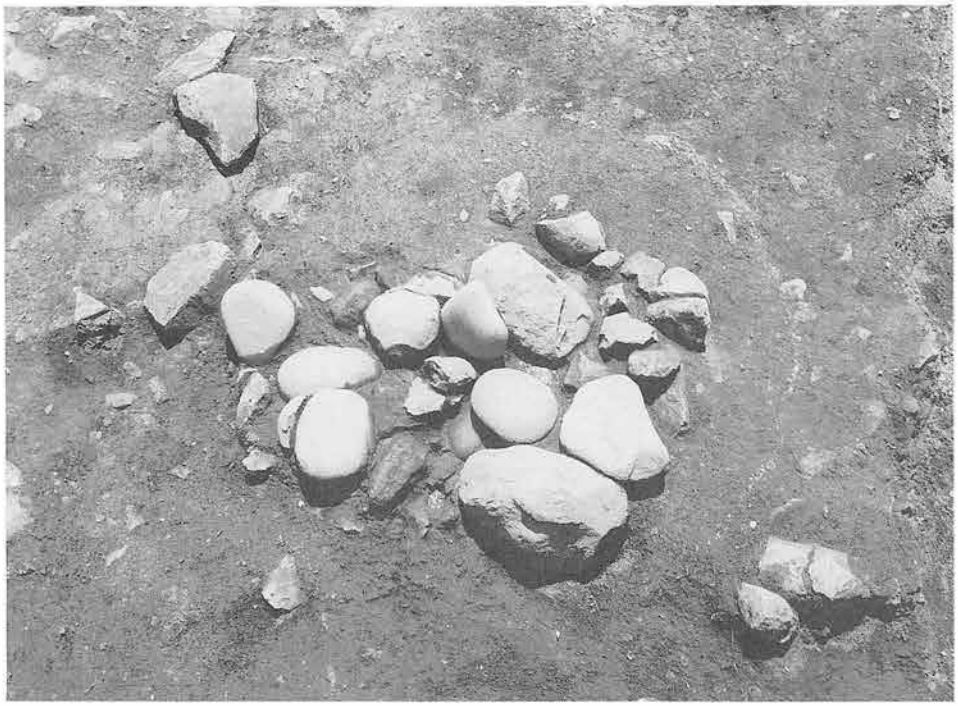
図版11



◀井戸8

◀井戸10

図版12

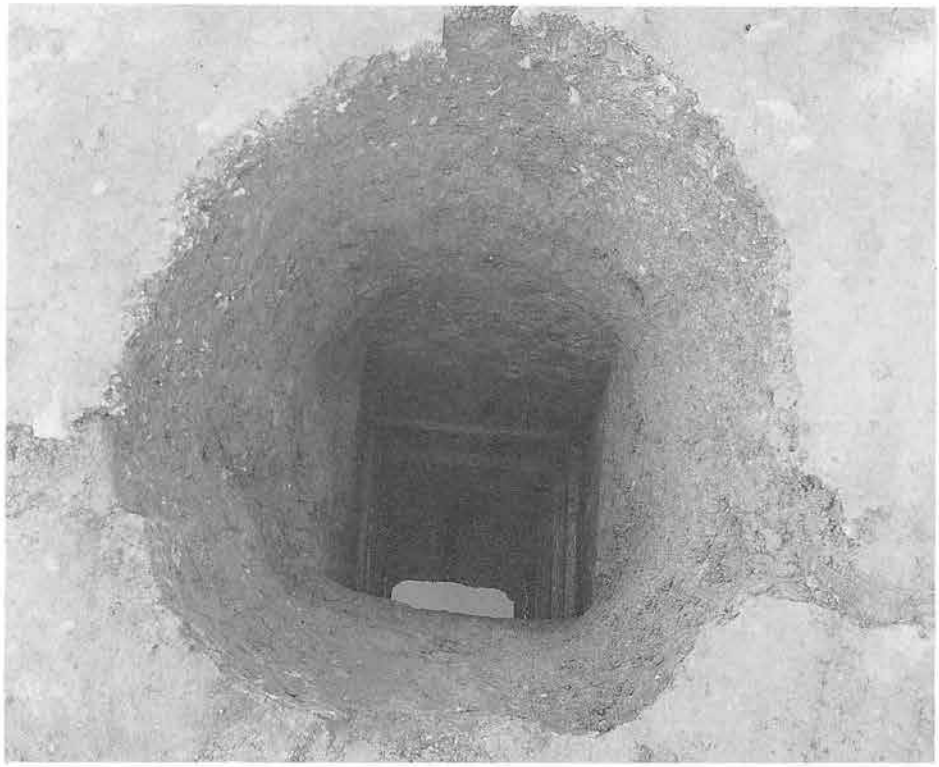


▲井戸９　調査前

▼同・完掘状態

図版13

◀井戸11



◀井戸12

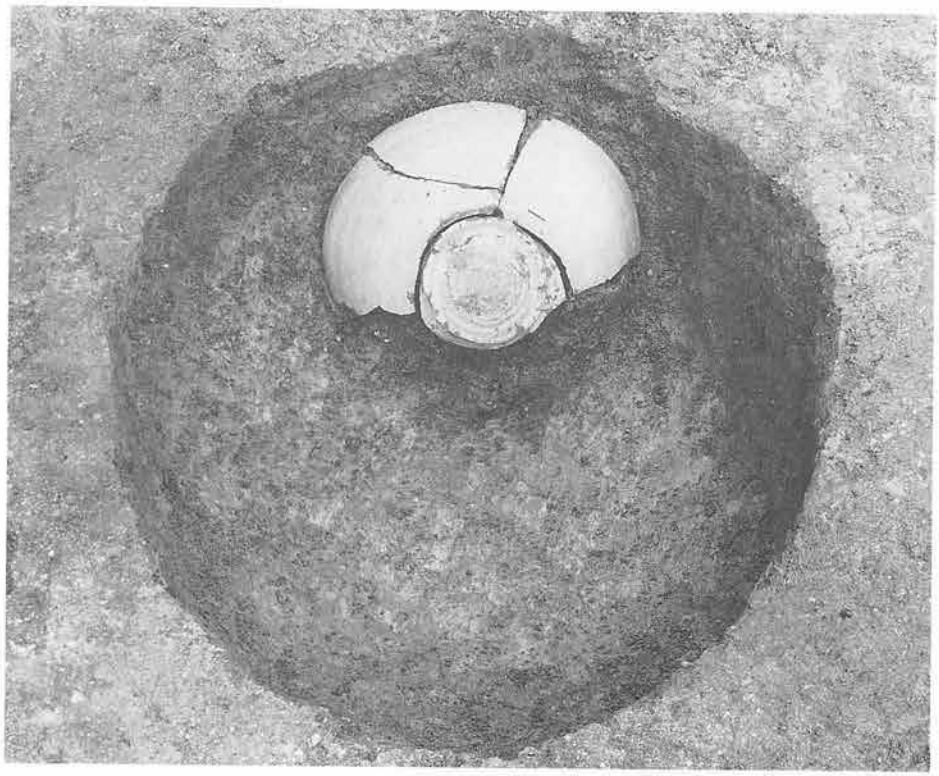
図版14

◀井戸12・井戸枠

◀土壙1

図版15

◀土壙2



◀土壙3

図版16

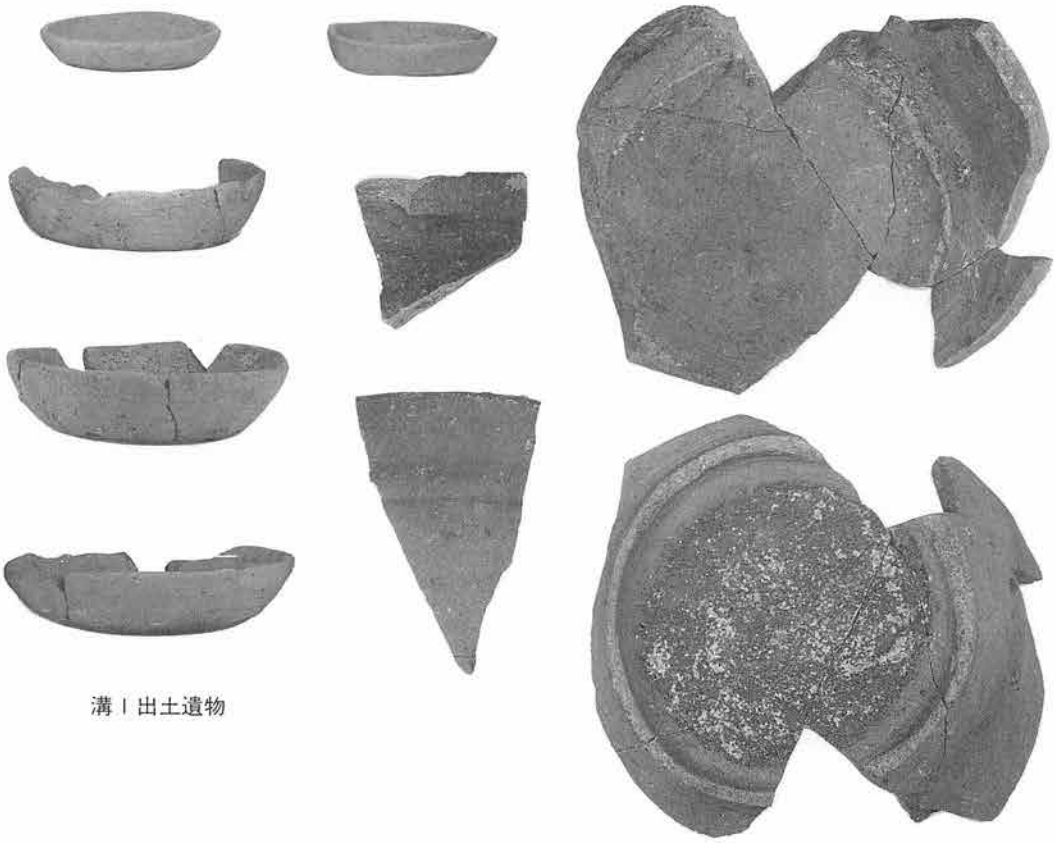
◀土壙5

◀土壙6

◀土壙7

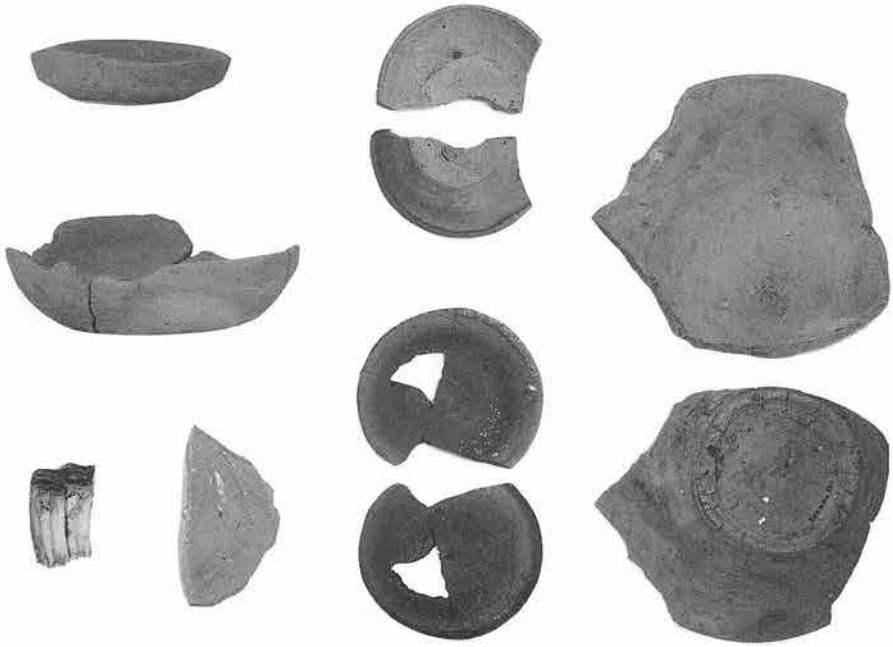
▼土壙8

図版18

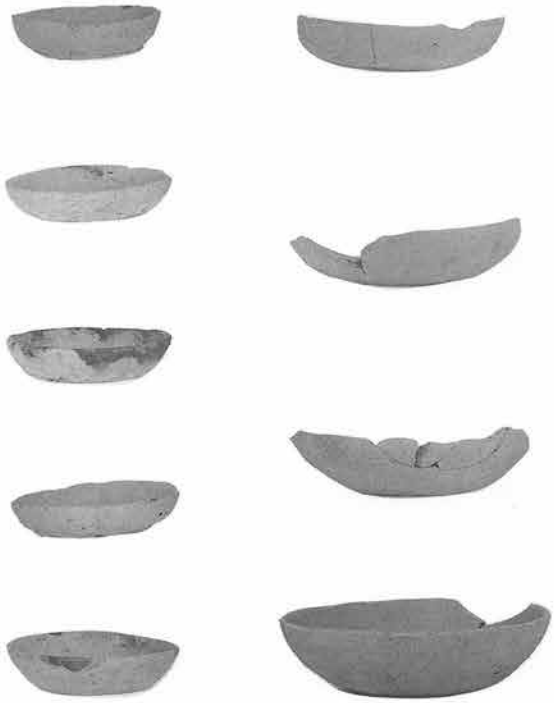


溝１出土遺物

▼溝３出土遺物



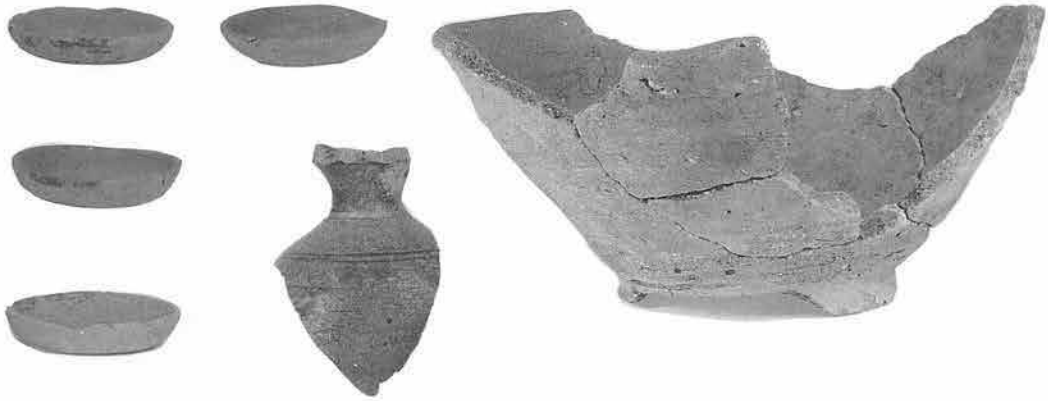
▲方形竪穴1出土遺物



◀方形竪穴2出土遺物

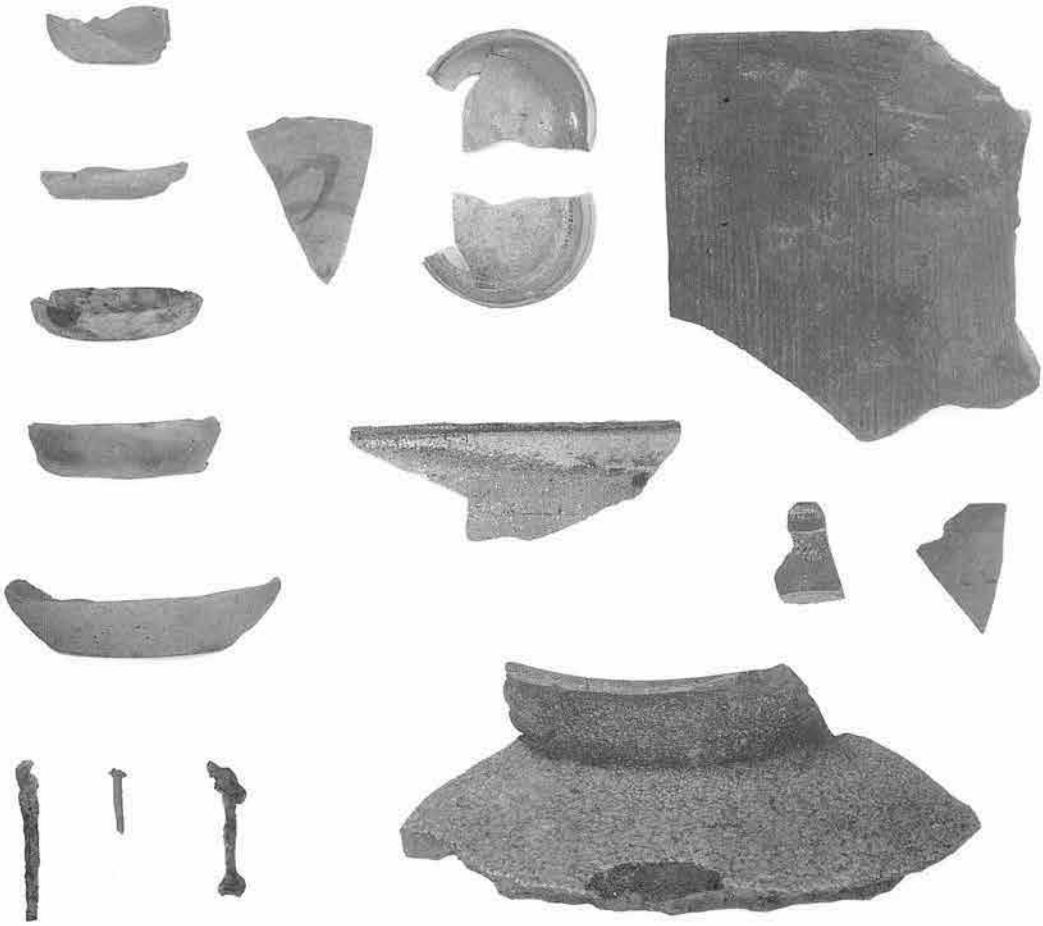
▶方形竪穴3出土遺物

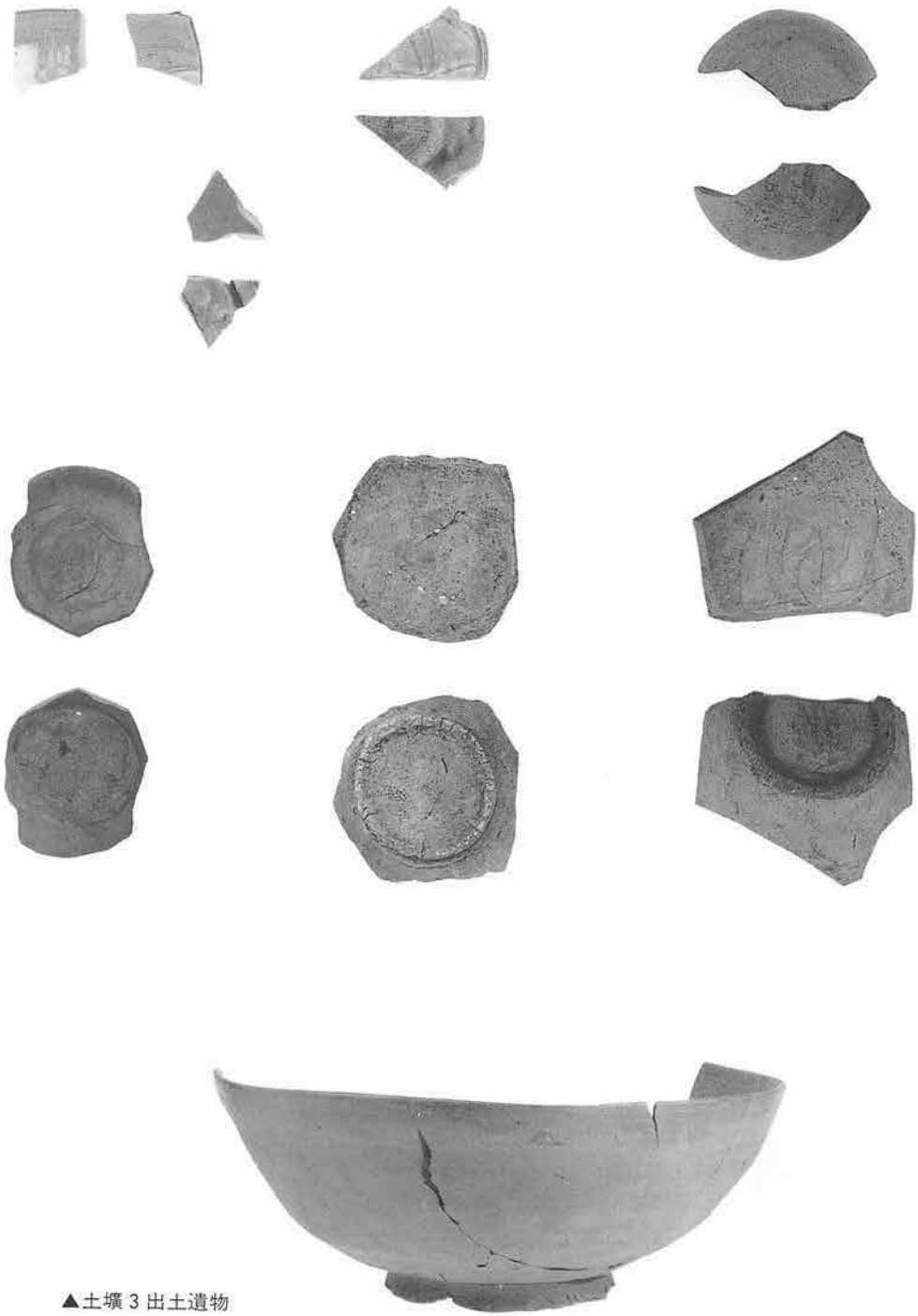
図版20



▲方形竪穴 5 出土遺物

方形竪穴 6 出土遺物▼





▲土壙 3 出土遺物

図版22

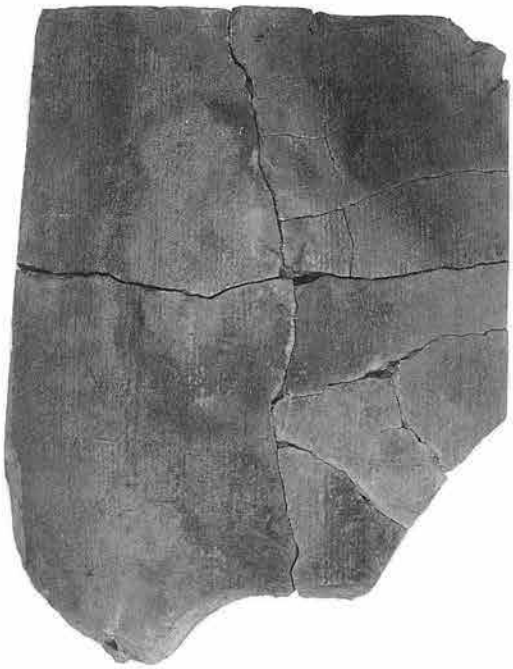
▲土壙 5 出土遺物

▲土壙 7 出土遺物

◀土壙 8 出土遺物

▲土壙 9 出土遺物

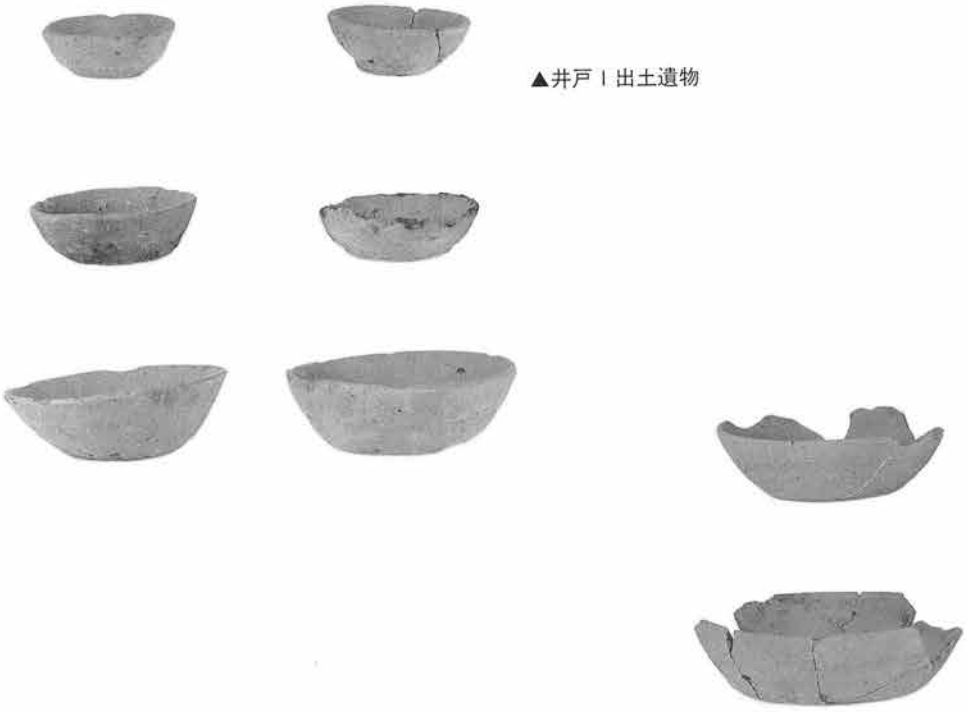
▲石組竈出土遺物



◀石組竈奥壁

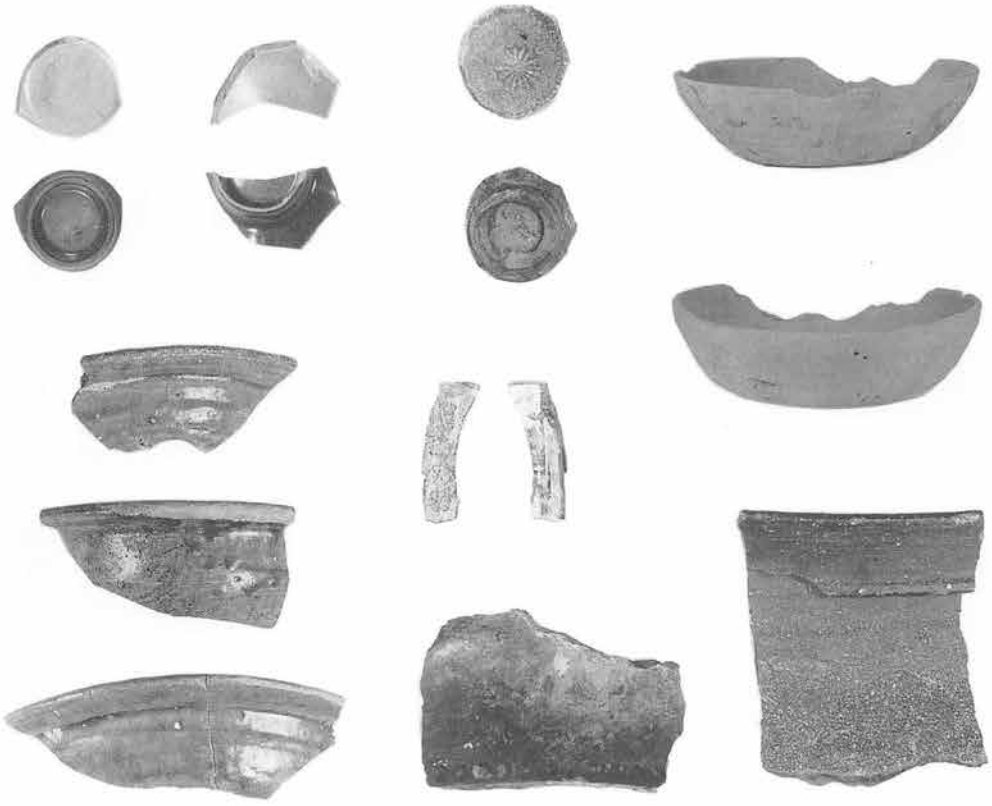
▲石組竈床面

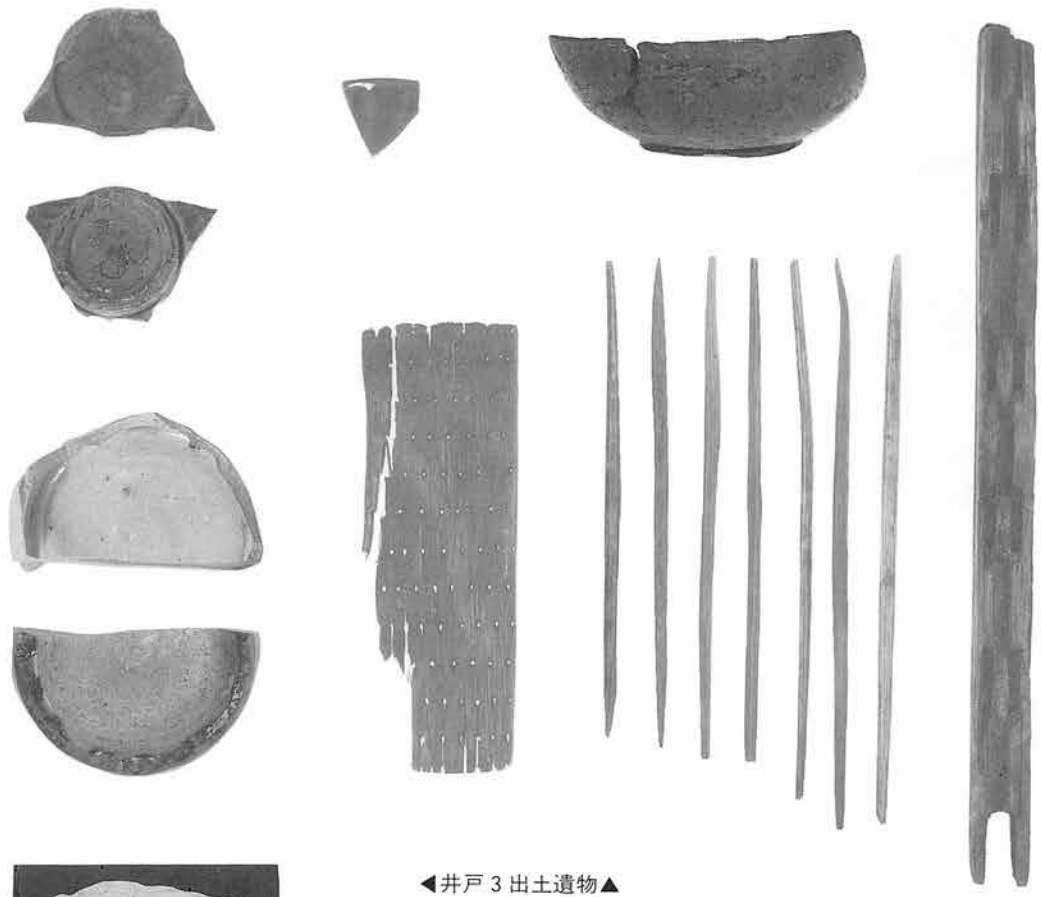
図版24



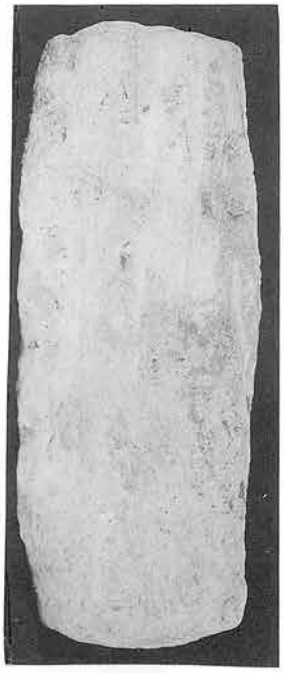
▲井戸１出土遺物

井戸２出土遺物





◀井戸 3 出土遺物▲



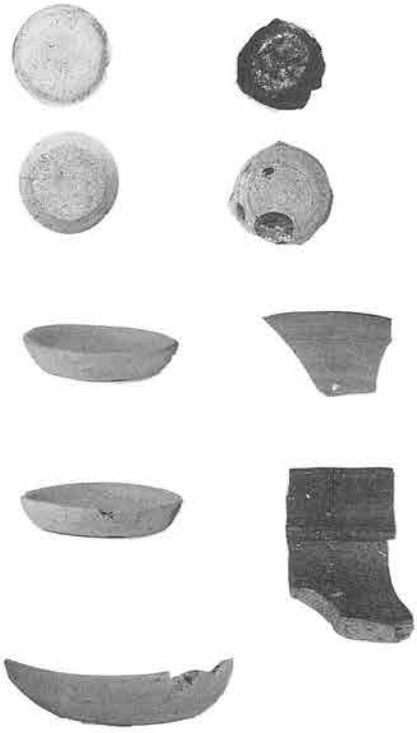
◀井戸 4 出土 茶臼模造品

図版26

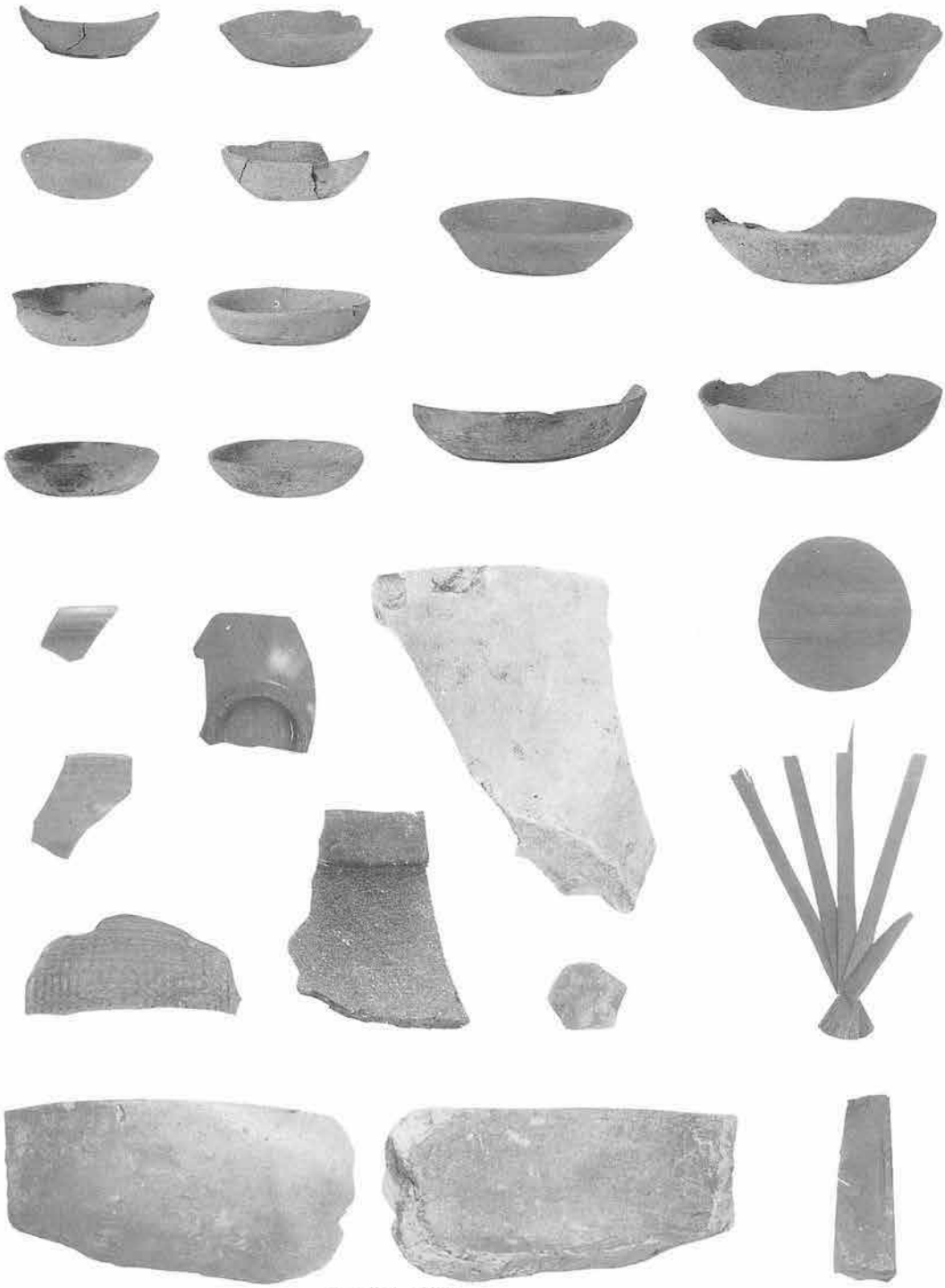
◀井戸5出土遺物

▶井戸8出土遺物

▼井戸9出土遺物



井戸10出土遺物▼



▲井戸12出土遺物

2．北条時房・顕時邸跡（No.278）

雪ノ下一丁目265番３

例　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下一丁目265番3における店舗併用住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、北条時房・顕時邸跡遺跡発掘調査団と併行して実施した。

3．本書の執筆、図版作成及び編集は原廣志・田代郁夫・佐藤泉・継実・土屋浩美・高野麗・中島充雄が行なった。

4．調査体制は以下のとおりである。

担当者　　松尾　宣方

本　文　目　次

第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… (97)

第２章　検出した遺構 …… (97)
(1)層序 …… (98)
(2)南北溝Ⅰ～Ⅲ期 …… (98)
(3)南北溝Ⅲ期下の遺構 …… (99)

第３章　出土した遺物 …… (103)
(1)舶載陶磁器類 …… (103)
(2)国産陶磁器類 …… (104)
(3)かわらけ …… (104)
(4)骨角製品 …… (105)
(5)石製品 …… (105)
(6)銅製品 …… (105)
(7)漆製品・木製品 …… (106)

第４章　まとめ …… (113)

挿　図　目　次

図１　調査地点の位置と周辺の調査地 …… (95)
図２　調査区配置図 …… (96)
図３　南北溝Ⅰ期 …… (100)
図４　南北溝Ⅱ・Ⅲ期 …… (101)
図５　南北溝下の遺構 …… (102)
図６　陶磁器類、白かわらけ他 …… (108)
図７　かわらけ …… (109)
図８　骨角・石・銅製品 …… (110)
図９　漆製品 …… (111)

図10　漆・木製品……(112)
図11　絵巻物より見た溝の様子……(114)

図　版　目　次

図版1　全景（東から）……(115)
図版2　1.調査前の状況（東から）　2.南北溝Ⅰ期（東から）……(116)
図版3　1.南北溝Ⅰ期（南から）　2.南北溝Ⅱ期（北から）……(117)
図版4　1.南北溝Ⅰ期の地覆材及び礎板（西から）　2.南北溝Ⅱ・Ⅲ期（東から）……(118)
図版5　1.南北溝Ⅱ・Ⅲ期（南から）　2. 同最下層の状況（南から）……(119)
図版6　1.控貫に焼印された四菱文　2.控貫に刻まれた三鱗文……(120)
図版7　出土遺物(1)……(121)
図版8　出土遺物(2)……(122)
図版9　出土遺物(3)……(123)
図版10　出土遺物(4)……(124)
図版11　出土遺物(5)……(125)
図版12　出土遺物(6)……(126)
図版13　出土遺物(7)……(127)
図版14　出土遺物(8)……(128)

1.雪ノ下一丁目265番-3地点遺跡(調査地点)
2.雪ノ下一丁目271番-1地点遺跡
3.雪ノ下一丁目273番-　地点遺跡
4.雪ノ下一丁目274番-2地点遺跡
5.雪ノ下一丁目233番-9地点遺跡
6.雪ノ下一丁目371番-1地点遺跡
7.雪ノ下一丁目372番-7地点遺跡
8.雪ノ下一丁目374番-2地点遺跡
9.雪ノ下一丁目369番他地点遺跡
10.雪ノ下一丁目419番-3地点遺跡
11.雪ノ下一丁目432番-2地点遺跡
12.雪ノ下一丁目395番他地点遺跡
13.小町二丁目276番他地点遺跡
14.小町二丁目279番-2他地点遺跡
15.小町二丁目39番-6他地点遺跡

図1　遺跡位置図

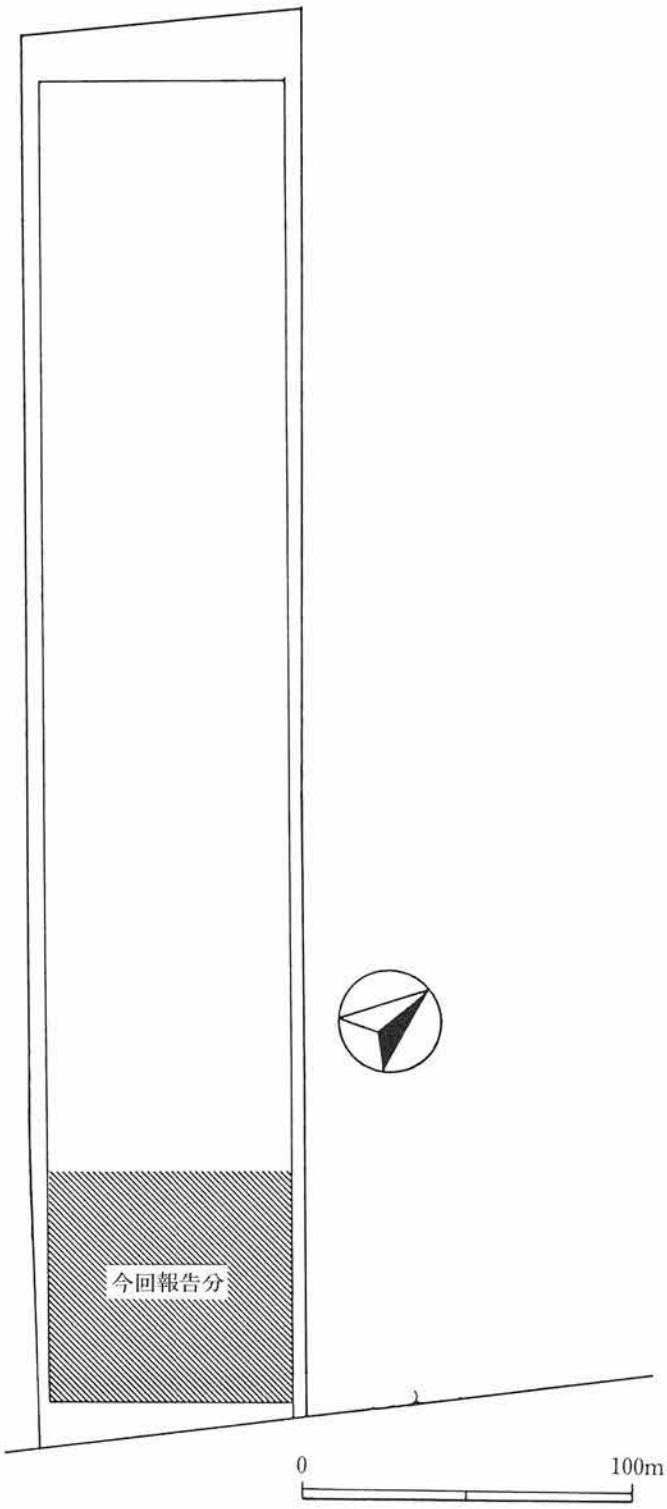


図 2　調査区配置図

第１章　調査地点の位置と歴史的環境

北条時房・顕時邸跡No.278遺跡は鎌倉市雪ノ下一丁目265番３に所在する。鶴岡八幡宮に程近く若宮大路に接してその西側に位置する。

若宮大路について吾妻鏡壽永元年（1182）３月の条は次のように記している。

「十五日乙酉。自鶴岳社頭至由比浦直曲横而造詣往道。是日來雖為御素願。自然渉日。而依御臺所御懐孕御祈故。被始比儀也。武衛手自令沙汰之給。仍北條殿己下各被運土石云々。」

こうして造られた若宮大路は宗教的中核としての八幡宮とともに中世都市の中心を形づくっており、大路八幡宮近くはまた政治の中心ともなっていった。特に北条氏執権政治の頃にはその東側に幕府や北条得宗家の屋敷などが集中している。

当遺跡はこうした大路東側と向い合って位置しており、当時の政治的枢要の地であったと思われ「北条時房・顕時邸跡」といわれている。

北条時房・顕時邸跡とされる区域での調査は、図１-２・３・４・５で実施されている。このうち３[註(1)]・４[註(2)]遺跡では若宮大路西側の側溝にあたる木組の護岸をもつ大溝が検出されている。また図１-７[註(3)]・８では同じく大溝が検出されており大路両サイドに同規模の木組護岸の南北大溝が構築されていたことが判明している。

註

(1)　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目273番ロ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』鎌倉市教育委員会　1988年

(2)　原廣志「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目274-２地点発掘調査報告書」同発掘調査団　1988年

(3)　馬淵和雄「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目371番１地点発掘調査報告書」同発掘調査団鎌倉市教育委員会　1985年

(4)　馬淵和雄「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目372番７『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書１　昭和59年度発掘調』鎌倉市教育委員会　1985年

第２章　検出した遺構

調査区全体では、現地表下70～90cm前後の第１面から中世基盤層である黒褐色土の地山上面である第５面までの５枚の生活面が確認され、各面から地桁建物、掘立柱建物と囲炉裏、溝、土壙、井戸などと共に、多数の柱穴が検出された。

これらの遺構群のうち、本書では若宮大路側の調査区東端域で検出された、大路側溝にあたると考えられる南北溝の範囲内に限って報告するにとどめ、調査区全測図（原因者負担分調査区も念めた範囲）を割愛した。そのため遺跡全体について不明瞭な結果になってしまったが、この点については、原因者分担分の調査報告書に併せて収録することにし、本項では御容赦いただきたい。

従って、以下に述べる検出した遺構は、大路側溝にあたる南北溝についてのみ説明を加えることにしたい。

(1)層序

調査区の全面にわたって、現地表面下70～90cm程度まで近・現代の客土層が入っており、これを除去するとすぐに中世包含層に達する。この包含層は暗褐色砂質土である。これを掘り下げて現われる第1面は、大小の土丹塊を築き固めて構築された土丹版築面が認められた。

第2面は半人頭大の土丹塊と白い貝殻粉を含んだ砂が撒かれて構築されているが、比較的締りがなく、築き固められた程ではない。

本報告分の調査区範囲内では、第2面以下は南北溝Ⅰ～Ⅲ期までの厚い堆積土に覆われていて、しかも地山を掘り込んでかなり深いところまで認められた。南北溝Ⅰ～Ⅲ期覆土は、Ⅰ期がかわらけを多量に含んだ砂利層で、上部は削平を受けていた。この層の下には厚さ30cm程度の灰色砂層と暗茶灰色粘質土との上下層から構成されたⅡ期の覆土が認められる。Ⅲ期は地山をも掘り込んで作られた溝であり、土層堆積の観察から溝中にたまった土砂を漉った痕跡を窺い知ることができ、この覆土は上層がⅡ期溝を構築した際、削り取られていた。

(2)南北溝Ⅰ～Ⅲ期

南北溝Ⅰ期（図3、図版2-1・3・4-1）

掘り方は断面が箱形を呈し、確認面からの残存する深さは約40cmである。掘り方底面の両側縁に沿って杙穴をもつ地覆材が据えられている。これが溝枠の基部構造となり、その間隔は推定芯々296cm程である（地覆材がずれている為）。この地覆材は、1本が長さ393cm、幅11cm前後、厚さ8cm程であり、芯々50cm程の間隔で長さ14cm前後、幅5cm程の杙穴が穿たれている。両端部は半分の杙穴になる。地覆材間の継目部分（図版4-1）やその中央には、1～3枚の長めの礎板や土丹塊（泥岩塊）などが敷かれていて、沈下を防止している。さらに両地覆材の平行関係を維持する目的で、随所にこれを挟み込むように杭が打ち込まれている。地覆材の外側からは側壁として幅35cm前後、厚さ3cm程の長い板材があてがわれていた。

なお、南北溝Ⅰ期の上部で、この溝材とは異なる地覆材が検出されている。このことは、もう一時期新しくなる溝が存在するのか、またはⅠ期の修復時における地覆材であったのか、今後の調査の課題であろう。

南北溝Ⅱ（図4、図版4-2・5-1）

掘り方は断面が箱形を呈し、確認面からの残存する深さは30cmであるが、底面の両側縁は溝状に一段低く掘り込まれており、そこに地覆材が置かれている。地覆材は東側が良好な遺在状態を示していたが、西側では殆んどが抜取られていて、わずかに調査区南壁で確認できたに過ない。しかもかなり振れた位置に見られたので、両地覆材間の距離を断定することができなかった。東側の地覆材は、1本が長さ396cm程で、幅10～12cm、厚さ5～7cmである。長方形に掘り込まれた杙穴は、芯々で約50cmの間隔で穿たれており、長さ12～14cm、幅4cm程で、両端部は半分程度の杙穴をもつ。地

覆材下には沈下防止のための礎板や土丹塊が敷かれ、さらにズレを防ぐための杭が内側（西側）のみ打ち込まれている。地覆材の外側には側壁になる長い板材があてがわれている。
地覆材は南北溝Ⅰ期とほぼ同一規格の用材を使用している。

南北溝Ⅲ（図４、図版４-２・５-１）

本期の溝材は南北溝Ⅰ・Ⅱ期と基本的にはほぼ同じ構造をもつが、この基本構造に加えて、内側への倒壊を防ぐ目的のために、控えをとった遺構が検出されたことである。以下には、溝枠の構造説明とともに控材の様子についても若干触れたい。

溝は掘り方底面の両側縁と中央を溝状に掘り凹め、両側縁に沈下防止の土丹塊や礎板を敷いた後、地覆材を据えて、内側にのみ杭を打ち込んでいる。地覆材間の芯々距離は約275cmである。地覆材は１本分の長さが320cm以上で、幅10cm前後、厚さ６cm前後である。枘穴は芯々で約56cmの間隔であり、その長さは12cmで、幅３・４cmである。枘穴には束材の枘部分が残るものがあり、これは枘穴の間隔でそれぞれに束材が立てられていた証拠であろう。[註1]さらに言うならば束材の上端には底面のものと同じような葛材が載っていたと思われる。

次に控材について述べるが、この中で控材の各部材の適切な名称が分らないため、控貫や控横木といった用語を使用した。この点、先学の方々からの御教示を賜わりたい次第である。

控材は溝掘りの両肩口の外側に検出されているが、特に西側で発見されたものは遺存状態が極めて良好であった。控材の構造は、側壁をなす羽目板や、束材に枘穴を開けて控えをとった東西位の控貫があり、それと直角方向に組手仕口で継ぐ控横木がある。さらに控貫と控横木の交差する直近の内側には控杭を打ち込む。控貫は長さ185cm以上、幅10～12cmの角材を用いており、これには線刻の三鱗文や焼印の梅花文や花菱文などが認められた。控横木は長さ345cm以上で、やはり角材を使用している。控えを取った同じ構造をもつ大路側溝の例が大路東側の雪ノ下一丁目371番１地点（図１-６）で検出されており、また雪ノ下一丁目271番ロ地点（同図-３）では倒壊を防ぐために内側に梁（突張り）を施していた。このような溝の構造はまさしく『蒙古襲来絵詞』安達泰盛邸門前に描かれた溝や『北野天神縁起』菅原是善邸門前にある溝と良く似ており、当時の大規模な溝の典型であったようである。

控材検出面と同一レベルで、大型の礎板と土丹塊が105cm間隔で検出されている。

(3)南北溝Ⅲ期下の遺構

南北溝期下の状況は、溝の東側では、大路に沿って走る幅60cm、確認面からの深さ20cm程の南北が調査区外に延びている溝を検出した。さらに70～100cm東で大型の礎板をもつ柱穴がこの溝に平行して確認された。一方、東側では若宮大路と思われる３枚以上の土丹版築面が検出されている。

これらの遺構よりもさらに古い時期の遺構が、大路に対して直交していない図５の東西方向に走る溝であった。覆土中からは遺物が出土していないので時期決定はできないが、重複関係やその覆土の様相から見て、本地点で最も古い一群に属する遺構であろう。

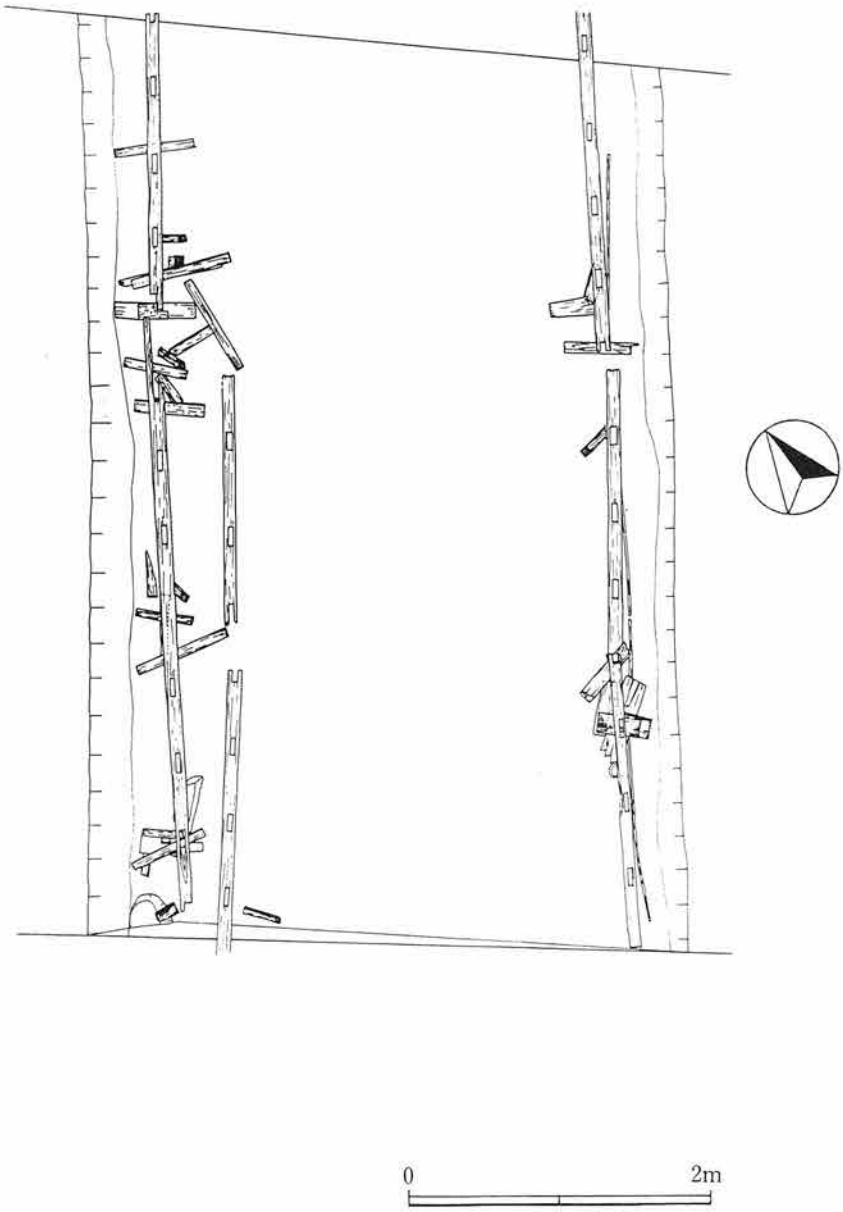
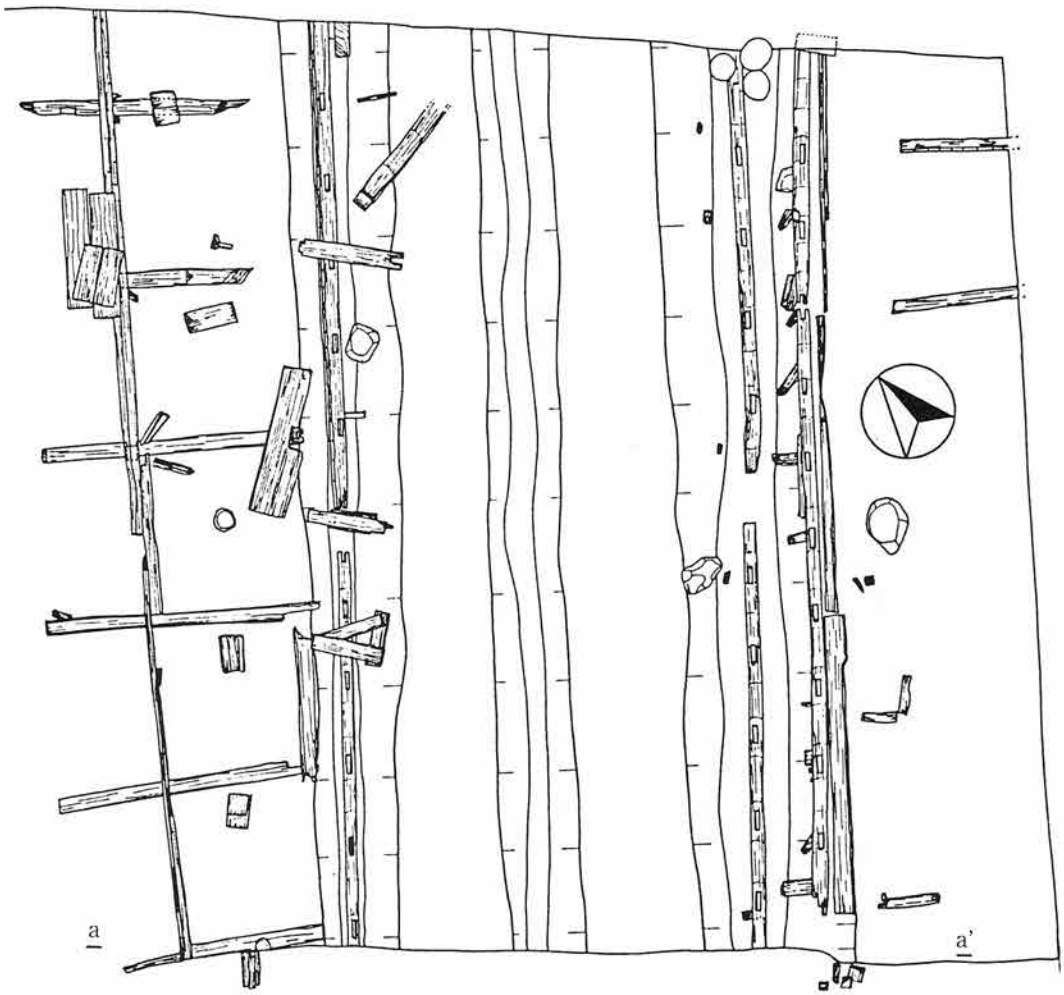
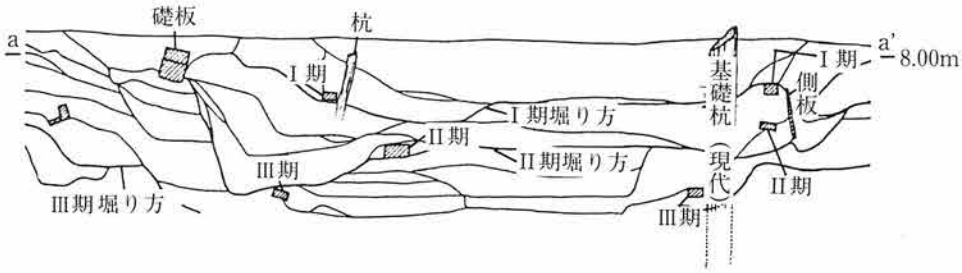


図 3　南北溝 I 期





0 2 m

図 4　南北溝 II・III 期

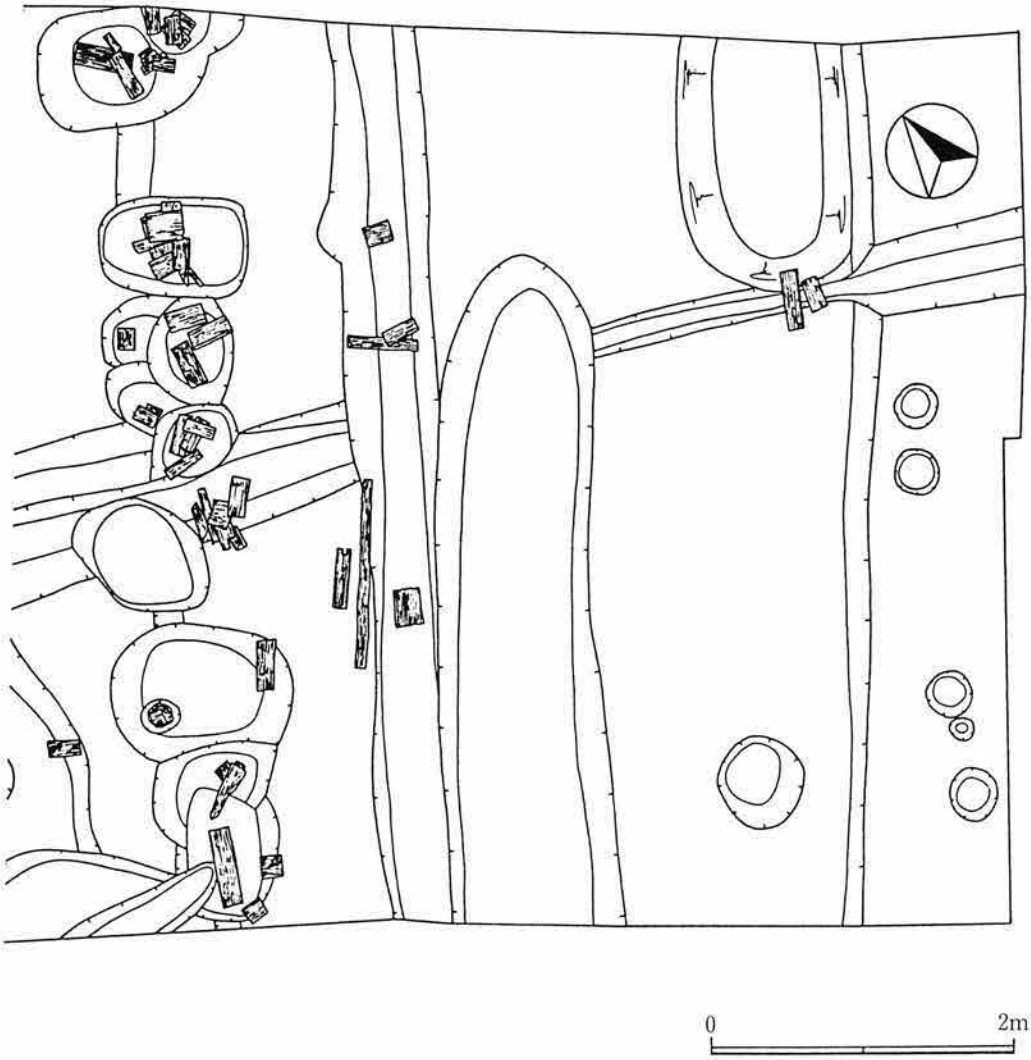


図 5　南北溝下の遺構

第３章　出土した遺物

(1)　舶載陶磁器類（図６、図版７）

青磁

１は蓮弁文碗である。復元口径11.8cm。口縁部は外反する。素地は灰色を呈し堅緻である。釉は青色を呈する。本報告書対象外調査区４面上出土。２も蓮弁文碗である。素地は灰色を呈し粗い。釉は灰緑色を呈す。対象外調査区第１包含層中出土。３は櫛掻文碗である。素地は灰色で、釉は透明な灰緑色を呈する。地山上ピット63から出土。４は小碗である。口径8.2cm、底径3.0cm、器高4.6cmである。無文で素地は灰白色で粗い。釉は淡緑色で口唇部と高台畳付を除いて厚く施されている。４面から出土。５は蓮弁文碗である。素地は灰色で粗い。釉は灰緑色で気泡が多く高台内は露胎。４面から出土。６は櫛掻文皿である。素地は灰白色で、釉は透明な灰緑色を呈し底部際まで施釉している。内底面に雷光文と弧状文を刻する。地山上出土。７は劃花文碗である。素地は灰色で粘性があり、釉は透明で厚く、高台内は無釉。見込に劃花と櫛掻を配する。南北溝裏込３層中から出土。

青白磁

８は櫛掻文碗である。素地は白色で、釉は透明度が高く高台脇までかけている。高台の削り込みはほとんどない。見込外周に沈線、見込及び内面に櫛掻文が描かれている。３面から出土している。９は合子の蓋である。径4.5cmで、輪花型、頂部に幅の狭い蓮弁（？）を配す。淡青色を呈する。素地は灰白色で堅緻。３面下包含層から出土。10は小壺の身である。素地は灰白色で堅緻。釉は気泡が多く、青白色を呈す。肩部に珠文を配する。３面出土。11は落し蓋か（？）。内面のみ施釉し、外面は露胎。素地は灰白色で堅緻。３面で出土している。12は梅瓶の胴部で牡丹の葉が陽刻されている。素地は灰白色で粘性があり、釉は薄く貫入が多い。３面出土。13は皿で、口縁は輪花状である。内面に花文を施す。素地は白色を呈し、破口に漆継ぎの痕跡がある。釉は淡い水色である。３面出土。

白磁

14～16・18は口兀の皿である。いずれも釉がボテリとかかっている。素地は14、15が灰白色でやや粗く、16は二次焼成のためか灰色でやや粗く、18はやや灰色がかった白色で粘性がある。15は口唇部露胎部に漆様の黒色物が付着している。薄い金属製の覆輪があったのか。各々の法量（口径・底径・器高）は、14は11cm・5.5cm・3.2cm、15は11.9cm・6.8cm・2.9cm、16は11cm・6.5cm・2.4cm、18は９cm・６cm・1.3cmである。14、15は３面、16は３面下、18は３面から出土している。17は合子の身である。素地は灰白色で粗く、釉は、黄白色で透明度は高い。４層下から出土。19は鉢の底部で、口縁玉縁になるタイプであろう。素地は灰白色で、釉はやや青味を帯びた白色である。漆継ぎの跡がみられる。内外面全てに施釉されている。５面上から出土している。

その他

20は褐釉の壺である。素地は淡褐色で粘性があり、釉は緑褐色を呈す。21は瓜型の水注である。

素地は淡紫褐色を呈し緻密。22、23は同一個体と思われ、底部片の方の内面には鉄絵が施される。素地は砂粒や石英粒子を多く含み粘性が強く流文がみられる。内面口縁下より施釉される。3面下出土。

(2) 国産陶器類（図6、図版7）

瀬戸

24は灰釉の小型仏華瓶である。胴部最大径4.4cm、底径3.6cmである。素地は灰白色で細密。釉は脚部中位まで施される。頸部下に4本の沈線が巡る。底部回転糸切り。3面出土。

東播系

25は鉢である。素地は小石を極少量含み砂質である。内面は木口状工具により調整されている。内面磨耗しており揑鉢として使用されたものであろう。南北溝1の覆土中出土。

(3) かわらけ（図6・7、図版7・8）

白かわらけ

26・28・29は白かわらけである。26は所謂「内折」と称するもので、上記いずれも手捏ねである。胎土は26がやや粗く、28は精良、29は石英・長石粒を含む。26は4面下、28は精良、29は石英・長石粒を含む。26は4面下、28は南北溝覆土、29は4面下から出土している。

かわらけ（図6-26～29、図7-1～57、図版7）

27はやや砂まじりの胎土で糸切りの糸の撚りはやや粗く、内底面に墨書が認められる。

以下かわらけについては法量（口径・底径・器高）を記す。1は4.4cm・3.6cm・0.9cm、2は7.3cm・3.9cm・2.1cm、3は7.2cm・4.5cm・2.2cm、4は7.5cm・4.4cm・2.3cm、5は8cm・5.3cm・2.5cm、6は7.7cm・4.7cm・2.3cm、7は11cm・6cm・2.8cm、8は13.2cm・7.8cm・3.5cm、9は7.2cm・4.2cm・1.9cm、10は7.9cm・5.6cm・1.7cm、11は8cm・5.8cm・1.7cm、12は8.4cm・6.8cm・1.7cm、13は12cm・8cm・3cm、14は12cm・8.2cm・3cm、15は13cm・8.6cm・3.6cm、16は4.3cm・5cm・1cm、17は5.3cm・4cm・0.9cm、18は7.6cm・5.1cm・1.6cm、19は7.4cm・4.2cm・2.2cm、20は7.4cm・4cm・2.1cm、21は7.9cm・5.9cm・1.8cm、22は8.4cm・6cm・1.6cm、23は7.9cm・5.5cm・1.7cm、24は8cm・5.2cm・1.8cm、25は7.9cm・5.5cm・2cm、26は8cm・6.7cm・1.5cm、27は8cm・5.7cm・1.6cm、28は8cm・4.5cm・1.7cm、29は8.2cm・5.2cm・1.8cm、30は8.2cm・5cm・1.7cm、31は8.2cm・5.5cm・1.6cm、32は8.9cm・6.3cm・1.3cm、33は9.2cm・7.2cm・1.6cm、34は8cm・5.3cm・2.1cm、35は9.2cm・約7.5cm・1.5cm、36は9.3cm・約7.5cm・1.6cm、37は12.4cm・6.8cm・2.9cm、38は12.3cm・8.5cm・2.9cm、39は12.3cm・7.3cm・3cm、40は11.6cm・7.9cm・3.2cm、41は12.6cm、7.7cm・3.3cm、42は12.7cm・8cm・3.3cm、43は12.1cm・6.9cm・3.4cm、44は12.2cm・7.9cm・3.4cm、45は12.4cm・7cm・3.2cm、46は12.4cm・7.9cm・3.4cm、47は12.6cm・7.8cm・3.7cm、48は12.7cm・8cm・3.5cm、49は12.6cm・6.9cm・3.4cm、50は13cm・約10cm・3.2cm、51は13cm・約8cm・3.8cm、52は7.6cm・5.7cm・1.6cm、53は8cm・5.4cm・1.8cm、54は7.8cm・5cm・1.6cm、55は8.4cm・約7.5cm・1.8cm、56は8.2cm・5.6cm・1.4cm、57は8.6cm・5.5cm・1.8cmである。このうち手捏ねかわらけは35・36・51・55である。

⑷骨角製品

今回の報告対象外の調査区内より、骨角製品が多数出土した。

笄（図８-１～１１、図版10-　）

笄は、調査区内より破片を含む多数の出土を見た。すべて鹿骨（四肢骨）製で、表面に溝を有す。全体的によく研磨されている。ここに11点を図示する。

１は長さ15.5cm以上、幅1.7cm、厚さ0.3cm。頂部に切り込みがみられる。裏面頂部下に研磨の擦痕を残す。先端部欠損。よく研磨されており全体に光沢がある。側面は丸味をもつ。第３包含層中より出土。２は長さ18cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。径0.25～0.3cmの楕円孔を有する。頂部溝を加工する。溝内擦痕を残す。よく研磨されており、全体に光沢がある。側面は丸味をもつ。４面上より出土。３は長さ15.4cm、幅1.7cm、厚さ0.25cm。径0.25～0.5cmの楕円孔が裏面上方に向けて穿たれている。全体に研磨の擦痕を残す。裏面にも溝を有す。括れ部から先端にかけて削り、光沢がある。両側面は稜をもつ。４面上より出土。４は長さ12.3cm、幅1.2cm、厚さ0.35cm。頂部に径0.5cmの孔を有する。両面に溝を持つ。溝部以外で研磨の擦痕が目立つ。側面に稜をもつ。３面下包含層中より出土。５は長さ12.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm。頂部に径0.3cmの孔を有す。先端部丸味をもつ。よく研磨されており、全体に光沢がある。側面は鋭い稜をもつ。４面下包含層中より出土。６は長さ8.7cm以上、幅1.4cm、厚さ0.3cm。頂部に径0.2cmの孔を有す。裏面に研磨の擦痕残る。よく研磨されており、全体に光沢がある。側面は鋭い稜を持つ。３面上より出土。７は長さ12.8cm、幅0.75cm、厚さ0.15cm。溝を有さず。よく研磨されており、全体に光沢がある。側面は平らで括れ部～先端にかけて丸味をもつ。全体に反る。３面下砂層より出土。８は長さ12.8cm以上、幅0.75cm、厚さ0.2cm。２条の溝を加工している。よく研磨されており、全体に光沢がある。側面に鋭い稜をもつ。全体に反っている。４面上より出土。９は長さ12.5cm以上、幅0.75cm、厚さ0.2cm。裏面中央部にわずかな溝を掘り込む。側面は丸味をもつ。先端は欠損。４面下包含層より出土。10は長さ9.6cm、幅0.5cm、厚さ0.35cm。長円形の断面を呈しわずかな平担面を表・裏にもつ。先端部よく研磨され光沢がある。中世地山上より出土。11は長さ4.5cm以上、幅1.25cm、厚さ0.25cm。裏面に、研磨の擦痕が残る他、線刻らしきものも残る。よく研磨されており、全体に光沢がある。側面は丸味をもつ。３面下包含層中より出土。

用途不明骨角製品（図８-13、図版10-　）

13は用途不明の骨製品である。頭部は径1.2cm、長さ2.1cm、軸部の径0.7cmを計る。軸下部に径0.4cmの孔を穿つ。頭部上面に、線刻がある。箱の把手か。４面下包含層中より出土。

⑸　石製品（図８-12、図版10-　）

黄色を呈するガラス質の岩石に、貝殻様の石炭質が付着したものである。2.3cm×1.5cmの不定形を呈し、径0.4cmの孔が穿たれている。装飾品であろうか。３面包含層中出土。

⑹　銅製品（図８-14～17、図版10）

14は掛金を受ける為に用いられた壺金と考えられる。長さ3.4cm、環状部の径1.1cmを計る。方形の断面を呈する棒を丸く曲げて環状部を造っており先端部は尖る。４面下包含層中より出土。

15は飾金具と考えられる。頭部の径1.7cm、長さ1.6cm。平板状の軸部下位に径0.2cmの孔が穿れる。4面上より出土。

16は花弁状の飾りをもつ針隠である。直径1.8cm、孔径0.5cmを計る。花弁は4枚。4面下包含層中より出土。

17は用途不明品。飾金具と考えられる。長さ10.7cmを計る。銅板を叩き出して円弧状の断面に整形する。1面上1号土壙中より出土。

(7) 漆製品・木製品

本遺跡では多量の漆製品・木製品が出土しているが、出土層位は第3面上から第4面にかけてにことに集中している。この項ではこの多量な遺物のうちの一部を任意で選び図示した。

漆製品（図9・10図版9・10）

椀・皿・蓋・鉢などの什器に加え、膳・膳脚（図10-13・14）・釘隠とみられるもの（図10-8・9）・調度部材とみられるもの（図10-11・12）・櫛（図10-1～6）・鞍など種類は実に多種にわたる。用途不明の製品も多い。

図9には什器を掲げた。1・2は第3面より出土。3～6は第3面下木器層より出土。7～12は4面及び4面下木器層より出土。13～17は第5面より出土。いずれも柾目材をロクロで削り出し黒漆を直塗りしている。文様は朱漆で施している。椀・皿は市内遺跡で出土する一般的なタイプのものである。このうち3・7はスタンプを用いて施文している製品。図示した以外にもこの技法で文様を施している製品は多いが、第5面以下の層位からはこのタイプのものは出土しない。

漆器の椀・皿については、器形・施文技法の分類が鶴岡八幡宮境内研修道場用地の資料をもとに行なわれている。[注1] しかし、当遺跡では出土層位が第3面から4面に集中している。また多様の形態の製品が混在して出土しており、出土層位による器形等の変化は把握できる状態ではない。概して5のような簿手で丁寧に削り出された浅い高台をもつ椀が下層部ではみられなくなり、17のような厚い高台をもつものが増えることを確認するにとどまる。

図10・1～7は櫛である。前掲の層位から櫛が多く出土した。その形態も歯間の密なものから粗なものまでさまざまであるが、1、2のような峰に装飾的な技工を凝らした製品が複数出土したのは希な例といえる。ごく特殊なものは6で、黒漆地に螺鈿をあしらったもの。割れ口に二本の鉄釘がささっており、割れ面を漆で接着して補修した痕跡がある。また7のような馬櫛も数点出土している。これらもさまざまな形態の製品が混然と出土している。

木製品（図9・10図版9・10）

3面上・3面下・4面下に木器層があるが、この構成土に含まれる木製品で最も多いものは箸状製品である。その他折敷・曲物・草履芯・下駄などが目立つ。そしてこれらに混入して独楽・毬打などの遊戯具や図10-15の人形を一例とするような形代など信仰に関わるものも複数出土している。

多く検出された製品のなかには墨書のあるものが含まれている。とくに折敷片とみられる薄い板材に文字や絵が書かれている製品がしばしばみられた。16・17はそのうち墨書が比較的明瞭に残っ

ているものの一例である。また注目すべきものに19がある。第3面木器層より出土したものであるが、上部を剣先状に切った厚さ約5㎜の杭状の板に「□二丈あかき□□□□□(入道カ)」の墨書がある。これに似た木簡が既に北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目371番1地点）で出土している。[註2]これは、厚さ6㎜程の杭状の板に「一丈伊北太郎跡」と書いたものと「一丈南くにの井の四郎入道跡」と書いたものの二点である。北条泰時・時頼邸跡のこの例については、若宮大路の東側溝の構築を御家人役として分担された折の表示ではないかとの見解が現在有力である。本遺跡は若宮大路をはさんで北条泰時・時頼邸跡の向い側に位置し、この木簡の出土地点も若宮大路の西側溝に近い辺りである。出土地点や丈数と人名を記している点などの共通から、19の木簡もおそらく同じ用途のものであると考えられる。「あかき□□□入道」が誰であるか詳しく検証する必要もある。

註1　『研修道場用地発掘調査報告書』1983年鎌倉市鶴岡八幡宮・研修道場用地発掘調査団

註2　『北条泰時・時頼邸跡―雪ノ下一丁目371番-1地点発掘調査報告書』1985年　北条泰時・時頼邸跡発掘調査団編　鎌倉市教育委員会発行

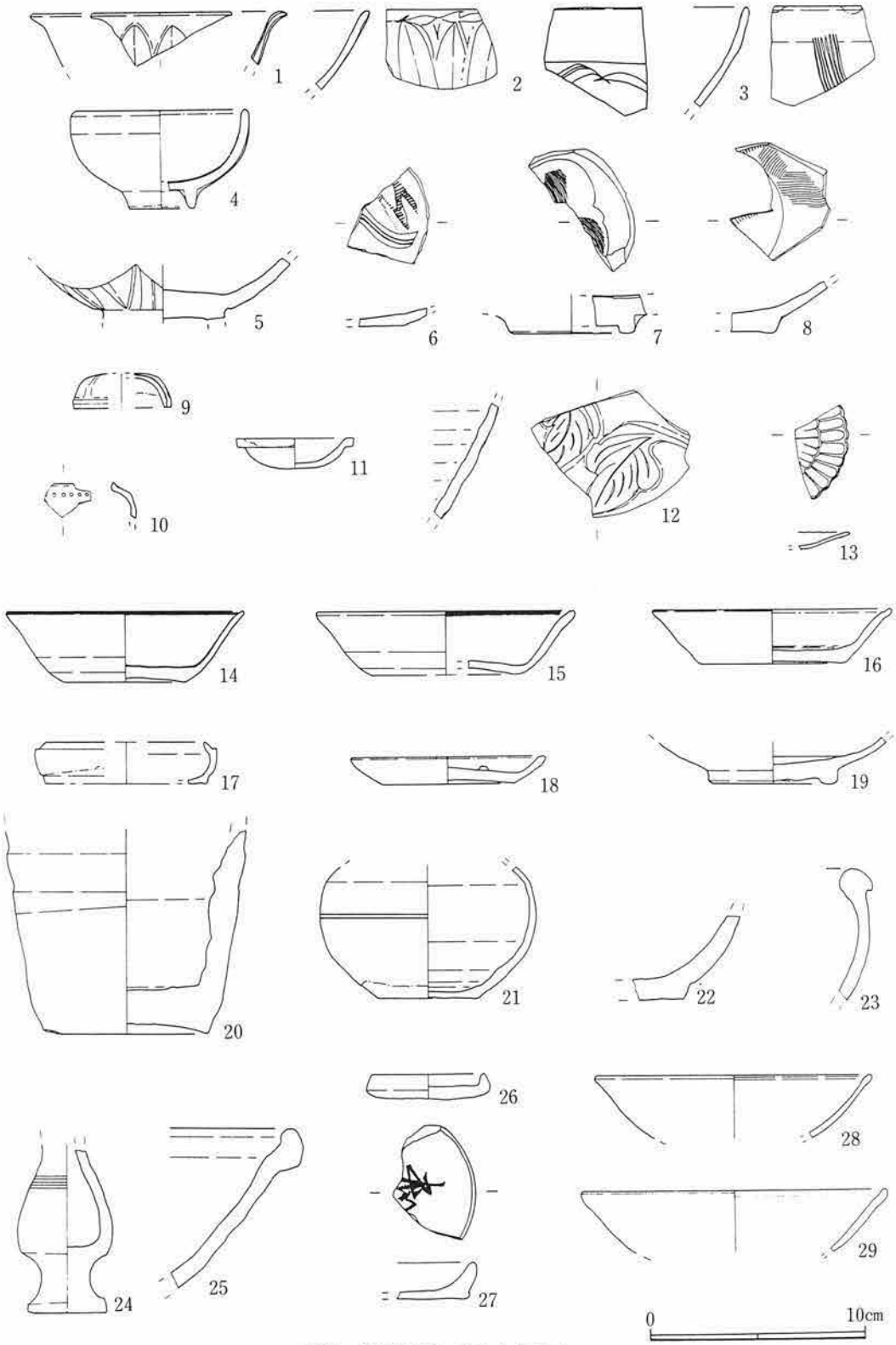


図6　陶磁器類・白かわらけ他

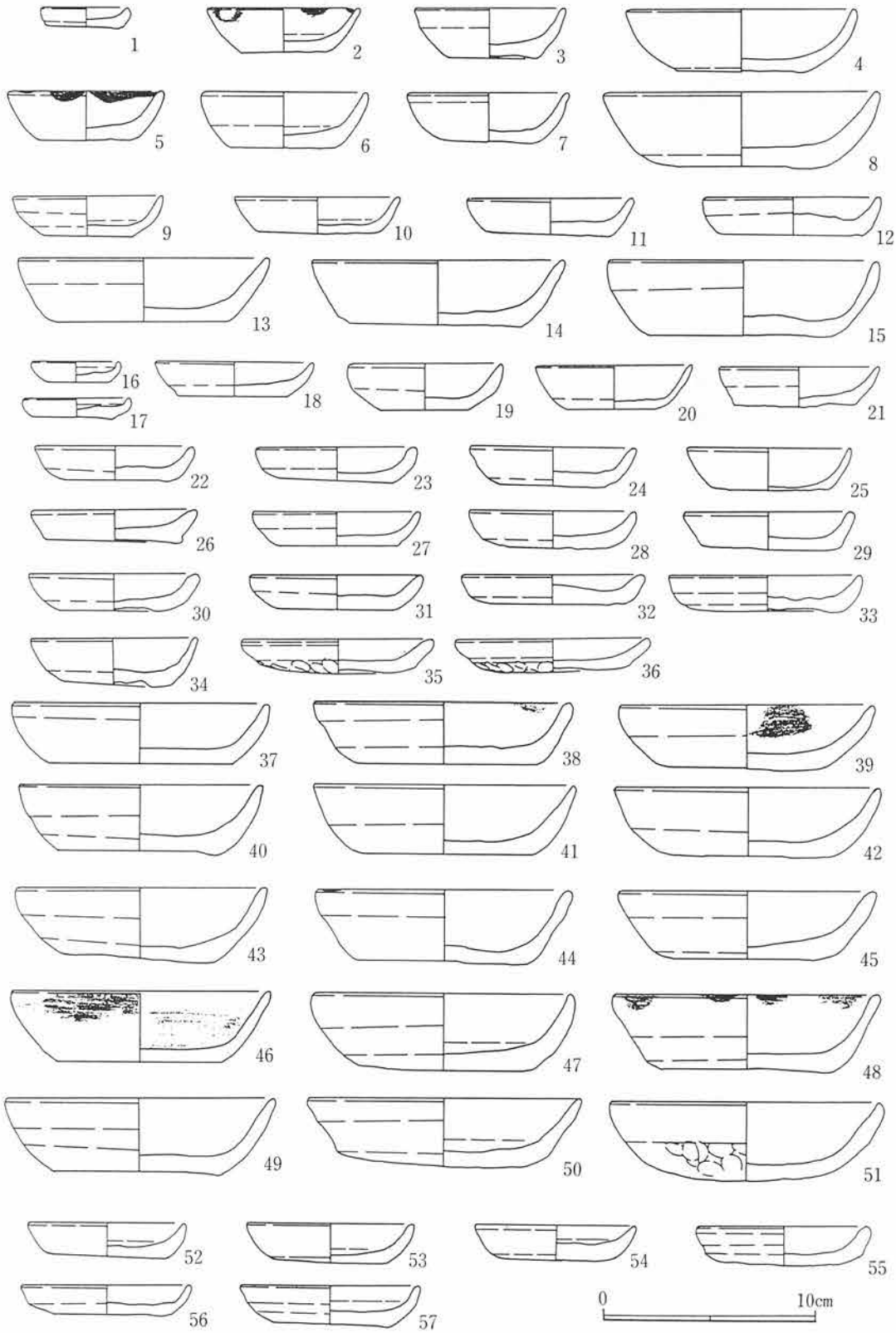

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
10cm

図7　かわらけ

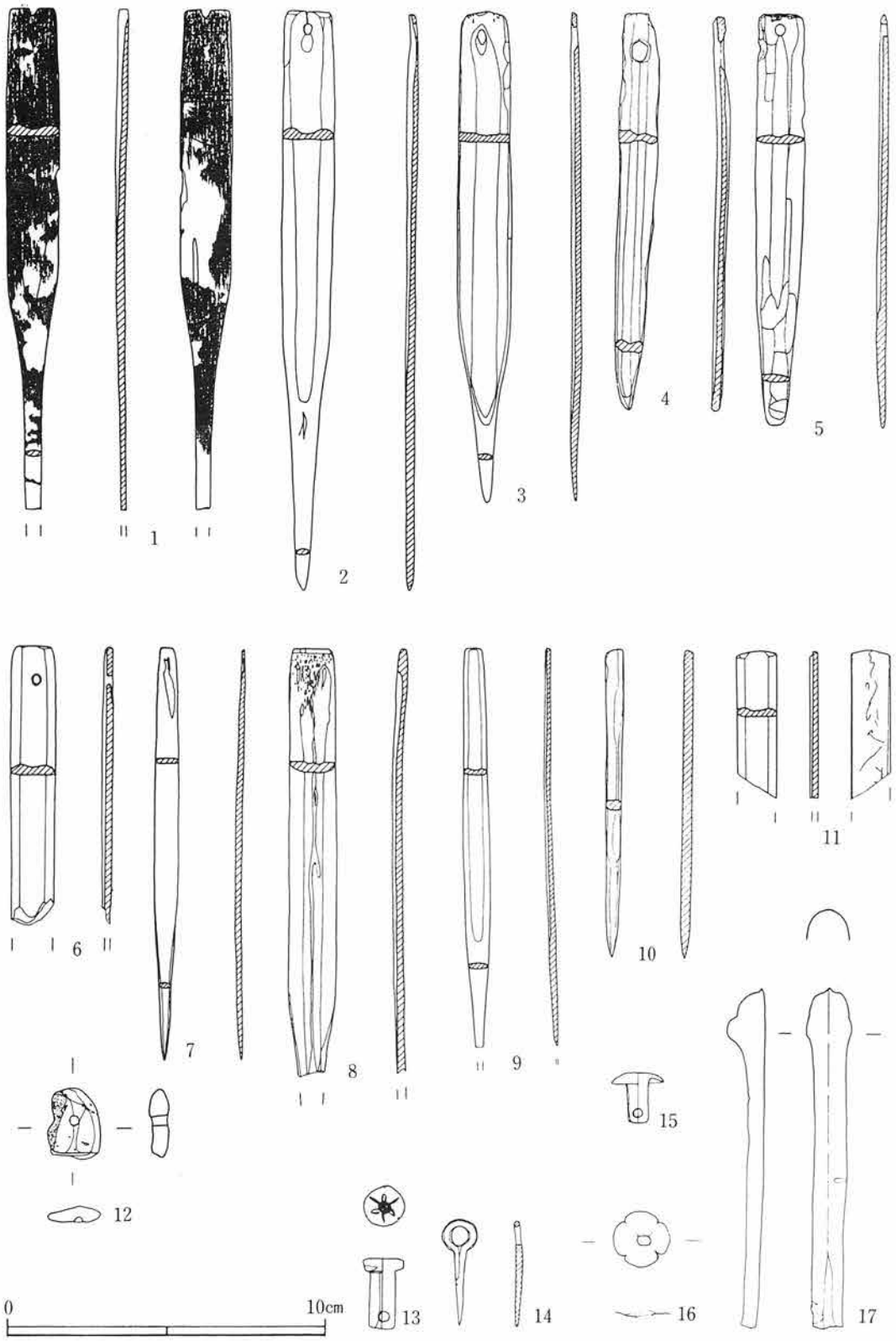


図 8　骨角、石、銅製品

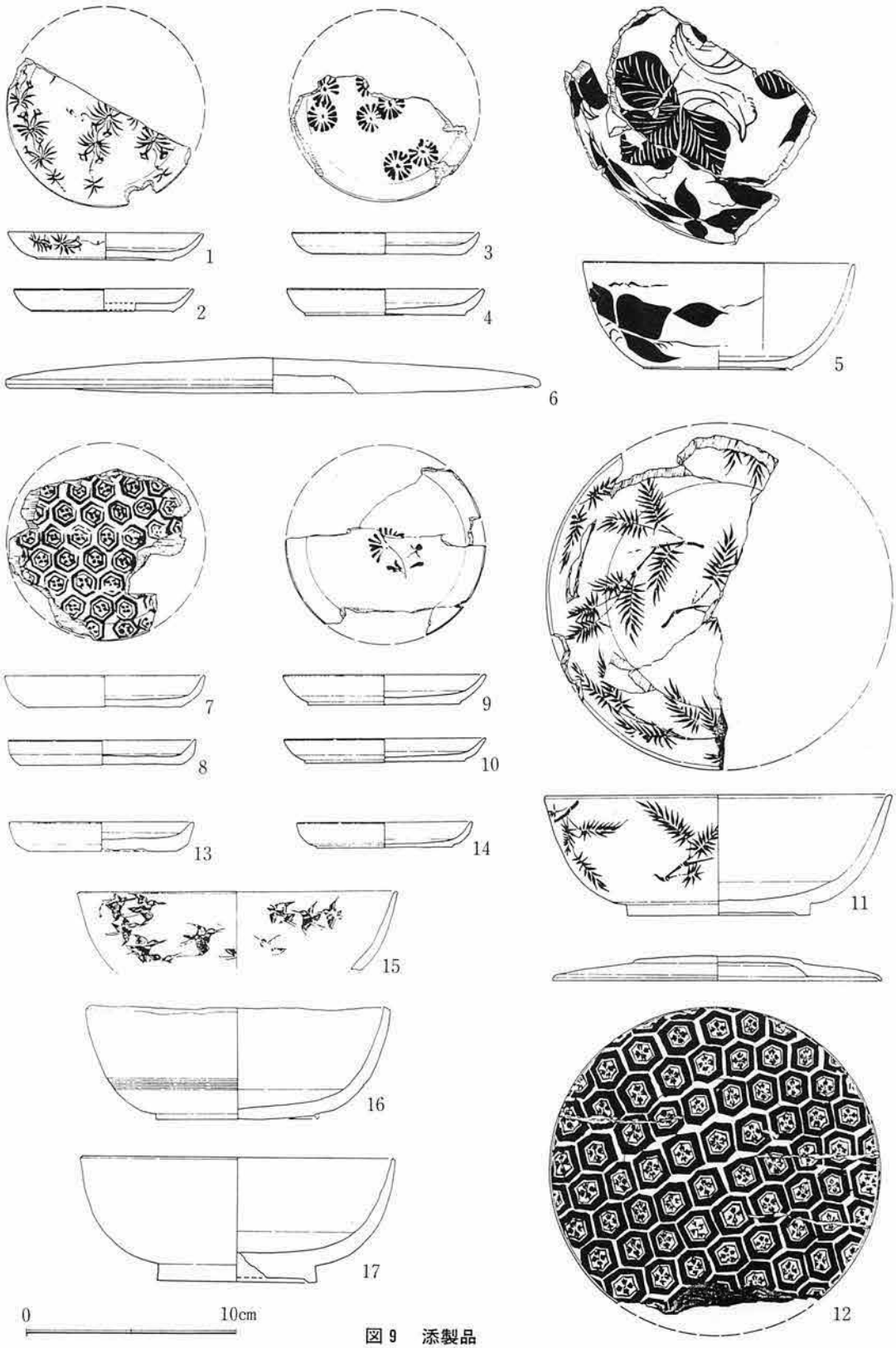


図 9　添製品

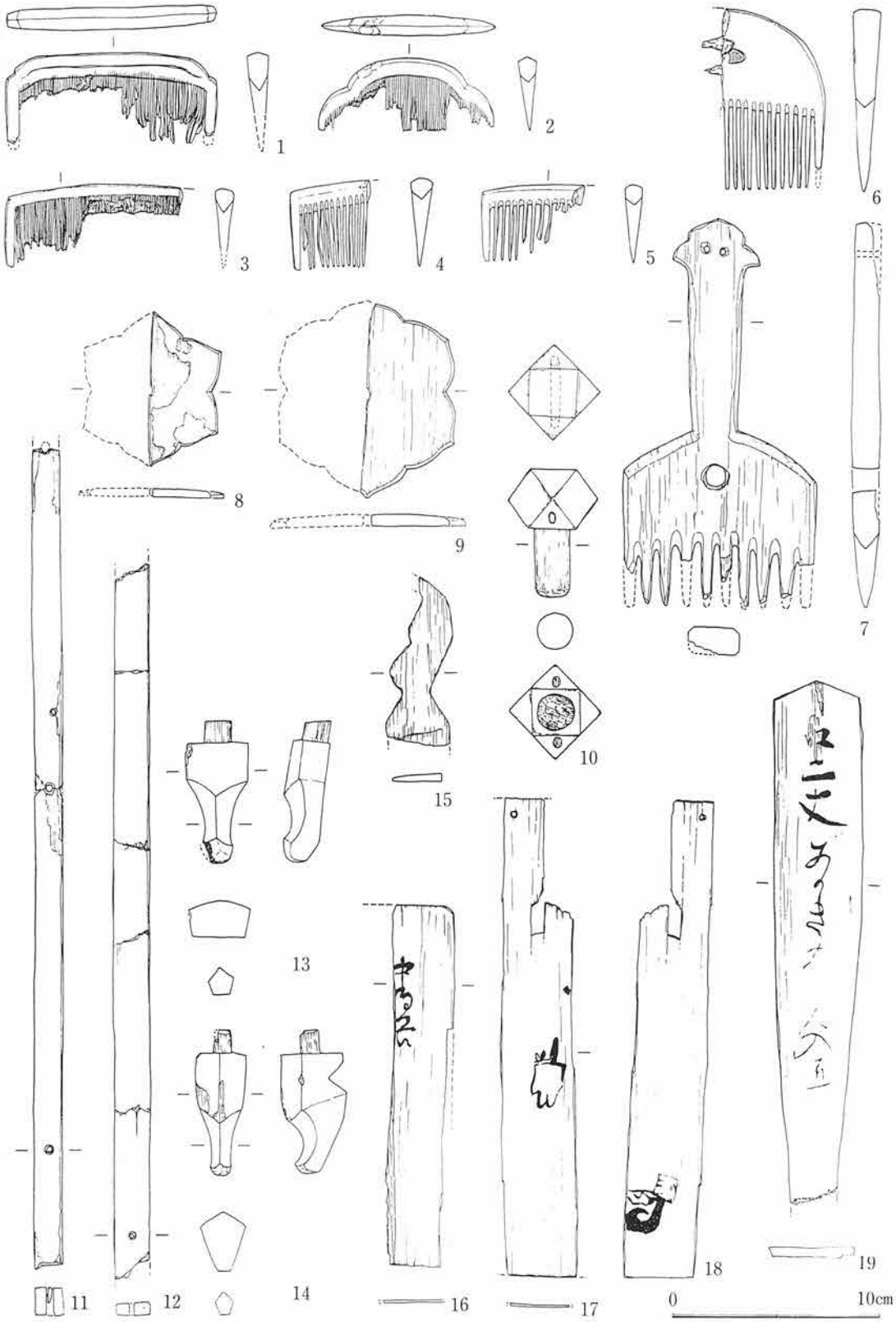


図10　添製品・木製品

第4章　まとめ

今回報告分の発掘調査では、調査区東壁沿いに南北に走る三時期以上の大規模な木枠をもつ溝が検出された。この南北溝はその規模や構造から推定して、若宮大路の側溝と考えられる一連の溝の、続きとみてほぼまちがいなかろう。

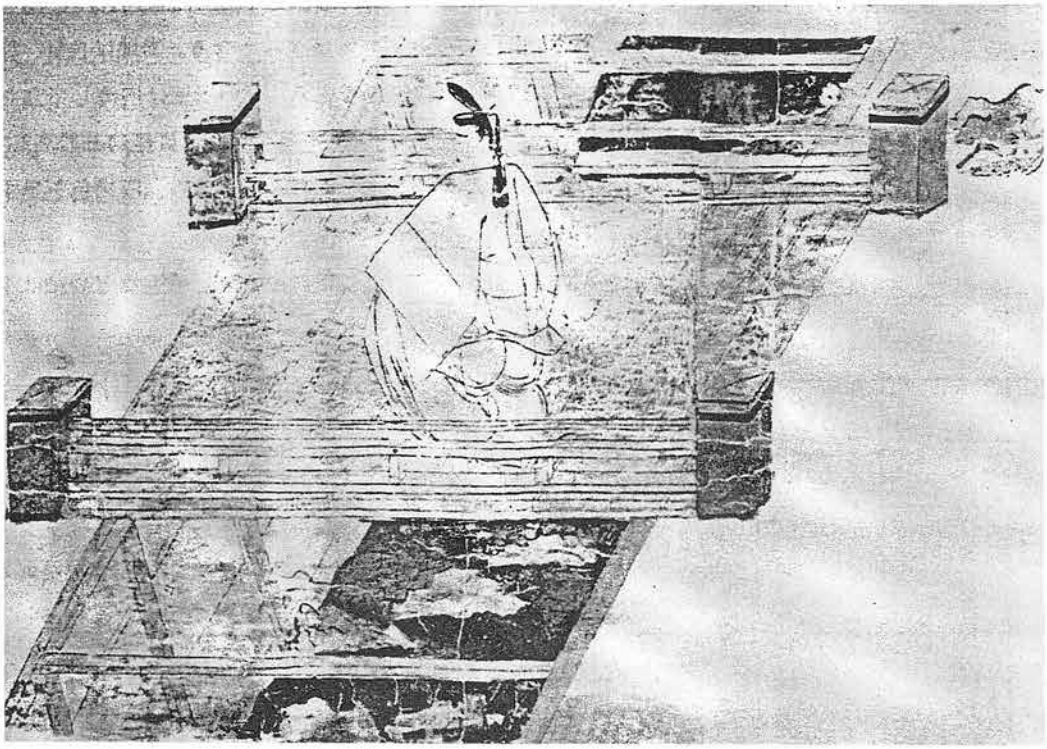
ところで、若宮大路の側溝であると認められるものは、現在までのところ本調査地点を含めて大路西側で三ヶ所、東側で二ヶ所しか確認されていない。調査地点の制約からいずれも鶴岡八幡宮に近い地点に集中しており、西側に三ヶ所はともに県遺跡台帳により北条時房・顕時邸跡といわれる地域に、西側二ヶ所も「北条泰時・時頼邸跡」または「若宮大路幕府」跡と伝えられる地域に位置している。各調査地点からは、いずれもしっかりした構築方法による木枠組みの溝が検出されている。

南北溝は3時期に亘ることが確認されているが、当溝の各期の年代観については、今回報告対象外である西側に広がる調査区全体の各生活面と各期に於ける当溝との連関の上に比定されるべきであるが、一応ここでは当溝出土のかわらけから大まかな年代を述べる。

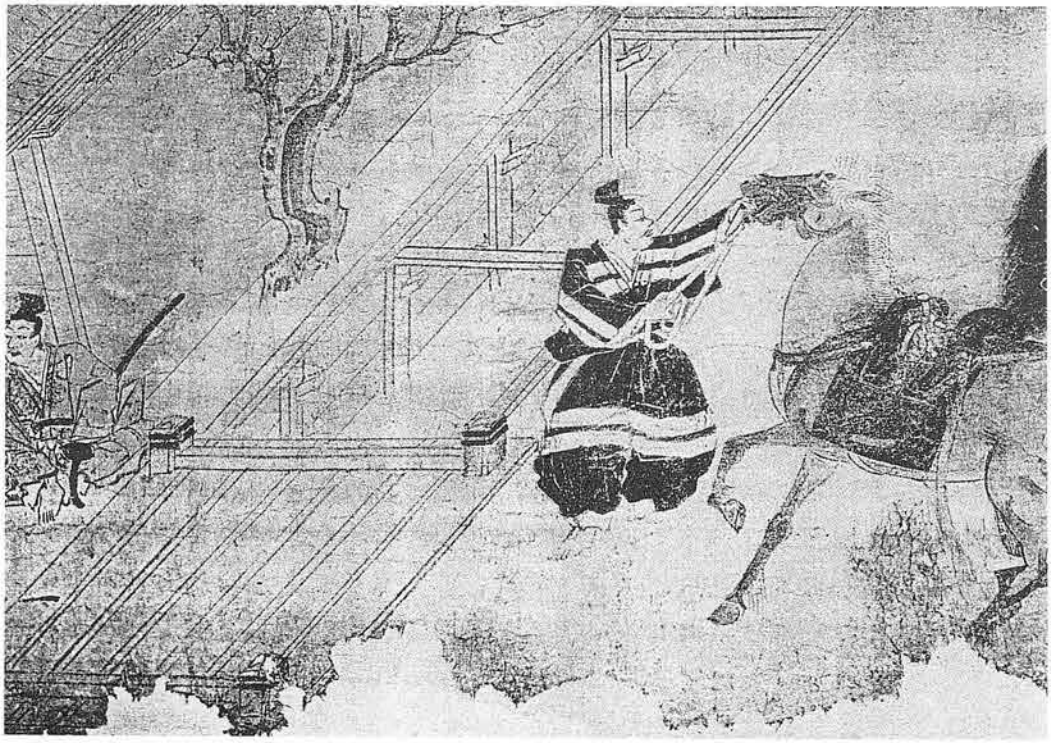
当溝覆土内出土かわらけのうち最も新しい様相をもつ一群は、所謂薄手精製かわらけで大・中・小の3種が認められる。14世紀中・後半代に位置づけられている。前段階のものとして鎌倉の第Ⅲ期・Ⅳ期に位置づけられる13世紀中葉から後半のものと13世紀末から14世紀前葉のものがみられ、最も古い様相を示すものとして手捏ねかわらけで、鎌倉第Ⅱ期に位置づけられているものが出土している。すなわち器壁がやや薄く、胎土が砂っぽく焼成良好で硬質な感じを受ける1群のかわらけでほぼ同法量の内底無調整のものと伴出している。この手のかわらけについては、内底無議整の大型品が当遺跡から出土していないため、その所属期を判断するのに苦しむ。内底無調整のかわらけ中・小型のものについては鎌倉第Ⅱ期まで下るのか、あるいは前期手づくねかわらけが鎌倉第Ⅰ期まで遡ぼるのか。今ひとつ良く分らない。北条時房・顕時邸（雪ノ下一丁目273番ロ地点）遺跡東西溝Ⅱ出土かわらけをみると、鎌倉第Ⅰの底部糸切のかわらけ大・小と手捏ねかわらけがともに出土しており、中に前述砂っぽく硬質でやや成形のヘタったかわらけが混っている。

今回報告対象外の西側記査区で地山上の土壙から一括資料として多量のこの手のかわらけが出土している。その分析の結果を含めて、もう少し考えてみたい。

いずれにしても、木組を伴なった溝及びその下から上記の時期に亘るかわらけが出土しており、南北溝の開始時期（木組の有無を含めて）をどこまで遡ぼらせるかは今後の課題としておく。

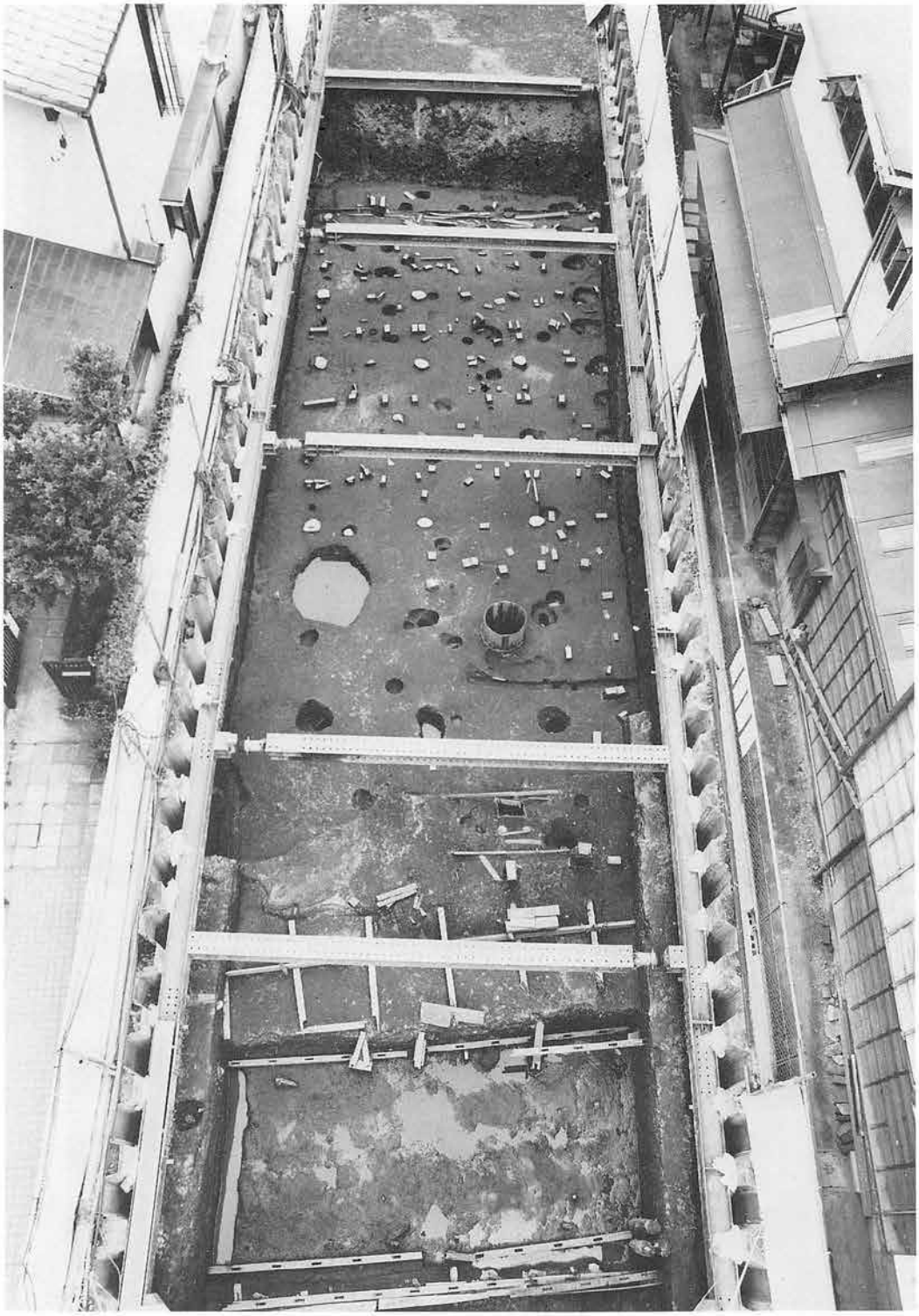


『北野天神縁起』より転載



『蒙古襲来絵詞』より転載

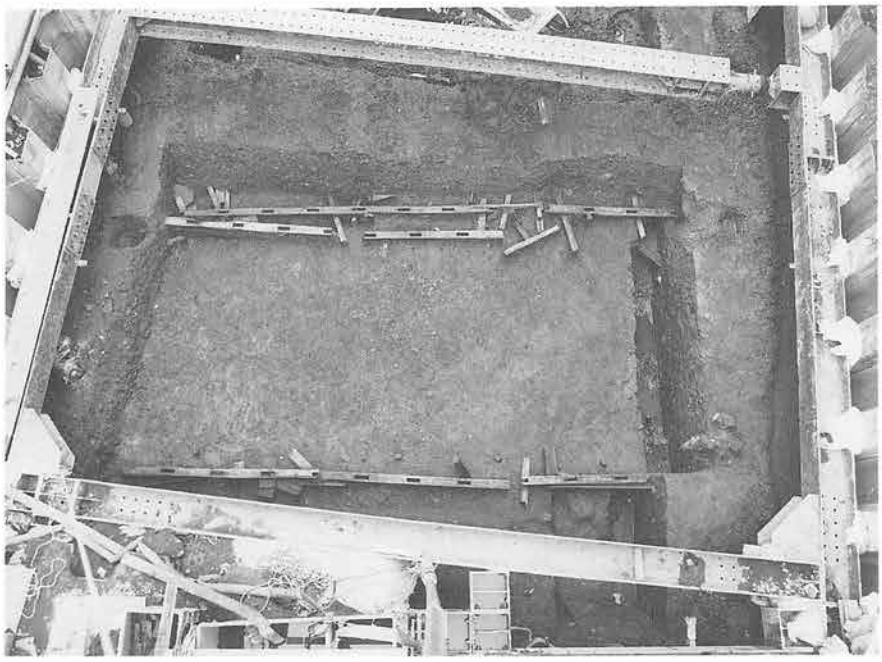
図11　絵巻物より見た溝の様子



全景（東から）

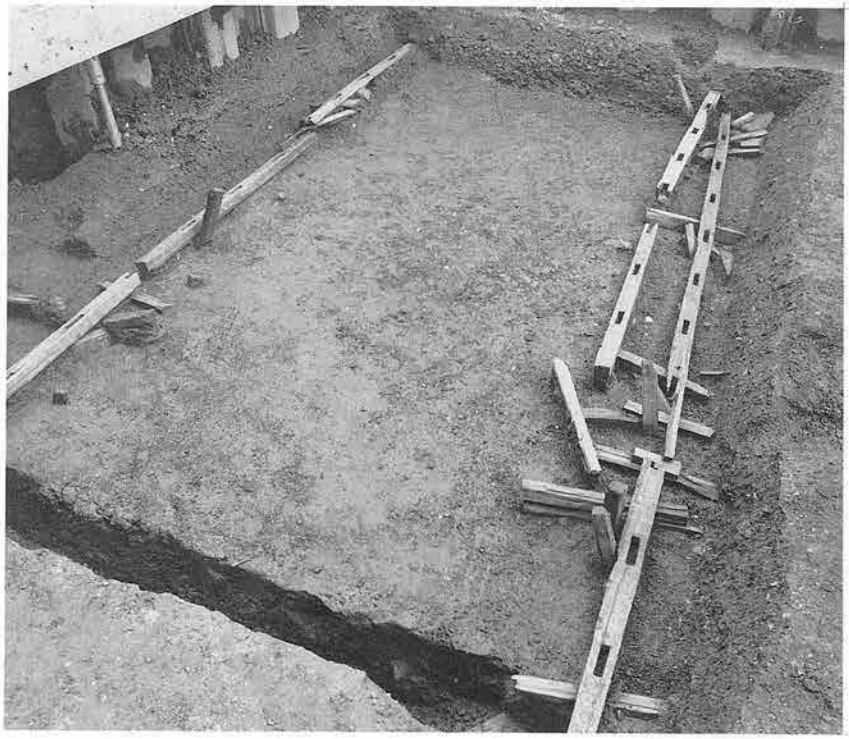
図版 2

▲1．調査前の状況（東から）



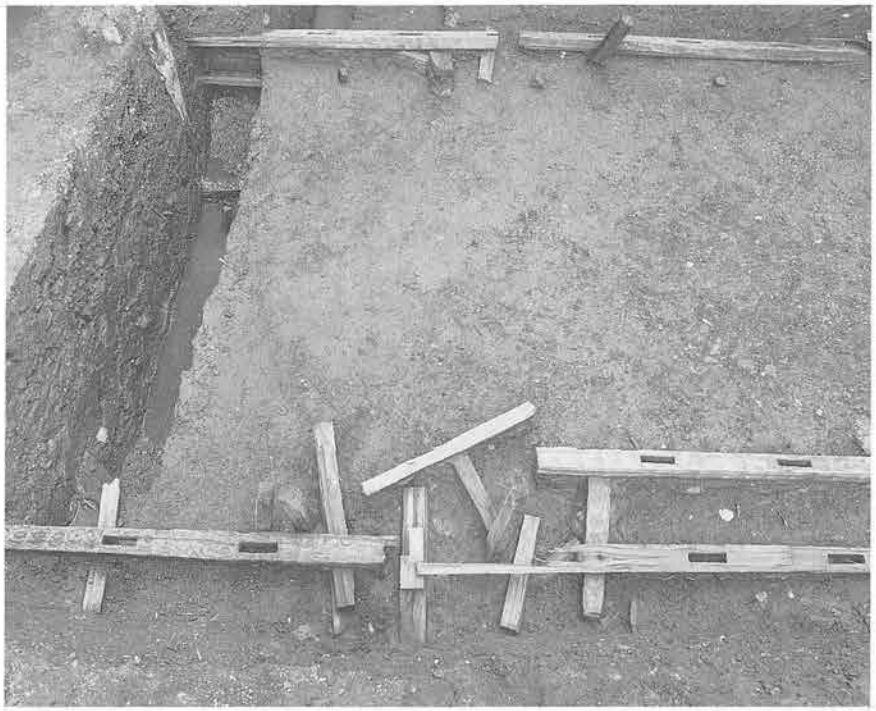
▲2．南北溝Ⅰ期（東から）

▼1・南北溝Ⅰ期（南から）

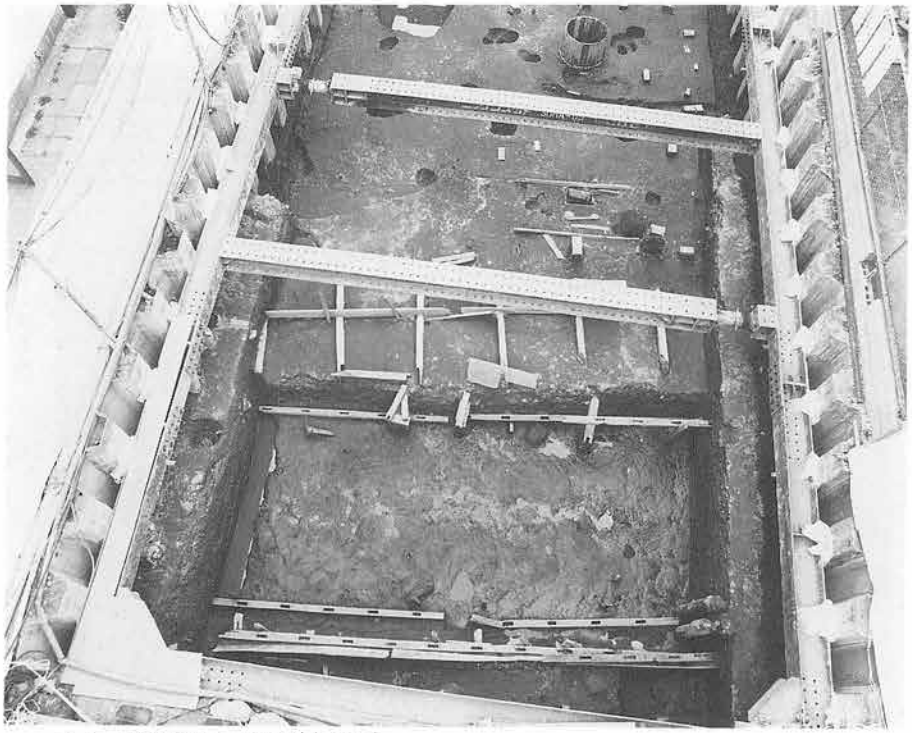


▼2・南北溝Ⅰ期（北から）

図版 4



▲1．南北溝Ⅰ期の地覆材及び礎板（西から）

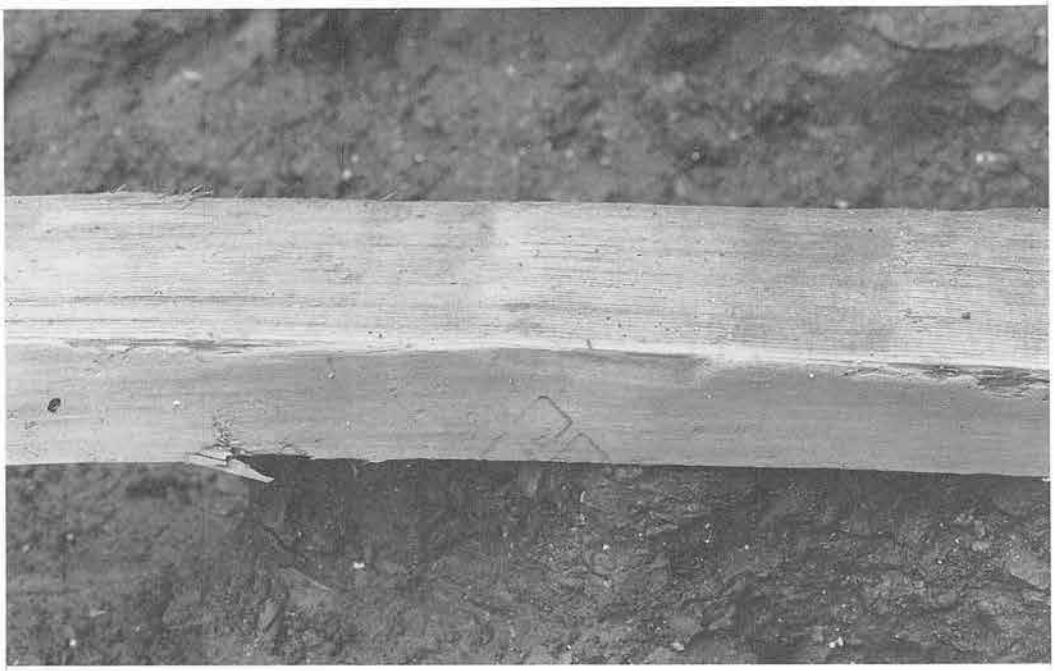


▲2．南北溝Ⅱ・Ⅲ期（東から）

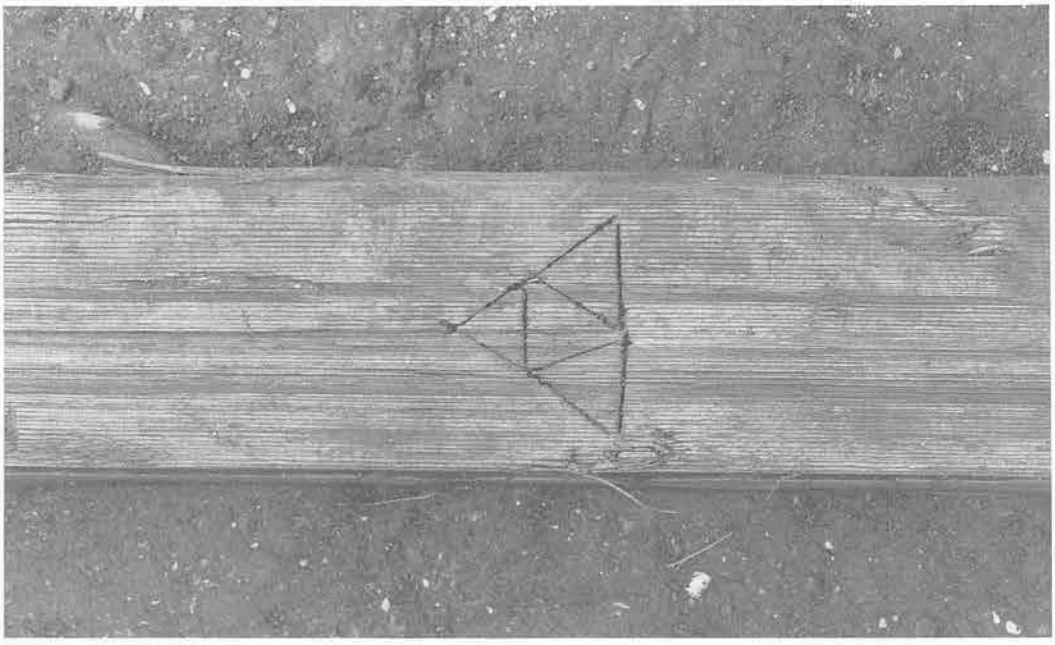
▲1．南北溝II・III期（南から）

▲2．同最下層の状況（南から）

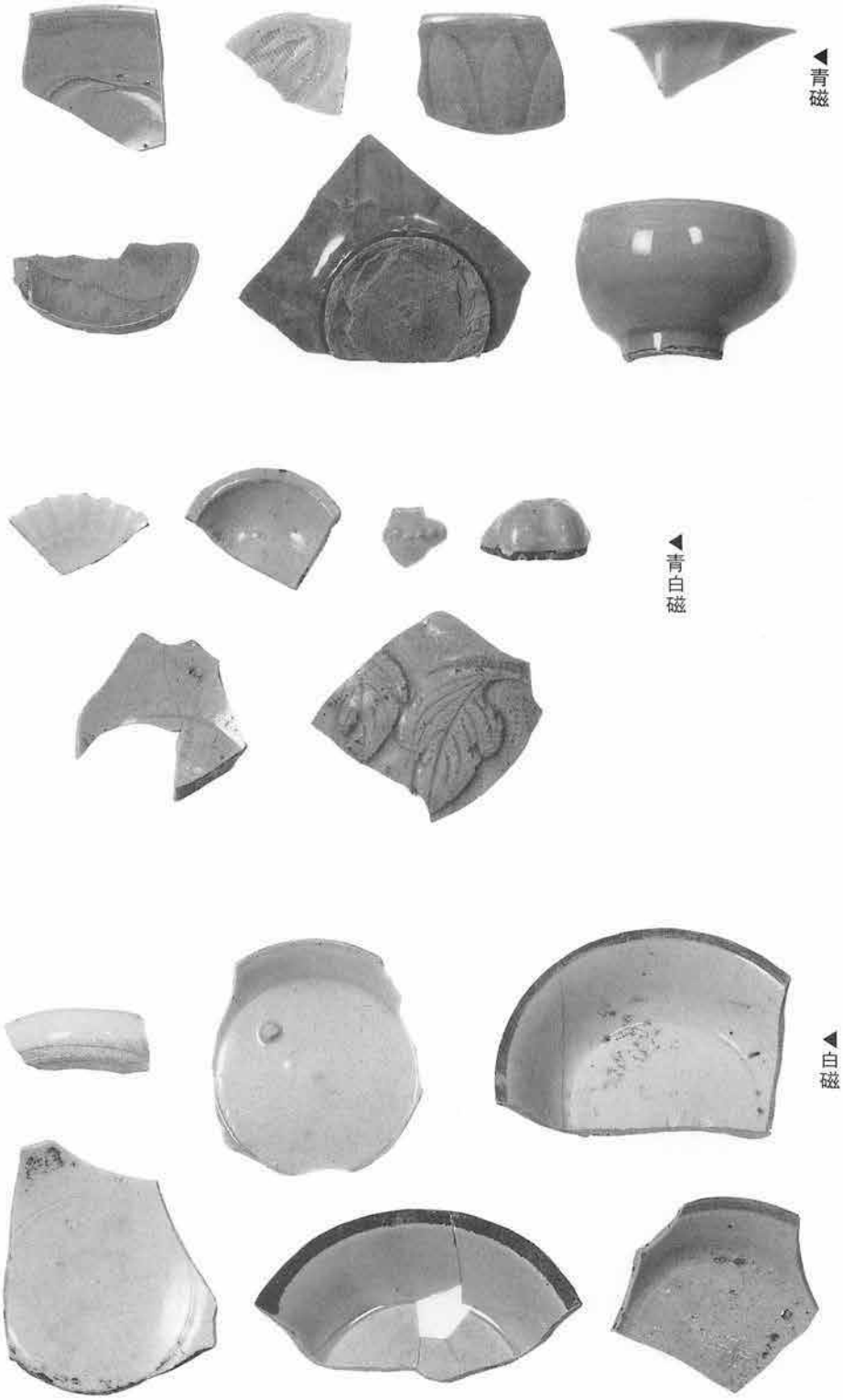
図版 6



▲1．控貫に焼印された四菱文（下部欠失で花菱文か）

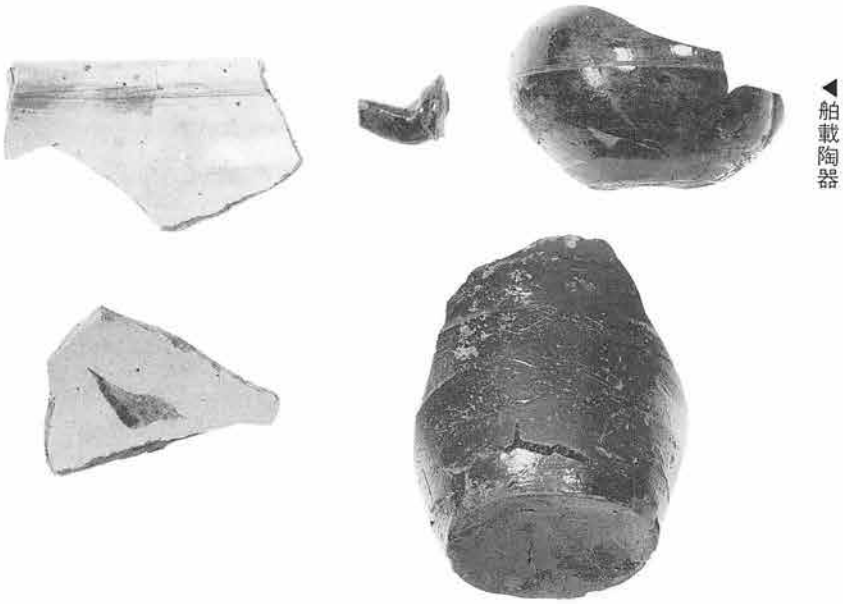


▲2．控貫に刻まれた三鱗文

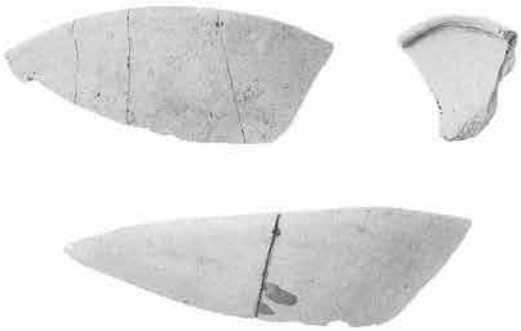


出土遺物(1)

図版 8



◀舶載陶器



◀白かわらけ

◀墨書かわらけ

◀東播系鉢

◀瀬戸仏華瓶

出土遺物(2)

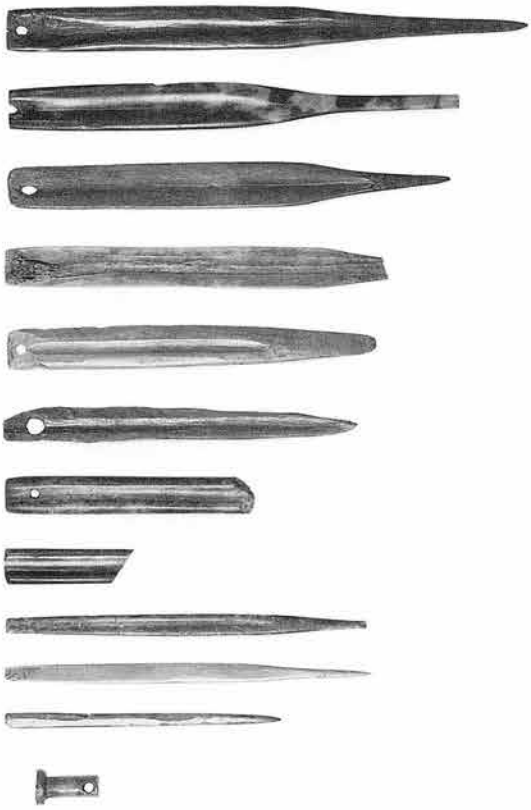
かわらけ

出土遺物(3)

図版10

かわらけ

出土遺物(4)



◀笄

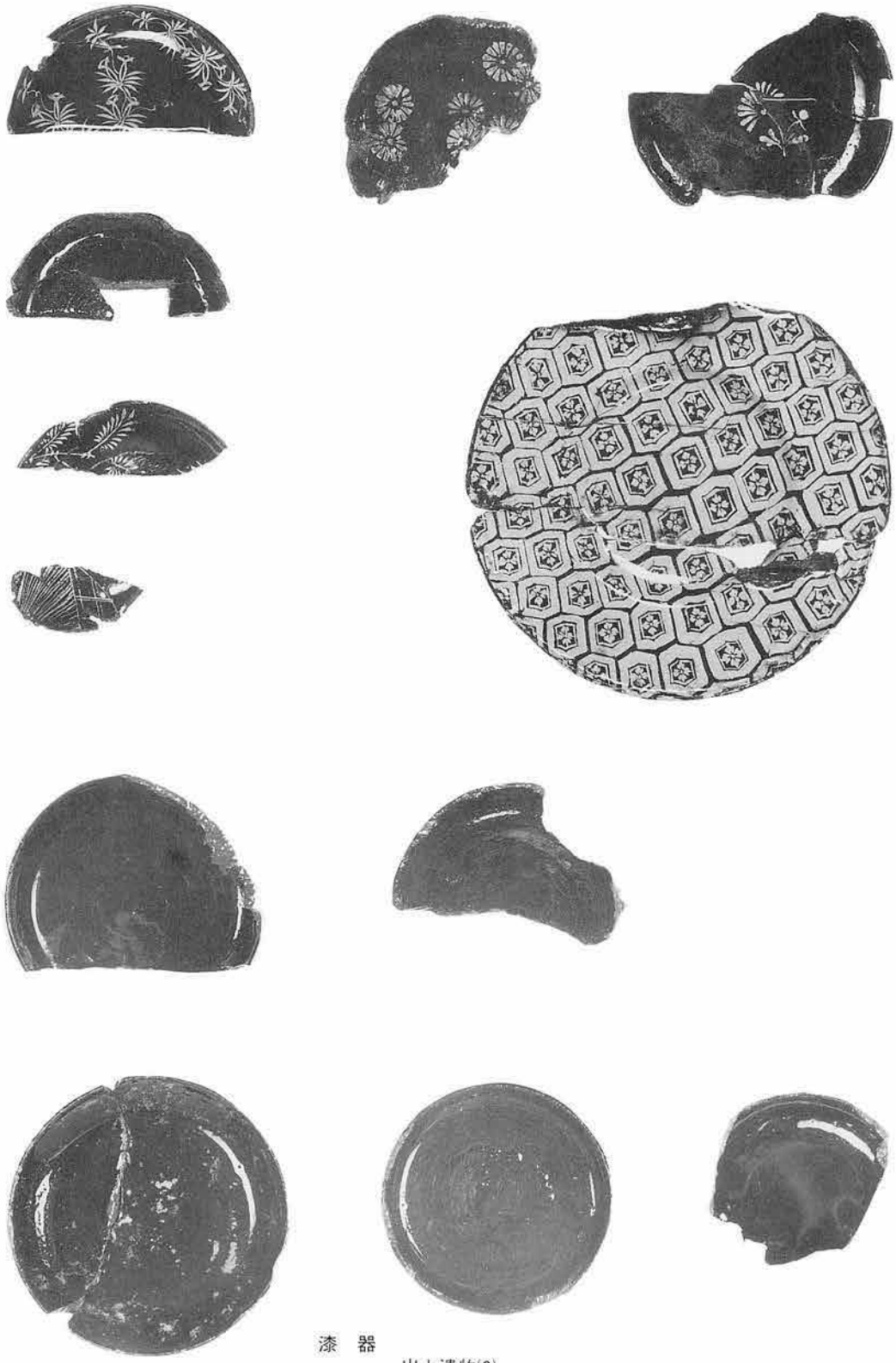
▲骨製品

◀石製品

◀金属製品

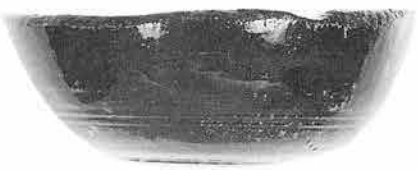
出土遺物(5)

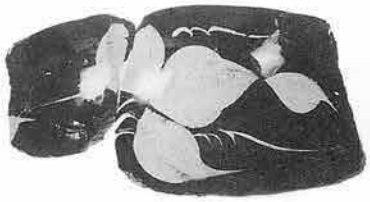
図版12

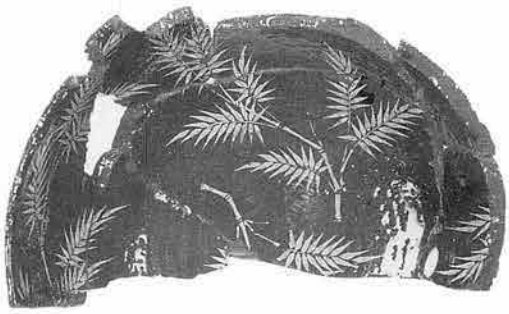


漆　器

出土遺物(6)



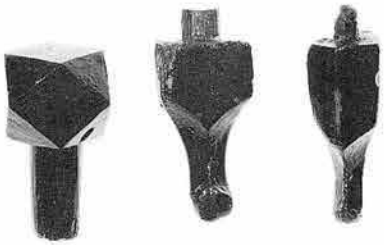




漆　器

出土遺物(7)

図版14



出土遺物(8)

3．長谷小路周辺遺跡

由比ヶ浜三丁目258番8

例　言

1．本遺跡は鎌倉市由比ヶ浜三丁目258番8地点に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は昭和63年6月2日から同年8月31日にかけて実施した。

　調査に際しては本遺跡に南接する長谷小路周辺遺跡発掘調査団（団長・吉田章一郎）に資器材の援助を受けた。

3．本編の執筆・編集は斉木秀雄が行った。又、検出遺構・遺物の実測及びトレースは斉木の他に下記の分担で行った。

出土遺物実測トレース	宗臺富貴子
検出遺構トレース	伊丹まどか
図版作成	稲田桂子、小林重子、早川直子

4．本編に使用した写真は検出遺構を斉木が、出土遺物を木村美代治が撮影した。又、PL1に使用した航空写真は㈱サンシャイン工業に依頼した気球写真であり、長谷小路南遺跡発掘調査団より借用したものである。

5．調査体制

調査員	斉木秀雄
調査補助員	汐見一夫、田辺龍司、菊地正明、伊藤武紀、稲田桂子、片井裕子、宗臺富貴子、伊丹まどか

6．本遺跡の調査に関わる出土品等の資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境
第２章　調査の経過と堆積土層
　Ⅰ　調査の経過
　Ⅱ　堆積土層
第３章　検出された遺構と遺物
　〈中世〉
　Ⅰ　方形竪穴建築址
　Ⅱ　井戸
　Ⅲ　土壙墓
　Ⅳ　土壙
　Ⅴ　溝
　Ⅵ　確認面出土遺物
　〈中世以前〉
　Ⅰ　包含層の分布
　Ⅱ　土壙墓
　Ⅲ　溝
　Ⅳ　トレンチ出土遺物
　Ⅴ　遺跡内採集遺物
第４章　まとめと考察

図　版　目　次

Fig. 1　遺跡位置図
Fig. 2　グリッド割付図
Fig. 3　堆積土層模式図
Fig. 4　中世遺構全体図（綴じ込み）
Fig. 5　１号方形竪穴建築址
Fig. 6　１号方形竪穴出土遺物(1)
Fig. 7　１号方形竪穴出土遺物(2)
Fig. 8　２号、４号、５号方形竪穴建築址
Fig. 9　２号、４号、５号方形竪穴出土遺物
Fig.10　３号、９号方形竪穴建築址
Fig.11　３号方形竪穴出土遺物(1)
Fig.12　３号方形竪穴出土遺物(2)
Fig.13　３号方形竪穴出土遺物(3)
Fig.14　12号、13号、15号方形竪穴建築址
Fig.15　12号、13号方形竪穴出土遺物(1)
Fig.16　12号、13号方形竪穴出土遺物(2)

Fig.17　14号方形竪穴建築址
Fig.18　14号方形竪穴出土遺物
Fig.19　16号、17号方形竪穴建築址
Fig.20　16号方形竪穴出土遺物
Fig.21　井戸1
Fig.22　井戸1出土遺物
Fig.23　土壙墓1
Fig.24　土壙墓2
Fig.25　土壙墓2出土遺物
Fig.26　散乱骨
Fig.27　土壙出土遺物(1)
Fig.28　土壙出土遺物(2)
Fig.29　土壙3
Fig.30　溝1、溝2
Fig.31　確認面出土遺物(1)
Fig.32　確認面出土遺物(2)
Fig.33　中世以前全体図（綴じ込み）
Fig.34　土壙墓
Fig.35　溝
Fig.36　トレンチ出土遺物(1)
Fig.37　トレンチ出土遺物(2)
Fig.38　遺跡内採集遺物(1)
Fig.39　遺跡内採集遺物(2)

写真図版目次

PL.1　長谷小路周辺遺跡群現況（気球写真）
PL.2　中世遺構全景（北から）
PL.3　堆積土層写真（部分）
PL.4　1.方形竪穴建築址群（白線が3号、南から）2.2号方形竪穴建築址（南から）
PL.5　1.土壙墓1（南から）2.土壙墓2（南から）3.同（西から）
PL.6　1.土壙3（東から）2.同（北から）
PL.7　1.溝2、溝3（北から）2.溝3内獣骨　3.埋葬人骨（中世以前、南から）
PL.8　1.獣骨出土状況　2.獣骨出土状況
PL.9　1.溝6、溝7（南から）　2.溝1（北から）
PL.10　舶載磁器
PL.11　舶載磁器、瀬戸
PL.12　瀬戸製品
PL.13　瀬戸製品他
PL.14　かわらけ
PL.15　骨製品他
PL.16　常滑他

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は鎌倉の中心を南北に通る若宮大路の下馬交差点から長谷観音、大仏前を経て藤沢方面に向う道路（国道134号）の南側、下馬交差点から長谷観音のほぼ中間に位置する。本遺跡は長谷小路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳№236）の北辺にあたり、現況レベルは、11.50m前後を測る。旧鎌倉地域では高い土地である。

遺跡地周辺は中世においては「前浜」と呼称されていた地域の一部であったと思われる。浜地とは街中の「屋地」と異なり、御家人等の屋敷地がなく、明確な区割りのない土地であったと思われる。「前浜」の名の由来は不明であるが、若宮大路の浜ノ大鳥居の前の浜であるための名称であったとも考えられる。前浜と呼ばれた地域は東は滑川西岸、西は稲瀬川辺、北は六地蔵辺までであったらしい。『吾妻鏡』等の文献によれば、この他にも「甘縄」、「甘縄魚町」などの地名が本遺跡周辺の地名として記されている。

甘縄魚町というのは魚河岸的な名であるから現在の坂ノ下から稲瀬川河口にかけての地域に存った町だろう。甘縄と呼ばれた地域は遺跡地の北西400mの山裾に現存する甘縄神明社付近一帯であったらしい。甘縄神明社はこの地域では古い社の一つである。社蔵する『相州鎌倉郡神興山甘縄寺神明宮縁起略』によれば、和銅三年（710）八月に行基が草創し、染屋時忠が山上に神明宮、麓に神興山円徳寺を建立したと伝えられる。この後、源頼義が相模守となり、上野介直方の女をめとり、当社に祈って八幡太郎義家を甘縄の地に生んだとされている。

甘縄周辺には甘縄神明社の他に長谷寺（736年創建）、高徳院（元光明寺の奥院、創建不明）、光則寺（1271年創建）の寺院が現存しており、この他に万寿寺、長楽寺という寺院も存ったことが『鎌倉廃寺事典』でわかる。両寺院ともに宗旨未詳（万寿寺は禅宗の可能性あり）で現在のどの辺に存ったものかは把めていない。

又、甘縄の地には多くの御家人が居住していたことが『鎌倉市史―総説編―』に記されている。これによれば、甘縄神社近くに安達盛長、安達景盛、安達義景、安達泰盛らの安達一族の屋敷があり、ここには源頼朝も度々おとづれている。この他にも多くの御家人の屋敷、別宅などが存在していたようだ。

遺跡地周辺は―やや西側に寄るかもしれないが―古くから鎌倉に入る交通の要所でもあった。古くは古東海道が稲村ヶ崎の先端から現在の坂ノ下に抜け、遺跡地周辺から現在の材木座にある元八幡宮付近から小坪・逗子へ抜けていたと考えられている。鎌倉が中世都市として営えてから鎌倉に入る七本の道路（鎌倉の七口）のうち大仏の切通し、極楽寺の切通しの２本の道路は遺跡の西方で合流してから六地蔵方面に抜けていた。

中世以前では遺跡地周辺に古東海道の道筋が近くを通り、鎌倉時代より前から存る甘縄神明社、御霊神社（鎌倉権五郎景正を祭神としており、権五郎神社ともいわれる）が近くに存った。又、遺

■遺跡地

1．由比ヶ浜３-254-24
2．由比ヶ浜３-258-1
3．由比ヶ浜３-194-25
4．大海老用地
5．由比ヶ浜３-199-１
6．日産保養荘用地
7．長谷小路南遺跡
8．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡
9．由比ヶ浜南遺跡
10．笹目遺跡
11．伝安達邸跡
(1～7は長谷小路周辺遺跡群)

0　100m

Fig. 1　遺跡周辺地図

跡地の南東の砂丘一帯は「下向原古墳群」といわれる古墳群があり、近年まで古墳が存ったようだが、現在は残っていない。この附近の妥女塚という古墳から出土したという人物埴輪は京都大学が蔵している。中世以前でも、遺跡地周辺である程度の生活が営まれていたことが十分に推定できよう。中世のにぎわいと同じかもしれない。

遺跡地周辺では、本遺跡の属する長谷小路周辺遺跡群を中心として、多くの遺跡の発掘調査が近年になり実施されている。それらの発掘調査の成果の１部はすでに報告されているが(註1)多くの新事実を与えてくれた。

中世以前では長谷小路周辺遺跡群内で約10基、南接する由比ヶ浜中世集団墓地遺跡群内で約20基の竪穴住居址が検出されており、緑釉陶器片、墨書土器片など多くの遺物が出土している。これらの集落は海抜2.5m前後から営まれていることが由比ヶ浜南遺跡で確認されている。(註2)又、本遺跡の１体を含め、本遺跡群内で６体の仰臥伸展葬が検出され、うち１体には鉄鏃、骨鏃、刀子などが副葬されていた。(註3)これらの土壙墓の年代は、遺物か少ないこともあって明確にできない。しかし、出土遺物では弥生時代から10世紀までの年代が考えられている。

中世では方形竪穴建築址を中心として若干の礎石建物、掘立柱建物、井戸、土壙、土壙墓などが検出されている。これら建物構成は、市街地の検出遺構とは大きく異っている。土壙墓は単体葬と集合葬とがあり、地域によっては単体葬のみられない地域（遺跡）もある。これらの土壙墓と方形竪穴建築址との関係は、一部を除いては、土壙墓の方が新しく構築されているようだ。

遺跡地周辺の発掘調査は近年になり増加する傾向にある。そのため、これからも多くの新事実、新知見が収集できよう。遺跡地周辺は、鎌倉市内でも、あまり例のない、弥生時代から15世紀までの遺構が断続的ではあるが確認される地域であり、今後の調査、研究が待たれる。

註１．「長谷小路周辺遺跡群、由比ヶ浜三丁目194番25地点」
『鎌倉市緊急調査報告・５』

註２．1989年調査。海抜1.8～2.8mに多くのゴミ（遺物・貝殻など）が棄てられており、この中には鉄カマなども含まれている。

註３．1988年調査。本遺跡に南接。土壙墓にマウンド等は確認できなかった。副葬品は死者の左下肢骨片に存った。

第２章　調査の経過と堆積土層

Ⅰ　調査の経過

発掘調査は試掘調査を経て、昭和63年６月２日から８月31日にかけて実施した。調査にあたっては、現況が駐車場（アルファルト舗装）であったため、これらを掘削機械により除去すると同時に、地表より約１mの攪乱土層も取り除いた。

又、本遺跡に南接する長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目258番１地点）と密接な関係が検出遺構に認められると推定されたため、グリット軸、名称、割付けも同じものを使用した。使用したグリット記号は南北方向は南から北にアルファベット、東西方向は東から西に数字を使用しているが、南接遺跡のものをそのまま使用したため、本遺跡の標示数字等は変則的になっている。グリットは４m方眼を使用した。グリット南北軸に磁北とは５°西にズレている。

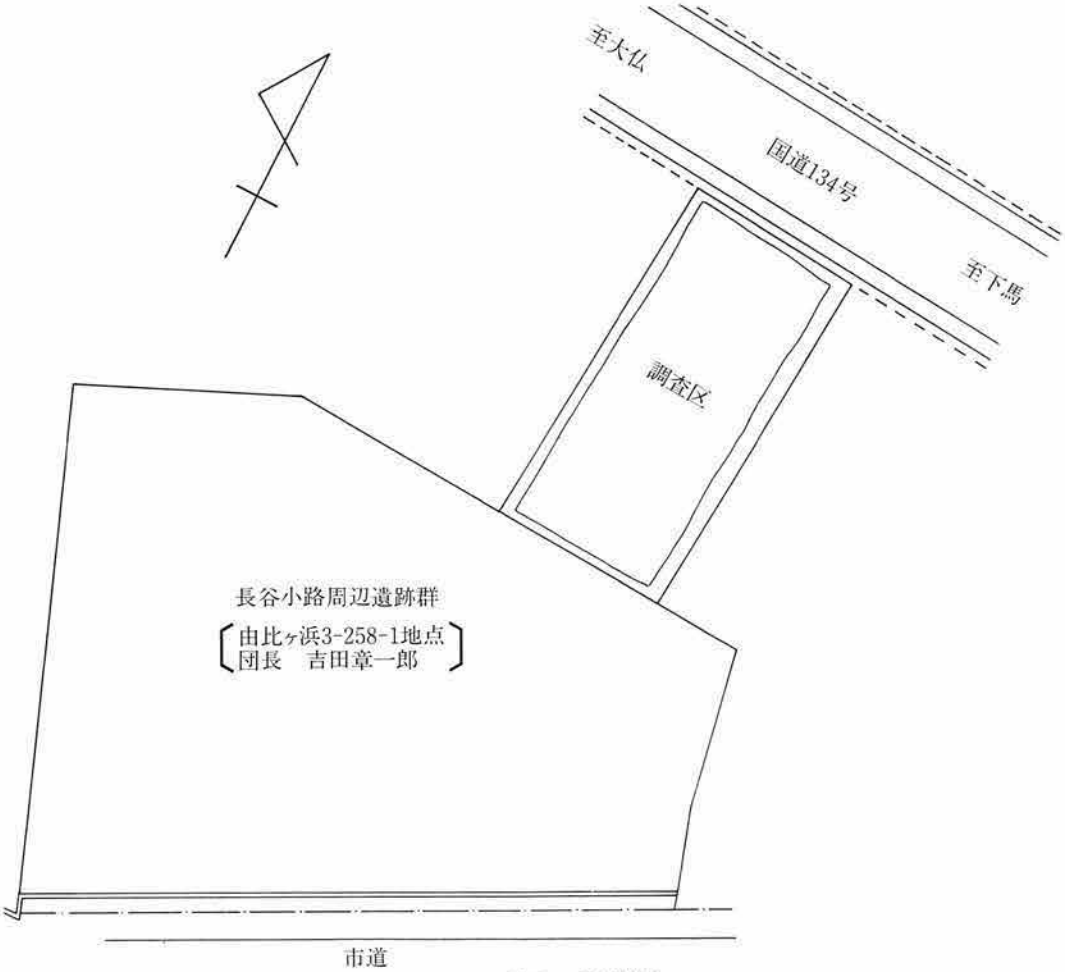


Fig. 2　グリッド割付図

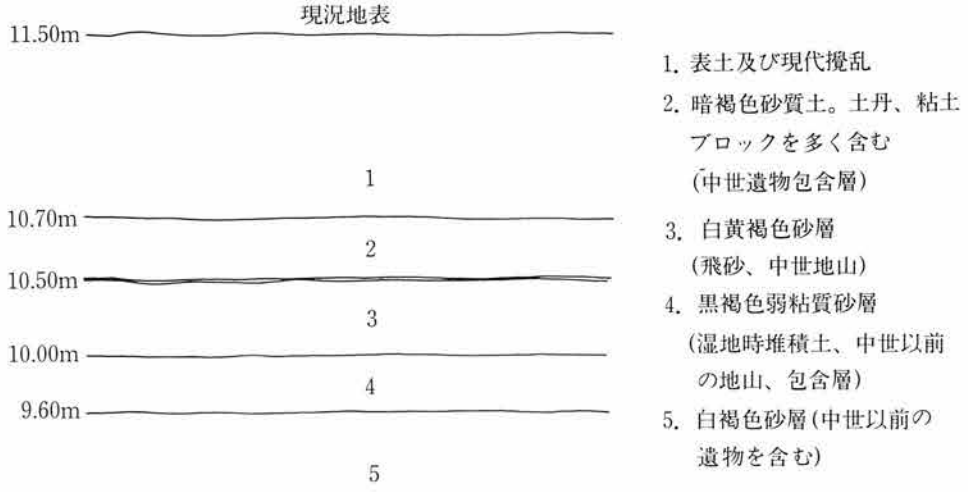


Fig. 3　堆積土層模式図

II　堆積土層

本遺跡内では大別して５層の堆積土層が確認された。現況での駐車場面は北から南に向ってゆるやかに傾斜している。

第１層は表土及び現代攪乱層。現地表下１m前後にまで達している。第２層は暗褐色砂質土、中世遺物包含層である。小土丹、炭化物などを多量に含んでいる。

第３層は白黄褐色砂層、中世（14世紀頃の）基盤層である。海岸からの飛砂の堆積層と考えられている。まったくの無遺物層である。本遺跡および周辺での中世基盤層として把えられている。上面に版築地行様のものはみられない。上部が近・現代に削平を受けている可能性がある。

第４層は黒褐色弱粘質砂層。中世以前の基盤層および遺物包含層である。又、本層の上面に無数にある小穴から、本層が堆積後しばらくの間、湿地様の土地であったことが判明した。小穴は水辺に住む陸生の小虫のものであろう。

第５層は白褐色砂層であるが、本土層も飛砂で形成されており、層内に２～３層の薄い黒褐色弱粘質砂層に類似する層がベルト状堆積をしている。これらの土層内の遺物は採集できなかった。しかし、縄文時代の土器は出土していないから、弥生時代以降の堆積であろう。

第３章　検出された遺構と遺物

調査では白黄褐色砂層（第３層）上および黒褐色弱粘質砂層（第４層）上の２枚の確認面から多くの遺構が検出された。遺構は井戸１基、方形竪穴建築址12基、溝８本、土壙墓２体、散乱人骨２個所、炉状遺構１、柱穴、土壙などであるが、これらは確認面の違いにより明確な時代区分が認められる。

白黄褐色砂層上から検出された遺構群は、方形竪穴建築址、井戸、土壙墓、土壙などであるが、この一群の遺構内出土遺物には手づくねかわらけなど13世紀代の遺物はほとんど含まれていない。黒褐色弱粘質砂層上（あるいは中）で検出された遺構は土壙墓、溝、散乱人骨などであり、これらの一群の遺構内出土遺物には若干の中世遺物を含むものの、ほとんどは中世以前の遺物を出土している。

以上のことから、本報文中では白黄褐色砂層上の遺構群を中世、黒褐色弱粘質砂層上の遺構群を中世以前（中世初頭を含む可能性もあるが）として区分して示すこととする。両確認面の中間に堆積している白黄褐色砂層はまったく遺物を含まない自然堆積層（海岸よりの飛砂）と思われる要素が多く、両確認面間の時代差は明確である。

以下、調査により検出された遺構を中世、中世以前の区分にしたがって説明を加えていくが、以下の文中で使用するレベル数値はすべて海抜数値である。又、調査時に遺構として番号を附したものの、整理段階で疑問点が指摘された遺構については図示しなかった。そのため、図示した遺構の番号には連続性がないものもある。これらの割愛した遺構内の出土遺物はすべて、採集遺物としてまとめた。

〈中世〉

中世に属する白黄褐色砂層上からは方形竪穴建築址12基、井戸１基、土壙墓１基、溝内散乱人骨１個所、炉状遺構１基、柱穴、土壙などが検出されている。白黄褐色砂層の上に堆積しているはずの中世遺物包含層および版築面はすでに削平を受けており、ほとんど残っていない。そのため、すべての遺構が同一面で確認されている。覆土は同色、同質の堆積土であり、時間的な制約もあり、詳細な切り合い関係は把めなかったものもある。それらについては可能な限り同一図に載せ、確認できた相互関係を記した。

以下、方形竪穴建築址、井戸、土壙墓、炉状遺構、その他遺構の順に説明を加えていく。

Ｉ．方形竪穴建築址

極く部分的な検出にとどまったものも含め19基が検出されたが、図示にしたのは12基である。いずれの方形竪穴建築址も床面は黒褐色弱粘質砂層を掘り抜いており、多くの中世以前の土器片等を

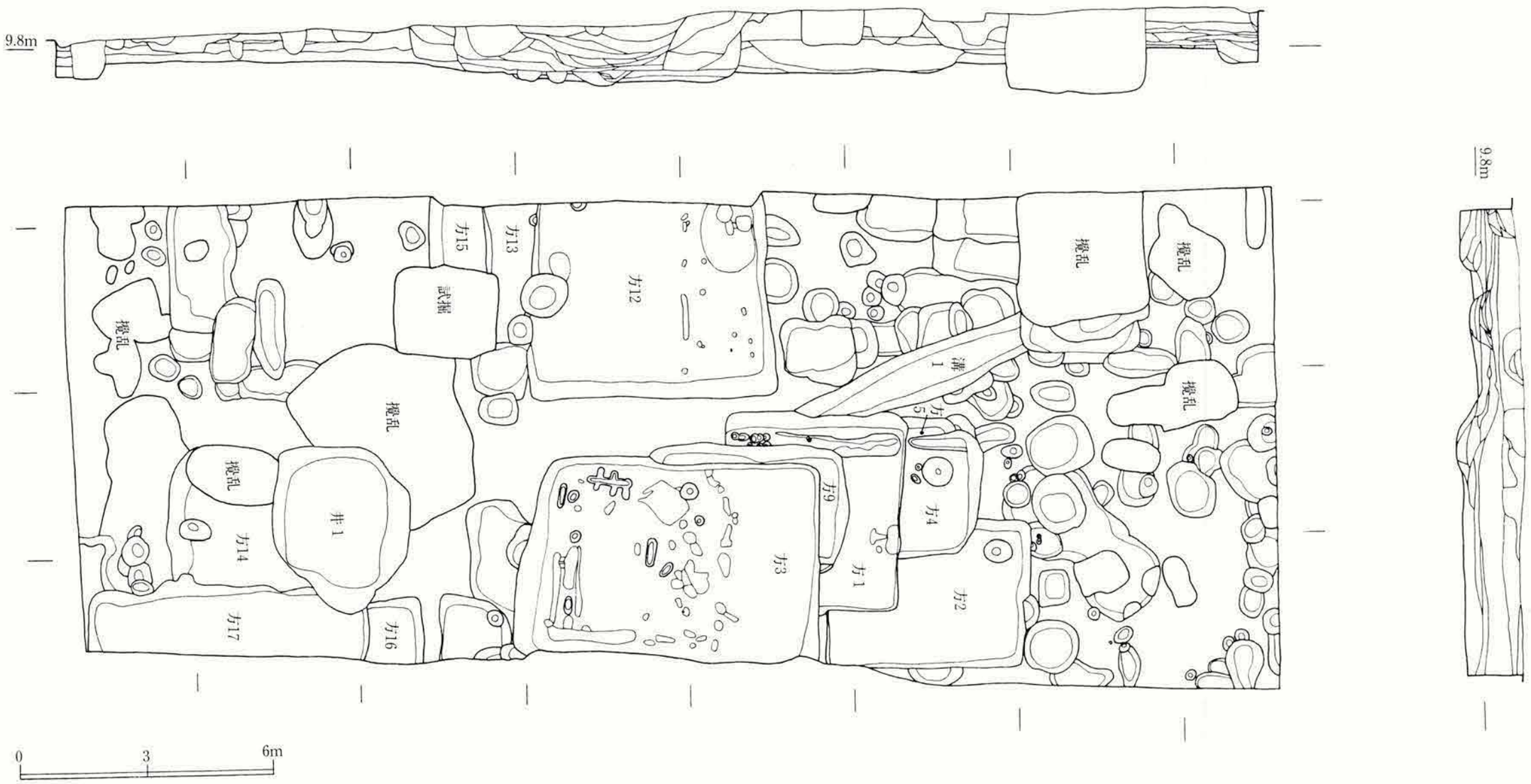


Fig. 4　中世遺構全体図

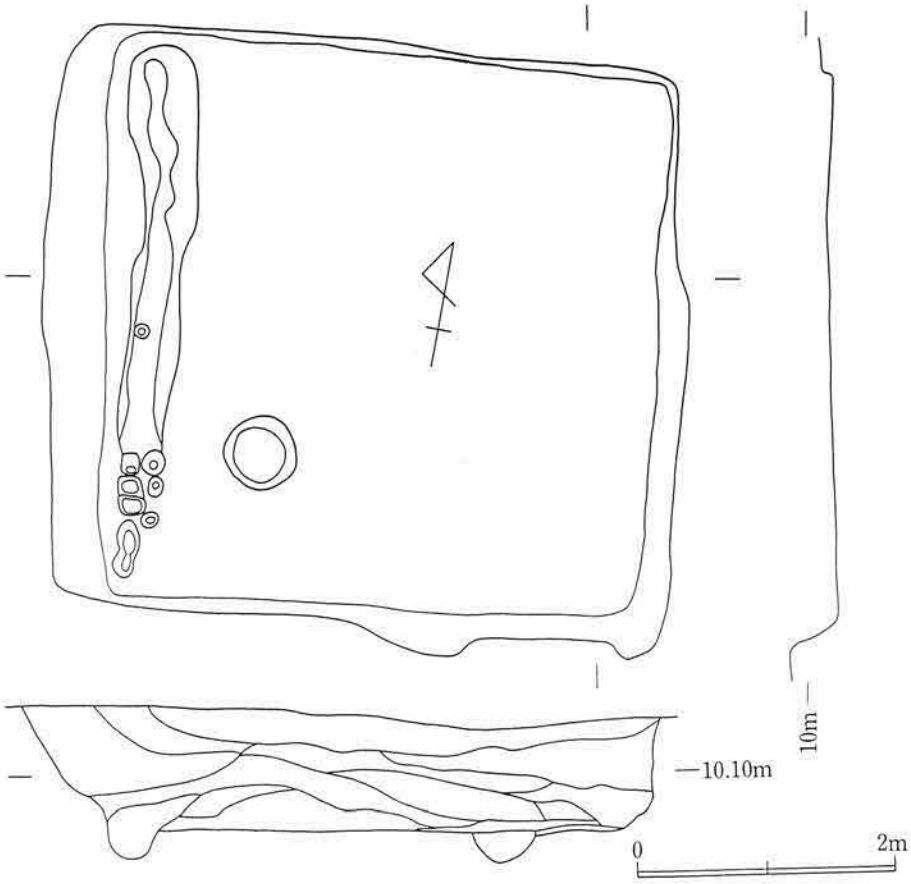


Fig. 5　1号方形竪穴建築址

覆土内に含んでいる。

(1) 1号方形竪穴建築址

L-6グリット周辺で検出された。北側部分で2号、4号、5号方形竪穴建築址を切って埋り込まれている。平面形は東西方向に長軸を持つ長方形で確認壁高95cm、床面レベル9.0m前後、南北軸N－3°－Wを測る。竪穴規模は東西5.0m、南北約4.5m（共に上幅）で掘り込み壁はほぼ垂直、床面は平坦である。

床面上には礎石あるいは木痕などの明確な基礎構造は確認できなかったが、西壁直下に沿って溝様の遺構と小柱穴が検出された。溝様遺構は上幅30～50cm、深さ15～25cmで断面形はU字形を呈している。周辺の遺跡で検出されている方形竪穴の床面上に残る基礎木の痕跡とも異なるように思われる。小柱穴は床面上南西隅近くに8口集中しているが、径15～20cm、深さ5～15cmと小規模でもあり、判然としない。

竪穴覆土内からは多くの遺物が出土している。復元図化の可能なものは Fig. 6、 Fig. 7 に示したが、この他に小片の舶載磁器片、常滑甕片などが出土している。以下、図示した遺物について若

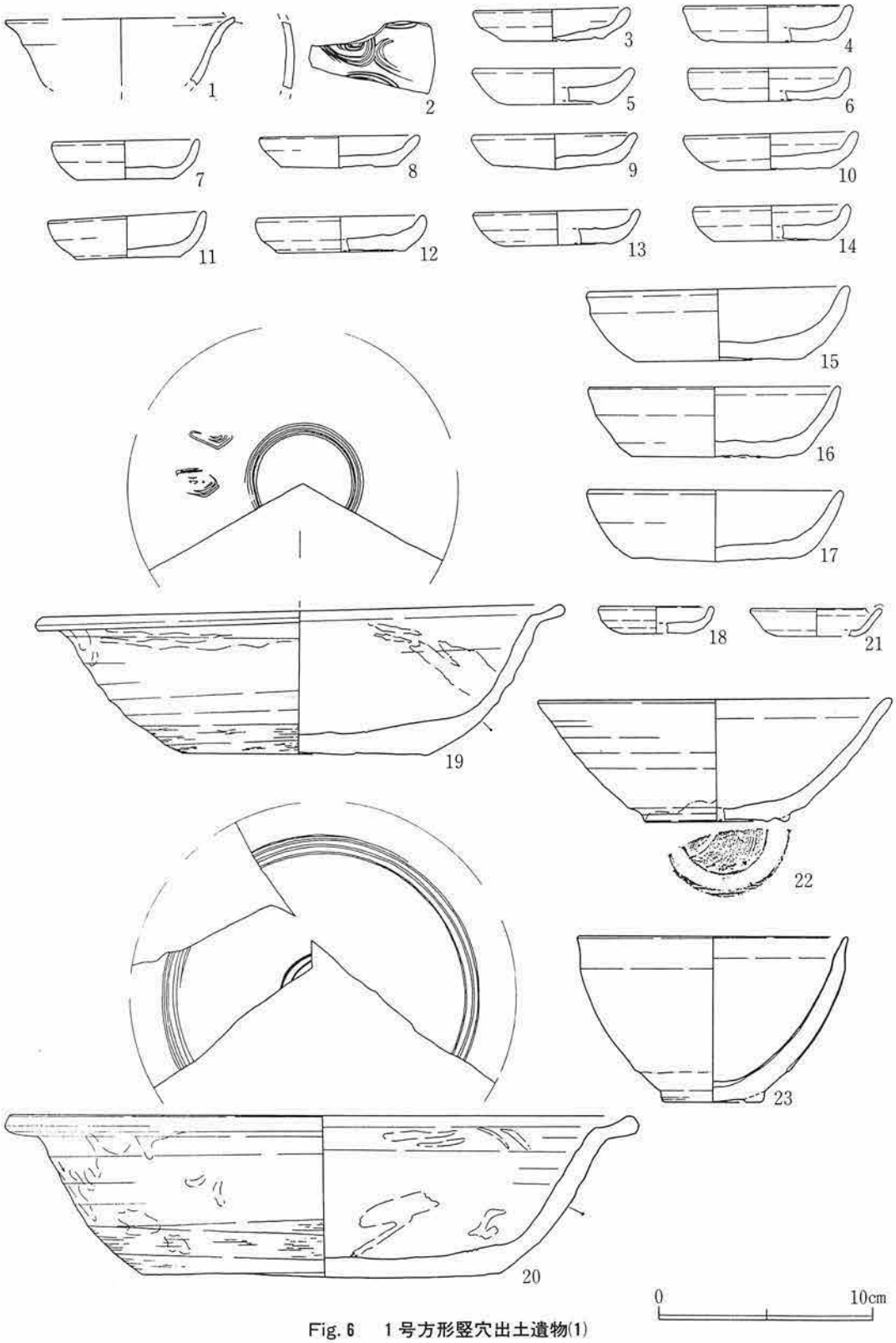


Fig. 6　1号方形竪穴出土遺物(1)

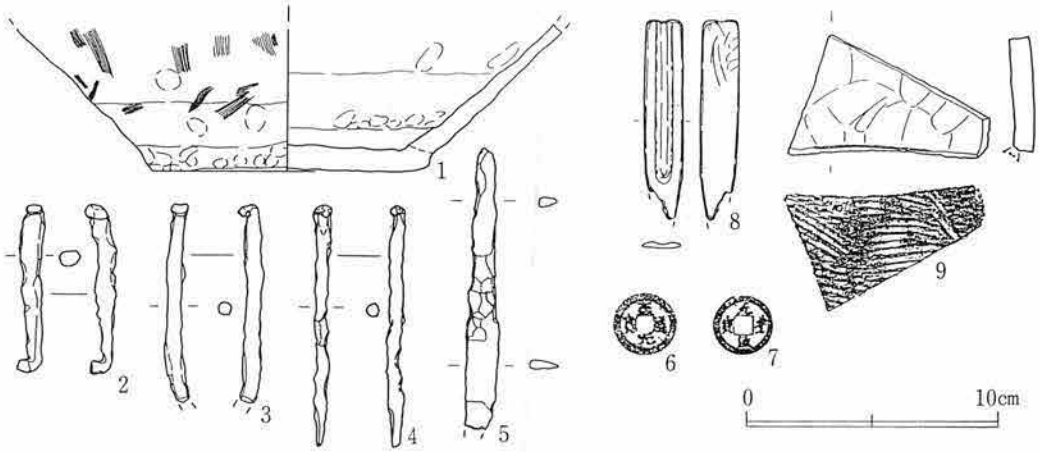


Fig. 7　1号方形竪穴出土遺物(2)

干の説明を加える。

Fig. 6－1、2は舶載磁器。1は口兀の白磁、2は青白磁梅瓶片。1の復元口径は10.6cm。3～18はかわらけ。口径は3～14が7～8cmの小皿、15～17が12cm前後の大皿であろう。18は口径5cm弱の極小皿であるがコースターあるいは口唇部が内側に折れ曲る「内折れ小皿」とも異なる。出土したかわらけの胎土は粉質ではなく、砂を含んだ粒の粗い土であり、外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残っている。側面形は小皿では器高が低く直線的に外反する側壁を持つものが多く、大皿では側壁中位に曲折点を持つものが多い。

Fig. 6－19～23は瀬戸製品。19、20は灰釉折縁鉢。19は口径24cm、器高6.7cm、底径10.6cm、外底ヘラ切り。内底面には重円文と蓮弁様の花文が線刻される。20は口径29cm、器高7.6cm、底径16.6cm、外底ヘラ切り。内底面には中央部と外周に重円文が線刻される。21は精良胎土の入子、口径6cm強。22は灰釉碗、口径16cm強、器高5.8cm、高台径6.6cm。外底面は回転糸切りの後に貼り付け高台。23は天目茶碗、口径12.5cm、器高7.7cm、高台径4.5cm。

Fig. 7－1は常滑甕。底径22cm弱、残存高約11cm。Fig 7－2～4は鉄釘。ほぼ全体の把める4は長さ約9.5cm、1辺5mmほどの方形断面を持ち、頂部は折り曲げられている。5は刀子。刀身幅約1.2cm。6、7は銅銭。8は骨製笄。9は須恵器片。

(2) 2号方形竪穴建築址

1号方形竪穴の北東で検出された。1号、4号方形竪穴に南東部を壊され、東壁は調査区外に推定される。確認規模は南北4.7m強、東西3.3mで、壁高約80cm、床面レベル9.7m前後、南北軸N－4°－Wを測る。床面は平坦であるが、特につき固めたような痕跡は認められない。床面上には竪穴北西隅の柱穴を除いて、他にはまったく遺構が検出されていない。北西隅で検出された柱穴は径60cm前後、深さ30cmを測るが、他の竪穴隅にも存るべきものなのかは把めない。

覆土内の遺物はFig 9－1、2に図示した2点のかわらけの他に常滑甕片、瀬戸製品の破片。舶載磁器片などが若干量あるが、いずれも小片であり図示できなかった。2点のかわらけは1が10.5cm、

2が12.5cmの口径を持つ。中皿と大皿であろう。側壁は1が口縁部内湾気味に対して2は外反傾向を示している。

(3) 4号方形竪穴建築址

1号方形竪穴建築址北で検出された。2号方形竪穴を切り、1号方形竪穴に南半分を切られる。確認規模は東西約3.0m、南北1.9m、壁高約1m、床面レベル9.6m前後、南北軸N－6°－Wを測る。床面上遺構としては西壁直下の溝様遺構および大小3口の柱穴が確認されたが、上屋を推定するほどの配置は認められない。溝様遺構は上幅35～40cm、深さ10cm前後、断面方形を呈し、柱穴は大が径70cm、深さ15cm、小が径15～20cm、深さ10～15cmを測る。

遺物は小面積の調査ということもありさほど多くはない。図示できたのはFig 9－3～6の4点であり、この他にはかわらけ片、常滑片などが少量出土している。3は常滑甕片の周囲を研磨した製品。砥石あるいは鉄鍋のスス落しとして使用されたのだろう。4～6は銅銭。4は判読不能。5、

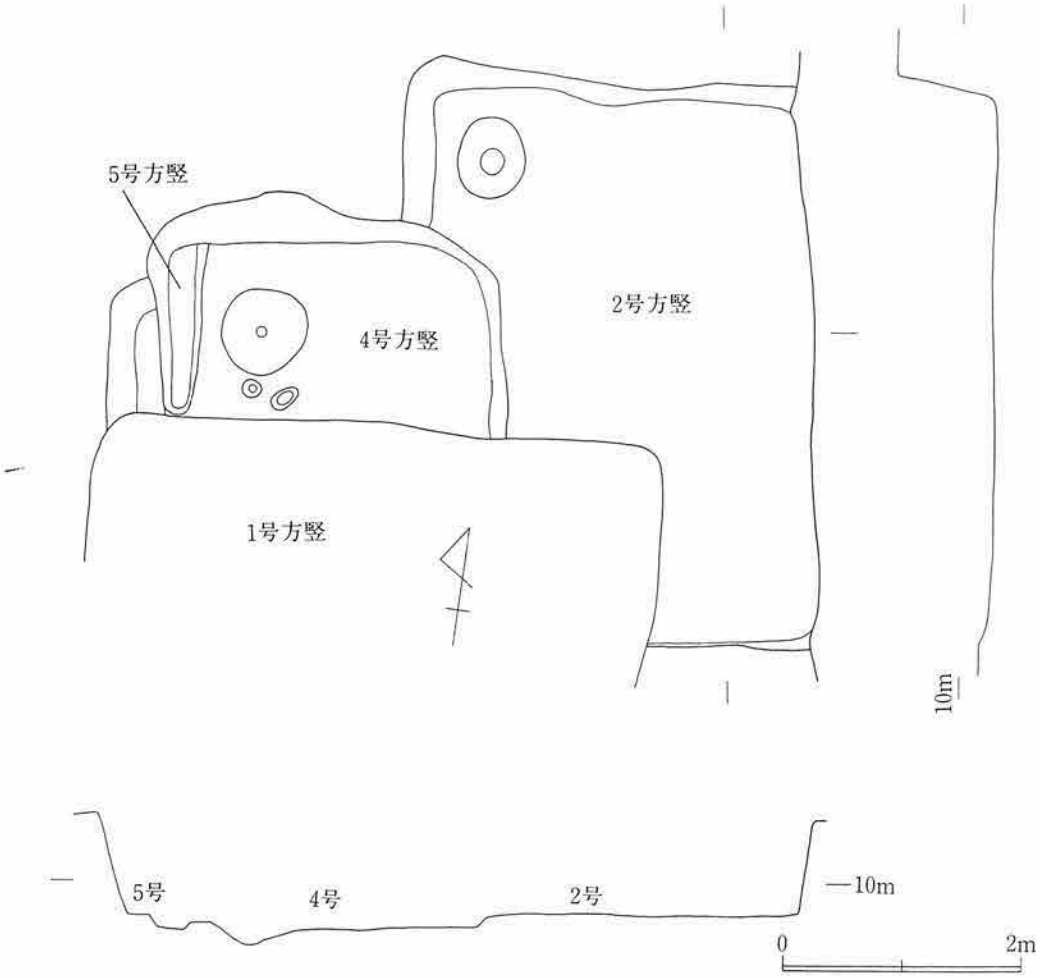


Fig. 8　2号、4号、5号方形竪穴建築址

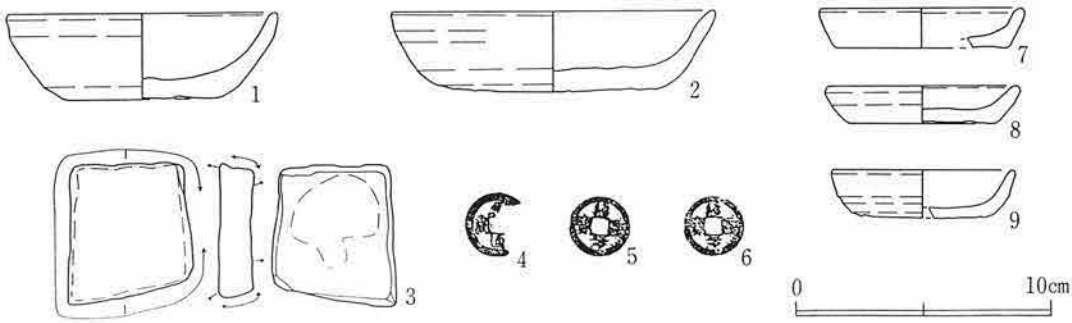


Fig. 9　2号、4号、5号方形竪穴出土遺物

6は紹聖元宝である。

(4) 5号方形竪穴建築址

ほとんどを1号、4号方形竪穴建築址に切られ、極く一部の検出にとどまった。4号方形竪穴の施設の可能性も残るが、ここでは区別して図示した。確認規模は南北1.1m、東西50cm、壁高80cm強、床面レベル9.7m前後。

遺物はFig 9 - 7 ～ 9に図示した3点のかわらけの他に若干の舶載磁器が出土している。3点のかわらけはいずれも口径7～8cmの小皿で、口唇部はやや直線的に外反している。いずれのかわらけも胎土は砂を含んだやや粒の粗い土で、外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が付く。

(5) 3号方形竪穴建築址

調査区内ほぼ中央で検出された。北西部で9号方形竪穴建築址を切っている。又、床面検出の柱穴を観察すると、これらが一区画を形成しているようにも思われる。調査時には、この区域を若干の堆積土層の変化から、10号方形竪穴としていたが、明確な変化として把めなかったため、ここでは一つの竪穴としてまとめた。出土遺物も同様に扱った。

本方形竪穴建築址は本遺跡で検出されたなかでは最も残存状況が良い。検出規模は東西5.3m、南北7～7.2m、壁高80cm、床面レベル9.2m前後、南北側N－6°－Wを測る。床面上からは約50口の小柱穴および溝様の遺構が検出されている。これらの柱穴は、北側に約2mの幅を残して南側にのみ認められる。深さは5～15cmで浅いものが多い。溝様の遺構などは根太木の据え跡とも考えられよう。この場合、南壁から約4.50m付近に切り合いの線を推定しても良いかもしれない。

遺物は覆土上半分を中心に多量に出土しているが、ほとんどはかわらけであり、舶載磁器、瀬戸などは極めて少ない。Fig11- 1 ～75、Fig12- 1 ～42はかわらけ。本遺跡検出の方形竪穴では出土量がもっとも多い。1は口径4.2cm、器高1cm弱、底径3cm弱で、低い側壁は直立気味である。「内折れ」あるいは「コースター」と呼ばれているものであろう。他には破片もない。

Fig11- 2 ～75、Fig12- 1 ～22は口径7～8cm前後の小形皿。いずれの胎土も砂をやや含んだ粒の粗い土で、外底は回転糸切り、スノコ痕が残る。側壁は直線的に外反するもの、口唇部が内湾気味のものなどの変化は認められるが、器高は1.5～2cmのものがほとんどで、2cmを越えるものは極くわずかしか含まれていない。Fig12-22は側壁の一部が内側に押されている小皿。約半分を欠くため「耳

皿」的な形状をしていたものかは把めない。図示した96個の小皿のうち、灯明皿として使用されていたのは6個だけである。

Fig12-23～42は口径12～14cmの大皿。胎土、整形は小皿と同じである。側壁は直線的に外反するものはほとんどみられず、端部のみ外反傾向を示すものと、内湾傾向を示すものとが混在している。20個体のうち、灯明皿として使用されたのは3個である。

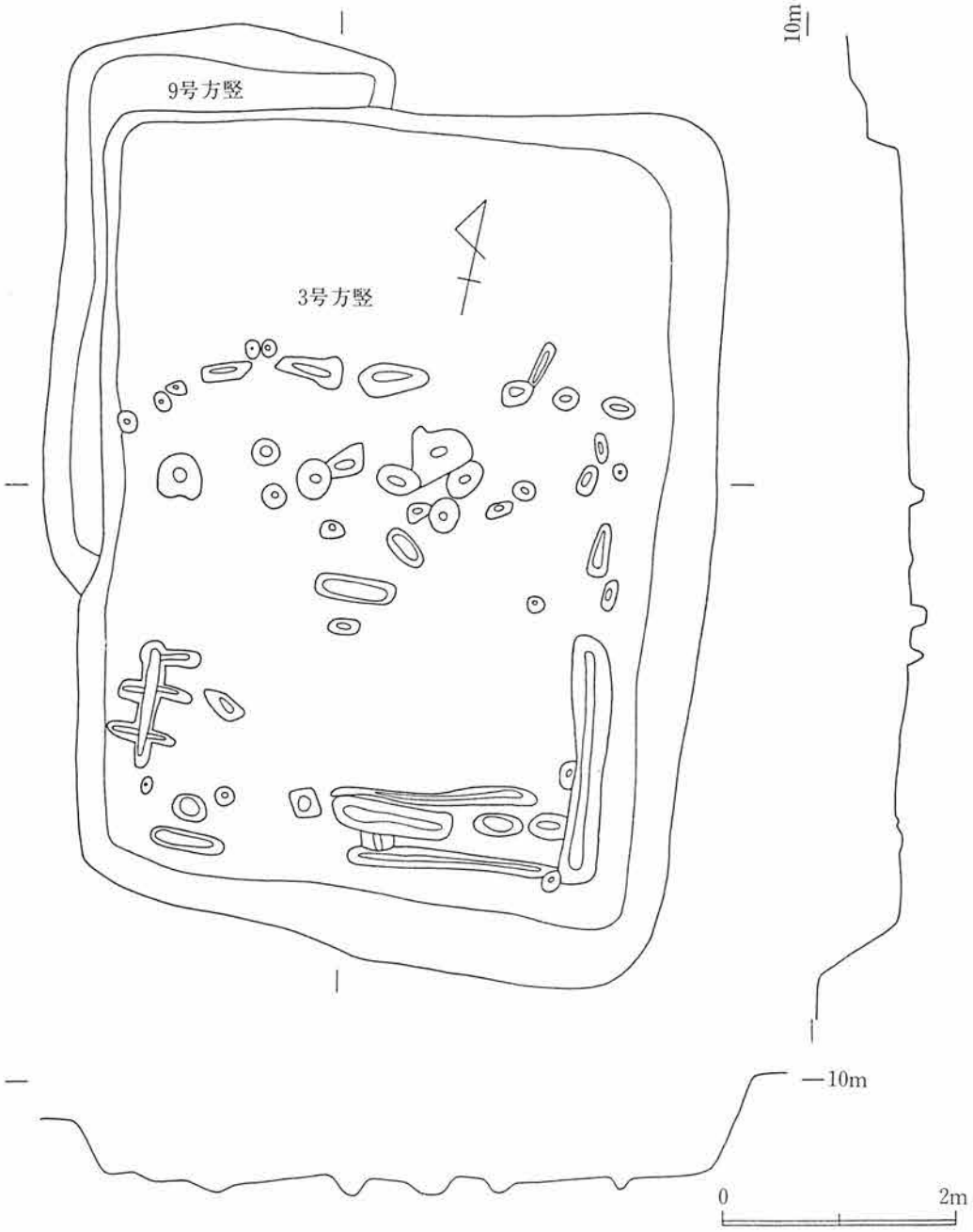


Fig.10　3号、9号方形竪穴建築址

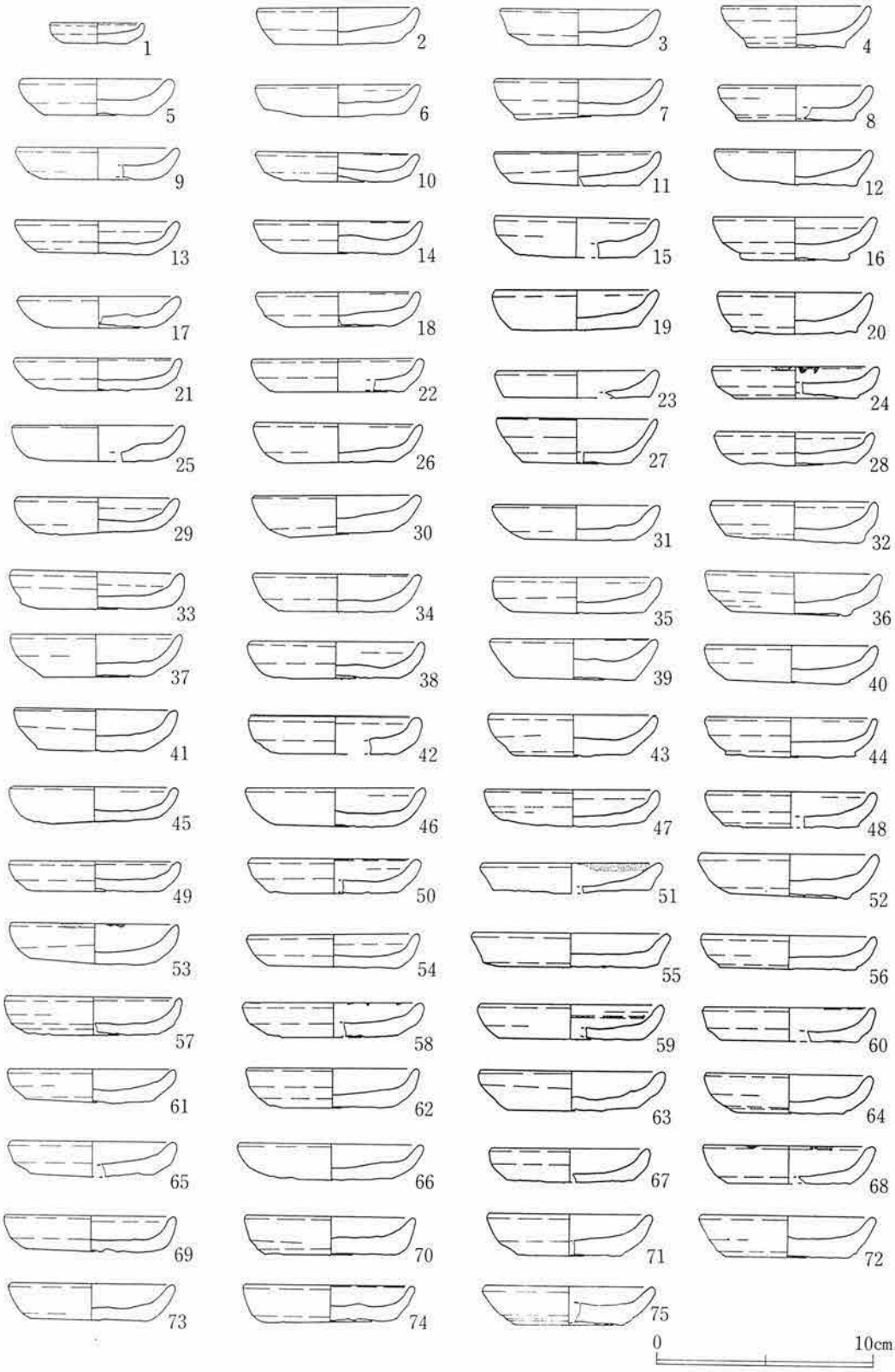


Fig.11　3 号方形竪穴出土遺物(1)

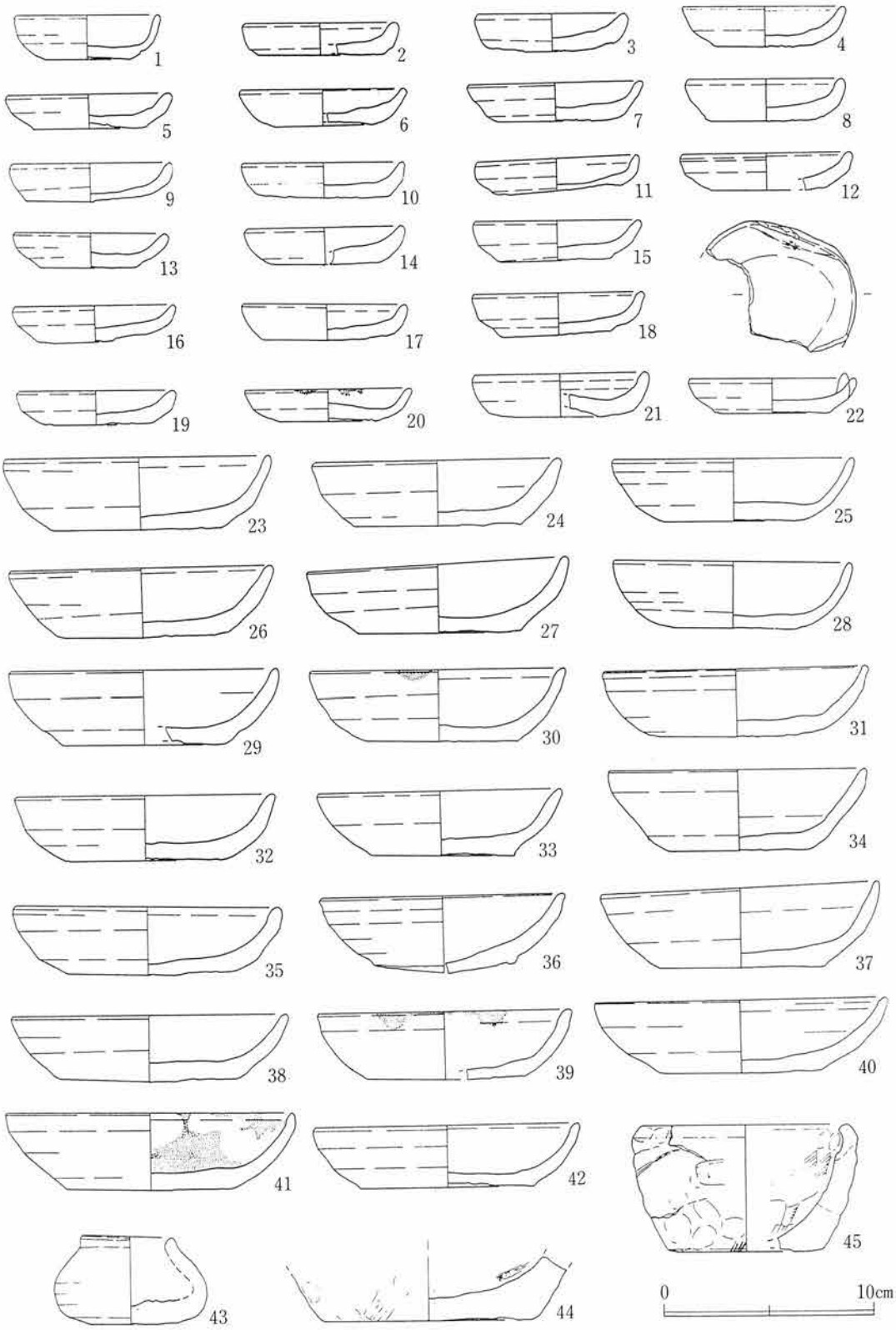


Fig.12　3号方形竪穴出土遺物(2)

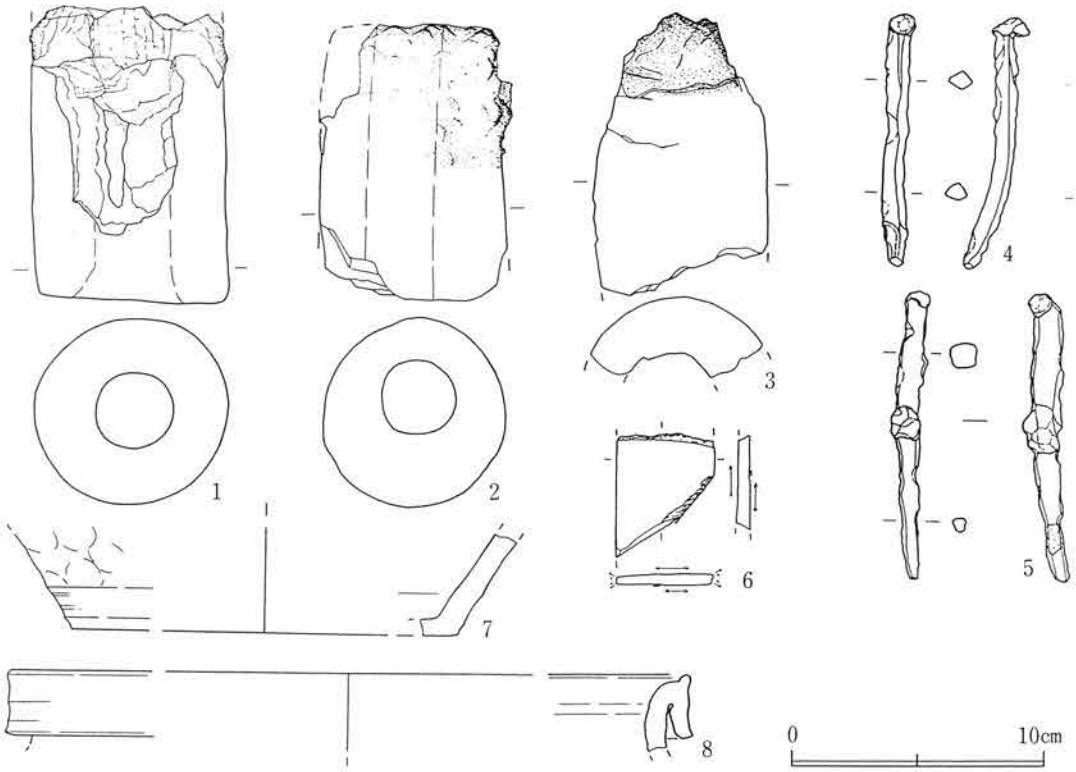


Fig.13　3号方形竪穴出土遺物(3)

Fig12-43～45は土製品。43はかわらけと同質土を使用した無頸小壺、同様の製品は周辺の遺跡でも多く出土している。口径4.2cm、胴部最大幅7.2cm、底部4.2cm、器高4.2cm、外底回転糸切りの後にスノコ痕あり。44、45は植物繊維を多く含んだ粒の粗い胎土の土製品。胎土はフイゴの羽口に用いられているものと類似している。44は底径10cm弱。45は口径10cm弱、底径7.5cm、器高6cmのややコップ形を呈する製品。2点共に溶触物は付着していないが「ルツボ」と考えられる。

Fig13-1～3はフイゴの羽口。3点ともに破片のため、原形は把めない。胎土は粗い石粒、植物繊維を多く含み、粉質である。1、2は最大径7.5cm前後で中央に3cm前後の孔が穿けられている。Fig13-4、5は釘。2点共に先端部をわずかに欠くが、4は10cm、5は11.2cmが残る。

Fig13-6は砥石。Fig13-7、8は常滑製品であろう。7は常滑こね鉢、復元底径15cm強。内面はよく磨かれている。8は常滑の甕。復元口径53cm前後、口縁部はN字に近く折り曲げられ、縁帯幅5.1cm。

(6) 9号方形竪穴建築址

3号方形竪穴建築址北西で検出されたが、ほとんどを3号方形竪穴によって切られている。確認規模は東西で282.8m、南北4.8m、壁高70cm、床面レベル9.3m前後。床面上からは柱穴等の遺構はまったく検出されていない。

遺物は覆土上半分を中心としてかわらけ、常滑甕片、舶載磁器片等が若干量出土しているが、小片が多いため図示できるものはない。

(7)12号方形竪穴建築址

調査区中央西壁際で検出された。中世地山上でのプラン確認では１個の方形竪穴建築址であったが、掘り下げの結果３基の重複と判明した。３基の方形竪穴建築址の最終的な掘り上げ調査後の姿はFig14になるが、土層図等の資料からは13号方形竪穴が最も新しい構築である。

本方形竪穴は南側の覆土のほとんどを13号方形竪穴によって削平されている。本建築址の掘り方の方が深いこともあり、平面形状では一応の規模が把めるが、床面遺構等は削平を受けていると思われる。

確認規模は東西4.80m、南北5.60～6.0m、壁高1.7m、床面レベル8.90m前後、南北軸N－4°－Wを測る。床面上北半分には約20口の小柱穴及び溝様遺構が検出されている。本来は南半分にもこのような遺構が存在していたものと思われる。小柱穴は径15～40cmほどの円形ないし方形で、深さは５～15cmと浅い。

遺物は竪穴の床面が地表から深くまで掘り下げられていることもあり、多量に出土している。本竪穴出土のものはFgi15とFig16-１～８に図示したが、このなかには13号方形竪穴出土のものも若干量含まれてしまっている可能性がある。12号、13号のいずれから出土したか把めなかったものはFig16-９～13に、13号方形竪穴出土のものはFig16-14～19に示した。

Fig15-１～15はかわらけ。口径７～８cmの小皿と12～14cmの大皿とに区分できる。胎土はやや砂を含んだ粗い土で、外底回転糸切り、スノコ痕がほとんどに付く。小皿では直線的に外反する側壁を持つものが多く、口唇部が内湾するものは少ない。大皿では内湾傾向を示すものが目につく。

16～20は舶載磁器。16・19は口兀白磁皿、白濁色の釉がかけられ、口唇部のみ削り取られる。各寸法は16の底径が６cm弱、17～19の口径が17から９cm、10.8cm、10.9cmを測る。20は鎬蓮弁文青磁碗、復元口径14.5cm。内外面に淡青緑色の釉があつくかかる。

21～29は常滑製品であろう。21は甕口縁部、復元口径35cm前後。22は甕底部、復元底径28cm強、外面底部近くに指頭整形痕が残る。23は貼り付け高台を持つこね鉢。24は甕口縁部。23の底径は25cm弱、24の口径は28cm強を測る。25は壺、26、27はこね鉢、28は小壺、29はこね鉢である。Fig16-１はこね鉢。山茶碗窯の製品であろう。２～５は釘、６、７は須恵器片、８は瓦。

(8)13号方形竪穴建築址

堆積土層などの観察では12号、15号方形竪穴建築址の覆土内に掘り込まれている方形竪穴建築址であるが、掘り込みが浅いことと覆土内の切り合いということもあり、平面的に本遺構を検出することはできなかった。

堆積土層の観察による竪穴規模は南北5.6m、東西3.4m以上、壁高1.4m、床面レベル9.10m呈の規模を有していたものと考えられる。土層観察の結果では床面上に土壙あるいは柱穴様の遺構が存った事は推定できるが、平面的に把えられなかった。

遺物は、12号、13号方形竪穴建築址覆土内から多く出土しているが、明らかに13号方形竪穴建築址からの出土と考えられるものはFig16-14～19に図示した６点に限られてしまう。14～16はかわら

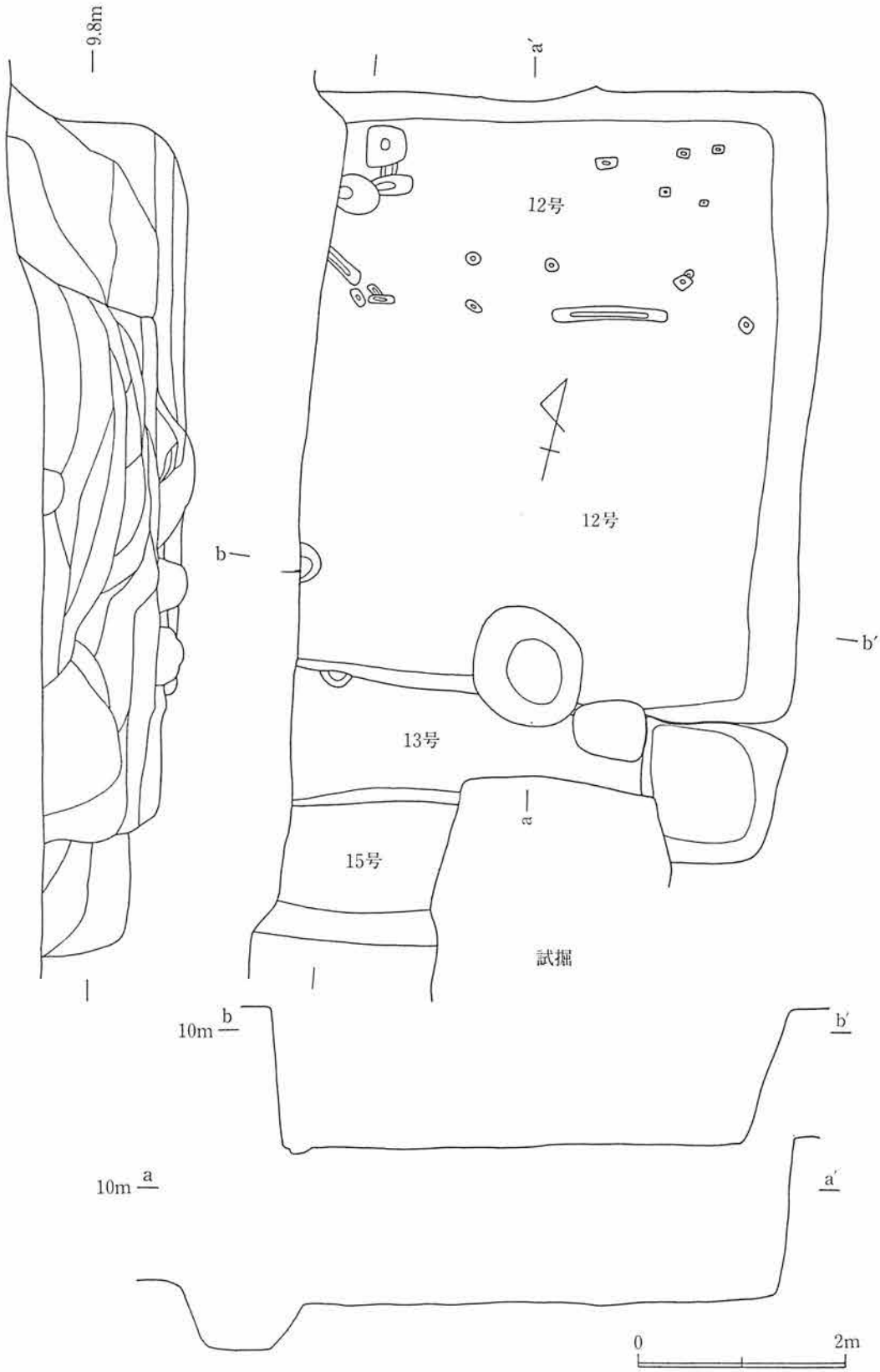


Fig.14　12号、13号、15号方形竪穴建築址

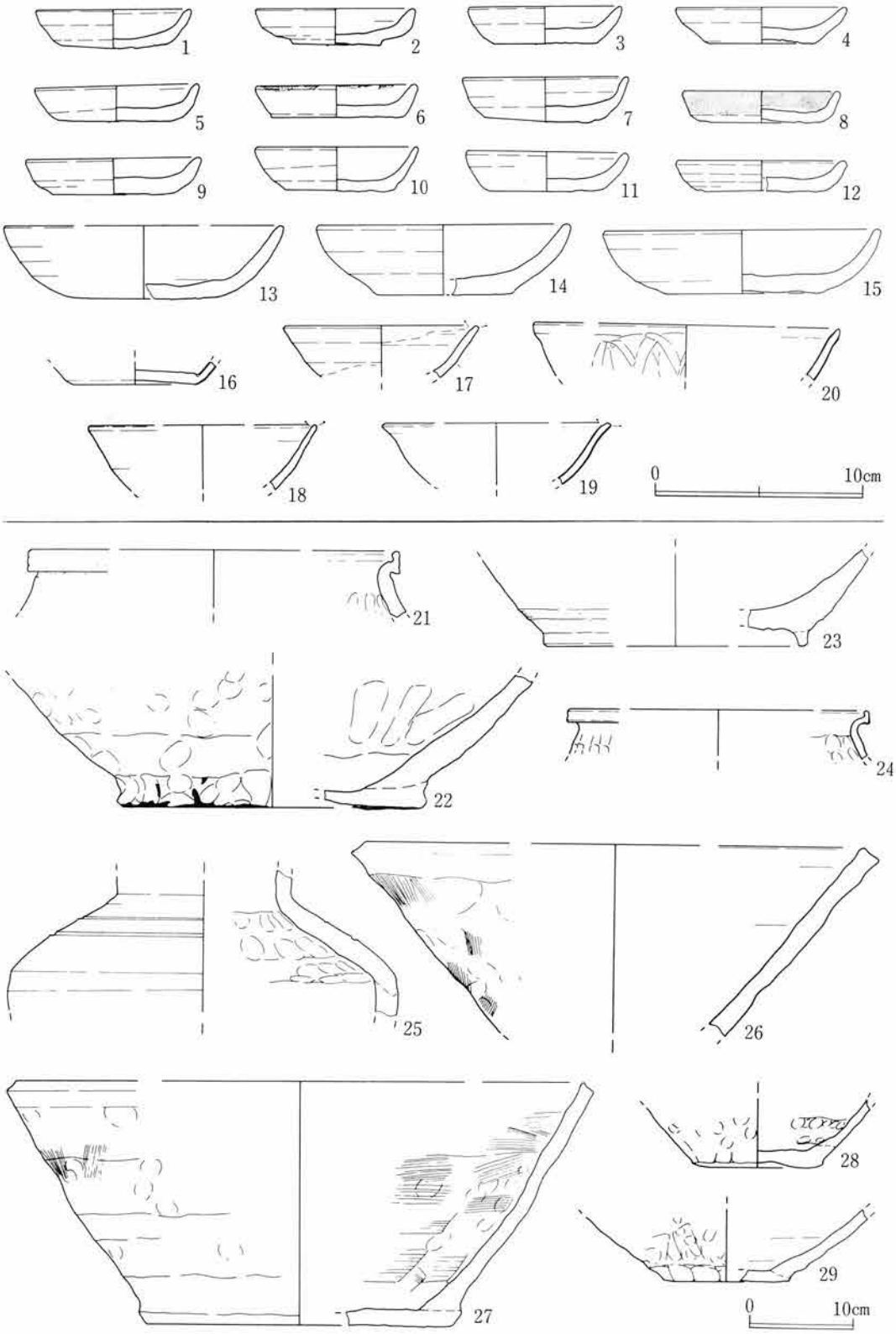


Fig.15　12号、13号方形竪穴出土遺物(1)

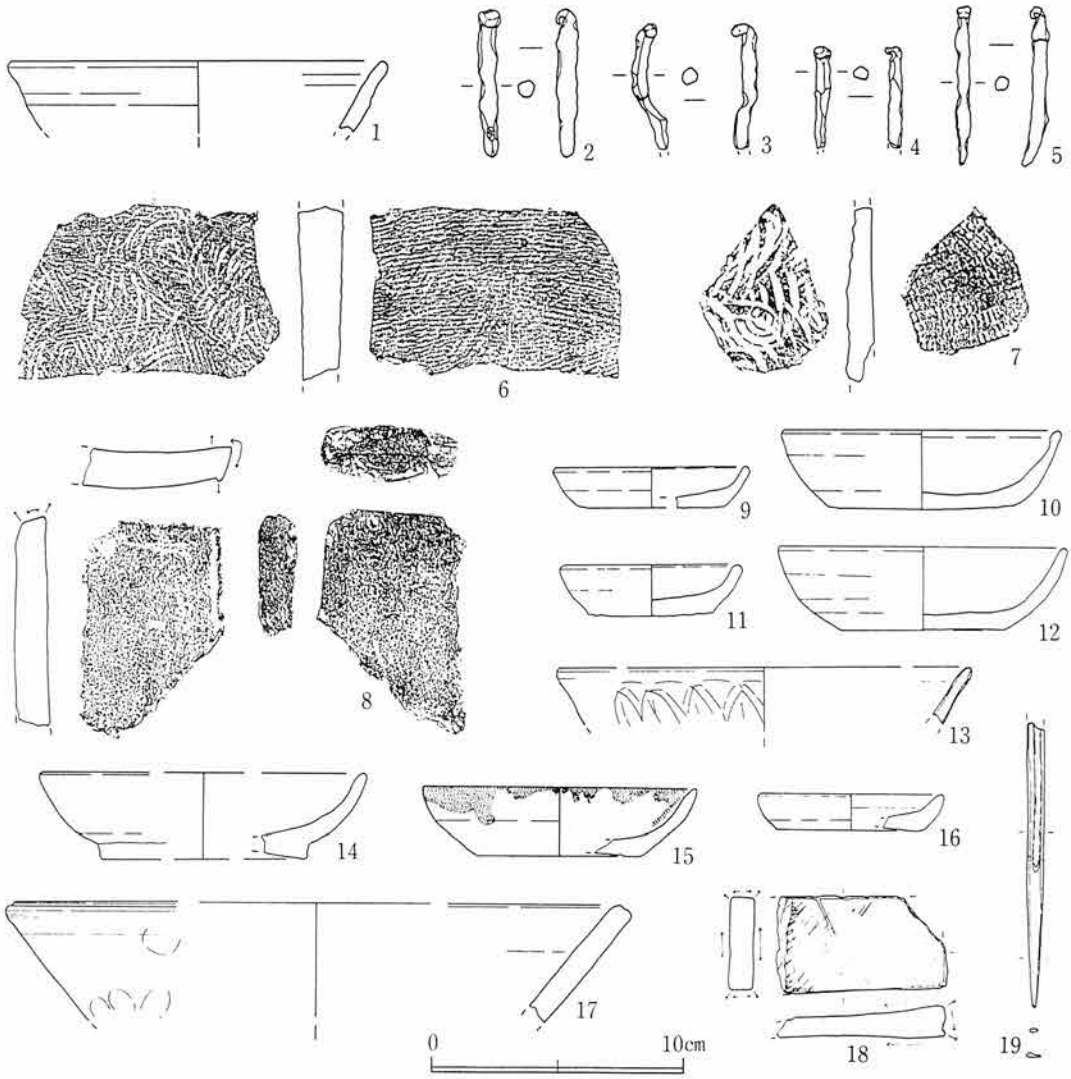


Fig.16　12号、13号方形竪穴出土遺物(2)

け。胎土はやや砂を含んだ粒の粗い土で、外底面回転糸切り。口径は14から12.6cm、10.8cm、7.2cm。17はこね鉢、復元口径24cm前後。18は砥石、石質はキメが細かく、やや軟い。幅4cm弱、厚さ1cm弱。19は骨製の笄。幅7mm、一端部を欠くが11.5cmが残る。

(9)15号方形竪穴建築址

12号、13号方形竪穴建築址の南に検出されたが、これら2基の方形竪穴により北側のほとんどを切られ、東は試掘調査壙により切られる。そのため検出された部分は極くわずかである。

確認規模は南北1.3m、東西1.5m、壁高80cm、床面レベル9.4mを測る。南北軸の方向などは残存する壁面が少ないこともあり、計測できなかった。

遺物はかわらけ、常滑甕、瀬戸製品、舶載磁器片などが若干量出土しているが、いずれも小片であるため図示できなかった。

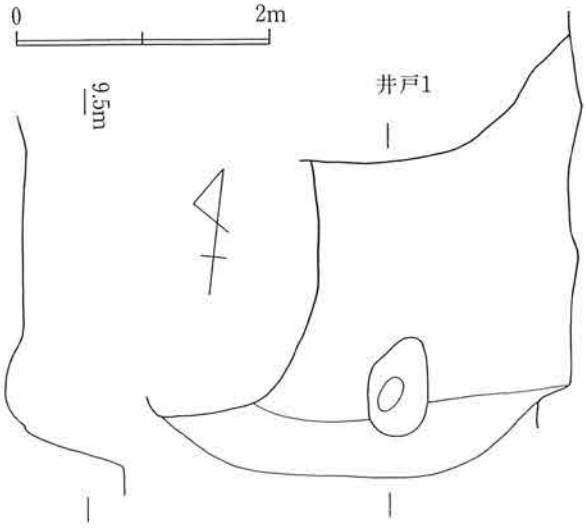


Fig.17　14号方形竪穴建築址

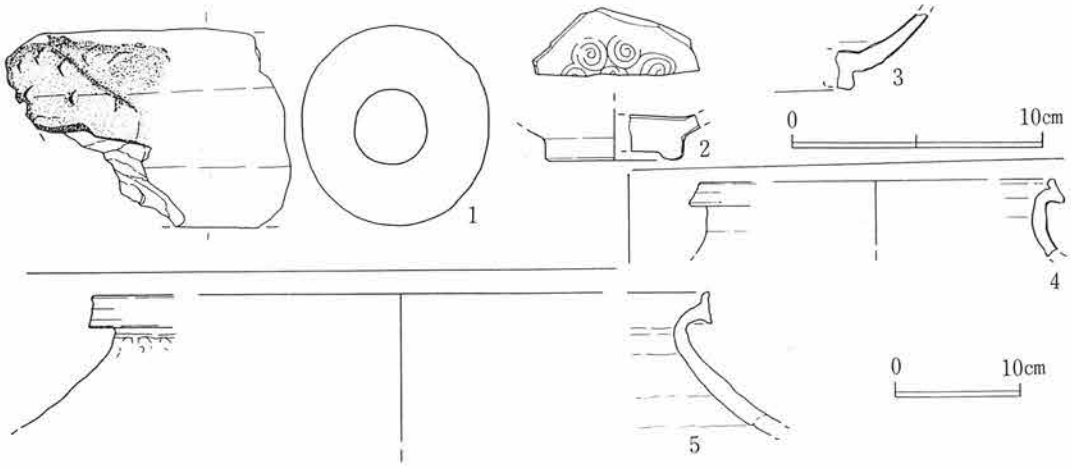


Fig. 18　14号方形竪穴出土遺物

(10)14号方形竪穴建築址

井戸１の南側で検出された。本方形竪穴は東を16号、17号方形竪穴に、北および西を井戸１および現代攪乱によって切られているために、検出された面積はわずかである。そのため形状、規模等に不明瞭な点が多いため、図示するのに多少の異和感があったが、遺物が出土していることもありここに示した。

確認観模は東西3.0m前後、南北3.20m、壁高80cm、床面レベル9.0mを測る。床面は平坦であるが柱穴が１個検出されたにとどまった。柱穴は50×80cmの惰円形を呈し、深さ15～25cm。一般的な柱の穴とは異なる。

遺物はFig18に５点が図示できたが、その他には小片のかわらけ、瀬戸などが若干量出土している。Fig18-１なフイゴの羽口、径7.5cmほどの径を持ち、中央に径３cm前後の孔が穿いている。

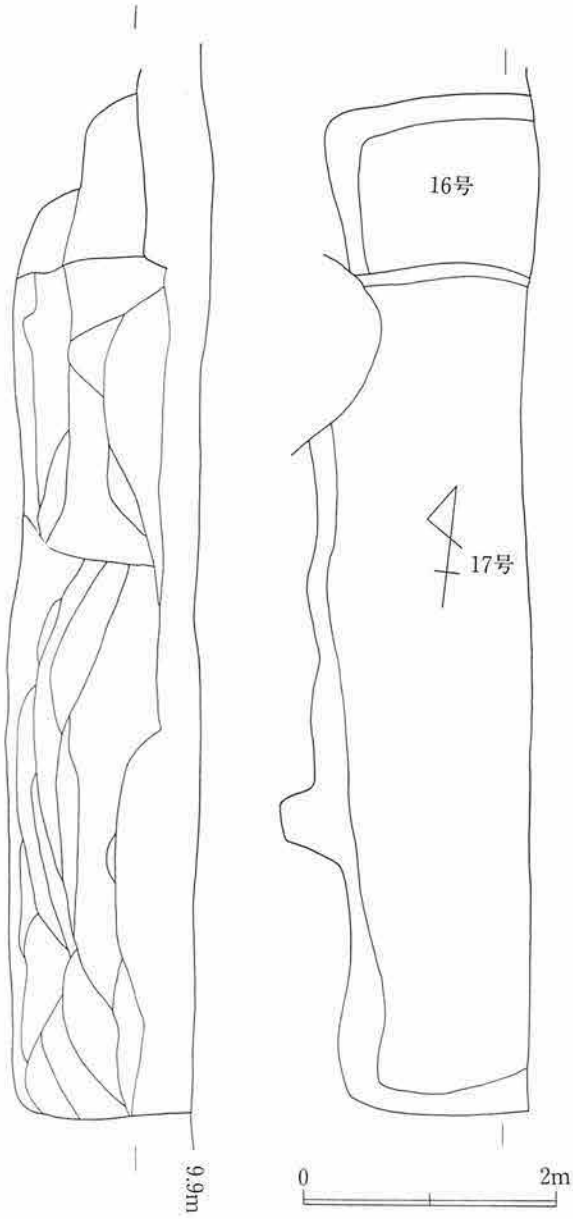


Fig.19　16号、17号方形竪穴建築址

胎土は植物繊維と粗い石粒を含んだ粉質土で、先端には黒緑色の溶触物が付着している。2、3は舶載磁器。2は内底面に渦巻文が5個以上線彫りされ、高台畳付と外底面を除く全面に青緑色の釉がかかる。高台径5.4cm。

4、5は常滑の甕。4は復元口28cm前後、口縁部は外方に引き出され、口唇端部は内側に向く。5は復元口径48cm前後。口唇端部は直立気味である。

（11）16号方形竪穴建築址

井戸1の東側、調査区東壁際で検出された。東は調査区外に延び、南は17号方形竪穴に切られているため、確認された面積はごくわずかである。確認規模は東西1.6m、南北1.3m、壁高1m、床面レベル9m前後を測る。

遺物は調査時に17号方形竪穴と区分できないままに掘り上げてしまったために、明確な伴出（覆土内）遺物が把めなかった。そのためより規模の大きい17号方形竪穴の出土遺物に含めた。

（12）17号方形竪穴建築址

16号方形竪穴の南北で検出された。井戸1に竪穴北西隅を切られ、調査区外東にさらに延びる。確認規模は東西2m、南北6.7m、壁高1.4m、床面レベル9m前後、南北軸N－5°－Wを測る。床面は平坦であるが、柱穴などの遺構は確認できなかった。

遺物は16号方形竪穴建築址覆土内を含めて多く出土している。Fig20に図示した遺物は両方形竪穴建築址覆土内出土のものであるが、特に出土竪穴の区分はできなかった。以下、説明を加える。

1はフイゴの羽口、径は不明だが、先端部に黒緑色の溶触物が付着している。2～8はかわらけ小皿。口径7～8cmで胎土はやや砂を含んだ粒の粗い土のものがほとんどであるが、2は粒が細かく、8は砂分が多い。8の外底面に残るゆるい回転糸切り痕などからは、これが鎌倉初期に見られる一群に近いことを示している。

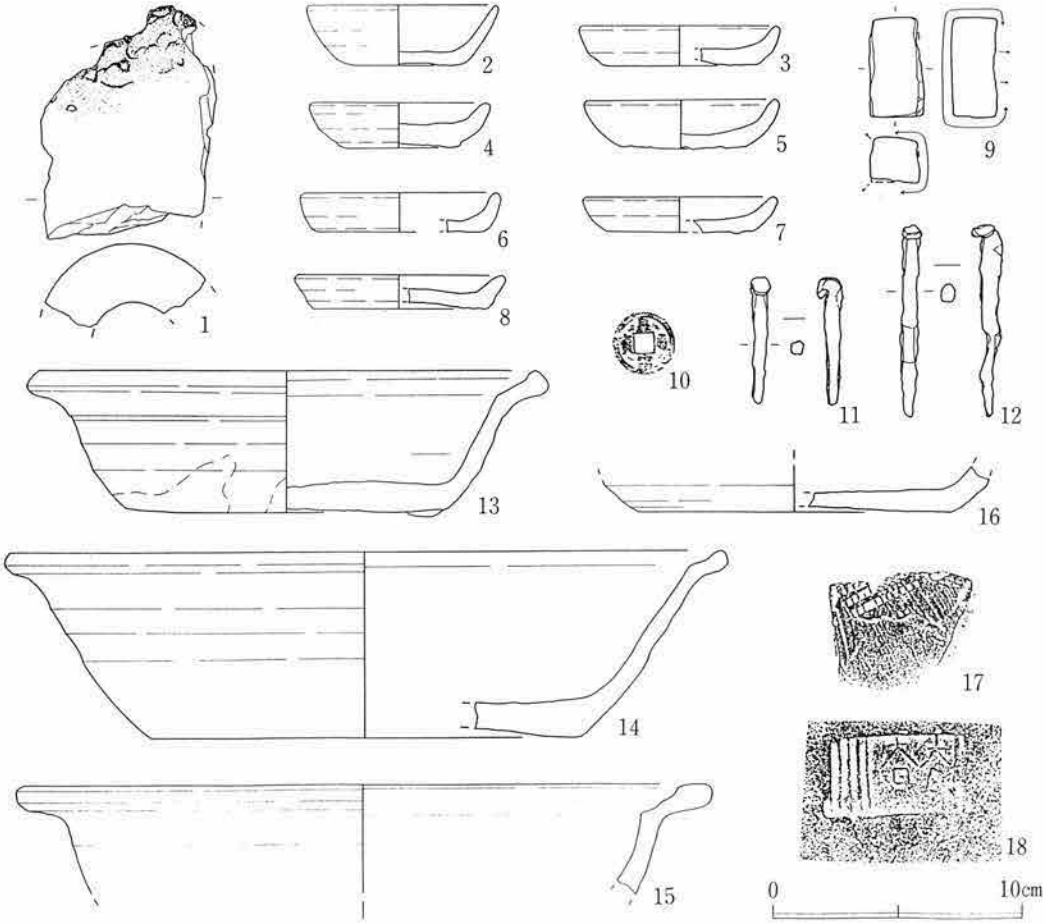


Fig.20　16号方形竪穴出土遺物

9は砥石、10は銅銭。「皇宋通宝」である。11、12は鉄釘。11は先端部を欠くが、残存長5cm、1辺5mmの方形断面。12は全長7.5cm、5×7mmの方形断面を持つ。いずれの頂部も折り曲げられている。この他にも若干量の鉄釘片が存る。

13～16は瀬戸折縁鉢。灰釉製品である。13は口径20cm弱、器高5.6cm、底径12.7cm、14は復元口径28cm強、15は27cm強を測る。16は復元底径12.5cm前後、17、18は常滑甕片のスタンプ文様。

II．井戸

井戸は約400m²の調査面積がありながら1基しか検出されていない。しかし、地続きに南接する長谷小路周辺遺跡（Fig 1 - 2）では数基の井戸が検出されているので、井戸の構築にも―現在では明確にできないが―場所の適、不適が存ったのかもしれない。

(1)井戸1

調査区南寄りの中央近くで検出された。16号、17号方形竪穴の一部を切るが、堆積土層等の観察では14号方形竪穴に覆土南半分を切られている。掘り方は南北3.3m、東西3.2～4.0mの平面方形を呈

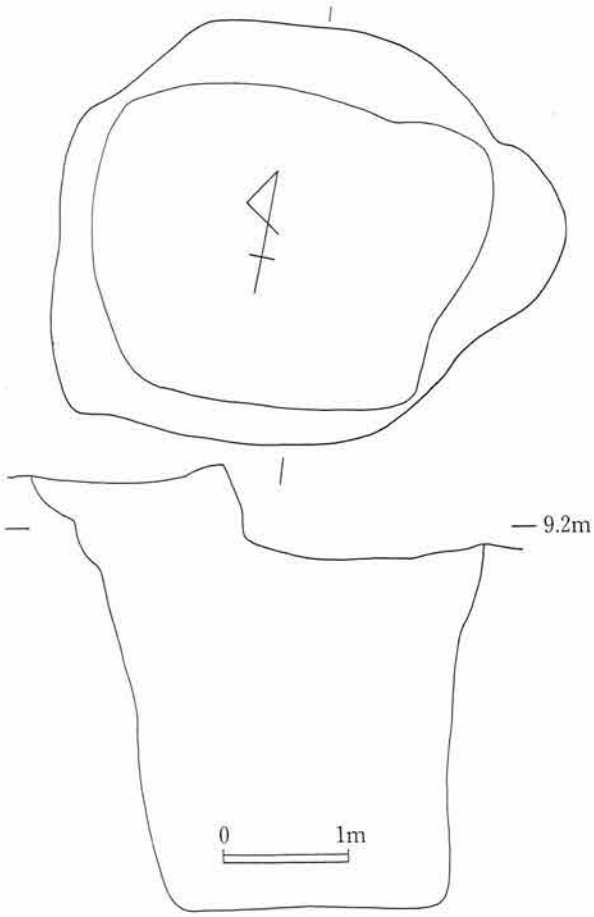


Fig.21　井戸１

し、深さ3.20m、床面レベル6.0m前後の規模を有する。井戸枠は確認できなかったが、検出状況および堆積土の観察などからは１辺１m前後の木組み枠の存在が推定できる。調査時点では井戸底レベルでは湧水がみられなかったから当時と地下水レベルが変化していることが考えられる。

出土遺物は比較的多く出土しているが、小片のため図化できないものが相当数含まれている。復元実測が可能なものについてはFig22に11点図示した。１は蓮弁文青磁碗片、口径復元不能。２は常滑の甕、口径22cm弱。３は２と同一胎土の破片外表にみられるスタンプ文様。

４～10はかわらけ。４～８は口径７～８cmの小皿。胎土はやや砂を含んだ粒の粗い土で、焼成良好。外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。側壁は比較的外反傾向を示すものが多く、口唇部が内湾するものはほとんどみられない。

９、10は口径11～13cmの大皿。胎土、整形は小皿のそれに類似する。器形は小皿とやや異なって

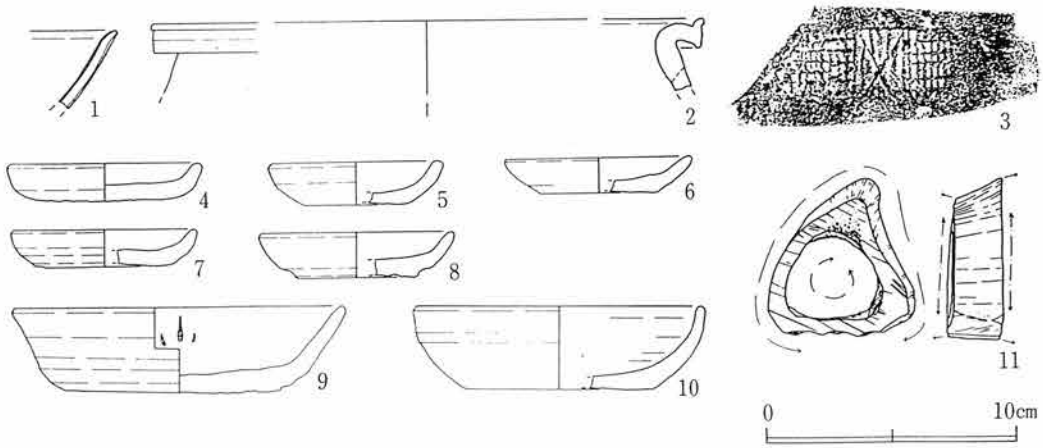


Fig.22　井戸１出土遺物

おり、9は直線的に外反するが、10は口唇部が内湾傾向を示す。

11は切断された獣骨である。このような切断された獣骨は本遺跡周辺の遺跡地内から多量に出土している。本遺跡では確認できなかったが、長谷小路南遺跡では骨製品の加工場的な遺物の出土状況が認められている。

Ⅲ．土壙墓

白黄褐色砂層（標準3層）上から土壙内埋葬人骨1体と溝内集積人骨1個所が確認された。この他に獣骨が多くの遺構内から検出されているが、これはには埋葬されたような痕跡はみられない。

遺跡地周辺の調査では数多くの埋葬人骨が検出されているが、近年の調査では中世以前の埋葬人骨が多く存在していることが確認されている。本遺跡でもそうした人骨がみられたが、本書では中世と中世以前とに分けて編集しているため、中世以前のものについては後送して、中世のもののみを本項で扱った。

以下、説明を加えるが、Fig24に示した土壙墓2とは明確な埋葬例ではなく、溝内に集積したものであるが、当初は集合葬として把えたため土壙墓の名称を附したものである。又、人骨は聖マリアンヌ医科大学の森本岩太郎先生に取り上げていただき、性別その他のコメントをいただく予定であったが、教育委員会の都合もあり、いまだ鑑定結果が出ていないため割愛した。

(1)土壙墓1

井戸1の南西で検出された単体埋葬墓であるが、現代攪乱によりほとんどが失なわれている。残存部からみると、土壙は長方形ないし長円形を呈し長軸2m以上、短軸1.2m前後、深さ40～50cmの規模を有している。

埋葬された人骨は北頭、西面の側臥屈葬と思われるが、下肢骨及び下腕骨、手指骨が確認されたにとどまった。この他の骨は攪乱によって削平を受けてしまっている。

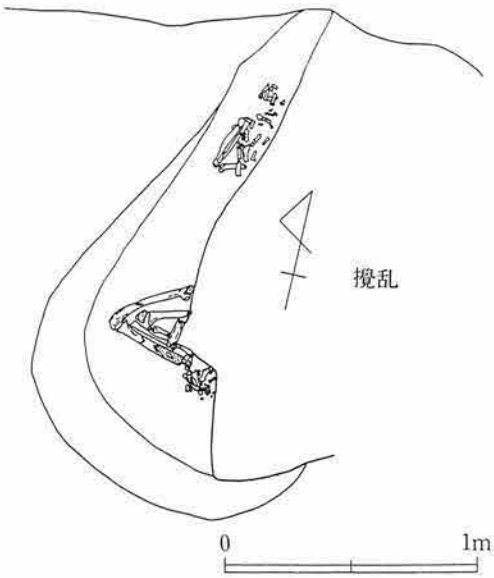


Fig.23　土壙墓1

土壙内からの出土遺物は、土壙のほとんどが削平されてしまっているということもあり、少量のかわらけ片、鉄釘片などが出土したにすぎない。

(2)土壙墓2

溝1覆土内に集積された人骨群を土壙墓2として扱った。確認当初は溝覆土にみられた若干の土質差から方形の集合墓であろうと考えられたが、調査の進展にともなって、溝内に廃棄された人骨であろうと判断した。

溝内から検出された人骨は頭骨が7体みられるのに対し、上腕骨、上・下肢骨、背骨などは7体

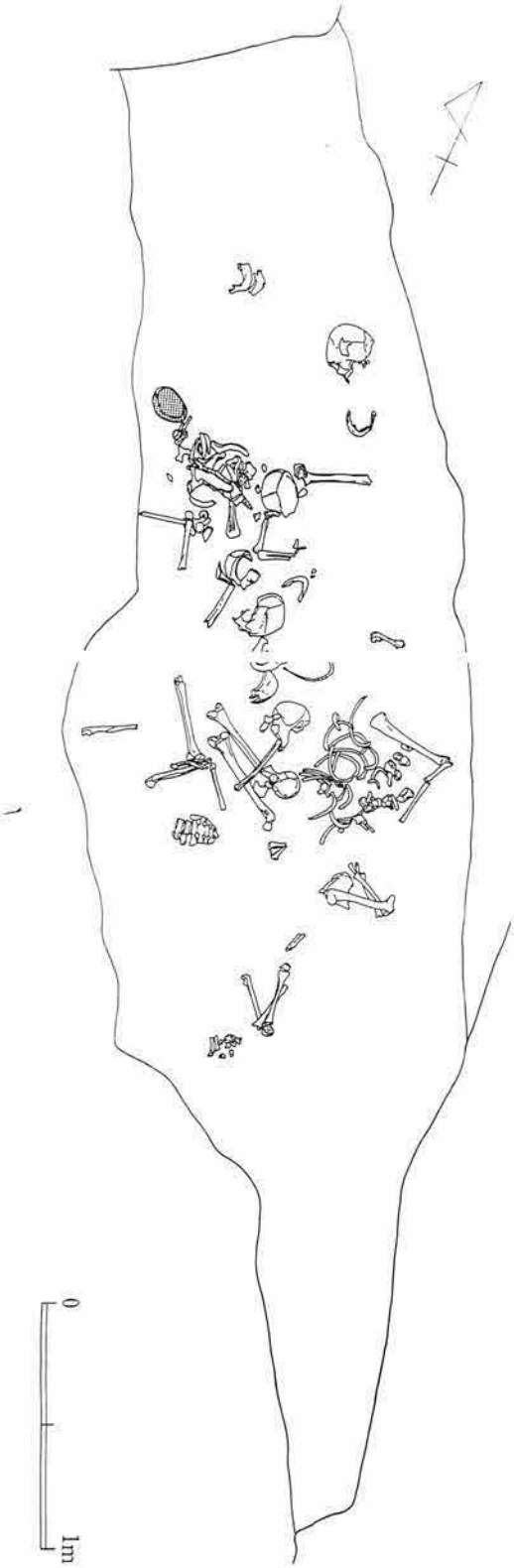


Fig. 24　土壙墓2

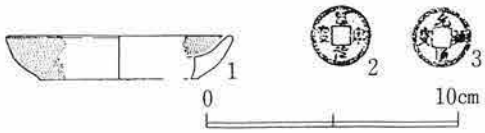


Fig. 25　土壙墓2出土物

分にはとうていおよばない量しか確認されていない。このことからすると、7体の集合葬と考えるよりは「改葬」あるいは「廃棄」と考えるのが良いだろう。

遺物は人骨周辺から2枚の銅銭、溝覆土内から若干の常滑・瀬戸・からわけ片などが出土しているが、Fig25-1～3に図示した以外は小片である。1はかわらけ、復元口径9㎝弱。口縁部および外面にタール状の付着物がある。2、3は銅銭。2は聖宋元宝、3は元□通宝である。出土状態からは今回の廃棄に際して埋納されたと考えるよりは、骨とともに移動してきたと考える方が良いと思われる。

(3)散乱骨

遺跡内数個所で、人骨、獣骨が散乱した状態で確認された。これらの骨は、ほとんどが掘り込みを伴わずに―あるいは掘り込みが把めずに―検出されている。検出された層位は白黄褐色砂層中から黒褐色弱粘質砂層上に至る間で、自然堆積層内である。

以下、各出土骨について説明を加えるが、これらの獣骨も鑑定するには至っておらず、筆者の不十分な知識から特定するのは、いたずらに混乱を起こすだけである。したがって、ここでは出土した骨の層位、人、獣の区別等について簡単に触れるにとどめた。

Fig26-A骨は黒褐色弱粘質砂層上で検出された溝内の大型動物骨である。溝内であるため、本来ならば、本項には含まれないのかもしれないが、

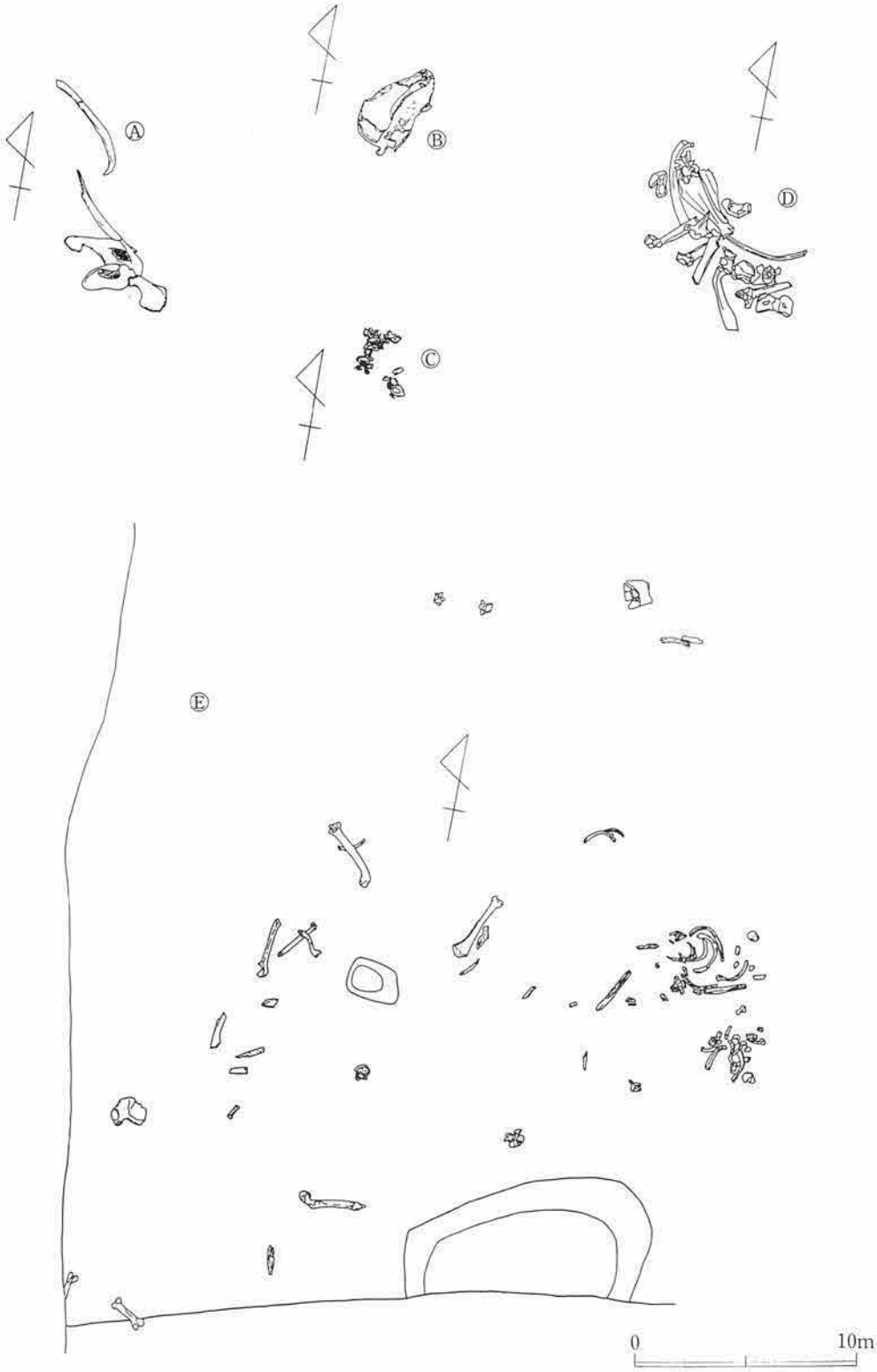


Fig.26　散乱骨

骨の散乱状況を明確にするため、ここに出土状況図だけを図示した。私見した限りでは牛の骨と思われる。

遺物は溝内全体の出土が少ないということもあり、明確な時代判定をできるようなものは出土していない。堆積土の観察では、中世以前の構築の可能性が認められる。

B骨はM-6グリッドの黒褐色弱粘質砂層上で検出された頭骨である。牛と思われる。近くでは他の部位骨は検出されていない。

C骨はK-7グリットの黒褐色弱粘質砂層上で検出された小型哺乳動物の骨である。骨格を示すほどの部位は出土していないが、犬あるいは猫であろう。

D骨はM-7グリットのやはり黒褐色弱粘質砂層上で検出された。大型哺乳動物（陸生）と思われる。周辺からはまったく遺物は出土していない。

E骨は土壙墓2とした溝1の南西一帯で検出された散乱骨群である。検出面は他の骨群と同じ黒褐色弱粘質砂層上である。この一群の出土骨のなかには多くの人骨が含まれているが、明確な埋納穴が確認されたものはない。他の動物骨と同様に散乱しているのである。

E骨周辺からは、若干のかわらけ片などが出土しているが、小片のため、時期決定をするには資料が少ない。

以上、散乱している骨について若干の説明を加えてきたが、これらの骨は黒褐色弱粘質砂層上に散乱している。散乱している骨は動物骨が主であるが、E骨のように人骨も多く含まれている地域もある。この状況は、白黄褐色砂層の堆積前に遺跡地周辺が人骨、動物骨などの散乱する地域（墓地ではなく）であったと推定できる。

Ⅳ．土壙

方形竪穴建築址、井戸などの大形遺構が多く検出されたものの、それらの遺構の間、あるいは覆土上などから約100口の柱穴、土壙が検出できた。これらの遺構全体を観察しても、特に規則性は認められないが、多くの柱穴が存在していることからは、掘立柱建物が、方形竪穴建築址と併存していたことが十分に推定できる。しかし、柱穴から建物を復元することはできなかった。

土壙には多くの形状があり、又、遺物の出土するものしないものなどの変化が認められる。本項ではそうした土壙それぞれについて説明を加えるべきであろうが、紙数の都合もあり、ここでは遺物を出土した土壙を中心にした。

以下、説明を加えるが、各土壙の平面および断面形は図示せずに、その概要を記し、出土遺物は可能な限り図示した。又、他の遺構などとの切り合いで平面形が完全に把握できなかったものについては、遺物を図示したが、説明を割愛したものもある。

D-12

2号方形竪穴建築址の北西隅近くで検出された小土壙である。平面形は径1.3～1.5mの不整円形を呈し、深さ20～30cm、底面レベル10.16m。覆土内には若干の炭化物が混じる。

遺物はかわらけ、常滑甕片が出土した。ほとんど小片であるが、かわらけ３点（Fgi27-３～５）が図示できた。３点のかわらけは、いずれも砂を含んだ粒の粗い胎土で、内底面には指頭ナデが施され、外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残っている。口径は３が7.5cm、４が８cm強、５が13cm強（復元）を測る。

D-22

調査区北西隅近くで検出された小土壙である。平面形は東西70cm、南北65cmのややくずれた方形を呈す。深さ20cm、底面レベル10.50m前後を測る。復土内には若干量の小土丹が混入する。

遺物はかわらけ、常滑片などが小量出土しているが、いずれも小片であり図示できない。図示できたのは鉄釘１点（Fig27-13）である。わずかに先端を欠くが、全長6.5cm弱。上端は折り曲げられている。

D-23

D-22の南東で検出されたが、南側を現代井戸の掘り込み及び試掘壙に切られているため全体形は把めない。残存部平面形は方形を呈し、東西40cm弱、南北30cm。深さ約10cm、底面レベル10.56mを測る。

遺物は、土壙（あるいは柱穴）が小形ということもあり、数点しか出土していない。これらも小片が多く、図示できたのはFig27-14、１点である。14は白磁口兀碗。復元口径12.5cm弱、内外面にかけられた白濁色の釉が口唇部でかき取られている。

D-26

調査区北東隅近くで検出された。西・東で他の土壙と切り合っているため原形は失われているが、本来は円形平面を呈していたと思われる。南北径約70cmを測る。深さ20～25cm、底面レベル10.30m前後を測る。

遺物はかわらけ、常滑片などが若干量出土しているが、いずれも小片であり図示できなかった。Fig27-20に図示したのは唯一図化できた鉄釘である。全長12cm強、１辺７㎜などの方形断面を持ち、頂部は折り曲げられている。

D-31

調査区北東隅近く、D-23東側で検出された土壙である。一部を現代攪乱および試掘壙によって切られている。平面形は溝様を呈し、幅80cm、長さ1.8m、深さ30～40cm、底面レベル10.10m前後を測る。覆土内には若干の炭化物が含まれる。

遺物はかわらけを中心に約10点が出土しているが、小片が多く図示できたのは２点である。２点がはFig27-15、16に示した。15は口径8.5cm、側壁中心に曲折点を持ち、口唇部は外方に引かれている。胎土にはやや砂が多く含まれる。16は復元口径13cm弱。

D-34

調査にほぼ中央、北端近くで検出された。北西部で他の土壙と切り合っており、やや不明確であるが、本来は方形平面を呈していたものと考えられる。長辺1.4m、短辺1.1m、深さ約50cm、底面レ

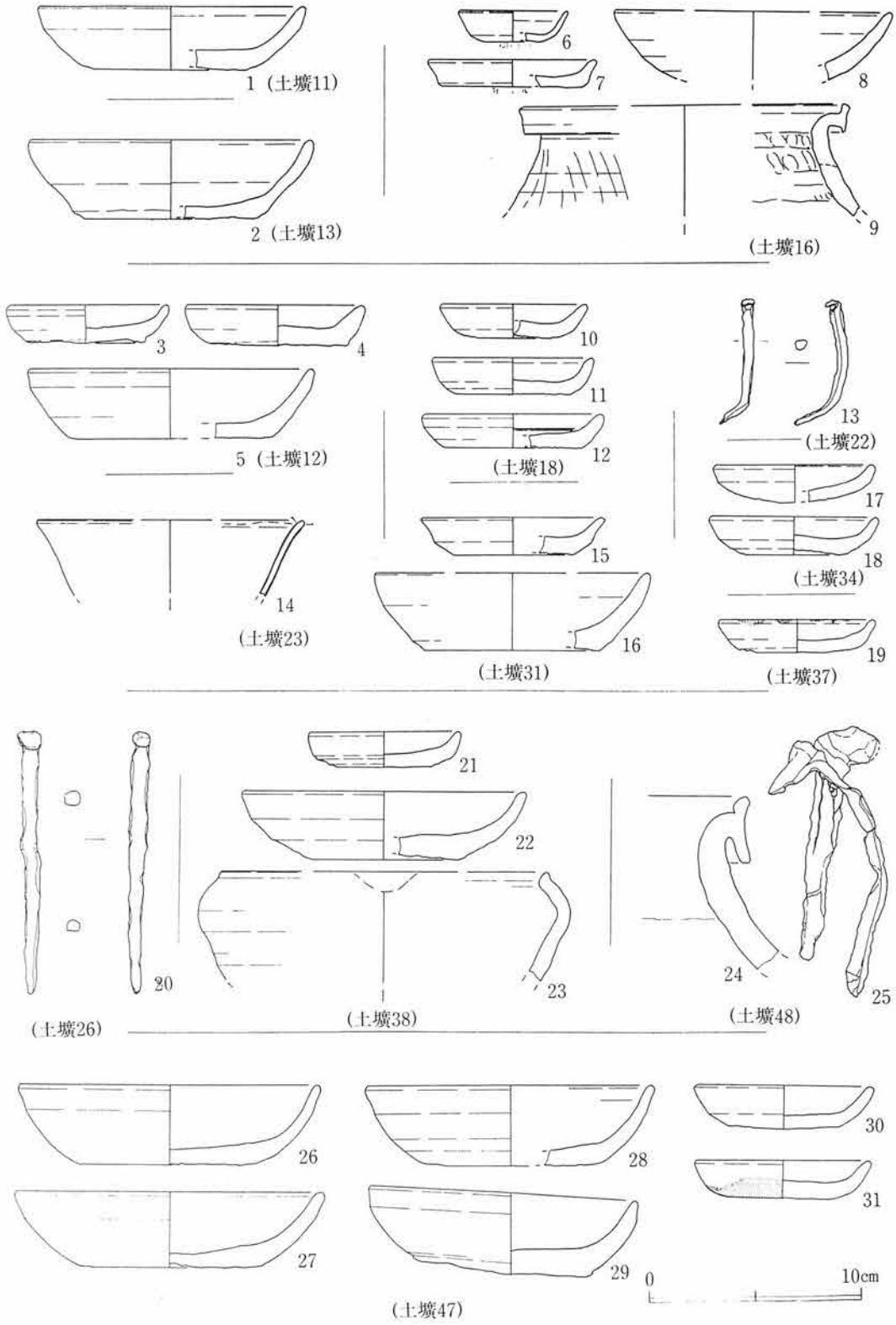


Fig.27　土壙出土遺物(1)

ベル10.20m強を測る。覆土内には若干の炭化物と小土丹を含んでいる。

土壙の規模に比して出土遺物は少なく、かわらけ2点が図示できたにとどまった。Fig27-17、18が本土壙出土のかわらけである。ともに口径7～8cmの小皿。胎土は砂を含んだ粒の粗い土で他のものと変化していない。

D-37

D-12の北側で検出された柱穴様の小土壙である。長径60cm、短径45cm、深さ35cm、底面レベル10.30m弱を測る。

遺物は極めて少なく、Fig27-19に図示したかわらけが1点出土しただけである。19は口径7.2cm、口唇部には油煙の付着が認められる。

D-38

D-12の西に接して検出された比較的大きな土壙である。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.4m弱、深さ40～50cm、底面レベル10.20m弱を測る。覆土内には若干の炭化物が含まれる。

遺物は比較的多く出土しているが、小片が多いため、図示できたのはFig27-21～23の3点である。21、22はかわらけ。口径は21が7cm、22が13cm強を測る。23は常滑窯の無頸壺。口径15cm強、胴部最大幅17.5cmを測る。

D-47

D-38の西側で検出された。平面形は不整形を呈し、東西最大幅70cm、南北最大幅1.1m、深さ20cm、底面レベル10.40mを測る。

小形土壙ながら出土遺物は多く、Fig27-26～31に図示した6点のかわらけの他に、小片ながら蓮弁文青磁碗、常滑甕片などが出土している。かわらけはやや砂を含んだ粒の粗い土で、外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。口径は26～29が13～14cm、30、31が8cm前後である。

D-49

1号方形竪穴建築址の西で検出された柱穴様の掘り込みである。北・南を他の遺構、攪乱と切り合っているため不確かであるが、東西径55cmを測る。

遺物は少ない。図示できたのはFig28-1の1点である。1はフイゴの羽口、胎土は植物繊維を多く含む粗い土で径7.5cm前後。中央に3～3.5cmの径の穴があけられている。下端部を欠くが上端部には黒褐色の溶触物が付いている。

D-50

12号方形竪穴建築址の北側で検出された柱穴様の掘り込みである。平面形は円形を呈し、径40cm前後、深さ30cm、底面レベル10.30m弱。

遺物は少なく、かわらけ1点の図示にとどまった。これはFig28-2に示した。口径7.5cm。

D-56

D-50の東で検出された。本土壙の南部分はD-55と切り合っているため、土壙の全体形は把めない。残存部からみると円形平面を有していたものと思われる。残存部規模は東西1.2m、南北60cm、深さ

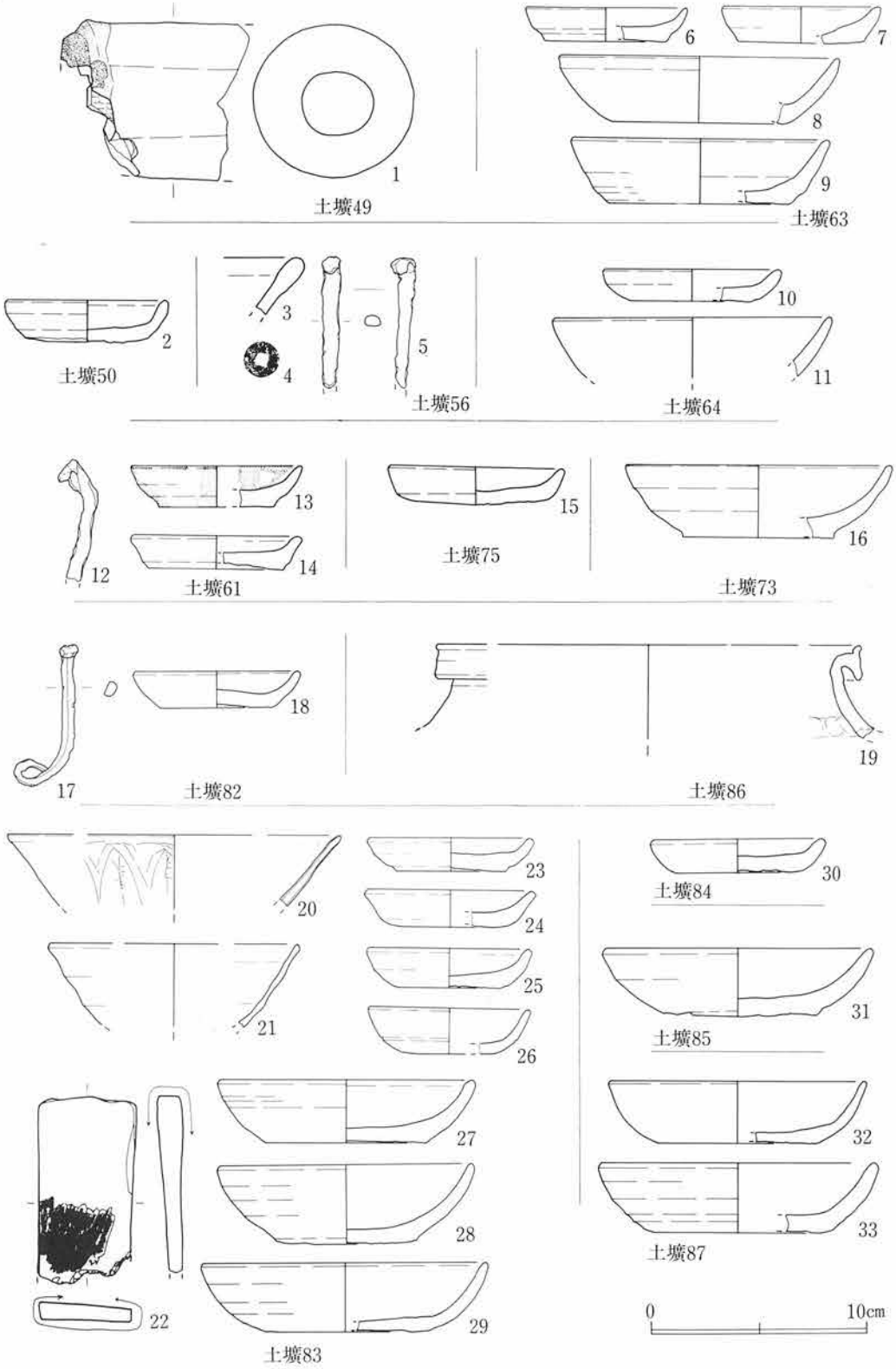


Fig.28　土壙出土遺物(2)

25cm、底面レベル10.20m弱。

遺物は3点が図示できた。Fig28-3～5に示した。3は山茶碗窯こね鉢。4は両面及び外周が磨れた銅銭。5は釘。

D-63

調査区西壁際で検出された土壙であるが、北側を現代攪乱に切られ、調査区外に延びるために全体形は把めない。残存部から推定すると、本来は方形を呈していたものと考えられる。確認規模は南北2m、東西1.1m、深さ約50cm、底面レベル9.80m前後を測る。

遺物はFig28-6～9に図示した4点のかわらけ以外に若干量の常滑片、舶載磁器片などが出土している。かわらけは6、7が口径7～7.5cm、8、9が12～13cmを測る。

D-64

D-63の南側で検出された。北側をD-63に切られ、さらに調査区外西に延びる。平面形はD-63同様方形を呈していたと思われる。残存規模は南北1.9m、東西1.1m、深さ約40cm、底面レベル10.30m弱を測る。

遺物はFig28-10、11に図示した2点のかわらけの他に常滑甕片などが出土しているが、いずれも小片のため図示できない。

D-75

2号方形竪穴建築址西が検出された。南を4号方形竪穴建築址に切られる。本来は溝様の細長い土壙であったと思われる。幅50～60cm、残存長約1m、深さ15～20cmを測る。

遺物はFig28-15に示したかわらけ1点の他に小片の常滑甕片、舶載磁器片などが数点出土している。15の口径は8cm弱。

D-82

土壙墓の西側調査区壁近くで検出された。さらに西側調査区外に延びる。調査部分での規模は東西60cm、南北70cm、深さ60cm、底面レベル9.50mを測る。本来の平面形は円形と思われる。

遺物はFig28-17、18に図示した2点の他にかわらけ、常滑、瀬戸片などが少量出土しているがいずれも小片である。17は鉄釘、18はかわらけ、口径7.5cm強。

D-83

D-82の南東で検出された。本遺跡検出の土壙では比較的規模が大きい。平面形は東西に長軸を持つ長方形を呈する。規模は東西2.1m、南北1～1.2m、深さ約50cm、底面レベル9.40m。

覆土内からは多くの遺物が出土している。このうちFig28-20～29に10点が図示できた。これ以外には常滑、瀬戸などの小片が出土している。20は蓮弁文青磁碗、口径15cm強。21は精胎の山茶碗、美濃糸の製品であろう。口径11.5cm。22は長方形の砥石。23～29はかわらけ。23～26は口径7.5cm前後の小皿、27～29は口径12～13cmの大皿である。胎土はいずれも砂をやや含んだ粒の粗い土で外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。側壁は24、25の口唇部が外反気味であるが、他のものは口唇部が内湾傾向を示している。

D-84

D-83の北側で検出された。平面形は東西に細長い溝様の土壙である。東西約2.5m、南北60cm～70cm、深さ1.2m、底面レベル8.80m強。

検出された土壙のなかでも最も深い掘り込みを有しているにもかかわらず、出土遺物は少ない。図化できたのは図示したFig28-30の１点のみである。30はかわらけ。口径８cm。

以上、検出された土壙、柱穴のうち遺物の出土したものについて説明を加えたが、掘り込みの明確でないものなどについては割愛したため、不十分なものになってしまった。全体をみても、土壙内の出土遺物などに特徴的な出土状況は認められなかった。

D-３

調査区西壁近く、12号方形竪穴建築址の北で検出された。本遺構は浅い皿形断面の掘り込み内部に炭化物・焼土などが堆積し、若干の骨片が出土している等の特殊性が認められる。本来ならば土壙墓の項に含めるべきかとも思われるが、骨片が人骨であるか否かの鑑定結果も出ていないため、ここでは土壙として扱った。

本遺構は長径50cm、短径40cm、深さ20cmの柱穴様の穴とその周囲に掘りくぼめられた。断面皿形の土壙からなっている。平面形では判然としないが、キメ細かい植物質の炭化物層と焼土を含む層が土壙内に堆積している。しかし、皿形土壙の底部は、ここで火を使用したと考えられるほど明確な痕跡は残されていない。

本土壙及び堆積土内からは若干のかわらけ小片は出土したが、それ以外の遺物はまったく出土していない。又、骨片は火を受けた痕跡が明らかに残っている。

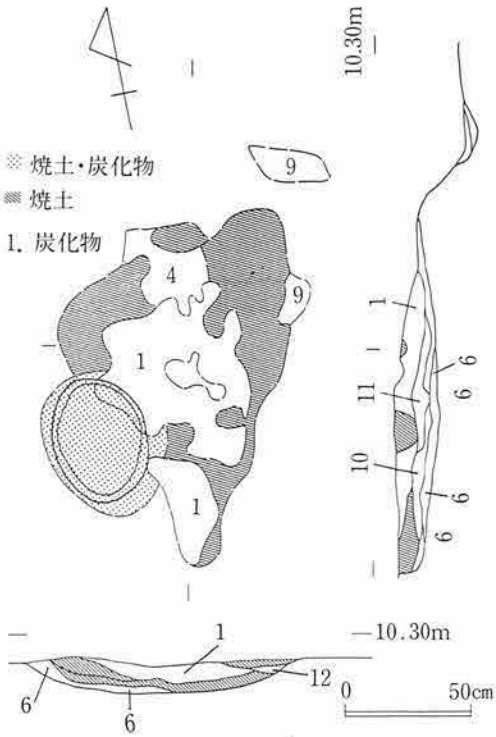


Fig.29　土壙３

Ⅴ．溝

中世に属する溝としては２条が検出されている。これらの溝は遺跡内を抜けるような溝ではなく遺跡地内から始まり、北に向って流れている溝である。これは、南側に砂丘があるような地形に影響されているように考えられる。

以下、２条の溝について説明を加えるが、溝の番号は確認、調査順に附した。又、溝１は本来ならば土壙墓の項に含めるべきであろうが、人骨は後世の投げ込みであるために、溝を区別して本項に含めた。

溝１

土壙墓２として扱った人骨群が覆土上部に投げ

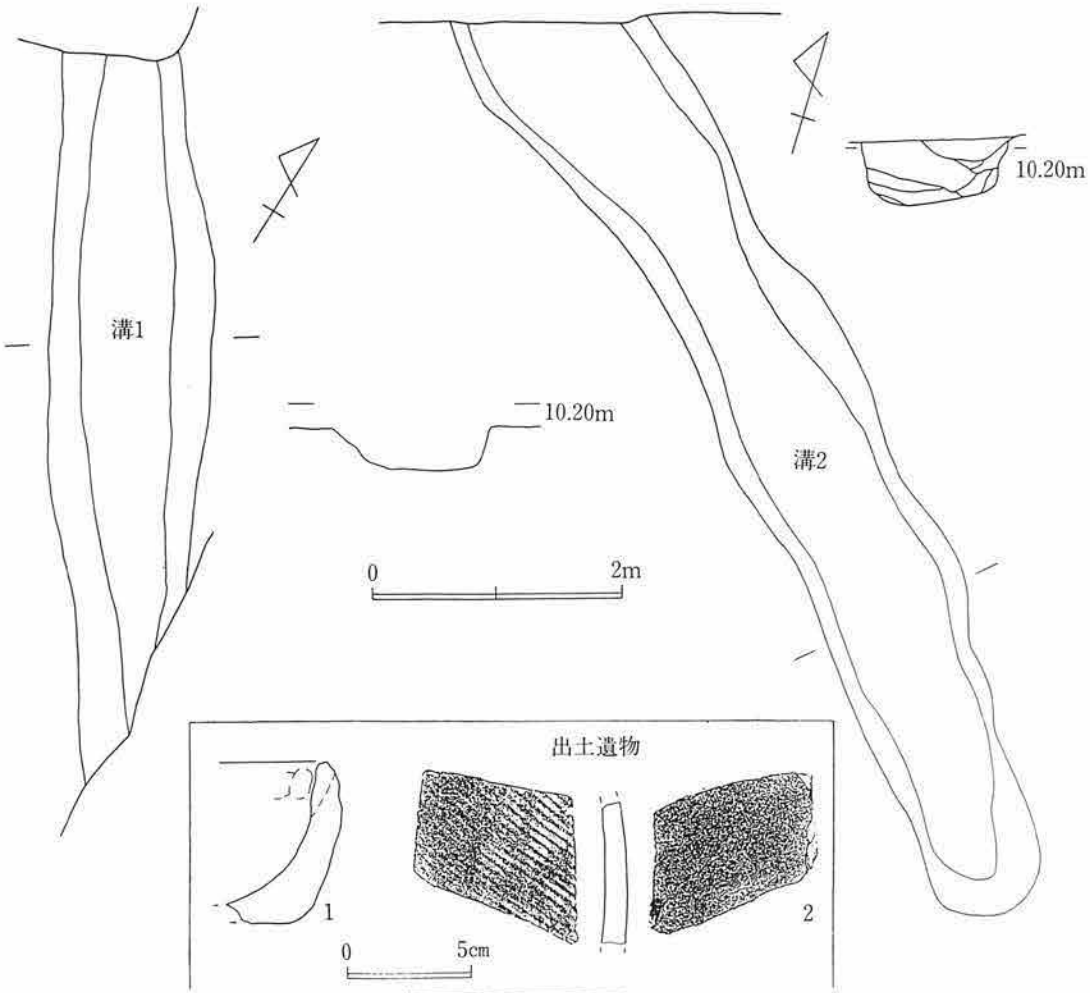


Fig.30　溝１、溝２

込まれていた溝である。主軸（流下）方向N－15°－W。北は現代攪乱によって切られ、南は３号方形竪穴建築址によって切られている。溝幅（上）は１～1.3m、深さ約50cm。底面レベルは北が約15cm低い。北に向って流れていたのだろう。断面形はU字形に近い。

覆土内からは土壙墓２として扱った多量の人骨が出土しているが、これ以外には若干のかわらけ片、常滑片などが出土している。しかしこれらは小片で図示できない。Fig30-１に示した土器は唯一図示できた出土遺物である。胎土は粒が粗く繊維を多く含んだ土で、直立無味の口唇部内側には指頭整形痕が残る。ルツボの一部とも思われるが、断定できない。

溝２

M-６グリットから調査区北壁にかけて、約８mにわたって検出された。溝幅（上幅）は１～1.3m、深さ30～50cm、長軸（流下）方向N－18°－W。溝底面レベルは北が約15cm低い。北に向って流れていたものと考えられる。

溝覆土内からは小量のかわらけ、動物骨、常滑甕片などが出土したが、小片が多く図示できるも

のは極めて少ない。Fig30-2に示したものは覆土内出土の須恵器片である。

以上、検出された2条の溝について説明を加えてきたが、溝2については、出土遺物がほとんどないこともあり、中世に属するものか明確でない部分も残る。しかし、溝2の下部に別の溝が存在することを考えると、中世遺構の最も古い時期のものとも考えられよう。

Ⅵ．確認面出土遺物

中世遺構を検出する作業中あるいは一部を掘り下げ調査を実施中に多くの遺物が出土している。これらはすべて確認面出土遺物として本項にまとめたが、ここには表土および攪乱層内から出土したものは含んでいない。

以下、出土した遺物に若干の説明を加えていくことにするが、かわらけはその出土量が多く、すべてを図示することはできないので、完全な形のものあるいは特徴的なものに限定して示した。かわらけ以外のものについては復元実測が可能なものは極力図化した。

Fig31-1～5は舶載青磁。1は蓮弁文青磁碗。内外に青緑色の釉が厚くかかる。復元口径11cm弱。2は青磁無文皿。口径11cm弱。3は蓮弁文青磁碗。復元口径16cm弱。4は画花文青磁碗、口唇部はヘラ状具で輪花様になされている。5は青磁鉢の底部片、復元高台径10.5cm、高台畳付を除く全面に青緑色の釉が厚くかけられる。

Fig31-6は白磁碗。復元口径15cm強、接合しないが胴下部片が存る。白濁色の不透明な釉が口唇部で削り取られている。

Fig31-7～10は青白磁。7は合子の蓋、上面には細かいヘラ彫りで花文様が彫られているが、破片のため全体は把めない。8は梅瓶胴部片。9は合子蓋、径4.5cm、高さ1.5cm弱。上面には花芯および花弁が表わされている。10は合子の身、口径6cm、外面には蓮弁が彫られる。

Fig31-11～19は瀬戸窯の製品。11は灰釉瓶子の底部。背の高い方形断面様の高台が貼り付けられている。12、13は灰釉折縁鉢。12は口径16cm、13は20cm、14は灰釉の盤、あるいは鉢と思われる製品。復元底径20cm弱。15は灰釉の鉢底部片。内底面外周には4～5本の沈線が巡り、中央部にも何らかの文様が彫られていたと思われるが不明。高台径8.5cm、高台の内側には焼成時に使用した沈線が格子目に彫られている。16は壺の蓋、径10.4cm、下部径4.2cm、同形状の蓋は鶴岡八幡宮二十五坊跡から出土しているが、これは黄褐釉がかけられている。17～19は山茶碗窯製品、17は入子である。口径4cm弱、底径2.7cm、器高1cm強を測り、外底4.5cm弱。19は底径5.5cm、いずれも外底面に回転糸切り痕が残る。

Fig31-21、22は常滑窯製品。共にこね鉢であろうが、小片のため口径、器形の復元はできなかった。出土点数は比較的少ない。

Fig31-23～45はかわらけ。23は内面に墨書が残るが、破片のため判読できない。墨書されたかわらけは本例1点だけである。出土したかわらけはいずれもやや砂を含んだ粒の粗い土で、内底面には指頭ナデ、外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。口径変化は口径12～13cmの大皿（24～26）

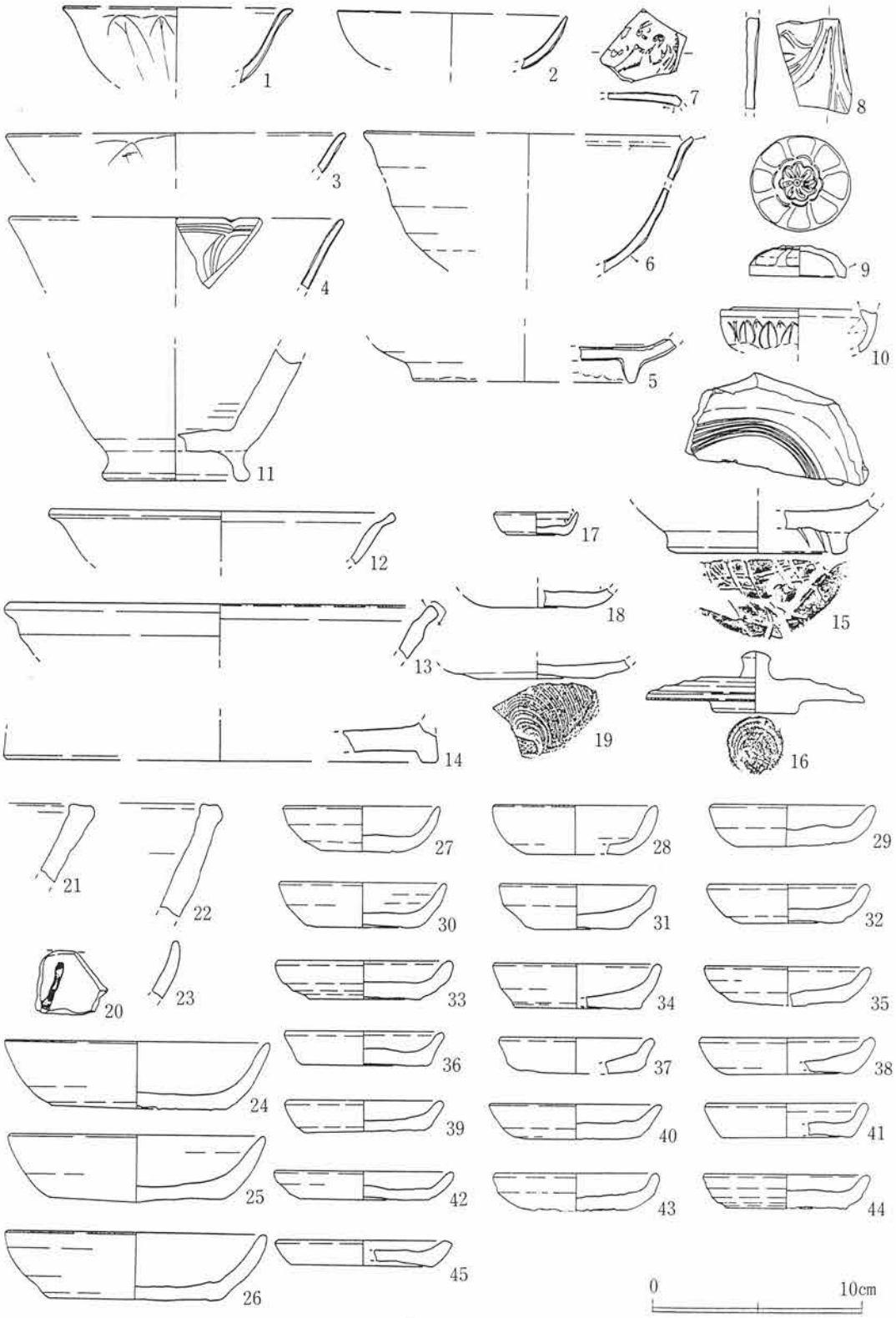


Fig.31　確認面出土遺物(1)

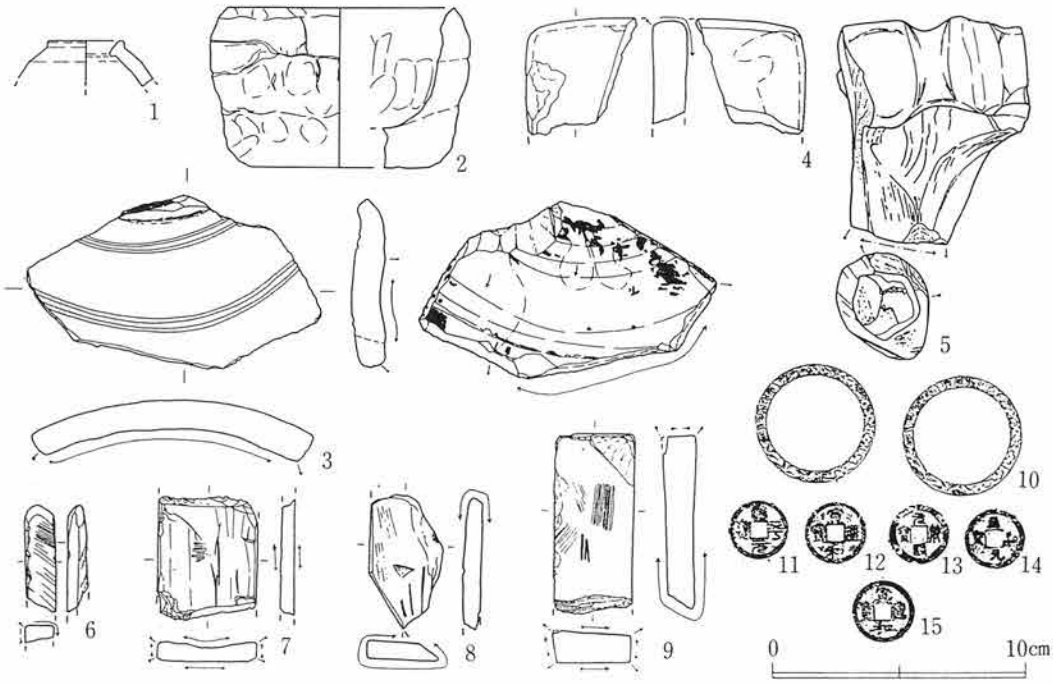


Fig.32　確認面出土遺物(2)

と口径７～８cmの小皿（27～45）の２種で、中皿と呼ばれているものはほとんど出土していない。大皿では側壁が比較的直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反している。

小皿でも大皿と同様の傾向が認められるが、器形では27に代表されるような、やや器高が高いものなどが混入している。

Fig32-１は鉄釉の茶入れと思われる瀬戸窯の製品。口唇部は内外に肥厚し、外面にはやや厚く釉がかけられる。復元口径2.8cm。

Fig32-２は土製品。胎土は植物繊維を多く含んだ粒の粗い土。内外面に粘土紐積み上げの後の指頭整形痕が残る。内面および口縁部に溶触物が付着してはいないが、ルツボの数の製品と考えられる。本遺跡で２点出土している。

Fig32-３、４は研磨痕のある破片である。３は瀬戸灰釉瓶子肩部片であるが、内面および割れ口の一部に磨いた痕がある。４は常滑甕片と思われる破片。ほぼ方形の破片の外周と一平面に磨いた痕が残る。

Fig32-５は切断痕の残る獣骨である。このように何らかの理由により切断された骨片は本遺跡周辺では多く出土するが、これを使用した骨製品が出土するのは希である。本遺跡の西に位置する長谷小路南遺跡では骨製品のうち「栗形」の完成品、未完成品、チップなどが多量に出土して、これらに関係のある工房の存在を推定されている。

Fig32-６～９は石製品。６は滑石鍋片を再利用したと思われる棒状製品。断面形は方形を呈していたと考えられる。７～９は砥石。それぞれに完全な姿を失っているが、本来は長方形を呈してい

たと思われる。

Fig32-10は銅製品。外径4.7cm弱の輪状の製品で幅4㎜、厚さ2㎜。内外両平面には「松葉」「竹葉」「梅」あるいは「桜」の花文様が細かい線でレリーフされている。銅製の輪が出土することは希にあるが、本例のように細かい文様が施されているのはない。貴重な例であろう。

Fig32-11～15は銅銭。図示した5点の他に判読できない銭が数点出土している。

以上、中世基盤層上から検出された各遺構、遺物について説明を加えてきたが、紙数の都合もあって、不十分で終ってしまった部分も多い。

中世の遺構の配置をみると、方形竪穴建築址と井戸、土壙墓、溝などに整然とした配置―遺構別による区画形成―はまったく感じられない。これらの遺構間には多少の年代差があるため、ある意味では当然と言えるのかもしれない。しかし、遺跡地周辺が、方形竪穴が住居とした場合に、墓域と居住区が近接した地域（あるいは時代）に構成される地であったということは興味深い。

〈中世以前〉

本遺跡内の白黄褐色砂層下から検出された遺構群を中世以前の遺構として本項に含めた。しかし厳密に区分すると、南接する遺跡地の白黄褐色砂層下の堆積土内からは、少量であるが、手づくねかわらけと鎌倉時代初期に比定できる回転糸切りのかわらけが伴出しているし、本遺跡でも若干の中世遺跡が出土している。

以上のことからすると、以下に説明を加える遺構群は中世以前としてはあるものの、下限として鎌倉時代の初期を含んでいるようにも思われる。

以下、本項に属する遺構群の基盤土層となっている黒褐色弱粘質砂層の遺跡内での堆積（包含層の分布）について説明を加えた後に、土壙墓、溝、確認トレンチ内出土遺物について説明を加えることとする。

以下、各項について説明を加えることとするが中世以前の調査は、工事深度、調査期間等の関係もあり部分的に実施し、確認されたすべての包含層を対称とした調査は行っていない。

Ⅰ．包含層の分布

包含層である黒褐色弱粘質砂層は調査区内北と南に多くみられ、中央部が最も厚く堆積しているのが確認された。これは、まるで調査区内中央を東西に溝が抜けているようにもみえる堆積状況であった。

中世以前の遺物包含層が部分的にしかみられないのは、中世の方形竪穴建築址、井戸などの掘り込みが深く、この層を掘り抜いてしまっているためでもある。このため、方形竪穴建築址が多く検出される遺跡では、中世以前の黒褐色弱粘質砂層がまったく検出されないこともある。本土層は広く堆積しており、確認されている限りでは西は稲瀬川近く、東は滑川、北は六地蔵にわたる地域に

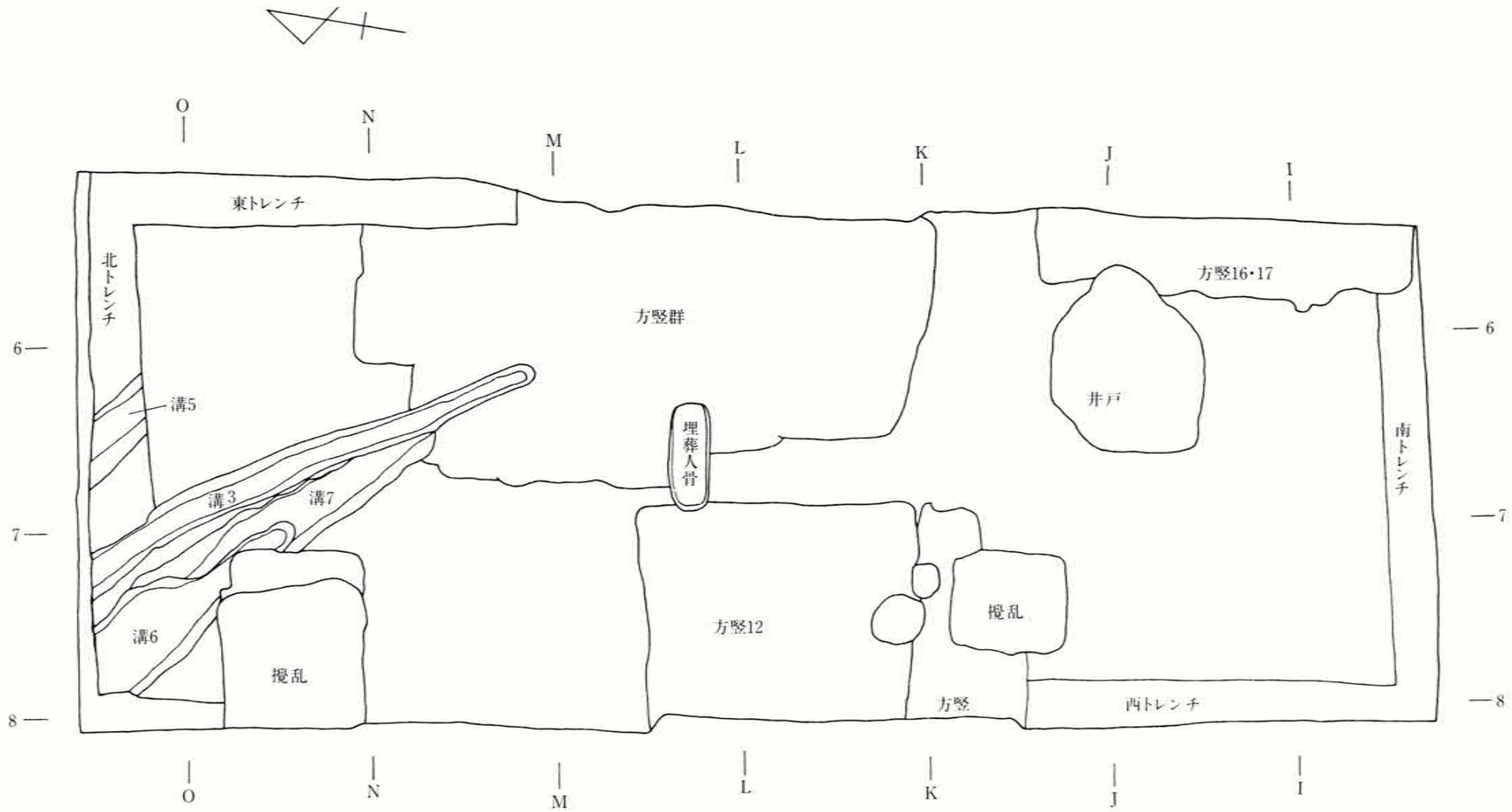


Fig. 33　中世以前全体図

0　3　6m

わたっている。この土層は、海岸の砂丘背後に形成された湿地様の土地が基となっているとの指摘もなされている。

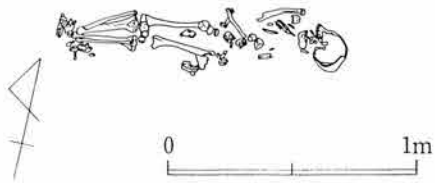


Fig.34　土壙墓

II．土壙墓

調査区ほぼ中央、12号方形竪穴の東側　号方形竪穴との間で埋葬人骨が１体検出された。それ以外には若干の骨片の散乱が数個所に認められたものの、土壙墓として扱うほど整然としたものではない。したがって、本項に属する土壙墓は１体である。

以下、土壙墓について説明を加えていくが、散乱した状況で確認された骨片については、遺構として認められないような点も多くあるため、本項では割愛した。黒褐色弱粘質砂層上に若干の散乱骨（人骨か獣骨かは不明）が存在することを述べるにとどめる。

土壙墓

12号方形竪穴建築址の東側で検出された。一部を３号方形竪穴建築址に切られる。葬位は東頭位北面の仰臥伸展葬と思われる。性別その他は、鑑定結果が出ていないためここでは触れないが、全身長が1.2m弱であるため、成人男子とは考えられない点もある。

人骨は左右の腕、手指骨、肋骨を除いたほとんどが遺存している。副葬品は確認されなかった。本遺跡に南接する遺跡ではやはり東頭位の埋葬人骨が１体検出されており、鉄鏃、骨鏃、骨製の柄付刀子などが副葬品として埋納されていた。

本例では、黒褐色弱粘質砂層を掘り込み、同質土が覆土となっていたため、土壙を確認することができなかった。しかし、このような状態で検出された人骨は、まず、土壙内に埋葬されていたと考えても良いだろう。

III．溝

黒褐色弱粘質砂層上面では５条の溝が検出された。いずれの溝も、黒褐色弱粘質砂層上面より掘り込まれており、覆土内の出土遺物にかわらけなどの明確な中世遺物はみられない。

以下、検出された５条の溝について説明を加えていくことにするが、溝に附してある番号は調査時のものを使用している。そのため、欠番になっているものもある。これは、調査時に溝として番号を附したものの、その後、土壙とされたものである。又、番号は中世遺構から順に附しているため、１から始まっていない。

溝３

中世に属した溝２の下で検出された。そのため溝の東岸は部分的な削平を受けている。又、南端は　号方形竪穴建築址に切られているため、確認地点より南まで延びていたかは把めない。

溝幅50～90cm、深さ20～40cm、底面レベルは西にいくほど低く、東端と西端では約15cm高低差が

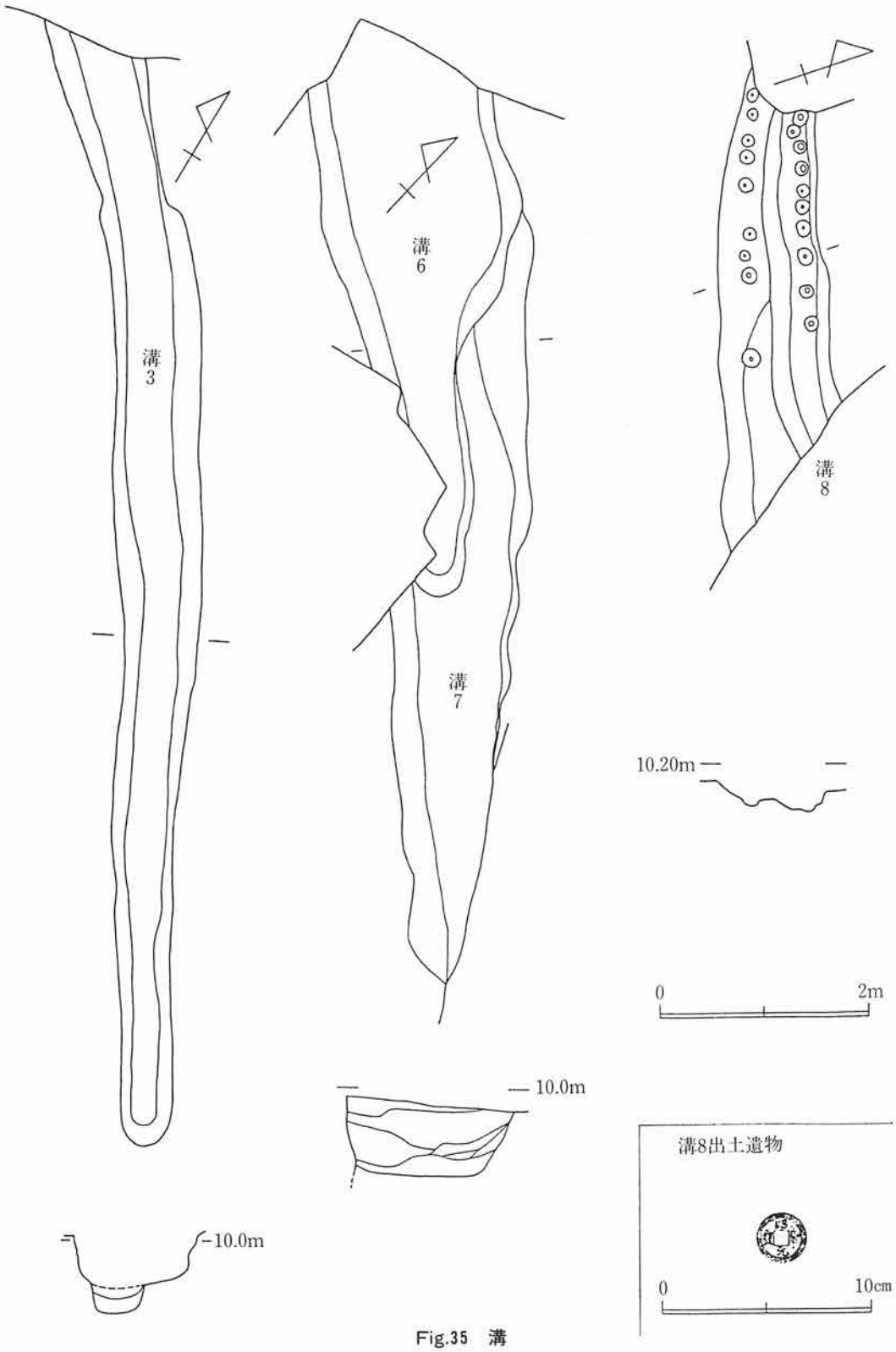


Fig.35 溝

ある。

遺物は、黒褐色弱粘質砂層上の遺構に共通するが、非常に少ない。本溝覆土内からは若干の土器片が出土しているが時期が確定できるほどの大形破片はない。しかし、中世遺物は含まれていない。

溝5

調査区北壁に沿ったトレンチ内で部分的に確認された溝である。そのため、全体規模、長さ、方向などには不明瞭な点も多い。

溝規模は、調査区北壁では、上幅1.5m前後、深さ50～60cmを測るが、溝底の傾斜方向などは把めなかった。

遺物は溝3と同様に中世以前の土器片を少量出土したが、いずれも小片であり図示できない。中世遺物はまったく含まれていない。

溝6

溝7と切り合って検出された。確認長は調査区北壁から約5.5mにわたる。溝幅1.5～1.7m、深さ35～50cm、長軸（流下）方向N－40°－W。溝底面レベルは南端で9.35m、北端で9.20m強を測り、北端が低い。

遺物は極めて少ない。小量の中世以前の土器片が出土しているが、時代を判定できるような資料はみられない。しかし、中世に含まれる遺物はまったく出土していない。

溝7

溝6に切られている。両者の切別は溝底のレベル差から確認しているが、明確な切り合いを堆積土層で確認されてはいない。同一溝の可能性もあるが、調査時点での区別を優先し、ここでは区別して図示した。

溝幅1.5m前後、深さ40～50cm、底面レベルは東端が約20cm高い。長軸（流下）方向はN－35°－W、溝6とほぼ同軸である。溝の掘り込みも溝6と似ている。

遺物は若干の獣骨と、少量の中世以前の土器、須恵器片が出土したが、いずれも小片であり、図示できるものはない。又、時代を判定できうるような破片もみられなかった。

溝8

調査区西壁近くで検出された。溝3～溝7とはやや方向が異なる。溝は上幅70～1.1m、深さ15～25cmを測り、底面形状などからは2条の溝の切り合いとも思える点もある。しかし、堆積土層の観察でもそれらが明確に区分できた訳ではないので、ここでは1条の溝として扱った。

溝の主軸（流下）方向はN－65°－W。底面レベルは両端がやや低い。溝底面の両岸下には径10～15cm、深さ5～10cmの小柱穴柱のピットが北岸下10口、南岸下9口確認できた。これらは約50cmの間を持ってほぼ平行に穿けられている。部分的であるため判然としないが、板組み壁を持つ溝であったのかもしれない。

遺物は若干の中世以前の土器片、銅銭1枚の他にはほとんど出土していない。これらのなかには中世の遺物はまったく含まれていない。銅銭は「紹聖元宝」（北宋、初鋳1094）である。

以上、検出された5条の溝について説明を加えてきた。これらの溝はすべて南から北（あるいは東から西）に向って流れており、このことからは、溝の流下方向が自然地形に左右されているだろうことを考えれば、南側に砂丘状の高まりがあったと考えてもよいだろう。

Ⅳ．トレンチ出土遺物

本項には、黒褐色弱粘質砂層（中世以前包含層あるいは基盤層）が種々の制約によってすべてが調査できなかったため、以下の堆積を確認するように北、東、南の調査区壁下に設定したトレンチの出土遺物を含めた。

以下、出土した各遺物について若干の説明を加えていくことにするが、各個の出土位置はトレンチ（北、東、南）各を記すにとどめた。又、北トレンチでは溝5が部分的に検出されている。さらに、本項には、調査区東壁近くに設定し、中世遺構の残存状況を調査した2本のトレンチ（第1、第2）出土の遺物（Fig36）も含めてある。

Fig36-1～9は第1トレンチの出土遺物である。1～4は中世、6～9は中世以前、5は鉄製品のため帰属は不明。両グループの遺物は若干の小土壙が混在していたために、明確な区分を持って出土してはいない。

1～3はかわらけ、いずれもやや砂を含んだ粒の粗い土を使用し、内底面に指頭ナデ、外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。1は口径8cm、器高2.4cm、側壁は直線的に立ち上がり口唇部はやや外反する。2は口径12cm弱、器高3.5cm弱側壁は直線的に外反し、端部はやや外方に引かれている。3は口径13cm強、器高3.5cm、側壁はゆるやかな曲線を持って立ち上がり、端部はやや内湾傾向を示す。

4は瀬戸窯製品。灰釉の鉢と思われる。外底面高台内には焼成時の溶着を除ぐための格子様のヘラ彫りが残る。復元高台径7.5cm弱。

5は鉄釘。残存長12.0cm強。断面は方形を呈し頭部は折り曲げられている。本遺跡出土の釘では最も大きいグループに入るだろう。中世あるいはそれ以前への帰属決定は困難である。

6～9は中世以前の遺物。6は須恵器盤状坏。口径14.8cm、器高5cm、高台径8.5cm、外底面に低く、断面方形を呈する高台が貼り付けられている。体部は高台付近からゆるやかに立ち上がり、口唇部はやや外方に引かれる。器肉は薄く、良品である。

7は土師器坏。体部はやや直線的に立ち上がり口縁部は外方に引かれる。外面上半はナデ、下半はヘラ削り、内面はナデ。外面の両壁形間には明確な綾は形成されず、側壁が曲折している。

8、9は甕の口縁部。口縁部は「く」の字状に開く。8は外面頸部以下が縦方向のヘラナデ、頸部以上外面はナデ調整が施される。9も同様の調整が施されている。口径は2点ともに復元数値であるが、8が19cm弱、9が26cm強を測る。

10～13は第1トレンチの南に設定した第2トレンチの出土遺物。10は舶載磁器、口兀の白磁皿。口径8.6cm、器高3cm弱。外面底部近くから外底面を除く全面に白濁色の釉がかけられており、口唇

部内外はかき取られている。

11、12は瀬戸灰釉おろし皿片。11は口径14cm強、12は16cm強。いずれも、二次的な火熱を受けているため、釉が落ちている部分が多い。

13は切断痕のある獣骨。切断面は鋸できれいに切断されている。このように鋸で切断された獣骨は市内各遺跡、特に本遺跡周辺の旧海岸砂丘地帯から多く出土する。

Fig37-1～3は西側トレンチ黒褐色弱粘質砂層中の出土遺物。1は土師器坏。側壁は直線的に外反し、外面中位にゆるい稜が形成され、以下は縦方向のヘラ削り、以上はナデ。内面には指頭整形痕とハケ状具のナデ痕が残る。復元口径12cm弱、器高3cmを測る。

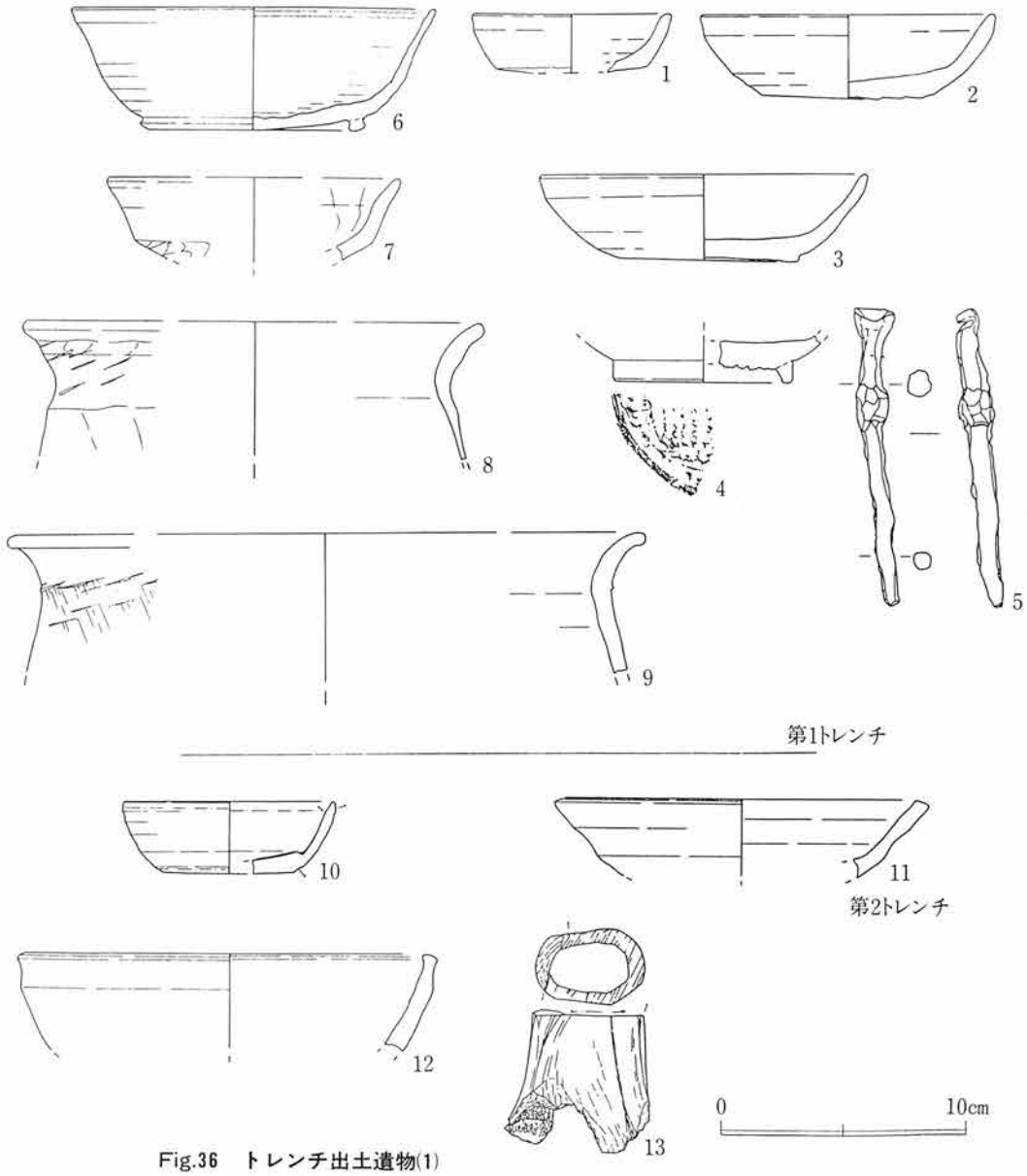


Fig.36　トレンチ出土遺物(1)

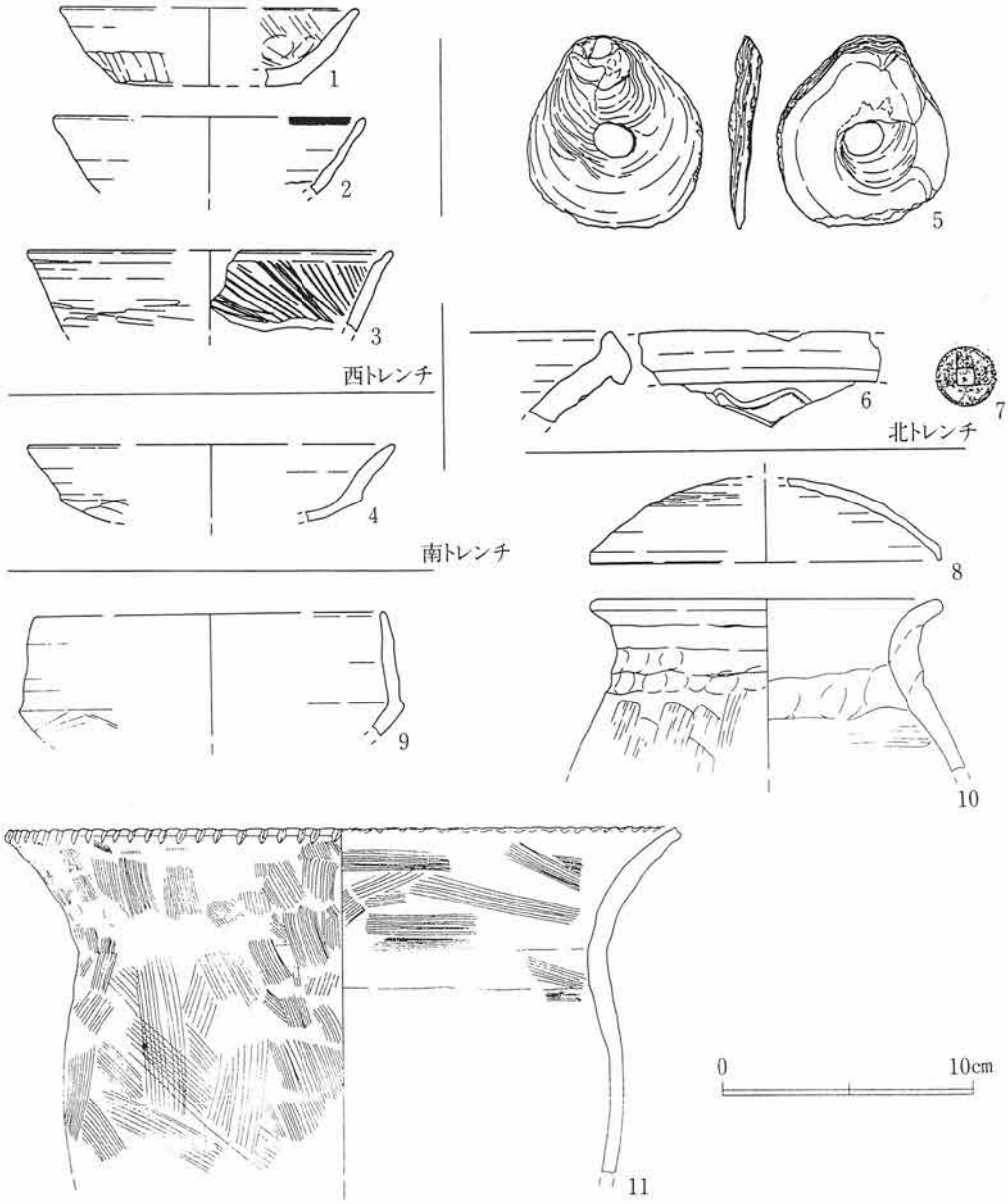


Fig.37　トレンチ出土遺物(2)

2は須恵器坏。復元口径12cm強。口唇部内側はやや黒色に変化している。3は土師器坏。復元口径14.5cm、外面はヘラナデ、内面口縁部下には斜方向の暗文が施される。

Fig37-4は南側トレンチの黒褐色弱粘質砂層内の出土遺物。図示した1点の他に須恵器片、土師器片が若干量出土している。4は土師器坏。側壁は胴部中位に形成された強い稜線から外反し、端部はさらに外へ引かれる。外面稜線以下はヘラ削り、以上及び内面はナデ。

Fig37-5～7は北側トレンチの出土遺物。ほとんどは黒褐色弱粘質砂層の出土であるが、図示できなかったもののなかにはそれ以下の堆積土層からの出土品もある。5はカキの貝殻の周縁を打ち

欠き、中央に径1.5cmほどの孔を穿けたもの。飾りの一種と思われる。

6は須恵器甕の口縁部。口縁部は直線的に外反し、口唇部は内外に肥厚している。外面では口唇下端部がやや縁帯状になる。口縁直下外面には波状沈線文が巡る。7は銅銭。「開元通宝」(唐、初鋳621)である。背文はない。

Fig37-8～11は遺跡地内の黒褐色弱粘質砂層内の出土遺物。8は須恵器蓋。復元径14cm弱、上部のつまみの形状は不明。9は碗であろう。ヘラ削り部とナデ部との間の稜から上はほぼ直立気味に立ち上がり、端部はやや内湾する。復元口径14cm弱を測る。

10、11は土師器甕。10は頸部の接合部が厚くなるが、口縁部は「く」の字に開く。11は脚部の付く器形であろう。口唇部にはヘラによるくぼみが細かくつけられ、外面はハケ調整。復元口径27cm弱を測る。

V．遺跡内採集遺物

本項には発掘調査中に遺構の崩落などによって帰属の不確かになってしまった遺物、機械力によって表土を除去中に出土した遺物等を含めた。本来ならば、本章に含めないで、別章で扱うべきかもしれないが、紙数の都合もあり本項で扱うこととした。

以下、図示した各遺物について説明を加えていくことにするが、Fig39に示した遺物は遺構確認前に掘り上げた現代攪乱の出土遺物である。

Fig38-1～30はかわらけ。口径は7～8cmの小皿と12～13cmの大皿とに分けられる。10～11cmの中皿は図示できなかった。胎土は、ほとんどが砂を多少含んだ粒の粗い土であるが、やや粉質に近いキメ細かい土を使用したものも少量含まれている。

小皿ではほとんどが器高2cm以下の低いものであるが、1、16のように2.5cmを越えるものも少量含まれる。これらの背の高いかわらけは胎土がキメ細い。27点の小皿のうち灯明皿として使用された痕が残るのは1、8の2点である。

大皿は3点が図示できたが、他は復元するには困難なほど破片が小さい。胎土は小皿のほとんどと同様の粗い土。側壁は29、30は口唇部が内湾傾向を示すが、28は端部がやや外反気味である。内外面の整形は小皿と同じである。

Fig38-31、32は舶戴磁器。31は無文の青磁小鉢であろう。復元口径9cm強、内外面に青緑色の釉が厚くかけられている。32は口兀白磁皿。復元口径11.5cm前後を測る。内外面に厚くかけられた白濁色の釉が口唇部でかき取られている。

Fig38-33は山茶窯こね鉢。34は硯片。方形硯と思われる。残存部からみると四隅に線刻文様が施されていたようだ。厚さ1.2cm。

Fig38-35～39は鉄釘。全体が残るものはない。それぞれが方形断面を持ち、頭部は折り曲げられている。40は形状から「かすがい」であろうが全体が残っていないため断定できない。

Fig38-41、42は銅銭。41は「開元通宝」42は「熙寧元宝」それぞれ唐、北宋の鋳造銭である。こ

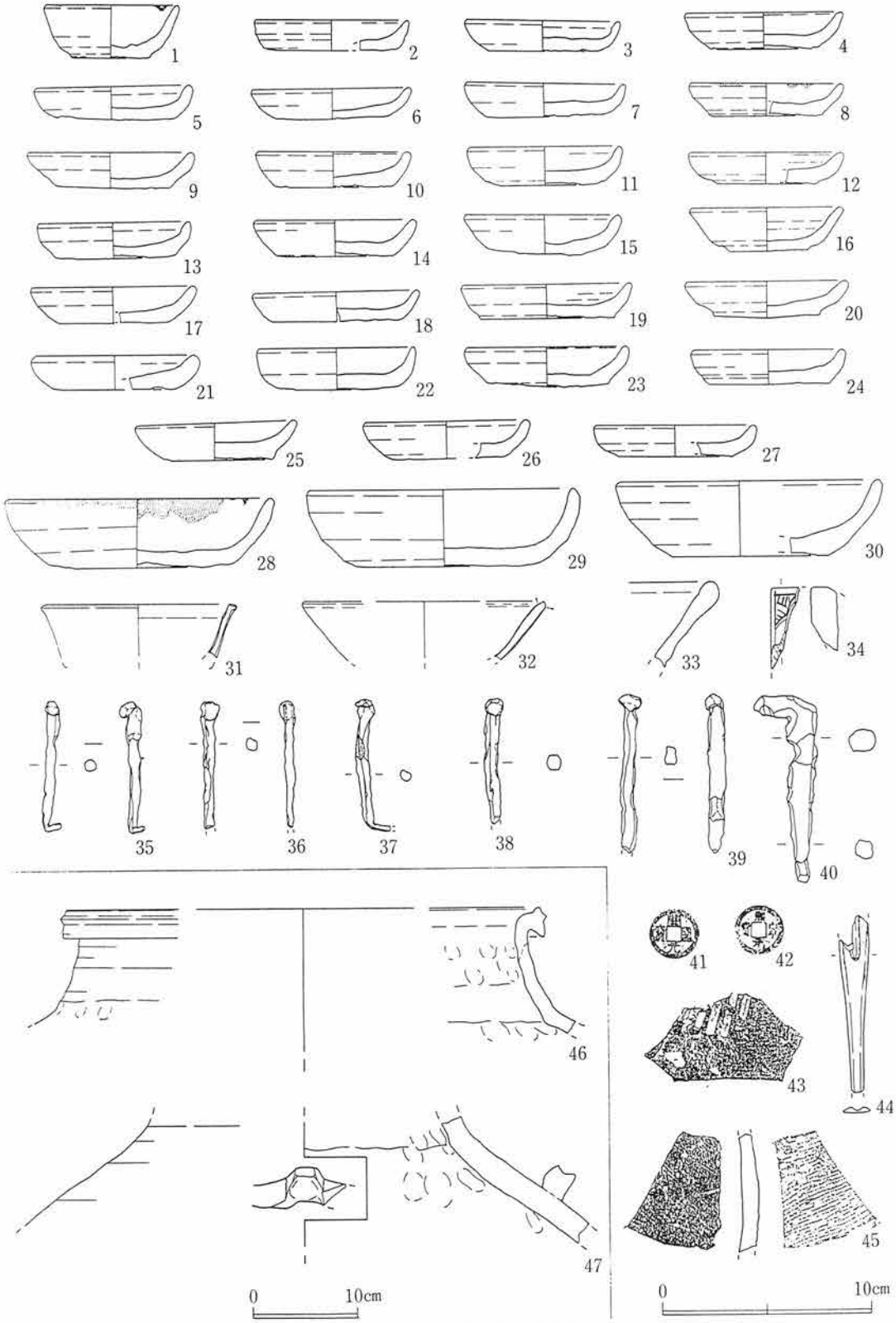


Fig.38　遺跡内採集遺物

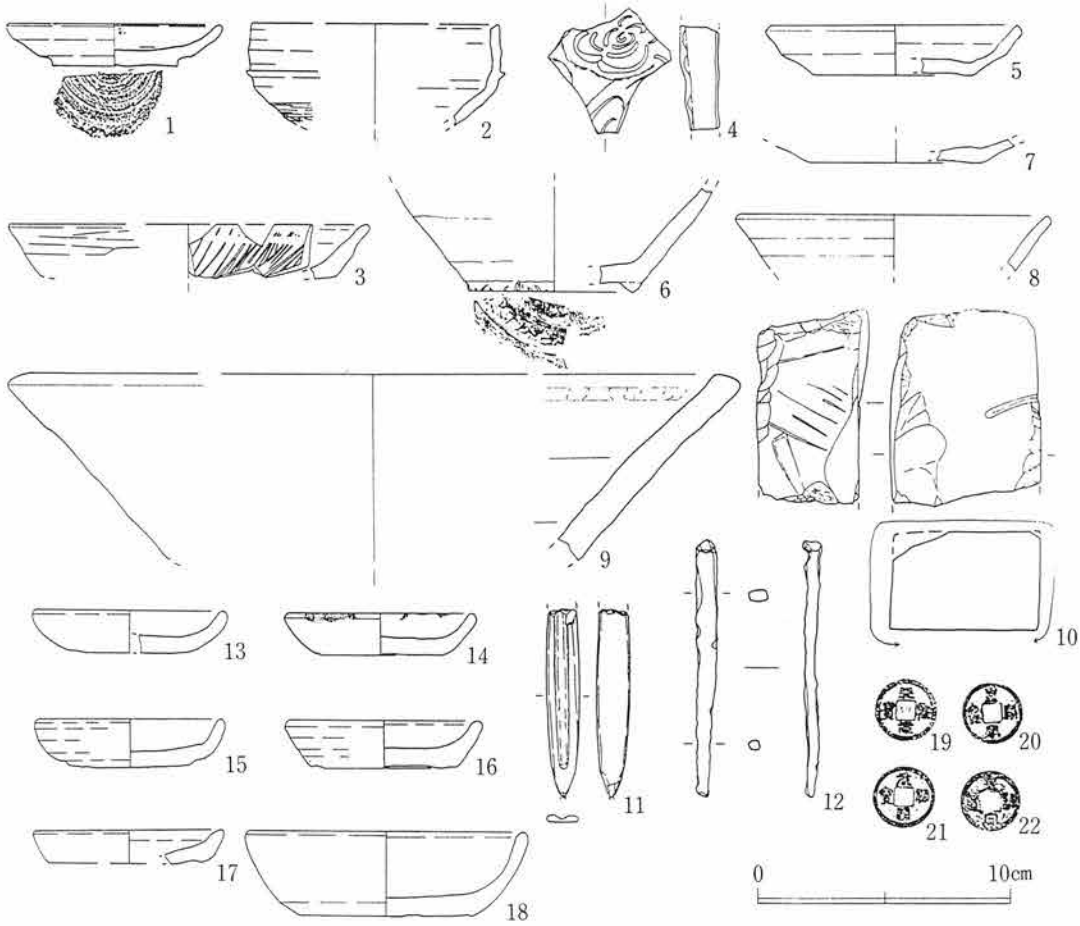


Fig.39　採集遺物(2)

の他に文字の判読できない銅銭が数点出土している。

Fig38-43は出土常滑甕片の拓影。44は骨製笄片。45は須恵器甕片。46、47は常滑窯製品。46は復元口径約45cm、口縁部は外に折り曲げられ縁帯状を呈しているが、縁帯中央部に雑なナデのためなのか突起様の稜が残る。47は双耳壺と思われる。横方向の耳が付く。

Fig39-1は砂を含んだ胎土の土器である。内底面には指頭ナデがみられずに、外底面には静止糸切りに近いゆるい回転による糸切り痕が残る。鎌倉時代初期の在地糸のかわらけと思われる。他には破片が数点ある。

Fig39-2、3は土師器。2は碗であろう。直立気味の口縁部と体部との間に突帯様の稜が付いている。体部下半の外面はヘラ削り、上半および口縁部はナデ。復元口径9.6cm。3は復元口径14cm強の坏。内面には底部近くから放射状の暗文が細かく入る。

Fig39-4は青白磁梅瓶。Fig39-5～8は瀬戸窯の製品。5は口径10cm弱の灰釉皿であるが2次的な火熱のため釉はほとんど落ちている。器高2cm弱。底径6cm強、外底面には回転糸切り痕が残る。

6は底径6.5cmの山茶碗。やや粗胎である。外底面には断面三角形の貼り付け高台があり、高台畳

付にはモミ殻痕が残る。内面は側壁中位から内底面にかけてよく磨かれている。7、8はやや精良胎土の山茶碗窯の製品。入子であろう。7の底径は6.8cm、8の口径12.5cm。

Fig39-9は土器質鉢形手焙り、やや復元に無理があったようだ。復元口径28cm前後。10は砥石である。長方形を呈し、厚さ4cm弱、幅6cm弱を測る。

Fig39-11は骨製の笄。本体の断面は上部にくぼみを持つカマボコ型を呈し、幅1.3cm、最大厚3mm前後。残存長7.5cm。本遺跡ではこのような骨製の笄はあまり出土していない。地域差があるのかもしれない。

Fig39-12は鉄釘。先端を欠くが10.2cmが残る。比較的長い釘である。

Fig39-13～18はかわらけ。胎土は砂をやや含んだ粗い土で、内底面には指頭ナデ、外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残っている。口径は13～17が7～8cmの小皿。18は口径11cm弱、中皿と思われる。小皿では側壁が直線的に外反するものが多く、内湾気味のものは少ない。又、器高は2cm以下のものがほとんどで、2cmより高いものはみられない。

18は中皿はややゆるなかな曲線を描きながら立ち上がり、口縁部はやや内湾気味である。口唇端部はわずかに肥厚しているが、これは意図的なものではないだろう。

Fig39-19～22は銅銭。図中に示した4点は判読できるが、この他に判読できない銅銭が破片も含めて数点出土している。

第4章　まとめと考察

調査では中世およびそれ以前の2枚の生活面―版築地行面―から、それぞれに多くの遺構が検出され、本遺跡周辺での古代～中世にかけての生活の一端を知ることができた。これらと、すでに周辺で実施されている多くの発掘調査から得られている結果とを合わせ考えると、本遺跡の性格、成立時期などを知ることができよう。

以下、本章では、調査の結果得られた資料と周辺の発掘調査結果などから、本遺跡の年代、遺跡の性格、遺跡の立地について若干の考察を加えることとする。

Ⅰ．遺跡の年代

本遺跡の発掘調査では、大きく時代の異なる2枚の生活面が確認され、それぞれに遺構、遺物が検出されている。本報文中ではこれを中世、中世以前として区分している。

中世以前では伸臥伸展葬の土壙墓1体と溝が5条検出されている。遺物は、遺構に伴うものは少ないが、土師器、須恵器、銅銭などが出土している。遺物各個についての説明はすでに前章までにされているので、ここでは触れないが、概略してみると大きな時代差が認められる。

遺物のうちで古いものとしては弥生時代～古墳時代初め頃の台付甕と思われるものがあり、新しいものとしては9～10世紀に比定できる須恵器の小形碗（外底回転糸切り）がみられる。この他に、本遺跡では出土していないが、南接する遺跡では12世紀後半～13世紀初め頃に比定される回転糸切りかわらけと手づけねかわらけが若干量出土している。出土層は中世以前の遺構群の基盤層として把んでいる黒褐色弱粘質砂層内である。

中世として確認された白黄褐色砂層上の遺構群は方形竪穴建築址を中心として構成される、浜地では一般的なものである。これらが、ある程度使用されなくなった時点で、この地に土壙墓あるいは人骨の投棄が行なわれている。

出土遺物は、かわらけ、舶載磁器、瀬戸窯製品、常滑製品など多種にわたり出土している。かわらけでは手づくねあるいは鎌倉時代初期に比定される回転糸切りかわらけはまったく含まれない。又、粉質胎土（室町後半から戦国）のものも含まれていない。舶載磁器では蓮弁文青磁碗、口兀白磁皿が主体となり、画花文青磁碗あるいは鎌倉時代の初めに鎌倉に入っている同安窯系の青磁は出土していない。

瀬戸、常滑などの国産製品は比較的多く出土している。瀬戸では灰釉おろし皿、入子、折縁鉢の他にわずかの灰釉縁釉皿が出土している。常滑では、甕片が多く出土しているが、こね鉢、壺などは比較的少ない。その他の国産窯の製品では、備前のすり鉢がほとんど出土していない。遺物から

は13世紀末あるいは14世紀初めから15世紀中頃までの年代が考えられる。

以上のことから、本遺跡の年代を考えると、本遺跡の存続年代は弥生時代末期から室町時代前半頃までと言えよう。しかし、この間すべての時期に本遺跡が営まれていたのではなく、断続的なものであったようだ。中世以前については、得られた資料が少ないこともあって、断定できないが、少なくとも12世紀中頃（あるいは13世紀初め）から13世紀末頃に、方形竪穴建築址が建てられ始められるまでの約100年の間は無住の地であったと言える。この間に、白黄褐色砂層が飛砂として厚く堆積しており、この層からは遺物がまったく出土していない。

II．遺跡の性格

本遺跡の性格は、本遺跡が含まれる長谷小路周辺遺跡群内の発掘調査報告書で述べたように(注1)屋地と異なる都市縁辺部である浜地に形成された一種の自由民である手工業者集団に関わる生活址と考えたい。

本遺跡を含んだ周辺の遺構に共通する点としては次の4点があげられる。これらの共通点が「浜地」の特徴でもある。

1．検出される遺構が方形竪穴建築址を主体としており、掘立柱あるいは礎石建物は少ないが、井戸が多く、生活の場と言える。

2．方形竪穴建築址が埋没した後に単体あるいは集合（投棄）の土壙墓が形成されていることが多い。

3．出土遺物に鋳造関係あるいは他の手工業に関わるようなものが多く含まれている。

4．検出された遺構が溝などによって整然と区画されていることがほとんどない。

上記の4つの特徴をすべての遺跡を満たしている訳ではないが、本遺跡群内の遺跡ではほとんどが3点以上を満たしている。

本遺跡では溝が2条検出されたものの、方形竪穴建築址を主体とし、井戸なども構築されている生活址であり、これらが埋没した後に単体葬あるいは集合葬の土壙墓が作られている。方形竪穴建築址は約100年という短期間に集中して構築されているが、それが廃絶すると土壙墓が作られ、この地が墓域となっている。

この状況は中世以前においても認められる。本遺跡地内では土壙墓1体が検出されているにすぎないが、周辺の遺跡も合わせて考えると、この地域がある時期には墓域に近い状況であったことがわかる。しかし、土壙墓の近くからは、やや時代が異なるが、竪穴住居址も検出される。

このように居住地と墓域というまったく性格の異なる空間が、時代が変化しているとは言え、数回にわたってくり返されているということは、浜地の性格を考えるうえで重要な点の一つと考えられよう。

Ⅲ．遺跡の立地

本遺跡の含まれる長谷小路周辺遺跡群は現況レベルが海抜10～11mを測り、鎌倉旧市街地（三方を山に囲まれた内側）内では微高地に相当する。現況での市内他地点との比較でもJR鎌倉駅周辺が6～7m、若宮大路下馬交差点が4m弱、六地蔵周辺が7～8m、鶴岡八幡宮社頭で10m強であるから、遺跡地周辺が高台であることがわかる。この高台は北は佐助川、東は滑川、西は稲瀬川によって画されていたのだろう。神奈川県立博物館の松島先生の御指摘では黒褐色弱粘質砂層下の堆積も飛砂によるものであろうとのことである。

この微高地の周辺には黒褐色弱粘質砂層が厚く堆積している。この土層の成立には海岩砂丘背後の湿地様の状況が大きく影響しているだろうとの松島先生の御指摘もある。この土層の上面には湿地に住む陸生の小虫の住む穴が多くあいているのが確認されている。

自然砂丘の増大、後背湿地の形成、湿地の埋没、居住区あるいは墓域の形成といった状況が何回となく、くり返された結果が今日の地形を形成したのであろう。最近の調査では、最も新しい飛砂による砂丘の形成は江戸時代初期までになされているようだ。この近世の飛砂砂丘は本遺跡周辺ではすでに削平されてしまっているために、確認できないが、若宮大路周辺の一ノ鳥居近くでは約1mの厚さに堆積している。

Ⅳ．調査の成果と問題点

発掘調査では中世の遺構群と明確な自然堆積層を狭んだ中世以前（あるいは中世初頭を含む）の遺構群とが検出され、多くの遺構が検出された。特に中世以前では、竪穴住居地は検出されなかったものの仰臥伸展葬の土壙墓が検出されるなどの成果があげられた。

又、御指導いただいた先生方の御協力を受けて白黄褐色砂層（標準3層）が飛砂による堆積であり、下の黒褐色弱粘質砂層が海岸砂丘の後背湿地と関わりのある堆積であることなどが判明するなどの遺跡の成立に関する新事実が把めたことも大きな成果であった。

しかし、これと同時に、調査に関わる2～3の問題点も残った。これらの問題点は、調査の成果のすべてを削減させるほどのものではないが、その可能性を残している。

問題点の一つは、国土座標軸の使用に関してである。鎌倉市では現在、種々の要因―明確にはわからないが―から、各発掘調査団が独自に調査区内にグリットを設定、使用している。(注2) これに際して使用している基準点は私有地の境界地割り杭（コンクリート）である場合が多い。この場合、道路の拡幅などによって建物（敷地）自体が変化してしまった場合には、他の遺跡との合体はほとんど困難である。

本遺跡の調査では、南接する遺跡の発掘調査の延長上に本遺跡の発掘調査が存ったために、両遺跡間では共通グリットを使用したが、数十メートル東の遺跡とは同一軸が使用できていない。調査担当者が、当面の方法として、両遺跡で使用した地割り杭の関係を測量してあるが、これで両遺跡の関係は把めても、鎌倉市内の正しい位置（座標軸を使用した）におとすのは困難であり、仮におとしても正確さに欠ける。

このような状況で、発掘調査が進行していけば鎌倉の正しい復元はまず不可能である。限られた予算、期間で各遺跡の発掘調査を実施している遺跡発掘調査団が、座標軸からの測量を業者に委託し、使用するには金銭的な負担が多い。考古学的な発掘調査が良質な遺物、貴重な遺構を偏寵しなくなって長い年月が過ぎている。鎌倉のような中世都市遺跡では溝の位置、方向などの一般的な遺構の計測資料の蓄積が重要なのである。

他にも、発掘調査に関わる問題点として、いくつかがあげられる。しかし、発掘調査報告書という、成果を報告する本の中で、問題点ばかりを記すのも問題であろうから、ここでは、割愛させていただきたい。

上記の問題点を含めた種々な問願が、早急に解決されることを祈念しながら、調査で得られた資料に若干の考察を加えた。十分な資料が得られていない部分も多く、正確さに欠ける点も多く残ってしまったが、これにより調査者の責をはたすことにする。

註１．「長谷小路周辺遺跡―由比ヶ浜三丁目194番25他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』５　昭和63年、鎌倉市教育委員会

註２．若宮大路近辺の一部遺跡では独自に座標軸を設定している調査団もあるが、このような例は少ない。

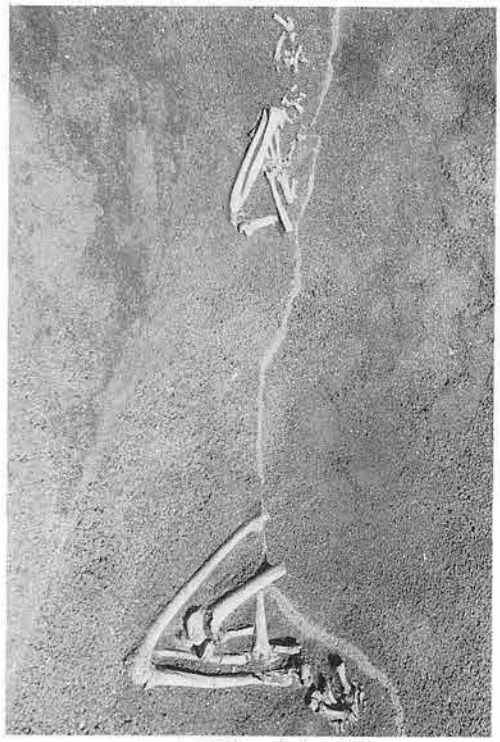
長谷小路周辺遺跡群現況　（気球写真、下の空地は長谷小路南遺跡）

▼中世遺構全景
(北から)

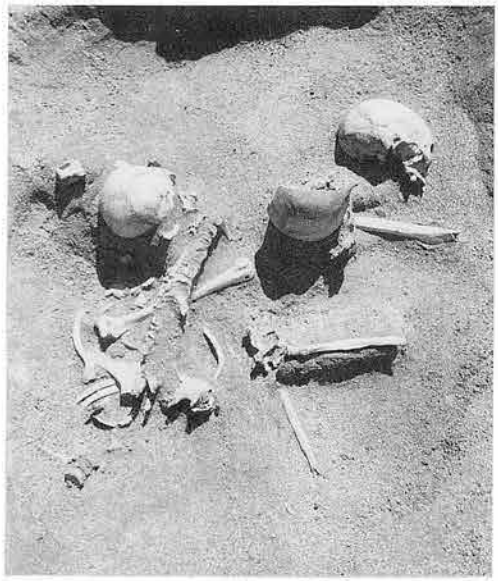
堆積土層写真（部分）

1．方形竪穴建築址群　（白線が３号、南から）

2．２号方形竪穴建築址　（南から）



▲1．土壙墓1（南から）



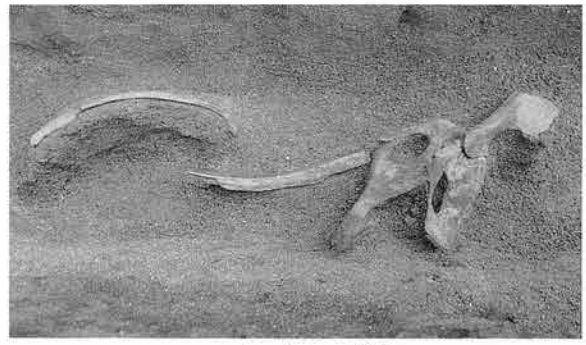
▲2．土壙墓2（南から）

▲3．同（西から）

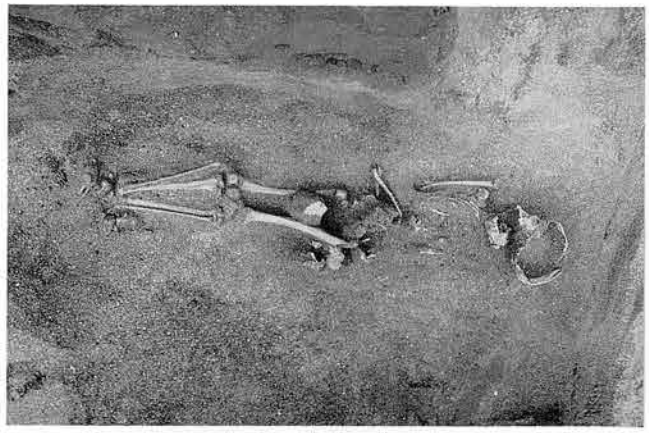
▲１．土壙３（東から）

▼２．同（北から）

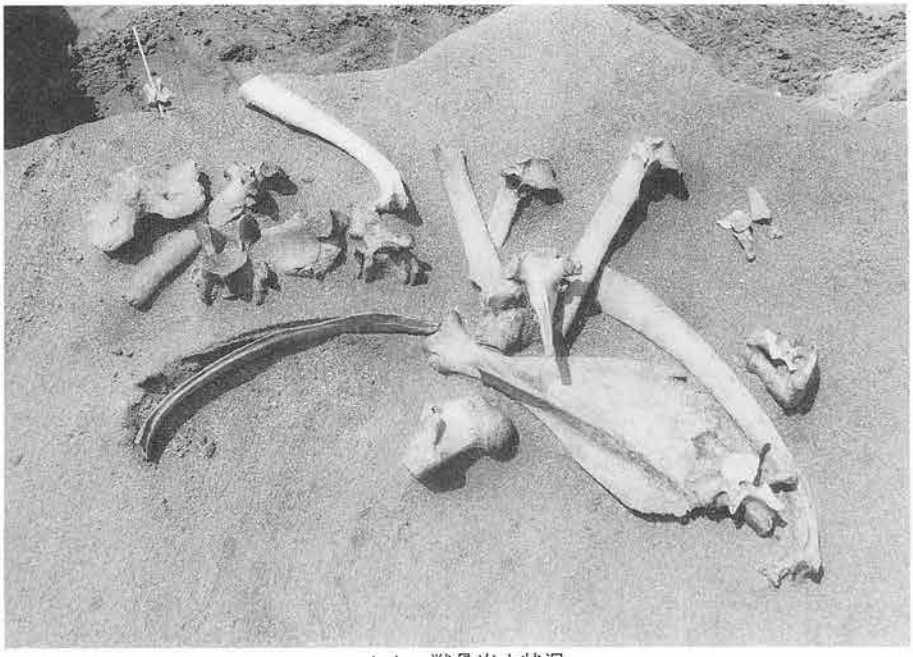
◀1．溝2、溝3　（北から）



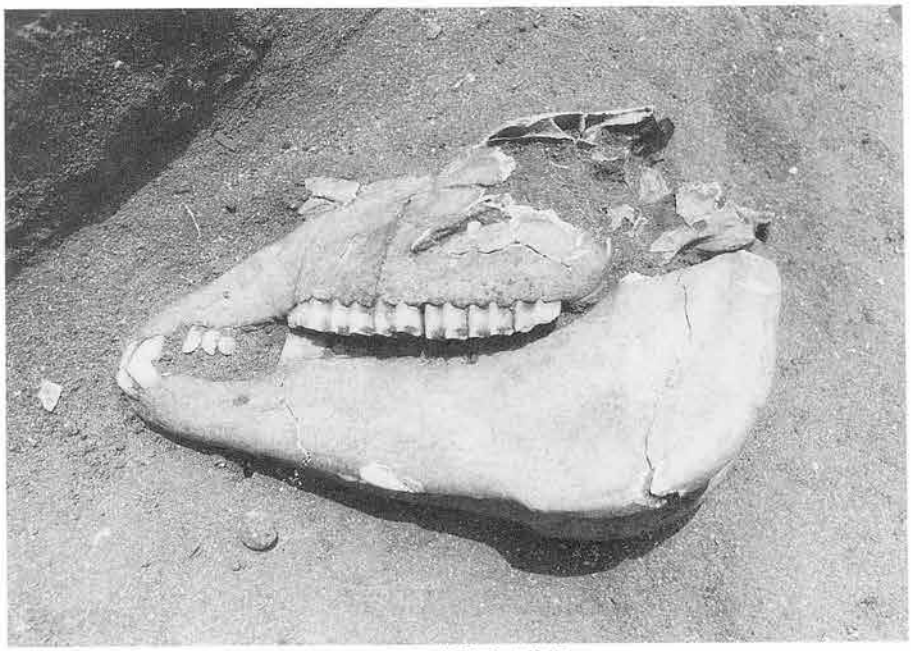
▲2．溝3内獣骨



▲3．埋葬人骨（中世以前、南から）



▲1．獣骨出土状況

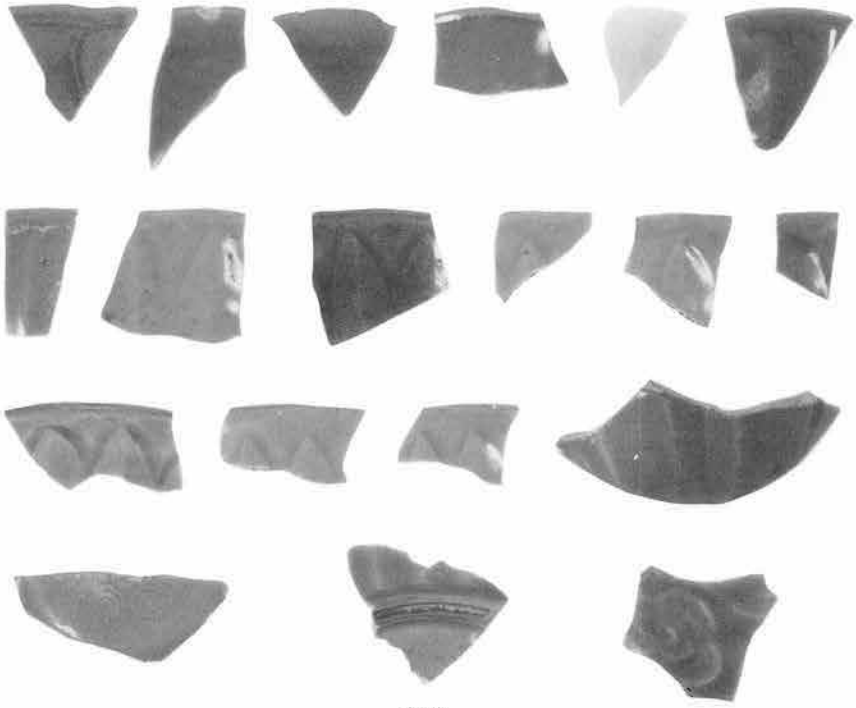


▲2．獣骨出土状況

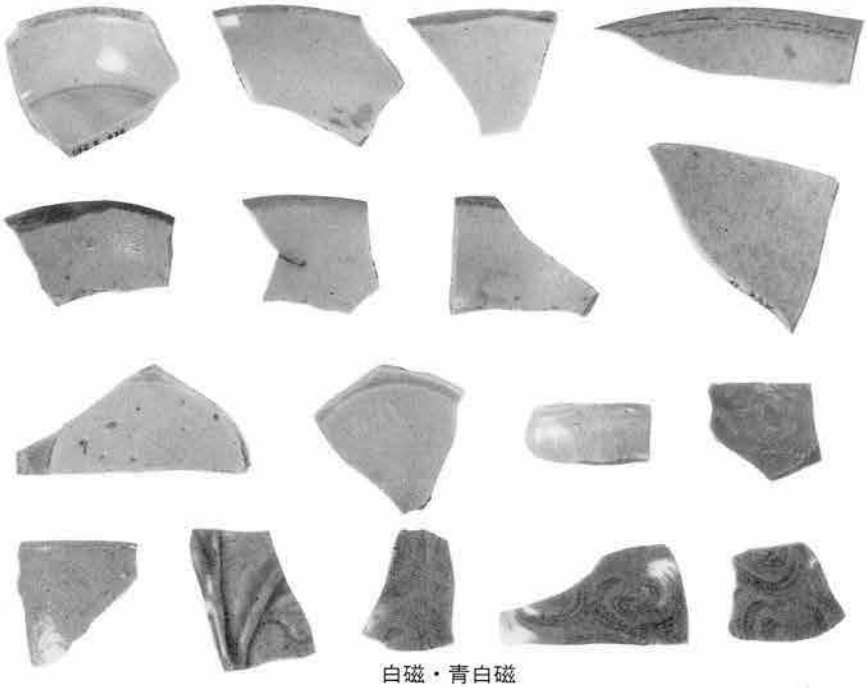
◀1．溝6、溝7　（南から）

2．溝1（北から）▶

PL10



青磁



白磁・青白磁

舶載磁器

▲白磁合子蓋

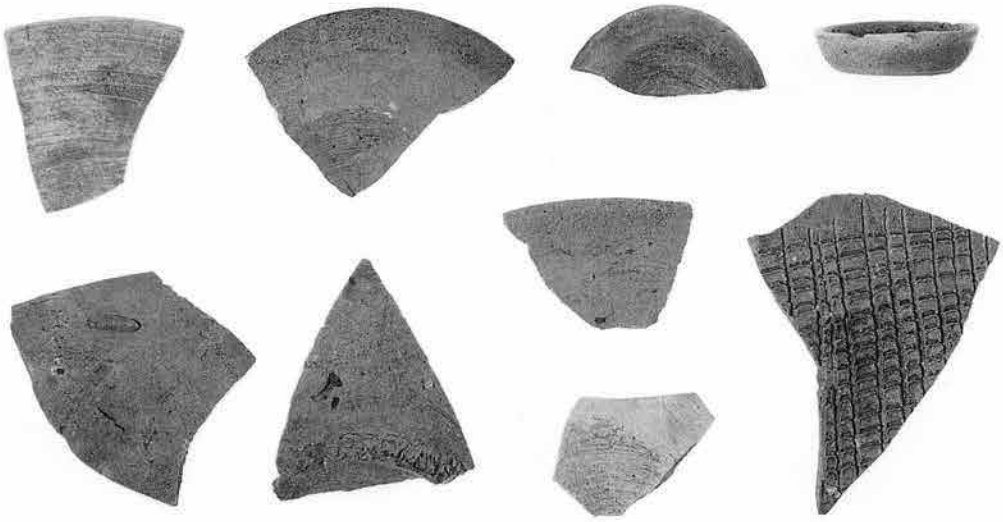
瀬戸灰釉　折縁鉢▶

◀瀬戸天目茶碗

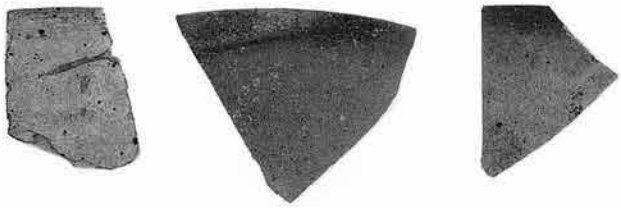
舶載磁器、瀬戸

壺蓋・壺・碗他

瀬戸製品



瀬戸製品

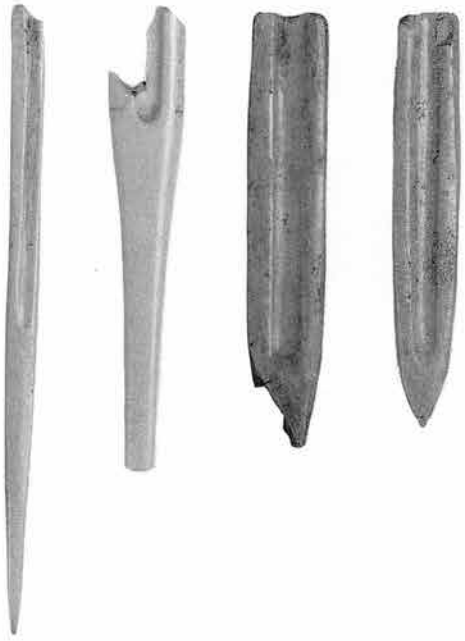


中世以前

瀬戸製品他

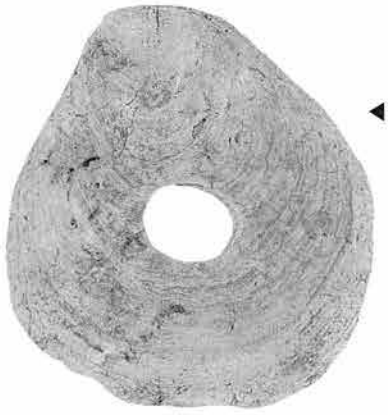
PL14

かわらけ



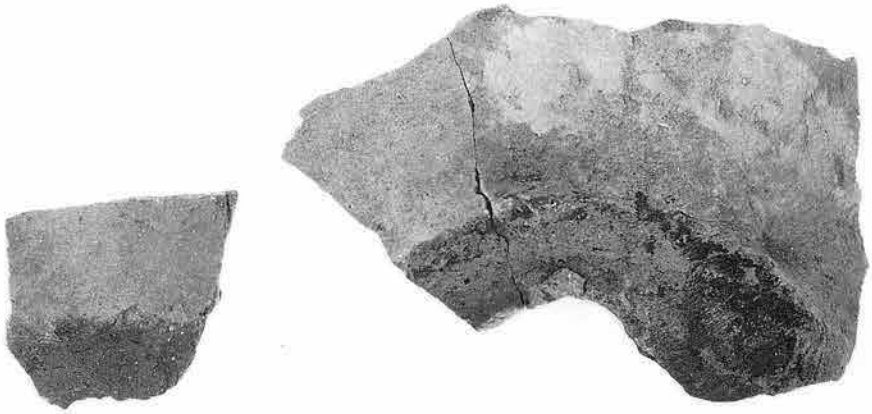
◀骨製品・笄

銅製品▶

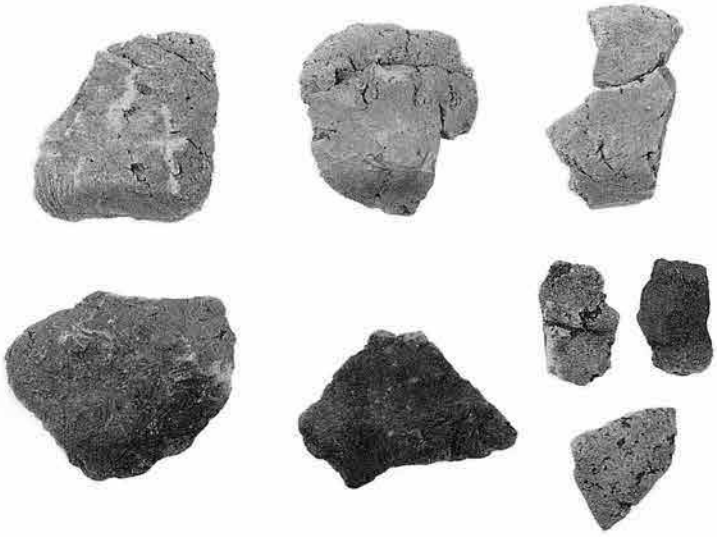


◀穿孔された貝殻

骨製品他



常滑甕底部



鋳造関係遺物

常滑他

4．米町遺跡

大町二丁目933番他

例　言

1．本報は鎌倉市大町二丁目933番地における住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

2．調査は対称面積70㎡を鎌倉市教育委員会（教育長　尾崎實、担当　松尾宣方）が200㎡を米町遺跡発掘調査団（団長　原廣志）が実施した

本報告書に収録したのは昭和63年８月１日から９月19日にかけて実施した、鎌倉市教育委員会調査分である。

3．調査参加者は下記のとおりである。

調　査　員　　原　廣志

調査補助員　　武　淳一　　継　実

4．本報告書は、鎌倉市教育委員会の指示を受けて、第１・４章を田代郁夫、第２・３・5章を原　廣志が執筆し、これを原が編集した。

5．本書に使用した写真は遺構を木材美代治、原・武が、遺物を木村美代治が撮影した。

本　文　目　次

例言……(206)
目次……(207)

第１章　調査地点の位置と歴史的環境……(210)

第２章　調査の経過……(211)

第３章　検出した遺構……(212)
(1)層序及び概要……(212)
(2)土壙……(212)
(3)井戸……(215)

第４章　出土した遺物……(216)
(1)遺構出土遺物……(216)
(2)包含層中出土遺物……(217)

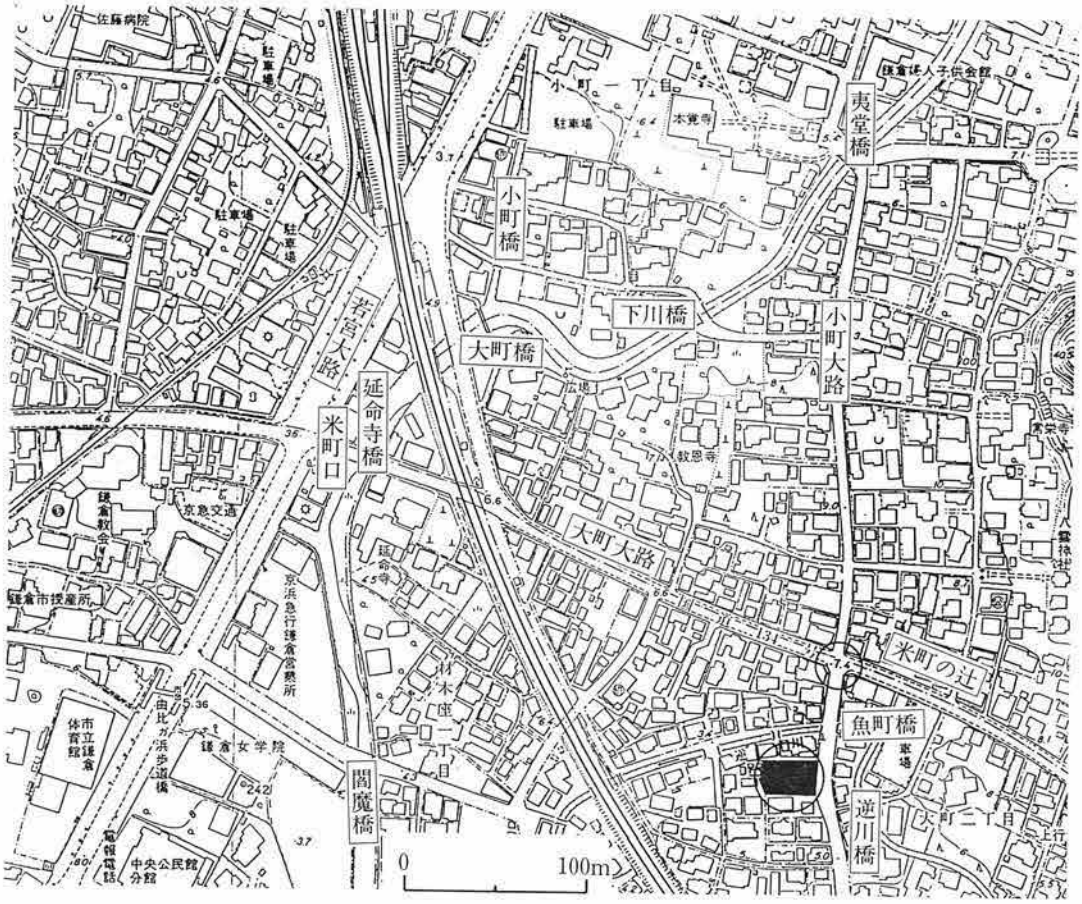
第５章　まとめ……(220)

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図及び古絵図……(209)
図２　調査区及びグリット配置図……(211)
図３　遺構全測図（本報告書分）……(213)
図４　井戸５・６、土壙９～13……(214)
図５　出土遺物(1)……(218)
図６　出土遺物(2)……(219)

図　版　目　次

図版１　第２面全景（東から）……（221）
図版２　１．第１面全景（東から）　２．井戸（北から）……（222）
図版３　１．第２面全景（西から）　２．土壙（東から）……（223）
図版４　１．舶載陶磁器　２．こね鉢　３．測戸入子　４．渥美・常滑甕　５．木・骨製品……（224）
図版５　かわらけ……（225）



▼菩宝寺寺地図　光明寺蔵（鎌倉の古絵図２・国宝館図録第16集より転載）

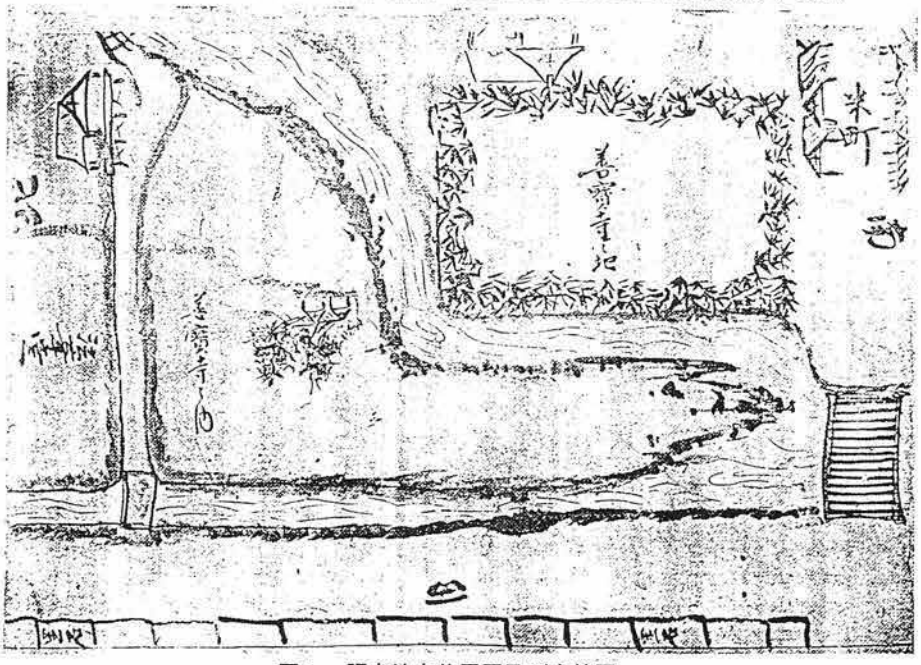


図１　調査地点位置図及び古絵図

第１章　調査地点の位置と歴史的環境

当遺跡は、逆川の左岸、小町大路に面してその西側にあり、米町辻のすぐ南に位置している。

若宮大路の東側を南北に走る小町大路と大町大路の交叉するあたりは、鎌倉時代の鎌倉の繁華の中心であったようである。人の往き交うところに商業地域が構成され、規則ができて公認される。その増所が所謂町免許の地であり、大町もそうした場所であった。

現在もこの大町に属する米町は、穀町ともいい、「吾妻鏡」建保元年五月二日の条に、武田信光が、若宮大路米町口で、朝夷奈義秀と行逢いまた米町辻、大町大路など所々で戦ったとある。又、串川光明寺（津久井群津久井町）所蔵の善宝寺の地を描いた地図に、若宮大路に接して架けられた延命寺橋を東に渡ったところに米町と記され、その道の両側に家並が描かれている。つまり米町は大町大路の内にあり、若宮大路の横町であったようである。次に米町辻についてであるが、辻は二つの道が交叉するところのことで、上記のことから米町の通り、すなわち大町大路と小町大路の交叉するところではないかとされている。

「小早川家文書」の中に次のようなものがある。

譲与　息男政景分所領事

合

中略

一、鎌倉米町在家一宇跡　宗次入道居住跡

右件所領等任譲状可知行也、（中略）仍為後日沙汰譲状如件

正嘉弐年(1258年)七月十九日　沙弥（小早川茂平）

同文書の正応二年二月十六日付の小早川政景のその子政宗宛の譲状にも、右のような鎌倉米町の在家一宇跡とあるが、建武五年二月二十四日付の小早川景宗の祐景宛の譲状には、同じものを鎌倉米町の屋地としており、貞治二年六月二十九日付の重宗宛の小早川重景譲状にも同様に記している。この場合在家というのも屋地というのも全く同じ内容であることがわかる。そして鎌倉の庶民はそのほとんど全部が社寺や御家人などの所領の屋地に住んでいたようである。

明応六年（1497年）になると鎌倉の中心地である米町附近には坪の制が行われている。鎌倉はこのころになると丈尺の制による戸主の制から坪を単位とする在家の制へと移っている。これは、田舎の繁華な集落に過なくなったことを物語るものといわれている。先に述べた善宝寺の寺領注文によれば、銀細工、紙屋、青物屋もあったし、穀物の売買もしていたようで、中座ということばも残っている。里座に対する町座の意らしいが、そのにはなお相当な商業地城を構成していた様である。

なお当遺跡の北側を流れる逆川を渡る橋を魚町橋といっているが、魚町は甘縄にあったようである。

第2章　調査の経過

本遺跡に対する発掘調査は、鎌倉市教育委員会による事前の試掘調査を経て実施された。

試掘調査の結果から、かなり深くまで近・現代の盛土層が入っていることが判明したため、本調査に当っては現地表下１m前後まで重機で排土した。以下は人力によっる掘削を行ったが、地山面上（中世基盤層にあたる黒褐色粘質土上面）までは浅いところ10cm（東端）、深いところでも30cm（西端）程であった。調査区西域から東域中央部にかけての地山面上には、土丹小塊による蒲い地業層が部分的に観察でき、これのみが僅かに地山面よりも上層で確認しえた生活面であった。

調査にあたってはまず、調査区外北西の任意の一点に基準点を設け、東に向けて４m間隔で南北軸を、南に向けて同じく４m間隔で東西の軸線を配し、それぞれにアルファベットと算用数字の名称を付した。南北軸は小町大路との平行関係を意識したため、真北方位とは一致していない。

今回の発掘調査範囲は、調査対象面積約330m²のうち、国庫補助事業による本報告書収録部分が道路側の70m²であり、残りの約270m²が原因者負担分である。

調査は、昭和63年８月１日から掘削作業を開始し、同年９月25日をもって終了した。山土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

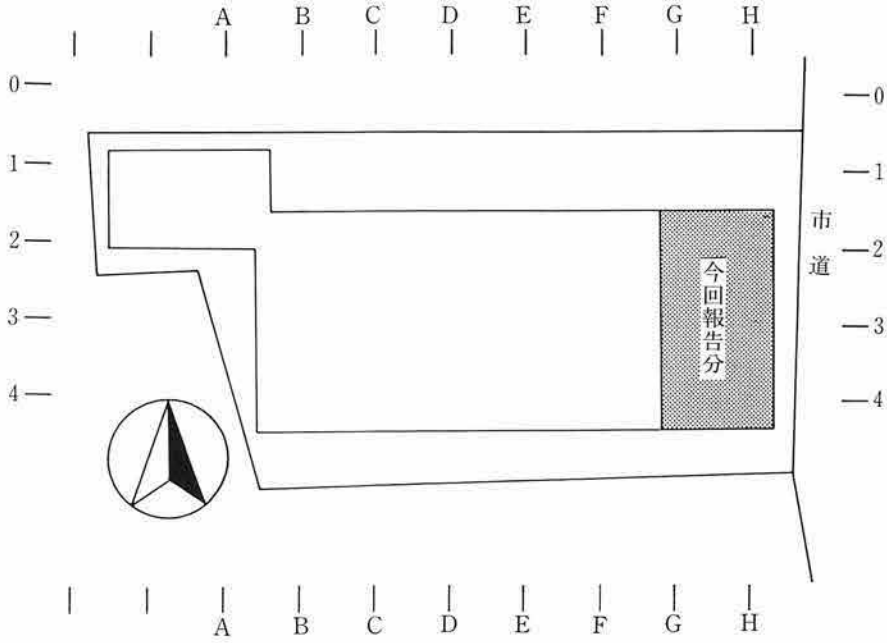


図２　調査地点位置グリッド配置図

第３章　検出した遺構

(1)層序及び概要

調査地点は大町四ツ角の南に位置し、材木座に向って延びる小町大路の西側に面している。

現地表面から90cm前後まで近・現代の埋め土で覆われていた。遺構検出面は中世基盤層である黒褐色土の地山である。地山上面まで近・現代の削平が及んでいたが、一部地山面上に20cm程の厚さの包含層（有機物腐食土及び具粒・砂を含む暗褐色砂質土）も認められた。

この包含層と地山面を掘り込んだ遺構を検出している。検出した遺構は柱穴140口以上、土壙16基と井戸が２基である。今回の調査範囲では、削平により上層の遺構面が遺存していなかったため、遺構の新旧関係は不明なものが大半を占める。柱穴の中には、礎板・土丹塊を根固めに入れ込んだものも見られるが、特に各柱穴間に規則性は認められず、建物址を検出するにはいたらなかった。

なお、遺構の各称（例えば井戸５、土壙９）は調査区全体での通し番号をそのまま使用している。

(2)土壙

土壙は16基検出しているが、この内特徴的なものや出土遺物のあるもの5基を選んで詳述する。

土壙９（図４、図版３－２）

調査区西側、中央部G－３に位置する。土壙10と重複しているが、該址の方が新しい。土壙10とは、出土遺物からみて年代的にはさほど隔りがないと思われる（図示しなかったが、土壙10からは渥美胴部片や手捏ねかわらけの小片がある）。隅丸長方形を呈した大型土壙である。東西（長軸）210cm以上、南北（短軸）154cm、深さは確認面から42cmを測り、底面は平坦で標高2.45mである。

堆積土は上層が具粒や砂を多量に含む暗褐色砂質土で、下層が木片を含んだ有機物腐食（植物繊維）土が認められた。下層から手捏ねかわらけが多く出土している。

土壙10（図４、図版１・２）

土壙９の東側、G－３にある楕同形土壙である。土壙９よりも古く、南側で重複している土壙よりも新しい。

東西（長軸）92cm、南北（短軸）72cm、深さは確認面から52cmを測り、底面はほぼ平坦である。壁面はかなり急峻に切り立っており、断面形は箱形を呈する。底面の標高は2.35mである。

堆積土は植物繊維、木片を多量に含む明茶褐色粘質土（酸化するとこげ茶色に変化）である。

土壙11（図４、図版１・２）

調査区中央東寄りG—3にある円型の土壙である。北側の土壙や土壙12と重複しているが、土壙12より古く、北側の土壙よりも新しい。

南北（長軸）128cm、東西（短軸）105cm、深さは52cmを測り、底面の標高は2.34mである。底面はほぼ平坦であるが、壁面は急傾でL字型を呈する。

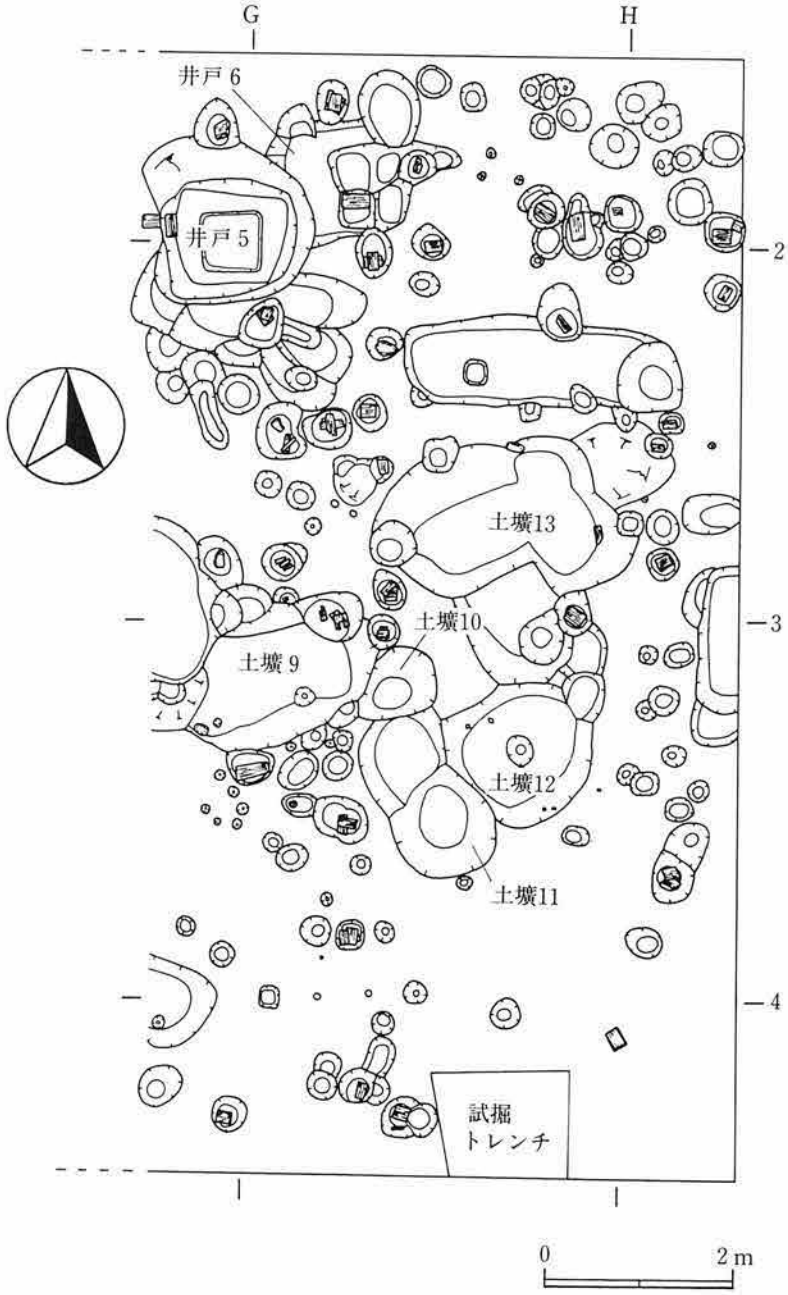


図3　遺構全測図

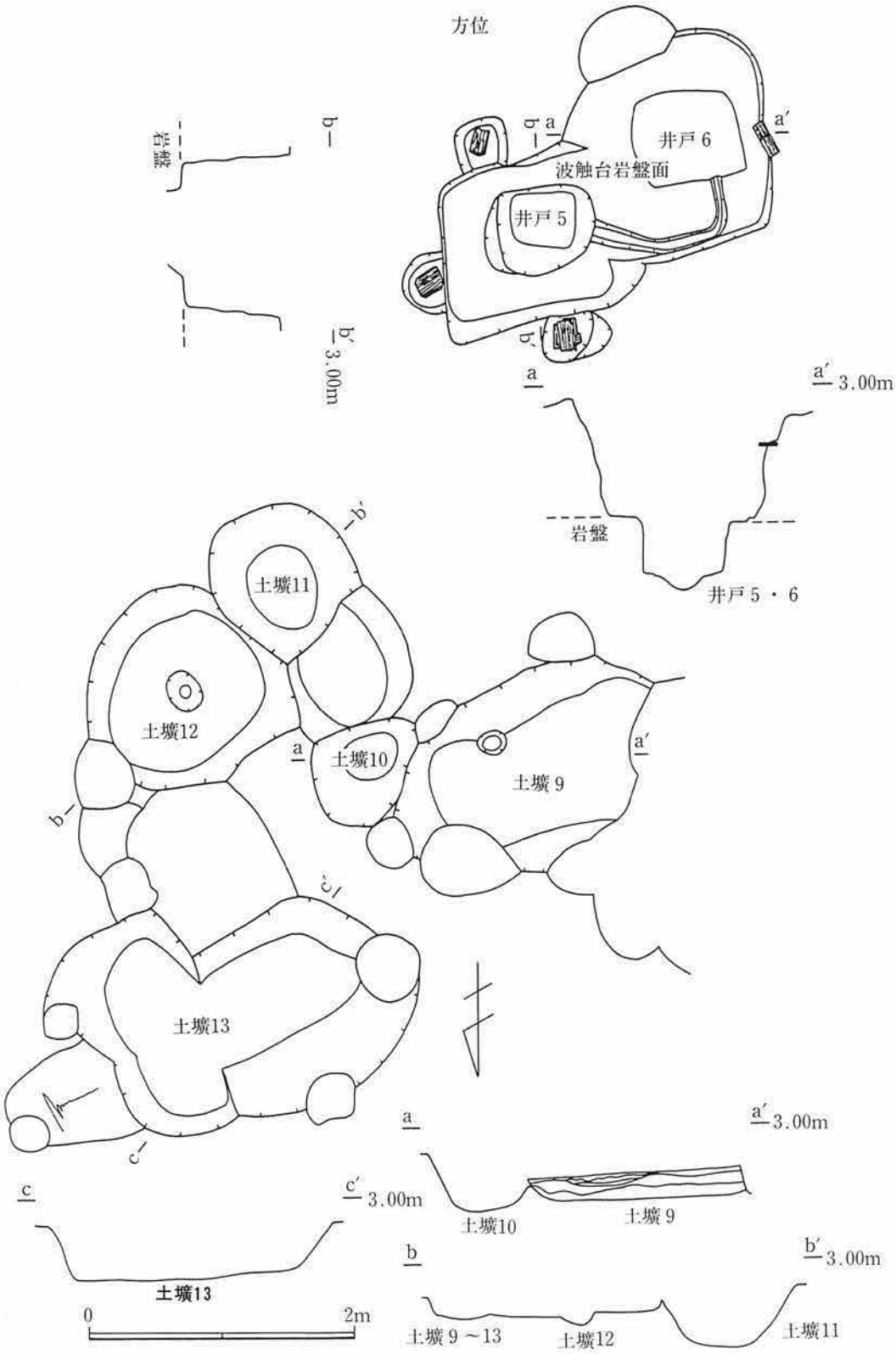


図4　井戸5・6、土壙9～13

堆積土は上層が暗灰褐色砂質土、下層が有機物腐食土で、この層からかわらけ、こね鉢などが出土している。

土壙12（図４、図版１・２）

土壙11と北東側が重複している大型の円形土壙である。

東西（長軸）162cm、南北（短軸）152cm、深さは確認面から24cmを測り、断面形が箱形を呈し、底面の標高は2.60mである。堆積土は有機物腐食土の明茶褐色粘質土である。出土遺物は糸切り底・手捏ね成形のかわらけや、こね鉢、常滑などがある。

土壙13（図４、図版１・２）

調査区中央G―2に位置する不整円形の大型土壙である。

東西（長軸）248cm、南北（短軸）182cm、深さ確認面から42cmで、断面は深めの皿状を呈す。底面の標高は2.5m程である。覆土は明茶褐色の有機物腐食土が堆積し、中からかわらけ（手捏ねかわらけ多量）や渥美などが認められた。

(3)井戸

井戸５（図３・４、図版３－１）

調査区北西隅G－２の交点付近に位置し、井戸６や土壙・柱穴と重複しているが、井戸６よりも本址の方が新しい。

掘り方はほぼ方形を呈する。内部は二段に落ち込んでおり、深さは確認面から145cmで、底面の標高は1.5m程である。規模は上端幅で長軸165cm、短軸160cm、１段目で長軸146cm、短軸125cm、２段目で長軸65cm、短軸60cmを測る。2段目は波触台を形成する岩盤上面を方形に掘り込んでいる。この岩盤上までの深さは確認面から97cmで、その標高は２m前後である。井戸枠は検出されていないが、掘り方が２段目の方形掘り込みの状況からみて、岩盤から上方には井石枠があったと思われる。

井戸内の覆土は上層が土丹塊や遺物を混した暗褐色砂質土で、中～下層が大・小土丹塊や砂利等を多量に含んだ暗青灰色砂質土であった。覆土中からはかわらけ、常滑、渥美をはじめ、多量の木片が出土している。

井戸６（図４、図版３－１）

調査区北壁際にあり、井戸５と重複している。

掘り方はほぼ方形を呈し、内部は波触台岩盤上からさらに一段落ち込んだ方形の掘り込みをもち、その深さは確認面から106cmである。規模は上端幅で長軸165cm、短軸155cm、下段が長軸80cm、短軸70cmを測る。井戸底及び波触台の岩盤上の標高はそれぞれ1.60mと1,90m程である。

覆土は上層が具粒・炭化物を多く含む暗青灰色砂質土、下層は明茶褐色の有機物腐食土である。遺物は木片が多く、小片の手捏ねかわらけも少量出土している。

第４章　出土した遺物

調査区内には、包含層が殆んど残っていなかった。従って出土した遺物の大半は、中世地山上を確認面とする遺構出土のものである。

(1)遺構出土渥遺物（図５・６、図版４・５）

土壙９（図５－１～４）

１は山茶碗窯系の鉢である。口縁部から体部上半にかけての破片で、復元口径30cmである。胎土は長石・石英微粒を多く含む。胎土、器表ともに灰白色を呈する。体部上半片の為か、内面は摩滅しておらず捏鉢として使用されたものか不明である。

２～４はかわらけである。いずれも手捏ね成形で、法量（口径・底径・器高）はそれぞれ２が9.1cm・7.4cm前後・２cm、３は復元であるが9.8cm・7.2cm・1.7cm、４も復元であるが13cm・９cm前後・3.3cmである。２は外底部中央にヘソ状の凹みがあり、内底部中央はその分盛り上る。全体の形状、特に口唇部は受け口状で、合子の身のようである。色調は２・３・４ともにくすんだ肌色で、焼成も良好であ。

土壙11（図５－５～10）

５～７はかわらけである。５、６は底部糸切り、７は手捏ね成形である。法量（口径・底径・器高）はそれぞれ５が7.5cm・5.6cm・1.6cm、６が復元で、8.6cm・６cm前後・1.7cm、７が復元で13cm・８cm前後・3.3cmである。５・６はいずれもやや砂を多く含む胎土で、内底面には横方向のナデが丁寧に施される。いずれも外底部には板状の圧痕が認められる。７の胎土は白色の針状物を含む比較的精成土である。５～７はいずれも灰白色を呈する。

８・９は箸状木製品で、８は長さ29.5cm、径は最も太いところで0.8cmである。９は片側端部をわずかに欠く。残存長27.2cmで、径は最も太いところで0.6cmである。この２本は形状からみてセットのようである。

10は草履の芯材で、左右２枚の薄板からなる。この薄板に藁を巻いた痕跡が残る。

土壙12（図５－11～12）

11は常滑の鉢である。口縁部及び体部上半の破片である。側壁は直続的に開く。胎土は長石粒が多く、小石を少量含む。器表は全体に灰褐色を呈する。内面下半が摩耗しており捏鉢として使用されたことがわかる。

12はかわらけである。４分の１程の破片で、底部は糸切り。板状圧痕は観察できない。法量は復元口径7.0cm、復元底径4.5cm、器高1.6cmである。胎土は微砂を多く含み、白色針状物を含む。焼成は良好で、くすんだ肌色を呈す。

土壙13（図５－13～17）

13・14は渥美の甕で口縁部及び胴部片である。13は口唇部を欠くが舌状を呈するものであろう。内外面とも刷毛塗りで施釉されている。胎土は13・14ともに砂目で、14が長石粒を極く少量含む。14は輪積の継ぎ目下にスダレ状の敲きが巡る。いずれも灰黒色を呈す。

15はかわらけである。手捏ね成形で法量は復元口径14.0cm、復元底径8.5cm内外、器高3.1cmである。

16～18は箸状木製品である。16は両端を欠き残存長20.1cm、最大径0.5cm、17は長さ23.7cm、最大径0.65cm、18は長さ23.5cm、最大径0.65cmである。

井戸５（６―19～24）

19は常滑の鉢片で復元口径26.0cmである。胎土は長石を多く含み、粘性がある。口唇部上端に一条の沈線が認められる。口縁部付近の破片の為か、内面に摩耗した痕跡は認められない。

20～24はかわらけである。21、22は底部糸切り、20・23・24は手捏ね成形である。法量は20が復元口径9.0cm、底径5.5cm前後、器高1.9cm、21は口径9.0cm、底径6.2cm、器高1.7cm、22は口径10.0cm、底径7.0cm前後、器高3.5cm、23は復元口径10.0cm、底径7.0cm前後、器高3.5cm、24は口径13.5cm、底径8.0cm前後、器高3.5cmである。20・21は橙色、他はくすんだ肌色を呈す。胎土はいずれも白色針状物を含み、土丹微粒を含むものもある。20は内底及び外底に焼成後の未貫孔が２ヶ所づつ認められる。

25は骨製の笄である。

26は草履の芯材の片側で、藁を巻いた痕跡がみてとれる。

27は箸状木製品で、長さ24.2cm、最大径0.6cmである。

⑵包含層中出土遺物（図６―28～43）

28～32は青磁である。幅の広い複弁の鎬蓮弁文碗で、淡緑色を呈し胎土は灰白色で粘性があり、気泡が多い。29は同タイプのものの底部であろう。28に比して釉の透明度は高い。高台畳付及び高台内まで一部釉がかりしている。30は折縁の鉢の底部であろう。外面に蓮弁、内底面中央付近に貼付文の一部がみてとれる。双魚文であろうか。高台畳付を除く内外面に施釉される。胎土は黒色微砂を含むも、粘性強く堅緻で気泡はみられない。淡緑色を呈す。31は櫛掻文碗の体部片で、外面は、櫛歯状工具による縦位の条線が施され、内面は口縁下2.0cmのところに一条の沈線が巡り、櫛歯状工具による雷光文と片切りのへらによる劃花文が施される。内外面に灰緑色の透明釉が施されるが、外面体部下半は、露胎である。32は劃花文碗の口縁部片である。内面の施文は飛雲文か。透明度の高い灰緑色釉が施される。胎土は灰色で岩石質。

33は所謂口兀の白磁である。復元口径9.2cm、底径6.1cm、器高1.7cmである。口唇部以外乳白色の釉が施される。胎土は灰色味がかった白色で、気泡が多い。

34は瀬戸の片口小鉢で入子状になるものかも知れない。無釉で胎土は灰白色。口径4.8cmで底部貼り付高台、径は2.3cm、器高2.0cmである。35は山茶碗窯系の鉢で、常滑あたりの製品だろう。長石、石英、小石粒を多く含む。

36は常滑の甕の口縁部。

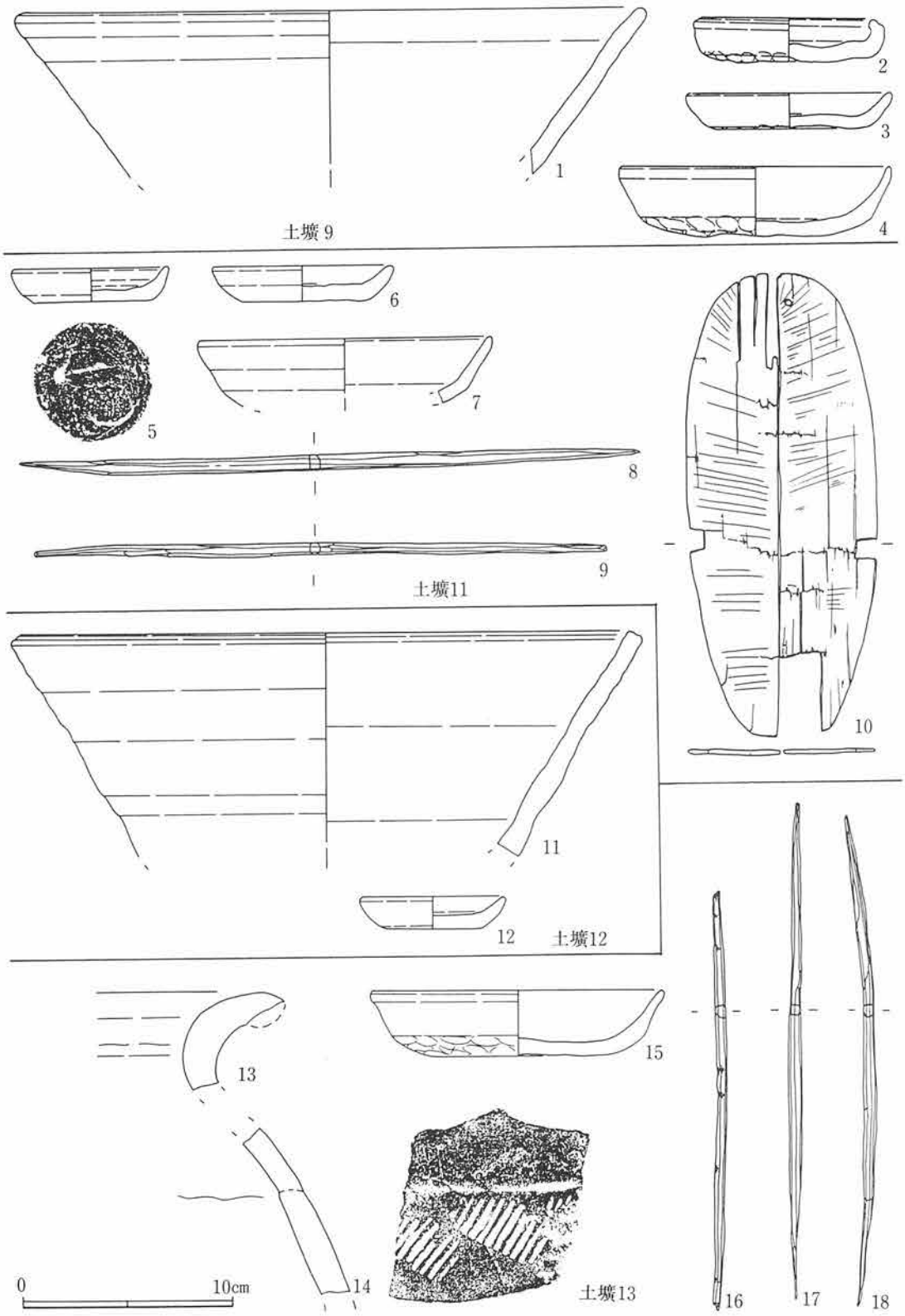


図 5　遺構内出土遺物

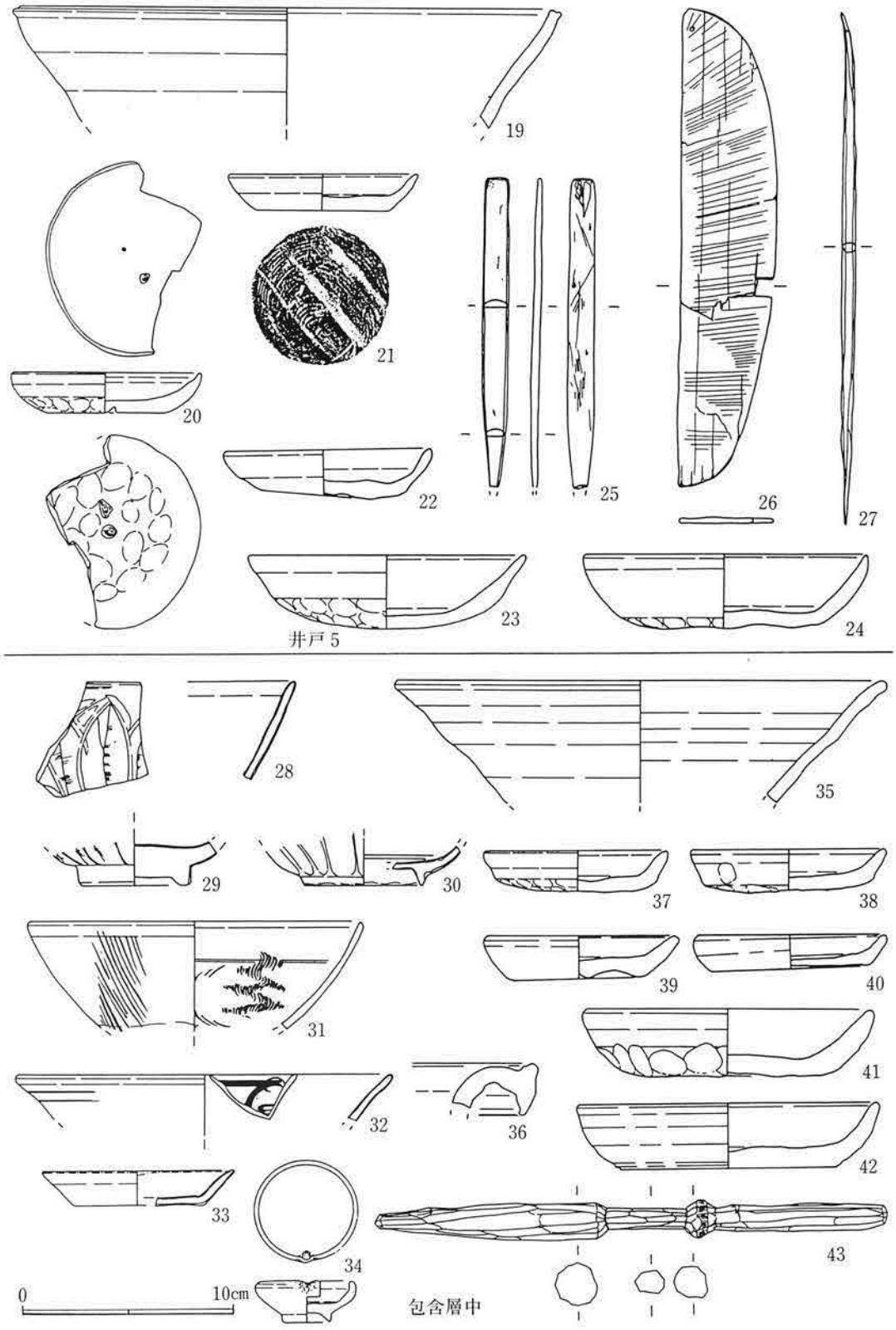

19
20
21
22
23
24
25
26
27
井戸5
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
10cm
包含層中

図6　遺構外出土遺物

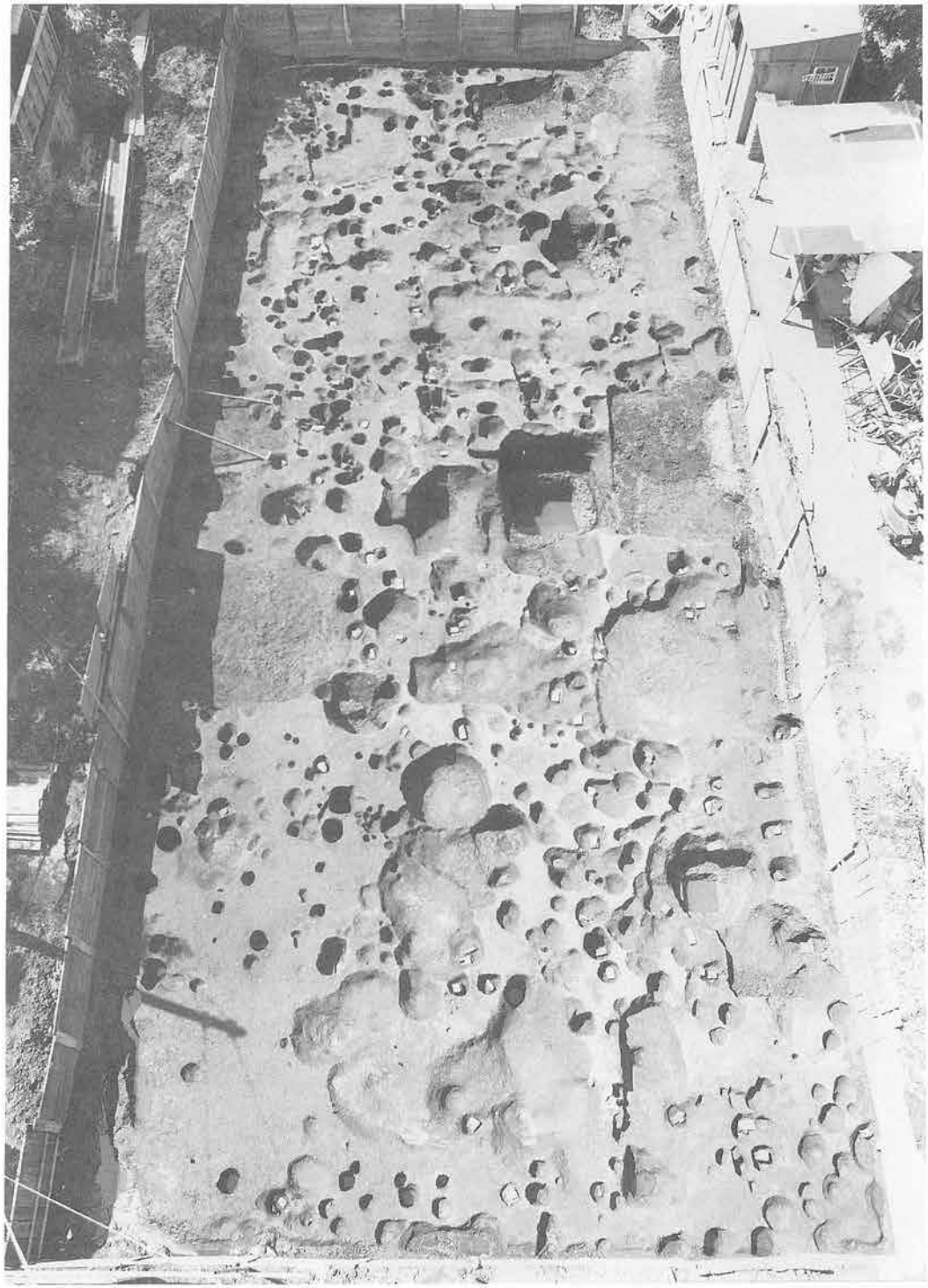
37～42はかわらけで37・38は手捏ね、39・40は庭部糸切り、41は手捏ね、42は糸切りである。法量（口径・底径・器高）は順に8.8cm・6.0cm前後・1.9cm、9.2cm・8.0cm前後・1.9cm、9.3cm・6.4cm・2.0cm、9.1cm・7.4cm・1.6cm、13.8cm・10.0cm前後・3.2cm、14.3cm・10.2cm・3.1cmである。糸切痕は糸の燃が粗く、40は底部に板状圧痕が無い。43は用途不明木製品である。

第5章　まとめ

本遺跡は、逆川の左岸、小町大路に面してその西側にあり、大町四ツ角のすぐ南に位置している。若宮大路の東側を南北に走る小町大路と大町大路の交叉するあたりは、鎌倉時代から鎌倉では繁華街として栄えていたようで、このような人の往き交うところには自然発生的に商業地域が生まれ、規制ができあがって公認される。そんな場所が町免許と呼称される地であり、大町もそうした地域であった。現在も周辺一帯を大町といい、米町もこの中に属する。米町はまた穀町ともいい、『吾妻鏡『には建保元年（1213）の和田合戦で若宮大路米町口や米町辻、大町大路など所々で戦ったということが記されている。また津久井群津久井町にある串川光明寺所蔵の善宝寺の地を描いた古絵図に、米町と記られた家並が描かれている。これらによると、米町は大町大路の南側に位置し、若宮大路の横町であったようである。米町辻については、米町の通りで大町大路と小町大路の交叉するところではないかとされ、現在の大町四ツ角あたりを考えてよさそうである。遺跡地の様相は、こうした歴史的な環境からみて、簡単な構造の建物が、雑然と建ち並んでいる姿が推測されよう。今回の調査で検出した遺構群が、規格性のない柱穴や数多くのゴミ穴的な土壙に限られていたことは、上記のことを物語っているのかも知れない。

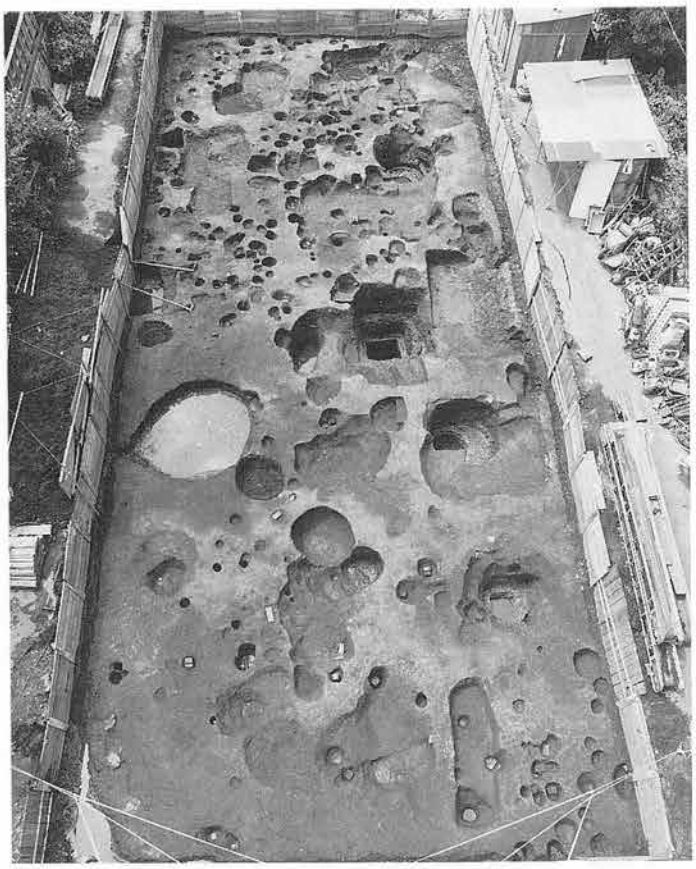
〔参考文献〕

「鎌倉国宝館図録第16集」『鎌倉の古絵図(2)』1969年
黒板勝美「吾妻鏡　第一」『国史大系』1989年
貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』1980年
『鎌倉市史　総説編』1959年



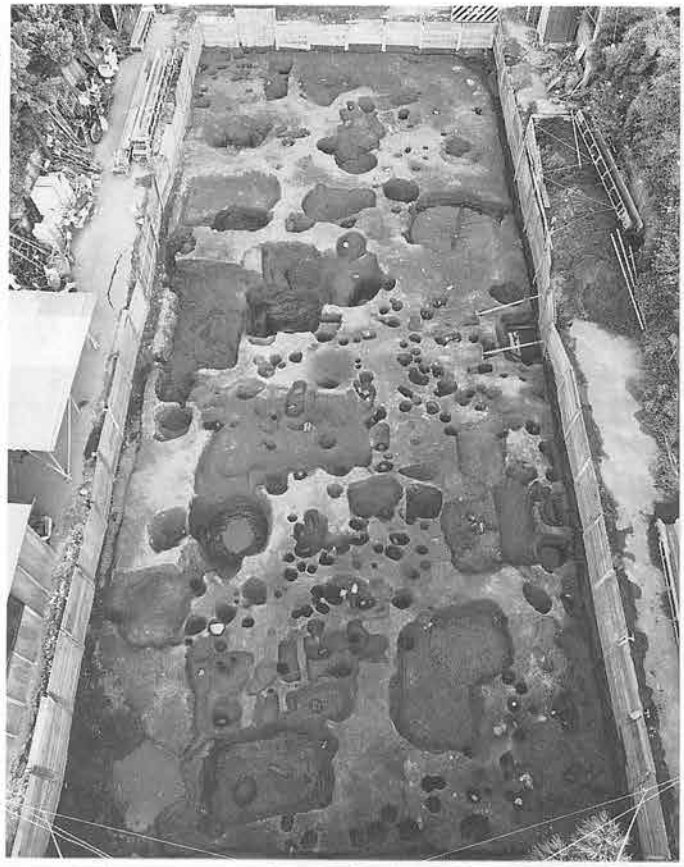
▲第 2 面全景（東から）

図版2



◀1．第1面全景（東から）

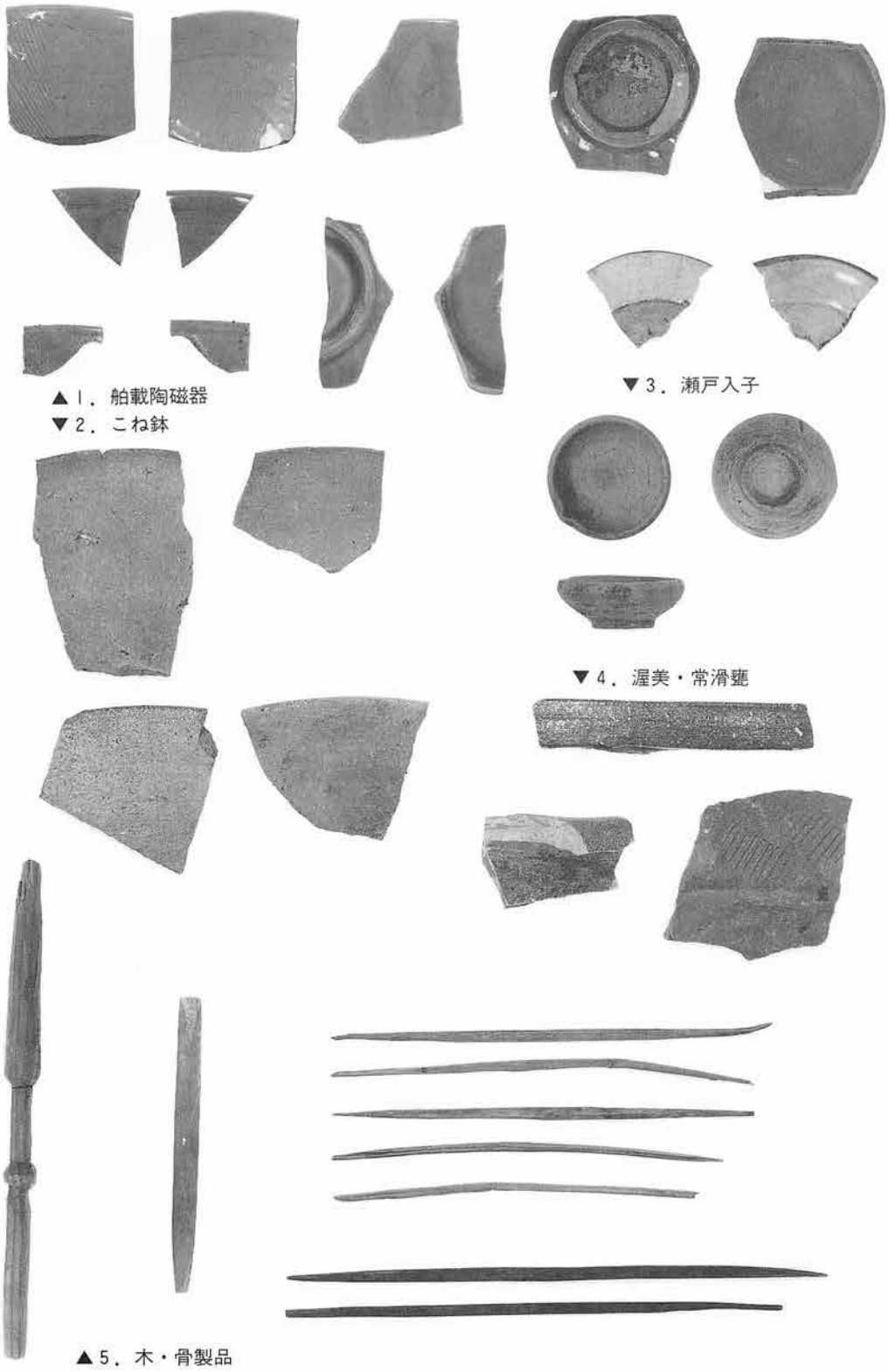
▲2．井戸（南から）　△井戸5　△井戸6



1.▶第2面全景（西から）

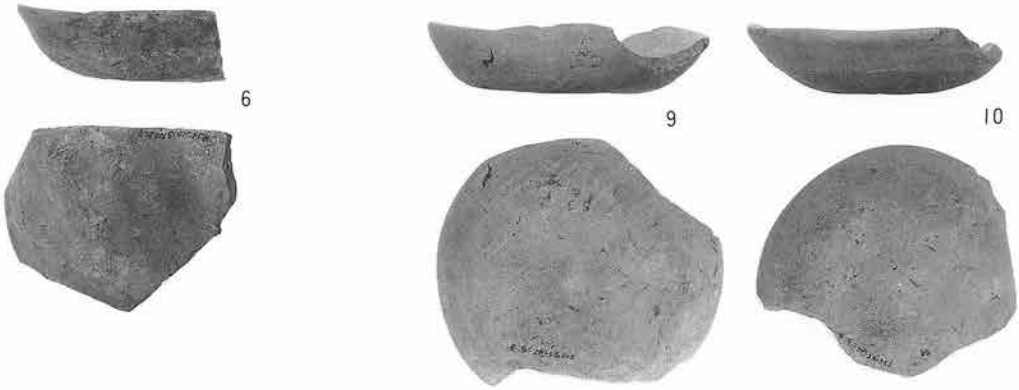
▲2.土壙（東から）

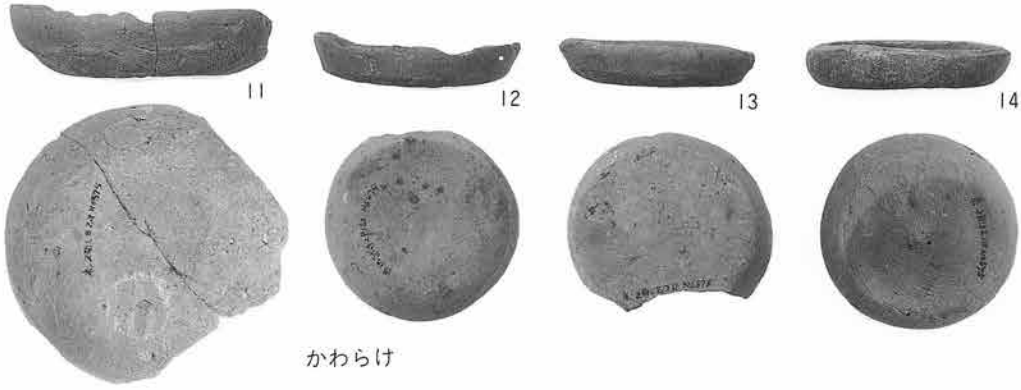
図版４



▲１．舶載陶磁器
▼２．こね鉢
▼３．瀬戸入子
▼４．渥美・常滑甕
▲５．木・骨製品

1～3土壙9、4・5土壙11、6土壙3、7～10井戸5、その他は包含層及び地山上





かわらけ

5．材木座町屋遺跡（No.261）

材木座四曲目260番１外

例　言

1．本書は鎌倉市材木座四丁目260番1外に所在する住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和63年9月19日から同年9月30日にかけて実施した。同調査は材木座町屋遺跡発掘調査団による発掘調査と併行して実施した。

3．本書の執筆は、田代郁夫があたった。図版作成は原廣志・継実・大畑明子・土屋浩美・高野麗・中島充雄があたり、原がこれを編集した。

4．写真撮影は遺構写真を木材美代治・原が、遺物写真は木材美代治が行なった。

5．調査体制は以下の通り。

担　当　者　　松尾宣方
調　査　員　　田代郁夫
調査補助員　　継　実・村上和久

6．出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

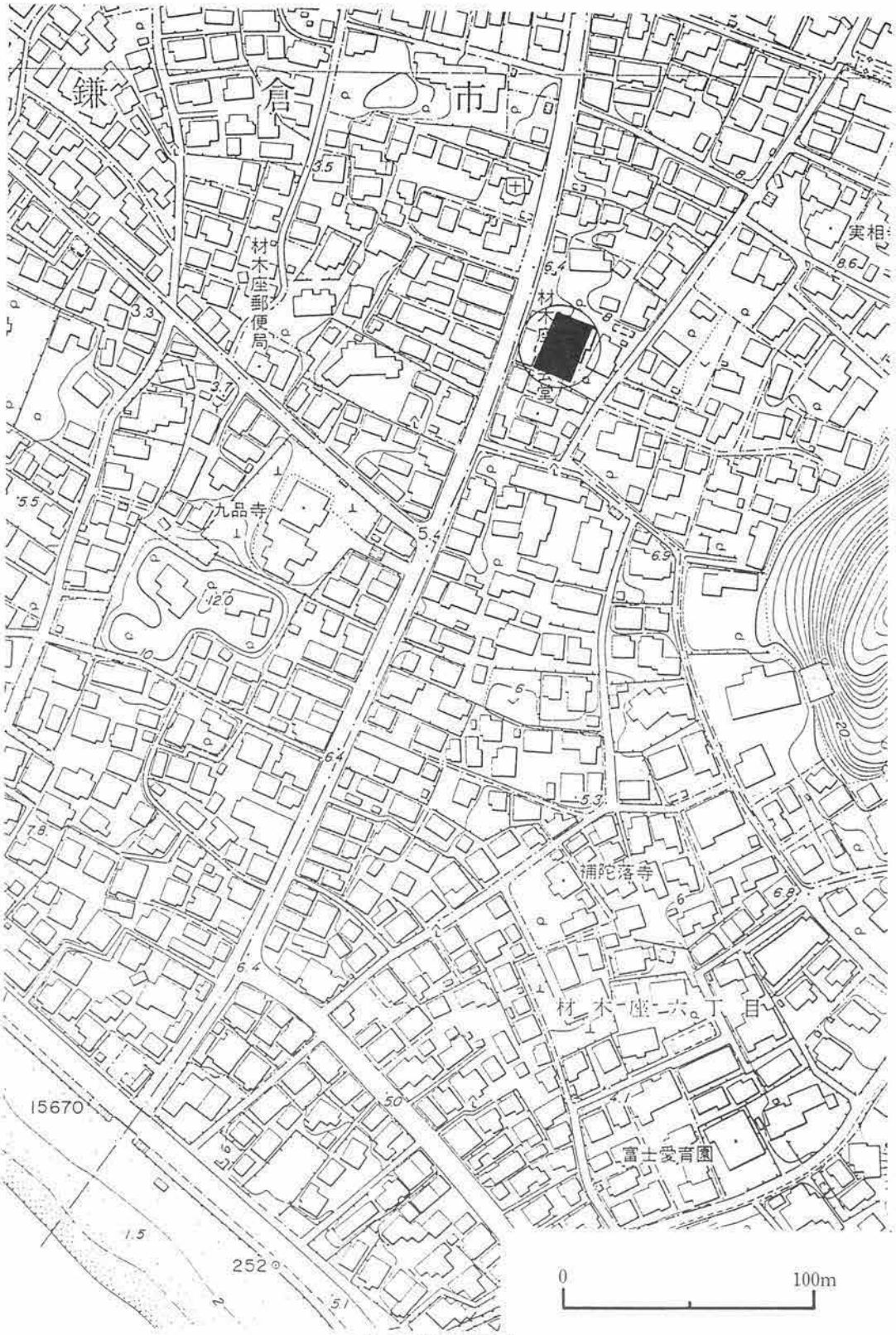


図1　遺跡位置図

第１章　調査地点の位置と歴史的環境

当遺跡は鎌倉市材木座四丁目260番１外に所在する。市遺跡台帳に材木座町遺跡№261と登録されているものである。

材木座の名は鎌倉時代の文献には見えて来ない。しかし、材木座は鎌倉時代からあったとされている。「佐々木文書」の貞治六年九月五日付の足利義詮の御教書には、これを佐々木道誉に返付していることが見える。材木座を返付するということはその収入を返してやるということであり、そこに材役とか座銭があったことが容易に推測できるからであるという。

ところで、幕府は建長三年十二月鎌倉中の在々所の小町屋に制禁を加えて大町以下七ヶ所を指定して免許した。文永二年三月再び令を発して大町以下の所々を指定して免許した。材木座などは明らかに町免許地以外の地である。しかし、町免許の地以外にも商人はいたのである。当遺跡付近も、和賀江の津に近く、小坪路から小町大路にかかる場所であってみれば、陸揚げされた、常滑・瀬戸製品などの陶磁器や各地の産物が売られる場所であったのだろう。

この遺跡付近には感応寺という真言宗京都三宝院末の寺があったようだが、今回の調査では掘削深度の問題もあって全体として一面しか調査していない為、それについての成果は得られていない。

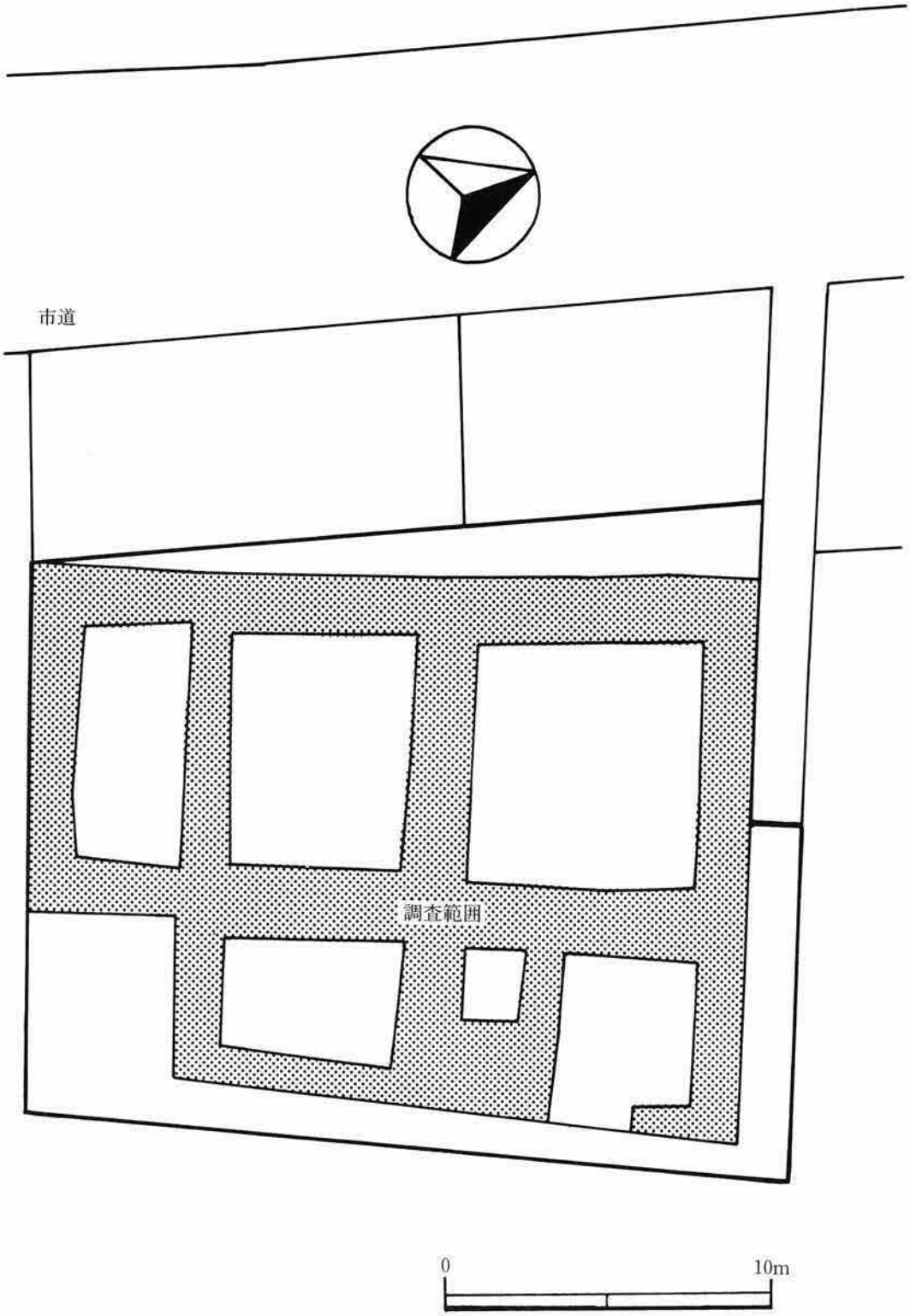


図 2　調査区配置図

第２章　検出した遺構

建築基礎の巡る範囲内でしかもその掘削深度内の調査であったため遺構の全貌を把めないものが多い。また狭いトレンチ内のため調査区壁の崩落の危険があり完掘していないものが多い。以下主な遺構について記す。

(1)　土丹面１

東側トレンチ北端付近で検出されている。地表から厚さ20～30cmの表土を剝ぐと、小土丹やかわらけ細片を少量含む黒灰褐色土が30cm程堆積している。その下に小土丹粒、かわらけ細片、木炭片を含む暗灰褐色土が40～50cm堆積し、この土丹面の包含層を構成している。この土丹面は北から南へ10cm程傾斜して低くなっている。小範囲で調査区全体に広がっていない４非常に薄く弱い版築でこの下面を調査区全体の第一面としている。

(2)　１号溝

調査区東側を南北に走っている。表土下黒灰褐色土下から掘り込まれている。上端幅約180cmで深さ約90cm、断面U字形である。

(3)　礎石１、２、３

調査区南側で検出されている。礎石１と２は、真々で110cm、礎石１と３は同じく真々で94cmである。礎石は全て安山岩で径20cm強である。

(4)　土壙

１号土壙は土丹面１の南に検出された。土丹面１の上を覆う暗灰褐色土の上面から掘り込まれている。覆土は褐色砂質土で、平面形は円形と思われるが調査区外に拡がる。深さ70～80cmである。

２号土壙は東西が調査区外の為、全体形は不明。深さ26cmである。

4号土壙

調査区ほぼ中央に検出された。北西部は調査区外に拡がり、南側は一部攪乱を受ける。不整円形であろう。深さ約40cmである。

６号土壙

調査区北西隅で検出された。西側は調査区外に拡がるが、検出部からみて円形を呈すると思われる。深さ約30cmである。

７号土壙

調査区西側で検出されている。大半が調査区外に拡がるものと思われるが、南北幅は390cmである。覆土上層には30～40cm大の土丹、安山岩が投げ込まれており、下層は土丹粒、土丹、炭化物を多く含む暗茶褐色土である。

(5)　方形土壙

調査区東側で検出されている。南側は調査区外に拡がるため全体形は不明だが、東西上端幅は約

100cmで、深さ約30cmである。

方形土壙 4

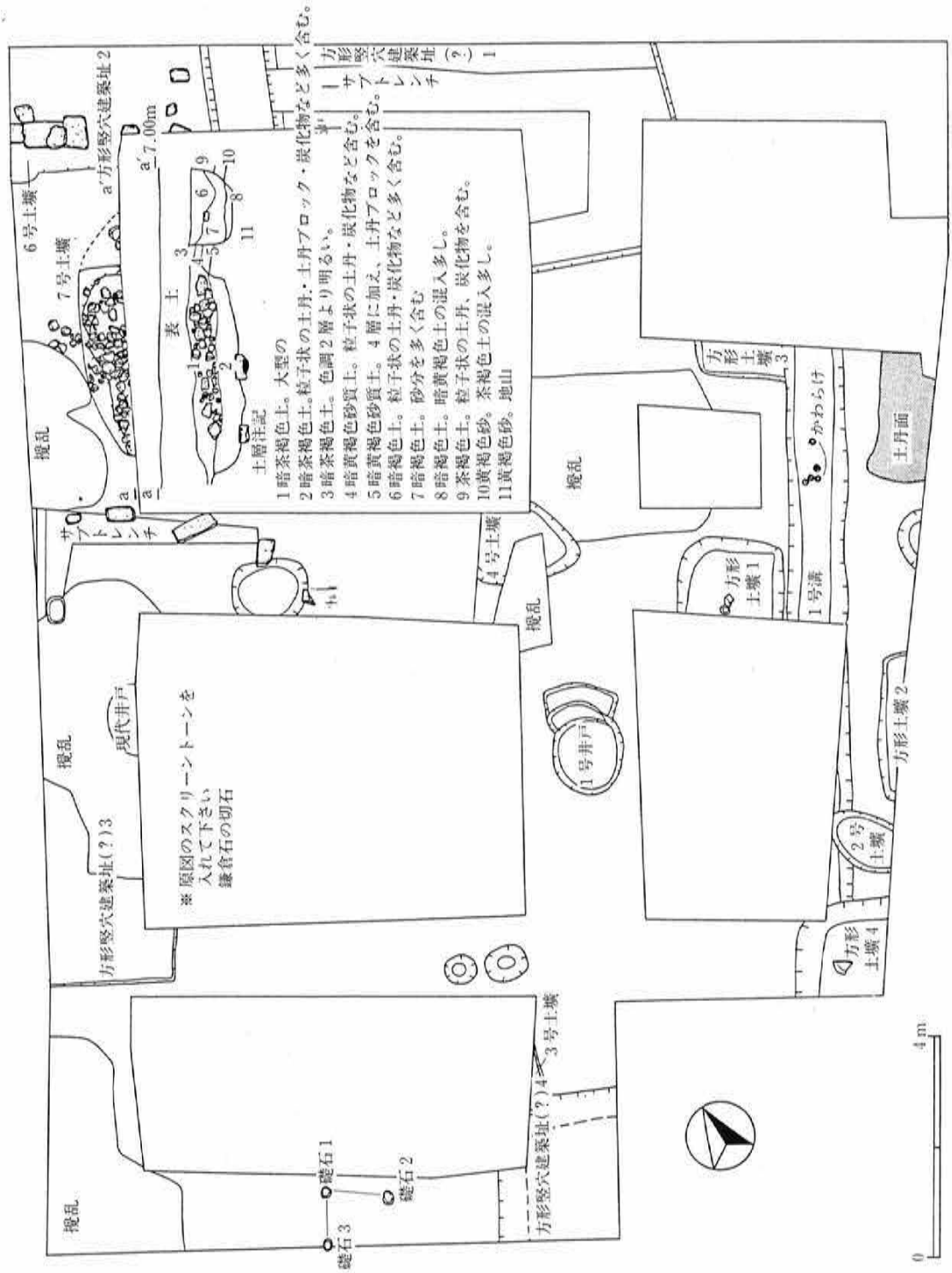
調査区東南隅で検出されている。東南側は調査区外に拡がるため全体形は不明である。土壙壁面の立ち上りは緩やかで、深さ約30cmである。

(6) 方形竪穴建築址

方形竪穴建築址と思われるもの 4 軒を確認しているが、確実と思われるものは、方形竪穴建築址 2 だけである。

方形竪穴建築址 2

調査区北西で検出された。トレンチ内のダメ押しサブトレンチ内に検出された。掘削深度との兼ね合いで、全体を把握するに至らなかったが、鎌倉石切石を基礎に巡らす所謂本覚寺タイプである。この切石は短辺45cm、長辺74cmのものが最大で、コーナーにあたると思われるものは、短辺は同じで長辺は約56cmで厚さ約20cmである。



方形竪穴建築址(?)1
サブトレンチ
方形竪穴建築址2
a'方形竪穴建築址2
a'7.00m
6号土壙
7号土壙
表土
土層注記
1暗茶褐色土。大型の
2暗茶褐色土。粒子状の土丹・土丹ブロック・炭化物など多く含む。
3暗茶褐色土。色調2層より明るい。
4暗黄褐色砂質土。粒子状の土丹・炭化物など含む。
5暗黄褐色砂質土。4層に加え、土丹ブロックを含む。
6暗褐色土。粒子状の土丹・炭化物など多く含む。
7暗褐色土。砂分を多く含む
8暗褐色土。暗黄褐色土の混入多し。
9茶褐色土。粒子状の土丹、炭化物を含む。
10黄褐色砂。茶褐色土の混入多し。
11黄褐色砂。地山
撹乱
サブトレンチ
4号土壙
方形土壙3
かわらけ
土丹面
方形土壙1
1号溝
方形土壙2
2号土壙
方形土壙4
1号井戸
現代井戸
※原図のスクリーントーンを入れて下さい
鎌倉石の切石
方形竪穴建築址(?)3
3号土壙
方形竪穴建築址(?)4
礎石1
礎石2
礎石3
0
4m

図3　遺構全図

第３章　出土した遺物

工事の際の掘削深度との関係で第１面を調査したに留まる。遺構面の比較的浅い部分については下の遺構を確認したところもある。こうした状況のため、ここに掲げる遺物は本遺跡の上層の遺物ということができる。

１　青磁（図４－１～４、図版　）

１は鎬蓮弁文系鉢。小片で３号土壙出土。

２は鎬蓮弁文系碗。小片で４号土壙出土。

３は鉢の底部片で見込に一条の沈線が巡る。高台内の一部が露胎の他は、畳付まで施釉されている。破れ口は気泡が多くザックリとしている。胎土は僅かに紫がかった灰色で、釉は貫入が多く淡緑色を呈する。15世紀後半代の製品である。セクション面で確認された７号土壙出土。４は曲口碗で厚く施釉され淡青緑色を呈する。５号土壙出土。

２　瀬戸（図４－５～１２、図版）

５は入子である。無釉で焼成はやや甘く軟質。５号土壙出土。

６・７は瀬戸・美濃の擂鉢。内外面と底部に鬼板を施し、胎土はともに粉質で淡黄白色。

８・９は灰釉折縁鉢。胎土は８が灰白色で９はやや黄色味を帯びている。ともに５号土壙出土。

10は灰釉卸皿。胎土は灰白色で精製され口縁端に凹帯がみられる。方形竪穴建築址２出土。

11は灰釉銚子（？）の蓋。釉はくすんだ濃緑色。上面には波状沈線が巡る。つまみ部には横位の穿孔が焼成前に施される。灰白色の胎土である。５号土壙出土。

12は灰釉折縁鉢。方形竪穴建築址３出土。

３　常滑（図４－13～18）

13～16は甕口縁部。17は鉢。18は研磨痕の有る胴部片。17の内面下端は僅かに磨滅し捏鉢として使用されたことがわかる。13・17は方形竪穴建址４、14は６号土壙、15は１号溝覆土、16は４号土壙、18は方形竪穴建築址２出土である。

４　瓦質手焙り（図４－19・20、図版　）

口縁は輪花で外面上方に二連の菊花文のスタンプが押されている。方形竪穴建築址３出土。20も同タイプのものである。方形土壙１出土。

５　瓦器質黒縁碗（図４－21、図版　）

口唇部及び口縁外面が黒色を呈し、それ以下は灰白色を呈す。胎土は精良で灰白色を呈す。５号土壙出土。

６　鍔釜（図　－22、図版　）

口縁は直立し端部は外方向に水平に引かれ、鍔部も水平だが端部は上方に僅かに引かれる。胎土は微砂を含むが比較的精製されている。鍔下側及び鍔以下が煤けている。包含層出土。

7　かわらけ（図　—23～39、図版　）

法量（口径・底径・器高）は23が6.0cm・3.4cm・1.9cm、24は5.4cm・3.9cm・1.5cm、25は5.8cm・3.3cm・2.2cm、26は7.4cm・4.5cm・2.0cm、27は7.8cm・4.8cm・2.6cm、28は7.4cm・5.0cm・2.0cm、29は7.4cm・4.4cm・2.2cm、30は8.2cm・5.9cm・2.3cm、31は9.2cm・5.3cm・3.0cm、32は9.4cm・5.0cm・2.6cm、33は9.7cm・6.4cm・2.7cm、34は10.4cm・7.9cm・3.3cm、35は10.3cm・7.5cm・4.2cm、36は12.2cm・7.9cm・3.3cm、37は13.8cm・7.7cm・3.5cm、38は13.8cm・7.6cm・3.2cm、39は6.2cm・4.8cm・2.8cmである。23～25は極小タイプで23・24は見込みに軽いナデを施し、25は見込中心が台状に盛り上がり横方向のナデは認められない。23が１号溝フクド、24が１号溝上の包含層、25が5号土壙確認時に出土している。５号土壙より上の包含層中出土とすべきかも知れない。25のみ外底部に板状圧痕が認められる。26～29は見込にしっかりとした横方向のナデが施され、26・29には外底部に板状圧痕が認められる。26は方形竪穴建築址４、27は５号土壙、28は方形土壙１、29は方形土壙２から出土している。30は内底無調整で見込中央が台状に盛り上がる。34・35と非常に近似している。34は見込に軽いナデが認められる。30は包含層中、34・35は７号土壙から出土。31は方形土壙２出土。32は包含層、33は１号溝覆土、36は包含層、37・38は方形土壙１から出土。39は１号溝覆土中から出土している。取瓶で緑青が認められる。

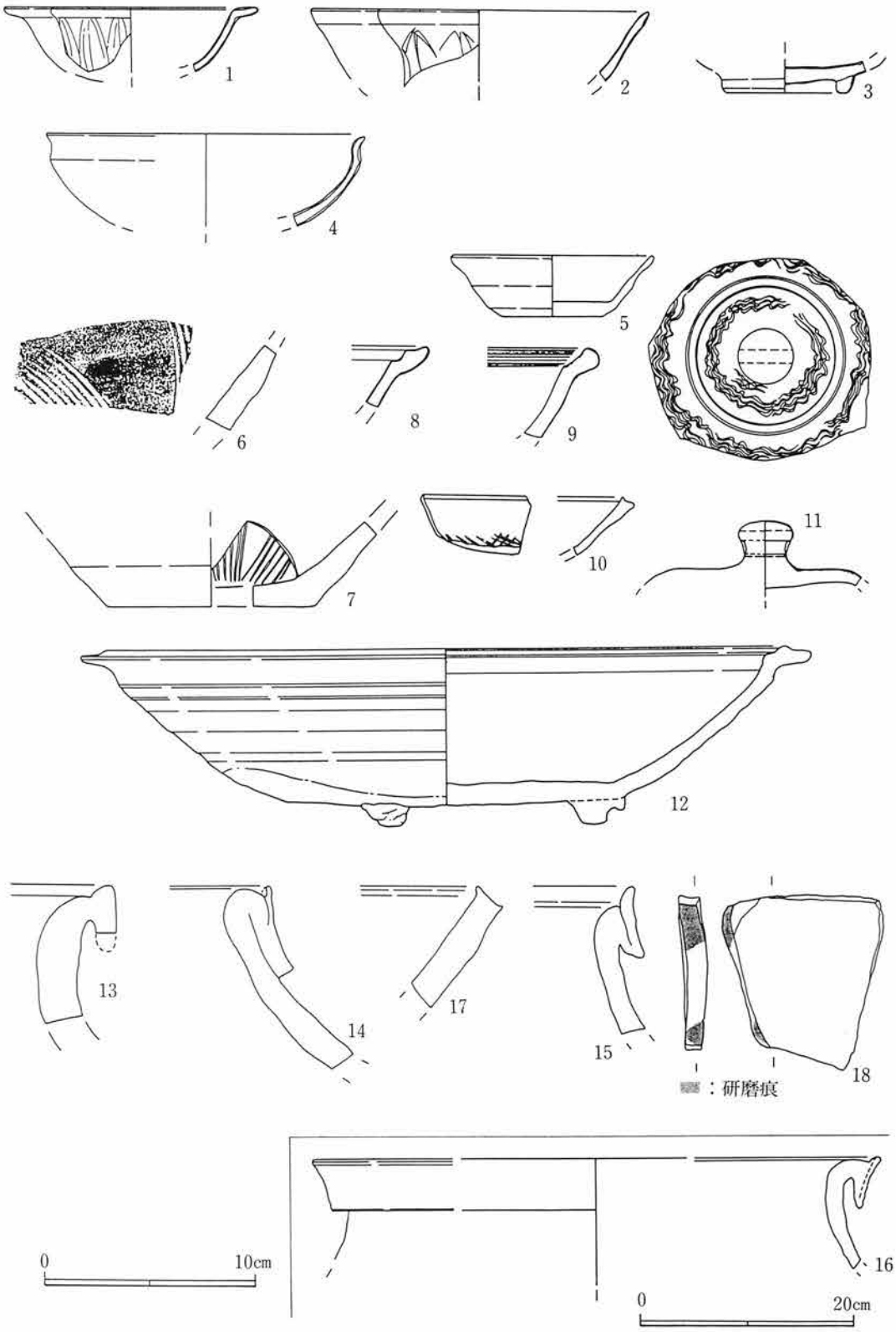


図 4　出土遺物(1) 青磁・瀬戸・美濃・常滑

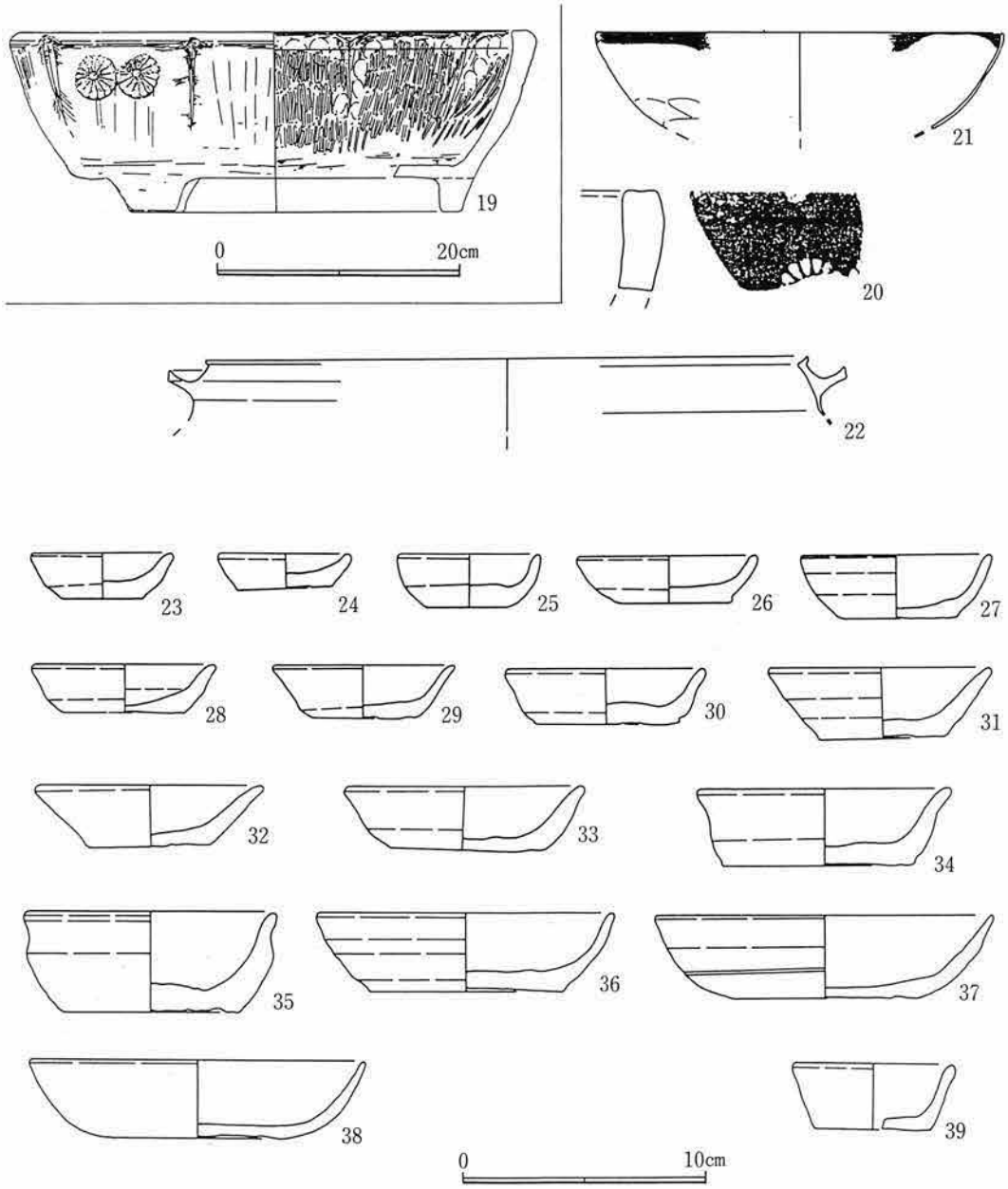


図5　出土遺物(2) 瓦質製品その他、かわらけ

第4章　まとめ

今回の調査は建築予定建物の基礎部分の範囲に限られ、結果的にトレンチ調査と同様であった。また建築深度との兼合いで一部を除き第1面を確認したに留まった。しかも表土によって大半が構成されるトレンチ壁は崩れ易く、土留めの矢板を入れた為、セクションによる遺構の切り合いの確認もままならなかった。いずれにしても、こうした状況での調査方法に対し反省するとともに、今後の課題としたいと思う。

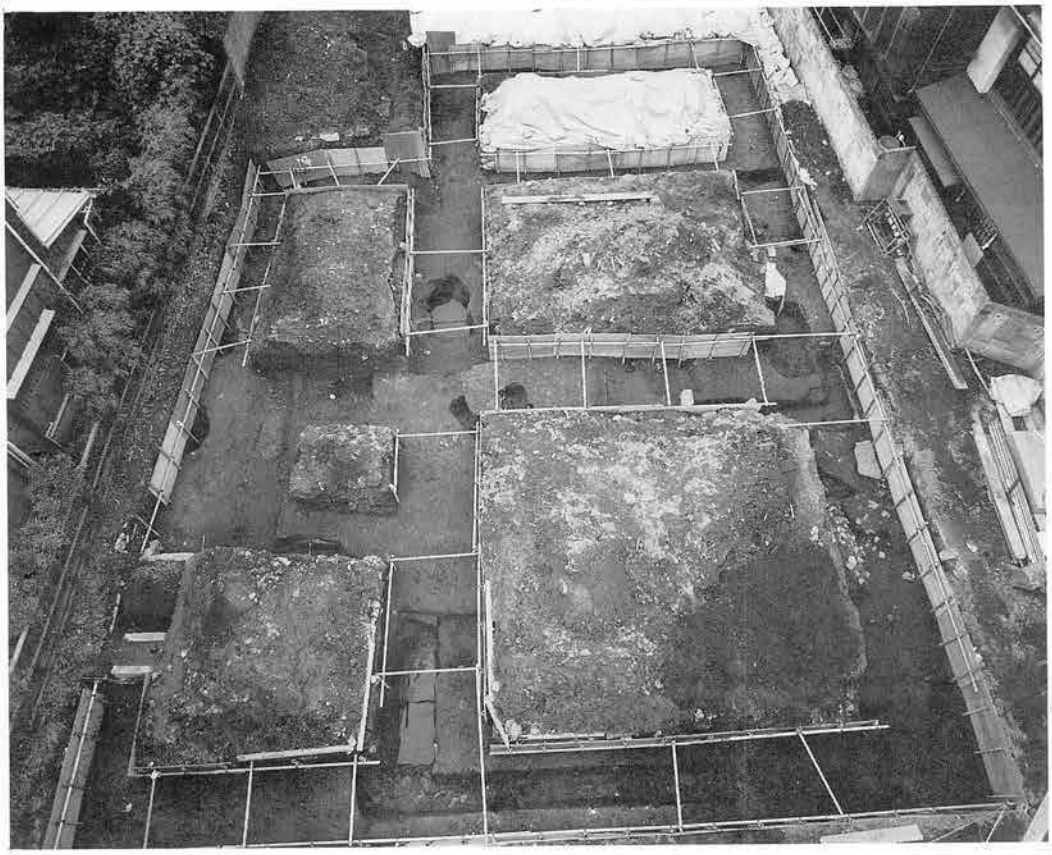
ここでは出土遺物を中心に第1面及び遺構の年代観について述べまとめとしたい。

東側トレンチ北端付近で検出された土丹面1（図3参照）は極小範囲で調査区全体に広がりをみせない。この土丹面は薄く黒褐色土の上に版築され、この黒褐色土を第1面相当と考えた。この第1面上で確認された遺構の中には明らかに上層から掘り込まれたものがある。またこの第1面が浅く検出された部分については、建築深度との兼合いを考え更に下を調査した。

1号溝は表土層下の黒色土中から掘り込まれており、第1面より62cm程上から構築されている。かわらけ（24）はこの溝外の包含層中出土で、溝中覆土出土のかわらけ（23・33）と比して後出的である。これらのかわらけは15世紀末から16世紀代のものと考えられる。セクション面で確認された7号土壙は15世紀後半代の青磁とかわらけ（34・35）を出土しておりやはり15世紀後半から16世紀代と思われる。かわらけ（37・38）は方形土壙1から出土しており、その年代観は14世紀中頃から後半である。他遺構の遺物からみても第1面は14世紀後半以降と考えられ、この面で確認され、尚上層より掘り込まれている遺構は15世紀以降、16世紀代と考えられる。次に今回の調査で特筆すべきは方形竪穴建築址と思われる遺構の存在である。方形竪穴建築址2は調査終了後のダメ押しで鎌倉石の切石による基礎部分（写真図版参照）を確認しているが他のものについては、建築深度との関係で全貌を握んでいないが、その可能性は大である。この方形竪穴建築址が確認された遺跡としては、大町、材木座付近では最も東に位置する。町屋としての米町、和賀江に近接する当遺跡の歴史的環境が理解されよう。方形竪穴建築址の埋土は明らかに15世紀代の遺物を含んでいる。

また1号溝覆土からは緑青の付着した取瓶が出土し、方形竪穴建築址1からは多量のフイゴの羽口とスラグが出土している。

図版 1



▲調査区全景（北から）

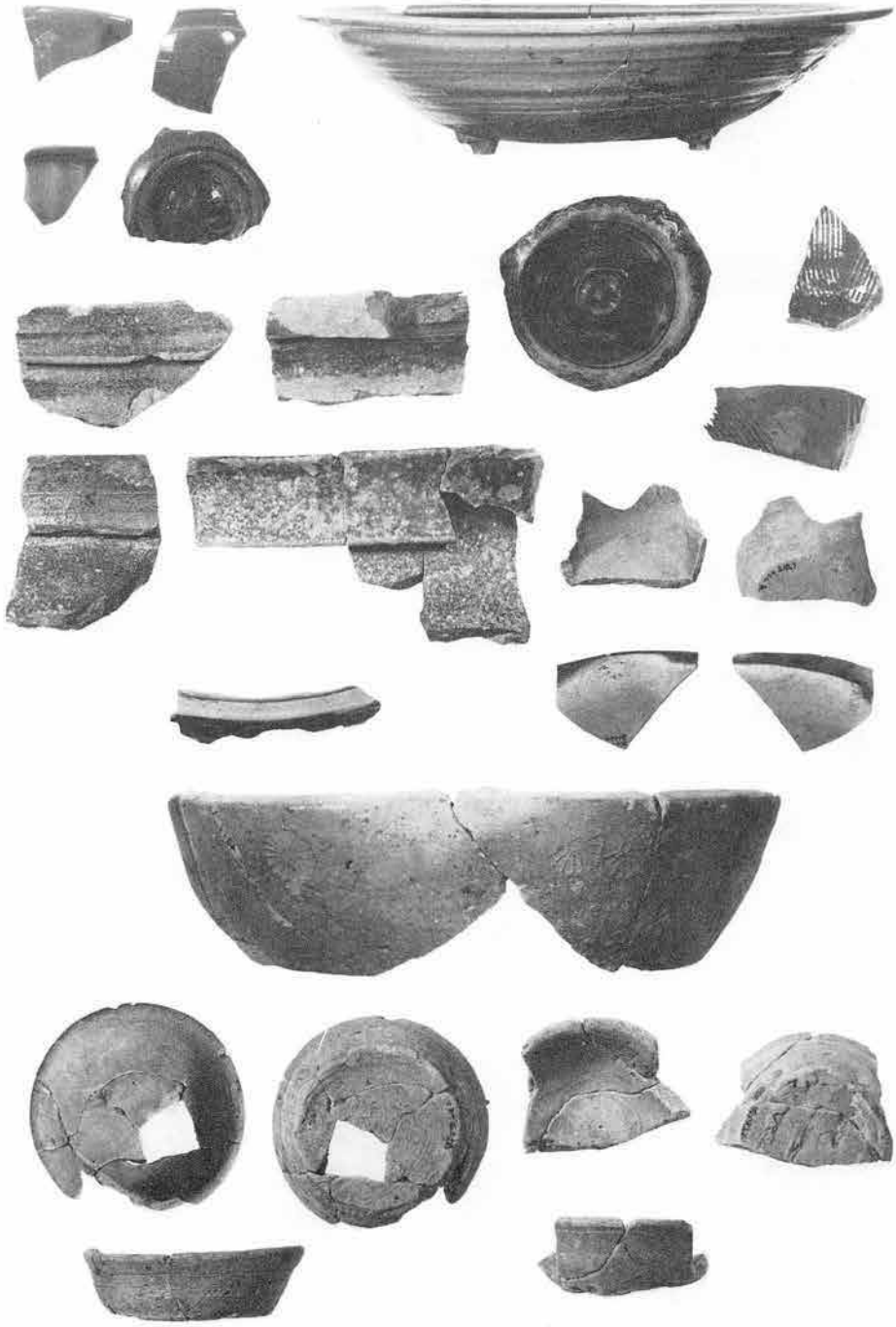
▲1　1号溝（北から）

▲2　方形土壙1（北から）

図版 3

▲1　6号土壙(西から)

◀7号土壙(西から)



出土遺物(1)

図版 5

出土遺物(2)

6．若宮大路周辺遺跡群（No.242）

扇ヶ谷一丁目74番8外地点

例　言

1．本報は鎌倉市扇ヶ谷一丁目74番８外地点に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、70㎡対象地の内20㎡を国庫補助事業調査として鎌倉市教育委員会が実施した。

3．本報の執筆は菊川英政が担当し、図版作製は関口真理、南保由利、折茂芳則、長田夏子があたった。

4．本報に使用した写真は、遺構・遺物とも菊川が撮影した。

5．調査体制は以下の通り。

担 当 者　菊川英政

調 査 員　関口真理

補 助 員　山田健二、折茂芳則

協力機関　(社)鎌倉市高齢者事業団、(株)清興建設、(有)角田組

6．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例言 …… (246)
目次 …… (247)

本　文　目　次

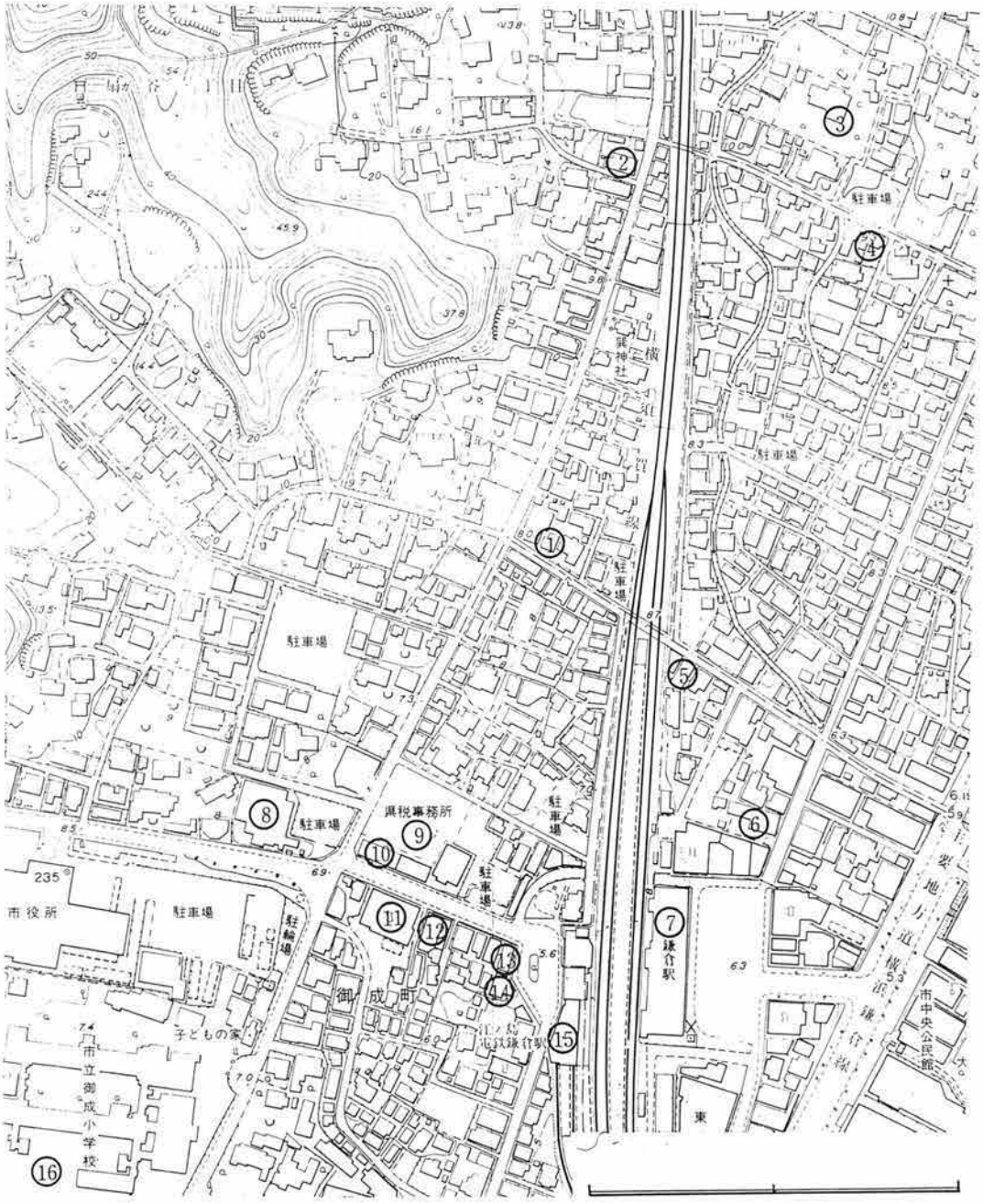
第一章　調査地点の位置 …… (250)
第二章　調査の概要 …… (250)
第三章　検出遺構 …… (251)
第四章　出土遺物 …… (254)
第五章　まとめ …… (256)

挿　図　目　次

第1図　調査地点の位置 …… (249)
第2図　グリッド設定図 …… (250)
第3図　切石列平面図 …… (251)
第4図　遺構エレベーション図 …… (252)
第5図　第1面遺構全図 …… (253)
第6図　包含層出土遺物 …… (254)
第7図　かわらけ地業出土遺物 …… (255)
第8図　遺構想定図 …… (256)

図　版　目　次

図版1　I区第1面 …… (257)
図版2　II区第1面・第1面全景 …… (258)
図版3　第1面出土遺物 …… (259)



第1図　調査地点の位置

1.調査地点　2.扇ヶ谷1丁目131番1地点　3.雪ノ下1丁目210番地点　4.小町2丁目39番他地点　5.小町1丁目120番1地点　6.小町1丁目106番地点　7.蔵屋敷遺跡　8.千葉地東遺跡　9.千葉地遺跡　10.御成町228番2地点　11.諏訪東遺跡　12.御成町806-3番地点　13.御成町819番1地点　14.御成町11-2番地点　15.蔵屋敷東遺跡　16.今小路西遺跡(御成小学校内)

第一章　調査地点の位置

調査地点は、JR鎌倉駅ホーム北端の踏切を西側に進み、今小路と交差する手前約18m程の所にある。周辺の標高は約8.5m。東方の二の鳥居付近では約６m。南方の鎌倉駅西口付近では約5.5mを測り、地形的には東と南方向に低くなっていくことが判る。

遺跡地の西側を走る今小路は、「吾妻鏡」にその名はみえず、「快元僧都記」の天文八年（1539）の条が初見である。近世に至っては、遺跡地北方の巽神社以南が長谷村に属すことから、〝長谷小路〟とも称されていたようである。

遺跡地の南側を東西に走る小路については、残念ながら史料がない。今小路と若宮大路とを結んであり、〝宇津宮辻子〟と呼ばれる小路に該当しそうだが、確証はない。

本遺跡に最も近いNo.５地点（第１図）の調査では、遺跡地前の道路と並行する旧河道が検出され、旧扇ヶ谷川の流路は、より南側にあったことが確認されている。

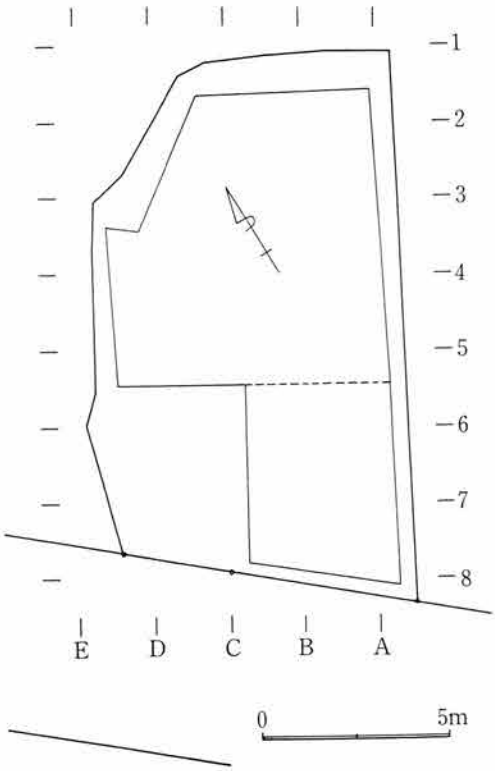
第二章　調査の概要

調査は昭和63年11月４日～12月10日までの期間に行われた。土砂搬出用地を確保するため、調査区を２分し、北側のＩ区を先行して調査した。Ｉ区終了後、II区の調査に入ったが、調査期間と経費の関係から、仮設事務所を置いた西側約3.5m分は調査を断念した。

検出された生活面は３面ある。Ｉ区では第３面まで調査を行ったが、II区では本工事掘削深度の関係から第２面までしか調査していない。

本報告には、国庫助事業分として、第１面までの調査結果をまとめてある。遺構平面図は、Ｉ区とII区を合成して使用したが、土溜めのシートパイル内側で測図した範囲となっている。

南北グリッドラインは磁北に対し、30°55'20″東へ傾いている。



第２図　グリッド設定図

第三章　検出遺構

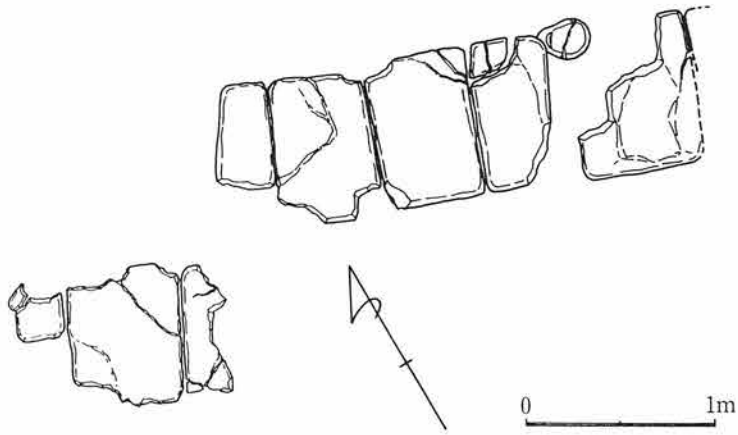
調査開始後、地表下約80cm程の所で中世遺物包含層が検出された。同層は約25～45cmの厚さをもち、破砕された鎌倉石、拳大～人頭大の土丹塊で構成されている。範囲は調査区全域に広がっているが、上面を精査しても遺構は確認されなかった。同層除去後に第１面が検出された。(第５図)

第１面は地表下約1.3m、標高にして約7.2mを測る。基本的には茶褐色土上に薄く海砂を撒いて生活面としているが、柱穴列以北では下層の土丹地業が露出し、礎石列以西では土丹版築面、かわらけ地業面が広がっている。また、礎石列より東側の海砂面は、不明瞭ではあるが、火熱を受けた痕跡がみられた。以下、各遺構について説明を加えていきたい。

切石列（第３面）

Ⅰ区とⅡ区との境界部分で検出された短辺50～60cm、長辺80cm、厚さ10cm程の鎌倉石切石を２列に並べたもので、東西方向にまだ続くと思われる。

北側の切石下には、焼けた海砂面が続き、扁平な伊豆石が検出された。



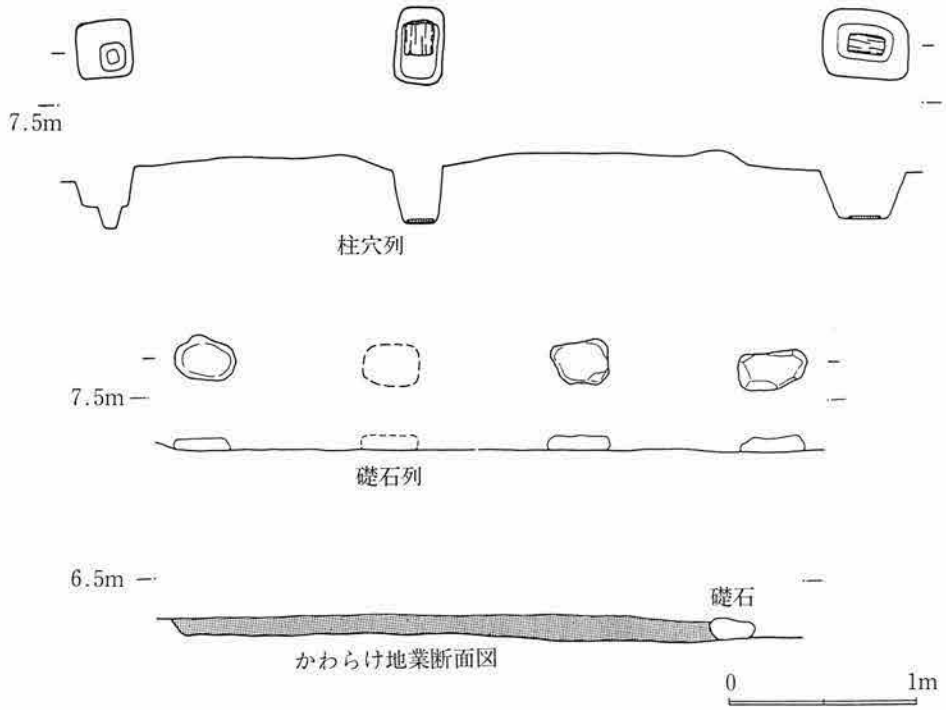
第３図　切石列平面図

柱穴列（第４・５面）

Ⅰ区で検出された。切石列との距離は約4.5m（15尺）を測り、ほぼ平行する。周囲を精査したが南北方向で対応する柱穴はなく、東西にのびる柵列と考えられる。調査区内では３穴がみつかった。柱穴の掘り方は方形ないし長方形を呈し、確認面からの深さは大体30cm程度である。西端の柱穴は礎板を置かず、柱痕らしき小穴が底面に残る。各柱穴間の真芯距離は、約1.65m（5.5尺）と約2.4m（８尺）を測り、東側の間隔が長くとられている。

礎石列（第４・５図）

かわらけ地業の東端部でみつかった。切石列に直交して並ぶが、北から３番目の礎石が抜けている。礎石間の距離は約１m（3.3尺）を測る。廂あるいは縁に相当するものと思われるが、建物自体が礎石列の東西どちら側に存在したかは確定できない。切石列下で検出された礎石は、礎石列を更に南へ１m延長し、そこから東へ約1.2m（４尺）行った所にある。



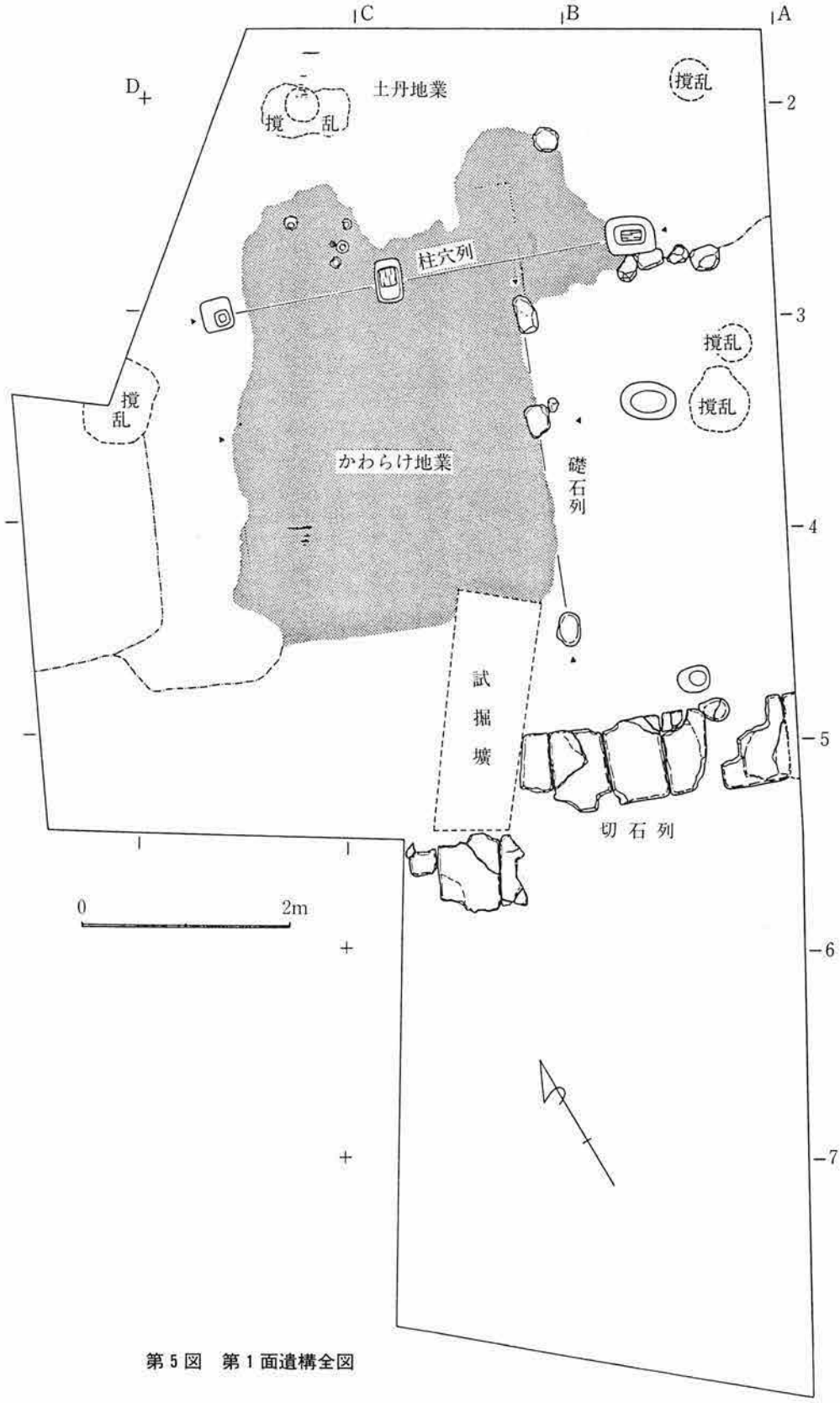
第4図　遺構エレベーション図

かわらけ地業面（第4・5図）

礎石列の西側、土丹版築面との間で検出された。切石列からは約1.2m（4尺）離れている。かわらけ皿を多量に集め、1㎝角程の細かさまで砕き、叩き締めたかわらけの密集部分である。通常みられる〝かわらけ溜り〟とは明らかに異なり、地業の一種とみなされる。中央部分で約10㎝程の厚みをもち、東および南側に広がる第1面とは段差をもって接している。

土丹版築面（第5図）

かわらけ地業面の西端から版築面は始まる。しかし、確実に版築されているとわかる良好な範囲は、調査区西壁寄りの部分に限られる。版築上面は平坦で、かわらけ地業上面と同じ高さを保ち、南側に広がる第1面より約10㎝程高くなっている。切石列の延長ラインとは約1.2m（4尺）離れている点も、かわらけ地業面と同じである。



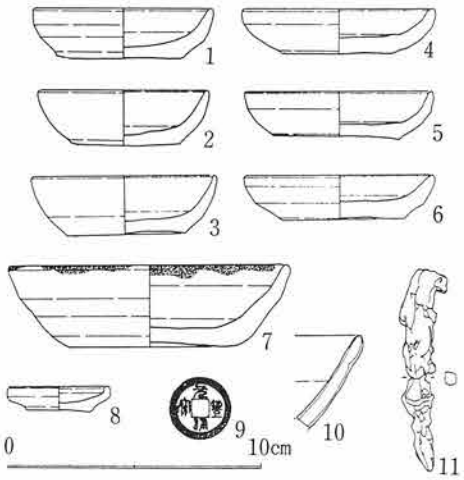
第5図　第1面遺構全図

第四章　出土遺物

包含層出土遺物（第６図）

第１面上包含層は、土丹塊、鎌倉石砕片を主体とする地業層で、上面を精査した際に、少量の遺物が出土した。

１～８はかわらけ皿。いずれも完形ないし略完形品である。１～３は器高の高い小皿で、１は体部下半に強いナデが一周し、体部中位が張った形となる。器壁は２・３に較べて厚く、底径も大きめである。２・３は体部外面が滑らかな曲線をもって立ち上がり、器壁も薄い。胎土・焼成・整形の点で、１とは若干趣きを異にする。４～６は器高の低い小皿。器形は３点とも多少異なる。４は底部際から大きく開いた体部をもち、５は口唇部を強くナデて少々外反させる。６は体部下半を強くナデ、中位が張った器形となる。７は灯明皿として使用されたもの。口唇部全面に煤が付着する。体部中位と口縁部に強いナデがめぐる。８は異形のかわらけ小皿。体部中位から直立気味に立ち上がり、口唇部は少し内側に丸め込まれる。胎土・焼成・色調は２と酷似する。



第６図　包含層出土遺物

９は北宋銭。元豊通宝（初鋳1076年）である。

10は青磁鎬蓮弁文碗の小片である。淡青緑色の釉が厚くかけられ、大きな貫入がみられる。

11は鉄釘。錆が著しい。頭部は折り曲げてあり、全長7.5cmを測る。

かわらけ地業出土遺物（第７図）

細片が多いかわらけ地業中からも、接合可能な略完形品が出土している。

１～５は器高が高く、体部が滑らかな曲面をもって立ち上がる小皿である。器壁は２を除いて薄手で、整形も概して丁寧な一群である。４と５は胎土・焼成・色調とも非常に良く似ている。

６～13は器高が低い小皿類。６は口縁部に強いナデを行うため、外反気味に開く器形である。８も同様である。８は器形に歪みがあり、胎土中に白色針状物質を多く含んでいる。７・９・10は体部中位に弱い稜が出来るが、概して側面は丸味をもつものである。11は底部穿孔かわらけと呼ばれるもの。焼成後、内底面から直径3.5mm程の孔を２箇所にあける。用途は不明である。12は口縁部に強いナデを施し、外反気味に開いた側面観をもつ。体部中位の稜は比較的はっきりしている。13は底径と口径が大きく、器高が低い、潰れたような側面観をもつもの。外底面は上げ底状にもち上っ

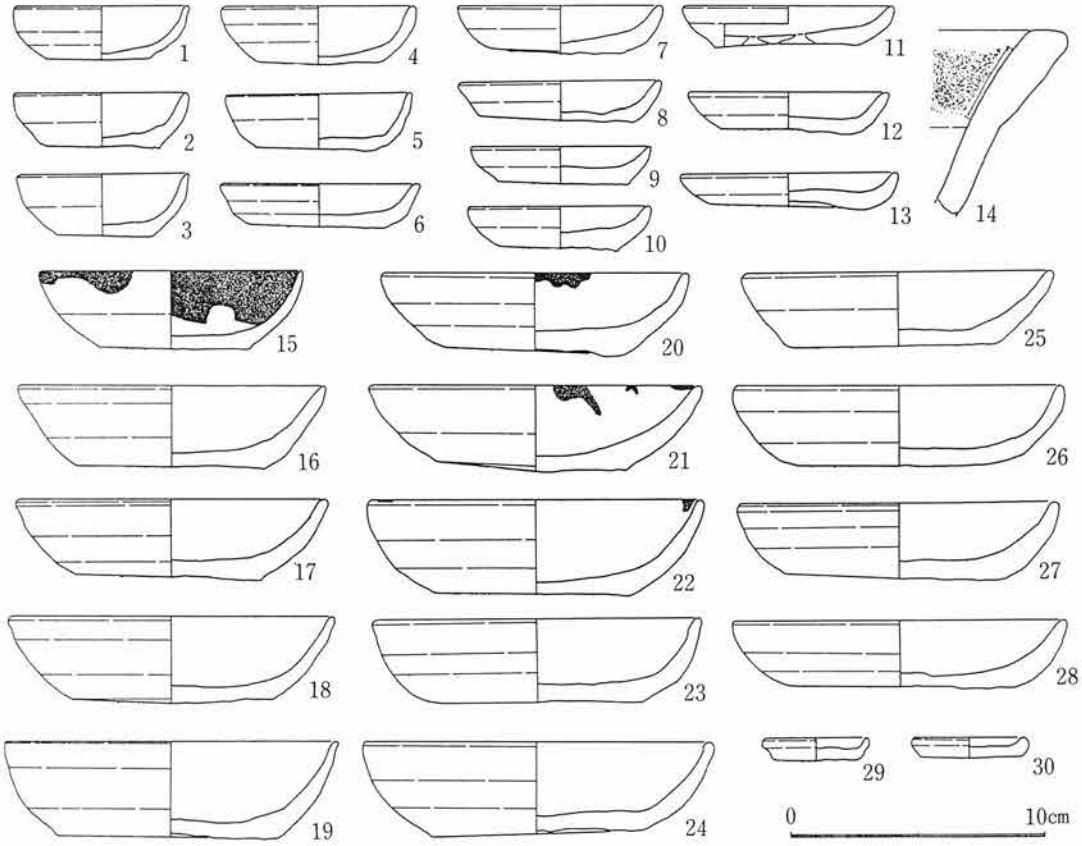
ている。

14は瓦質の手焙り。浅鉢形を呈すものである。復原口径は約32cmを測る。口縁部はナデ。体部外面の屈曲部以下はハケ調整を行う。口縁部内面には煤が付着している。

15は灯明皿として使用されたもの。口縁部の約半周に煤が付着している。体部は滑らかな丸味をもち、器高が高く、器壁は薄い。器形的には中皿に属するものである。

16～28は大皿に分類され得るもの。16は体部中位に強いナデを行う。17・18は口縁部に強いナデを行い、口唇部が若干外反する。19は明橙褐色を呈す。器壁は厚いが、滑らかな曲面の体部をもつ。20は体部中位に強いナデを行う。灯明皿である。21は丸味を帯び、大きく外方へ開く体部をもつ。灯明皿である。22は底部際にやや強いナデ。灯明皿である。23は口縁部をやや強くナデル。24は器壁が薄く、滑らかな体部をもつ。器高は低い。口唇部は内彎気味に丸められる。25は体部下半に強いナデ。26は口縁部が短く直立する。27・28は器高が低く、体部中位に弱い稜ができる。

29・30は異形かわらけ。胎土・焼成・器形に差異がある。29は口縁部が短く直立し、胎土中に砂を多く含む。第一面上包含層出土のものと似る。30は口唇部が内側へ丸められる。胎土は精良・焼成は堅緻である。ともに底部は回転糸切りを行う。



第7図　かわらけ地業出土遺物

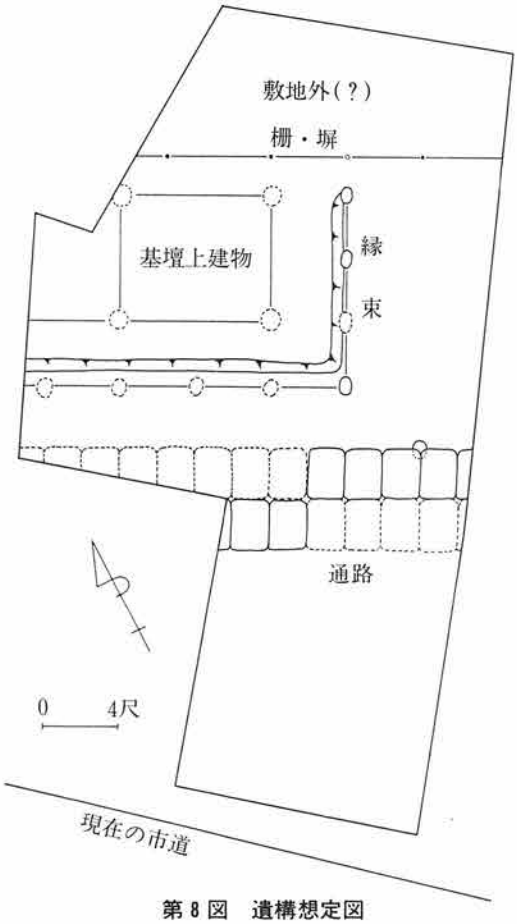
第五章　まとめ

第１面で検出された遺構群は、柱穴列と切石列が完全には平行しないものの、かなりの規格性をもって配置されていた。第８図では、想定される遺構を復原し、模式図に示してある。

礎石列は半間間隔に並ぶことから、廂あるいは縁束の礎石と考えられる。想定的では、かわらけ地業、土丹版築面を基壇と考え、基壇上に建物があったものとした。実際の調査では基壇上に礎石や柱穴は確認されていない。

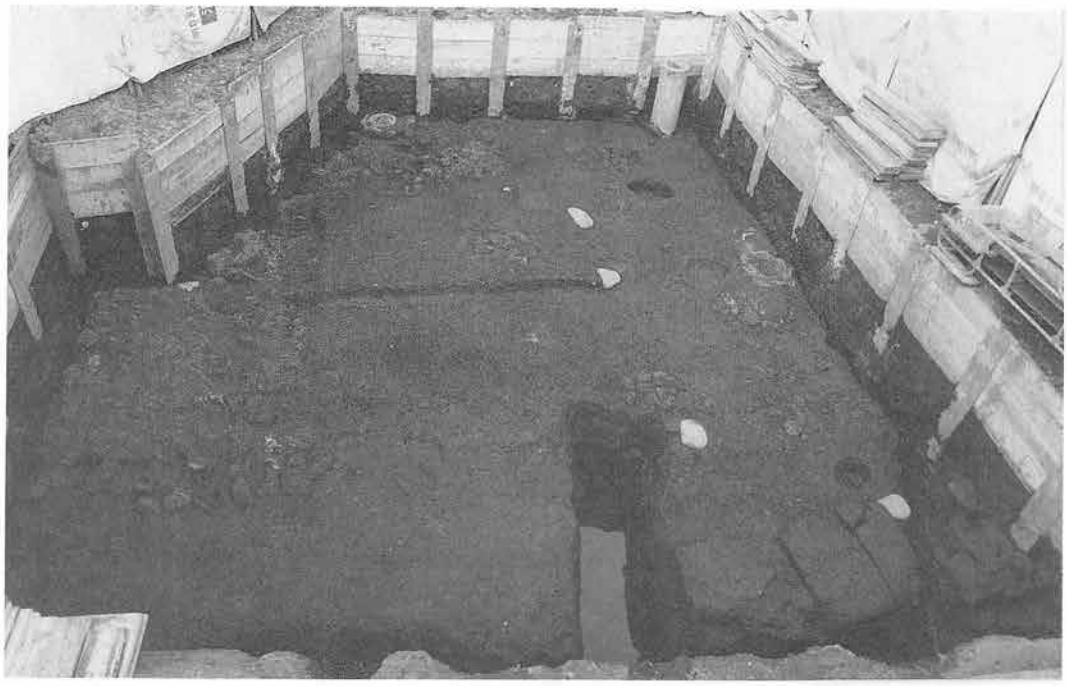
基壇上建物の背後（北側）には、目隠し塀あるいは隣地との境界を示す簡単な柵、塀が作られている。これより北側は、海砂を撒いて生活面を整地することもなく、土丹塊が露出した荒れ地となり、敷地外という外観を呈している。

基壇上建物の前面（南側）には、鎌倉石切石を敷き並べた通路を作る。切石下に検出された伊豆石の存在から、東側に別の礎石建物があり何らかの理由で取り壊されたと推定される。この建物と基壇上建物とが同時存在したか否かは明確でないが、焼けた海砂面が周囲にみられることや、かわらけ地業中に混在する炭化物片などから、火災後に焼け残ったかわらけ皿を集めて基壇を作り、その上に建物を移したのではなかろうか。また、同時に切石による通路も付設したものと思われる。通路を狭んだ南側も海砂を撒き、丁寧に整地する。何も遺構は存在しないが、同一の敷地内と考えられる。なお、通路を西側に延長すると、現在の今小路と調査地点前の道路が交差する辺りに出るようである。



第８図　遺構想定図

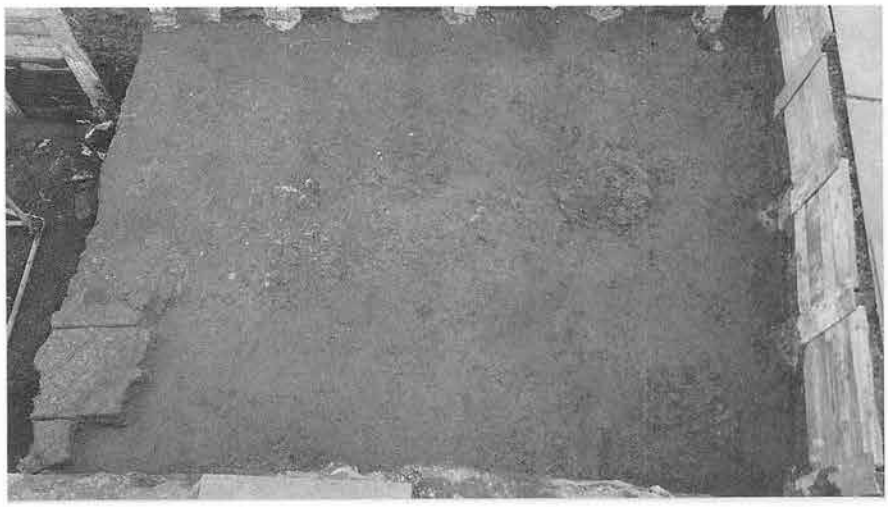
第１面の年代観は、かわらけ地業中より出土したかわらけ皿の特徴から、大体14世紀中半～15世紀初頭までと考えられる。第１面上包含層上面で得られたかわらけ皿も、全く同じ特徴を備えており、短時間のうちに大規模な地業が行われたことを示している。



▲Ⅰ区第Ⅰ面（南から）

▼Ⅰ区第Ⅰ面（西から）

図版 2



▲II区第Ⅰ面（西から）

▼第Ⅰ面全景（北から）

▲第Ⅰ面上包含層出土

第Ⅰ面かわらけ地業層出土▼

7．若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町二丁目280番２地点

例　言

1．本書は鎌倉市小町二丁目280番２所在の若宮大路周辺遺跡群(№242）内の発掘調査報告書である。

2．調査は対称面積3分の1を鎌倉市教育委員会（教育長　尾崎實、担当者　松尾宣方）が、３分の２を若宮大路周辺遺跡群発掘調査団（団長　田代郁夫）が実施した。

本書に収録したのは、鎌倉市教育委員会調査分で、平成元年１月19日から１月27日にかけて実施した。

3．調査参加者は下記のとおりである。

調　査　員　田代郁夫

調査補助員　継　実

4．本書は、鎌倉市教育委員会の指示を受けて、田代郁夫・原廣志が執筆・編集した。

なお、両名以外に継　実・大畑明子・櫛橋典子・土屋浩美・高野麗らが図版作成にあたった。

5．本書の写真は遺構を田代が、遺物を木村美代治が撮影した。

図　版　目　次

図版１　１　全景（東から）
　　２　南壁土層
　　堆積状況（西から）……（277）
図版２　出土陶磁器類(1)……（278）
図版３　出土陶磁器類(2)……（279）
図版４　出土陶磁器類(3)……（280）
図版５　出土陶磁器類(4)……（281）

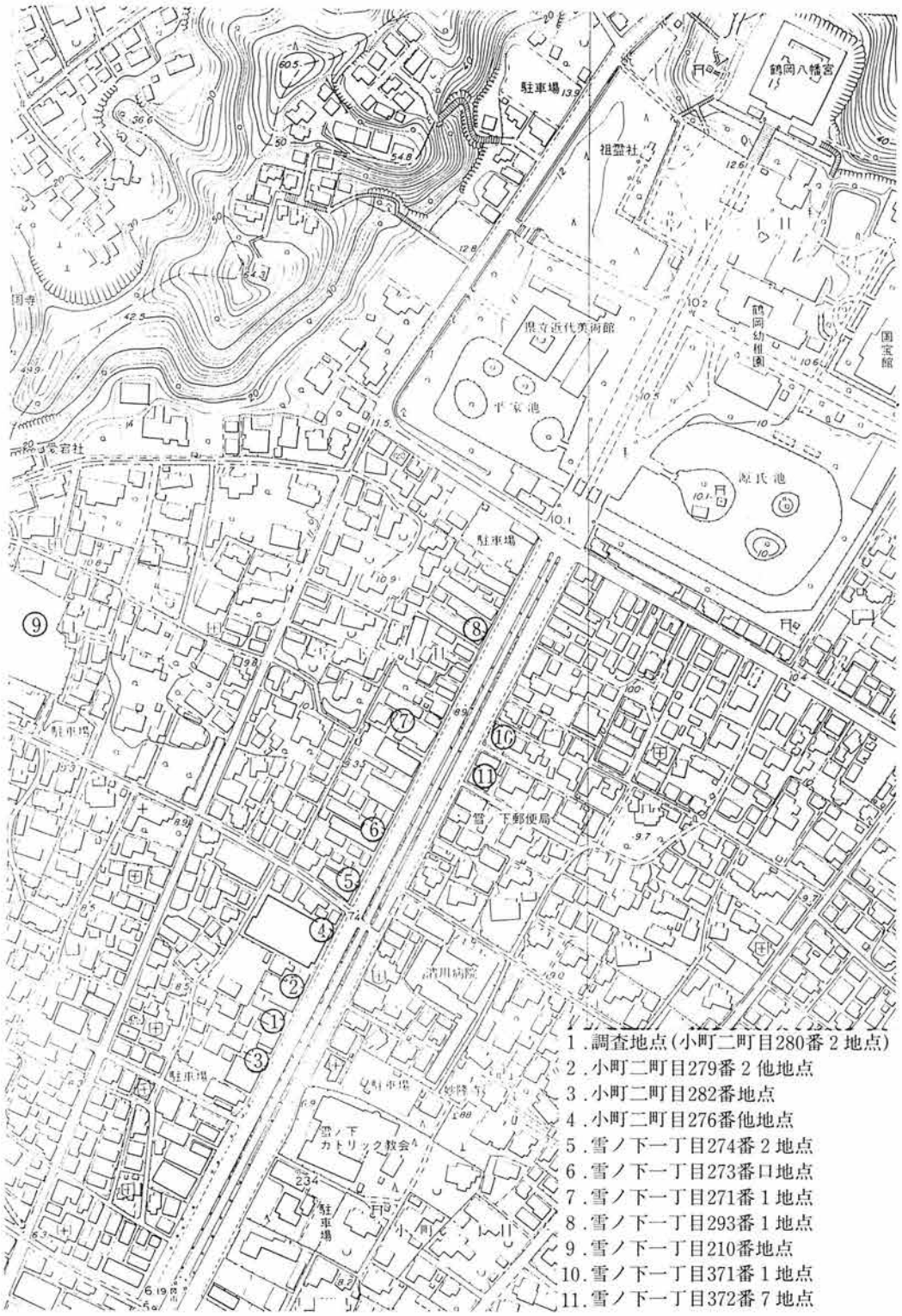

駐車場
鶴岡八幡宮
祖霊社
国寺
県立近代美術館
鶴岡幼稚園
国宝館
平家池
源氏池
駐車場
駐車場
雪ノ下郵便局
清川病院
駐車場
駐車場
雪ノ下
カトリック教会
駐車場
小町
1.調査地点(小町二町目280番2地点)
2.小町二町目279番2他地点
3.小町二町目282番地点
4.小町二町目276番他地点
5.雪ノ下一丁目274番2地点
6.雪ノ下一丁目273番口地点
7.雪ノ下一丁目271番1地点
8.雪ノ下一丁目293番1地点
9.雪ノ下一丁目210番地点
10.雪ノ下一丁目371番1地点
11.雪ノ下一丁目372番7地点

図1　調査地点位置図

第一章　調査地点の位置と歴史的環境

鎌倉市小町二丁目280番２に所在する若宮大路周辺遺跡群（№242）は、JR鎌倉駅の北方300m程の地域にあり、鎌倉の街を二分する形で鶴岡八幡宮から海に向かって一直線に延びる若宮大路北側に位置している。この道は中世から現代に至るまで常に鎌倉の最も中心的な位置を占めた幹線道路であって、調査地点はこの若宮大路の北端西側に位置し、大路に面した一角である。

若宮大路は、治承４年（1180）10月、鎌倉入りした源頼朝が、鶴岡八幡宮を由比郷から現在の小林郷へ移した後、造営を開始した主要街路の一つであり、八幡宮への参拝路としてもよく知られているところである。「吾妻鏡」によれば、寿永元年（1182）３月、頼朝の妻政子の安産祈願のために「段葛」を築造したとの記事があり、おそらくこの頃までには主要路である若宮大路が、一応完成をみたものと思われる。若宮大路について、江戸後期に書かれた「新編相模国風土記稿」によれば、大路の三ヶ所の鳥居と、その近くに上・中・下の下馬「駒留木」があって、騎馬による乗り入れを禁じていたようである。

若宮大路に各下馬で交差する東西方向の道は「上の下馬（赤橋）で横大路、「中の下馬」（小町口）で宇津宮辻子、「下の下馬」で（米町口）大町大路がそれにあたる。又、若宮大路と平行して、東側に小町大路を、西側に今小路の二条の街路を設けている。

ところで、調査地点は、県遺跡台帳によれば「若宮大路周辺遺跡群（№242）」と云われる区域内の北端中央寄りに位置している。北面には北条時房・顕時邸跡（県遺跡台帳によれば）と云われる区域があり、東面を若宮大路に臨み大路を挟んだ向い側には「若宮大路幕府跡」と伝えられる区域もある。本調査地点に近接して、北側に図１－２地点の長沢屋旅館用地と、南側に図１－３地点の大路ビル北用地がある。この両地点遺跡からは大路に沿った近世河川を検出していて、本調査地点で検出した河川の上・下流に位置している。3地点遺跡検出の河川の時期は17～18世紀にかけての国産陶磁器類が主体を占め、少なくとも19世紀には埋没した痕跡が遺物から窺えた。

第二章　検出した遺構

調査区内は中世基盤層である黒褐色粘質土下までほとんど削平され、近・現代の客土や整地層が入り込んでいた。特に調査区西域は削平がひどく、中世基盤層下に堆積した黄褐色砂層にまで及んでいて、遺構の確認すらできない状態であった。若宮大路側では中世の地山にあたる黒褐色粘質土の薄い堆積が観察され、ピットや溝の遺構を検出したが、これのみが僅かに近世以前に遡り得る遺構であった。以下に中世・近世遺構の概要を記す。

中世の遺構（図３、図版　　）

溝１条とピット２口を検出した。溝は調査区東端に位置し、大路と平行して南北方向に走ってい

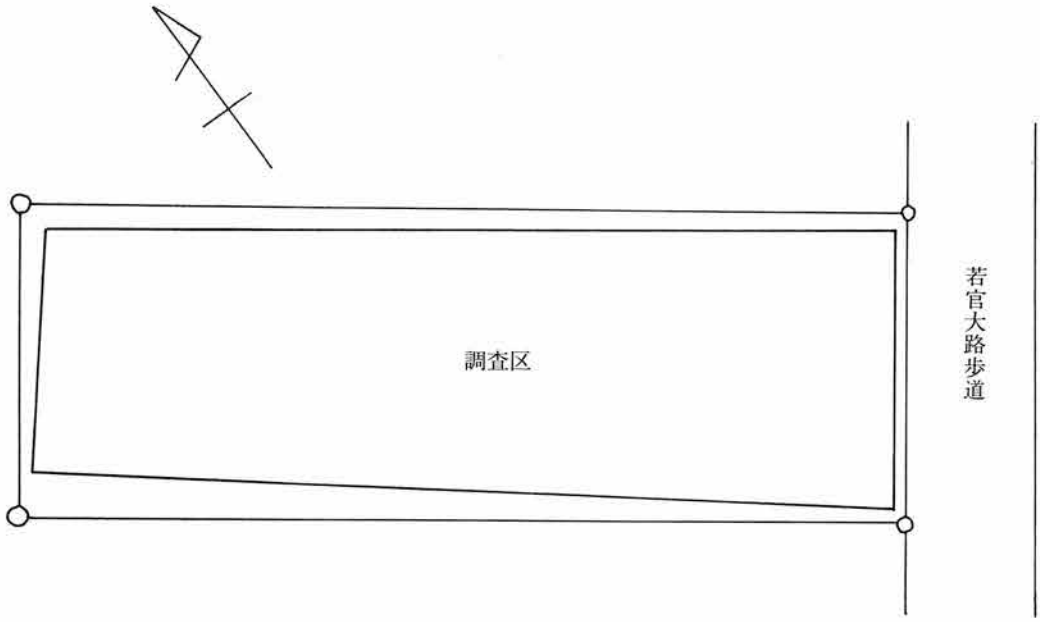


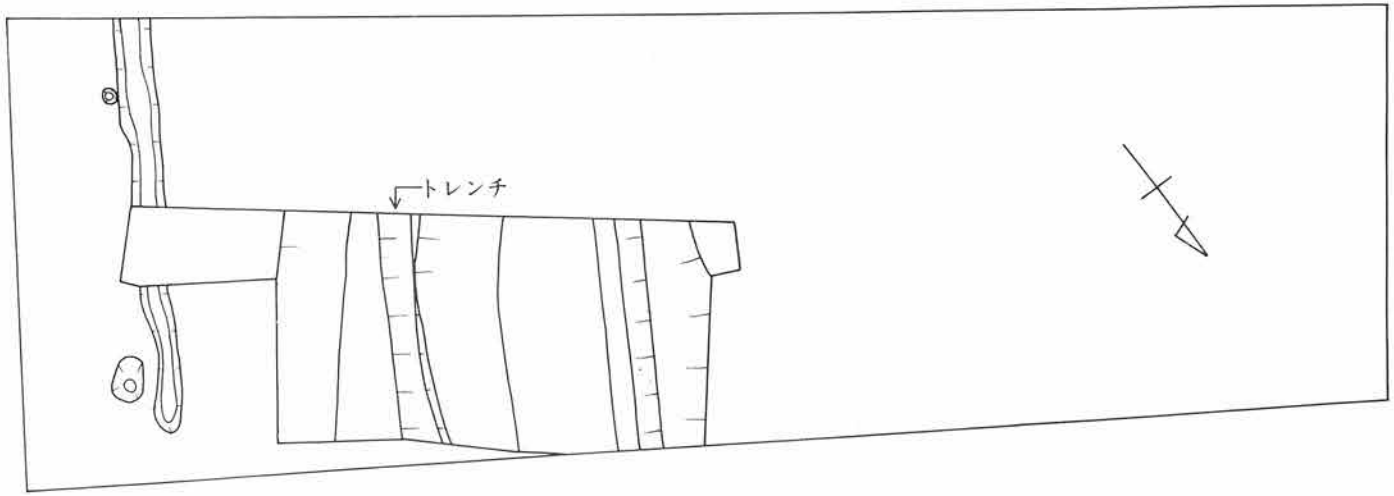
図 2　調査区配置図

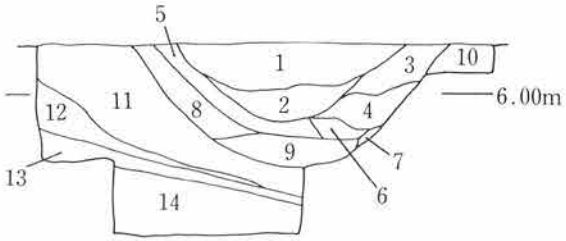
る。北側端部は調査区内で確認されたが、南側は調査区外まで延びている。溝の規模は上幅が25～43mで、下幅が12～23mほどである。断面形はほぼ「U」字形を呈する。深さは確認面から30cmほどで大半は削平により壊されていた。底面の標高は北端で6.25mで、南壁直下が6.40mであり南に向かって緩やかな傾斜をもっている。覆土は上層が黒褐色粘質土で、以下は有機物腐食土と灰黒色の主として砂分の多い土が堆積していた。

ピット２口は溝の東側で検出されたもので、北に位置するピットは長径50cm、短径35cm、深さ確認面から20cmほどで惰円形を呈する。南に位置するピットは円形で直径15cm程、深さ15cmである。覆土はともに黒褐色粘質である。

近世の遺構（図３、図版　　）

調査区東端で、出土遺物からみて近世の所産と考えられる河川を検出している。確認面は、地山上で、それより上層は削平、盛土が繰り返されていたため、実際の掘り込み面は、不明である。この河川の西岸は確認できたが東岸については、調査区が狭少であり、また残土を場外へ搬出する条件が整わなかった為確認していない。従って、この河川の上端幅は不明であるが、現況では4m30cmである。同様に河床を完全に検出するには至らなかったが、同じく現況で、深さ2mを測る。覆土の土層観察によって、中層に大少砂利を含む遺物を多含する層が確認され、少くとも３時期に及ぶ河床が認められる。





1.黄褐色粘質土……土丹粒少量含む。
2.黄褐色粘質土……土丹粒多量含む。
3.黄褐色粘質土……黄褐色・灰色粘土ブロック多量に含む。
4.暗茶褐色粘質土…粘土ブロックと砂ブロック多量に含む。
5.灰褐色砂質土……土丹角・砂を多く含む粗砂層。
6.暗褐色砂質土……粘土ブロック・砂ブロック多量に含む。
7.暗褐色砂質土……小土丹砂・炭化物を多量に含む。
8.暗褐色砂質土……土丹角・砂・木片を多く含む。
9.青灰色砂質土……大・小砂利、土丹角を多量に含む、遺物多い。
10.暗褐色砂質土……土丹粒を含む。
11.茶褐色砂質土……粘土ブロックと砂を多量に含む。
12.青褐色砂質土……粘土ブロック少量含む。
13.茶褐色砂質土……砂を殆んど含まない。
14.黒褐色粘質土……砂、木片(自然木)が多く含まれる。

0 4m

図3 遺構全図・土層図

第三章　出土した遺物

調査区東側の河川覆土中から多量の近世陶磁器類が出土している。特に覆土中層に確認された二時期に及ぶ河床を構成する砂礫層中及びその上下に遺物が集中して出土した。調査面積が狭少であるため、二時期にわたる遺物を別個に取り上げることは困難であったが、後述する如く、その年代幅は170年間に及ぶものであった。遺物の中には、中世の中国陶磁器なども少量含まれてはいたが、大部分は近世肥前系の製品及び瀬戸美濃系の製品である。最も出土量の多い肥前系製品について言えば、その生産時期は1630年代から18世紀にかけてのものであった。中でも17世紀後半から18世紀前半にかけての製品がその主体を占めている。19世紀以降の製品を含んでいない点は、この河川の埋没時期を知る上で特筆されるべき事柄である。

こうした傾向は、図1-2地点では同様であるが、図1-3地点では覆土上層から19世紀代に下る広東碗等も出土していて、この河川全体について述べ得ることか否かは、今後のこの付近の調査における課題の一つといえる。

遺物番号	器種	文様その他	産地	時期	法量(cm) 口径	底径	器高
図-1	染付大皿	山水文	肥前	1630年代～1650年代	—	9.0	—
2	染付小坏	草花に蝶	肥前	17C中葉	—	—	—
3	染付小皿	折枝文	肥前	1640年代～1650年代	—	—	—
4	染付筆立て(?)	竹文	肥前	17C中葉～18C	—	—	—
5	染付碗	捻花文	肥前	1650年代～1660年代	—	—	—
6	染付碗	網目文	肥前	1650年代～1670年代	—	—	—
7	染付碗	唐草文	肥前	17C後半	—	4.0	—
8	染付碗	草花文(?)	肥前	17C後半	—	—	—
9	青磁染付皿	高台蛇ノ目釉ハギ	肥前	17C後半	—	—	—
10	染付碗		肥前	17C後半～18C前半	—	4.4	—
11	粗製白磁皿	見込蛇ノ目釉ハギ高台無釉	肥前(波佐見)	17C後半～18C前半	—	3.7	—
12	染付小坏		肥前	17C後半～18C前半	—	2.5	—
13	色絵油壺		肥前	17C後半～18C前半	—	—	—
14	白磁(?)皿		肥前(波佐見?)	17C後半～18C中葉	11.3	—	—
15	染付皿	獅(?)	肥前(有田)	1690年代～18C初頭	—	—	—
16	染付碗	草花文	肥前	1690年代～18C初頭	—	—	—

遺物番号	器種	文様その他	産地	時期	法量(cm) 口径	底径	器高
図-17	染付小碗	型紙摺り胴部波文	肥前	1690年代～18C初頭	—	—	—
18	染付小碗	型紙摺り	肥前	1690年代～18C初頭	—	—	—
19	染付小碗	型紙摺り・口銹・雨降り文	肥前	1690年代～18C初頭	8.6	—	—
20	染付碗	草花文	肥前	17C末～18C初頭	—	—	—
21	染付碗	草花文	肥前	17C末～18C初頭	10.4	—	—
22	染付碗	梅樹文	肥前	17C末～18C初頭	—	—	—
23	染付皿		肥前	17C末～18C初頭	—	—	—
24	染付碗	松文	肥前	1690年代～18C前半	—	—	—
25	染付碗	高台内大明年製	肥前	1690年代～18C前半	—	4.0	—
26	染付皿	口縁口銹・雪ノ輪文	肥前	1690年代～18C前半	9.8	—	—
27	染付皿	口縁部唐草文	肥前	17C末～18C前半	—	—	—
28	染付皿	口縁部墨弾きによる波頭文	肥前	17C末～18C前半	—	—	—
29	染付碗	菊流水文	肥前	1690年代～18C中葉	—	—	—
30	染付碗	草花文	肥前	1690年代～18C中葉	—	—	—
31	染付猪口		肥前	1690年代～18C中葉	—	—	—
32	染付碗	菊流水文	肥前	1690年代～18C中葉	10.6	—	—
33	染付碗		肥前	1690年代～18C中葉	10.9	—	—
34	染付碗		肥前	1690年代～18C中葉	10.4	—	—
35	染付蓋物身		肥前	17C末～18C中葉	—	9.6	—
36	染付蓋物身	波頭文(ハートつなぎ)	肥前	17C末～18C中葉	—	—	—
37	染付皿		肥前	17C末～1780年代	12.4	—	—
38	白磁(?)碗		肥前	1690年代～1780年代	9.8	—	—
39	染付皿	(二次焼成)	肥前	17C末～18C代	—	—	—
40	染付紅皿(?)		肥前	17C末～18C代	—	2.8	—
41	染付碗	山水文	肥前	18C前半～中葉	10.4	—	—
42	染付碗	梅樹文	肥前	18C前半～中葉	11.2	—	—
43	染付碗	梅の折枝と銀杏文	肥前	18C前半～中葉	10.0	—	—
44	染付碗	草花文	肥前	18C前半～中葉	—	—	—
45	染付碗	二重網目文・見込菊花文	肥前	18C前半～中葉	—	—	—
46	染付碗	雪持笹・高台内大明年製見込五弁花文(コンニャク印判)	肥前(波佐見?)	18C前半～中葉	—	4.8	—
47	染付碗	雪持笹・高台内大明年製見込五弁花文(コンニャク印判)	肥前(波佐見?)	18C前半～1780年代	—	4.7	—

遺物番号	器種	文様その他	産地	時期	法量(cm) 口径	底径	器高
図-48	染付皿	側面梅花文・見込五弁花文(コンニャク印判)・高台内大明年製	肥前	18C前半～1780年代	—	8.2	—
49	染付碗		肥前	18C前半～1780年代	—	—	—
50	染付碗		肥前	18C前半～1780年代	—	4.4	—
51	染付碗		肥前	18C前半～1780年代	10.2	—	—
52	染付皿	側面菊花文・高台内大明年製・見込五弁花文(コンニャク印判)	肥前	18C前半～1780年代	—	7.7	—
53	染付碗	雪ノ輪に梅樹文・高台内大明年製のクズレ	肥前(波佐見？)	18C前半～1780年代	10.1	—	—
54	染付碗		肥前(波佐見？)	18C前半～1780年代	9.8	—	—
55	白磁(？)火入れ	蛇ノ目大型高台	肥前	18C代	—	8.4	—
56	染付小碗	草花文	肥前	18C代	—	3.4	—
57	染付碗	(焼成不良)	肥前	18C代	—	3.8	—
58	染付蓋物の蓋	折枝文	肥前	18C代	—	—	—
59	染付碗(蓋？)		肥前	18C中葉～末	—	—	—
60	染付碗	矢羽根文	肥前	18C後半	—	—	—
61	大皿	三島手	唐津系	17C後半～18C代	—	—	—
62	大皿	三島手	唐津系	17C後半～18C代	—	—	—
63	大皿	三島手	唐津系	17C後半～18C代	—	—	—
64	大皿	三島手	唐津系	17C後半～18C代	—	—	—
65	大皿	三島手	唐津系	17C後半～18C代	—	—	—
66	大皿	三島手	唐津系	17C後半～18C代	—	—	—
67	大皿	三島手	唐津系	17C後半～18C代	—	—	—
68	皿	ハケ目砂・胎土目	唐津	17C後半～18C初頭	—	12.0	—
69	大皿	三島手砂・胎土目	唐津系	17C後半～18C初頭	—	11.2	—
70	瓶	ハケ目	唐津系	17C後半～18C中葉	—	—	—
71	皿	絵唐津	唐津	桃山	—	—	—
72	大皿	二彩唐津砂・胎土目	唐津	17C後半～18C初頭	—	—	—
73	大皿	二彩唐津砂・胎土目	唐津	17C後半～18C初頭	—	—	—
74	碗	唐津系青緑釉	嬉野内野山窯	17C後半～18C中葉	—	4.4	—
75	74と同一個体	唐津系青緑釉	嬉野内野山窯	17C後半～18C中葉	—	—	—
76	皿	唐津系青緑釉	嬉野内野山窯	17C後半～18C中葉	12.0	4.3	3.3
77	皿		福岡県高取焼系(小石原窯系)	17C後半～18C中葉	13.5	5.6	3.8
78	皿		福岡県高取焼系(小石原窯系)	17C後半～18C中葉	—	5.8	—

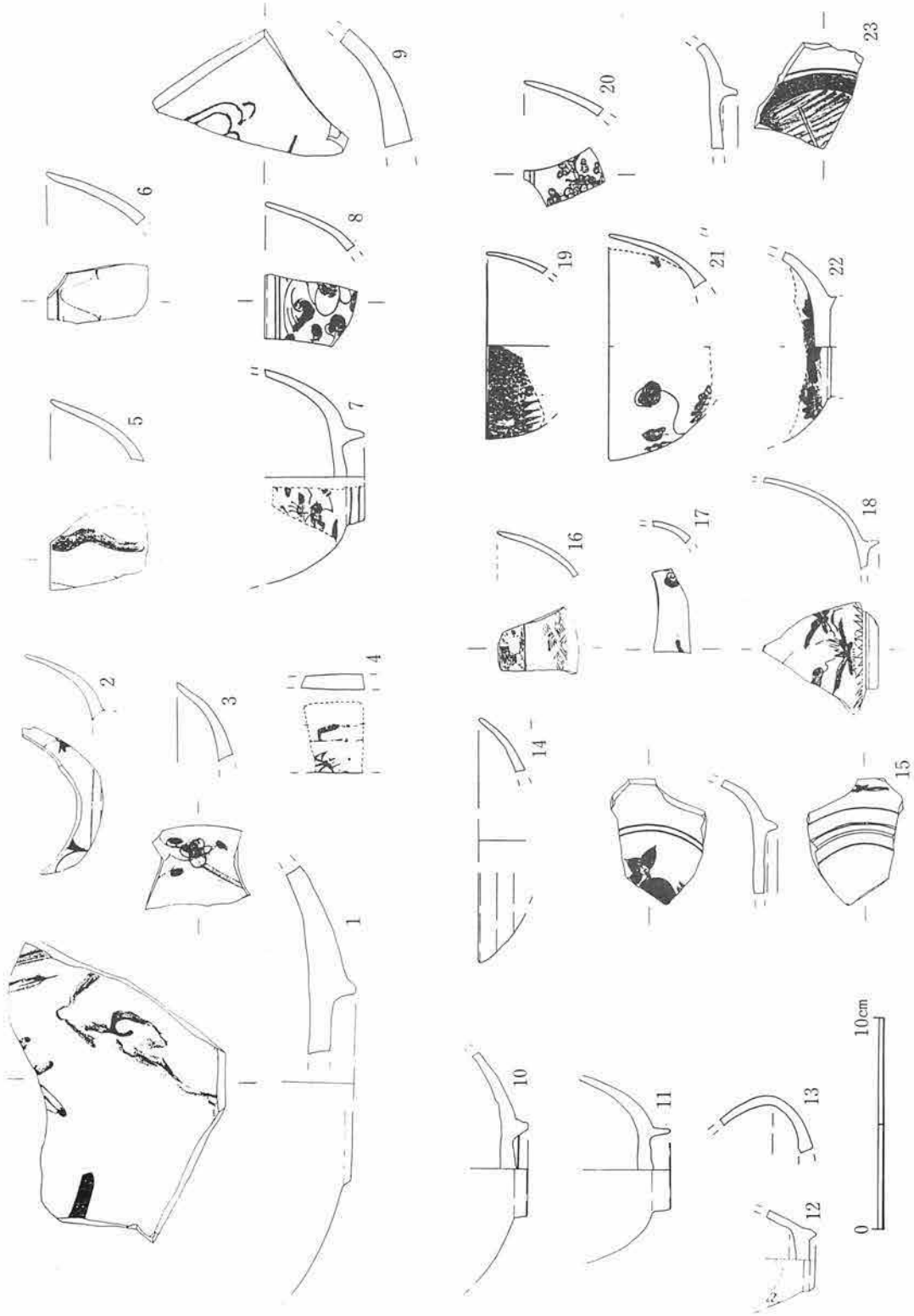


図 4　近世河川出土の肥前陶磁(1)

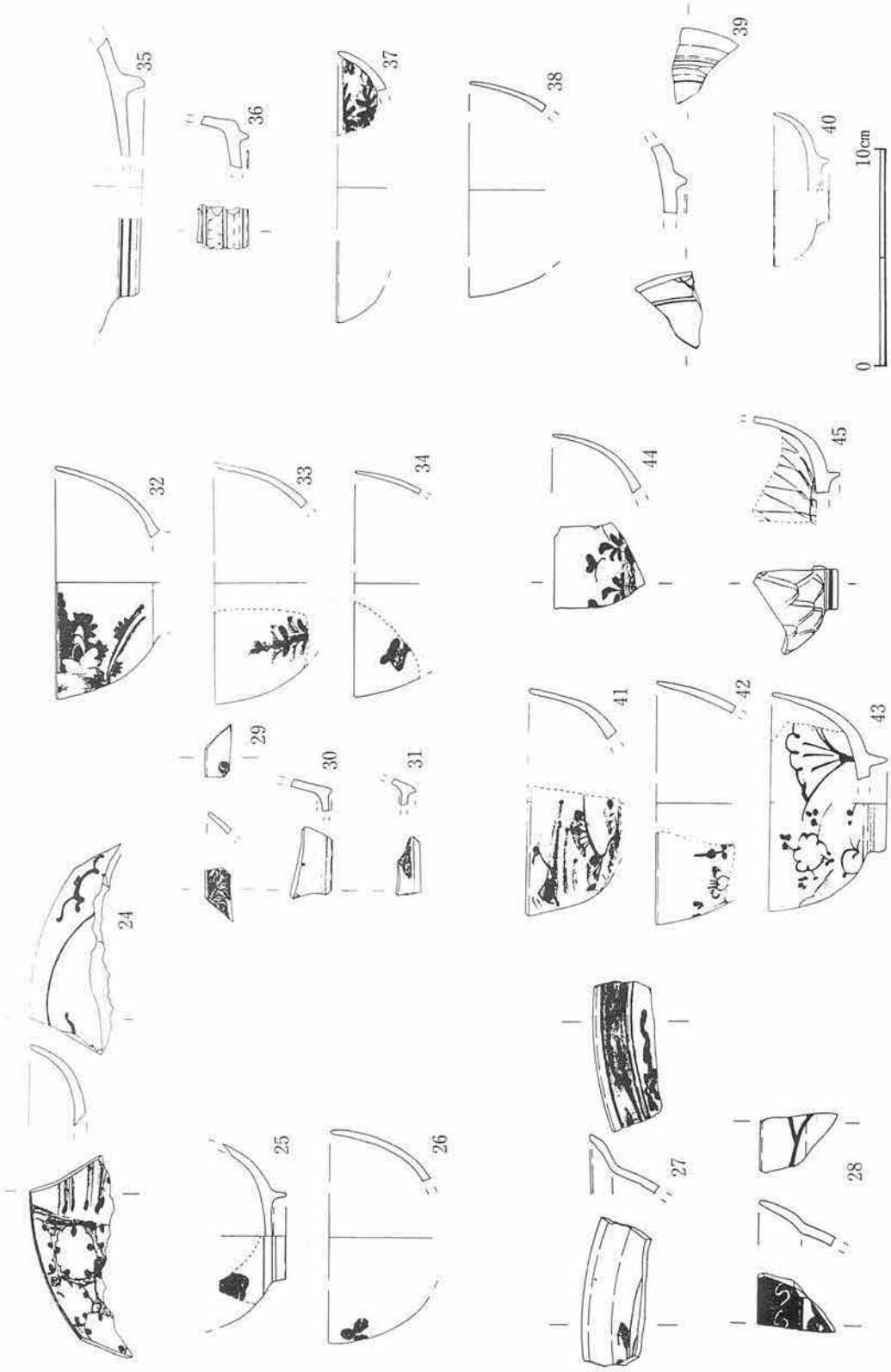


図 5　近世河川出土の肥前陶磁(2)

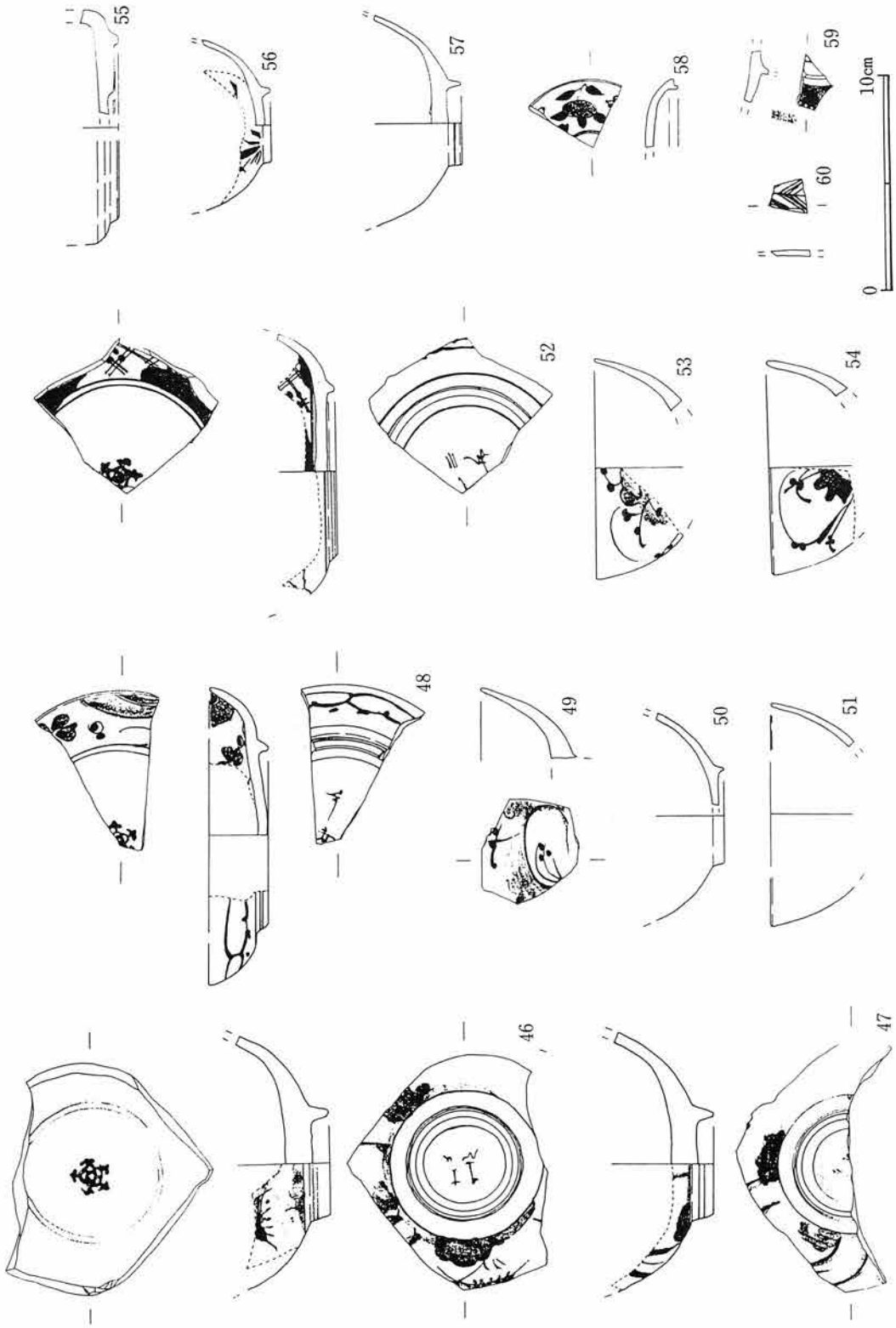


図 6　近世河川出土の肥前陶磁(3)

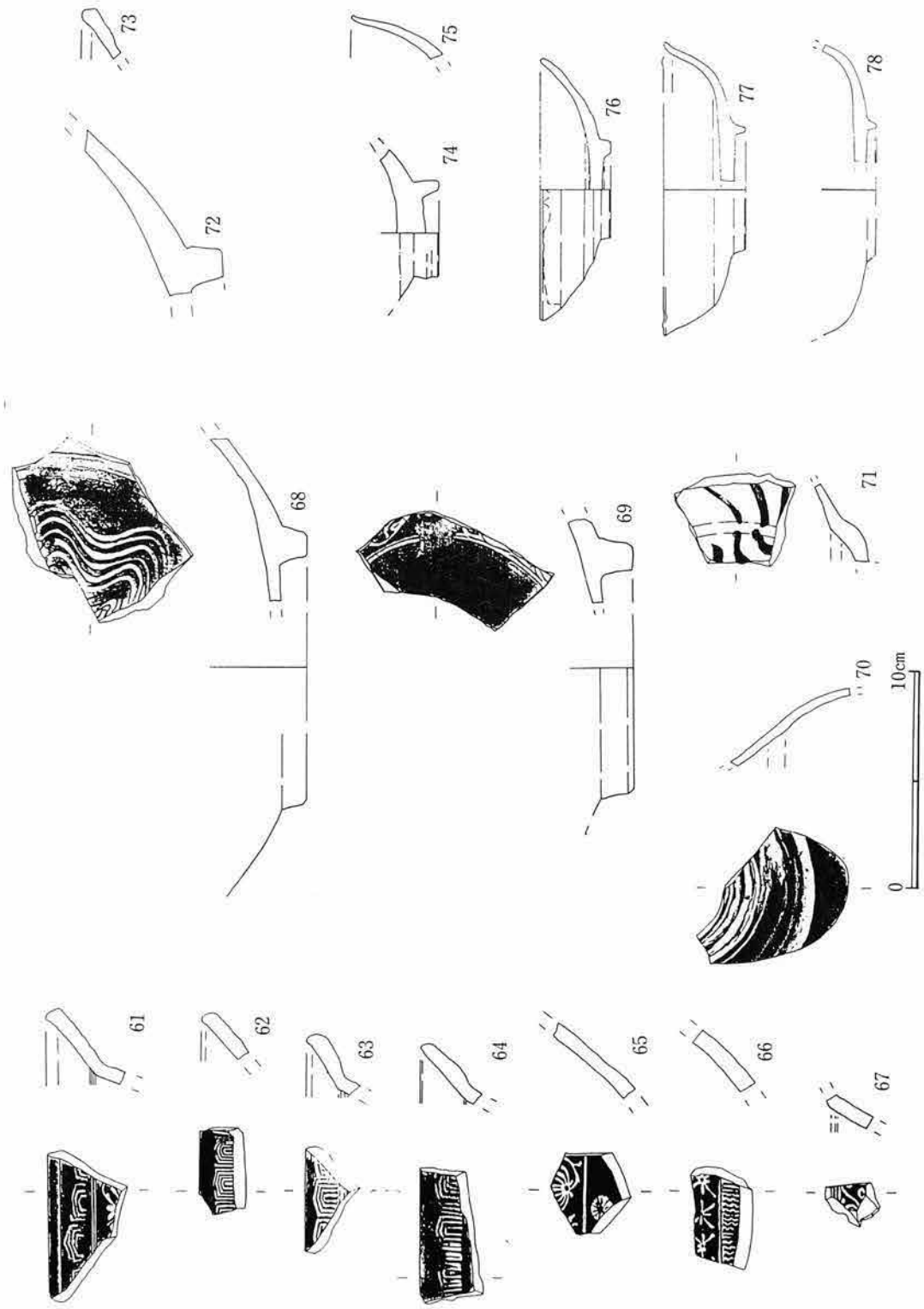


図7　近世河川出土の肥前陶磁(4)

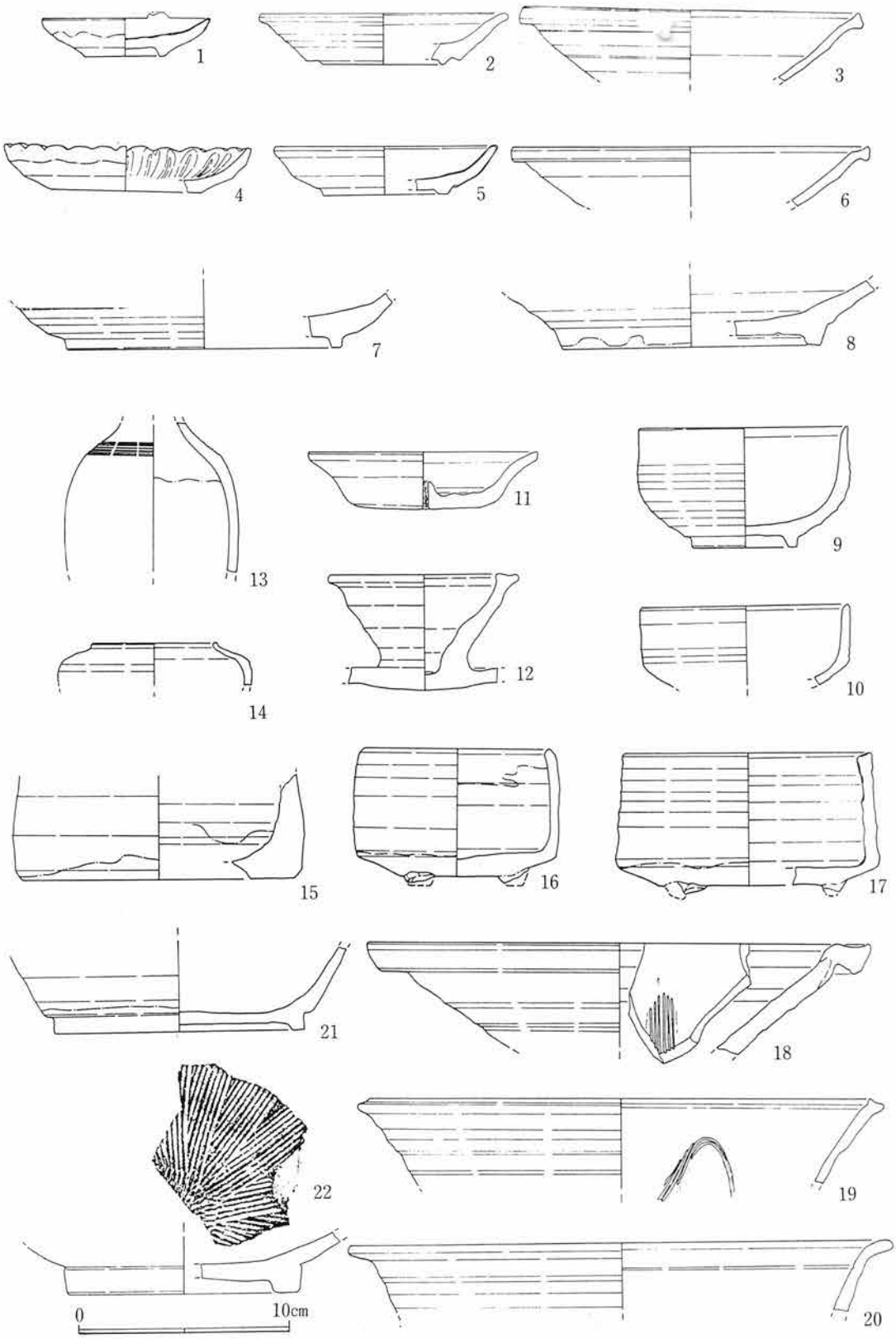


図 8　近世河川出土の瀬戸・美濃窯陶器

第四章　まとめ

調査区全体は、中世地山層まで近現代の削平整地を受けていた。中世遺構としては、柱穴や溝などの痕跡かと思われる若干の凹みを検出したに留まる。一方、近世遺構として河川を検出したことは、その覆土内から出土した豊富な近世遺物とともに特筆すべき発見であった。

本遺跡は若宮大路に接して、その西側に位置し、同じく大路に接して北側に長沢屋旅館跡地遺跡（同一遺跡名で、小町二丁目279番２他地点遺跡）と、南側に大路ビル北遺跡（同一遺跡名で、小町二丁目12番34地点遺跡）がある。この両遺跡はともに調査区東側で、大路に沿った近世河川が検出されていて、今回検出したものの上・下流になる。それらの時期は17～18世紀を中心としており、19世紀には埋没していたようである。

これらの河川の描かれた近世絵図等を発見することはできなかったが、明治初期につくられた地図には、大路の側溝と思われる。直線的な溝が南北位に描かれている。現存する明治時代の写真にも、この溝の上に架構したと見られる小橋が各家前に写っている。この明治期の溝は、若宮大路の両側にあり、現在も両側の歩道下を流れている溝に相当するものであろう。この溝と検出された河川は近接していて、かつて両者が平行していたものとは思われない。溝は河川を埋めた後に大路寄りに新に構築したものであろう。

それではこれらの近世河川、溝がどこから流れて来るかといえば、現段階では不明としか言えない。大路西側の河川については、現在の鶴岡会館（小町二丁目276番他地点遺跡）までは確認されている。しかし、北条時房・顕時邸跡といわれる地域で、現在のポロ・ラルフローレン用地調査（雪ノ下一丁目274番２地点遺跡）で、この河川は検出されておらず、それ以前で東西いずれかに逸れるであろう。もっとも、大路を横断するとは思えず、西側に逸れていくと考えるのが妥当であろう。

八幡宮付近に開かれている谷は、小袋谷や扇ヶ谷である。扇ヶ谷は、勝ノ橋から窟堂（窟不動）の前方を通って、現在の二ノ鳥居付近に流れ込む扇ヶ谷川がある。この扇ヶ谷川については瀬古邸遺跡（雪ノ下一丁目210番地点遺跡）で、旧河川が検出されている。これは現在の河道よりも東側を流れているので、おのずと二ノ鳥居よりも北側を流れていた可能性も考え得るわけで、それが今回検出された河川であるのかも知れない。一方、小袋谷からの流れは、八幡宮の現在の三方堀に流れ込むものだけである。今回検出した河川もあるいは、小袋ヶ谷あたりから流れ込むものであろうか。いずれにせよ、今後の調査成果に期待したい。

註

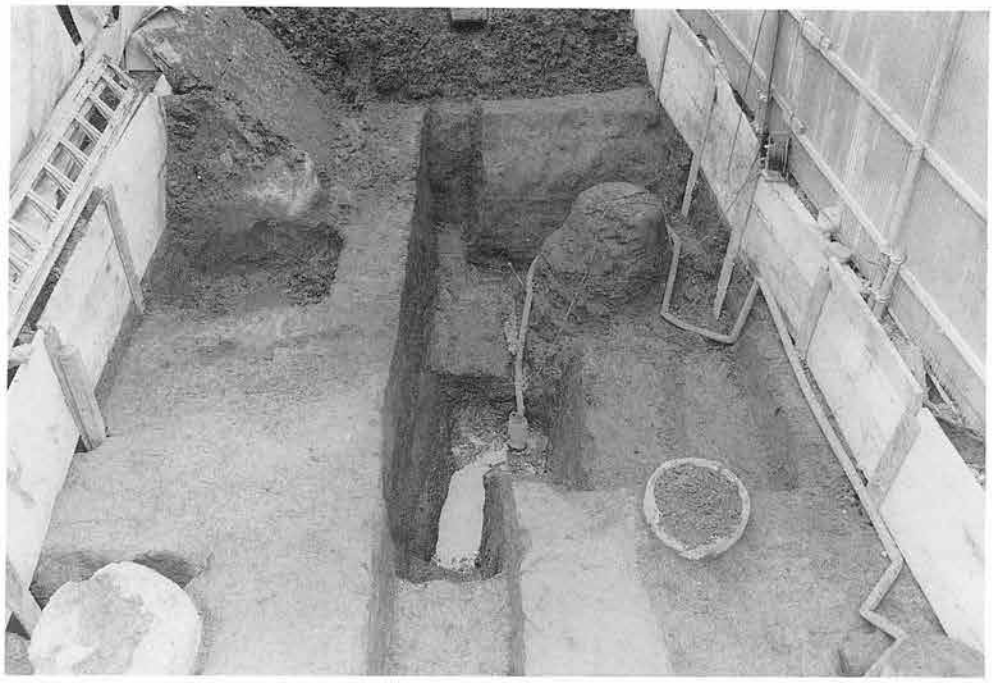
1．両遺跡とも平成元年に発掘調査され、河川遺構に伴って大量の近世陶磁類が出土した。

2．昭和62年調査、報告書未刊

3．吉田章一郎・原　廣志・福田　誠「北条時房・顕時邸跡―鎌倉市雪の下一丁目274番２地点発掘調査報告書―」北条時房・顕時邸跡発掘調査団1988年

4．調査担当者の馬淵和雄氏に御教示を受けた。

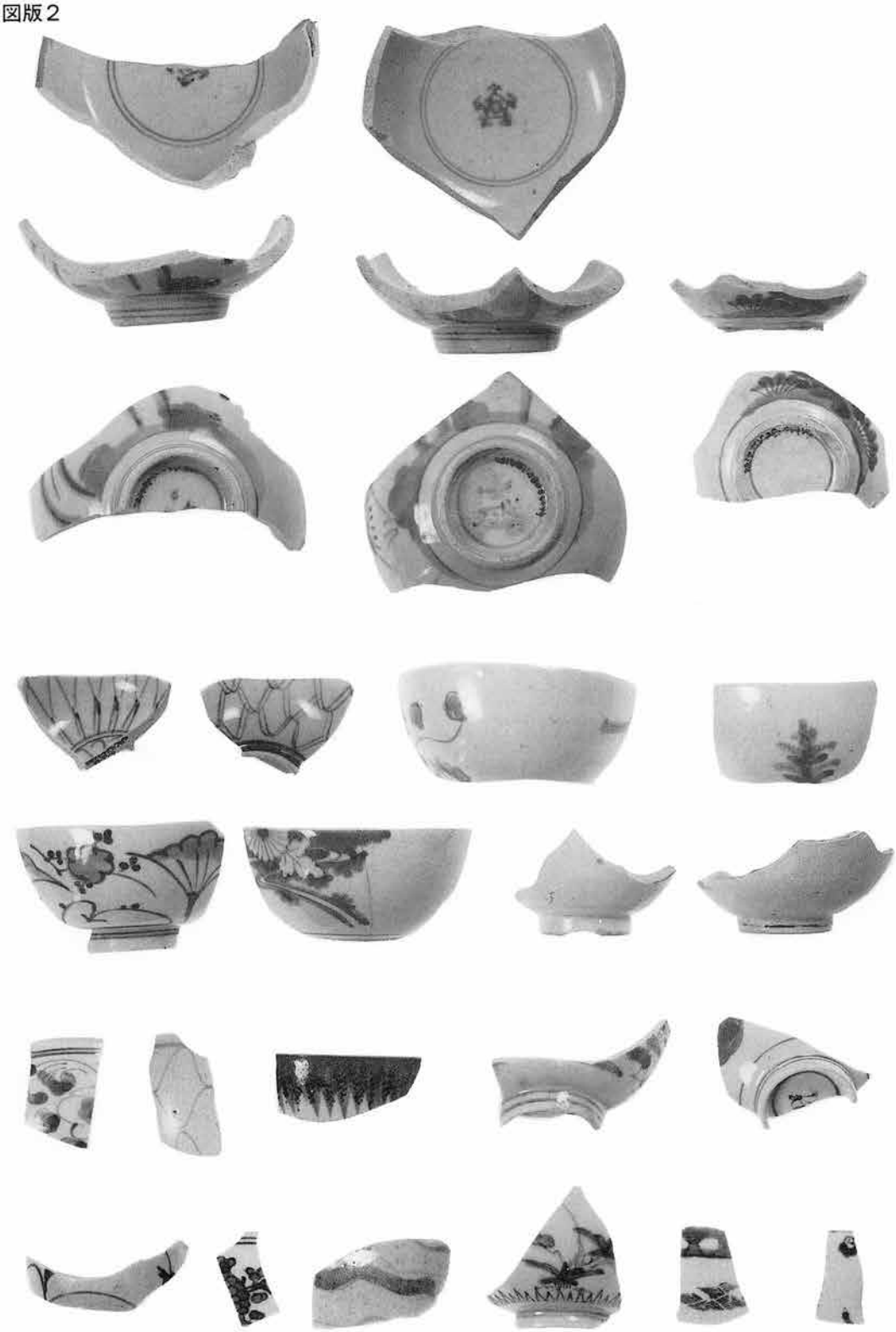
尚、肥前系陶磁器類の生産地及び製作時期に関しては、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課の大橋康二氏より多大な御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。



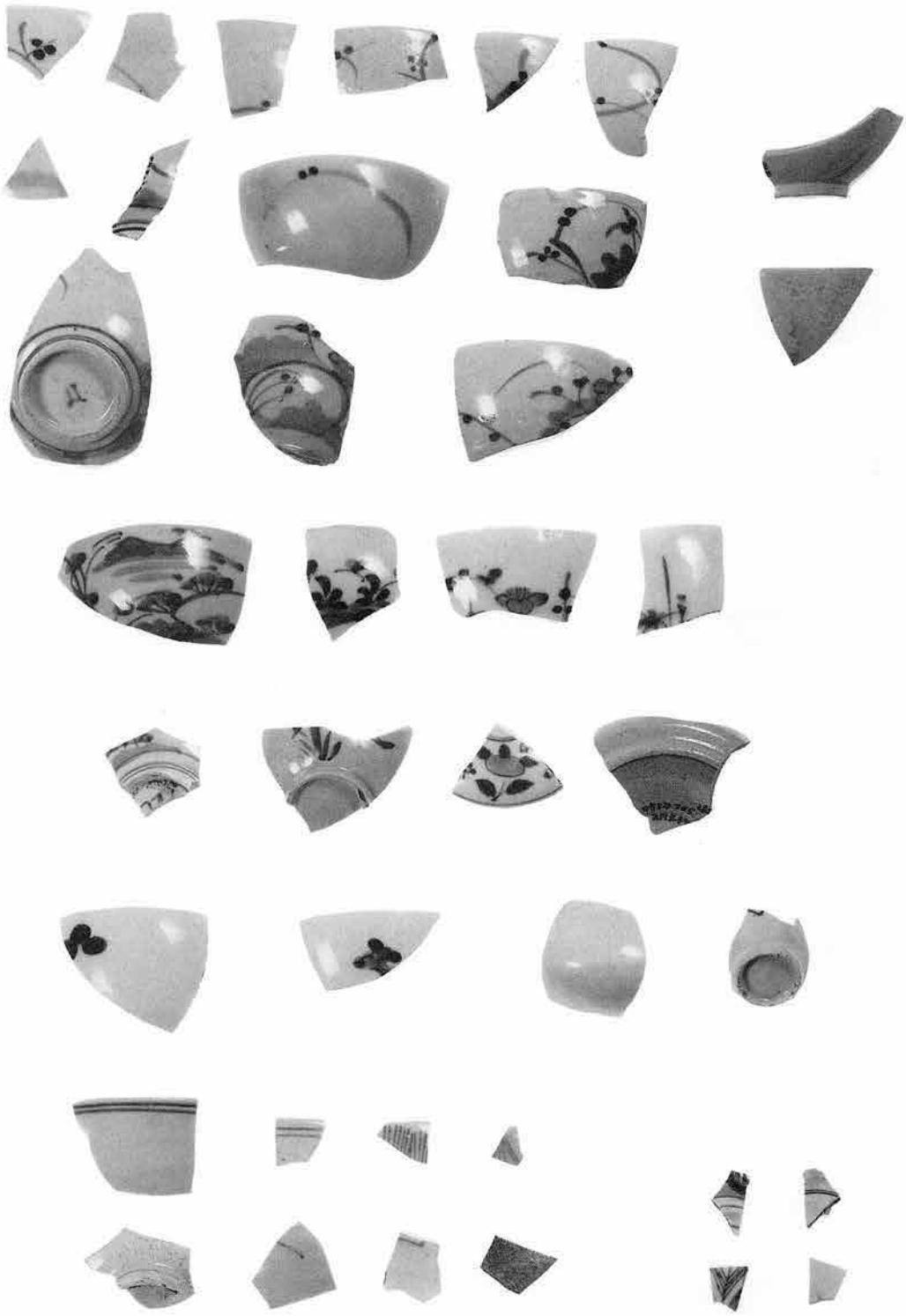
▲1．全景（東から）

▲2．南壁土層堆積状況（西から）

図版２

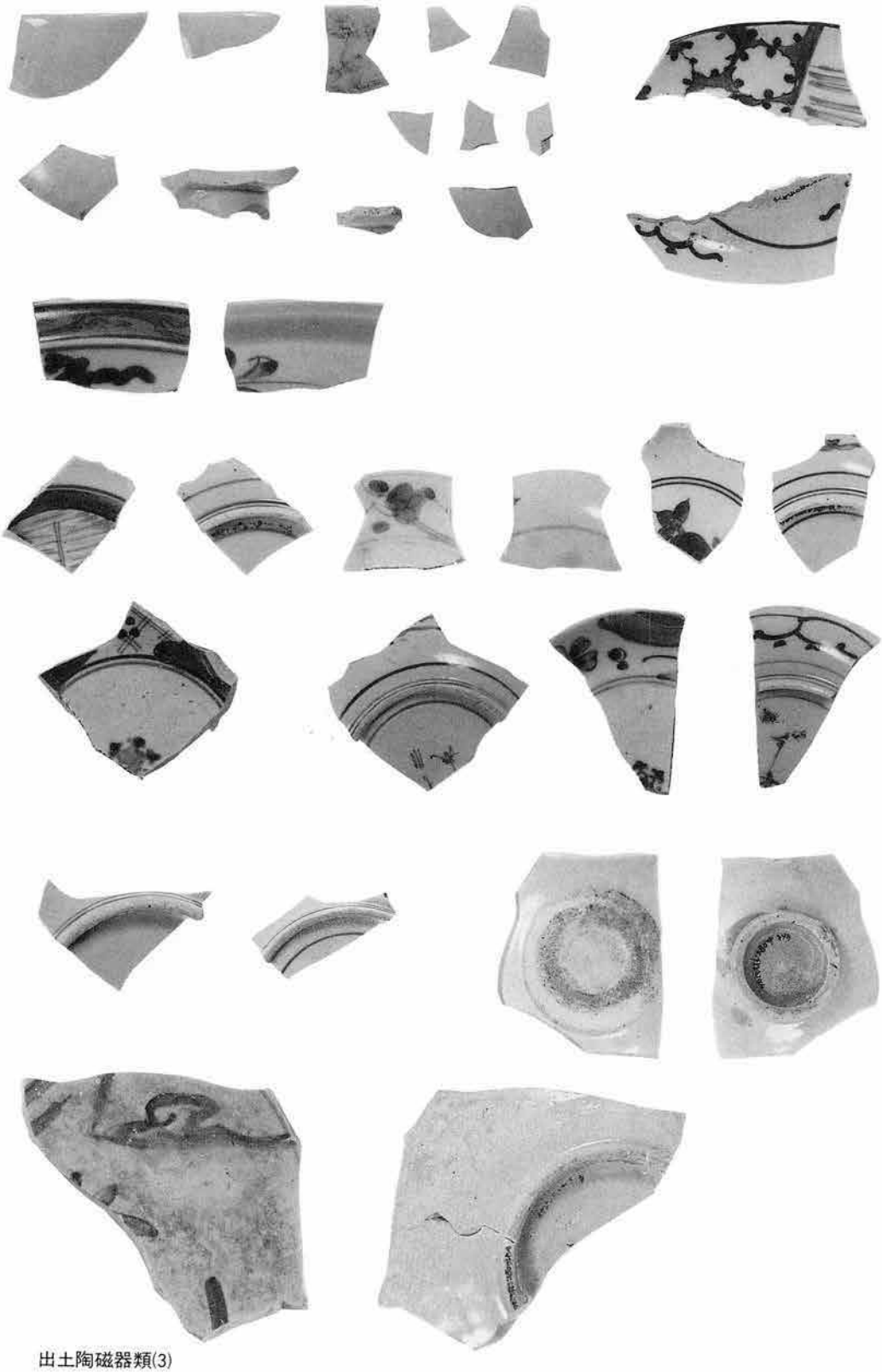


出土陶磁器類(1)

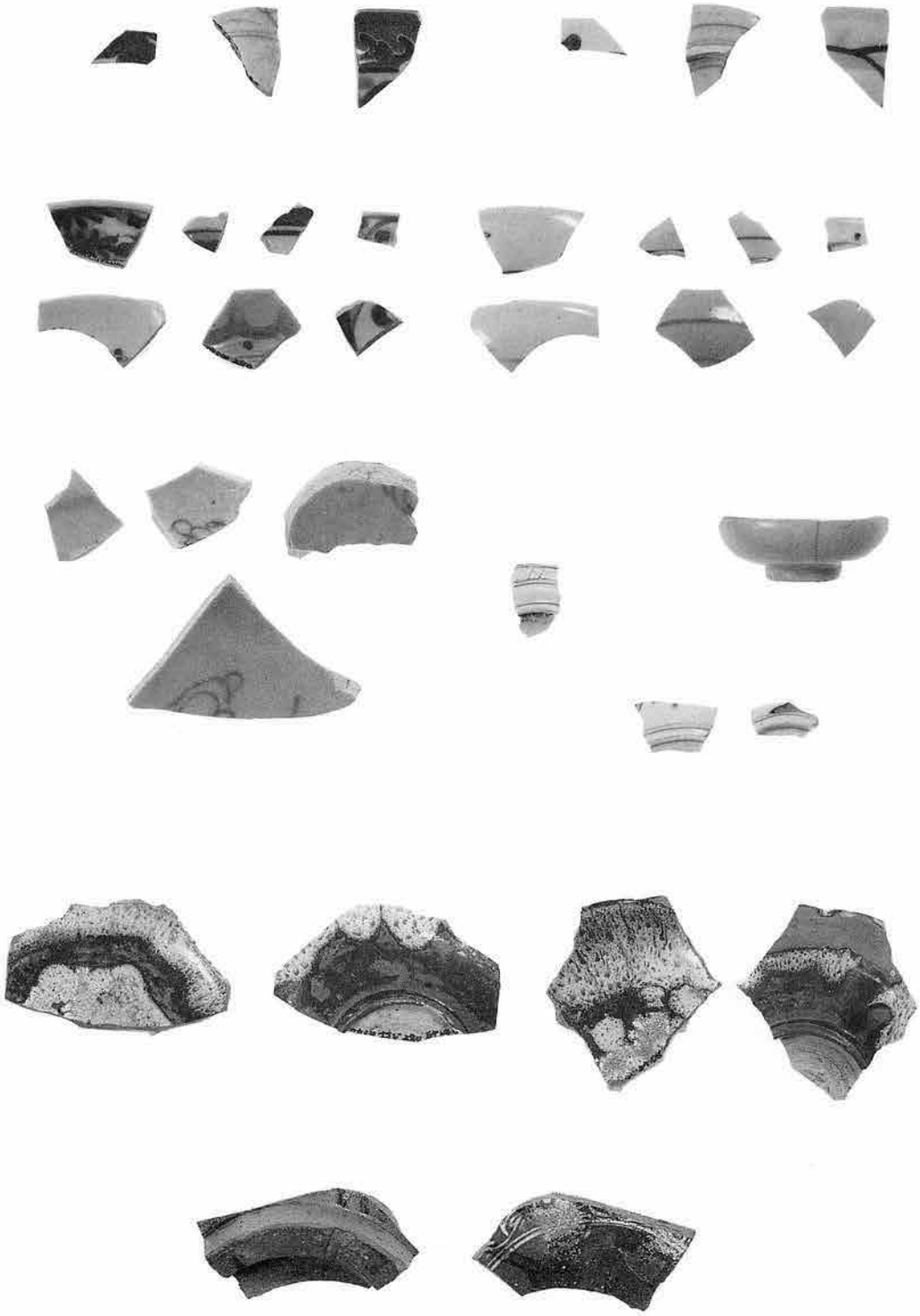


出土陶磁器類(2)

図版4



出土陶磁器類(3)



出土陶磁器類(4)

8. 笹　目　遺　跡

笹目町330番１地点

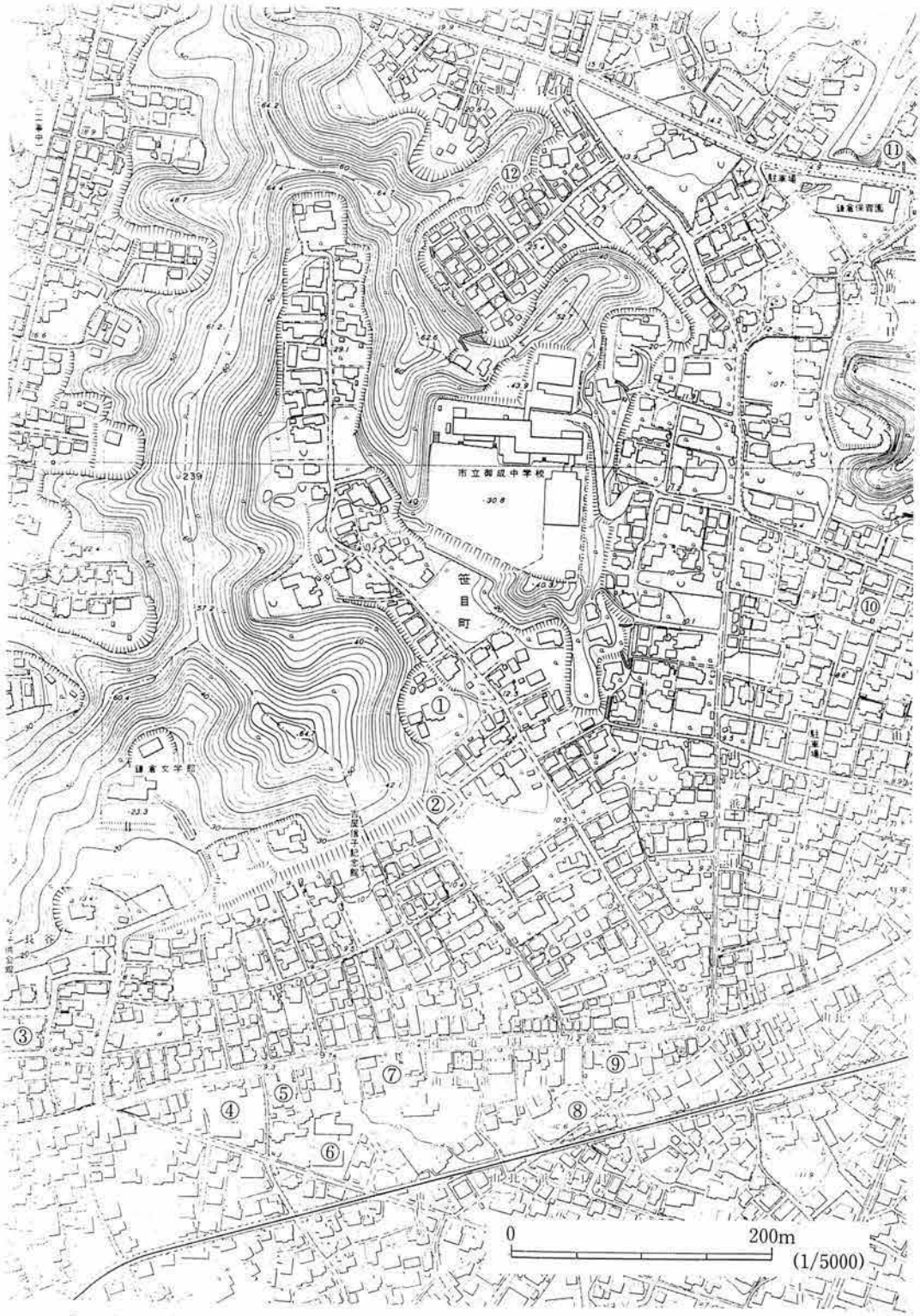
例　言

1．本報は鎌倉市笹目町330番1における共同住宅併用住宅建設に伴う発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成元年1月28日から2月21日までである。

3．また、笹目遺跡発掘調査団（団長大三輪龍彦）により、隣接した地点の発掘調査が昭和63年10月11日から平成元年2月28日まで実施されている。両調査は検出遺構などが不可分の関係にあるが、本報では国庫補助事業分の調査成果を記載し、調査団分の調査成果は略述するに留めた。本遺跡全体の成果は、近く刊行予定の調査団発行の報告書を参照されたい。

4．本報は鎌倉市教育委員会の指示を受けて、大河内勉（笹目遺跡発掘調査団担当者）が執筆、編集した。また溝手美穂・片岡睦枝・三枝みゆき・浦田優子・石田真由美の協力を受けた。



1．笹目遺跡（本調査地点）　2．同（やぐら）　3．長谷諸戸邸遺跡　4～9．長谷小路南遺跡
10．今小路西遺跡　11・12．佐助ヶ谷遺跡

図1　発掘調査地点

第一章　地理的・歴史的環境（図１・２、図版１）

調査地点は鎌倉市笹目町330番１に所在する。鎌倉旧市街の南西方にあたり、旧市街を取り囲む複雑に派生した丘陵と平地の接するところに位置する。JR鎌倉駅より西南西に約1km、由比ヶ浜の海岸線より北方約750mの距離にある。

調査した地点は笹目ヶ谷と呼ばれる支谷の最前部西側に位置する。笹目ヶ谷は途中屈折するが、北から南東方面に伸びている。全長約450m、幅は最奥部で約60m、最前部で約130mを測る。調査地点付近も含め、谷戸内には中世期の所産と思われる尾根裾の掘削、削平面の造成の跡が随所に見られる。谷戸内は現在住宅地になっている。

本調査地点ならびに調査団調査地点は、谷戸面より４～５m程高い平坦面に位置する。標高は海抜約17mである。平坦面の西側は海抜60m前後の南北に伸びる丘陵となっていて、東側斜面はかなりの勾配を有する。調査地点の平坦面は両調査の結果、２本の小さく派生した尾根を切り崩し、その土砂を利用し前面を拡張し、造成されたことがわかった。この平坦面は不等辺四角形を呈し、規模は南北約75m（最長）、東西約45m（同）を測る。本地点は明治初年以降、島津家の別邸地になっている。なお、昭和63年12月～平成元年１月に本地点の南約40ｍの丘陵裾部の発掘調査が実施され、やぐらが２基検出されている。

「笹目（佐々目）」という地名は、『吾妻鏡』や『金沢文庫古文書』中の鎌倉期の文書などに見られ、古くからの名称である（註１）。笹目には遺身院（鶴岡八幡宮別当寺）、長楽寺があったといわれる（註２）。遺身院は聖教類の奥書に名を記したものが多いことから、学問所であったと思われる（註３）。また長楽寺は北条経時が建立し墓所ともなるが、文応元年（1260）に焼失したという（註４）。『鎌倉廃寺事典』所収の「鎌倉廃寺地図」では笹目ヶ谷を遺身院、現在鎌倉文学館のある谷戸を長楽寺の所在地と比定している。

（註）

１．白井永二編『鎌倉事典』「笹目ヶ谷」の項　1976年　東京堂出版
　貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』「遺身院」の項　1980年　有隣堂

２．前掲『鎌倉廃寺事典』「遺身院」・「長楽寺」の項

３．前掲『鎌倉廃寺事典』「はじめに（第三部）」の項

４．前掲『鎌倉廃寺事典』「長楽寺」の項
　「鎌倉攬勝考」巻七　廃寺「長楽寺廃寺」の項　『大日本地誌体系』24　1985年　雄山閣

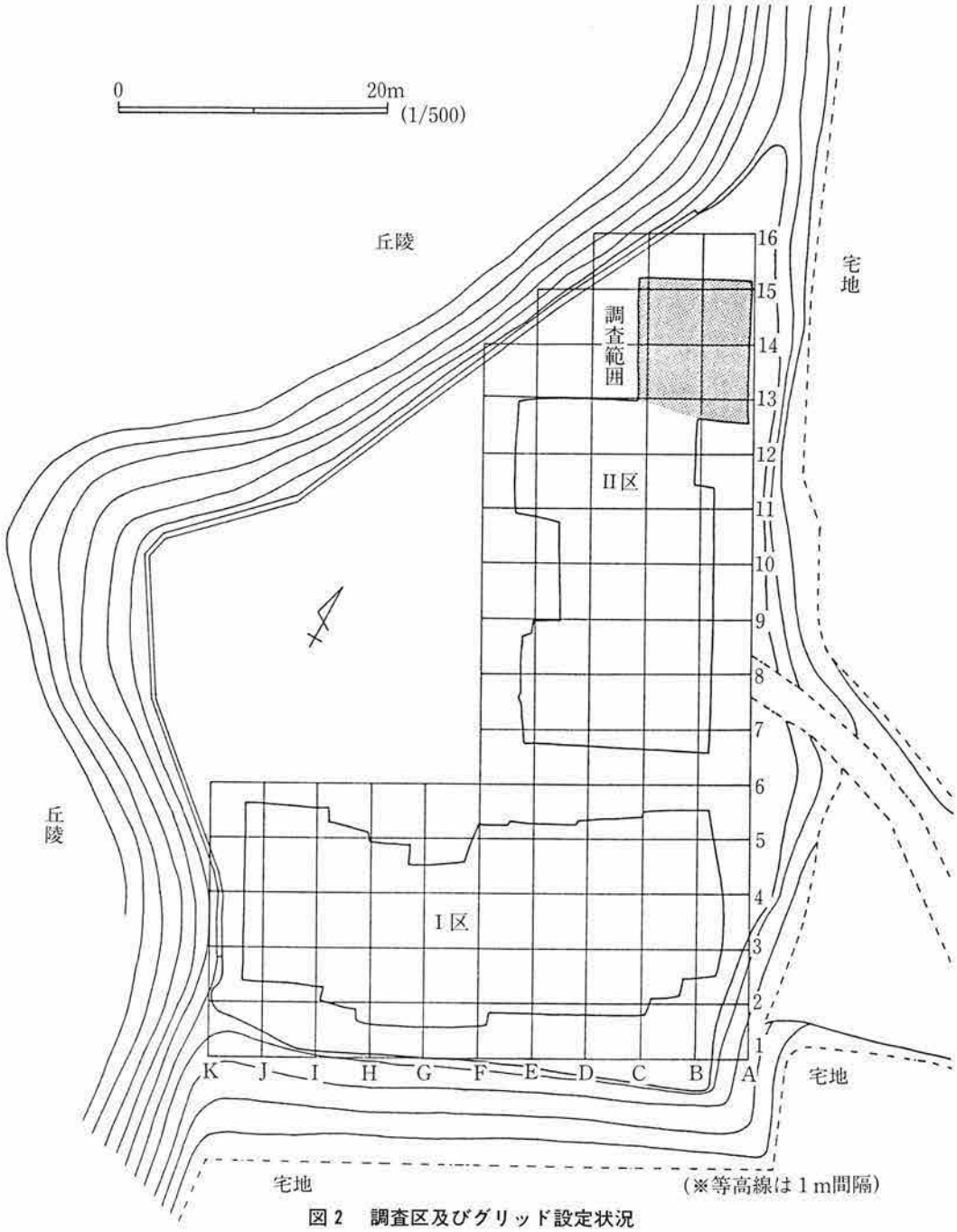


図2　調査区及びグリッド設定状況

第二章　調査の概要（図2、図版1）

発掘調査は鎌倉市教育委員会と笹目遺跡発掘調査団が並行して実施したが、調査方法等は全く同じである。新設される集合住宅・併用住宅は遺跡地の南側と北東側の2ヶ所に跨る構造であり、発

掘調査では南側の調査区をⅠ区、北東側の調査区をⅡ区と呼称した。Ⅱ区の北側隅が本報に掲載した教育委員会実施の調査区、Ⅱ区のその他の範囲とⅠ区全域が調査団実施の調査区である。グリッドは遺跡地の南東隅を基点とし、北北西方向に数字（1～16）、西南西方向にアルファベット（A～K）を付した。グリッド軸は地形に合わせて設定したため、磁北より29度振れている。グリッドは4m方眼で、南東隅の交点を以ってそのグリッドの名称とした。なお、両調査とも調査深度は新設建物基礎工事での根切底である地表下約120cm迄で留め、それ以下は必要に応じトレンチを設定し調査した。

調査団の発掘調査では、Ⅰ区で2面以上の遺構面、Ⅱ区で4面以上の遺構面が検出され、両地区とも東側で地業による敷地の拡張が見られた。Ⅰ区のEライン付近以西、Ⅱ区のC・D-11・12グリッド付近では下面で岩盤削平面が現われており、遺跡地の平坦面造成以前はそれぞれ、そのあたりまで小さな尾根が伸びていたものと思われる。Ⅰ区では礎石建物址、掘立柱建物址、布掘り柵列、玉石敷、かわらけ溜、土壙、溝などが、Ⅱ区では基壇・雨落溝を有する礎石建物址、方形竪穴遺構、玉石敷、土壙、溝、畝状遺構、埋納遺構、炉状遺構などが各面から検出された。

Ⅱ区では第2面期に8及びDライン付近より北東側で掘り下げが行なわれ、第2面より2m弱下に平坦面が造成されている。この平坦面はおそらく、Ⅱ区北東側の現在宅地になっている一段低い面に相当するものと思われる。しかし、後にこの平坦面は西側から徐々に地業され埋め立てられ、近世までには現在の地形が形成された。調査では前後の時期を含め10期に亘る地業・埋め立てが確認された。うち9期が中世、1期が近世の所産である。本報に掲載した地区では、そのうち4期の地業・埋め立て及びそれに伴う石垣が検出された。Ⅱ区の第1面は中世期の地業・埋め立ての際の客土の上面を主に利用している。

第三章　検出遺構

本調査では遺跡地の北端部が対象となった。調査区は長方形を呈し、南北約10m、東西約8m、面積約80m²である。グリッド表示ではA～C-12～15グリッドが相当する。下水管埋設溝や試掘壙などがあり、一部撹乱されている。

調査ではまず第1面までの表土を重機で鋤き取り、それ以下は手掘りの作業を行なった。第1面以下には敷地を拡張（計4期）した際の地業（埋め立て）土が堆積していて、その下面に遺構面が存在するものと思われるが、調査限界深度が新設建物根切底の地表下約120cmのため、北側に設定したトレンチ部分も含め、各地業土の途中までしか掘り下げなかった。そのため本調査区では下面の遺構面の存在は確認していない。

1．第1面（図3、図版2-上）

第1面は現地表下15～40cmで検出された。重機での表土剝ぎ取りの際、一部掘り過ぎてしまっている。この面は各地業土の上面が生活面となっているが、明瞭なものではない。遺跡地の縁辺に位

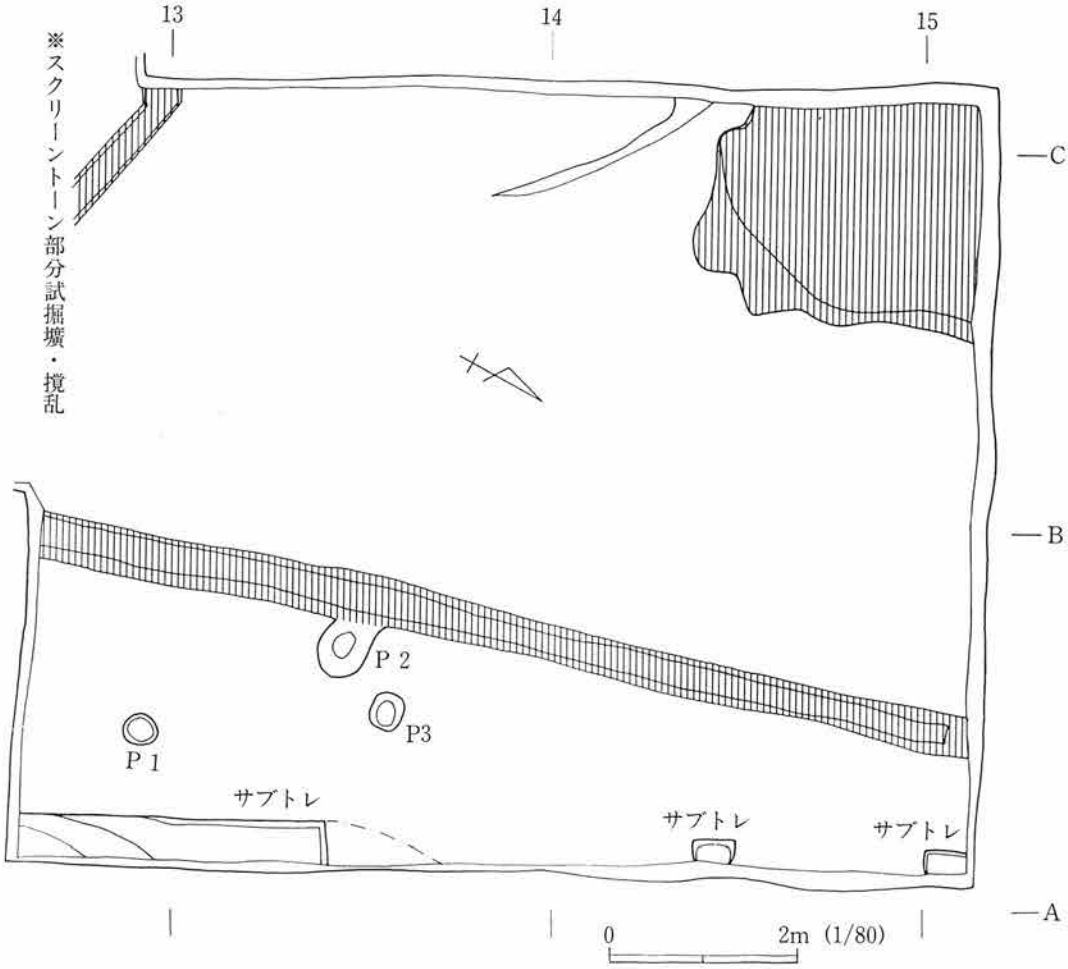


図 3　第 1 面平面図

置するためか、遺構も浅いピットが 3 口検出されたのみである。各ピットの大きさはP 1 が径38×34cm、深さ10cm、P 2 が径70×50cm、深さ24cm、P 3 が径40×34cm、深さ13cmである。調査区東隅で近世の地業土（灰褐色土）が一部検出されている。そのため、中世の最終時期では調査区東壁あたりが遺跡地の東側の境界であろう。現在は約 2 m東側に位置する。

2．新設建物根切底での状況（図 4 ・ 5、図版 2 -下・ 3）

遺跡地の東縁部を東側に拡張した際の地業（埋め立て）及びそれに伴う石垣が検出されている。本調査区では 4 時期の地業が確認された。石垣はそのうち 2 時期に見られた。地業及び石垣の番号は調査団の調査区と併せて、新しい時期のものから通しで付している。本調査区では地業 4 ・ 5 ・ 7 ・ 8、石垣 3 ・ 4 が検出された。石垣 3 ・ 4 はそれぞれ地業 5 ・ 7 に伴うものである。すべて中世期の所産である。調査区の西端で一部岩盤が露出しているが、もともと尾根はそのあたりまでせり出していたのであろう。調査区北壁際に50cm程の幅のトレンチを設け、根切底より約60cm下まで

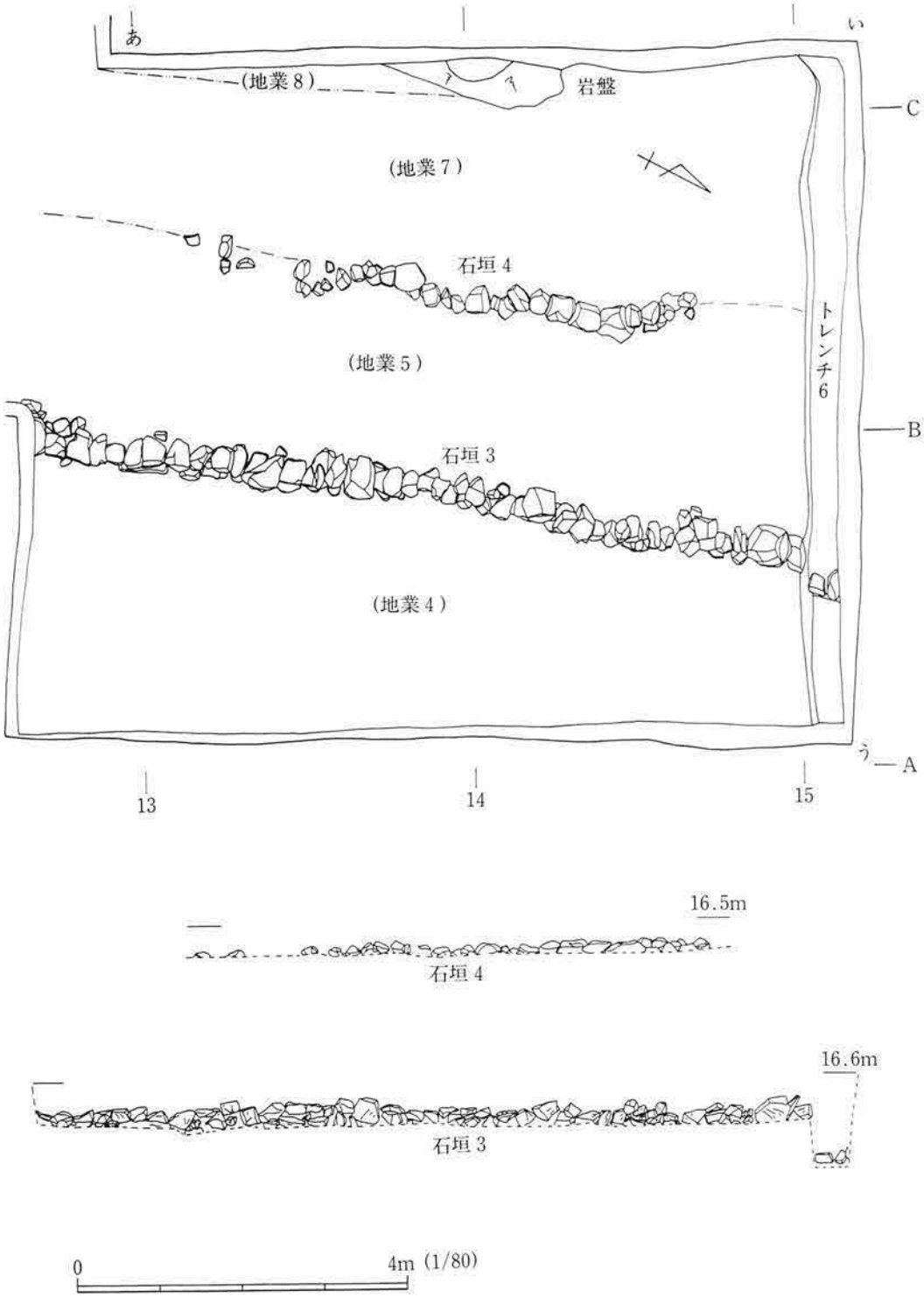
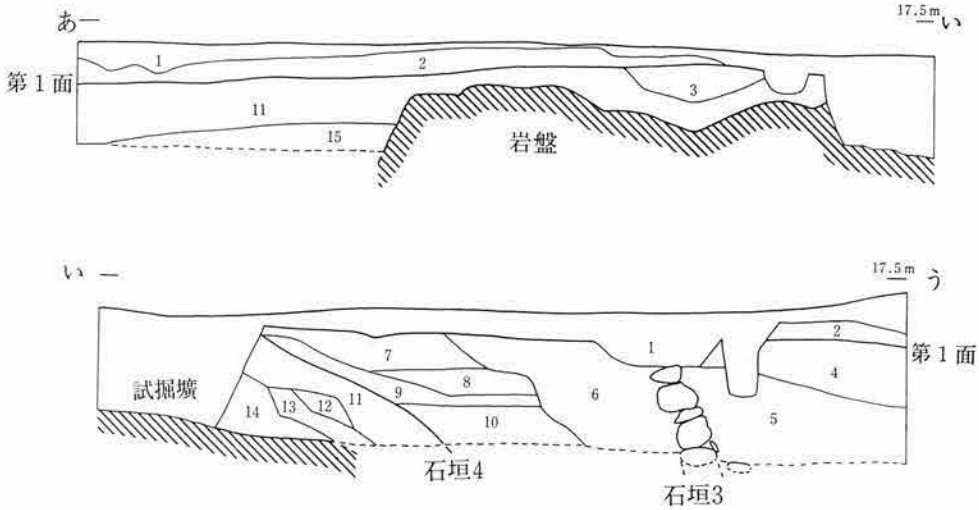


図4　新設建物根切底での平面図・石垣立面図



1．表土及び現代の攪乱層
2．灰褐色土。
3．暗褐色土。2～10cmの土丹粒・ブロック含む。
4．灰黄褐色土。1～15cmの土丹粒・ブロック多量に含む。
5．黒褐色土。1～10cmの土丹粒・ブロック多く含む。
6．灰黄褐色土。1～10cmの土丹粒・ブロック多量に含む。しまり悪い。
7．灰黄褐色土。1～10cmの土丹粒・ブロック多量に含む。しまり悪い。
8．灰黄褐色土（やや暗い）。1～10cmの土丹粒・ブロック多量に含む。しまり悪い。
9．灰褐色土。1～10cmの土丹粒・ブロック多量に含む。しまり悪い。
10．灰黄褐色土。1～10cmの土丹粒・ブロック多量に含む。しまり悪い。
11．暗褐色土。1～10cmの土丹粒・ブロック・黒色土粒子含む。
12．暗褐色土。5～10cmの土丹ブロック・黒色土粒子含む。
13．灰黄褐色土。2～5cmの土丹粒・ブロック含む。
14．3～10cmの土丹ブロック層。
15．灰褐色土。1cm程の土丹粒含む。

0　3m（1/80）

4・5＝地業4。　6～10＝地業5。　11～14＝地業7。　15＝地業8。

図5　調査区壁セクション図

掘り下げ、各地業土の堆積状態を確認した。

地業4

地業4は調査区の東側⅓程を占める。地業5に伴う石垣3を埋めて、その東側を地業・拡張している。南北方向に細長く、南側の調査団調査区でも検出されている。第1面調査時に東側の際が一部検出されている。幅2.4～2.9m（本調査区内）、長さは調査団調査区も含めると22mを測るが、さらに北側の調査区外に伸びている。調査団調査区内の本遺構の南面には石垣が築かれているが、東面はほとんど検出できなかったため、石垣の有無は明らかでない。地業土は灰黄褐色土・黒褐色土などで、径1～15cm程の土丹（破砕した凝灰質泥岩）の粒子・ブロックを多量に含む。非常に堅くしまっている。下面まで全掘しておらず、下層の土層状態は不明。

地業5

地業5と石垣3は同時期の遺構である。地業5の東面に石垣3が築かれている。地業5は調査区の中央⅓程を占める。地業7に伴う石垣4を埋めて、その東側を地業・拡張している。地業4と同じく南北方向に細長く、南側の調査団調査区でも検出されている。幅は本調査区内で2.5m前後（石垣部分含む）、調査団調査区の南端付近ではやや狭くなる。長さは調査団調査区も含めると22.4m確

認されたが、さらに北側の調査区外にも伸びている。地業土は灰黄褐色土・灰褐色土で、径１～10cmの土丹粒・ブロックを多量に含む。土丹粒・ブロックを多く含んでいるため、しまりは悪いが堅い。石垣３の裏側は土丹粒・ブロックを特に多く含む。下面まで全掘しておらず、下層の土層状態は不明。

地業５に伴う石垣が東面（石垣３）と南面（調査団調査区内-石垣２）が検出されている。石垣３は全面にわたり良好に遺存している。石材には径15～40cm程の調整していない土丹を使用している。石材は基本的に縦位置に置かれ、石面を外面（東面）で合わせている。いわゆる「野面積」である。調査区北壁セクションの観察では、上下５段の石積みが見られるが、さらに下部にも続いているものと思われる。勾配は約70度である。

地業７

地業７と石垣４は同時期のものである。本調査区では地業７の東面に石垣４が築かれている。地業７は調査区の西側⅓程を占める。調査区西端で一部検出されている地業８及び岩盤の東側を埋めて、地業・拡張している。地業４・５と同じく南北方向に細長く、南側の調査団調査区でも検出されている。幅は２m前後（本調査区内）、長さは22.3m（調査団調査区含む）確認されたが、地業４・５と同じくさらに北側の調査区外にも伸びている。地業土は暗褐色土・灰黄褐色土で、径１～10cmの土丹粒・ブロックを多く含み、部分的に土丹粒・ブロックの集積層が見られる。上層は堅く締まっている。下層の土層状態は不明。

石垣４は地業７の東面に間断なく築かれていたと思われるが、石垣３に比べ遺存状態が悪く、失われている個所がある。石垣の用材、築造方法などは石垣３と類似するが、用材は石垣３に比べ小さく、また築き方もやや粗い。南側の調査団調査区に設けたサブトレンチでは、上下４～５段の石積みが見られたが、下面まで完掘しておらず、全体の規模は不明。勾配は約60度であった。

地業８

地業８は本調査区内では西端で一部検出されたのみである。本調査区北西部に見られる岩盤はさらに南に伸びているが、その岩盤が落ち込む際（東側）を埋めて、地業している。南北方向に細長く伸びるが、南端（調査団調査区内）で屈折している。調査団調査区では幅１m前後、長さは本調査区も含めて22.8mを測る。本調査区内では地業土は灰褐色土で、径１cm程の土丹粒を含んでいる。調査団調査区も含め、掘り下げたレベル迄では本遺構に伴う石垣は検出されていない。

第四章　出土遺物（図６、図版４）

本報では地業４・５・７の各地業土中より出土した遺物を掲載した。それぞれ本調査区内での遺物出土量が少なく、また調査団調査と並行して調査を実施したため、両調査での出土遺物は一括して取り上げており、ここでは同一遺構の出土遺物は調査団調査分も含めて掲載した。また、第１面上、地業７の一部、地業８、金属製品等の出土遺物は除外した。

地業4

1は瓦質の手焙りである。復元口径39.6cm、器高11.0cm、復元底径30.8cm。体部は内彎し、口縁上端はほぼ水平に整形されている。口縁上端・体部外面は横位の篦磨き、体部内面は横なでが施される。外面の体部上位に2条の沈線及び亀甲文・丸文の連続押印が見られる。器表は灰色、胎土は灰白色で微砂粒を含んでいる。体部外面中位～外底面は、器表の剥離が激しい。おそらく鍋として使用され、火熱により剥離したものと思われる。

2はかわらけ。口径11.8cm、器高3.4cm、底径7.0cm。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反気味である。轆轤成形で外底面に回転糸切り痕・スノコ状圧痕が残る。内底面には横位の指頭なでが見られる。

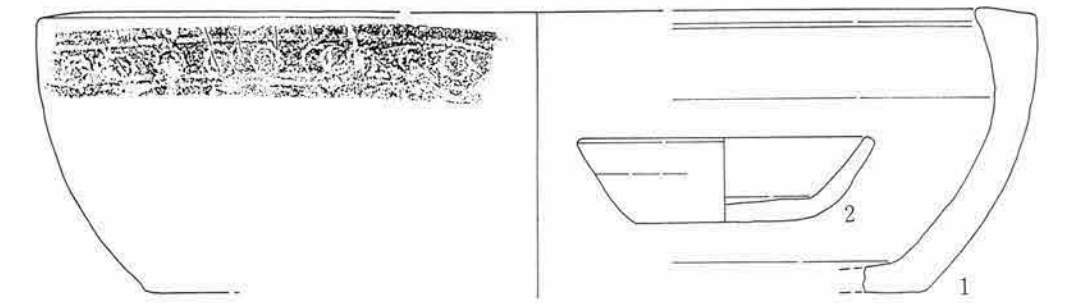
地業5

3・4は舶載磁器。3は龍泉窯系の鎬蓮弁文碗で、体部下半の小片である。蓮弁の幅は比較的狭い。釉は深緑色。胎土は灰色で堅緻。内面には擦痕が多数見られる。4は白磁口兀皿の口縁～体部片。体部は外傾し、口縁部でやや外反する。釉は乳白色。胎土はほぼ白色で堅緻。黒色微砂粒を含んでいる。内面に横方向の擦痕が見られる。

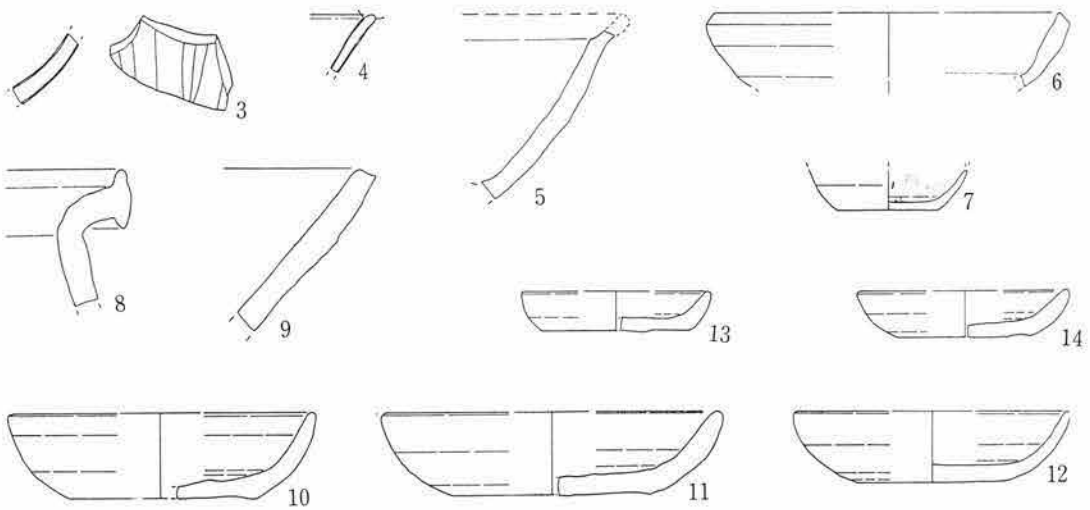
5～7は瀬戸の製品。5は折縁皿の体部片。口縁部は斜め上方に折り曲げられるが、欠失している。体部は緩やかに内彎する。釉は灰釉と思われるが、内外面とも変質して白色を呈する。胎土は淡褐色で精緻。6は卸し皿の口縁～体部片。復元口径14.4cm。口縁部は肥厚で、端部は角ばる。内外面とも灰釉が薄く施されるが、変質し白色を呈する。胎土は淡褐色で精緻。7は入子片。口縁部を欠失している。底径4.0cm。丸形を呈する。体部内外面は轆轤での横なで、内外面はかわらけに見られるような横位の指頭なで、外底面は篦による調整が行なわれる。無施釉だが、わずかに降灰が見られる。胎土は灰白色で精緻。内面及び体部の割れ口に紅が付着しており、破損後も紅皿として利用している。

8・9は常滑の製品。8は甕の口縁～頸部片。頸部は内傾し直線的に立ち上がり、直角近く外反し口縁部となる。口縁端部の縁帯は上下に5㎜程引き出され形作られる。縁帯の幅は2.2cm、頸部より1.6cm離れている。全体に横なでが施されている。器表は焦げ茶色。胎土は灰色で白色砂粒を含むが堅緻。9は捏鉢の口縁～体部片。直線的に外傾する。口縁端部は角ばるが、中央がややくぼむ。内面及び外面口縁部下まで横なで、体部外面は縦位のなでが施される。器表・胎土とも淡褐色を呈す。胎土は白色・黒色の微砂粒を含むが堅緻。内面下部は使用による摩滅が著しい。

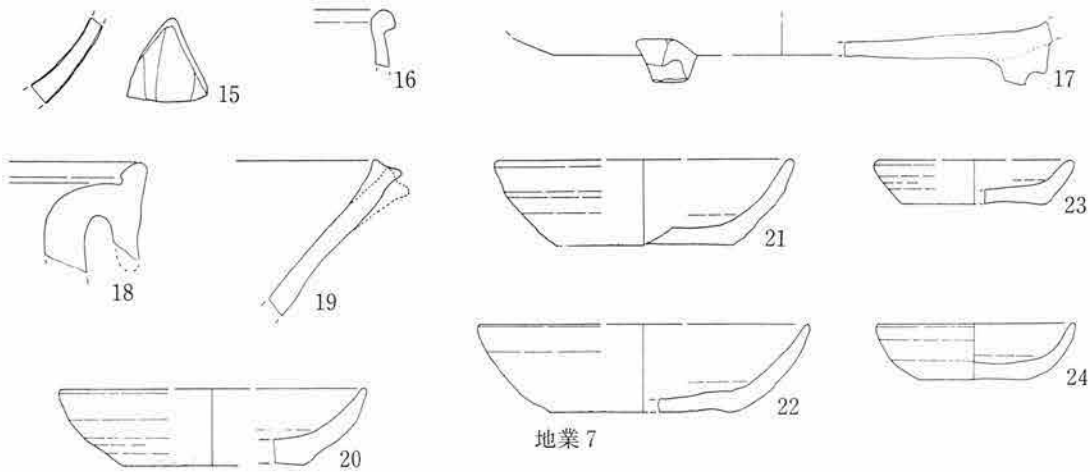
10～14はかわらけ。すべて轆轤成形で、10・11は大型、12が中型、13・14が小型の範疇に入る。10は復元口径12.2cm、器高3.3cm、復元底径7.2cm。体部は内彎し、外面に2条の弱い稜が巡る。11は復元口径13.5cm、器高3.2cm、底径7.7cm。体部は比較的肥厚で、内彎して立ち上がる。外面に1条弱い稜が巡る。12は復元口径11.1cm、器高2.8cm、底径5.8cm。体部は比較的薄く、側面観は丸みを有する。胎土はやや粉質である。13は口径7.5cm、器高1.5cm、底径5.7cm。口縁部は短く、斜めに鋭く立ち上がる。14は小型皿の中では大振りである。復元口径8.4cm、器高1.8cm、復元底径5.2cm。体部はやや



地業 4



地業 5



地業 7

図 6　出土遺物　0　10cm (1/3)

肥厚で内彎気味。外面体部下位に弱い稜が巡る。

地業7

15・16は舶載陶磁器。15は龍泉窯系の鎬蓮弁文碗で、体部下半の小片である。蓮弁の幅は比較的広い。内面にも箆描きの文様が見られる。釉は厚く深緑色を呈する。胎土は灰白色で堅緻。16は緑釉盤の口縁部片である。口端部は玉縁状を呈する。体部の器壁は薄い。釉は変質が著しく、銀色の光沢を有する。胎土は灰色ないし灰白色で、黒色微砂粒を多く含みやや粗い。

17は瀬戸の香炉あるいは折縁皿の底部片である。粘土を指で捏ねて、粗略な足が付けられている。復元底径17.3cm。外底面中央に糸切り痕が一部残るが、外周部・体部下位は轆轤による箆削りが施される。釉は内面に刷毛塗りで灰釉が施されるが、部分的に白色ないし灰褐色に変質している。内底面に目痕が見られる。胎土は灰色で堅緻。

18・19は常滑の製品。18は甕の口縁～頸部片。頸部は直立し、口縁部は水平近く折り曲がる。縁帯は「N」字状に折り返されて成形される。幅は広い。縁帯と頸部は1.4cm程の間隔がある。全体に横なでが施される。器表は茶色ないし焦げ茶色。胎土は淡褐色で白色微砂粒を含むが堅緻。19は捏鉢の口縁～体部片。直線的に外傾する。片口が見られる。口縁端部は角張るが、中央がややくぼむ。口縁部内外面は横なでが施される。内面は灰色、外面は淡褐色を呈する。胎土には白色微砂粒を含んでいるが堅緻。

21～24はかわらけ。すべて轆轤成形で20～22が大型、23・24が小型。20は復元口径12.2cm、器高3.0cm、復元底径7.2cm。体部外面には轆轤挽きの際の細かな凹凸が明瞭に残り、口縁部下に稜を持つ。体部が比較的外に開く器形である。器壁は厚い。21は復元口径12.0cm、器高3.4cm、底径7.0cm。口縁部下に稜が巡る。22は復元口径13.1cm、器高3.5cm、復元底径7.3cm。体部はやや長く、開き気味に立ち上がる。体部外面に稜は見られない。23は復元口径8.0cm、器高1.8cm、復元底径5.8cm。口縁部は肥厚で短く、直線的である。24は口径7.9cm、器高2.2cm、底径4.5cm。体部は比較的薄く、内彎する。外面に弱い稜が2条巡る。

第五章　まとめ

本調査は約75m（最長）×約45m（同）の広さを有する遺跡地の北東隅の一角（約80m²）を対象に実施した。対象面積は同時に実施された調査団の1/10程度しかなく、しかも周縁部のため本調査成果のみで本遺跡のまとめを記すのは不可能である。そのためここでは、本調査で検出された遺構・遺物についての若干のまとめをするに留める。

本調査で検出された遺構は、東縁部の敷地拡張に伴う地業（4時期）及び石垣（2時期）、各地業土上面の生活面（第1面）である。第1面ではほとんど遺構は検出されなかった。各地業に使われた客土は、土丹ブロックなどが多量に含まれることから、西側の丘陵の一部を切り崩して用いられたと思われるが、遺物が混入していることから、同時に平坦面の整地も行なわれ、その廃土も含ま

れている可能性が高い。石垣の用材は土丹であるが、これは各地業土に含まれるものと同じものである。石垣の用材も丘稜を切り崩した際に生じたものを利用したのであろう。

地業（埋め立て）の回数は、調査団調査区検出分も加えると10期に及ぶ。ただしそれぞれの地業の規模は小さい。地業の行なわれた年代は、最も新しいものは近世であるが、他はすべて中世の所産である。今回検出された各地業は、地業４が15世紀以降、地業５・７が14世紀以降と考えられるが、出土遺物自体が原位置を保っているものではなく、土砂の移動に伴って運ばれたもののため、年代は確定しがたい。今後、年代やそれ以外の事項について調査団検出分との比較・検討が必要である。

巻頭の口絵１-２に参考資料として掲載した遺物は、調査団調査区のII区第１面C-10グリッドで検出された埋納遺構の出土品（一部）である。本遺構には白磁皿１点、白磁水注１点、水注の蓋１点、天目茶碗１点、銅製銚子１点、釘数点が納められていた。

図版 1

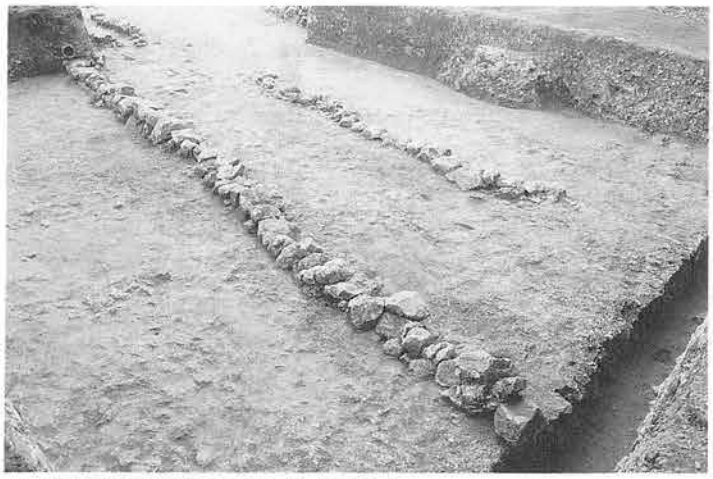
遺跡現況

遺跡空撮(調査範囲は最下部)

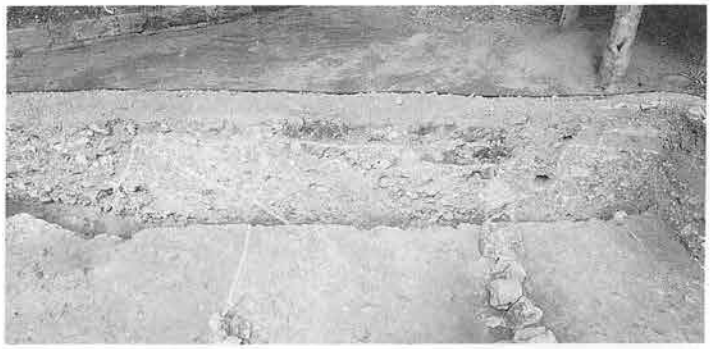
図版 2

1.第1面

2.新設建物根切底での状況



1.新設建物根切底での石垣検出状況



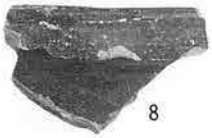
2.調査区北壁セクション

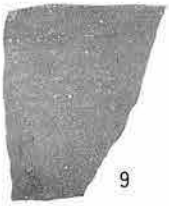
3.同上(石垣部分)

図版 4

出土遺物

地業 4





地業 5

地業 7

9．若宮大路周辺遺跡群

小町二丁目５番23外地点

例　言

1．本報は、鎌倉市小町二丁目５番23外地点における店舗併用住宅建設に伴う発掘調査の報告である。

2．本報の執筆は福田　誠が、図版作成には福田、小宮恵美子があたり福田がこれらを編集した。

3．本報で使用した写真の内遺構全景を木村美代治が、個別遺構は福田が分担し、遺物は木村が撮影した。

4．発掘調査は国庫複助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。

調査体制は以下の通りである。

担　当　者　福田　誠（鎌倉市教育委員会嘱託）

調　査　員　原　廣志、佐藤　泉、木村美代治

調査複助員　小宮恵美子、中島絹世

作　業　員　㈳シルバー人材センター鎌倉高齢者事業団

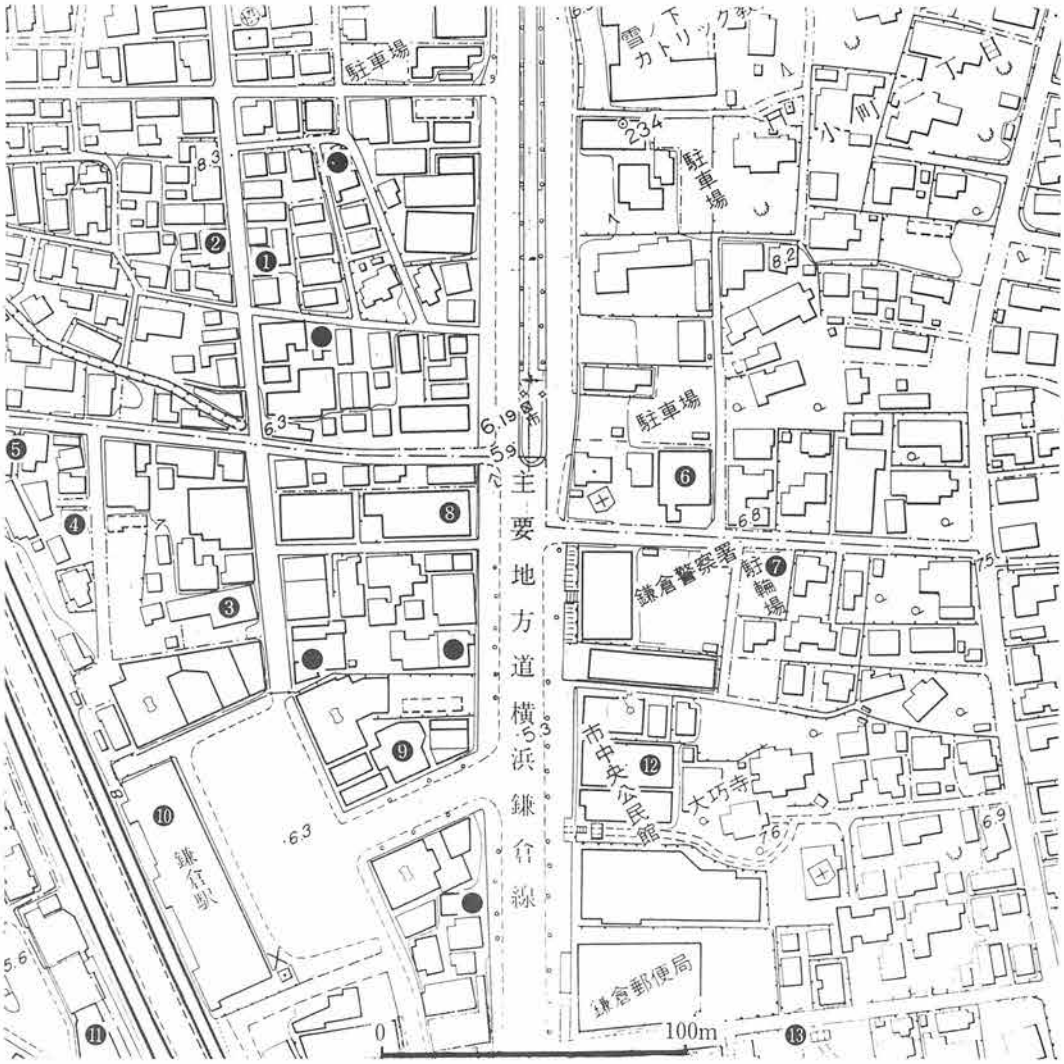


図1　周辺の主な調査地点

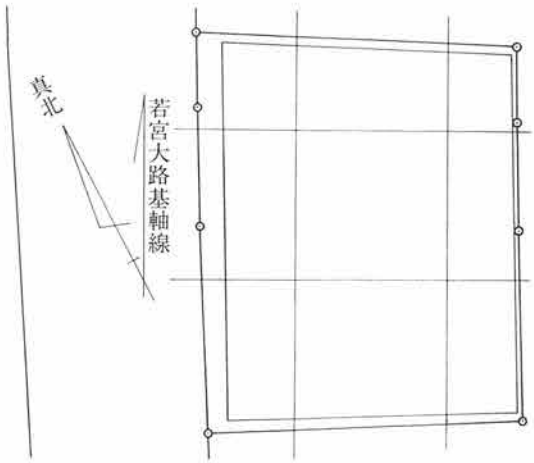


図2　調査区設定図

①小町二丁目5番23外地点（今回調査地）
②小町二丁目12番18地点
③小町一丁目106番地点
④小町一丁目116番地点
⑤小町一丁目116番3地点
⑥小町二丁目345番2地点
⑦大巧寺旧境内
⑧二ノ島居西遺跡
⑨小町一丁目75番1地点
⑩蔵屋敷遺跡
⑪蔵屋敷東遺跡
⑫小町一丁目309番5地点
⑬本覚寺旧境内
●その他の調査地点

周辺の主な調査地点名

第一章　調査の概要と経過

調査面積は建物建築範囲の約77㎡である。地表下約60cmまで近現代の客土及び攪乱が激しいために、この深度まで重機を使い残土は場外に搬出した。

調査に当たり若宮大路の中軸線を基軸として、4m方眼でグリットを設定した。南北の基軸である若宮大路の方位と真北とのはずれはN-27.5°-Eである。調査地点は二ノ鳥居より北に36m、西に88m地点に位置する。調査は4月21日より掘削を開始して6月2日に図面及び機材を撤収して終了した。

第二章　遺構と遺物

層序

現地表の標高は約7.5mである。地表下約60mまで近現代の客土による整地層がある。地表下約30cmの所で中世の生活面（第1面）をわずかに検出したがほとんどが攪乱面のため、調査は第2面から行った。中世の基盤層である黒色粘質土層は地表から約1.2m下で検出された。

第2面までの遺物（図4、図版）

舶載陶磁器

1～4までは青磁、5と6は青白磁、7は白磁である。

1は無文の青磁壺の蓋である。釉は青緑色を呈する。2は酒会壺底部細片である。釉は青緑色で、内外面共に厚くかかる。3、4は鎬蓮弁文碗である。細片のため口径の復元は出来ない。釉は青水色を呈する。5は青白磁小壺で体部には蓮弁が浮き彫りにされる。口縁の形から香炉の可能性もある。6は梅瓶底部片である。釉は薄水色である。体部の開きが大きいので水注の可能性もある。7は白磁口兀皿である。口径9.8cm、器高2.6cmである。釉は暗い灰褐色を呈する。

常滑

8は常滑の甕で、口径38cm、器高68cmである。体部最大径は器高の下から3分の2の所にある。口縁はN字状を呈する。

かわらけ

9～21までは口径7～8cmの小型品である。すべて底部に糸切り痕と、スノコ痕を残すロクロ成形品である。9、11、12、14、16～18は壁が薄く体部は器高があり内湾気味に立ち上がっている。22～34は口径10.8cm～13cmの大型品のかわらけである。器壁が薄く体部が内湾気味に立ち上がるものとやや厚手の器壁ですんぐりしたものとが見られる。

この1面までの遺物は多少攪乱による混在が見られるが概ね鎌倉第V期以降のものと思われる。

第2面の遺構（図3-1）

第2面は基本的に土丹による地業面である。部分的に上面に海砂を使って張り増している。地業

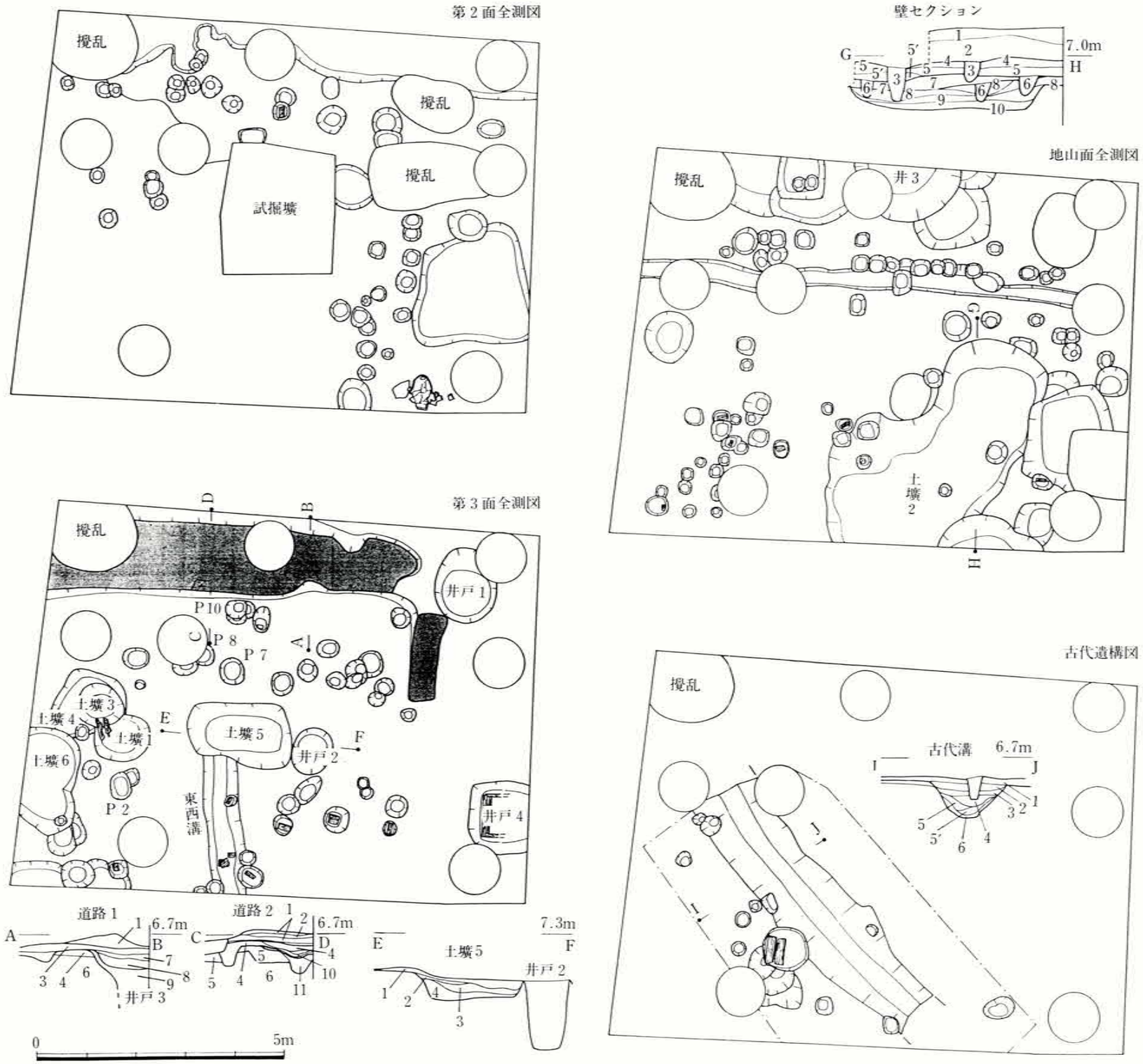


図3　遺構全測図

第3面遺構土層図
道路1・2

1　土丹と黒色粘質土の版築層
2　灰色粘質土
3　黒褐色粘質土（砂・炭化物を多量に含む）
4　黒灰褐色粘質土
5　黒灰褐色粘質土（土丹、炭を含む）
6　中世地山　黒灰褐色粘質土（かたくしまる）
7　黒褐色砂質土
8　茶褐色粘質土
9　明茶褐色粘質土
10　黒灰色砂質土
11　黄茶褐色土

土壙5

1　土丹地業層
2　黄茶褐色弱粘質土（マグソ土）
3　灰褐色土
4　黄茶褐色弱粘質土（有機物を多量に含む）

地山面遺構土層図
壁セクション

1　表土（現代盛土）
2　近世客土
3　第2面柱穴
4　土丹地業層
5　灰色粘質土（しまりなく土丹、炭を少量含む）
6　第3面柱穴
7　灰色粘質土（5よりしまり良し）
8　灰褐色弱粘質土
9　黒灰色粘質土
10　黄茶褐色（有機質多量に含む）

古代遺構土層図

1　中世地山、黒灰褐色粘質土
2　黒灰褐色粘質土（土丹粒、褐鉄含む）
3　黒灰色粘質土（しまりがない）
4　黒灰色粘質土（3とくらべるとしまり粘質が強い）
5　黒色粘質土（混入物少くない）
5　黒色粘質土（ブロックで地山土含む）
6　黒灰色粘質砂

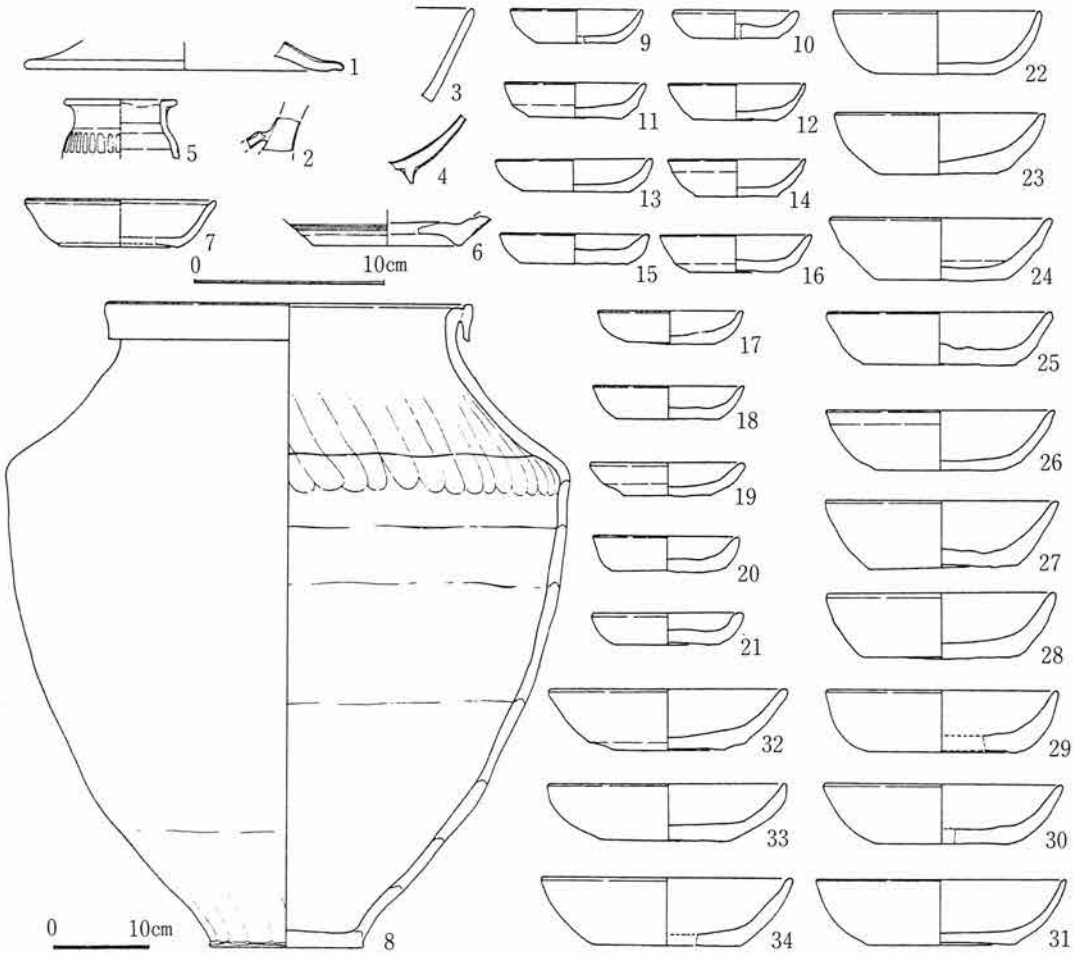


図4　第2面までの遺物

面が残っているのは調査区の南東部だけである。特に調査区の北西部では土丹地業面の下まで攪乱を受けていた。約40穴ほどの柱穴を検出したが規格性などは不明である。

第2面の遺物（図5、図版）

舶載陶磁器

1は同安窯系櫛掻文青磁碗である。口径11.6cm、底径4.5cm、器高4cmで、口径に対し器高が低いために体部の開きが大きい。内面のみに櫛掻文が施される。釉は濁った青白色で、割れ口に麦漆が付着している。漆を接着剤替わりに使い補修したものと思われる。

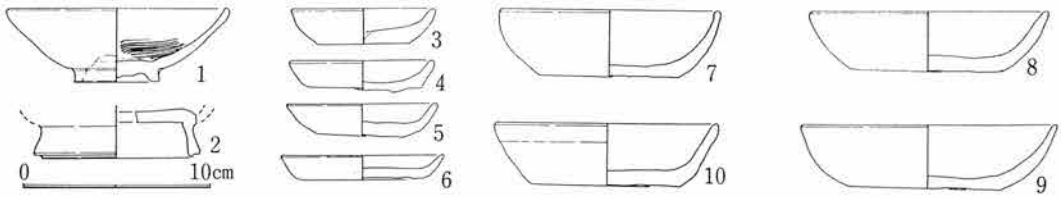


図5　第2面の遺物

瀬戸

壺か高台付きの鉢の底部片である。内底面の隅まで灰が観察出来ることから、壺より鉢状の器形かも知れない。

かわらけ

3～6は口径7.5～8.5cmの小型品である。7から10までは大型品である。7は口径11.4cm、器高3.5cmである。体部が内湾して口径が小さいために深い感じを受ける。8は口径12.5cm、9は13.4cmで、体部はともに内湾しながら立ち上がる。10は口径12.5cmで、体部中程でやや湾曲し軽く陵が付く。1の櫛掻文碗を除き概ね鎌倉第V期の遺物である。遺物は少ない。

第3面の遺構（図3-2）

道路状遺構、柱穴、土壙、溝を検出した。遺構は灰色粘質土層から掘り込まれている。

道路状遺構

調査区の東壁に沿い南北方向ほぼ若宮大路と平行する道路状遺構を検出した。検出したのは、長さ約7m、幅約1.5mの範囲である。比較的細かい土丹を叩き締めて構築している。土丹と土丹の間に細かい粘質土層が観察できることから、少なくとも3回以上の補修が行われていると思われる。

規模からみて表通りなどではなく、建物と建物の間の通路的な道路と思われる。

柱穴

約40穴を検出した。道路状遺構に沿うような方向性がみられるが、柱穴から建物は確認できないが方向性が見られることから柵列のようなものが考えられるか。

土壙・溝

6基検出した内、土壙5は東西溝と関連しているものと思われる。東西溝はこの土壙5につながり、終わってしまう。横にある井戸2の排水施設の可能性も考えられる。

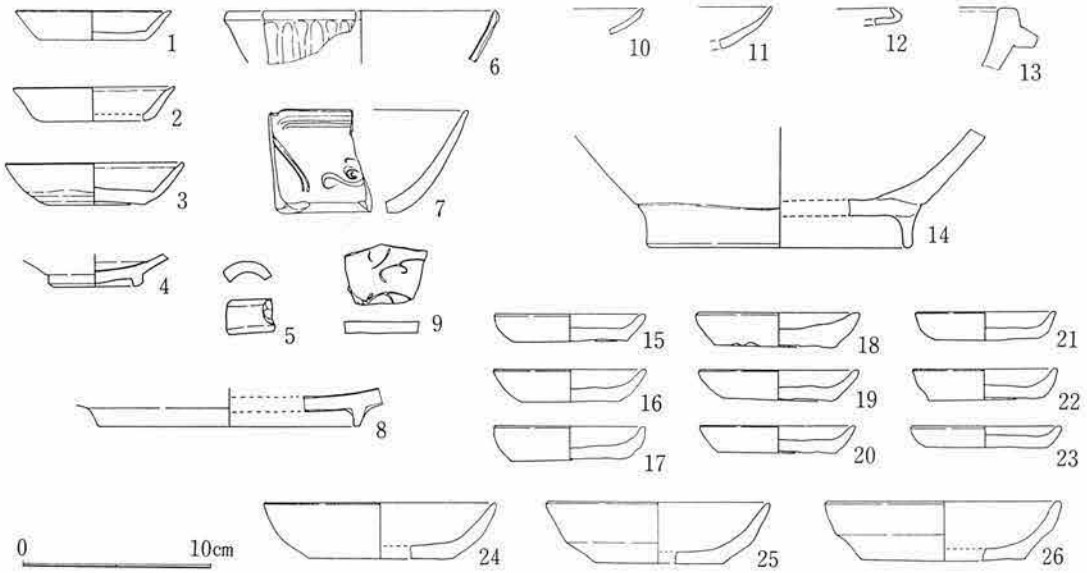


図6　第3面の遺物

第３面の遺物（図６、図版）

舶載陶磁器

１～４は白磁皿である。口径が9.4cmまでの口兀皿である。１、２は底面まで釉がかかる。３は外底面には釉がかけられておらず体部の削りによる調整がよく観察できる。５は白磁四耳壺の耳である。やや青みがかった白色の釉がかかる。６は蓮弁文青磁碗である。やや緑がかった水色の釉が厚くかけられている。７は劃花文青磁碗である。釉は淡黄緑色である。８は青磁盤である。釉は透明感のある淡緑色である。９は二彩大盤である。細片のため大きさなどは不明である。内底面には緑色の釉がかかるが、外底面は施釉されない。

白かわらけ・滑石・捏鉢

10～12までは白かわらけである。10、11は皿、12はコースター状の小皿であるが、細片のため口径などは不明である。13は滑石鍋である。細片のため口径は不明。14は山茶窯系捏鉢である。底径13.5cmで、比較的高い高台が張り付けられている。外面は篦削り、内面は撫でによる調整がなされる。また内面は使用のために摩耗している。胎土は灰色を呈し、多くの砂粒が含まれている。

かわらけ

15～23までは口径7.8cm前後の小型品である。24～26が口径12cm前余の大型品である。いずれも鎌倉Ⅴ期と比べると器高が低くなり、体部外面は湾曲し稜線が入るようになる。

第３面遺構の遺物

井戸の遺物（図７、図版）

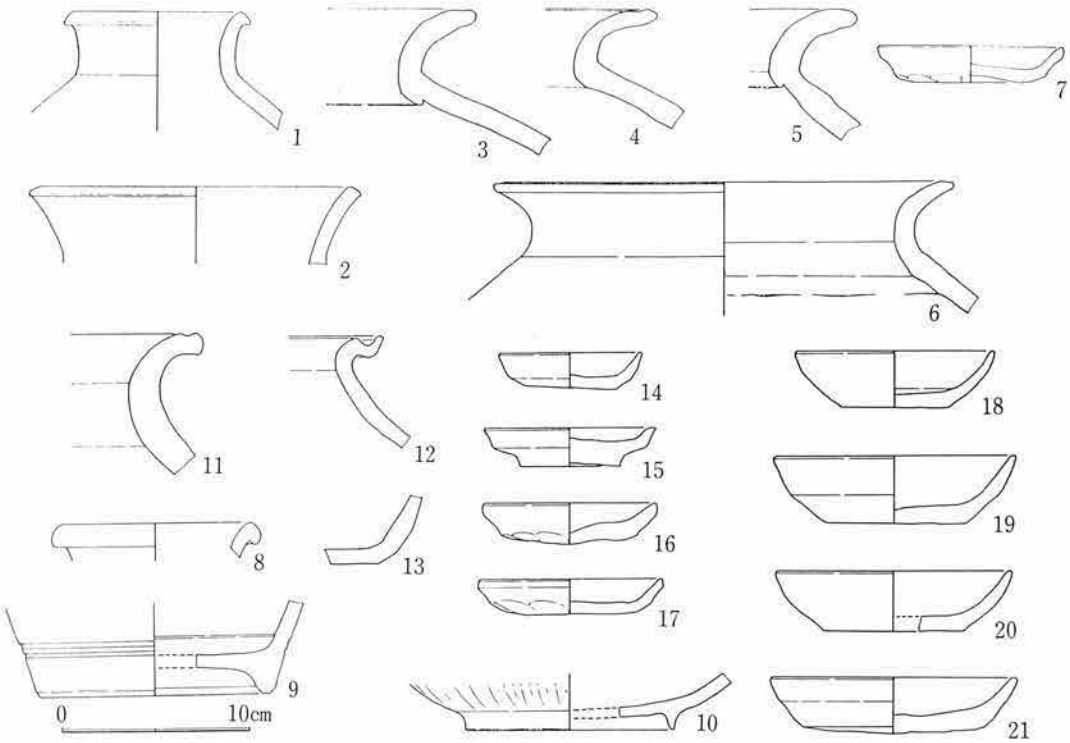


図７　第３面井戸の遺物

1～7までが井戸1、8から20までが井戸4の出土である。

1～6まで渥美の製品である。1の壺は肩の余り張らない器形になるものと思われる。2は比較的大型の壺の口縁部細片である。1、2ともに胎土は暗灰色を呈し素地には砂粒が多くみられる。3～6は甕の口縁部片である。いずれも大きく外反する頸部を持ち口縁端部は砂粒が多くみられる。いずれも口縁部、頸部に刷毛塗りの痕跡を残す。7は手捏ねのかわらけである。

8は白磁四耳壺の口縁部片である。口径10cm、素地は白色を呈し釉は透明である。9は青白磁梅瓶の底部である。底径12cm、外面に2状の沈線が巡る。10は青磁蓮弁文鉢である。底径11cm、釉は青緑色、11、12は常滑甕である。共に口径は不明である。11にくらべ12はやや小型の製品である。11は大きく外反させた頸部を丸く収めて口縁を造る。12は水平まで急激に折り曲げ、端部を上方につまみ上げて口縁を造っている。13は瀬戸の鉢である。外面には篦削りの痕跡を残す。14～17までは、小型のかわらけである。14、15ほ底部に糸切り痕とスノコ痕が残るロクロ成形品である。15は底部が高台風に突出し、体部外面に陵が付くなど古い形態を持つ。16、17は手捏ね成形品である。16に比べ17は器壁が薄く、堅く焼き締まっている。口縁端部の造りも丁寧で古い要素を持つ。18～21までは大型のロクロ成形品である。外面に陵の付く19、21と器壁薄い18、20がある。

井戸1は渥美の形態、かわらけから、鎌倉第Ⅲ期前半に属すると思われる。井戸4は2時期の井

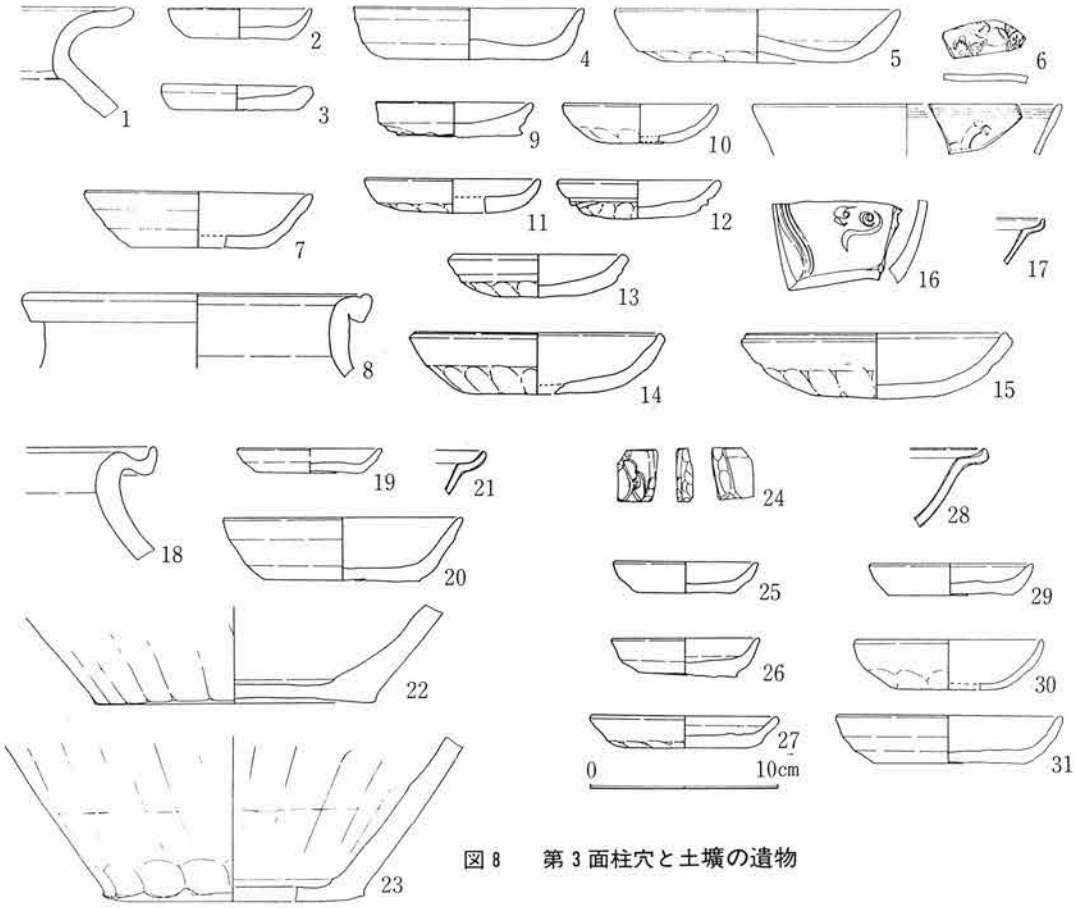


図8　第3面柱穴と土壙の遺物

戸が切りあっていたために遺物の混在がみられ、鎌倉第Ⅲ期～第Ⅴ期までの幅がある。井戸の使用期間と切りあいのためと思われる。

柱穴と土壙の遺物（図８、図版）

柱穴の遺物

１は柱穴７出土の渥美口縁部片である。頸部から口縁にかけてくの字に外反し、口端部は丸く収める。２は柱穴４出土のかわらけで口径7.4cm、器高1.6cmである。３は柱穴１出土のかわらけで、口径7.8cm、器高1.4cmである。器壁が厚く、体部の立ち上がりが低いために浅い感じを受ける。４は柱穴８出土の大型かわらけで、口径12cm、器高2.7cm、底径９cmと底部が大きいため体部の立ち上がりは急で体部中程が湾曲し、稜線が入る。５は柱穴９出土の手捏ねかわらけで、口径14.8cm、器高2.9cmの大型品である。指頭痕が明瞭に残り、底部中央急が大きく中に湾曲する。口縁端太は丸く収めている。６は柱穴10出土の青白磁合子である。外面には牡丹文が付く。

土壙の遺物

７、８は土壙１出土である。７のかわらけは口径11.8cm、器高３cmで、体部には緩やかな稜線が付く。８は常滑甕の口縁部で口径17.5cm、幅は狭いが頸部に張り付くように縁帯が付く。９～14は土壙２出土のかわらけである。９意外はすべて手捏ねの製品である。９は底部が大きいため外面の立ち上がりが急になる。底部は突出気味になり高台風になる。10は白かわらけである。口径８cm、器高２cmで、素地は白く焼き締まる。口縁部は上方に尖り気味になる。11～15の手捏ねのかわらけはいずれも体部の指頭痕が明瞭に残る。12は沈線が巡る。16は劃花文青磁碗で釉は青緑色である。17は小型の青磁鉢細片である。18～23は土壙４出土である。18は常滑甕口縁部片、口縁内側に降灰が見られる。くの字に折り曲げた頸部の先端を上方につまみ上げて口端部を造る。19、20はかわらけで19は口径7.3cm、器高1.3cmと浅い器形である。20は口径12.4cm、器高3.5cmで、体部外面に湾曲のため稜線が何る。21は青磁鉢の細片である。釉は青緑色である。22、23は常滑甕の底部片である。外底面は砂底で、指頭及び撫で調整痕が観察される。24は土壙５出土の、青磁香炉細片である。表面に牡丹文が見える。25～27は土壙６出土のかわらけである。25、26は口径が7.5cm、器高1.6cmと２cmで26の方がやや器高が高い。27は手捏ね成形で、口径9.8cm、器高1.7cmと25、26よりも大降りなかわらけである。素地は白色、釉は淡青緑色を呈す。20、30、31のかわらけの内30は白かわらけである。かわらけは器高が低く、体部外面に軽く稜線が付く。

第３面で初めて手捏ね成形かわらけが出土した。渥美窯の製品、青磁劃花文碗など多少混入があるが概ね鎌倉第Ⅲ期の遺物が主体である。

地山面の遺構（図３－３）

溝状遺構、柱穴約60穴、土壙、井戸を検出した。

第３面道路状遺構の下で方向を同じくする幅30cm３長さ８mに渡って溝状の遺構と柱穴を検出した。溝状遺構の中には薄い板を交互に合わせた網代の残存を確認した。しかし周囲の柱穴は、南北の方向性は見いだせるが広がりにはならない。建物に伴うものではなく、状況からみて屋敷地内の

目隠し塀的なものと思われる。

規格性のない柱穴、大きな土壙、井戸などの存在から屋敷地内とするならば、けして中枢部分ではなく中心からかなりはずれた場所と考えられよう。

地山面の遺物（図９、図版）

１～16は地山面上層の遺物である。１は青白磁合子の蓋である。素地は白色を呈し釉は透明な淡青色である。２は手捏ね成形の白かわらけである。口径9.8cm、器高3.3cmで指頭痕が体部下半に残り、体部中程で明瞭な境目となる。素地は精良で堅く焼き締まっている。３～11はかわらけである。３と５はコースター状のかわらけで、３は口径６cm、器高0.9cmと小型である。５は口径7.8cm、器高1.3cmの手捏ねの製品である。４、５は手捏ねの大小である。指頭痕と体部の撫で成形の境目が明瞭に付く。７～10の小型のかわらけは口径8.8～８cm、器高1.8～2.2cm、体部外面に軽く稜線が入る。11は口径12cm、器高3.3cmで、体部には明瞭に成形時の稜線が特徴白に残る。12～15は常滑である。12は頸部をくの字に外反させて口縁を造り、端部を上方につまみ上げて収めている。13～15は捏鉢である。13、14が端部を丸く収めているのに対し15は断面短冊状の端部を造る。内外面共に撫で調整である。16は山茶碗である。底径6.3cm断面三角のも籾殻高台が付く。素地は灰色でざっくりした砂っぽい土である。

17～34は地山面の遺物である。17は白磁合子の身で、口径4.8cm、器高２cmである。釉は透明で内面と外面上半のみに施されている。18は白磁口兀皿で口径は10cmである。器表面が荒れているので熱（火災）を受けているものと思われる。19は白磁四耳壺の体部片である。内外面ともに厚く透明の釉薬が施されている。20～24はかわらけで内23だけがロクロ成形品である。24の器形は全体に丸みを持ち器高も高く20～22に比べ新しい様相を呈している。24は体部外面に横撫でによる稜線が明瞭に残る。25、26は渥美の壺である。25は外面肩部に箆書きによる記号が描かれている。27は山皿で、口径7.6cm、器高２cmである。底面に糸切り痕を残す。28～33までは常滑甕で、口縁はくの字に外半し上方に摘み上がるものもある。底部は砂底で内外面に指頭による調整痕が残る。34は渥美甕である。口縁と肩部に刷毛塗りによる灰釉が見られる。

地山の遺物は鎌倉第Ⅱ～Ⅲ期の遺物が混在しているが中心の時期はⅡ期と思われる。

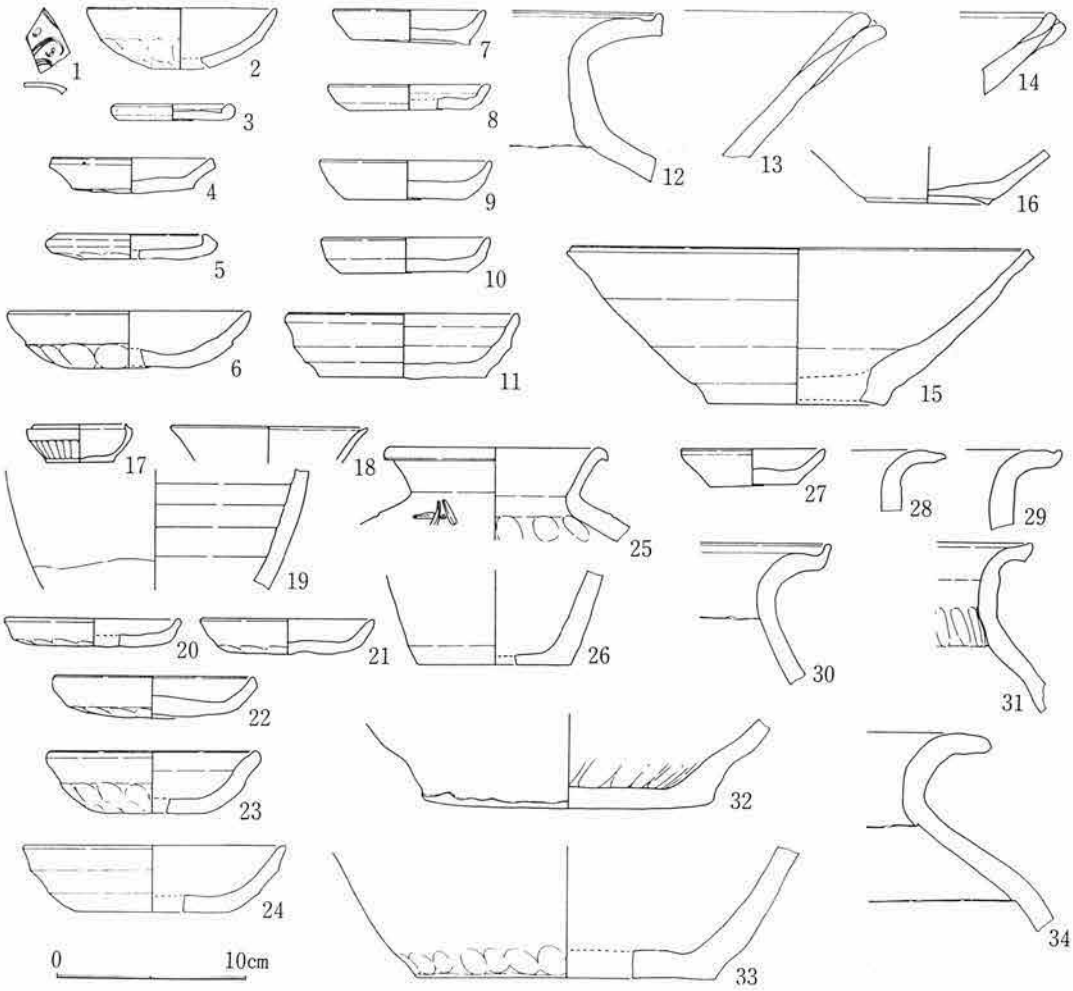


図 9　地山面の遺物

中世以前の遺構（図 3 - 4 ）

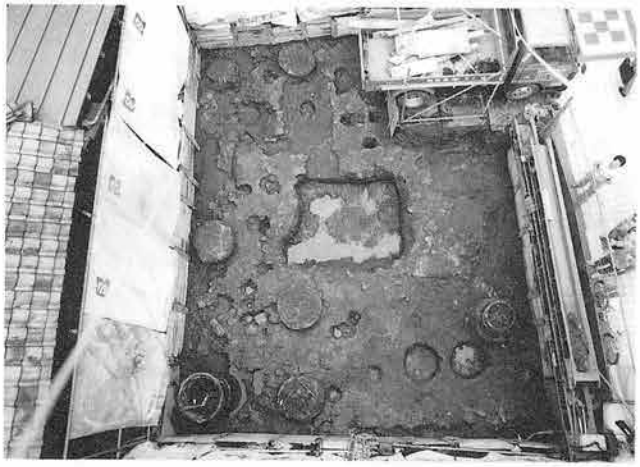
中世地山の下層で北東から南西に向あって流れる幅1.3m、深さ 1 mの断面V字形の溝を長さ 6 m検出した。それに伴い周辺でいくつかの柱穴を検出した。図示できなかったが土師器の細片が溝の覆土に見られたことや、溝の方向が若宮大路に平行する上層の遺構と異なっていることなどからこの溝は中世以前に開削されたものと思われる。遺物が余りにも細片だったため時期の決定に至らなかった。

第三章　まとめ

中世の遺構と遺物では、鎌倉Ⅰ期に相当するものはほとんど認められなかった。遺物から大きく分けて活動が３時期認められた。一つが鎌倉Ⅱ期に相当する13世紀前期から中期、そして鎌倉Ⅲ期に相当する13世紀中期から後期、鎌倉Ⅴ期に相当する１４世紀代の遺物である。

この地点は若宮大路から94m西に位置している。この当時鎌倉の中心として若宮大路を基軸に幕府、有力御家人の武家屋敷等が軒を連ねて立ち並んでいたと思われる。当調査地もこの地域に含まれているものと思われる。舶載陶磁器の青磁酒会壺、白磁四耳壺など細片だが出土品からこれらの高級品を手に入れることの出来た有力御家人達の姿をかいま見られる。しかし遺構は不揃いの柱穴のみで規格性のある建物（屋敷）は確認できていない。このことから調査地は屋敷内の中心からはずれた所と見ることが出来よう。

最下層で検出した中世以前の溝は、頼朝入府以前から鎌倉の沖積地に、耕作等で人の手が加えられていたことの証拠となるものである。



▲1．第2面遺構全景

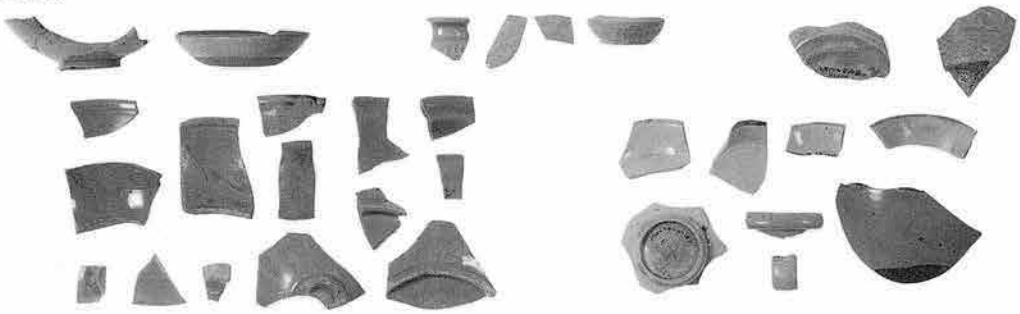
▲2．常滑甕出土状況

▲3．第3面遺構全景

▲4．地山面遺構全景

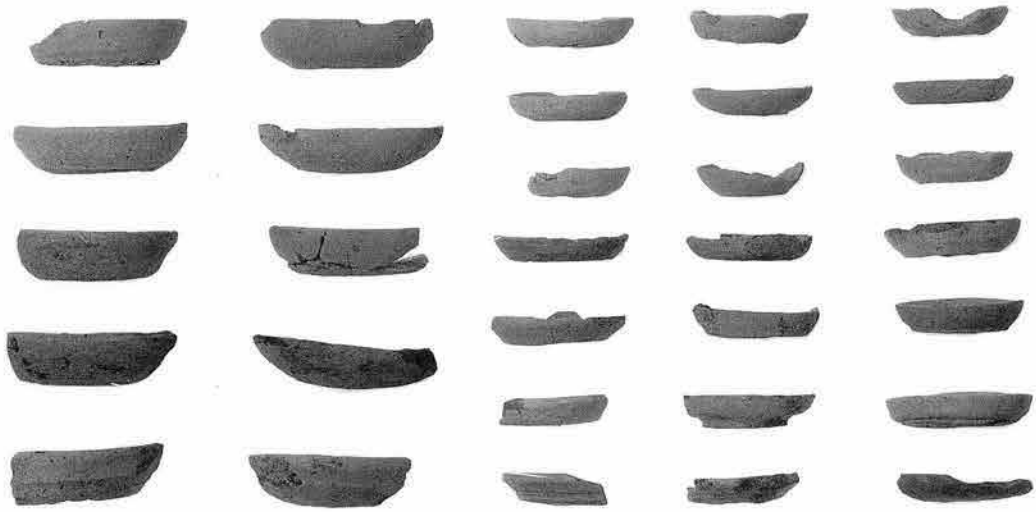
▼5．古代溝全景

図版 2



▲1．舶載陶磁器

▲2．国産陶器



▲3．かわらけ

10．若宮大路周辺遺跡群

雪ノ下一丁目210番他地点

例　言

1　本報は、鎌倉市雪ノ下一丁目210番地点他における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる個人住宅部分約480㎡についての報告である。

2　本報に掲載する資料は、1に述べた理由により部分的な成果にとどまっているが、資料的価置の高いものは、出土地区を問わず本報に掲載した。調査地点の総括的な成果は、原因者負担分の本報告書において提示する予定である。

3　調査体制は次のとおり。

担　当　者　　馬渕和雄（鎌倉市教育委員会嘱託）

調　査　員　　杉山春信（現地調査）・瀬田哲夫（同前）

調査補助員　及川加代子・渡部律子・太田美知子・梅木信之（現地調査）・小林重子（同前）・南保由利（同前）・作田あゆみ（同前）・石田真由美（同前）・浦田優子（同前）

調査参加者　　吉田文一・吉田茂夫・吉田茂・青木綾子・池谷ツル・安田ヒデ・成田サキ・市瀬ツル子・太田兵四郎・岩間敏雄・神谷敏一・平子重雄・福本寿夫・高橋儀一・石井正夫・山上玉恵（資料整理）・松永ありさ（同前）・石原範子（同前）・赤堀祐子（同前）・徳光哲也（同前）・浅見志津枝（同前）

4　本報の執筆・編集には馬渕があたった。

5　本報で使用した写真は遺構は馬渕他調査員が、遺物は折茂芳則が撮った。

6　発掘調査・資料整理に際しては、次の諸氏・諸機関から貴重な御教示と援助をたまわった。記して深く感謝の意を表したい。

大三輪龍彦・吉田章一郎・田村晃一・鎌倉考古学研究所・石井進・内山直三・亀井明徳・森浩一・合田芳正・百瀬正恒・江上幹幸・志田原重人・佐藤昭嗣・清水信行・鎌倉市高齢者事業団・柳川清彦・中田英・服部実喜・大橋康二・佐久間貴士・佐々木達夫・小松大秀・加藤寛・白井永二・岩橋春樹・浪川幹夫・大槻恒久・三井建設

第一章　調査地点の位置と環境

本地点は「若宮大路周辺遺跡群」と呼ばれる遺跡地の西北域にあり、都市鎌倉の基幹道路である若宮大路から西に約250m前後に位置する。 ここからさらに西に約150mほどで、これも基幹道路の一つである南北に走る今小路[註1]に行き当り、約200mほど北側の山裾には、頼朝入部以前から存在していたと言われる「窟堂（いわやどう）」がある。ここはまた、「北条時房・顕時邸跡」と名付られている区域の南辺を東西方に向走る道路の北側に当る場所でもある。北西約300mには鎌倉五山の三位寿福寺が存在し、言うなれば本地点付近は中世都市の中心部に位置していると言えよう。地勢的にみれば、この付近は、旧市街地西北部に大きく開析された谷戸（「扇ヶ谷」）の入口に当り、谷から流れ出した湿潤な粘質土が深く堆積して、場所によっては堅い地山面まで実に4m近くにも及ぶところが認められる。

ところで先に触れた窟堂は、「石屋堂」（『海道記』）・「岩井堂」（「鶴岡別当尊運避状」）などと書かれる不動堂であり、『吾妻鏡』『随聞私記』等の鎌倉時代の史料には頻繁に一帯の火事や事件などの記事がみられる。この点については『鎌倉廃寺辞典』[註2]等に詳しいのでここでは概略のみ記すが、それによれば、建保元年（1213）五月三日、土屋大学助義清が窟堂前路次を通り、承久二年（1220）正月二十九日、窟堂辺焼亡、同年三月九日、付近民家火災、寛喜元年（1229）十二月二十五日、窟堂辺焼亡、正嘉二年（1258）正月十七日、窟堂炎上、弘長三年（1263）三月七日夜、窟堂辺騒動、などとあり、このうちでもとりわけ「窟堂辺」「窟堂下辺」とあるのは、まさしく本地点付近に相当するものと思われる。のみならず、第三章で紹介する「いわやどう」と書かれた木簡が、本地点の試掘の際に出土している点は、この一帯が窟堂と深いつながりのあることを示す証拠であろう。

なお窟堂前を、八幡宮西南角の「鉄の井」から寿福寺門前まで通じる路地について、往時には武蔵大路と呼んだ、という説[註3]がある。

この付近の発掘調査としては、本地点南側を走る道路を西に突き当った今小路沿いの扇ヶ谷一丁目131番１地点[註4]や、本地点から南東に道路一本隔てた小町二丁目39番６他地点[註5]がある。前者の調査では今小路の側溝や、中世の「町屋」と覚しい長屋様の建物址の検出、あるいは工房址にほど近いことを窺わせる多量の吹子羽口の出土をみており、後者からも囲炉裏や板列など、中世都市の民衆生活をしのばせる遺構が検出されている。

註１　今小路の呼称については諸説があるが、ここでは便宜上現在の呼び方を用いる。

２　貫達人・川副武胤　有隣堂　1980　11・12頁

３　高柳正寿『鎌倉市史　総説編』　吉川弘文館　1959

４　馬渕和雄「今小路西遺跡　扇ヶ谷一丁目131番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』　鎌倉市教育委員会　1989

５　田代郁夫「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目39番６他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』　鎌倉市教育委員会　1989

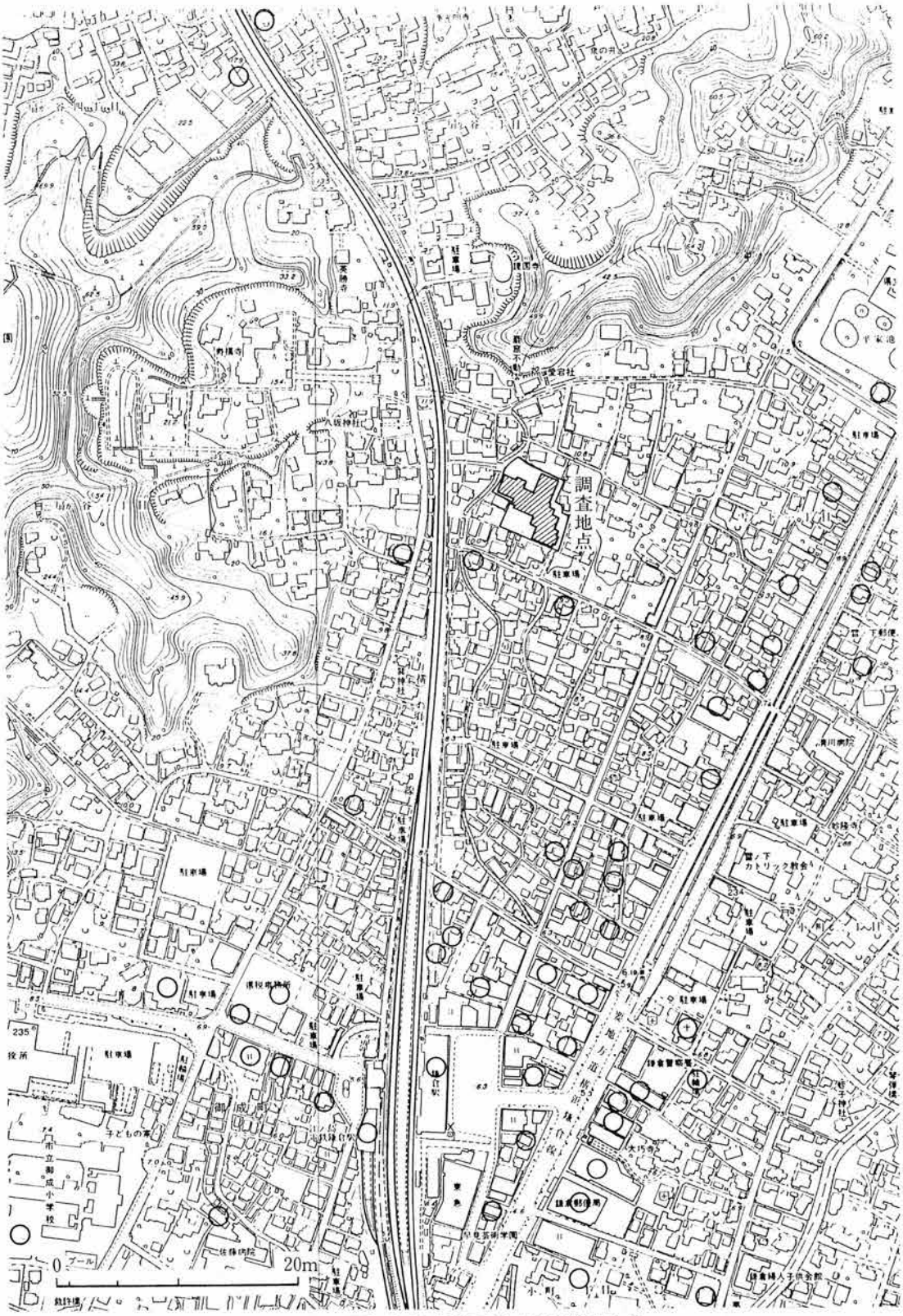


図1　調査地点と近辺の主な発掘調査地点

第二章　調査の概要と経過

本調査に先立って実施した試掘調査によって、地表下約70cm前後まで近・現代の客土層の及んでいることが確認されていたので、本調査の際にはこの客土層を重機によって排除した。調査面積は全体で約1500m²であるが、本報の掲載対象となる国庫補助にかかる個人住宅部分は東南部の443m²である。調査期間は1988年４月から翌年１月であり、本報の対象部分は大体その後半三分一程に相当する。ただし、地点、期間とも発掘調査という性質上、原因者負担分と明瞭に区分することはもちろん不可能なため、とりわけ調査範囲に関しては境界線に最も近い溝状、あるいは道路状遺構によって分けた。いずれにせよ詳細については、後日刊行の原因者負担分の本報告を参照されたい。

調査に際しては、若宮大路中心軸上に以前設定しておいた任意の原点「Ｉ点」を基準とし、ここ

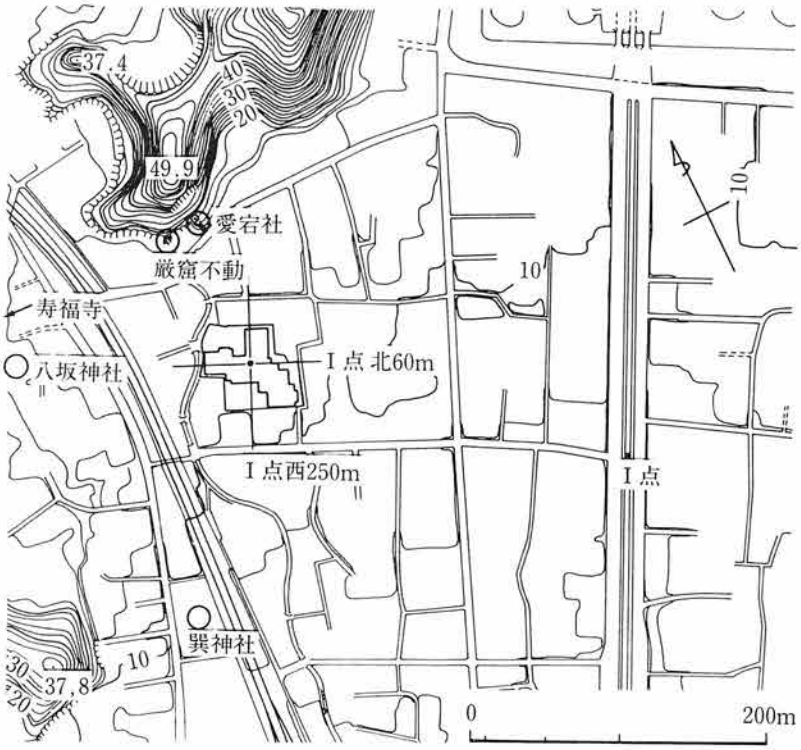


図２　調査地点位置図

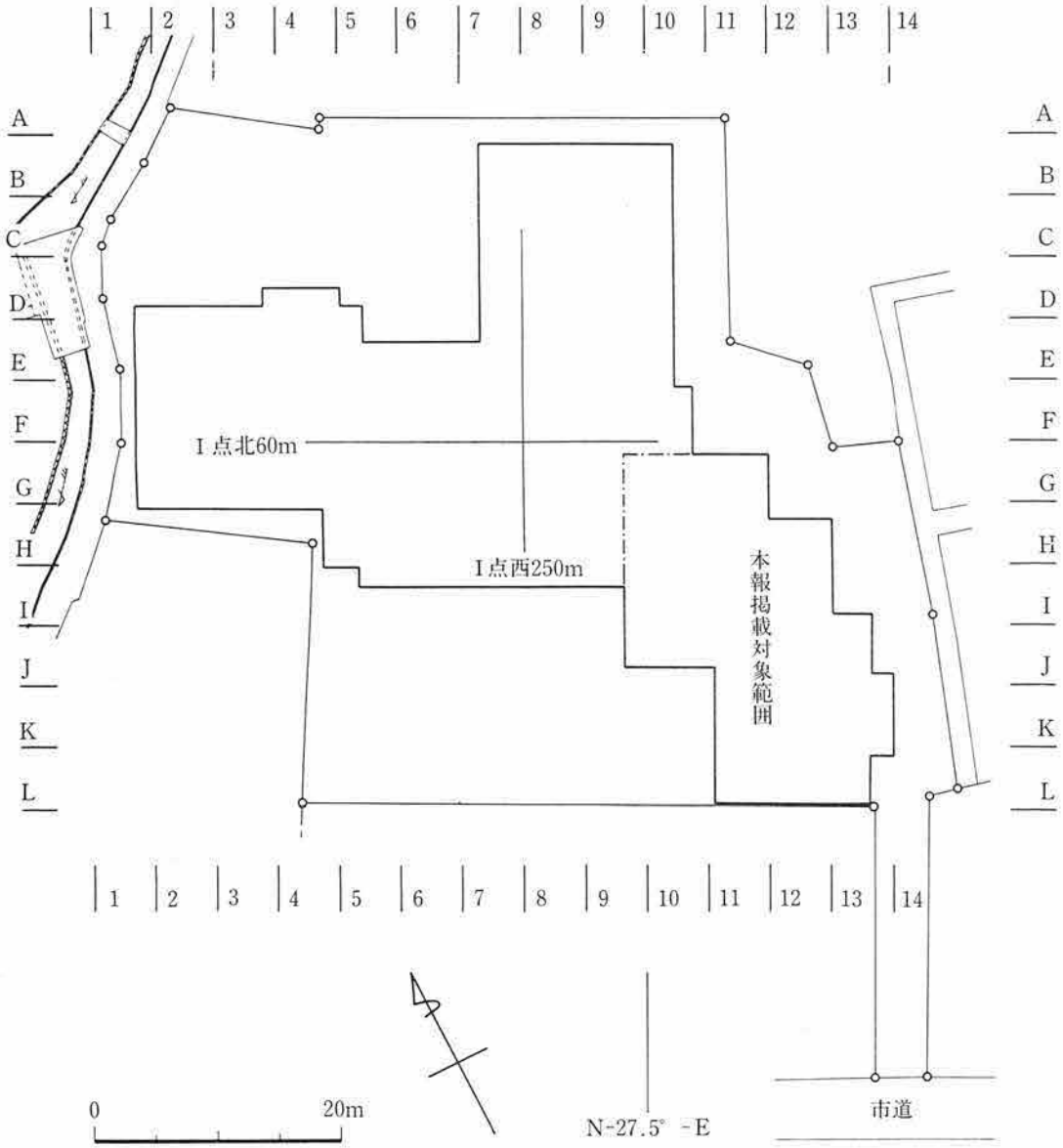


図3　調査区設定図

から西に250m平行移動した南北軸と、北に60m移動した東西軸を基軸として調査区内に設置し、ここを中心に各々5m方眼の区画を配した。軸線の名称は南北軸が1～14、東西軸がA～Lであり、各方眼の区画は西北角交点によって明示される。南北軸方位はN―27.5°―Eである。

調査は、廃土置場の確保のため、前期と後期に分けて行なわれた。先行の重機による排土作業の後、4月27日より開始され、1989年1月16日をもって終了した。

第三章　調査結果

第１節　上層の遺構と遺物

近・現代の客土を除くと、約80cm程度で中世遺構面に達する。調査地点全体では、西側を大きな石組を持つ流路（溝１―旧扇ヶ谷川か）が、西北角から、途中調査区外に消えながら、調査区東南端に向けて流れている。また東壁際の一部（13―I・J）に道路と覚しい固い面が細い側溝（溝52）を伴って、認められる。さらに調査区東南端にも固い砂の面の空閑地と溝が残っており、これらによって、この地区の境界が示されている。ここは若宮大路から大体250m程西にあり、今小路とも目と鼻の先の距離にある場所であるが、都市鎌倉の基幹道路であるこの二本の間にあって、方位を全く異にしている。しかし、調査区内でも、溝１西岸の遺構はかなり調査地点主体部の方位とずれ、近隣の今小路（引いては若宮大路）の主軸に一致しかけており、また東壁際13―I・Jの道路状遺構と溝

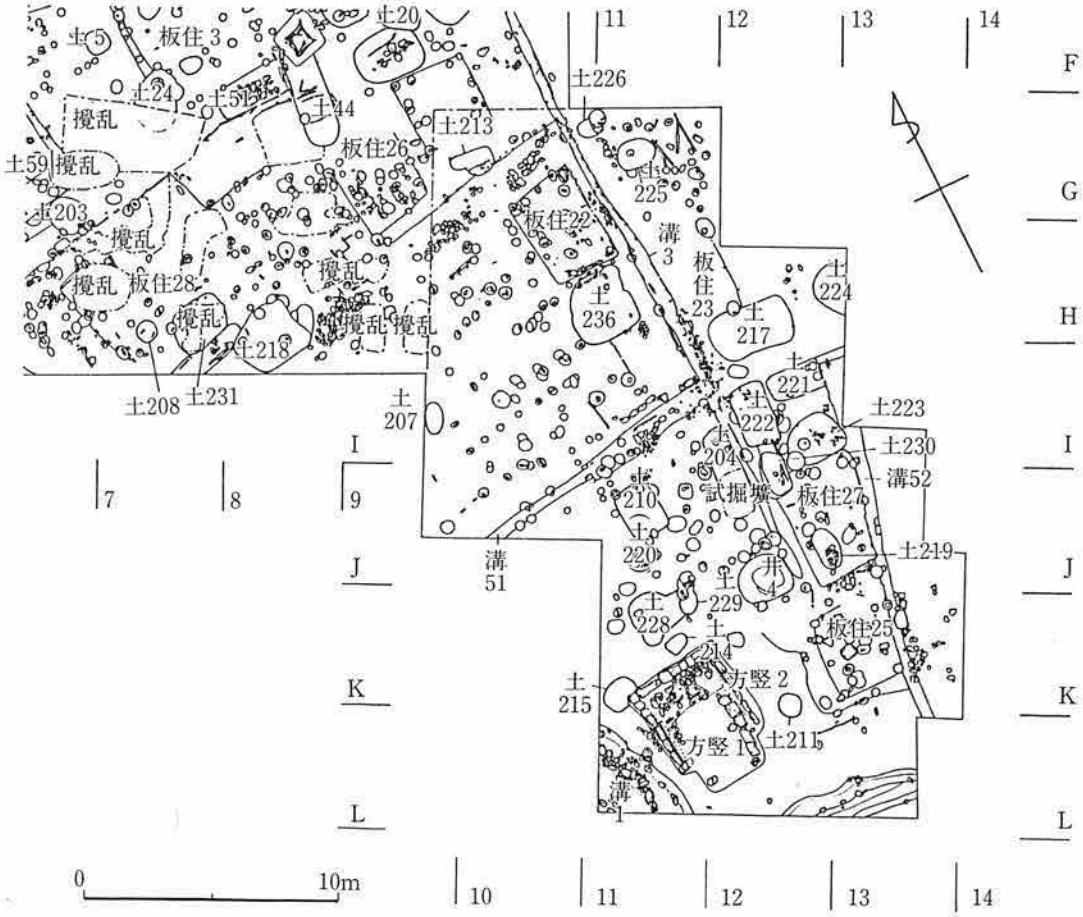


図４　上層面遺構図（一点鎖線以南が本報掲載対象範囲）

も似た状況にあるので、本地点のみ町並のなかで特異な様相を示していると思われる。

また、調査区東寄りに、ほぼ南北方位に一致して走っている溝3があり、これと直交して溝、および道路状の遺構が調査区を横断している。今回の報告は、このうち北から3本目の、9・10—F・Gを東北—西南に走る道路状の石畳以南にかかわる。なお報告にあたっては、掲載範囲の9・10—F・G以南を溝3と溝51およびその延長線で4区画に分け、便宜上、西北区画から図5の通りにI—1～4の番号（仮称）を付した。なお原因者負担分の区域と伴せて統一的な呼称も別に用いており、その対応関係も図5に示した。

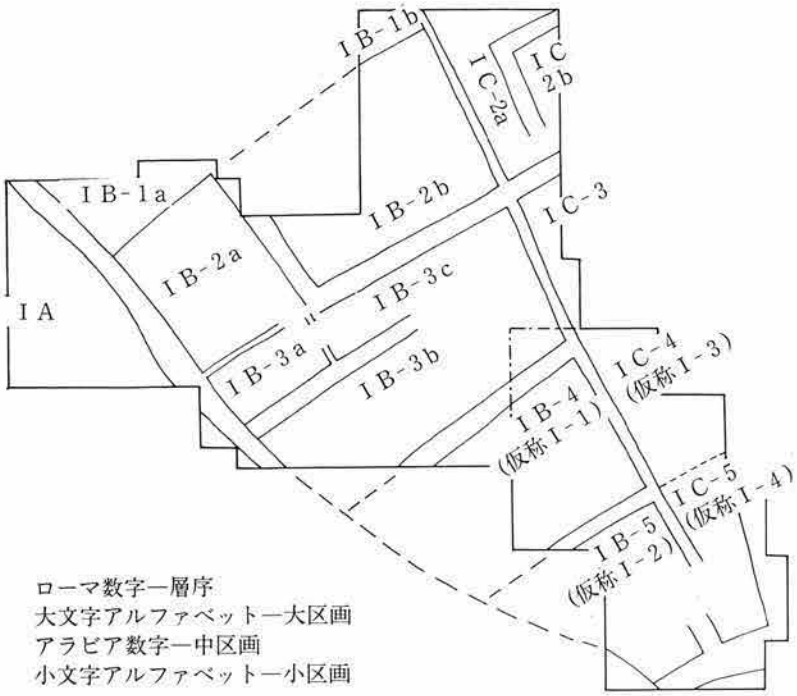


図5　上層遺構面区画概念図

1　区画 I—1

南北辺を石敷の路、東辺を溝3、西辺はおそらく溝1によって区切られた区画である。面積は推定で約160㎡。

掘立柱建物1棟、板囲いの住居1軒、土壙群、柵列、石敷路等がみられる。この区画は西側の調査区外から伸びてきた石敷が、板囲い住居と掘立柱建物の間に入って北に向い、一本北側の路に通じる空間構成になっている。南東角には、土間状の土丹（泥岩）版築面が存在する。また、土間と板囲いの間には土壙236が取込まれた格好になっている。

掘立柱建物は、西にさらに伸びると思われるが、現状で東西3間×南北2間、北端の柱列の西側を欠く（今後、本報告までに再検討の予定）。南側は椽、あるいは柵のようなものが伴なう。

板囲い住居は、南壁と東壁南半が縦板、東壁北半が横板であり、おそらく板の組み方の境界にしきりが存在していたと思われる。幅は北壁で2.9m、南壁で2.2m、長さは東壁4m、西壁3.8mと、不整の長方形の平面形を呈する。深さ約20cmの浅い竪穴である。

土壙236は1.6m×2.6mの隅丸長方形のものと不整円形のものとが重なっているが、時期差は把めなかった。

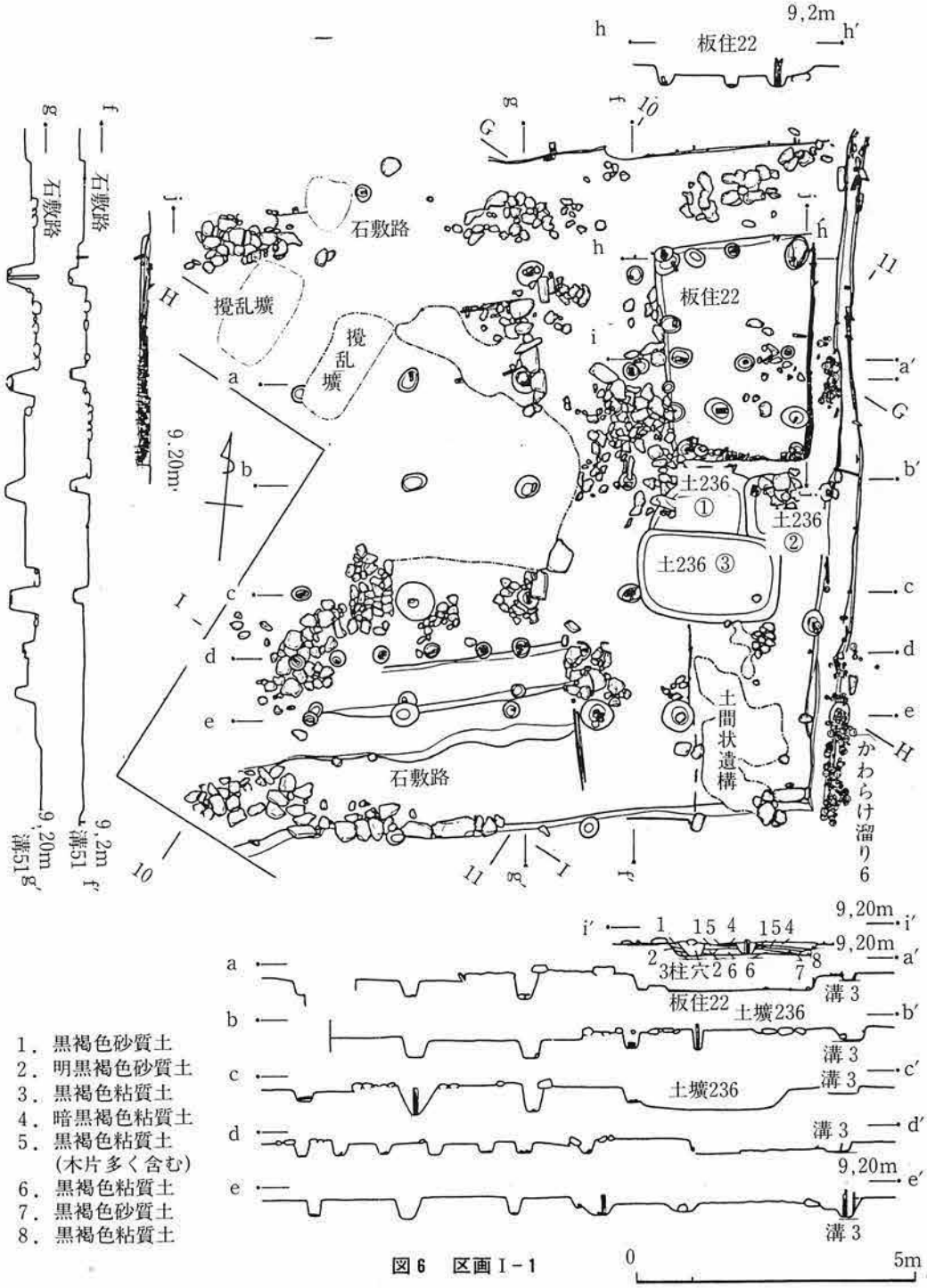


図6　区画Ⅰ－1

南東の土間状遺構は、西辺に縦板列を持ち、板囲住居の西壁の延長線上にあるところから、間に土壙を挟んだ一連の建物、あるいは住居に付随する作業場か三和土のようなものである可能性がある。

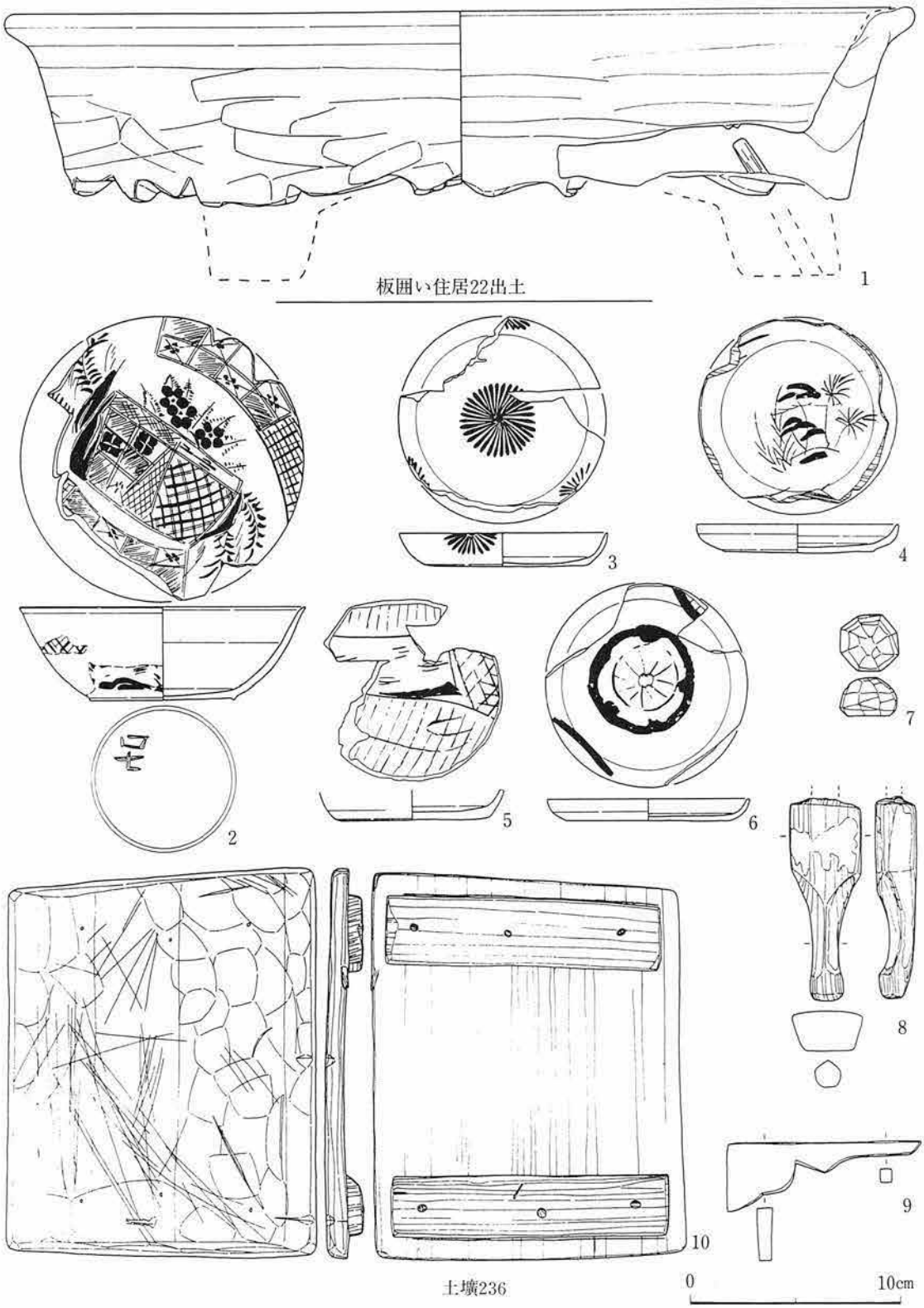


図7　区画Ⅰ－1出土遺物(1)

出土遺物

板囲い住居22出土遺物　1—土製火鉢。口縁部は横に折れ、外面下半部ヘラ削り。肘木を持つ三足が付く。底部の穿孔は、諸説あるが、熱によるひずみを逃がすためのものか。内面に二次焼成痕。

土壙236出土遺物　2—漆椀。家の板塀と思われる文様がある。外底面に意味不明の線刻が漆下にある。「口七」と読めるが、一字である可能性もあろう。木師屋、あるいは塗師の屋号のようなものではあるまいか。3～6—漆皿。いずれも無高台で、3は菊花、4は秋草、5は垣根？、6は車輪文が描かれる。7—漆塗りの木製品。底面には漆が塗られていない。8—漆塗膳の脚。9—同前肘木。10—木製の台。表面に細かな切傷が沢山認められるので、俎板替りに使われたと思われる。脚の横板は各々3本の木釘で留められる。

面上出土遺物　11—瀬戸灰釉碗。内面のみ釉薬がかかる。12—同前行平注口部。注口部の上に丸い粘土紐が貼り付けられている。13—同前。内面に熔着痕と煤がみられる。14—同鉢。外底面はヘラ削り。釉薬きわめて薄く、はけ塗り。15—同前。釉薬は浸けがけ。16—同前。仏花瓶口縁部。17—同前。水注。内面は、指頭痕とヘラ整形痕が顕著に残る。18—滑石印判。元の鍋の鍔を残し、把手を差し込む孔を2孔穿っている。19—木製鋤。破損が著しい。20—木製円板。中央にほぼ一列の穿孔があり、うち2孔に木釘が残る。また、ゆがんだ平行四辺形に焼けた印（？）が見られる。用途不明。21—魚形。中央に斜めの小孔がある。22—赤銅製飾金具。藤の文様が打出されている。

2　区画 I—2

北を溝51、東を溝3、南を道路状遺構、西を溝1に限られた区画である。面積は約115㎡で、1戸主（50平方丈—約455㎡）の4分の1だが、南側の方形竪穴南辺まで含めると190㎡程になる。

この区画は、大体二期に分けられ、それぞれに掘立柱建物、方形竪穴、土壙等が伴い、井戸を二期で共有している。なお、鎌倉市教育委員会が事前に行なった試掘壙の一つが当区画内にあり、「いわやどう」と書かれた木簡が出土している（層位は不明）。

新しい時期の遺構　掘立柱1棟・井戸1期・方形竪穴1基・土壙1基で構成されている。掘立柱建物は、西側調査区外に伸びる可能性があるが、現状で東西3間×南北4間、東側に半間の縁か廂が付く。北辺の柱列は溝51に接し、東から3列目の南端はもう1本南に柱通りを延すことができるが、方形竪穴と接しており、関係は不明。方形竪穴は東西2.9m×南北3.5m、深さ60㎝、東壁際に鎌倉石（凝灰角礫岩）切石が敷かれている。井戸は周囲に柱穴を持ち、簡単な上屋が想定できる。また、溝3はこの井戸の東脇から始まり北に向って流れている。

旧い時期の遺構は、掘立柱建物1・方形竪穴1・井戸1・土壙1で構成される。また北域にはいくつか「かわらけ溜り」が見られた。掘立柱建物は現状で2間×2間と小さいが、これも西壁外に伸びるかも知れない。方形竪穴は南辺を除いた（新しい方形竪穴に切られているので）3辺の壁際底面に鎌倉石切石列が廻っており、壁体の下部と思われる石積もある。石積には柱座の角柱穴が開

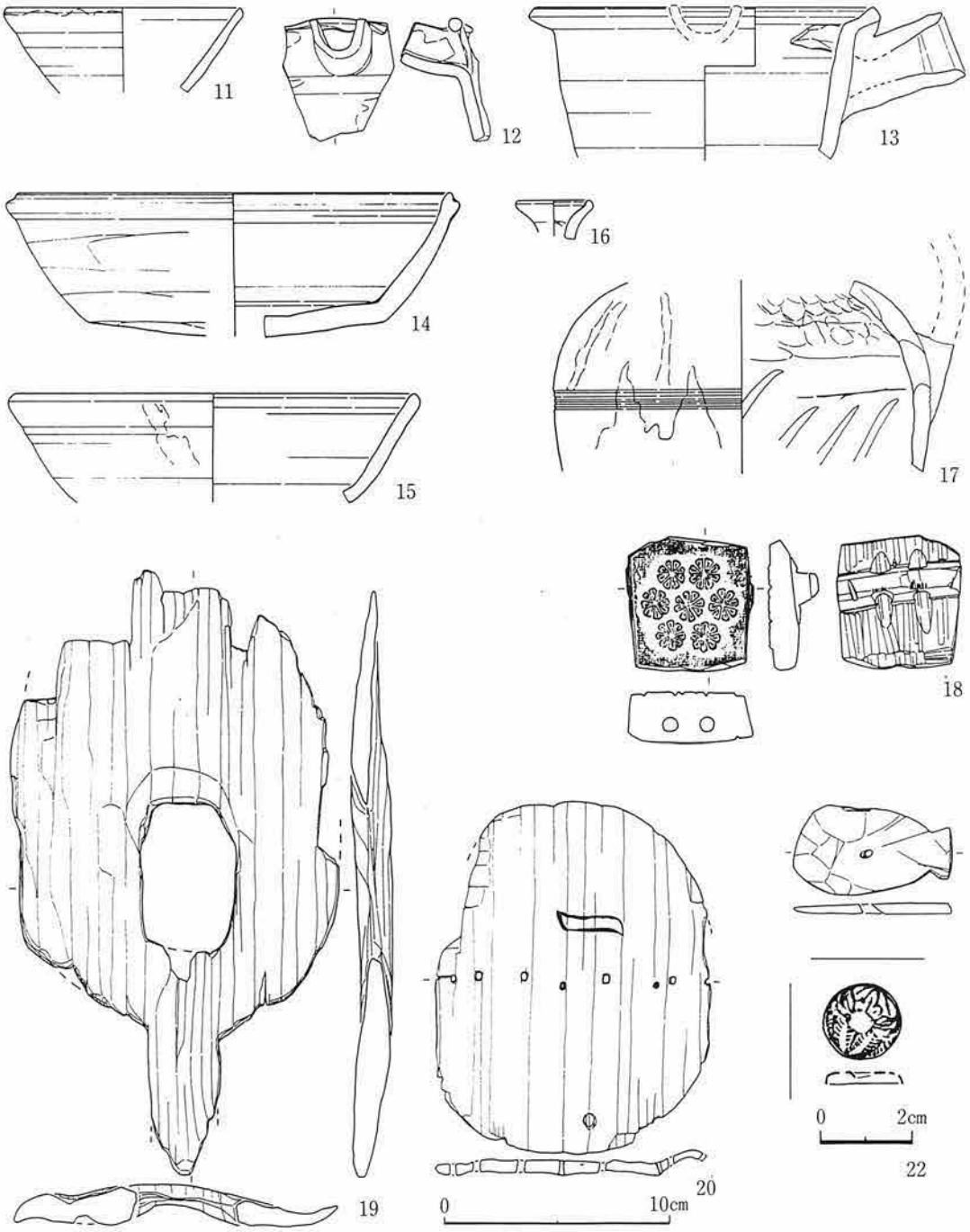


図8　区画Ⅰ－1出土遺物(2)

けられており、それによれば1辺320cmの方形となる。土壙210は隅丸長方形で周囲に柱穴が見られ、炭化物が多量に詰っていたため、火処の可能性もある。

出土遺物

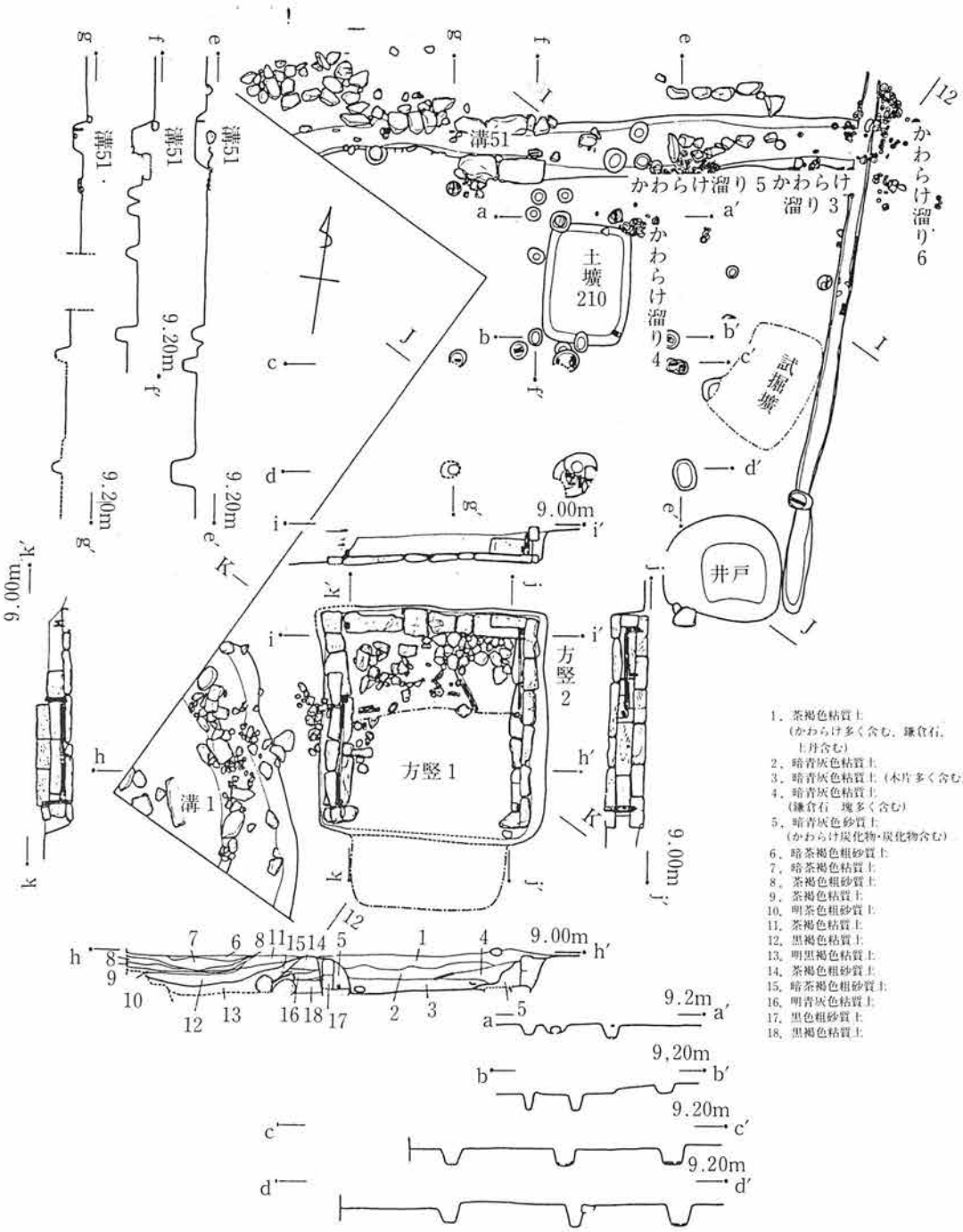


図9　区画Ⅰ－2(1)―旧期

かわらけ溜り3・4・5は区画の北辺部に集まっているが、かわらけ自体に大きな年代差は認められない。また、3と5はいずれも溝51のへりにあるので、あるいはゴミとして溝に一括投棄され

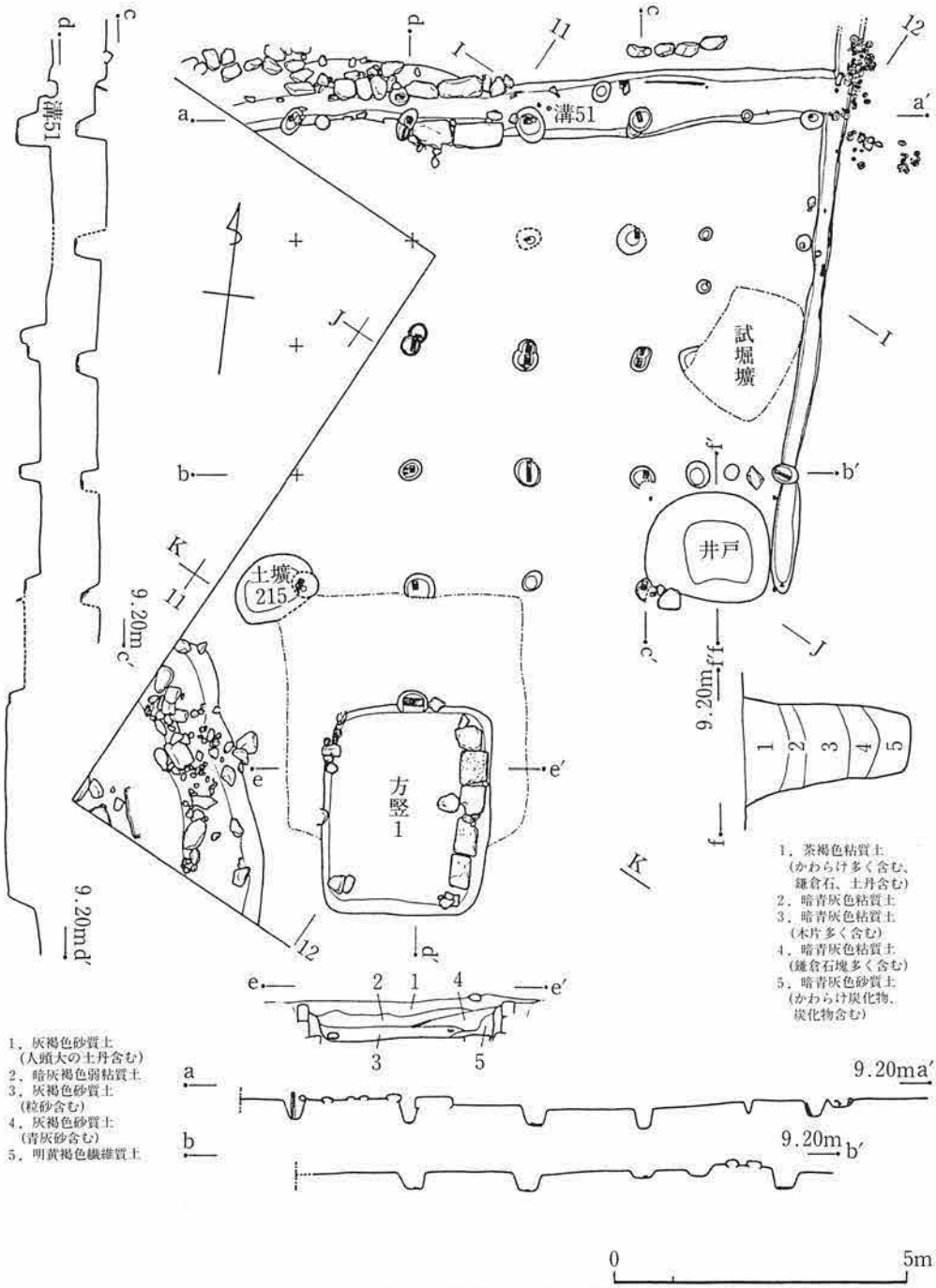


図10　区画Ⅰ－2(2)―新期

た可能性があろう。かわらけはいずれも薄手で内彎するものであり、とりわけ口径10～11cm前後の中型器種が含まれている点は、これらが14世紀中葉を中心とした時代のものであることを示している。７―白地鉄絵壺。最大径22,9cm。胴部に鉄絵で、おそらく疾走する四足獣（騏驎か）が描かれ

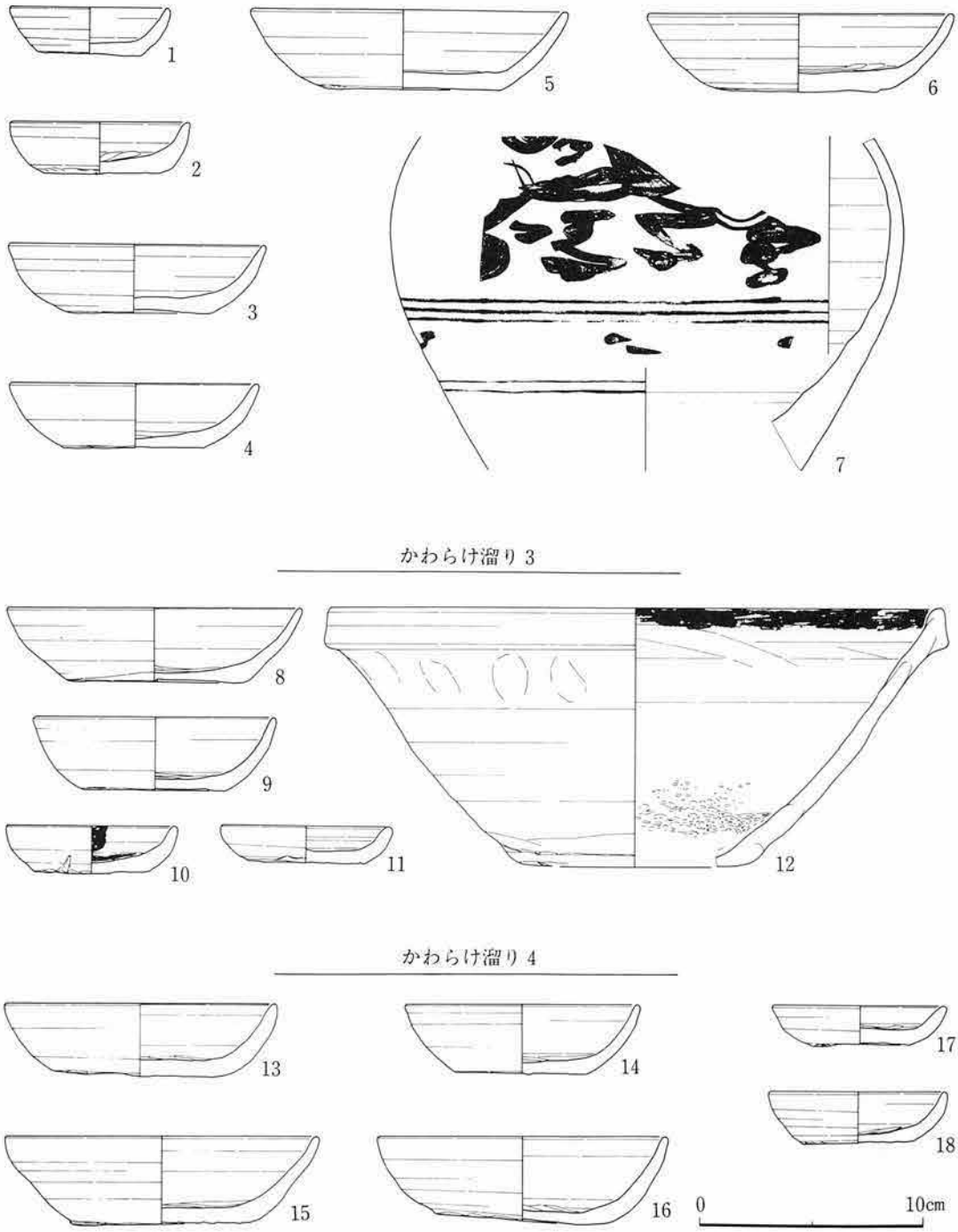


図11　区画Ⅰ－2 出土遺物(1)—かわらけ溜り出土

ている。胎土は灰味を帯びた灰白色を呈し、やや軟質だが緻密で夾雑物を含まない。内外面とも白化粧が掛けられた上に透明釉が施される。外面は二次焼成で部分的に赤味を帯び、釉がかせている。鉄絵は薄い暗褐色を呈し、筆描きされている。磁州窯系のものであろう。12—魚住こね鉢。火鉢が

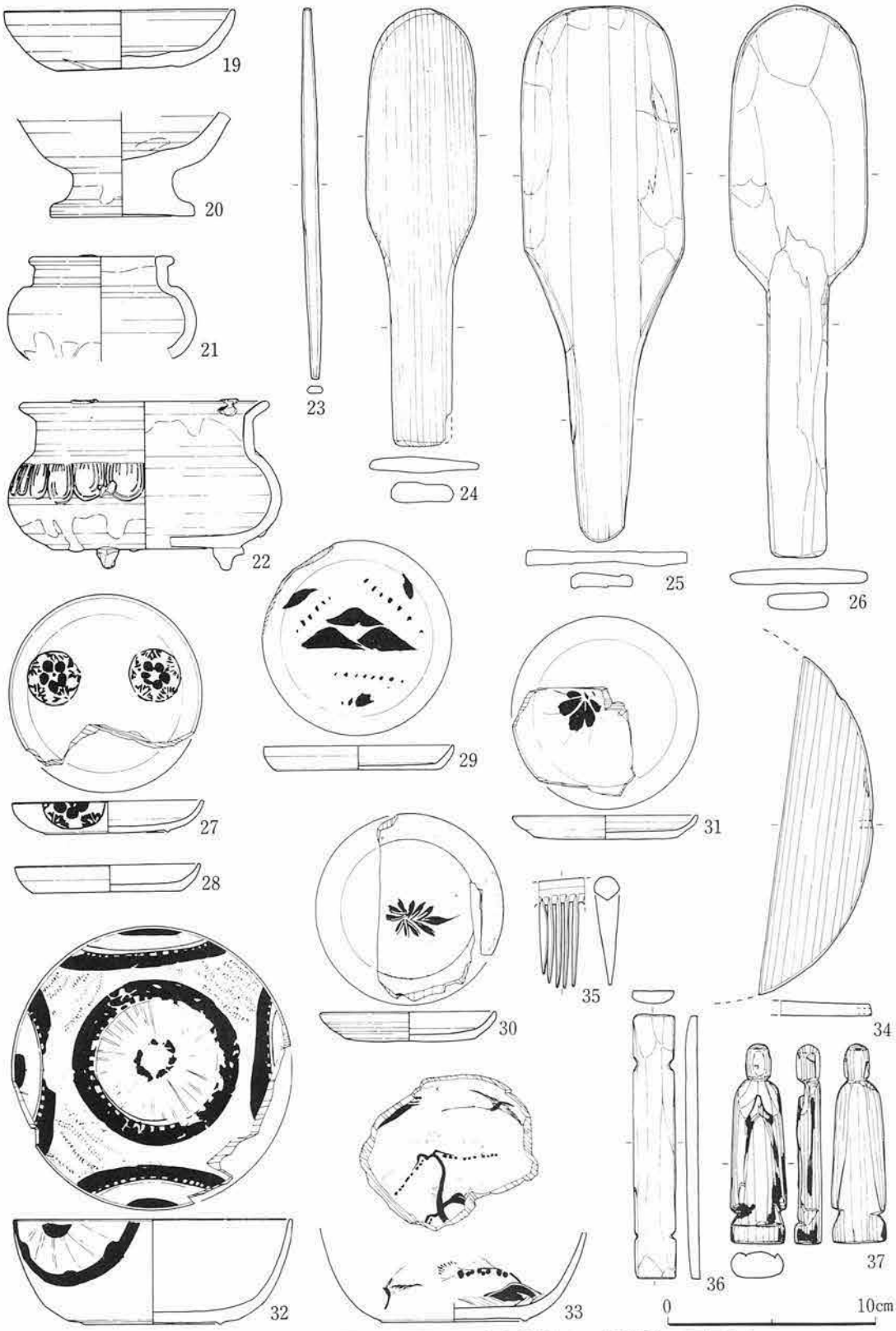


図12　区画Ⅰ－2 出土遺物(2)一方形竪穴 1 下層出土

わりに使ったらしく内面底部が二次焼成で剝れ落ち、口縁部内側が煤けている。

方形竪穴Ⅰ下層出土遺物　19―口径11cmの中型かわらけ。20―瀬戸の脚付の袋物（内面無釉）で暗緑色の薄い失透釉がかかる。21―瀬戸灰釉香炉、22―同飴釉香炉。23以下はいずれも木製品である。23―箸状本製品。24～26―杓子。27～31―漆皿で27以外は無高台である。29には三ツ鱗文がみられ、28は無文、30は全面に褐色の漆が塗られている。32・33―漆椀。36―用途不明木製品。断面はカマボコ形を呈し、両端近くに刻みが入る。37―木製の地蔵菩薩立像。部分的に赤色の顔料が残る。長さ9.5cm、幅2.7cm、厚さ1.2cm。

方形竪穴Ⅰ上層出土遺物　38・39―かわらけ。年代的にはかわらけ溜り3・4・5のものや本竪穴下層のものと変らず、14世紀代に属する。40―魚住こね鉢。41―仕上げ砥。京都深草の鳴滝砥で、板目の面のみが砥面。裏面には、切出しの際の工具痕が残る。42―三ツ巴文の無高台の漆皿。

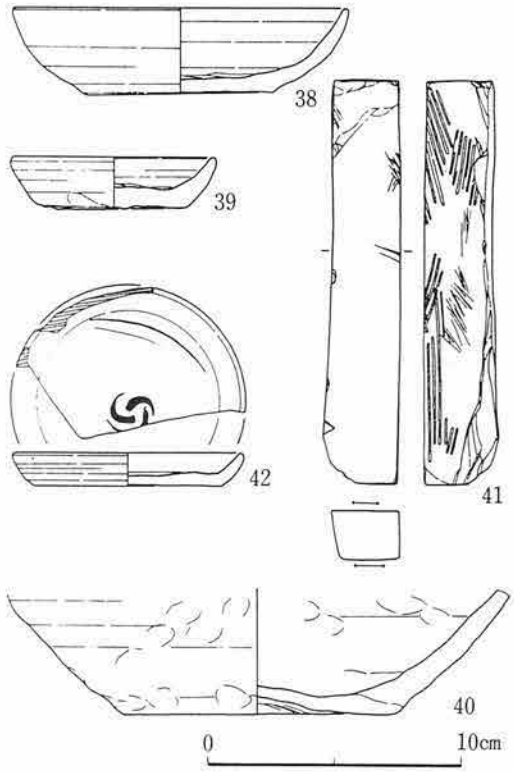


図13　区画Ⅰ-2出土遺物(3)
一方形竪穴1上尽出土

方形竪穴2下層出土遺物　43―瓦質火鉢。輪花型で板状の脚が付く。44―かわらけ。口縁部に煤が付着。45―瀬戸小鉢。暗緑色の灰釉がかかる。46―同灰釉の水注口縁部。47のものかどうかは不明。47―同前、体部。48―魚住こね鉢。49―三ツ鱗文漆椀。50―淡褐色の朱漆椀。天目茶碗型の器形をしており、内面に黒漆のかたまりが付着している。51―無文の漆椀。

5方形竪穴2上層出土遺物　52～55―かわらけ。55にやや古い（13世紀代）様相がみられるが、総じて、かわらけ溜り3・4・5に近い。56―黄白色の白かわらけ。内面に指頭ナデを残す。57―山茶碗。灰白色で竪緻。58―中砥。白色できめがやや粗く、群馬県産のものか。4面とも砥面。

土壙215出土遺物　59―連歯下駄。長さ15.5cm。子供用と思われる。板目

土壙220出土遺物　60―漆塗膳の脚肘木。

土壙229出土遺物　61―漆椀。無文。

溝51出土遺物　62・63―かわらけ。鎌倉時代末期にさかのぼる可能性がある。64―灰釉の碗。きめ細かな胎土で、底部糸切痕あり。65―磨研常滑。不整形の破片の縁辺部を擦っている。66―仕上砥。京都奥殿砥か。67―中砥。群馬上野砥と思われる。

面上出土遺物　68―黒釉瓶子。胴部径21cm。頸部に蓮弁文、体部に牡丹唐草文を線刻する。線刻は幅の広いものと狭いものの二種類の線による。胎土は灰白色で、かなりきめ細かく、岩石質に

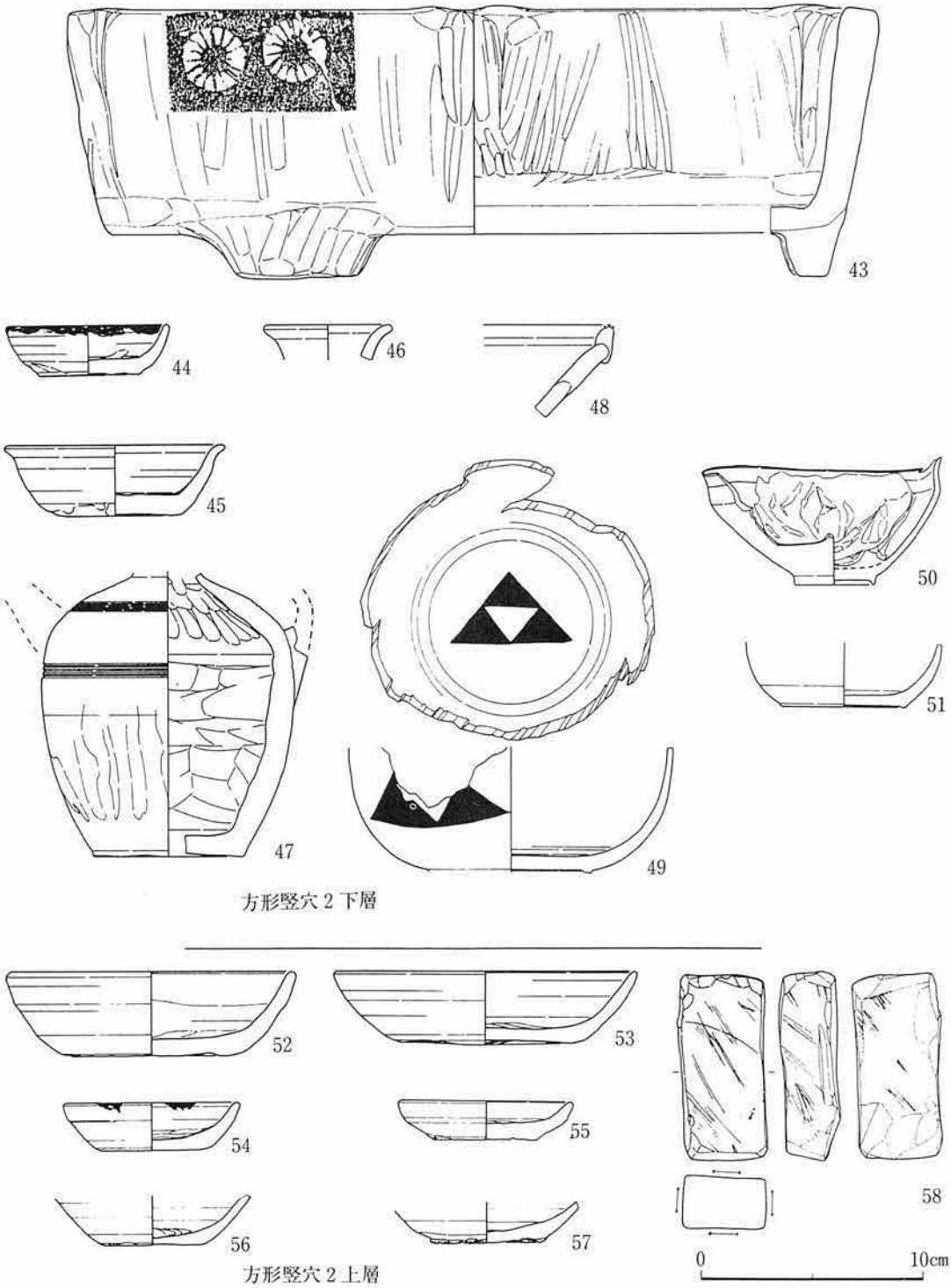


図14　区画Ⅰ－１２出土遺物(4)―方形竪穴２出土

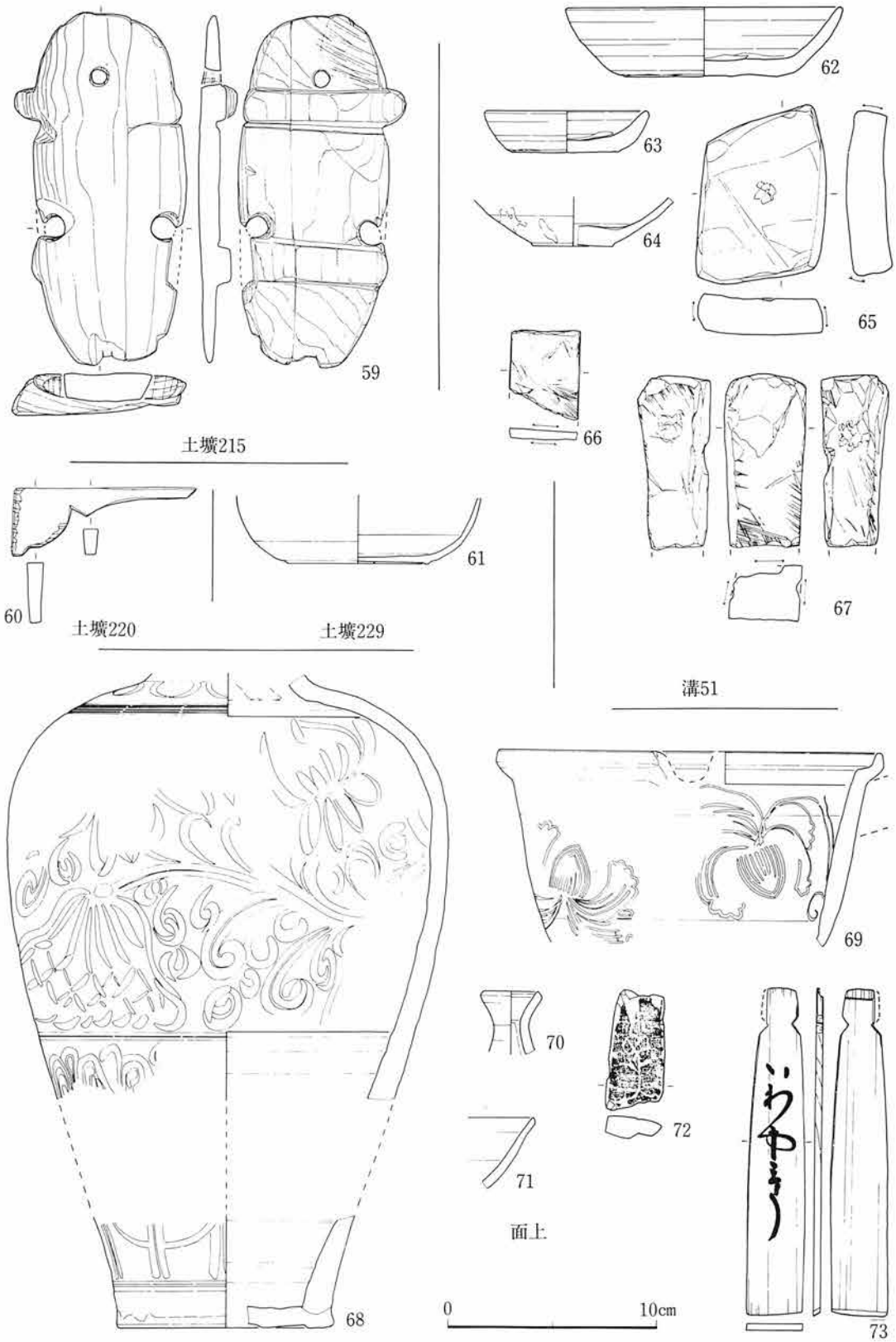


図15　区画Ⅰ－１２出土遺物(5)―土壙・溝出土

近く焼き上っている。内面にもほぼ全面に褐色の鉄釉がかかる。外底面は周縁部が高台状に低く削り出され、三ヶ所に熔着痕が認められる。肩部は二次焼成を受け、釉薬がかせている。69―瀬戸灰釉行平鍋。牡丹文が体部に描かれている。70―瀬戸灰釉仏花瓶頸部。71―灰釉山茶碗。72―滑石印判。花文らしき文様が線刻されている。73―木簡。「いわやどう」と読める。鎌倉市教育委員会が事前に行なった試掘調査で出土したもので、ちょうど当区画の東辺に位置していたため、層位は不明

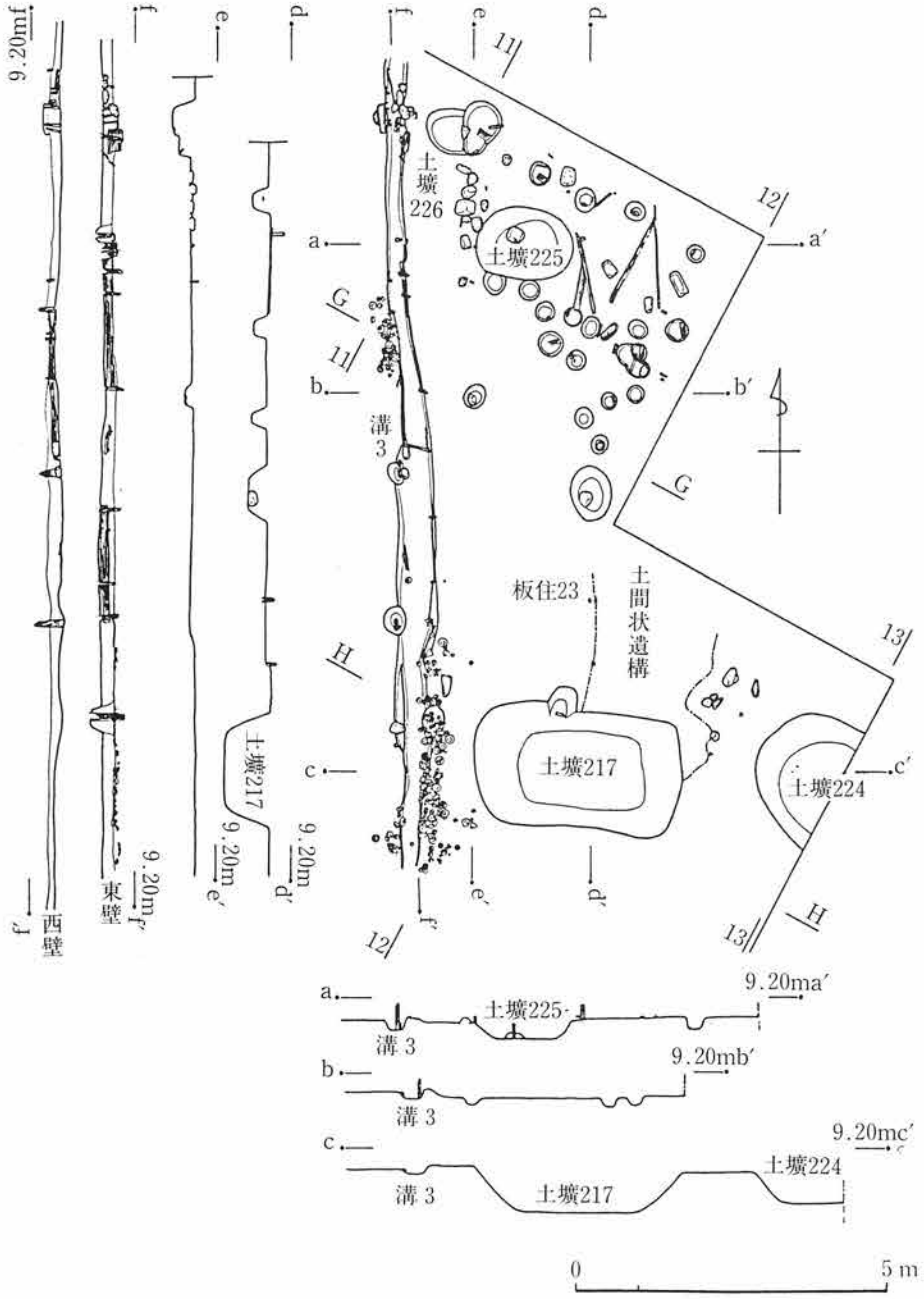


図16　区画Ⅰ－3

ではあるが、当区画の出土遺物の一つとして、ここで扱う。「いわやどう」とは、無論遺跡地背後の窟堂のこと。

3　区画Ⅰ－3

溝3を挟んで、区画1と対称位置にあり、大半が東壁外に出ている。ここで検出したのは、掘立柱建物と土壙3基、かわらけ溜り1群、および不明瞭ながら、板囲い住居らしい落込み1軒である。この区画は、あるいはⅠ－1とセットになる可能性がある。面積は不明。

掘立竪穴建物は西側の1間分しかうかがえないが、南北と柱間2.4cm、東西2mとなっており、土壙225の東半分を取り込んでいる。

出土遺物

板囲い住居23出土遺物　1－瀬戸灰釉仏花瓶。2－常滑こね鉢。角型の口縁端部を持つ。3－漆椀。4・5－同皿。5には低い高台がつく。6－松喰鶴文の椀。7－漆塗膳の脚。8－同前肘木。9－木製円板。曲物の底であろう。

土壙217出土遺物　10～12はいずれも無高台の漆皿。10はかげろう。11は山水（？）、12は秋草が描かれる。13・14－木製円板。いずれも曲物の底板の可能性がある。15・16－木製の栓か。

かわらけ溜り6出土遺物　17がやや厚手の、斜め上方に伸びる器壁を持ち、13世紀後半にさかのぼる可能性があるほかは、おおむね他の、かわらけ溜り3・4・5と変らぬ様相を持っている。14世紀中葉頃のものであろう。

面上出土遺物　22－瀬戸灰釉瓶子。体部に唐草文が描かれる。23－同灰釉小鉢。灰釉は暗灰褐色で、内面には煤付着。24－瓶子口縁部。22とは別個体である。25－骨製笄。格子目の条線が刻まれている。

4　区画Ⅰ－4

東辺を溝52と道路状遺構、南辺も道路状遺構に区切られているが、北側には土壙群が北辺をそろえて途切れる以外に明瞭な境界はなく、また西辺も、溝3の消滅した南側3分の1は板囲い住居が隣りにくい込んでいる。ここでは掘立柱建物は見られず、板囲い住居2軒、土壙数基による構成となっている。区画の面積は、溝3南端付近までで約28m²、南側の板囲い住居（板囲い住居25）まで含めると45.5m²となる。確証はないが、あるいは西隣のⅠ－2と組み合せになる可能性がある。この区画は、溝3と東側の道路状遺構にはさまれているため、全体に南側の狭くなった平面形状を呈している。

板囲い住居25は、同27と切合っているが、新旧関係は把握できず、同時存在であった可能性が高い。西北部で溝3の始まりの部分に接するような形になる。幅は南端2.8m、北の27と接する辺りで

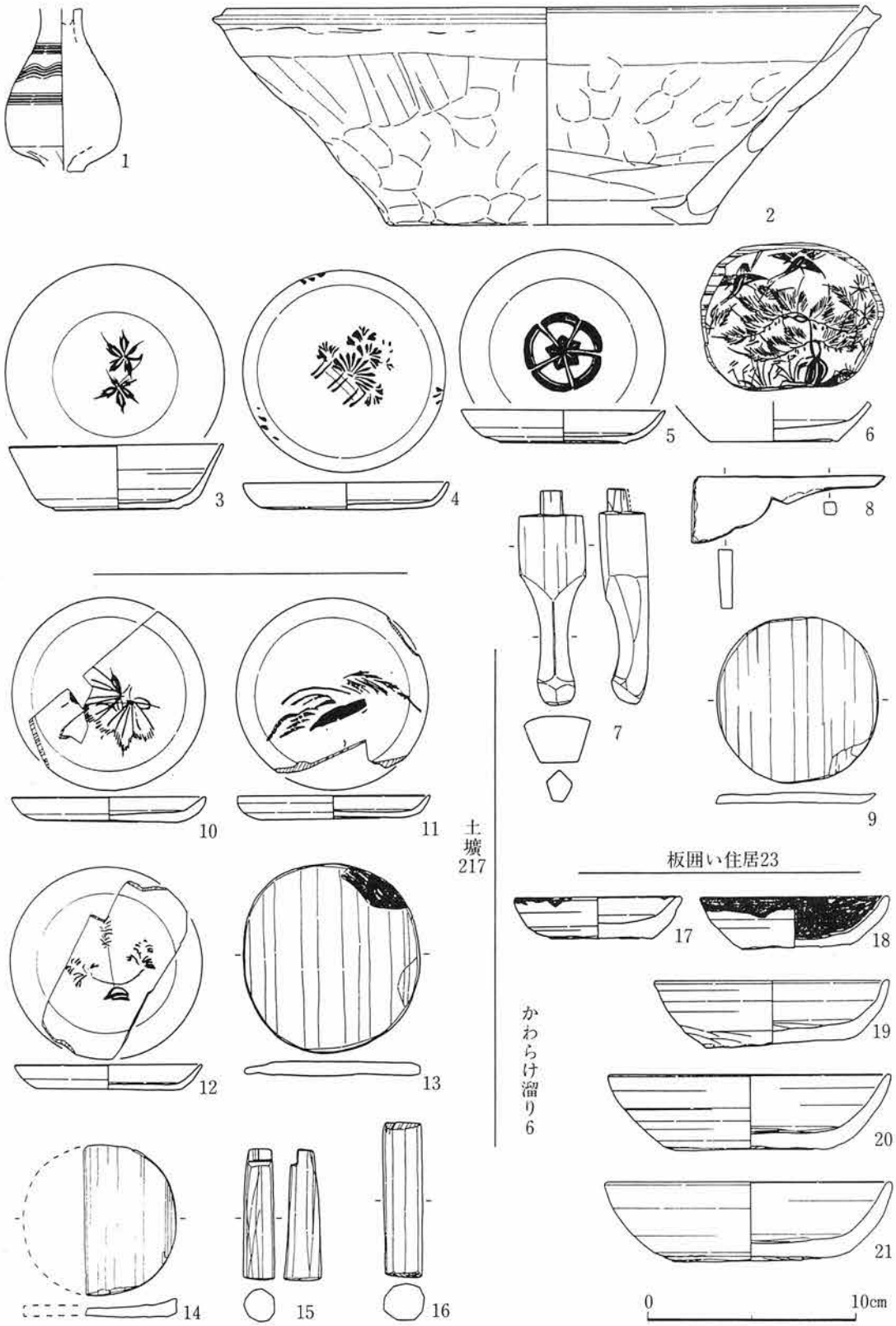


図17　区画Ⅰ－3 出土遺物(1)

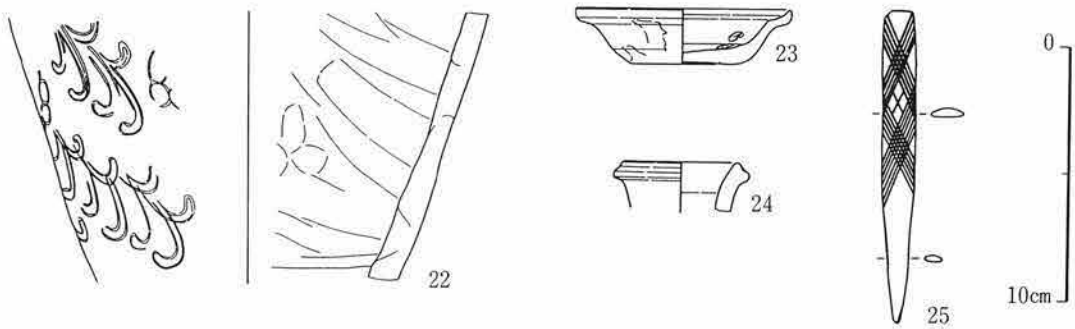


図18　区画Ⅰ－3 出土遺物(2)―面上出土

3.55m、長さ5mである。

板囲い住居27は北側に土壙数基があるので北辺は明瞭でないが、南辺の幅2.6m、北部で大体3.7m前後であり、屋内に土壙を取り込む形になっていたと思われる。職能民の工房か、厠のようなものである可能性もある。

土壙221・222は北端が同じ線上に並ぶので、これをもって区画の境界とするのが妥当であると思われる。

出土遺物

板囲い住居27出土遺物　　1―常滑こね鉢。赤褐色に焼け、内面は二次焼成で底面近く剝落が目立つ。2―同前甕底部。3―瀬戸灰釉折縁皿。4―同入子。外底面周縁部をヘラで削る。5―青白磁香炉。透しが入り、三足が付く。6―木製品。先端近くに刻みが入る。陽物とは思われない。用途不明。7―人形。折烏帽子を被る立体形。目鼻はない。8―無文の漆皿。ごく小さい高台がつく。9―同前。無高台。10―同前。少し深めで、高台を持つ。11～13―漆皿。11は藤、12は鶴丸、13は草の文様を持つ。14―漆塗鏡箱。内底の径13.6cm外底面の漆下に「上」と刻み込まれている。木師屋か塗師の屋号のようなものか。15・16―漆塗膳の脚肘木。17―漆塗の容器蓋。輪花形を呈する。18―漆製品。組物部材か。ホゾ穴を持つ角柱型の木片。19―木製円板。周縁部に油煤が付着。反対側の面には切り傷が目立つ。

土壙222出土遺物　　20―漆皿。無高台。

土壙223出土遺物　　21・22―かわらけ。これも年代的に他の一群とそれほど隔りはない。14世紀代。23―魚住こね鉢。片口を持つ。二次焼成で赤褐色に焼けている。24―仕上げ砥。京都鳴滝砥であろう。

土壙230出土遺物　　25・26―かわらけ。薄手に近く、内彎する器形のもので、14世紀代。27―山茶碗窯系こね鉢。外面に煤が付着している。内面はヘラ整形痕が残る。28―常滑こね鉢。片口がおそらく三ヶ所付く。内面に煤が付着。29―中砥。灰白色のおそらく石英安山岩質凝灰岩で橙色の層を含む。熊本天草砥か。30―漆椀。外面に秋草文、外底面には朱漆で「十」と書かれている。塗師の印だろうか。31・32―漆皿。31は無高台。32は高台を持つ。

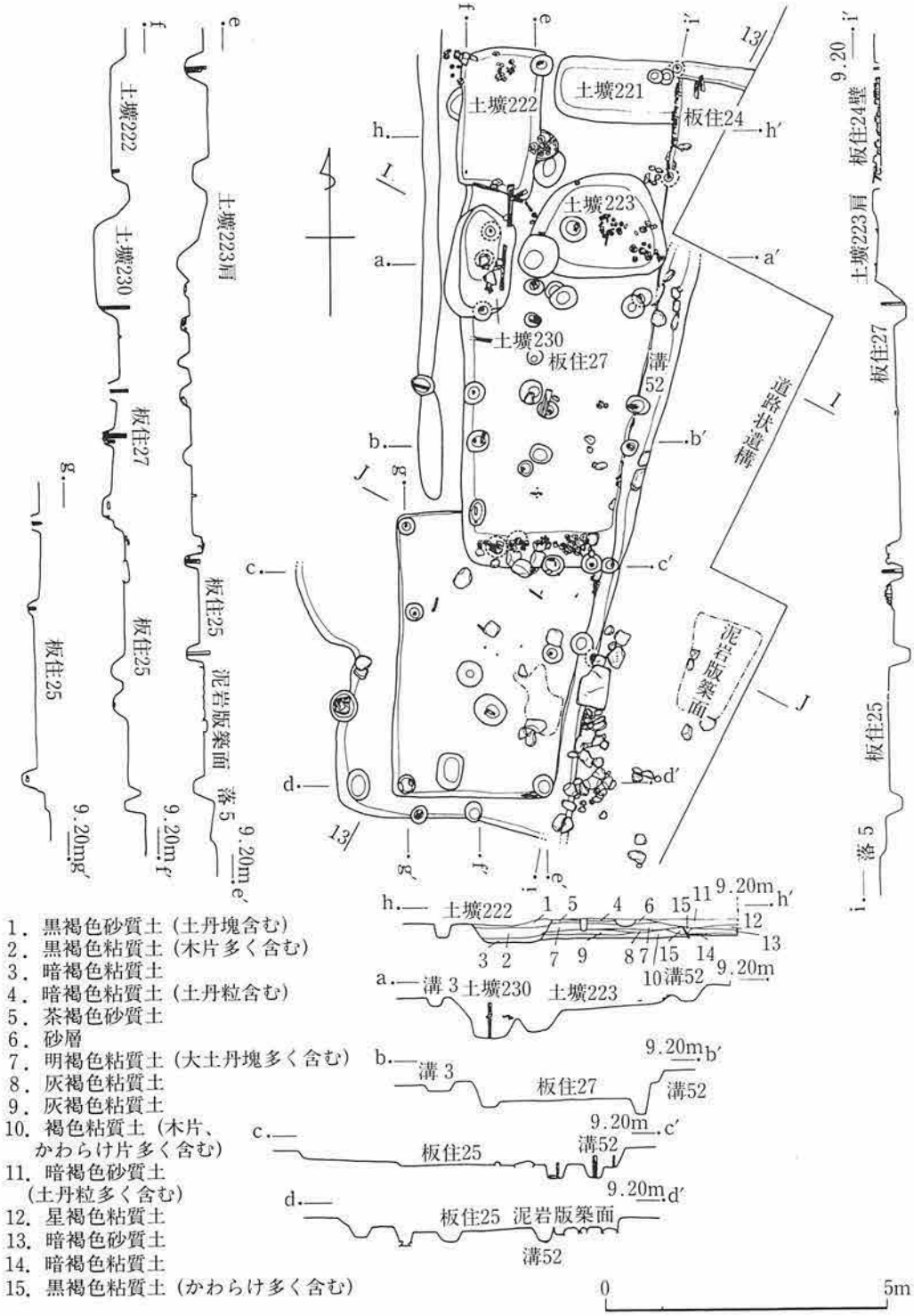

土壙221
土壙222
土壙223
土壙230
板住24
板住24壁
土壙223肩
板住27
溝52
道路状遺構
泥岩版築面
板住25
落5
溝3
9.20m
1．黒褐色砂質土（土丹塊含む）
2．黒褐色粘質土（木片多く含む）
3．暗褐色粘質土
4．暗褐色粘質土（土丹粒含む）
5．茶褐色砂質土
6．砂層
7．明褐色粘質土（大土丹塊多く含む）
8．灰褐色粘質土
9．灰褐色粘質土
10．褐色粘質土（木片、かわらけ片多く含む）
11．暗褐色砂質土（土丹粒多く含む）
12．星褐色粘質土
13．暗褐色砂質土
14．暗褐色粘質土
15．黒褐色粘質土（かわらけ多く含む）
0
5m

図19　区画Ⅰ－4

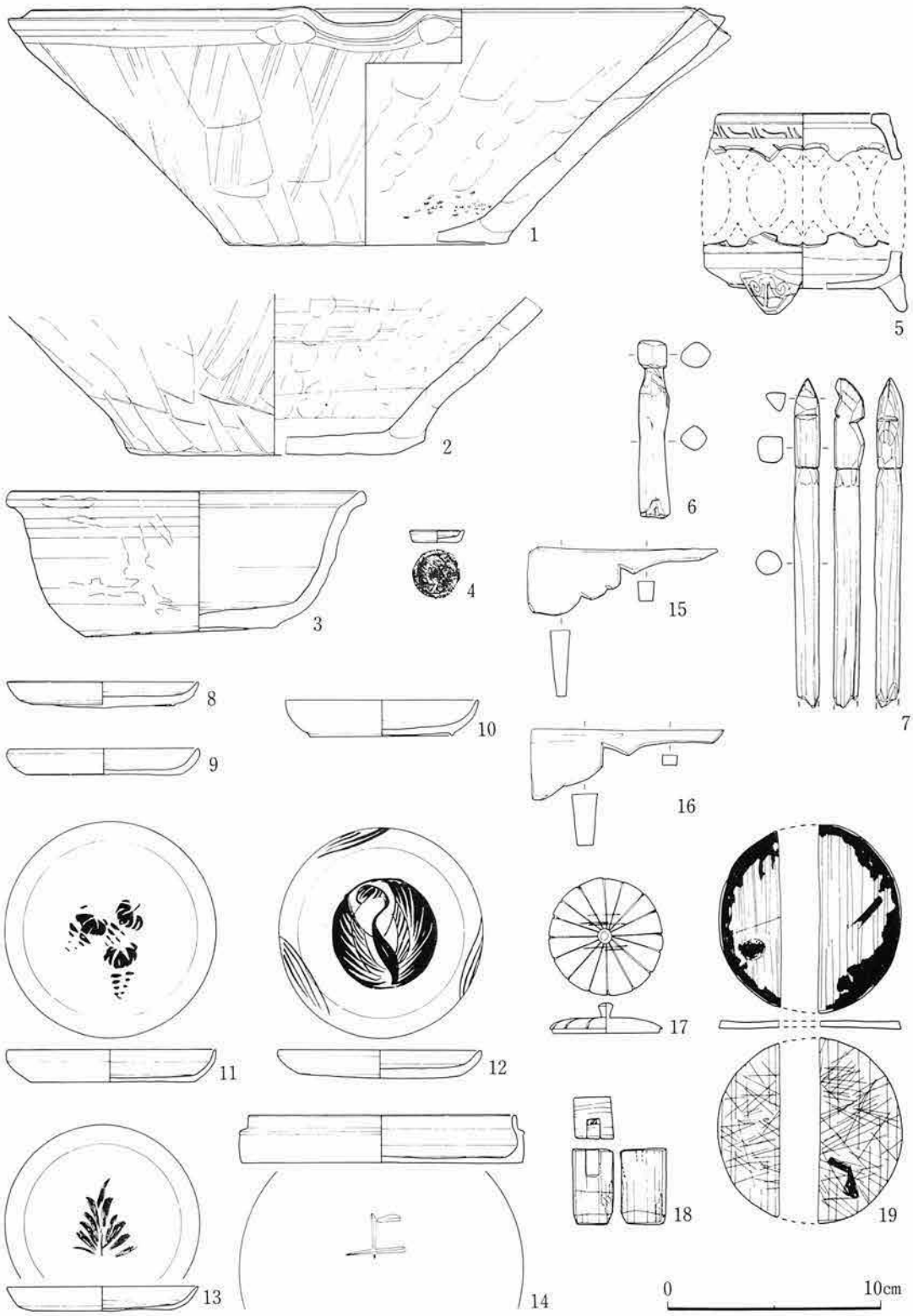


図20　区画Ⅰ－4 出土遺物(1)―板囲い住居27出土

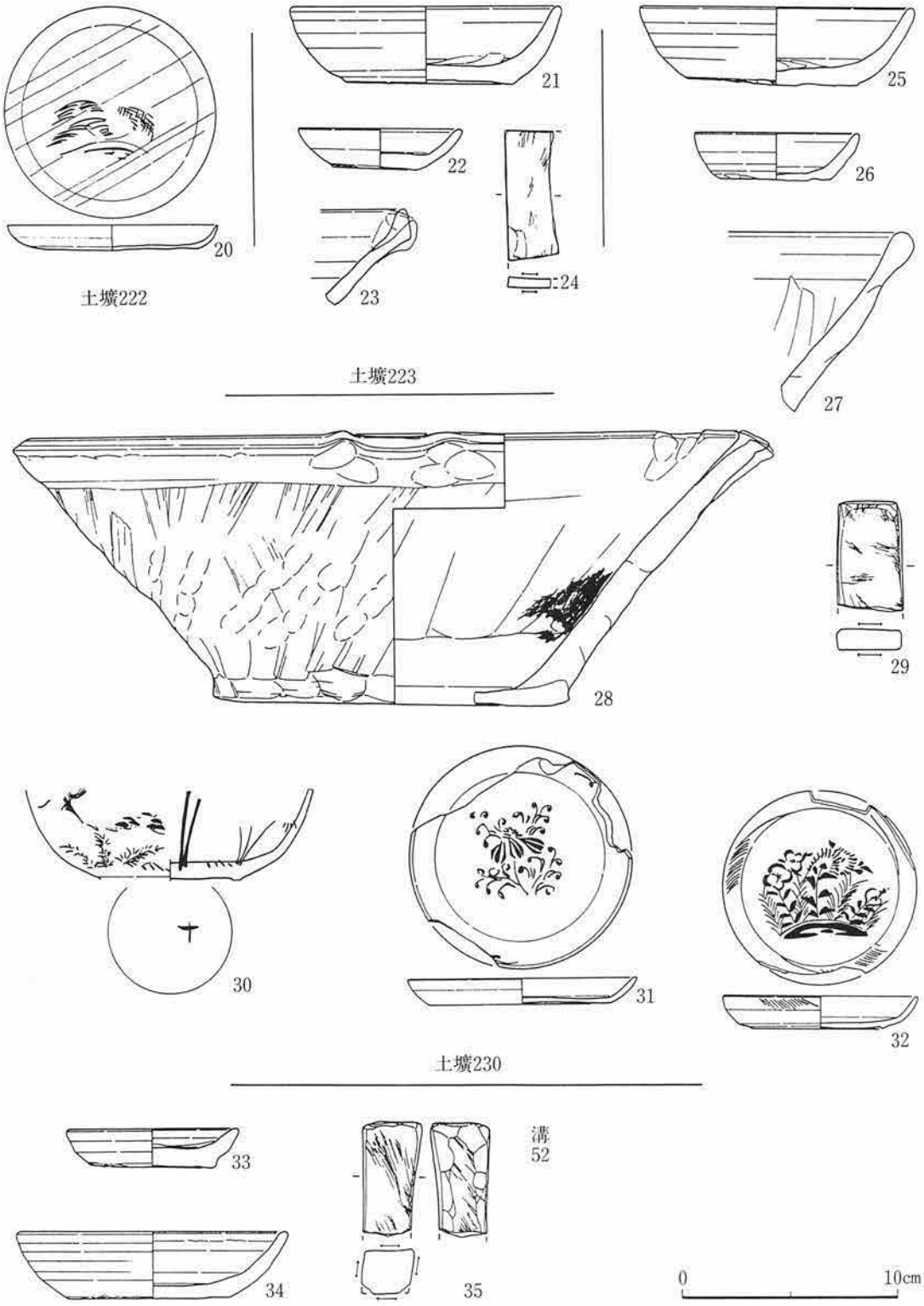


図21　区画Ⅰ－4 出土遺物(2)―土壙出土

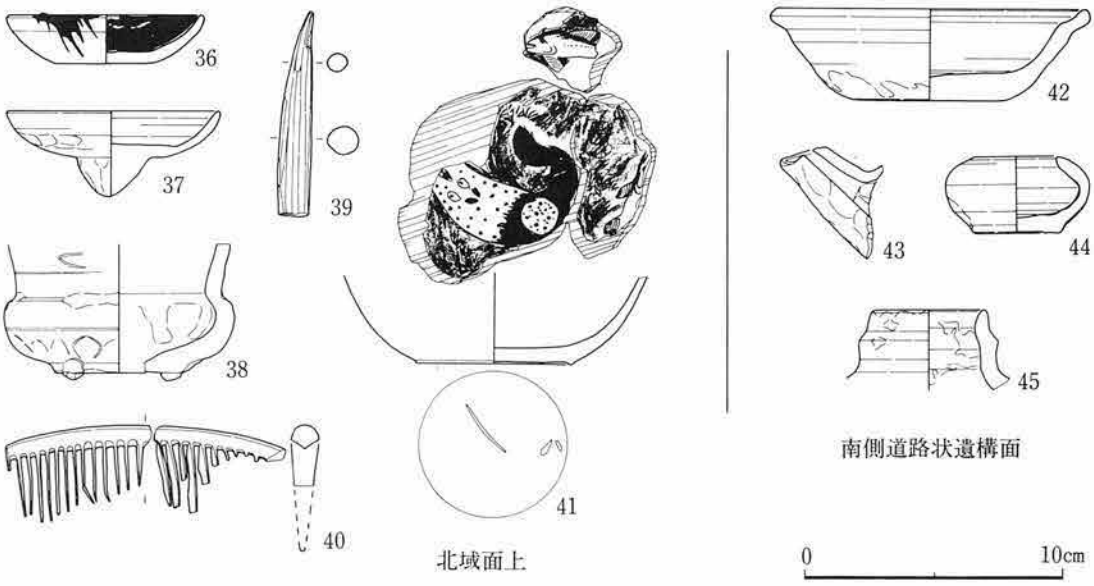


図22　区画Ⅰ－4 出土遺物(3)―面上出土

溝52出土遺物　33・34―かわらけ。33は楔形に斜め上方に伸びる器壁のもので、13世紀中葉の様相を持つ。34は14世紀代のもの。35―中砥。４面すべて砥面に使用されている。灰黒色の凝灰岩で、群馬上野砥と思われる。

面上出土遺物　36―黒漆の付着したかわらけ。かわらけ自体は14世紀代のもの。37―土製灯明具。白かわらけ質。ロクロ成形のあと外面下半部をヘラ削り、凸部を貼り付ける。38―瀬戸灰釉香炉。体部下半部に蓮弁文を持つ。39―角(つの)型をした木製品。栓か。40―漆塗りの櫛。目が粗い。41―エビと魚の描かれた添碗。茶色の添が前面に塗られ、エビの頭部・海草・魚の上辺が橙色の朱漆で、エビの尾部が黒漆のまま、エビの頭部付け根が淡い茶色の漆で描かれる。手の込んだ絵付である。魚はブリか。外底面には意味不明の刻文が朱漆下に見られる。塗師か木師屋の屋号であろうか。

南側道路状遺構面出土遺物　この付近で採集したものを取り上げるが、区画Ⅰ―２の南側で出土したものも含まれている。42―瀬戸灰釉折縁小皿。灰釉は灰緑色。43―同水注注口部。44―同小壺。釉薬は半ば以上剥落している。45―同瓶子口縁部。暗緑色の灰釉がかかっている。

第２節　下層の遺構と遺物

上層遺構面の下約30cm前後に存在する。この面においても、上層で認められた溝１および溝３はその下層構造が検出され、基本的な地割や主軸方位に大きな変化のないことが確認できた。なお、ここでは上層溝と位置にずれのない溝は、それぞれ番号の後にアルファベットのbを付して名称とした（例えば溝１b)。

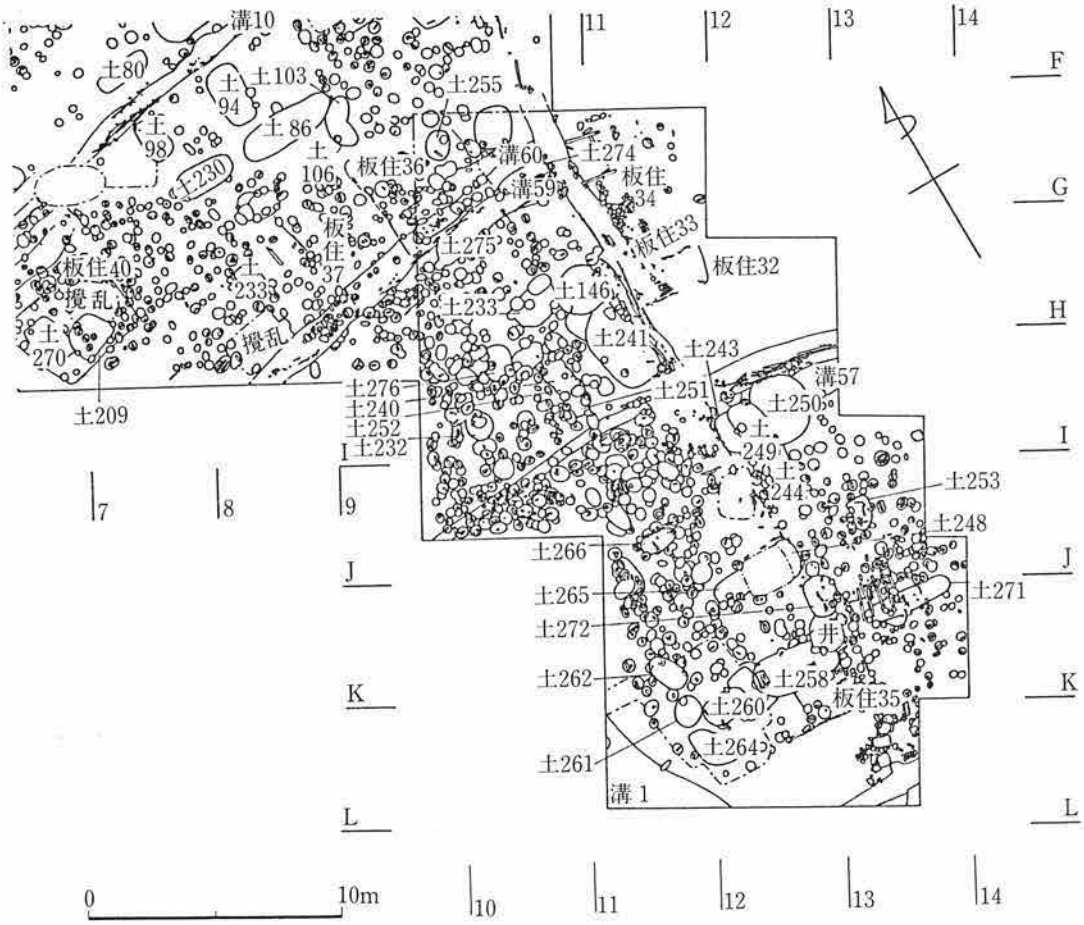


図23　下層面遺構図（一点鎖線以南が本報掲載対象範囲）

この面は全体に、上層で多くみられた板囲いの住居が少なく、替りにしっかりした柱通りを持つ大型の掘立柱建物がほぼ全面に検出された。

ここでも掲載対象の部分を、溝あるいは道路によって区分する。区画の名称は上層遺構と同様に１～４の仮称を用いる（ローマ数字のIIは下層面の意）。

１．区画II－１

溝60に北、溝3bに東、溝51に南をそれぞれ区切られた区画である。西側の限界は調査区外にあるが、溝１bの想定線を西限だとすれば、面積は約180㎡となる。ここからは数棟の掘立柱建物が検出され、東の溝３b脇には土壙が並んでいる。

とりあえず柱通りの通じるもの３棟を抽出しておいたが、新旧関係は現在検討中で、拡がりの再確認とともに、全体を報告する際までの課題としておく。ともかくも、現状では、この区画に相当規模の大きな掘立柱建物が認められるということは言える。

建物イ（仮称）は、西に伸びる可能性はあるが現状で４×４間、柱間各２mで約64㎡の床面積を持

つ。南側塀のような柱穴列と、東側に大きな土壙を伴なっている。

建物ロ（仮称）は東西５間×南北４間の柱通を持つ。南側は提示した区画を越えてしまうが、これは検討課題としておきたい。北の１間は土壙をよけた形で東の溝３bまで１間伸びる。柱間２m、床面積88m²の大きな建物である。

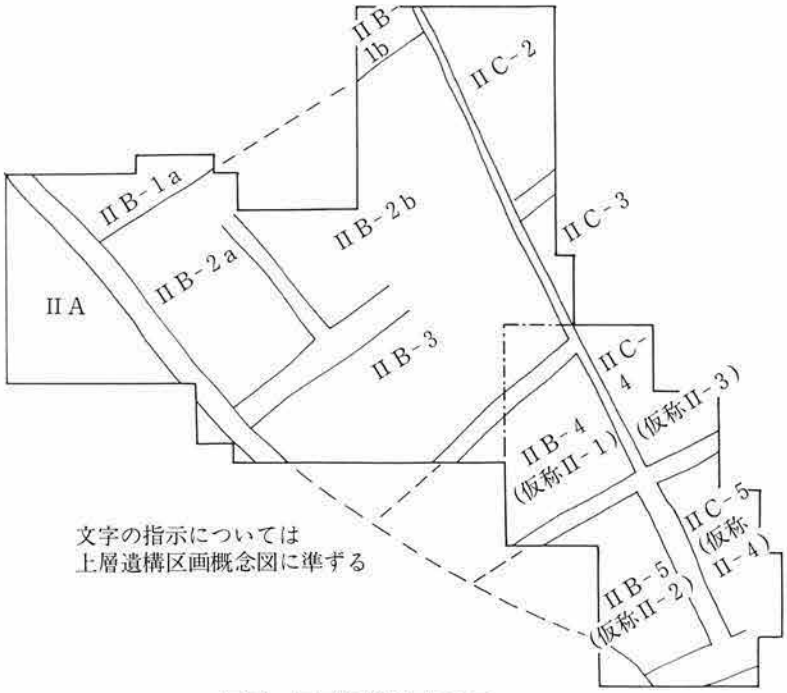


図24　下層遺構区画概念図

建物ハ（仮称）は現状で東西３間×南北４間の規模を持ち、北側と東側に板塀らしき柱穴列を伴なっているが、土壙などとの組合せ関係は確認できなかった。柱間は大体２mで、床面積約60m²になる。

出土遺物（図28）

掘立柱建物の範囲に含まれているものを主としている。

土壙276出土遺物　１-玉縁白磁碗。口径19cm。素地は灰白色でややきめが粗い。釉薬は灰味帯びた透明釉。

土壙277出土遺物　２-青白磁皿。底径３cm。水青色失透の釉薬がかかる。

面上出土遺物　３-青磁蓮弁文碗。口径16.9cm。４-青磁皿。口径12.7cm、底径5.4cm、器高2.5cm。同安窯系。５-白磁印英小皿。内面に、界線で区画された牡丹文が型押しされている。口径7.4cm、底径2.5cm、器高１cm。６-青白磁梅瓶蓋。口径６cm、頂部径5.4cm、器高3.3cm。７-青白磁合子。口径６cm、底径3.3cm、器高1.7cm。内面に赤色顔料が付着している。８-木製円板。縁辺部に３つの小孔が穿たれている。曲物の底部か。

溝59出土遺物　９-人形。折烏帽子を被る。板状で反対側の先端にも加工した痕跡がある。

溝60出土遺物　10-白磁口兀げ皿。灰色に失透しており、口縁部は外反する。口径11cm、底径6.9cm、器高3.1cm。11-水晶。下端を細かく打ち欠いた痕跡がある。火打石に使ったか。12-骨製小円板。上面は丁寧にヘラで削られ、縁辺部は尖る。中央部に円孔があく。直径2.1cm。ボタン状。

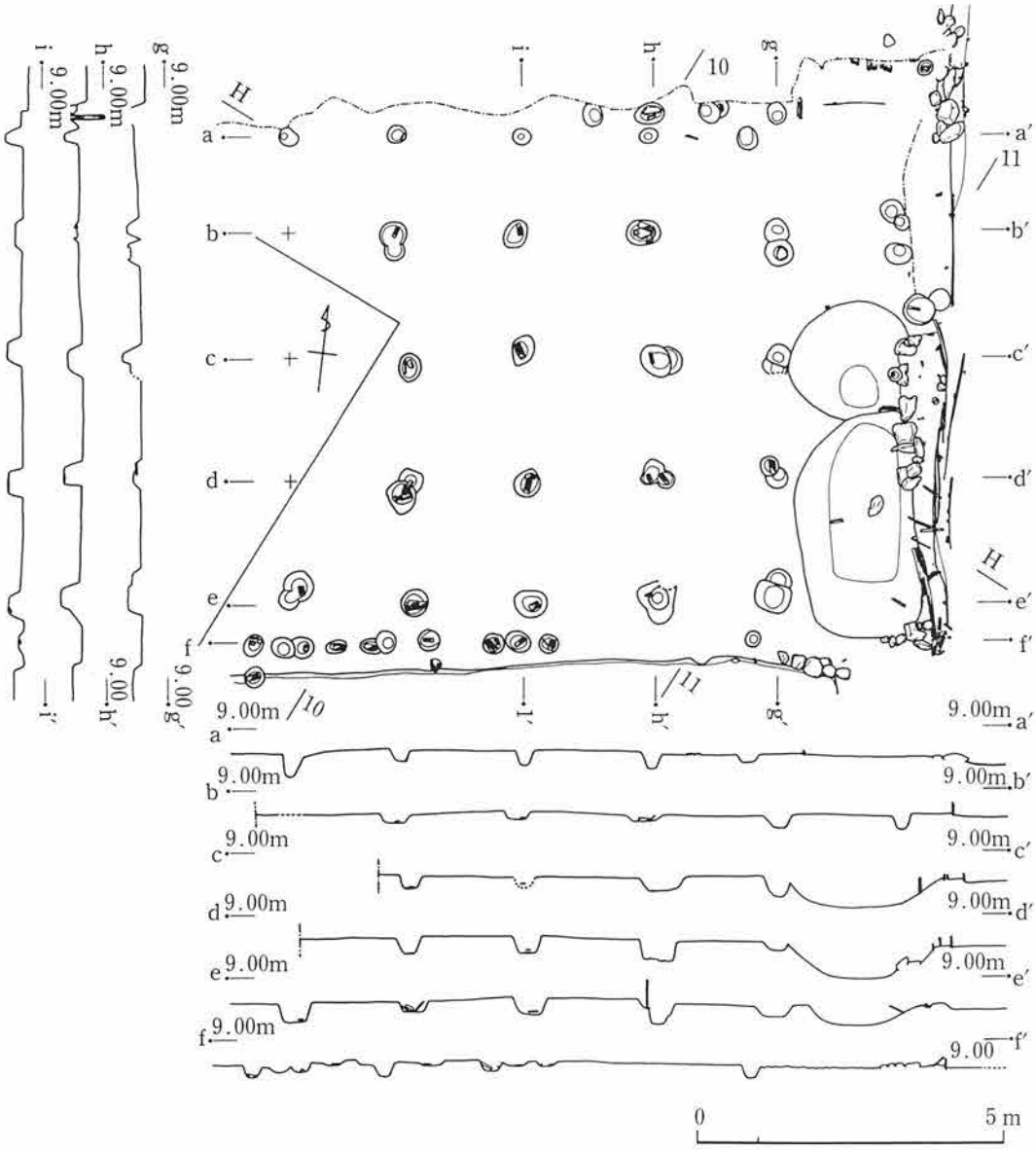


図25　区画II－1(1)―建物イ

2．区画II－2

ここは北側を溝51、南側を上層と同じく道路状遺構により区切られる。東側は判然としないが、土間状遺構東辺をもってとりあえず境界とした。西壁外に溝1bの想定線を設けると約170m²となり、仮りに区画II－1の約180m²と合計すれば、約450m²となり、これは1戸主の広さ（50平方丈―約455m²）にほぼ相当する。

この区画は、上層と同様に新旧2期以上に分けることができ、とりあえずはその代表的な遺構を紹介しておく。

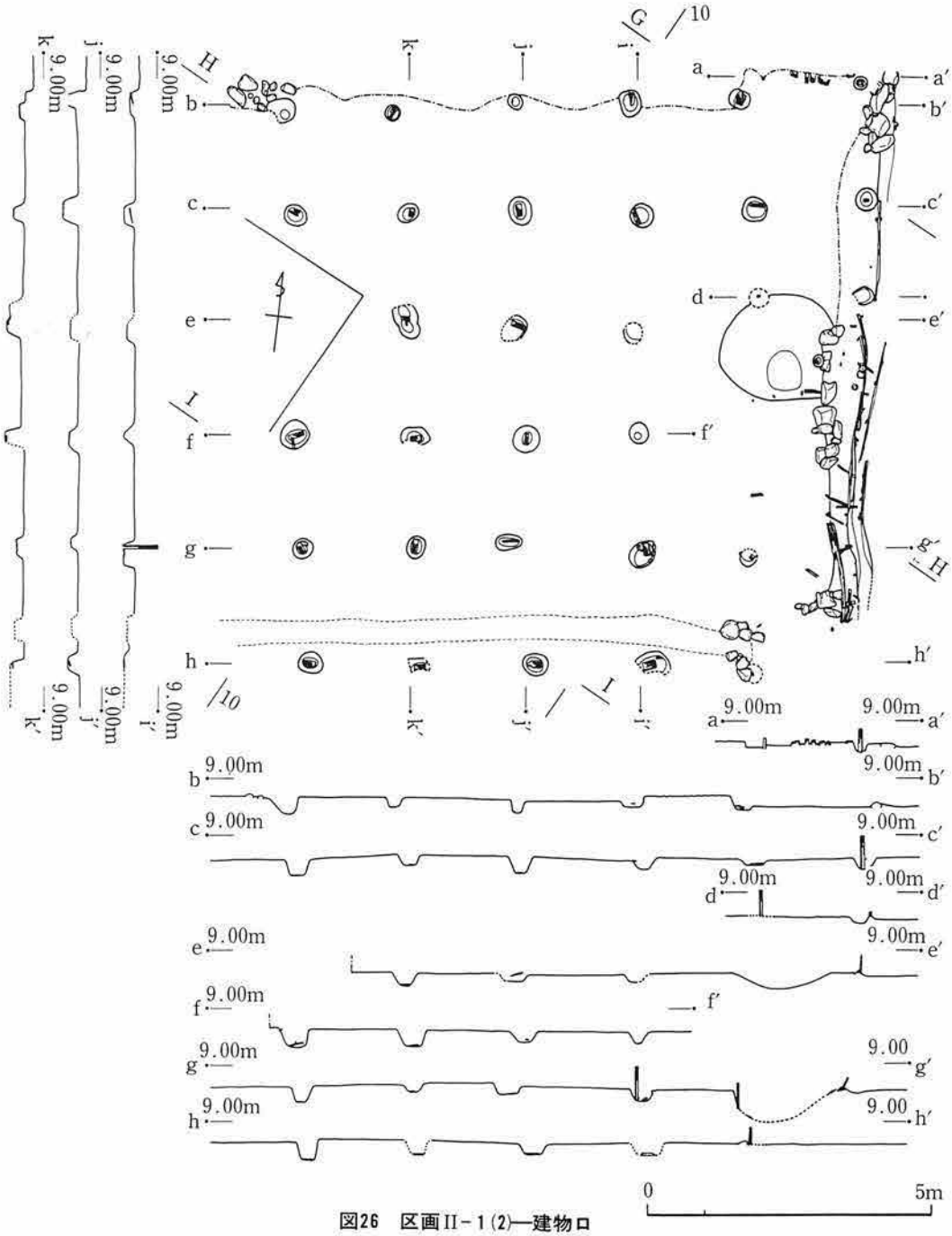


図26　区画II－1(2)―建物ロ

新しい時期の遺構（図29）

東辺に幅2m（北端）～3m（南端）の土間状遺構があり、この西側に現状で南北4間×東西2間の掘立柱建物が存在する。しかしこの二つの遺構は主軸方位を異にしており（掘立柱建物が9度前後西に傾く）、組合せ関係が成立するかどうかは検討を要する。土間状遺構には縦板の間仕切りが幾

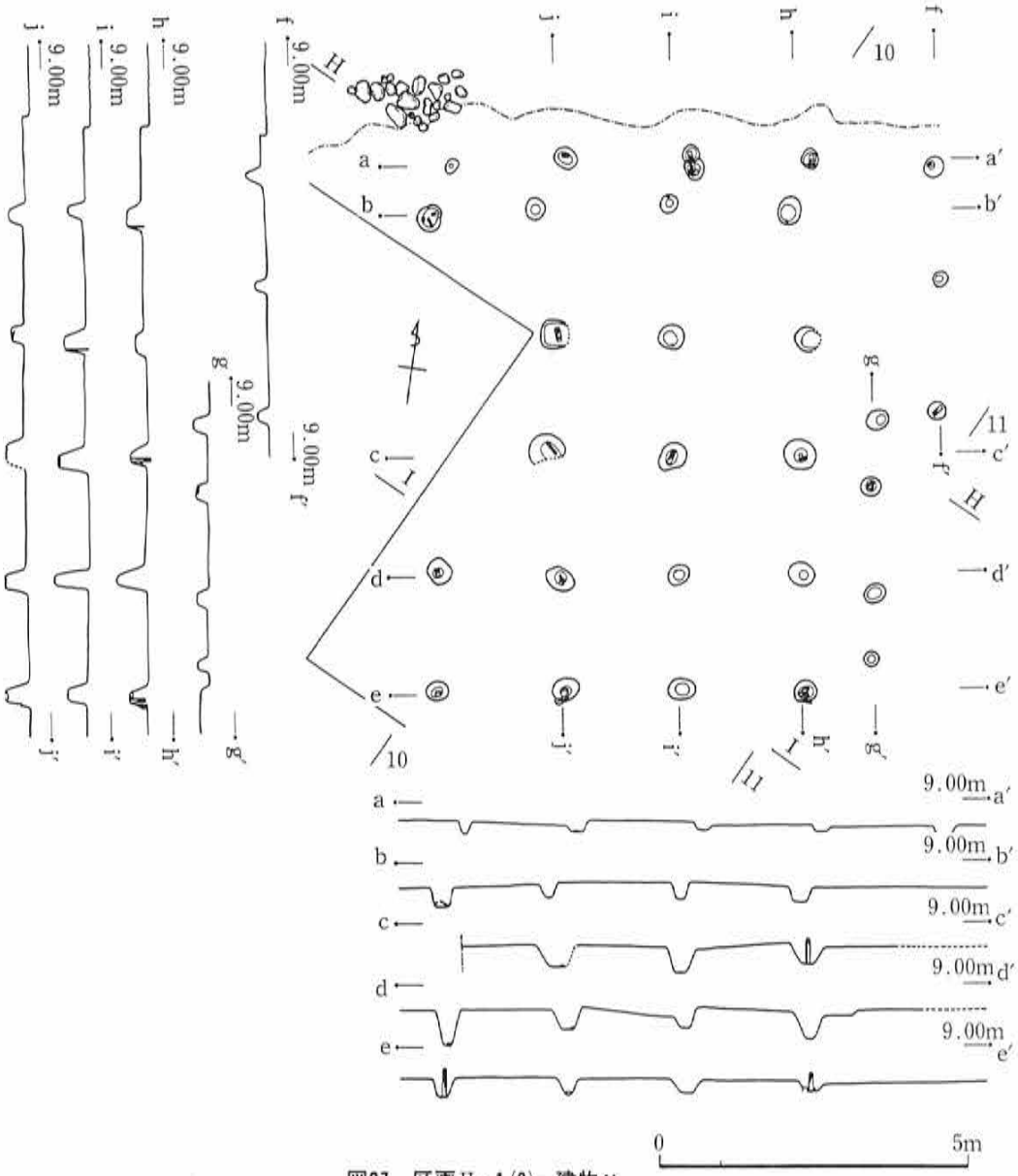


図27　区画Ⅱ－1(3)―建物ハ

つか見られ、南端のものには、版木と覚しい三枚の板が出土した土壙258が、長楕円形の東半分を取り込まれる格好になっている。

旧い時期の遺構（図30）

東西３間×南北６間の大きな掘立柱建物が存在する。柱間２ｍで床面積72㎡となる。北端は溝51bに始まり、南端はほとんど道路状遺構までおよんでいる。

なお、この時期にはもう何棟か掘立柱建物が存在するが、総括的報告書に詳細は委ねたい。

出土遺物（図31～33）

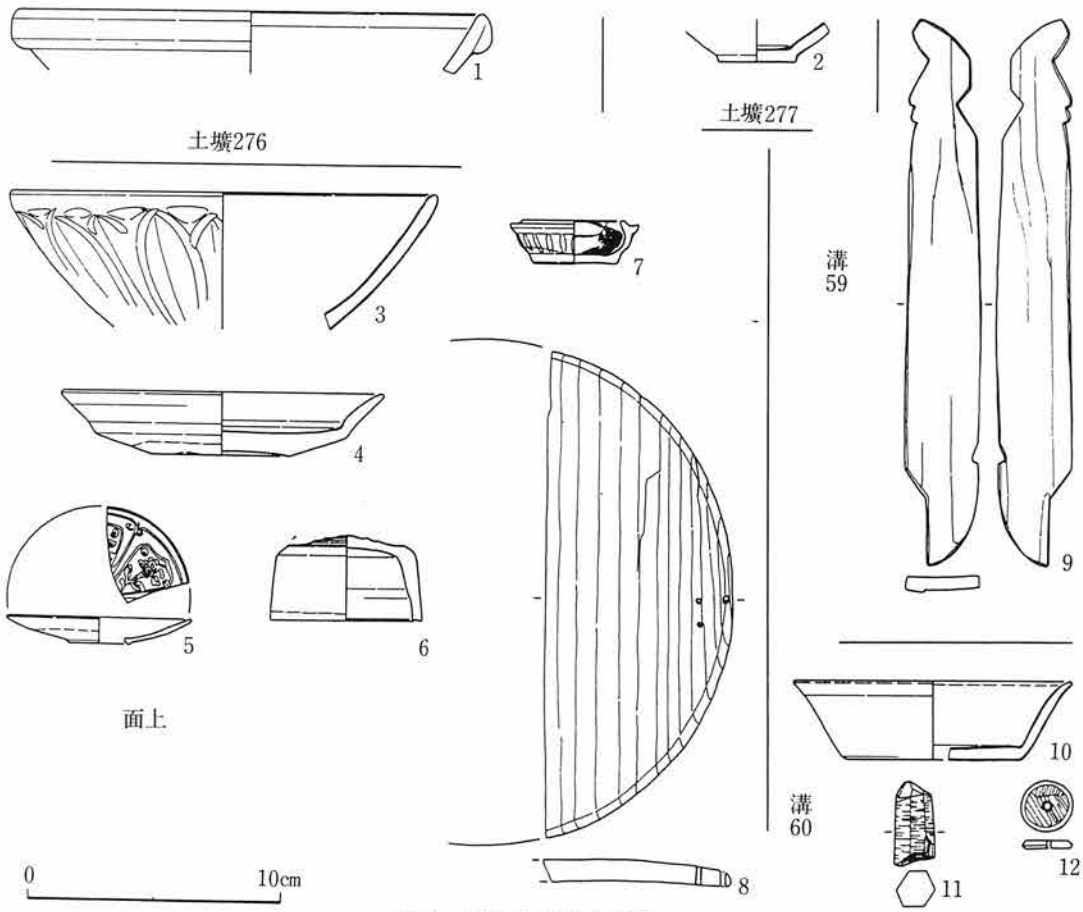


図28　区画II－1出土遺物

新期面上出土遺物　　1－常滑こね鉢。角形の口縁部で、片口が付く。2－魚住こね鉢。灰色のやや粘り強い胎土のもの。3・4－山茶碗窯系こね鉢。4の口縁部内側には煤が付着している。5－瀬戸袋物蓋。ロクロ成形。6－吹子羽口。直径5.5cm。7－水晶。下端を細かく打突した痕跡が見られる。火打石に使ったか、あるいは何かの未成品であろう。

土壙258出土遺物（図32・33）　　小鳥や竹などを陽刻した板が三枚重なって出土した。1の片面（1a面）には三羽の雀が、もう片面（1b面）には画面左上から次第に下がってくる曲線と、笹が浮き彫りされている。1a面と1b面を合わせてみると、組合せ試案（図33）下段に示したように、1a面手前の後ろ向きの雀が、1b面やや右寄の笹の窪んだところに都合よく組み込まれることがわかる。1b面上方の斜めの曲線は、山の端だろうか。なお1a面左側の雀の下方にある草葉の形は、密着して出土した2b面凸部の圧痕である。これは2b面も、また2a面と3a面も同様の状況であり、つまり相互にネガとポジの関係になる。2は籬（2a面）と、渓流または岩場の笹（熊笹？）が浮き彫りされる。組合せてみると2a面左方の空白部分に2b面の模様が収まる。2b面右上方の、曲げられた竹のように見えるものは何かわからない。3には両面に竹が彫られ、これは上下につながった。

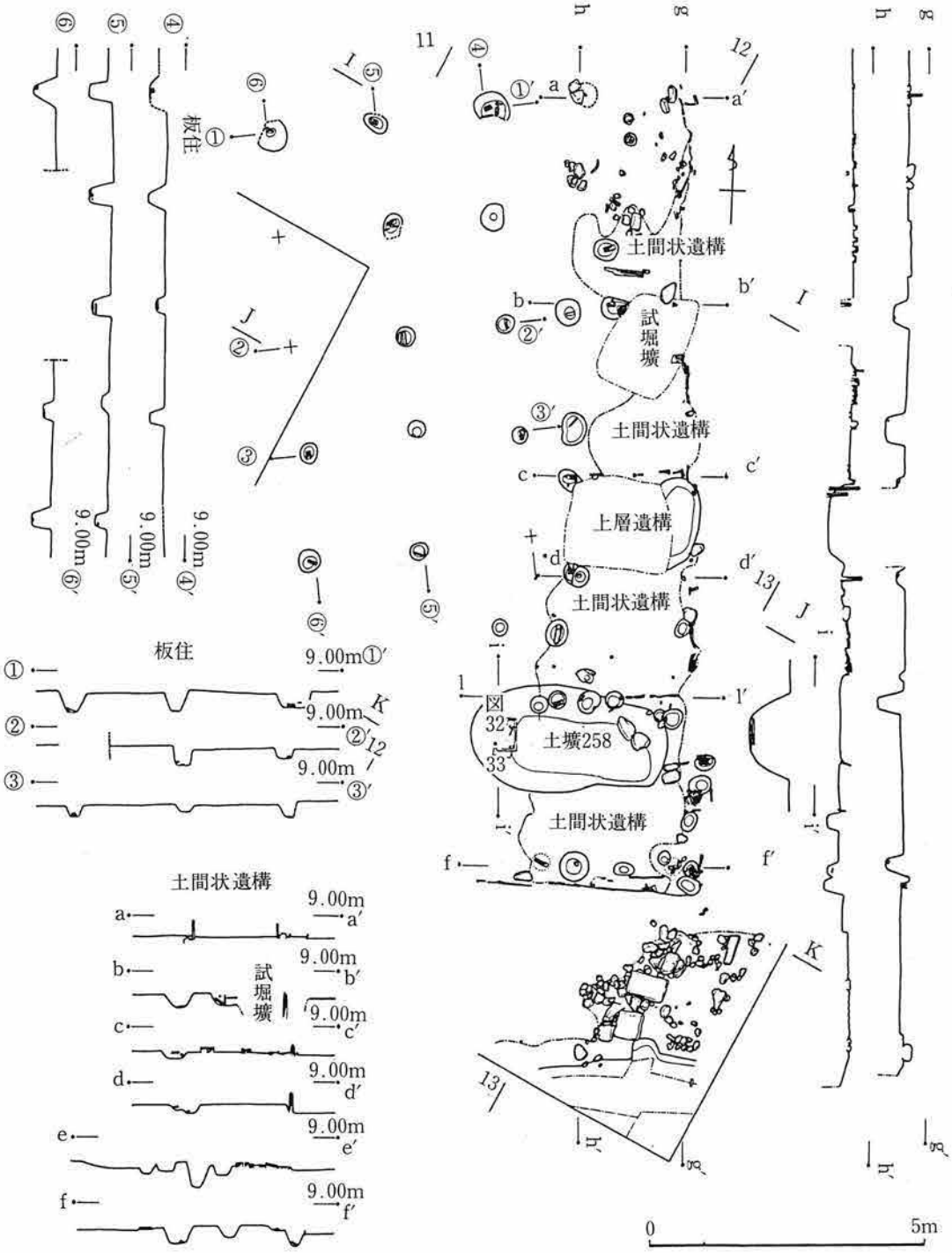


図29　区画Ⅱ－2(1)―新期

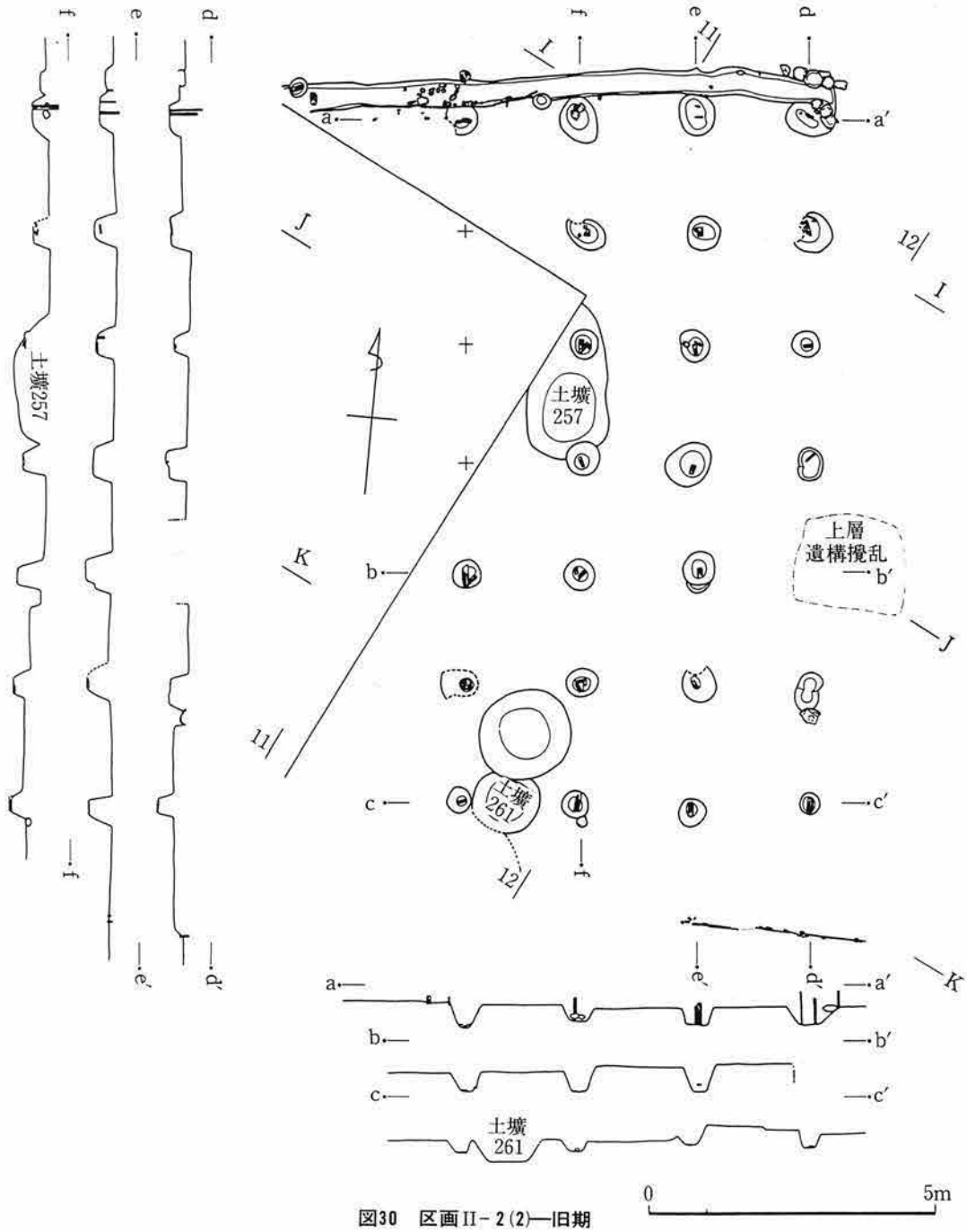


図30　区画II－2(2)―旧期

大きさは1－56.2×33.7cm、厚さ2.2cm前後、2－55.6×34.8cm、厚さ2.3cm前後、3－52.5×34.5cm、厚さ2.3cm前後である。なお3b面右端は焼けこげている。三枚いずれも文様以外の地の部分は、浅い丸型の彫刻刀によって粗く削り出されたままで、しかも何より、表裏が組み合わされて文様として成立するところから、これらの板自体が装飾品でないことは明らかである。すなわち版木の如きものと

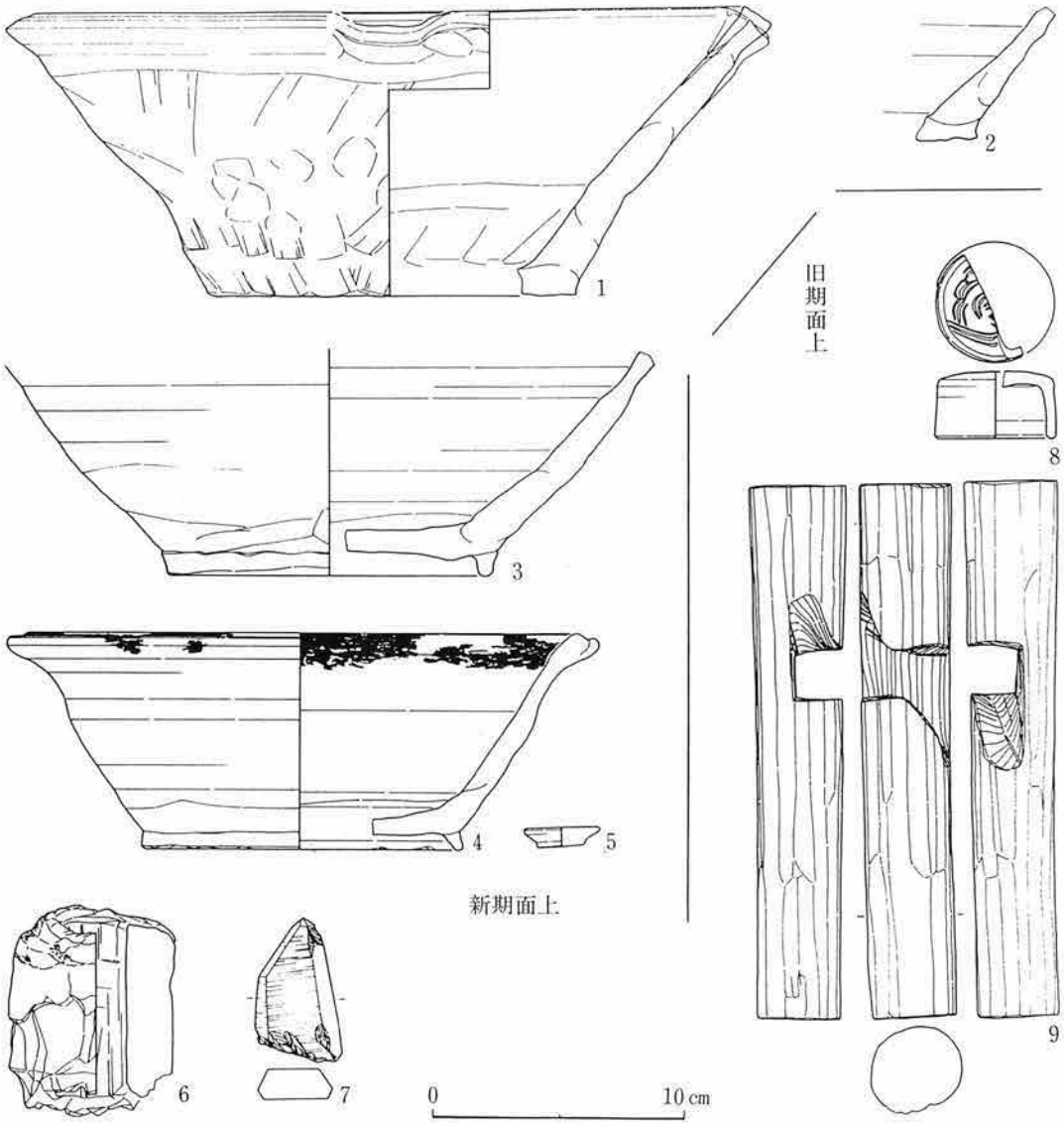


図31　区画II－2 出土遺物(1)

判定せざるを得ない。図33の組合せ試案は、例えば鶴岡八幡宮所蔵の「籬菊螺鈿蒔絵硯箱」等の文様を参考に構成したものであり、この位置でタテ・ヨコの比率は３：２になる。文様部分に使われた彫刻刀は相当に鋭利で、木の材質も細かな刳込みに耐え得る粘りを持っているようである。川瀬一馬氏によると、江戸時代頃までは天然の山桜が使われていたという(「東国の印刷文化と金沢文庫」『金沢文庫研究』第17巻９号1971)。

旧期面上出土遺物　　８-青白磁梅瓶蓋。鳳凰文と思われる文様の一部がのぞいている。９-矯め木。釣り竿等の曲りを矯正するためのもの。「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目395番地点」に出土例がある（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』1989)。

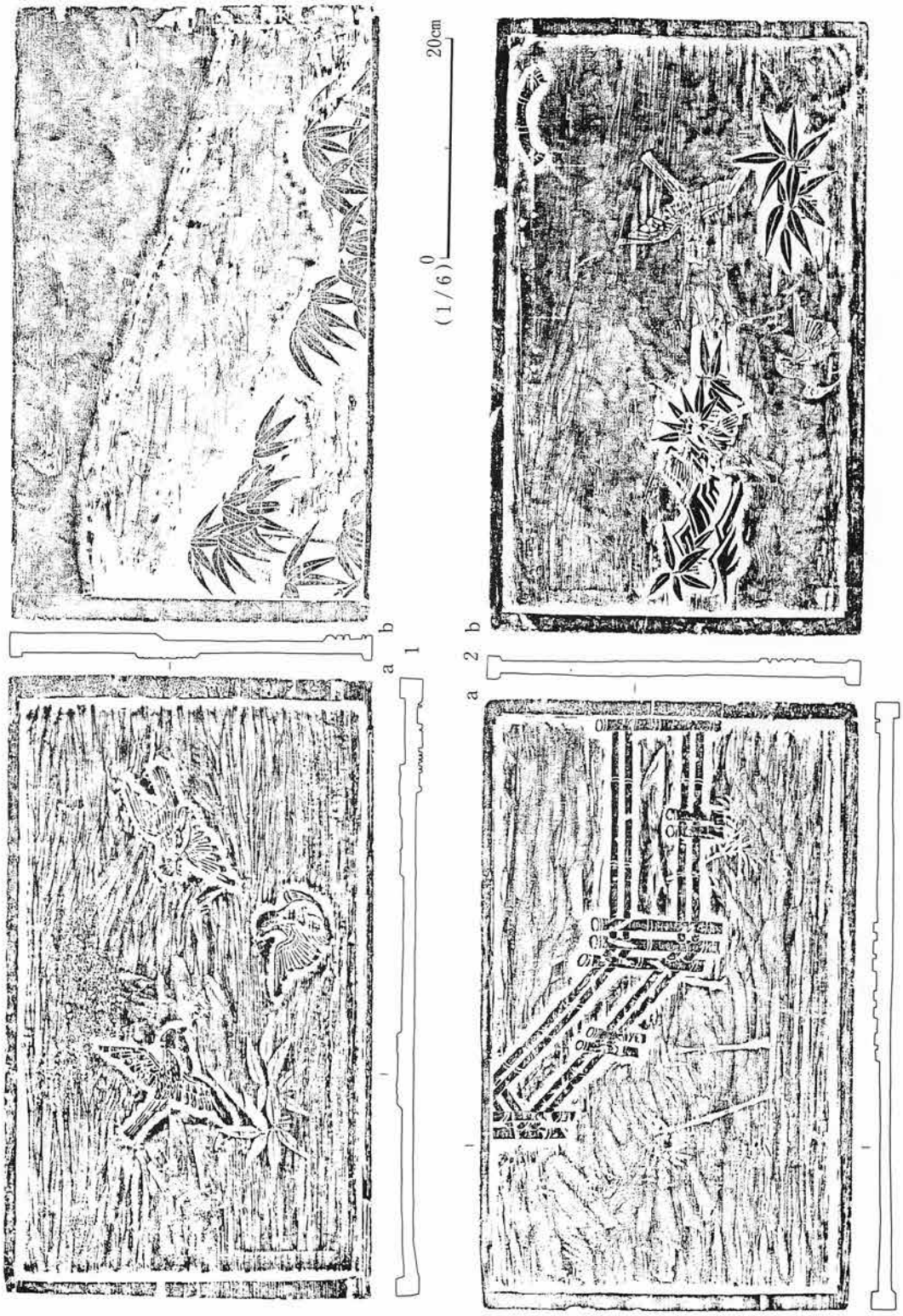
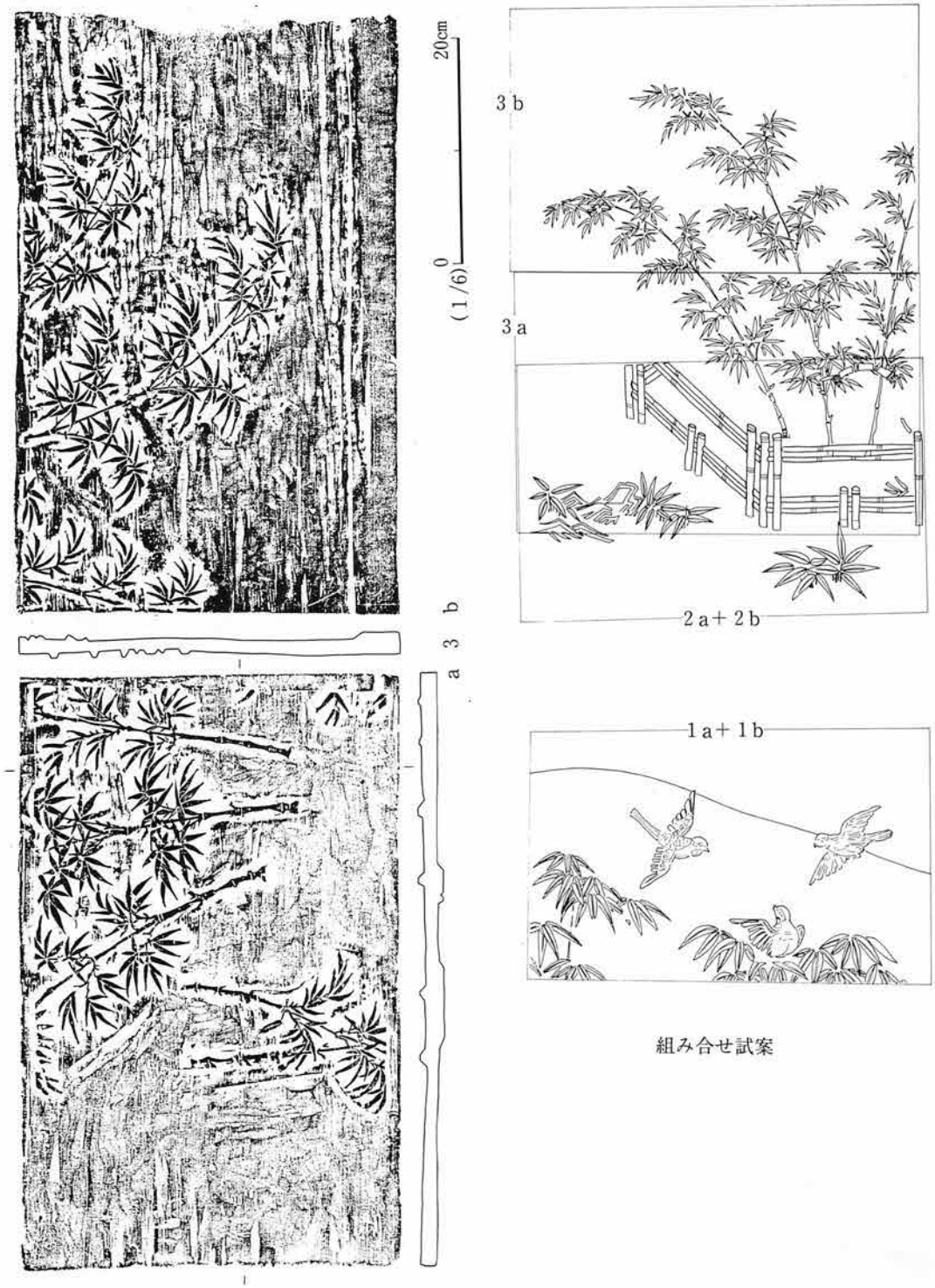


図32　区画Ⅱ－2出土遺物(2)―土壙258出土



組み合せ試案

図33　区画Ⅱ-2出土遺物(3)―土壙258出土

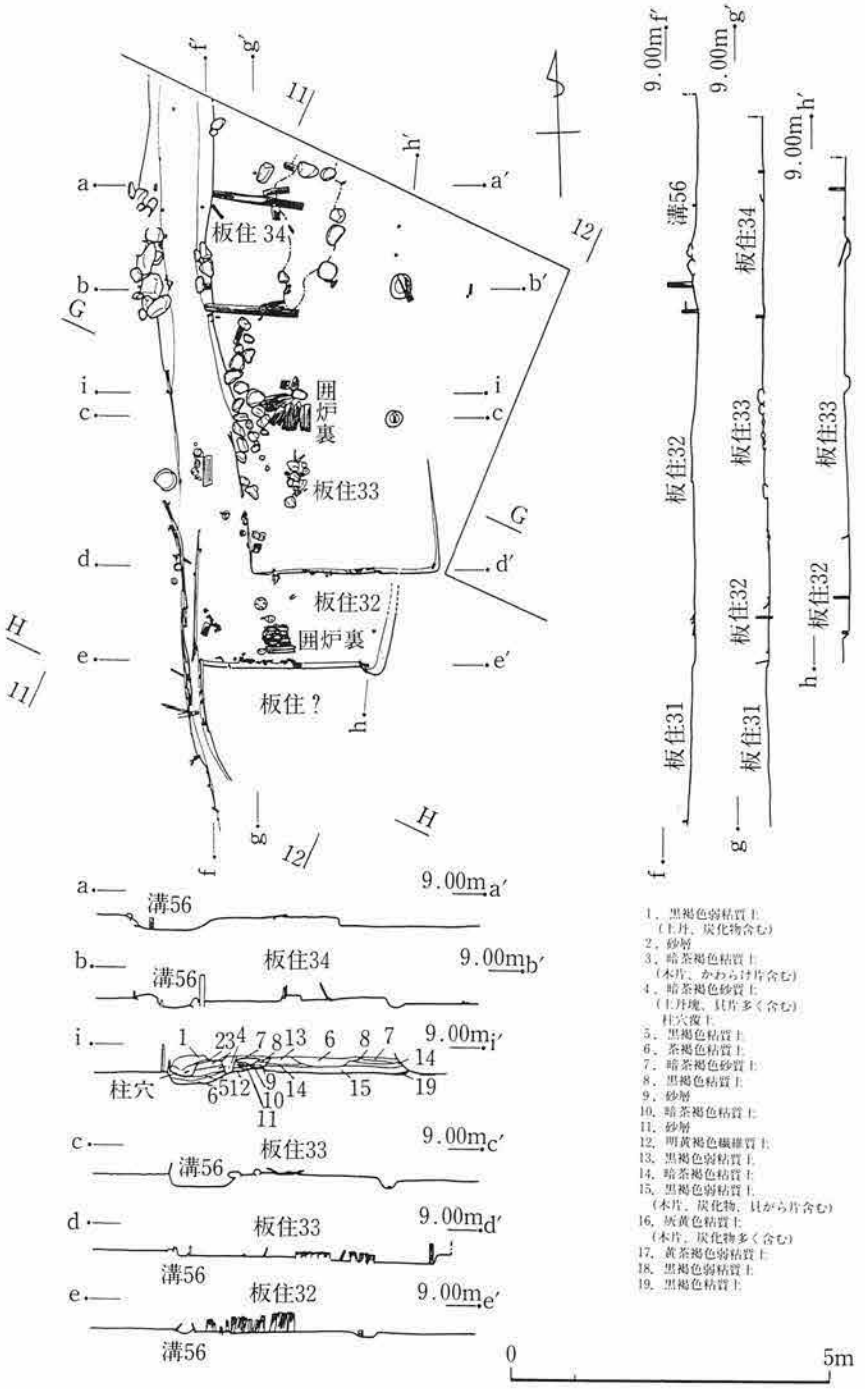

板住34
囲炉裏
板住33
板住32
囲炉裏
板住？
溝56
柱穴
9.00m
1．黒褐色弱粘質土
（土片、炭化物含む）
2．砂層
3．暗茶褐色粘質土
（木片、かわらけ片含む）
4．暗茶褐色砂質土
（土丹塊、貝片多く含む）
柱穴覆土
5．黒褐色粘質土
6．茶褐色粘質土
7．暗茶褐色砂質土
8．黒褐色粘質土
9．砂層
10．暗茶褐色粘質土
11．砂層
12．明黄褐色礫混質土
13．黒褐色弱粘質土
14．暗茶褐色粘質土
15．黒褐色弱粘質土
（木片、炭化物、貝がら片含む）
16．灰黄色粘質土
（木片、炭化物多く含む）
17．黄茶褐色弱粘質土
18．黒褐色弱粘質土
19．黒褐色粘質土
0
5m

図34　区画Ⅱ－3

3　区画II－3

溝3bを西限、溝58を南限としており、東側は調査区外に伸び、北側は明確にし得なかった。この区画は一体に面自体が明瞭ではなく、遺構の遺存状態も悪かったが、板囲い住居と覚しい板組や落込みがいくつか観察できた。

板囲い住居34は区画内の北端にあり、横桟または住居の板仕切りと思われる2本の角材（長さ1.4mと1.5m）が、溝3bに直角に置かれている。板囲い住居33は、北側の34とは多分同時期に存在したものと思われ、中央部やや西寄に囲炉裏を持つ。南側の32と重なるが、新旧の確認はできず、あるいはこれも同時期であった可能性はある。板囲い住居32には、南辺近くに曲物が上に載った板組の囲炉裏がある。さらにこの32の南には、まことに不明瞭ながらもう一棟板囲いが存在した可能性がある。もし、これらが一連の住居であるならば、例えば、『一遍聖絵』鎌倉小袋坂の場面などに見られる町屋住居に近いものであろう。

出土遺物（図37）

板囲い住居32南出土遺物　　1－環状の骨製品。平たいので玉璧形に近い。上面に菊花文が彫られ、側縁には黒漆が塗られる。また、三ヶ所が不整形に削り取られ、表面に漆が塗られている。

溝58出土遺物　　2－木簡断欠。

4．区画II－4

北側を溝57・58に、南側を道路状遺構に区切られた区画で、東側は調査区東壁外に伸び、西側は区画II－2新期の、東側土間状遺構東辺をもって境界とした。

区画北側には、隅丸長方形の土壙がいくつか群集し、中央部には柱穴が多数みられる。また南半部で柱穴群の下から木組井戸、長楕円形土壙等が検出された。

新しい時期の遺構

掘立柱建物は、東側の調査区外に伸びる可能性はあるが、現状で東西2間×南北4間、北側と南側には板塀のような柱列がある。建物の柱通とはずれるので、廂とか榱ではないと思われる。柱間は平均して2mに少し足りず、「本京間」6尺5寸（197cm）が用いられている可能性がある。床面積30.03m²。

土壙は4基ほどが切合っていたが、新旧関係は明確にし得なかった。非常に近い時期の掘り直しであろう。土壙244には、これを取り囲むように柱穴が存在するので、上屋が想定される。

区画南端には、かまくら石切石が道路状遺構の上に置かれ、南側壁際の溝に関係のある、例えば橋のような施設が考えられる。

旧い時期の遺構

木組み井戸・長楕円形土壙、板囲い住居等が検出された。土壙と井戸は板囲い住居に伴なう形で存在し、東西に伸びる土壙271は、その西半分が板囲い住居に取込まれる形になっている。また南北

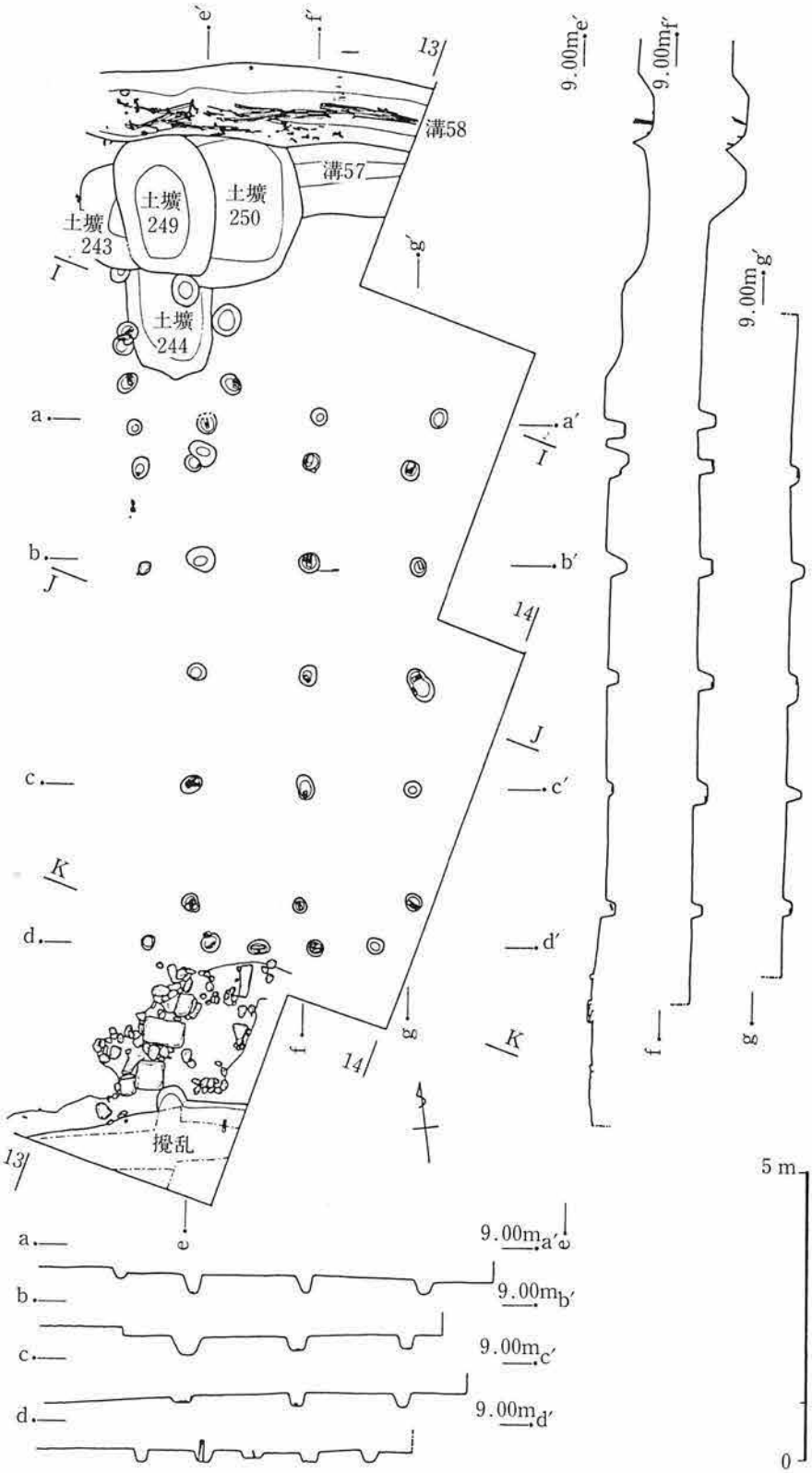


図35　区画II－4(1)―新期

に主軸を持つ土壙272は板囲い住居の西辺に接する。板囲い住居の上には、角材が住居と平行または直交して存在していたが、何であるかは不明。建物の構造材が潰れたものである可能性がある。

出土遺物（図37）

新期柱穴出土遺物　3－ものさし。一端を欠損するが、目盛の総長は24.2cmまで読める。間隔は、大目盛が3.25～3.65cmと均一ではなく、従って、その半分の区画の小目盛も1.55～1.9cmとバラつきがある。5番目の大目盛には漆による、おそらく中心を示す印があり、ここまでだと17.3cmで、倍数は34.6cmとなる。これが当地点の1尺であろうか。13-I柱穴3009出土。

新期土壙243・249・250出土遺物　4－青磁鉢。口径20.5cm。

旧期板囲い住居38出土遺物　5－高麗青磁ぶどう文瓶子。図の黒く塗ったところが黒土、線描のところが白土の象嵌である。体部中位から下半部にかけての急激にすぼまる部位で、内面にはロクロ目が残る。素地は器表近くで灰色、内側でやや黄味を帯び、岩石質に近く焼き上っている。釉薬は灰緑色透明で、釉表に針穴大の小孔がある。

旧期面上出土遺物　6－白磁口兀げ皿。素地は灰黄色で釉薬は灰色を呈し、焼成不長のため溶け切っていない。7－白磁合子身。素地は乳白色結晶質で、釉薬は無色透明。

旧期柱穴出土遺物　8－将棋駒。表面に「桂馬」、裏面に「金」が読める。13-I柱穴3432出土。

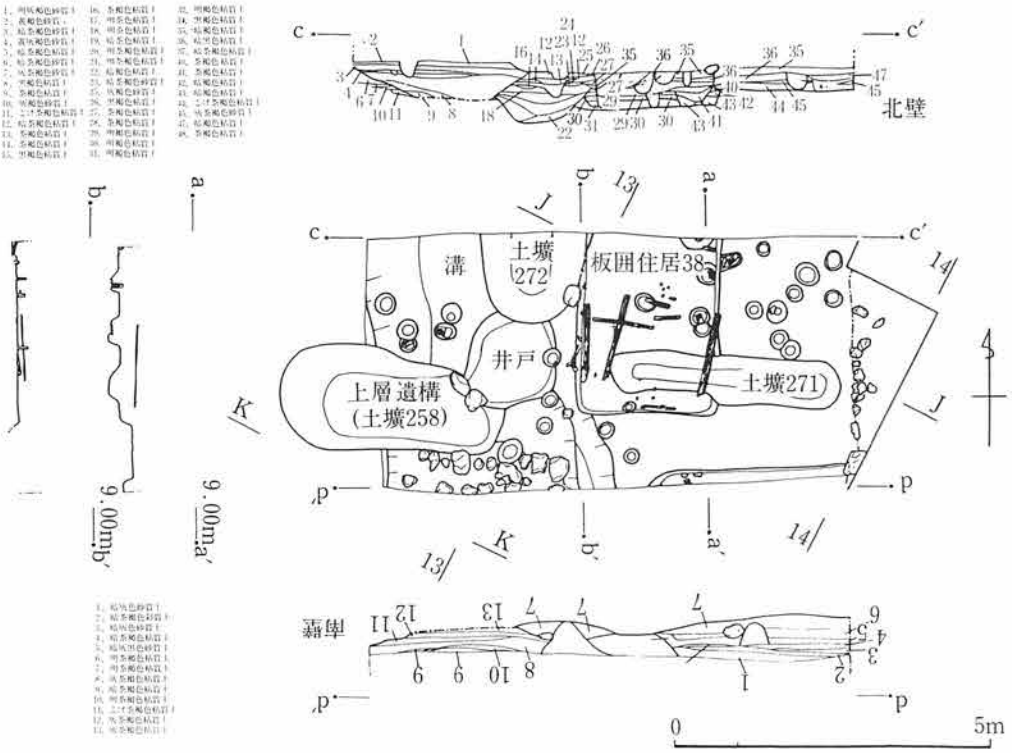


図36　区画II－4(2)―旧期

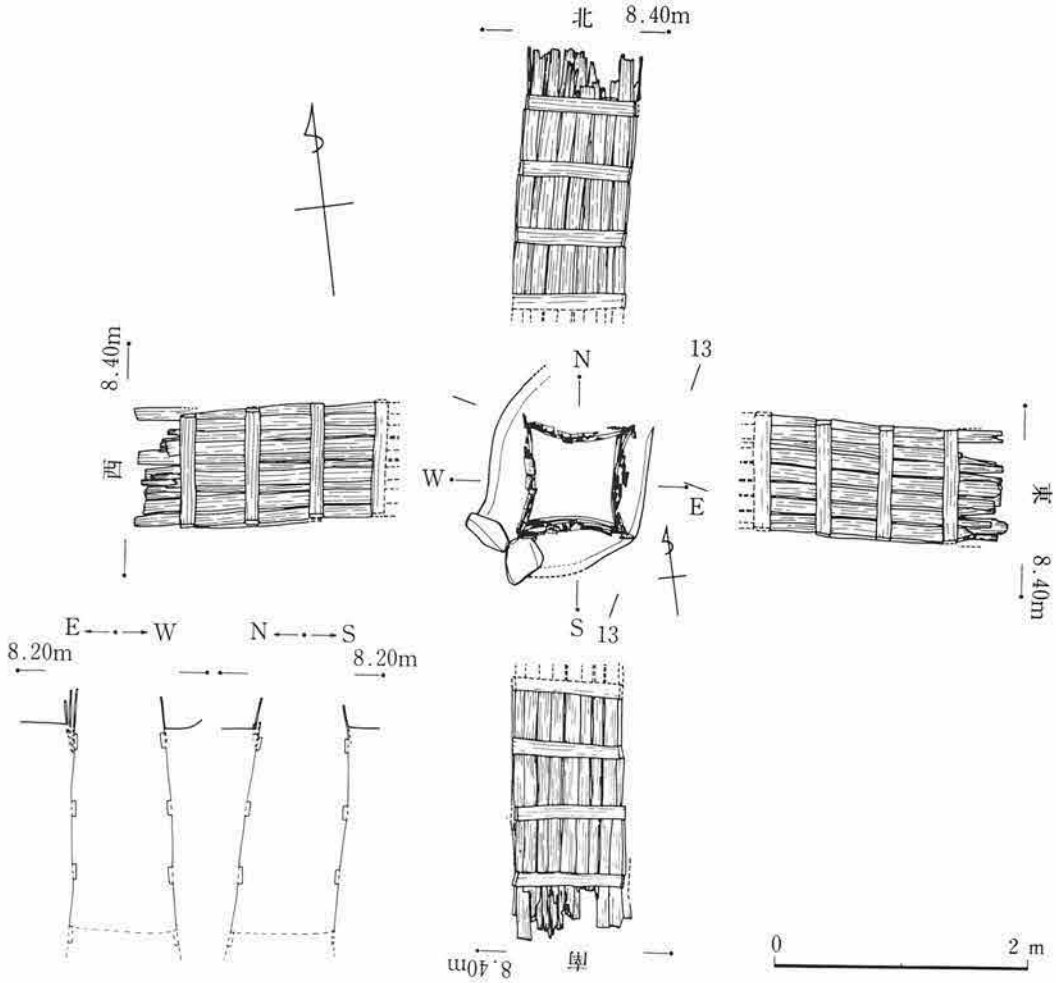


図37　区画II－4　井戸

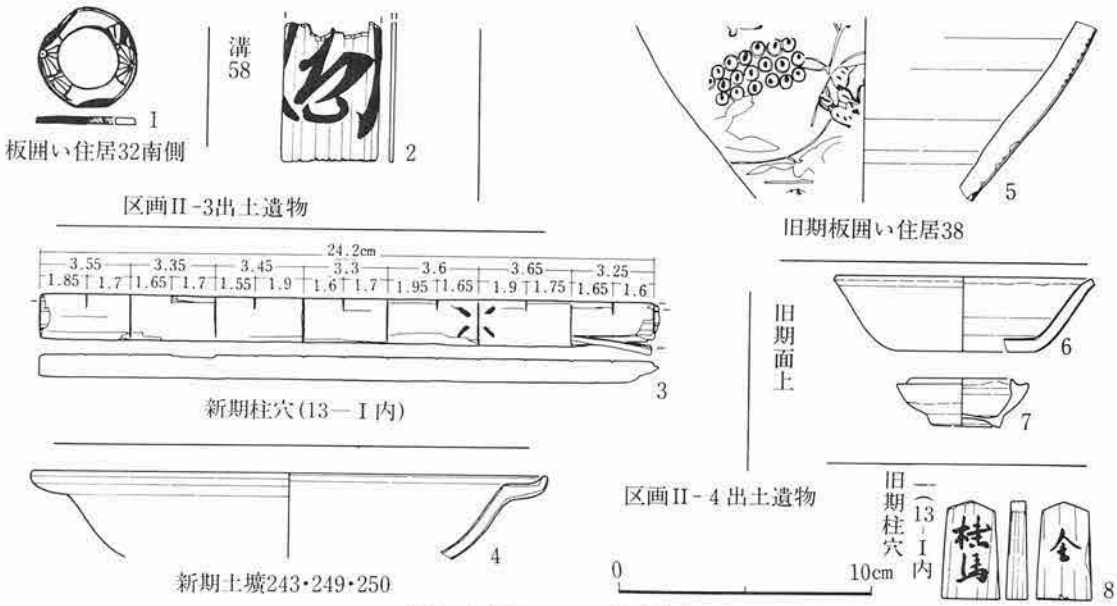


図38　区画II－3・4出土遺物

第3節　他区画からの出土遺物

原因者負担による調査地点出土遺物のうち、いくつかを本報で報告しておく。その他は総括報告書を待たれたい。

1．上層遺構面出土遺物

1-緑釉磁器。白磁の外面～高台畳付内側まで鉛緑釉がかかる。素地は灰白色で気孔多く、ややきめ粗い。透明釉が内面のみかかり、高台内外底面は露胎。高台は左回りロクロで高く削り出される。高台内に熔着痕。福建省の産であろう。7・8-C・D土壙7出土。2-三ッ鱗文漆皿。三ッ鱗文は朱漆の線描。無高台。9-E土壙10出土。3-呪符木簡。上から、鬼の異字、目玉が4つ、鬼の異字、「急々如律令」とある。九-E土壙42出土。4-漆皿。菊花または車輪が描かれる。無高台。8-B土壙77出土。5-漆塗膳脚肘木。出土地点同前。6・7-いずれも6-G土壙203出土。骨製笄と漆塗膳脚。8-陽物。土壙213出土。木の枝分れ部分のこぶをそのまま亀頭のふくらみに利用。9・10-いずれも土壙216出土のかわらけ。14世紀。

11～18-8-G・H土壙218出土。11・12-漆塗膳脚。13-漆椀。内面に梅花文。14・15・16-木製円板。14は穿孔があり、独楽である可能性がある。15は紡綞車の形をしているが、質量がやや不足しているかに思われ、不明。16も不明。17-おそらく、のみのような工具の握り部分。巻きつけられた繊維や残る。18-人形。19-骨製品。中央部に孔があけられ、三羽の蝶が上面に陽刻されている。20-漆皿。無高台。

21-木製の面。12.8×9.5cm。目と口の形姿、および額とこめかみのしわから、笑顔が表現されていることがわかる。上辺と眼窩の上部に墨が塗られており、それぞれ頭髪と、おそらくまつ毛の表現であろう。頭部両側に、紐を通すための小孔が2孔ずつあけられているが、位置が不自然で、子供用にしても顔につけたものとするのは留保が要る。9-B板囲い住居6出土。22-漆塗堅櫛。8・9-F・G板囲い住居26出土。23-木製の容器蓋か。小孔が二ヶ所ある。出土位置は同前。

24～28-10・11-F・Gかわらけ溜り7のかわらけであり、区画I-1板囲い住居22と溝3の間にある(追加資料)。14世紀中葉を中心としたもの。

29～33-面上および面の柱穴出土の瀬戸。31は仏花瓶脚部、33は瓶子。34・35-骨製小円盤。双穴の駒か。36-無高台漆皿。37-木製の、おそらく容器の蓋。38-おそらく女びなであろう。頭部から背にかけて、髪が墨で描かれている。高4cm、幅3.4cm(推定)。図43-57と一対になる可能性が強いが、ひな人形としてはおそらく最も古いものと思われる。5・E柱穴出土。

39-滑石製印判。上下の木口に、おそらく把手を差込むための小孔が穿たれている。6-G出土。

40-呪符木簡。圭頭型。「もろもろのなをのそくふた」とあり、「諸々の儺を除く札」の意であろう。「な」は「なむ(難)」の書き誤りである可能性もあるが、いずれにせよ追儺の呪意が込められているのは間違いない。釘で打ちつけられた板の裏に書かれたものであり、家屋の入口や梁などに貼ら

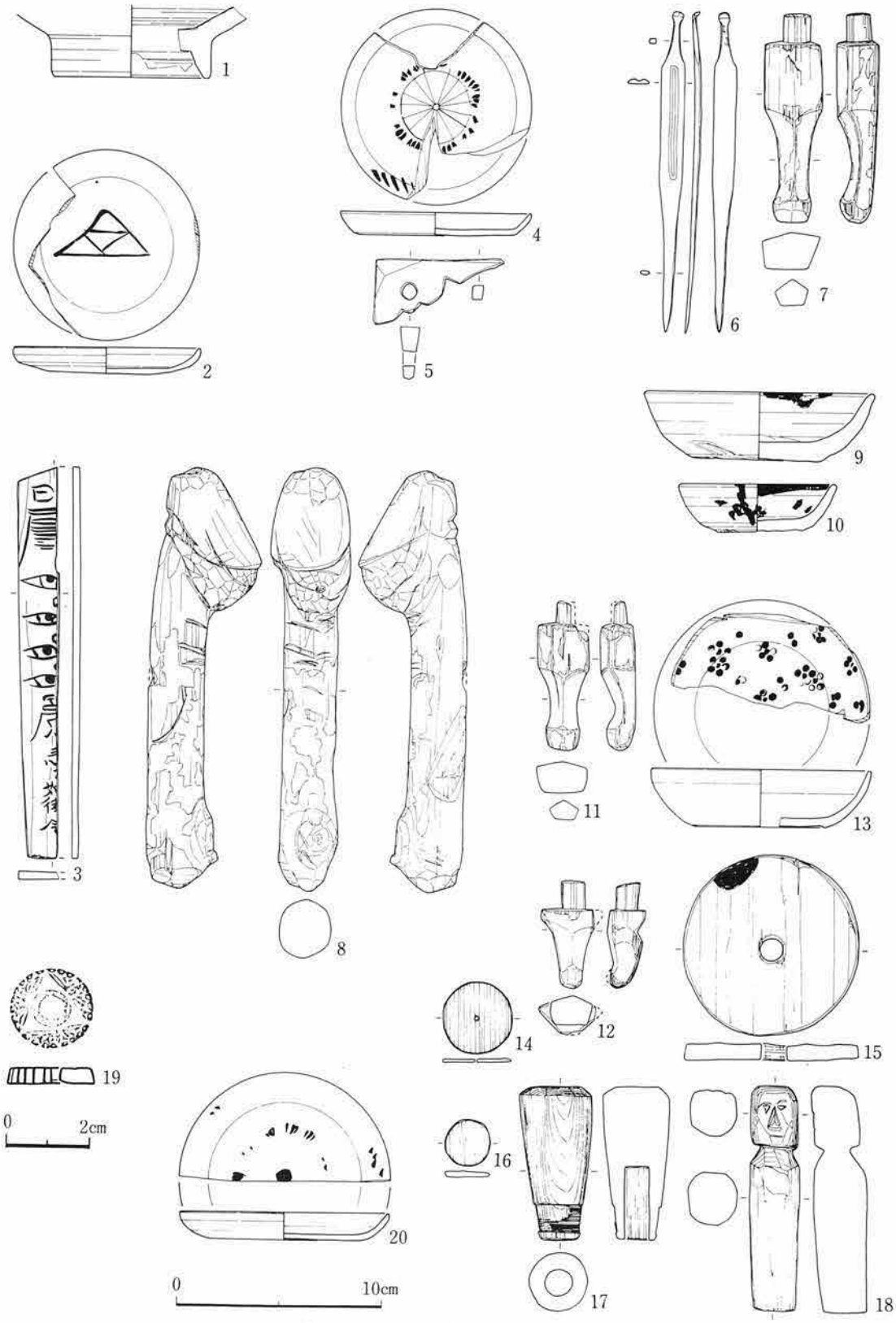


図39　他区画からの出土遺物(1)―上層遺構面

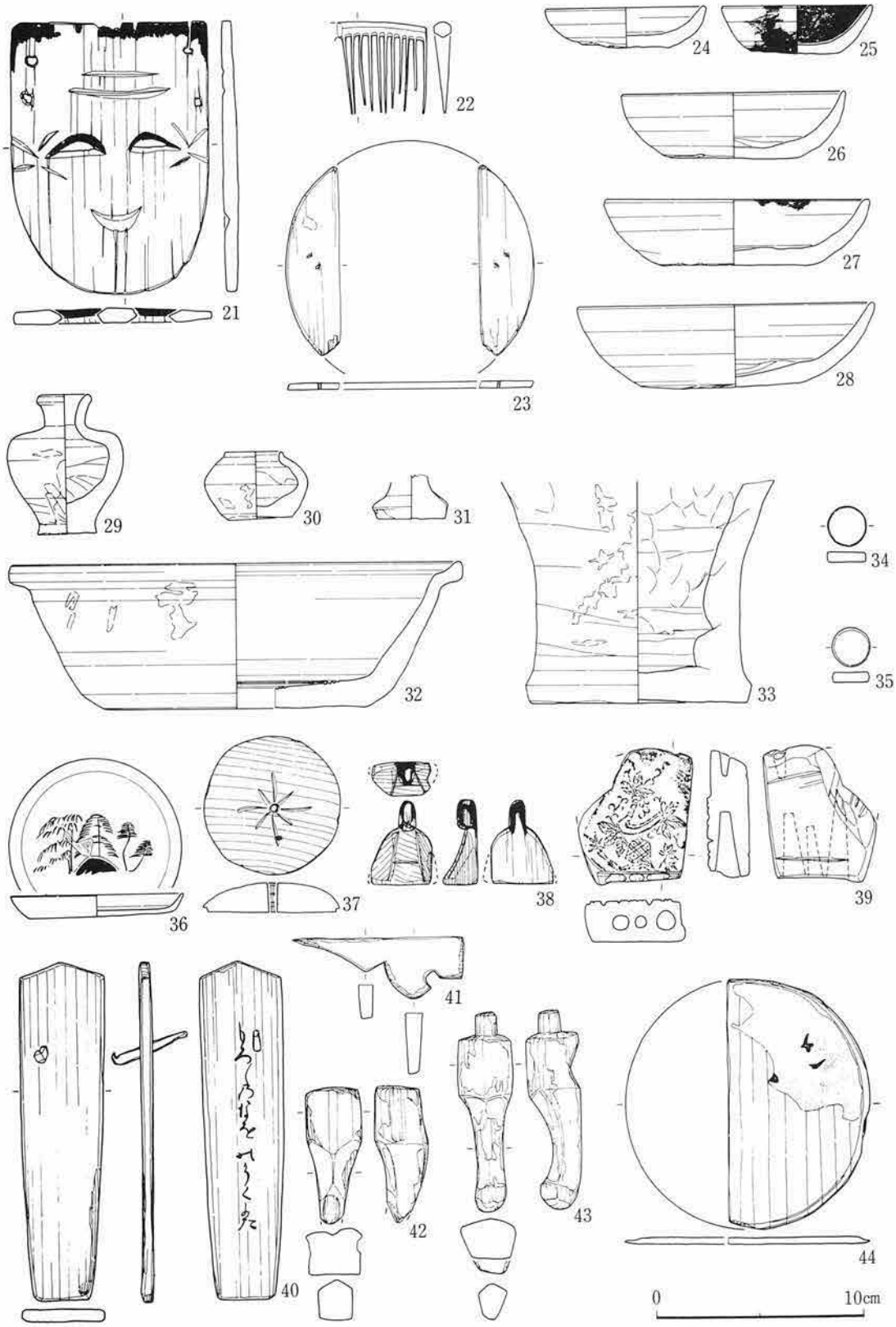


図40　他区画からの出土遺物(2)―上層遺構面

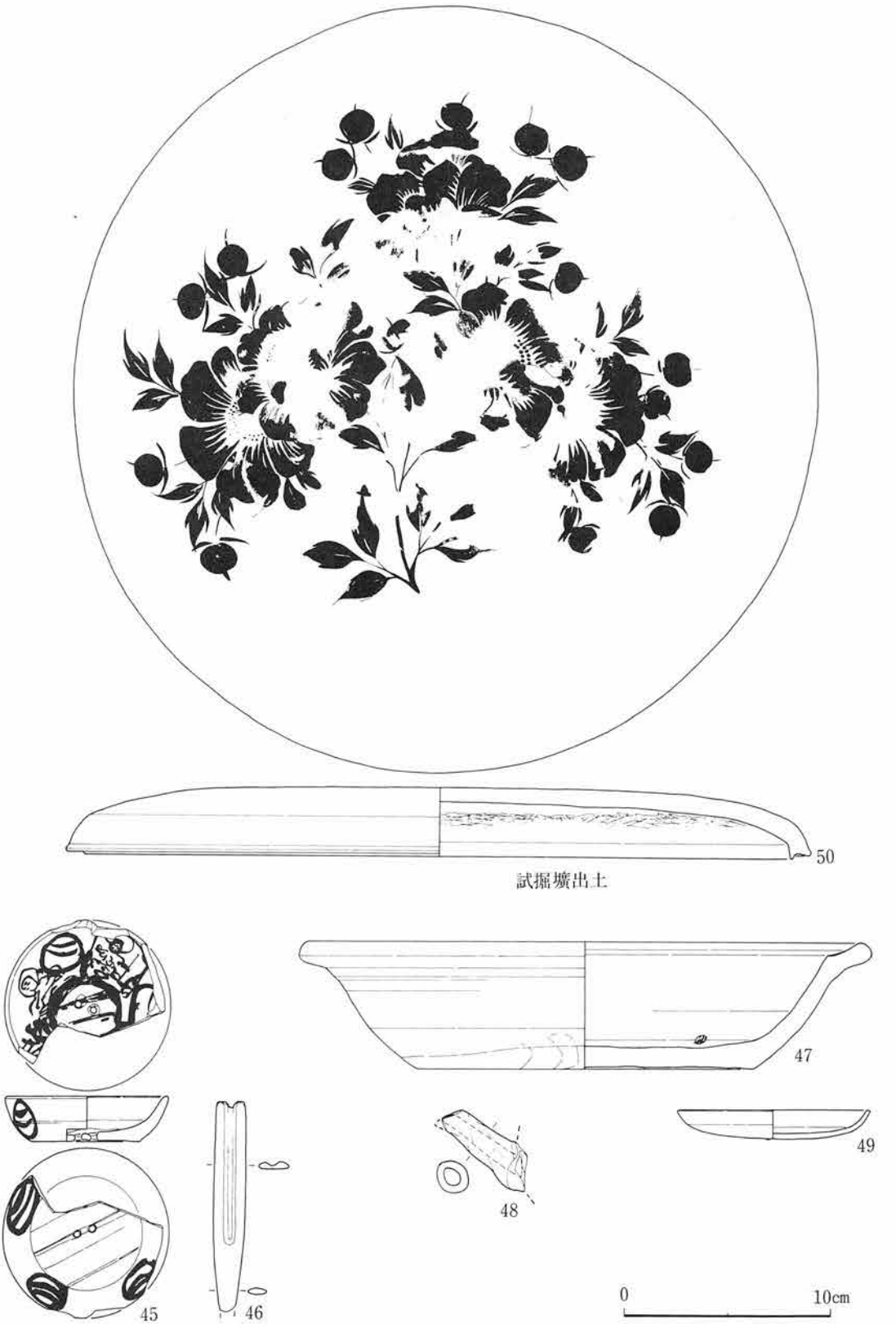


図41　他区画からの出土遺物(3)―上層遺構面・試掘壙

れていたと思われる。8-C溝3西裏込め出土。

41～43-漆塗膳の、41は脚肘木、42・43は脚。いずれも8-G出土。

44-鏡箱蓋天井部。朱漆で鳥が描かれているが、金粉が付着しており、蒔絵であったことがわかる。7-G・H出土。

45-かわらけの表裏に墨絵がある。内面には地蔵と不動明王等が描かれ、間げきを宝珠で充塡している。外側面には宝珠が描かれる。内底面に二つね小孔があけられており、懸仏のように使われた可能性がある。8-B内の溝3出土。かわらけ自体は14世紀前半～中葉のもの。46-骨製笄。出土地点は同前。47-瀬戸灰釉折縁鉢。溝1上層出土。48-同前水注注口部。溝1上層出土。49-鉄皿。内面に少量の煤が付着。外底面には、湯口と思われる小さな突起が残る。溝1深掘出土。

50・51は事前の試掘の際に出土したものである。もとより別の個体であるが、二点がほぼ重なり合って出土した。試掘壙は本調査区北東の区外にあり、位置および本調査との層位の対応については検討中である。50-漆塗の食籠蓋。小さな返しを持ち、大きく朱漆で芙蓉文が描かれる。内面には褐色の漆が塗られているが、俎板替りに使われたとみえ、切傷が無数に残り、漆は縁辺部に環状にしか遺存していない。口径36.2cm、器高3.3cm。51-酢漿文の盆。細長い角材が平行して二本、木釘で裏に留められて脚とされている。酢漿文は朱漆の印判。裏面にも黒漆が塗られているが、大半剝れ落ちて、やりがんなのような工具痕を残す木地が見える。直径33.8cm、器高2.4cm。

2．下層遺構面出土遺物

52-ミニチュアかわらけ。5・6-D・Eの方形木組遺構出土。53-瀬戸入子。片口が付く。9-F柱穴出土。

54-玳皮釉のかかった瓶子底部。図の黒く塗りつぶした部分が黒の鉄釉で、白ヌキにした部分が淡黄褐色の、多分松灰釉である。外底面も施釉されており、畳付部のみヘラで削って露胎させている。内面は顕著にロクロ目を残し、淡褐色に酸化しているが、あるいは下地釉がかかっている可能性がある。胎土は、胎芯部で灰色、器表近くで淡灰褐色を呈し、岩石質に堅く焼き締っている。また胎芯部は剝離し始めて、気孔が無数に見らる。吉州窯産として大過ないと思われ、亀井明徳氏の御教示によれば、博多第36次調査で類品が出土している。底径11cm。10-E出土。

55-青白磁合子身。口径7.5cm。8・G柱穴出土。

56-銅製六器。口径6.3cm、器高1.8cm。5・6-D・E方形木組遺構出土。

57-男びなであろう。立烏帽子姿の座びなで、烏帽子と髪の部分が墨で黒く塗られる。高さ4.8cm、幅3.7cm。図40-38と対になる可能性がある。8-B柱穴出土。

58-骨製笄。面上出土。

59-銅製品。一方の塞ったトンネル形を呈し、トンネルの中には、閉じた壁の方から角型の細い棒が、隔壁状のしきりに支えられる形で伸びている。外側には閉じた方の端部上縁には刻線が廻り他方の端部の平坦な方の面にも二条の刻線が見られる。用途不明。仏具の一種か。9-F土壙255出土。

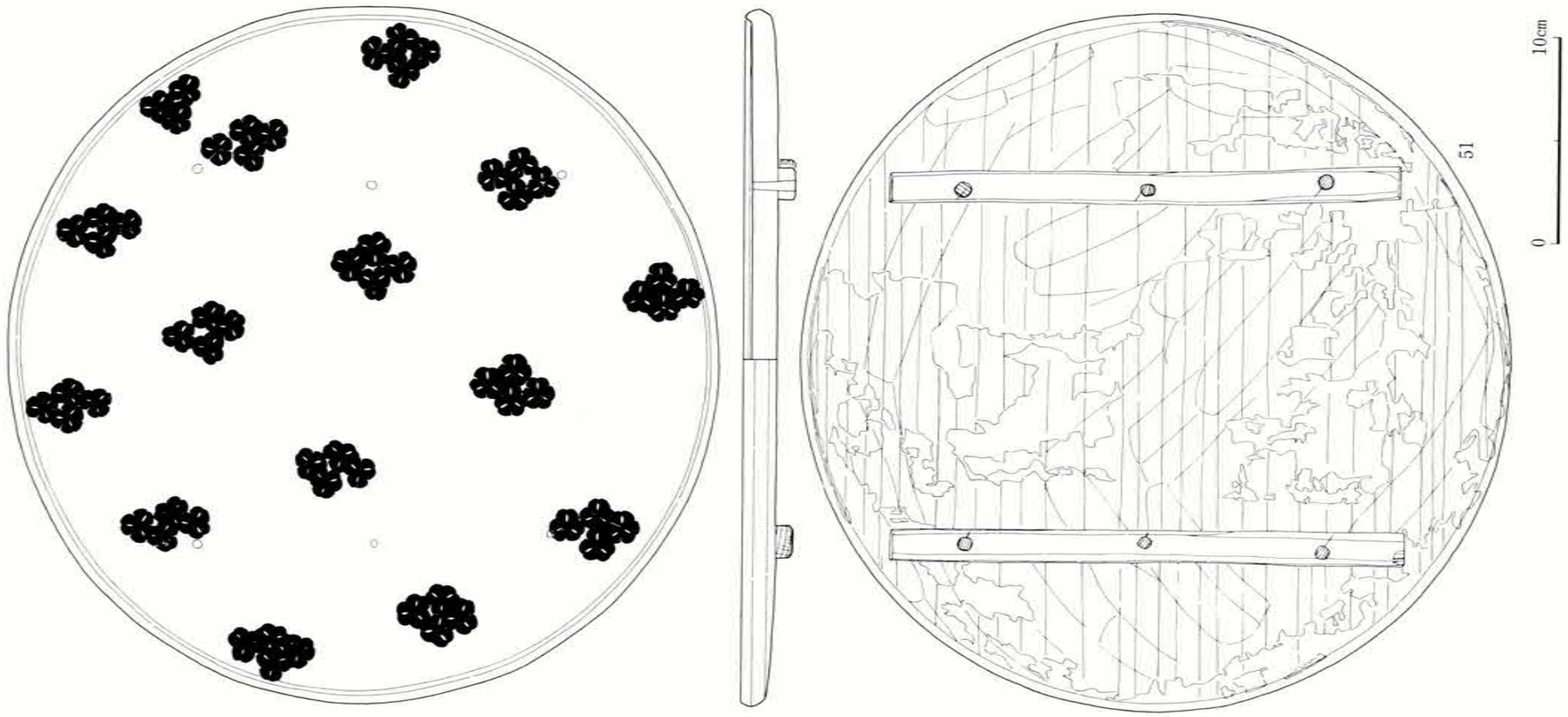


図42　他区画からの出土遺物(4)―試掘壙

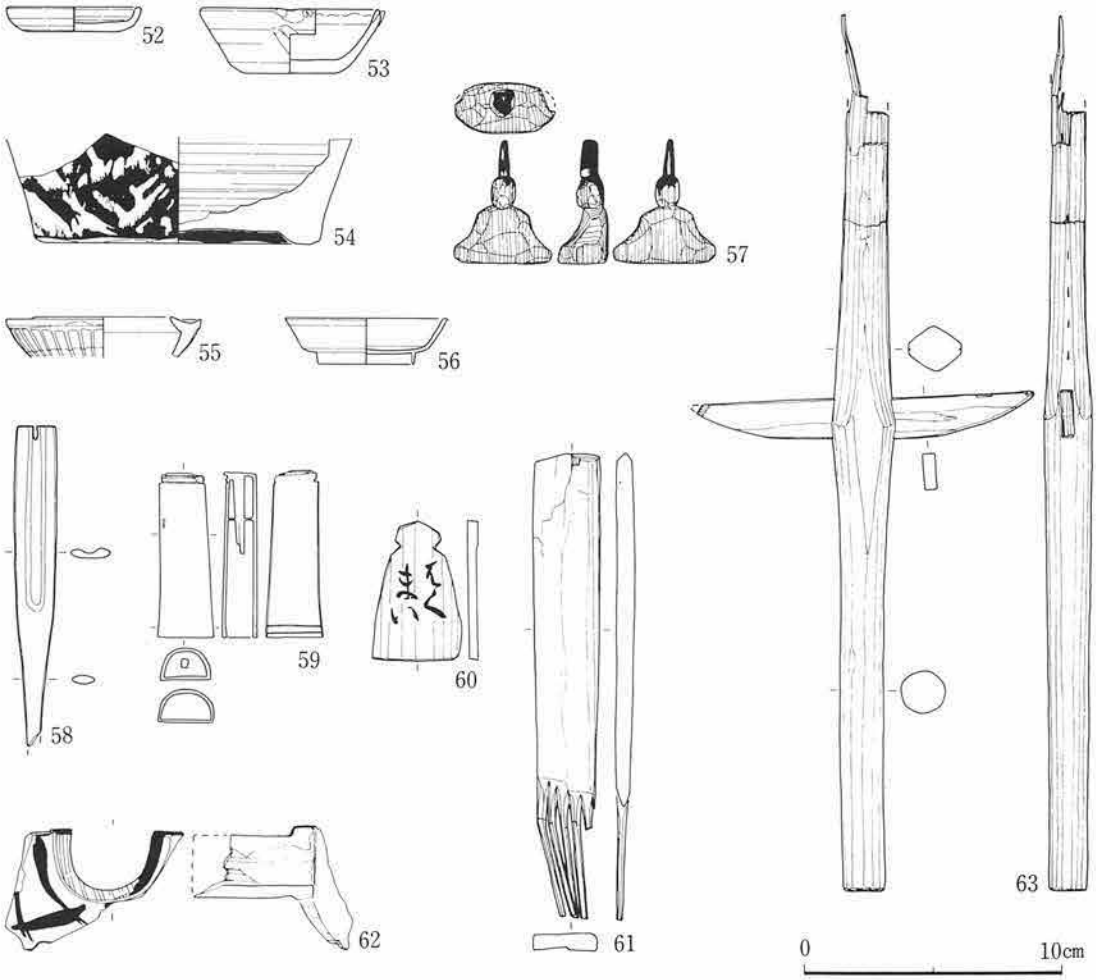


図43　他区画からの出土遺物(5)―下層遺構面他

60-木簡。「ふくまい」とある。民俗例で検討中だが、米を入れた福袋のようなものが縁起物としてあったのかも知れない。2-E柱穴出土。

61-竪櫛の一種であろう。7-G・H出土。62-漆塗の銚子。朱漆の文様の入った注口部。面上出土。

63-鳥形。先端を欠失するが、現存長で34.5cm、翼長13.2cmを測る。胴体は翼より上で菱形、翼より下は丸形の断面を呈し、上部の側縁に小さな楔形の刻みが入る。石川県穴水町白山橋遺跡に類品が出土している（『西川島―能登における中世村落の発掘調査』石川県・穴水町教育委員会1987）

第四章　まとめ―総括に向けて

本報の報告対象範囲は、調査地点の東南部３分の１弱に過ぎず、原因者負担分の調査区である残り３分の２強は、全体図と出土遺物のごく一部を紹介したにとどまった。だから、本地点全体のまとめは、残り３分の２の整理結果を俟たねばならないが、本報の整理段階において、総括報告書までに解決せねばならない数多くの疑問を抱え込んだ。今回は、それらの疑問を思いつくままに提示してまとめとしたい。

なお、年代観を簡単に示しておくと、今のところ、上層遺構面は、いくつかのかわらけ溜りのかわらけからみて大体14世紀中葉に、下層遺構面は大体13世紀後半～14世紀前半に比定している。

一、町並の主軸方位について

若宮大路と今小路（今大路）という二本の基幹道路に挟まれた位置にあるのに、全くこれらと軸線を異にしている。調査区西端の溝１の西側ではかなり今小路に一致し始める様子であり、また本地点から東に30m程しか寄っていない小町二丁目39番６他地点（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』所収）ではすでに若宮大路の軸線に一致している。また調査区内の東南隅に検討した道路状遺構にも、軸線の変化の兆しがのぞいているので、本地点付近のみが特異な基軸に従っていると考えざるを得ない。それが単に溝１の方向に倣っただけなのか、それとも北側山裾の窟堂の前面に展開する区画であるので、その門前町的な性格を持つためなのか（「いわやどう」の木簡が出土しているので、何らかのつながりがあったのは確実である）、あるいは別の要素が働いているのか、この点追求する必要がある。

一、遺構の性格と町割について（附図１・２参照）

上層遺構面と下層遺構面は、かなり様相を異にしている。たとえば上層面では方形の小さな板囲い建物が多いのに、下層面にはそれが少なく、逆に総柱の大規模な掘立柱建物が数多い。逆に上層面の、特に北域での掘立柱建物は、多く隅柱のみで、柱通りも雑なものが多い。ごく粗雑な言い方をすれば、下層では大規模掘立柱建物が主屋で、板囲い建物がそれに付随し、上層では逆に板囲い建物に掘立柱が付随したかのように見える。予察として言うが、下層から上層にいたる間に、住民の主体に変化があったのである。おそらく、当初は武士の居館のなかの主屋（―大規模堀立柱建物）と家人達の住居（―板囲い建物）であったのが、上層の時代（おそらく南北朝期）には、庶民の住居（―板囲い建物）とその作業場（―隅柱のみの掘立柱建物）という組合せに移行したのではなかろうか。ただしこの点は、調査区内においても、北域と南域では様相が異なるようなので、遺物論をも踏まえた仔細な検討が必要となろう。

さらにここからは別の問題が派生する。それは町割についてであって、例えば武士の館には戸主

の単位が存在し、庶民の町割には保の単位が存在する。前者は一戸主として積50丈（約455㎡）が充てられているが、後者については鎌倉ではまだよく分っていない。試みに下層面の区画に従って面積を（復元も交えて）概算してみたところ、区画ⅡB-3が約275㎡、ⅡB-4（本報の仮称Ⅱ-1）が約180㎡で、これは合計すると約455㎡となり、一戸主としてまことに都合の良い数値が得られた。この点は溝の変移を詳かにして、さらに検討する予定である。(区画区分については図24を参照)。保の制度に関しては、例えば上層遺構面では2基しか検出されなかった井戸など、町の共益施設の分布を検討することによって、手掛りの一端が得られるのではないかと考えている。

一、下層遺構面ⅡB-2aで検出した、細長い板囲い建物の性格について

今のところ、これについては、例えば『石山寺縁起』の大津浦の場面などに見られる「町屋」ではないかと想像しているが、確証はない。長屋のように、中がいくつかに仕切られているのは明らかで、その右隣りにも通路状の細い空間を挟んで存在するようにも見受けられる。これらの南側には道路と覚しい空閑地が認められるので、道からは短冊状の建物が並列しているかに見える。これらと、他の板囲い建物との違いも検討せねばならない。なお長屋状の建物としては、今小路西遺跡の扇ヶ谷一丁目131番1地点（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　5』）に同様の例がある。

以上、雑然と述べた他に、遺物論も含めた数多くの疑問があるが、とりあえずはこれで措く。

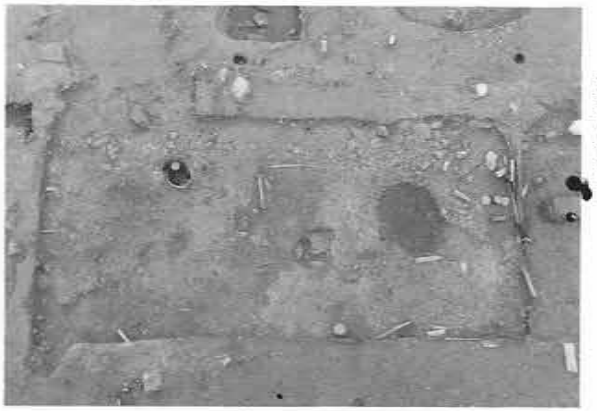
図版 1

1．上層遺構面南半部全景（西から）

3．上層遺構面本報対象部分全景（北から）

4．同上（南から）

1．北半部上層遺構面全景（南から）



2．板囲い住居10

3．板囲い住居8

図版 2

図版 3

1．区画 Ⅰ-1（東から）

2．溝 3 とかわらけ溜り 6（北から）

3．区画 Ⅰ-1・Ⅰ-2間の石敷路（東から）

1．区画Ⅰ-2方形竪穴1（手前）・2（上方）

2．同前壁体切石除去後

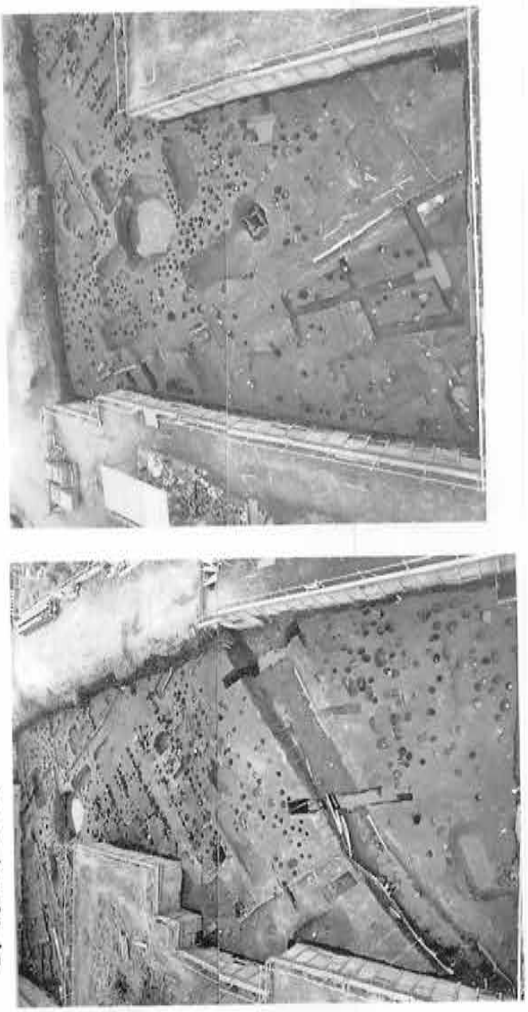
3．同前西壁

4．区画Ⅰ-3・Ⅰ-4付近（北から）

5．区面Ⅰ-1板囲い住居22と土壙236・区画Ⅰ-3（東から）

図版 5

1．北半部下層遺構面全景（南から）

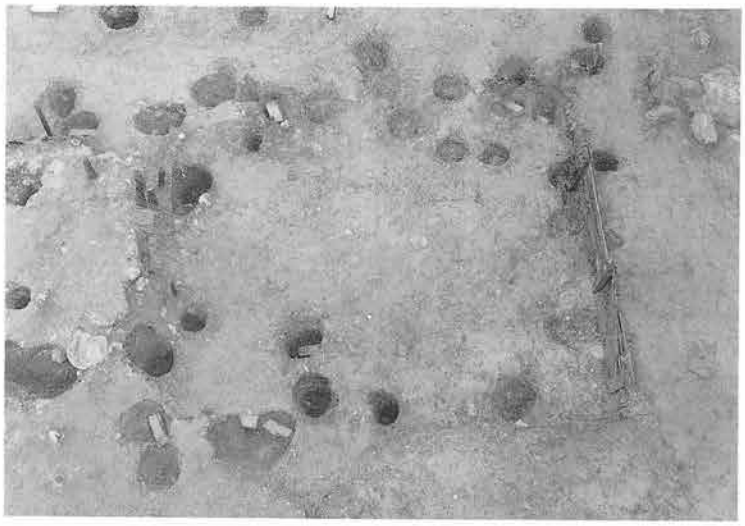


2．同上（西から）

3．同東半部全景（北から）

4．同旧期の長屋状板囲い住居（北から）

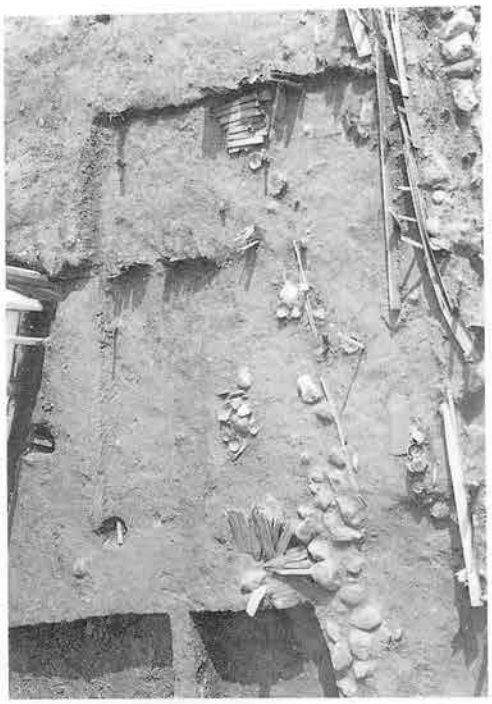
1．区画II-2（東から）



2．板囲い住居35（西から）

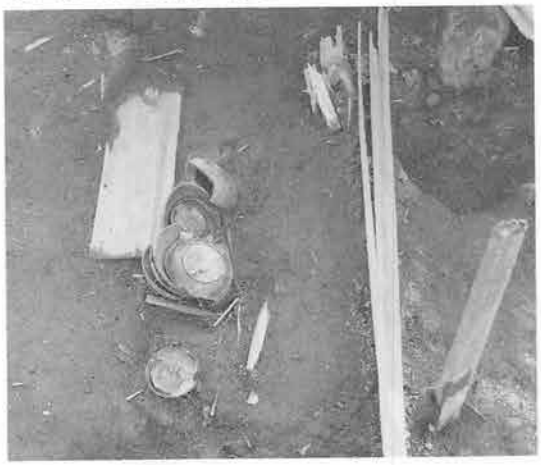
3．13-Kの切石（北から）

図版 7



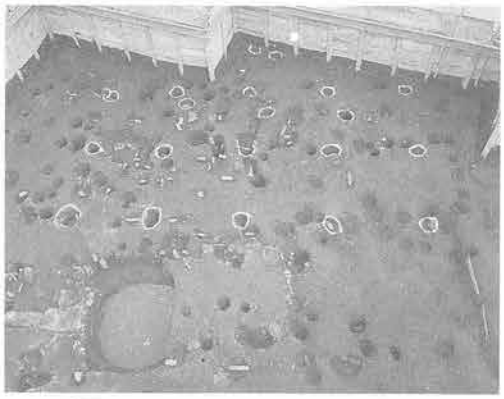
1．区画II-3板囲い住居32～34（北から）

2．同左溝36遺物出土状態



3．同上中央部遺物出土状態

4．同上囲炉裏（南から）



1．区画II-2

3．区画II-4旧期（東から）

4．同上角材

2．同上土壙258（西から）

5．同上井戸

図版 9

1．図32・33出土状態

2．土壙260（西から）

1．図12-37出土状態

3．図14-50出土状態

2．図14-49出土状態

4．図38-3出土状態

図版11

1．北半部下層遺構面出土壙105（南から）

2．北半部刀子出土状態

3．北半部土壙218内遺物出土状態

4．北半部上層遺構面10-E鳥類遺体出土状態

かわらけ

魚住

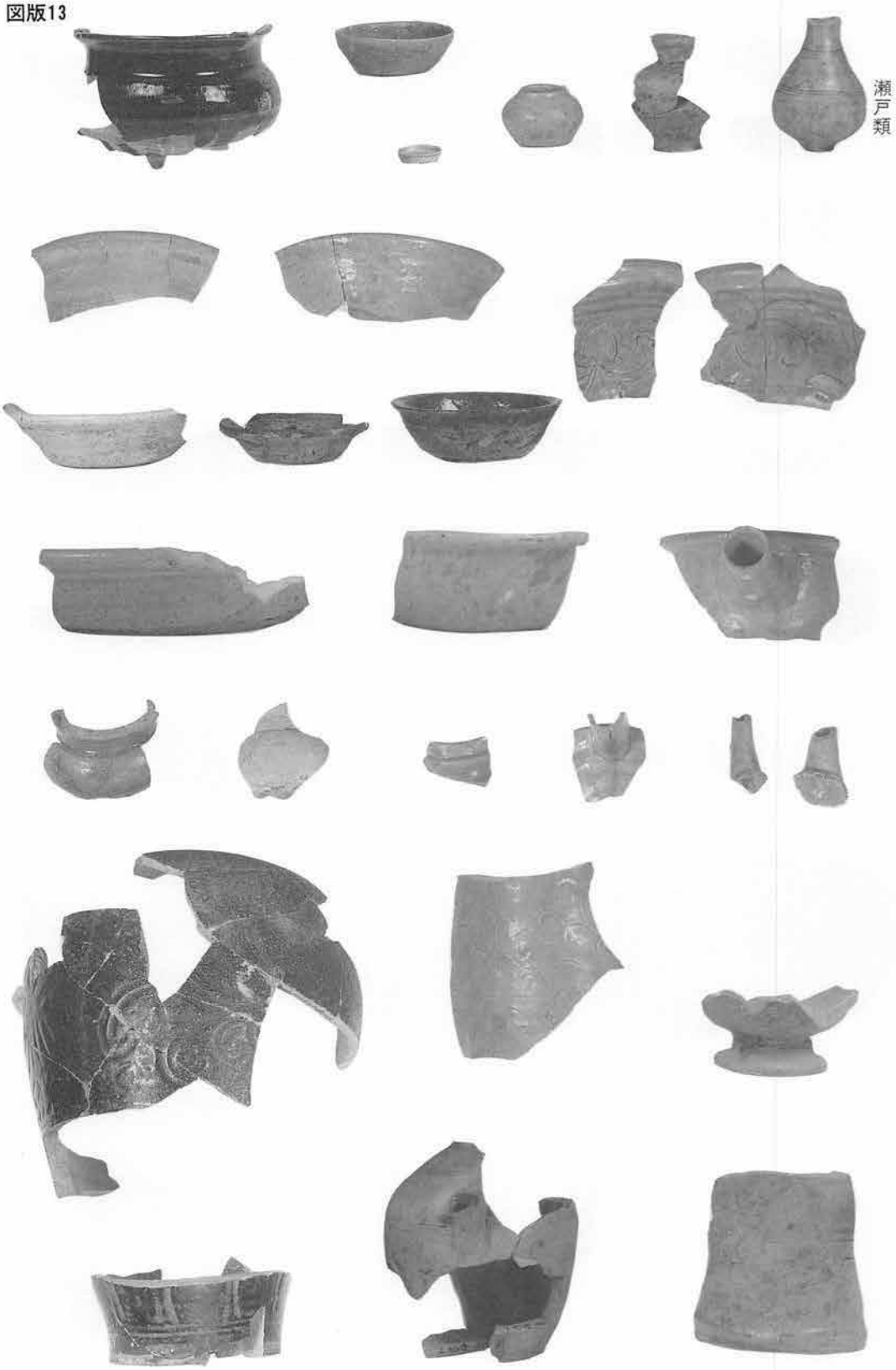
手焙り

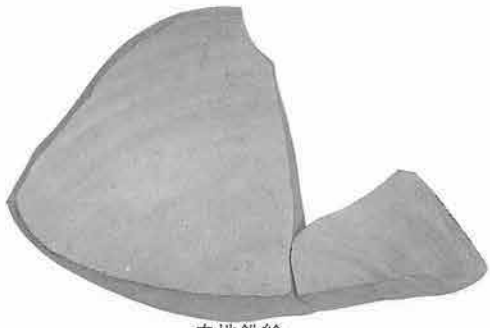
こね鉢類

瓦質手焙り

常滑こね鉢

図版13



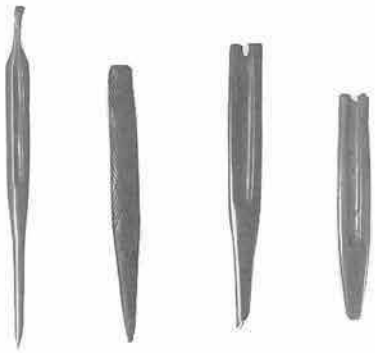


白地鉄絵

高麗青磁

吉川窯

白磁



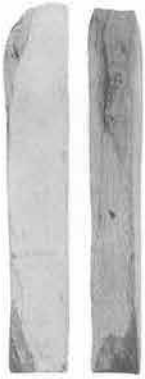
金属製品

骨製品

転用硯

鉄皿

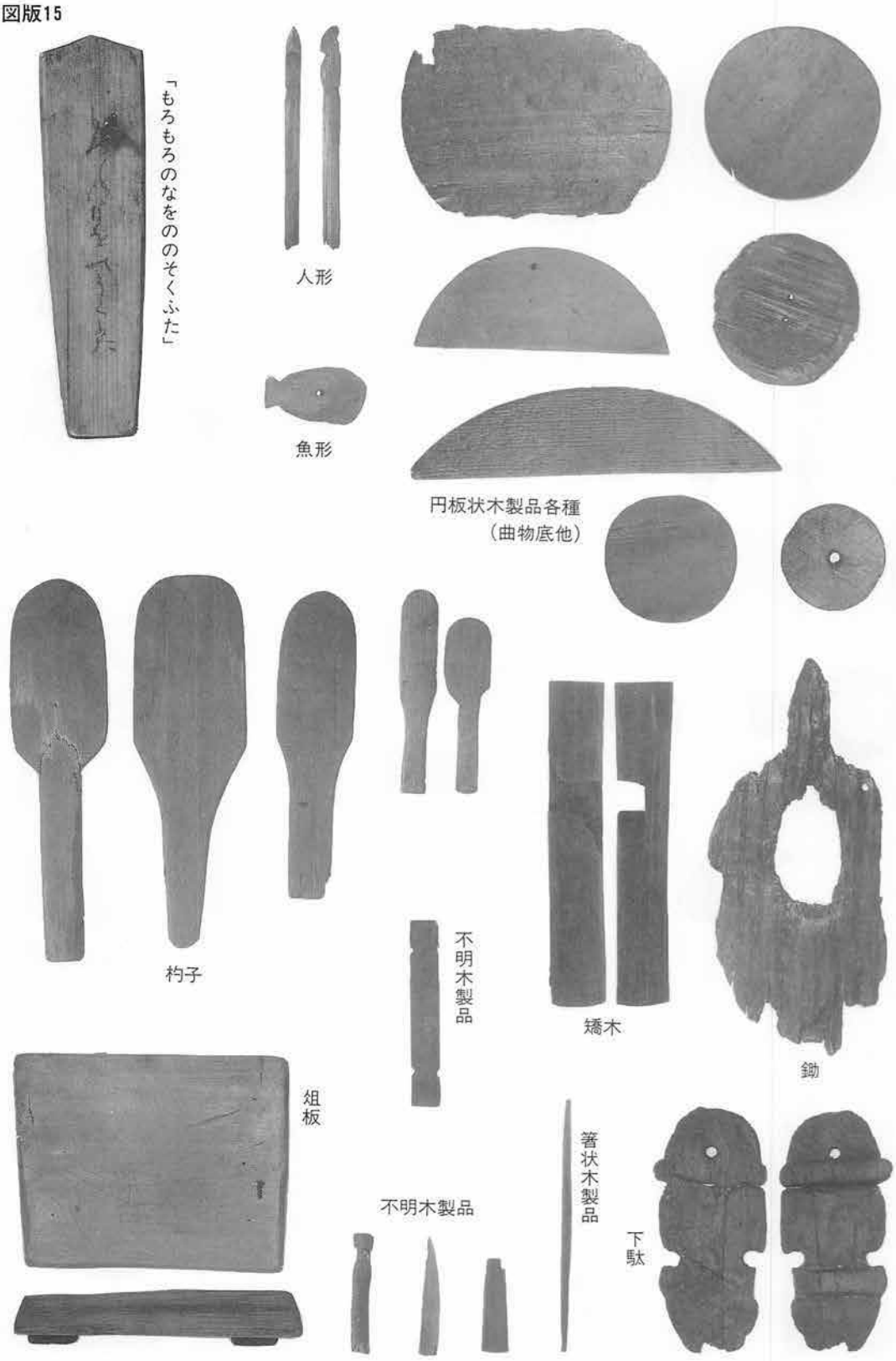
穴器

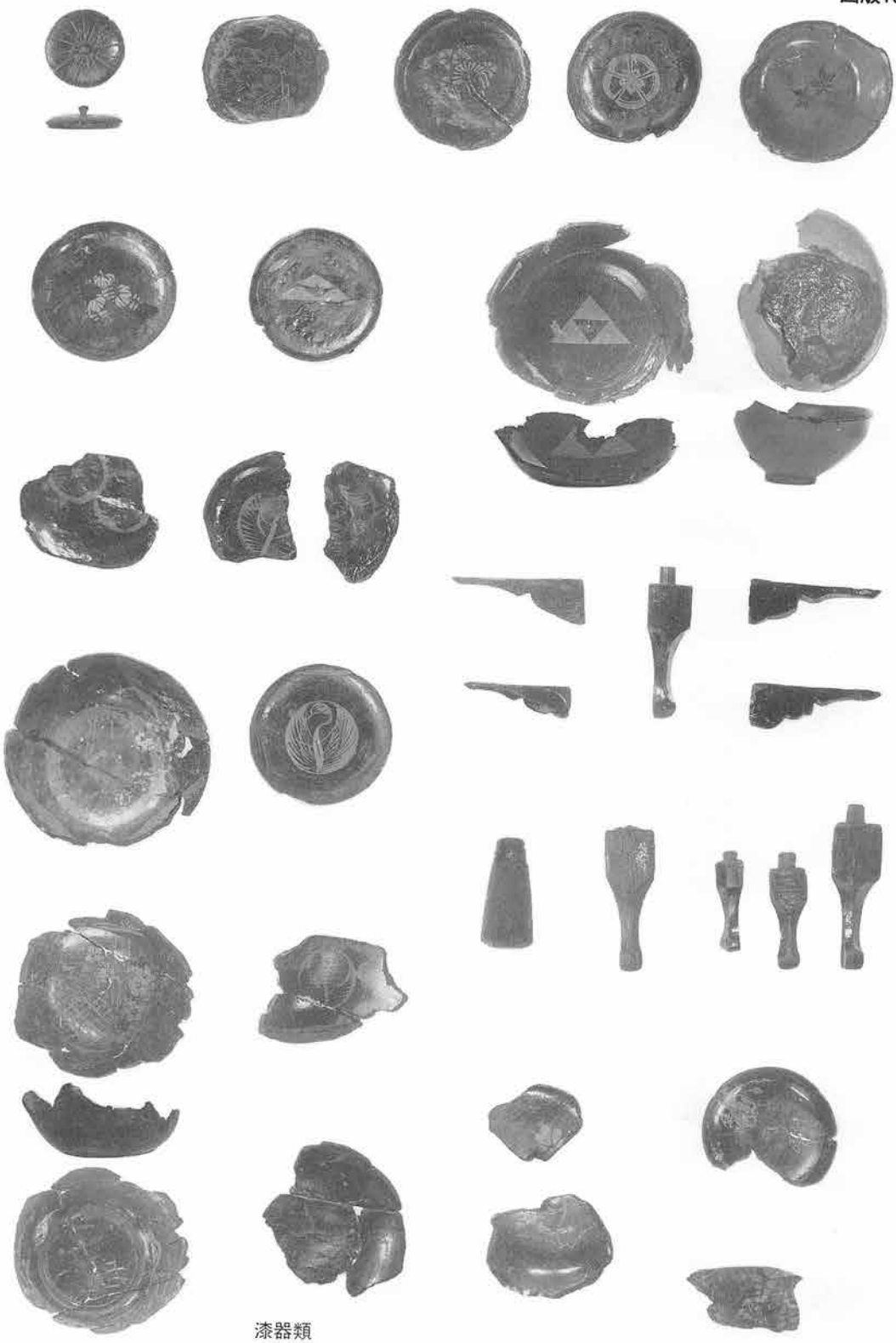


砥石類

滑石印判

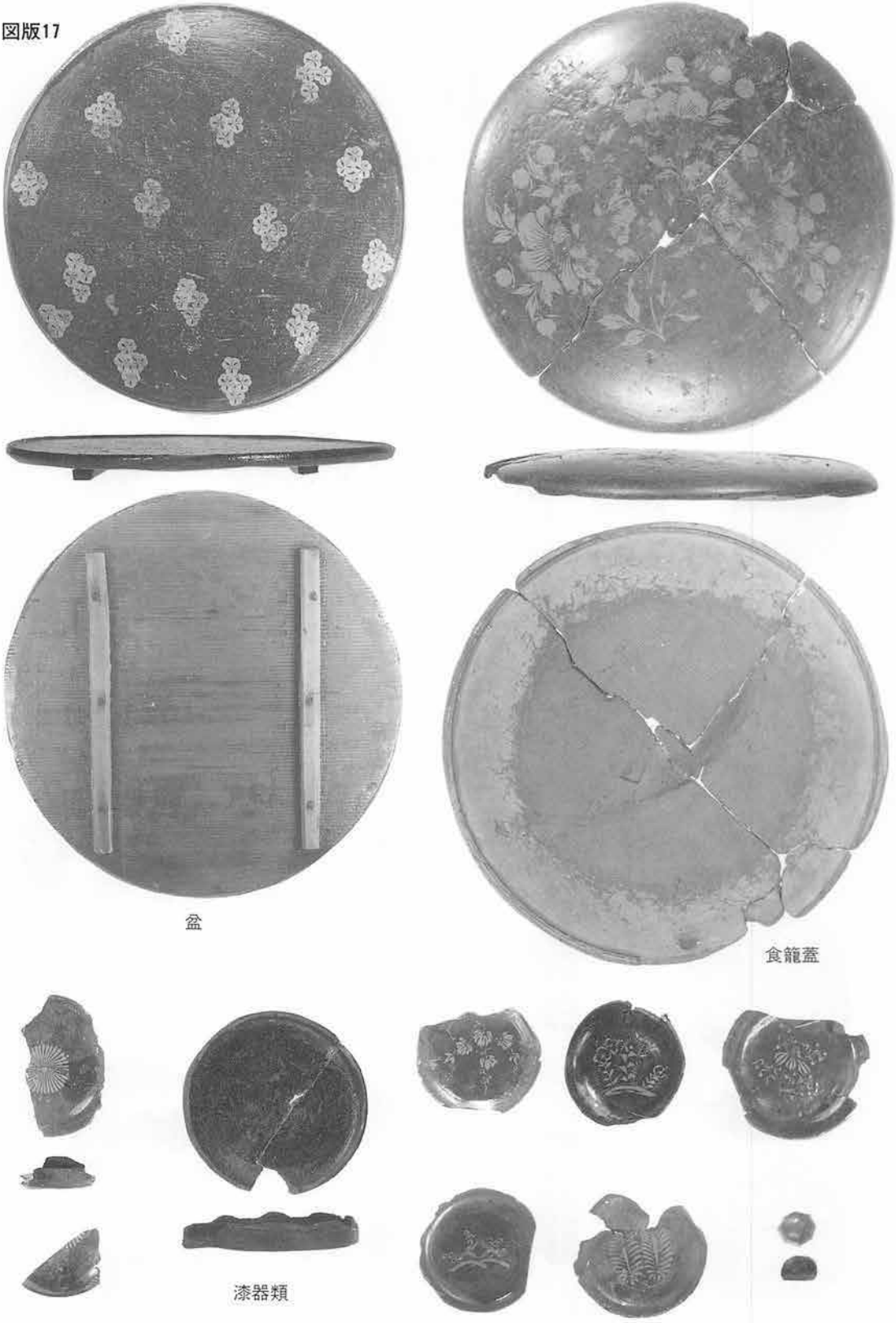
図版15


「もろもろのなをののそくふた」
人形
魚形
円板状木製品各種
（曲物底他）
杓子
不明木製品
矯木
鋤
俎板
不明木製品
箸状木製品
下駄



漆器類

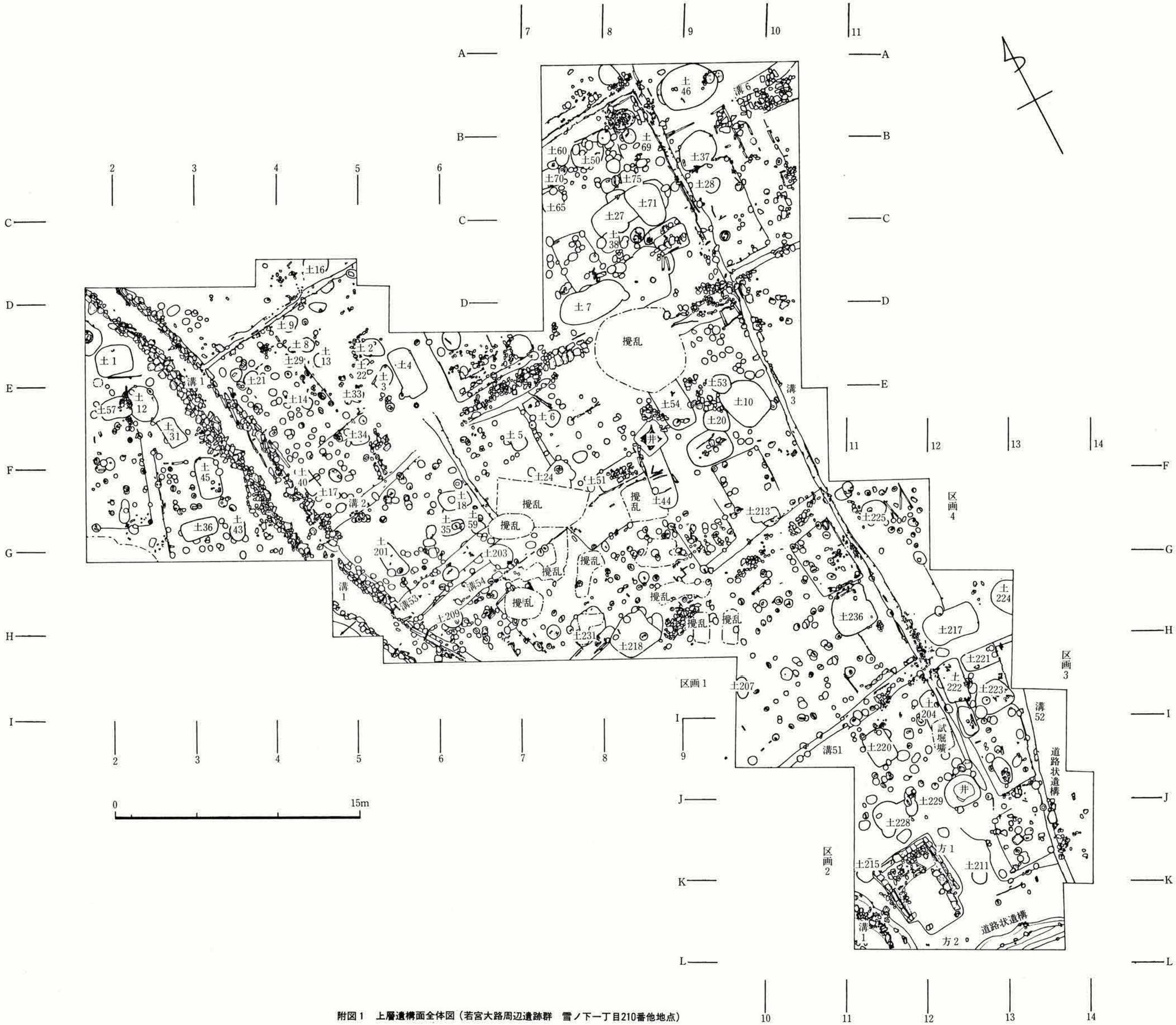
図版17



盆

食籠蓋

漆器類



附図1　上層遺構面全体図（若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目210番他地点）

附図 2　下層遺構面全体図（若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目210番他地点）

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6

平成元年度発掘調査報告書

発行日　平成2年3月

編集
発行　鎌倉市教育委員会

印刷　㈱稲元印刷